
片瀬の日々

STORM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

片瀬の日々

【Nコード】

N0417E

【作者名】

STORM

【あらすじ】

平凡な学生、片瀬駿。ごく普通の学校生活・・・のはずだったが・・・魔法やら裏社会やら別次元やらなんやらで変な世界に引きずり込まれる！？この物語はフィクションです。

第1章第1話 だいたいの学園コメディって4月からだよな・・・今何月だよー

今まで書いてたモンハン小説とは趣を変えてみました。楽しんでもらえると思います。

第1章第1話 だいたいの学園コメディって4月からだよな・・・今何月だよー

12月14日午後3時

「ふざけんな！先生どういうことだ！」

「え？だから君の命は後1年だよ？」

「なんで疑問形！？」

まあ、そんなことで余命一年といわれました。

医者・・・ではなく理科の先生に。

あの先生は何考えてるのか・・・。

修学旅行前に変なこと言うなよ。

とりあえずオレは意味わからない先生にあきれながら自分のクラスに戻った。

「おう、駿。呼び出し何だった？」

「またあいつのお遊びに付き合わされた」

あ、自己紹介を忘れてたな。

オレは片瀬 駿

まったく、平凡すぎる名だ。

親の名はすさまじく珍しいってのに。

まあ、そんなことは置いといて話に戻ろうか。

「今回の何だった？」

「余命一年だと。医者でもねえのに」

オレはため息をついた。

あいつに付き合っていると疲れる。

少し気力が戻って顔をあげると友達がすごい顔をしていた。

「どうした、轟騎？」

あ、さっきまで話していたやつは小野崎おののけ 轟騎こうきっていう。

随分力が強いやつで、体重80kgの担任を片手で投げ飛ばして校長にぶつけた経歴がある。

中身はいいやつだけだな。

結構奢ってくれたりもするし。

「お前、マジで死ぬぞ。あいつ死の目と、医師免許持ってるらしい」

「……え？」

死の目は嘘だろうが医師免許は……。

「マジ？」

「マジ」

まあ……こいつ情報屋だしな……。
でも嘘っぽいな……。

「で、病名は？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あは」

ふざけてやがる!?

午後7時

入院生活か・・・。

いつまで続くのか・・・。

医者に聞いても病名教えてくれないし。

明日なんかあったかな・・・。

「あ、明日修学旅行じゃん」

おい。

別に修学旅行明けでもいいだろ医者――！！！！！！

「修学旅行でせっかく飛鳥と同じ班になれたのに。ってか班制度が気に入らん。二人で楽しみたかったのに！！医者と教師どもめ！！」

ちなみに飛鳥って人はオレの好きな人だ。

まつむら松村 あすか飛鳥という名前で非常に無口。

顔と仕草が子供っぽくてかわいい。

特に恥ずかしがる時とか。

「あー修学旅行いきでー」

オレがわめいてると誰かが部屋に入ってきた。

「駿くん、大丈夫？」

「いや、入院させられた理由がいまだにわからん」

やってきたのは我が姉のはやてだ。

男の名前だが、女だ。

成績優秀というこのタイプ小説にはほぼ確実にいるような女だ。

顔は・・・悔しいが弟のオレでも可愛いと思う。

ただ欠点があつて・・・。

「病院には幽霊がでるらしいよ？怖いなら入院してるあいだはお姉さんが一緒に寝てあげるよ？」

「幽霊とかでないから。怖くないし、一緒に寝なくていいから」

そう、欠点とはこのタイプの小説によくあるブラコン&心配性である。

昔からこうだ。

それからはやて姉を帰すのに2時間かかった。

疲れた・・・。

「はあ・・・いろんなものがオレを苦しめる・・・」

こうしてやたらと面倒な一日は終わった。

第1章第2話 ふどけんなよ、藪医者！何が「一緒にいこうぜ」だ！（前書き）

毎日更新を目指します

第1章第2話 ふざけんなよ、藪医者！何が「一緒にいこうぜ」だ！

12月15日午前2時

何故かオレは医者に起こされた。

「一緒に修学旅行いこうぜ！！」

なんだこの医者ああああ！！！！

午前4時半

なんだかんだで学校に到着。

そういえば学校を紹介してなかったな。

山中市立山中学校だ。

山中とあるが都会のド真ん中にある。

市が山中だからだ。

てか、中が多い。

「おはよう駿！」

「よう、轟騎……」

「どうした？」

「疲れたよ……」

「・・・頑張れ」

短い会話を済ませて飛行機に乗る。

「そついえばどこ行くんだっけ？」

「エジプト」

あれ、いまなんて？

「もう一回いつてくれないか？」

「沖縄」

変つてる!?

「・・・どつち？」

「沖縄」

「はあ・・・」

正直エジプトのほうがよかつた・・・。

オレの親戚沖縄にいるから毎年行くし・・・。

午前11時

「えつと、首里城遠いから国際通りで時間潰しておいて」

やる気ねえな、うちの教師ども。

「まあ、いいや。轟騎、なんか見に行こうぜ」

「せつかく来たんだし琉球ガラスを買っていかなきゃな」

「ちんすこうもな」

その後、俺は轟騎を案内した。

丁度、真ん中あたりの道に差し掛かった時だった。

「国際通りの店全てください！」

「はい？」

なんかすげえことさらつと言ってる奴がいる！？
全部買うのにいくらかかんだよ。

こんなこと言うやつはこいつしかいないな。

「何やってんだ、椎名？」

「し、駿！？な、なんの用ですの！？」

「何もそこまで驚くなよ……」

この人は椎名しいな 千秋ちあきという某有名会社会長もに次ぐ程の超絶金持ち女だ。

性格はすさまじく女王。どこまでも女王。

この女王の気品はオタクどもとマゾ男ばかり寄ってくるために常にボディガードが二人隠れている……らしい。

暇さえあれば人を捕まえて鞭で撻つているという噂もある。

オレにはそんな感じには見えないけどな。

「まあ状況は呑み込めたが。いくら積んでも買えないものもあるんだよ。某有名会社会長だって買えなかったものもあるし。じゃ、またな」

そしてオレはそこを立ち去った。
もとい、逃げた。あいつにかかると面倒なことになる。
ってか、何であいつ公立中学いんだ？
お嬢様なら私立行くんじゃないのか？
頭もいいしあいつなら一般人でも行けるはずだ。

気づけば集合時間になっていた。

オレ達も戻らないとな。

あれ？

轟騎がいねえ……。

……

オレ……迷子？

でもこの辺分かるし……。

あれ？

ここどこだ？

周りには……。

……

さあて、帰り道を探そうか……。

オレはもと来た道を辿ろうと振り返ると、何故かはやて姉が。

「あれ？どうしたのかな、駿くん？こんなところで」

「……迷子になりました」

「だから言ったでしょう。お姉さんがついて行ってあげるから手を離しちゃダメだよ」

「いや、そこまで子供じゃないから。ってか何ではやて姉がいるんだよ」

「ねえ、ここって……。駿くん、休憩していく?」

「一般に使われている休憩ならね……」

「残念だなあ」

この人絶対本気だった。

目が今も本気だ。

ってかいつの間にか手をつながれてるし。

おい!どこに連れていくんだよ!?

その休憩は遠慮します!!!!!!

うわああああああああ!!!!!!

姉弟の一線を越えてはいけない!!!!!!

その後オレはなんとか説得に成功し、集合場所に到着することができた。

第1章第3話 神様素晴らしい時間をありがとう……って邪魔すんじゃないねえー

宿（ホテルだけどあえて宿）につくと、オレは轟騎を探した。

「あ、いたいた。駿どこにいたんだよ」

「はやて姉に連行されてた。てか腹減った、飯は？」

「飯の時間終わったぞ」

マジかよ……。

オレはその後菓子で食いつなげた。

お土産のちんすこう全てを糧として。

2割轟騎にとられたけど。

そして、寝た。

12月16日午前1時

部屋が騒がしい。

どうせ轟騎がなんかやってんだろ。

「轟騎、オレ生きてるよ!!」

「名も無い花には名前をつけましょう」

何歌ってたんだよ!?

しかもカラオケ設置されてるし!?

「お、駿起きたか、お前の曲が始まるぞ」

「お、おう・・・ ガラス玉ひとつ・・・ っておい!」
流されてしまったが疑問をひとつふたつ。

「なぜ部屋にカラオケがある?そしてなぜオレは生きている?」

「カラオケは医者くれた。お前が生きているのはこれを使ったからさ」

そうして見せてもらったのが、

「これは!?!」

「そう、ライフボトルだ」

ええ!?!

普通フェニックスの尾か世界中の葉が出るでしょ!?!?

てかあのゲーム終盤になるとコンボばっかでノーダメージで敵倒せるからライフボトル使わないし。

「朝っぱらから疲れた。飯食いに行くぞ」
「オレの方が疲れてるよ!! 謎の手術されて!!」
轟騎は歌いつかれたってな感じでエレベーターに乗っていった。
オレも続いて乗り込む。

10秒後

「ついた」
「ええと。ここは・・・あれ最上階じゃない？」
飯は最上階で食うはず。
最上階より一つ下の階で轟騎は降りました。

1分後

「ふふふ、下見完了。行くぞ」
「お、おう」
訳もわからず再びエレベーターへ。

30分後

「・・・米がねえ!!」

轟騎はさつきからこれしか言わない。
でも米がないってのも珍しい。

ま、オレは超絶パン派だし関係ないけど。

「・・・困った」

非常に困った。

轟騎が殴ってくる。

やつあたりにもほどがある。

まあ昔からこんな奴だからな。

よし。

関わると面倒だから逃げよう。
本格的に。

集合時間になった。

ここで担任から今日のスケジュールの指示が出される。

「えー、皆さん。今日は私も真面目にやるので計画立ててる間、
国際通りで遊んでみてください」

全然真面目じゃねえ!?

轟騎は消滅したので一人で行くことにした。
すると誰かに話しかけられた。

「駿くん・・・班で行動だつて」

裾を引つ張りながら話しかけてきたのは、

我が女神・飛鳥様！！

「お、おう。は、班つて他にだ、誰いたっけ？」
めっちゃ動揺するオレ。

オレは轟騎と授業中遊んでるから話を全く聞いていない。

ただ、飛鳥と轟騎が一緒だったのは覚えている。

それからオレは不良じゃない。煙草も酒もドラックもやってない。
服装と挨拶だけが取り柄だからな。授業中遊んでるけど。

「後は轟騎くんと椎名さん」

そうか・・・轟騎は米がなくて死んでるし、それから椎名もどっか
いったし。

おや、これは

神が与えてくれた素晴らしい時間！！

来たぜ！！

マジ来たぜ！！

今初めて神信じたw

「ま、いいや。じゃ、じゃあ二人で行こうか」

「うん！」

そしてオレたちは早速歩きはじめた。

1時間後

二人で歩いていると不良みたいな奴らが近づいてきた。

絶対ターゲットオレたちだよ……。

金属バット持つてるよ……。

釘バットも持つてるし……。

オレ喧嘩弱いし。

「ちょっと待てや!」

オレは近くに棒のようなものがないか探しながら振り向いた。

あつた。

約10m先に鉄パイプが一本。

「なんですか?」

一応敬語。

見た感じ18くらいか。

人生の失敗者だな、こいつら。

「いい女連れてんじゃねえか」

うわ、こいつら人生の失敗者の上にロリコンだ。

え、オレ?

オレは飛鳥と同級生だから大丈夫だ。

きつと、大丈夫……。

・・・絶対ボコられる。

昔から喧嘩弱くて轟騎に殴られてたしスポーツも轟騎より下手だったし、何も勝てるものはなかった。

でも、オレは。

ひとつだけあいつに勝てたものがあった。

それは

剣術だ。

昔剣道を3年、フェンシングを2年やっていた。

その二つを組み合わせたオレの我流剣術。

これだけは、素人には負けない。

スポーツなら反則はいるだろうが喧嘩には関係ない。

全滅させてやるぜ！！

第1章第4話 依頼の敵全てを討伐しました・・・またここかよ!?

宣告通り。

オレは置いてあつた鉄パイプで人生の失敗者を全滅させた。

うちの学校私服だったから狙われたのかな。

まあいいか。

正当防衛だし。

飛鳥は平然な顔でこちらを見ている。

「・・・凄い!」

お、アピールできたか!

やったぜ!

「追手が来る前に逃げようか」

少し決めてみた。

少し歩くと見覚えのある通りに出た。

「JJJJは・・・」

そう。

ここは昨日の忌々しい記憶が蘇るあの場所。

「・・・ねえ、駿くん」

裾をつかまれた。

手、ちっちゃいな。

「ここにはいけないから帰ろっか・・・ははは」

そう。

ここは昨日のホテル街。

「休憩する？」

何言ってるんだよ！

オレの純粹な飛鳥は！？

「休憩しようね」

あれ？

この声は・・・

はやて姉だ・・・。

後ろにはやはりはやて姉が。

「はやて姉、何でこんなところに!？」

「そんなことはどうでもいいわ」

こ、こいつ・・・。

その時、オレの裾が引っ張られた。

「休憩って？」

って、おい。

オレに何言わせる！

雑念を振り払え。

帰還後、オレは轟騎を探した。

10分ほど探して、ロビーの椅子の上で死んでいるのを見つけた。

この原因絶対米が食べなかったからだ。

まあいい。

オレは手に下げていた袋からおにぎりを出した。

こんな事だろうと買っておいた。

これで轟騎も復活するだろう。

そういえば去年までおにぎりが食べない教師がいたな。
ま、いつか。

「ふふふ、復活ー!!」

「やっと起きたか」

オレはケータイをいじりながら適当に返答。

え、規則でケータイを持ってきてはいけない？
オレには関係ねえよ。

オレは疲れたのでベッドに潜り込むと、

「一曲歌って寝るか」

轟騎はそう言いながら機械を起動。

迷惑したらありやしない。

「一曲目は、道だな」

一曲じゃねえのかよ!?

12月17日午前2時

ケータイがなった。

起きて出ると、

「おい、起きてるか？

オレだ轟騎だ。

冷蔵庫から水持ってこい」

おい。
ケータイにかける必要ねえだろ。
しかも冷蔵庫には轟騎の方が近いし。

頭に来たのでオレは冷蔵庫に仕込んでおいたコーラを思い切り振ってから轟騎に発射してやった。

「悪かった、悪かった、だからもうコーラかけるな!!」

「懲りたならもうやめろ」

まったく、こいつは・・・。

「さて、じゃあそろそろ行くか!」
どこだ?

まだ飯の時間まで5時間程あるぞ?

「まあ、ついてこいよ」

「おい、轟騎。これはさすがにヤバいんじゃない？」
「教師にばれなきゃ大丈夫」

こいつ・・・夜這いかけに来たらしい。
今までのはまだ許せたが、これは流石にまずいぞ。
てか犯罪じゃ・・・。

そして轟騎は侵入。
あーあ。オレは知らないぞ？
何も関与していない。
うん、関与してない。

「駿？」

「うわっ！！」

ヤバい！

バレた！

こりゃ死んだな。

振り向くとそこには椎名が。

「女子の部屋の前で何をしているのですか？」

「こここここここれは、その、何もオレは夜這いかけに来たわけじゃなく・・・はっ！」

墓穴掘った・・・。

第1章第5話 奇跡の生還。そして、死ぬな！轟騎！

オレは訴えたさ。

無駄だとわかっててもな。

女の部屋の前に男がひとりで立っていた上に墓穴掘ったんだからな。信じないのも無理はない。

轟騎・・・お前だけは助かってくれ・・・。

「こうなったら自棄だ、オレはここで朽ちる男ではない！」

オレは椎名の手を握った。

「ひゃっ！」

なんか悲鳴聞こえたけどもう無駄だ。

今のオレは誰にも止められないぜ！！

そのままオレは人気ひとけのないところまで椎名を連れていった。

「見られたなら仕方ない、こんなことはするつもりはなかったが・・・」

「何言っているの？わたくしはあなたが夜這いをかけるような人じゃないことは分かっています。でも・・・駿すまがそんな気分なら、わたくしは・・・」

は？

あ、ラッキー。

教師にはれずに済む。

あなたは女神です、椎名さん。

「マジでオレの言うこと信じてくれんの？なら教師に黙っててくれない？」

「あ・・・はい。分かりました。このことは秘密にします」

助かった。マジ助かった。

後で礼でもしないと。

でもお嬢様には礼なんてしても余計かな？

ま、いつか。

その後椎名と喋って過ごした。

なぜ部屋の外にいたのかは謎だったが、気にしないでおう。

喋りはじめてから30分程度経った頃にメールが来た。

轟騎からだ。

>担任に捕まった。服を脱がせるところまで成功したんだが悲鳴あげられてな。

お前はちゃんと逃げれたか？<

・・・バカだ、こいつ。
まあ、担任もバカだからすぐ釈放されるだろうが。

「・・・はあ。まあいいや。椎名、明日は何だっけ？」

「明日はまだ決まっていませんわ」

「そうか・・・また国際通り往復で終わりそうだな」

これはマジだ。かれこれ沖縄にきてから国際通りしか行ってないし。

「国際通り飽きたな・・・。部屋に戻るか。椎名、また明日な」

「はい、おやすみなさい。それと駿」

オレは椎名に呼び止められた。

「わたくしのことは千秋でいいですわよ」

オレはそれを聞くと頷いて部屋に向かった。

うん、最後の身を翻して去るところは決まったな。

部屋に戻ると宣告通り轟騎はいなかった。

「飯までもう少しあるな・・・。だけど腹減った・・・とりあえずな
んか飲むか」

オレは冷蔵庫を開けてコーラを取り出す。
まで。

仕返しとばかりに轟騎が振ってる可能性がある。

オレは警戒しながら風呂場で開けた。

.....。

何も起こらない。

「考えすぎか・・・」

オレはコーラを飲みほしてベットに横たわった。

暇だ。

非常に暇だ。

轟騎がいるのといないのでは大分違う。

なんかないか・・・あ、カラオケ。

オレは機械を起動した。

「誰か呼ぼうか」

ふふふふふ、カラオケといたら凄い奴がいるじゃねえか。

オレはニコニコしながら電話をかける。

「・・・完了」

数分後、顔がいい奴が来た。

「早かったな、錬磨」

こいつは 一条錬磨。

学年でトップクラスのカツコよさを誇る男。

だから奴を好くのも無理はない。

しかしオレは奴の仮面をとった姿を知っている。

こいつはどこで行き間違えたか、結構ハードなオタクだ。

オレはこいつとは長い付き合いだがいつこうなったのかはわからない。

「さあ、君の歌声を聞かせてもらおうか！」

こいつは一般人にしては歌は上手い。

ただ、歌う曲がアニソンやら某有名動画サイトで流される曲とかしか歌わない。

しかも、ほとんど叫んでる。なのにいつも90点前後。

真面目に歌うオレとたいして差がない。

「行くぜ、まず一曲目。送信。ハレ晴「いきなりそれかよ!?!」」
待て。

せめて最初はアニソンは止めような。

オレは普通の歌が聞きたい。

「オレが先に行く」

選曲は間違ってる。

これはオリコン一位をとった曲だからな。

さあ、歌おうか。

だが流れてきたのは……

患部で止まってすぐ溶ける 狂気の優曇華院

「……………」

知ってるけど歌えねえ……。

第1章第6話 カラオケカラオケうるせえよ。黙って一人で行ってる

12月18日午前6時

「おい、起きろ・・・駿！」

誰だ！？

朝っぱらから大声出すなよ！

って、なんだ、轟騎か。

「なんだ？」

「今日は帰る日だぞ」

あ、そうだったな・・・って、修学旅行何やってたんだ？

一日目。

国際通りで轟騎と共に土産を購入。

二日目。

飛鳥と共に国際通りを歩く。

三日目。

錬磨と一日中カラオケ。

四日目。

帰還。

修学旅行的なこと何一つしてねえ・・・。

そんなことで、オレたちは帰った。

12月19日午前9時

メールが来た。

・・・錬磨か。

内容は

「カラオケ行こうぜ！」

オレは無言で返信。

「ふざけんな」

以上。

今日はオレは趣味を遂行する。

オレの趣味。

それは小説を読むことだ。

珍しいことにオレの部屋には漫画は一冊も置いていない。

その代り、おびただ夥しい数の小説が置いてある。

さらに、オレのスキル！

速読術！

これは1ページを3秒前後で読む（さらに完璧に理解する）ことができる、国語のテストでは非常に役に立つスキル！
ちなみに現代日本語にしか効果はないため、英語や古文には使うことができない。

これで1日で何冊も読むことができる！

早速、本を買いに行くことにしよう。

オレは近くの本屋に出かけた。

現金は、

22,372円所持。

というわけでオレはラノベと無駄に分厚い小説をあわせて10冊買

った。

ここで問題。

さっき買ったラノベの平均は600円。分厚いのは平均1900円
そしてさっきの合計は9900円。

中学生なら何冊ずつ買ったか分かるはずだ。

まあ、オレもこの式習ったばかりだが・・・。

てか・・・買いすぎた。

まあいいや。

その夜、オレは買ってきたラノベを全て読み尽した。

12月20日午前9時

メールが来た。

錬磨からだ。

内容は

「カラオ「黙れオタク」

オレは全て読まずに返信した。

1分後、再びメールが来た。

「・・・誰だ、このアド」

知らない人からだ。

別に普通のケータイのアドだし、詐欺ではないだろうが・・・。

「アド変えた」

・・・誰だよ。
とりあえずシカト。
恐らく轟騎だし。

1分後、またメールが来た。

「だから、カラ「着信拒否にするぞ」

内容からわかるとおりの人から来た。

てか、メールばつかじゃねえか？
いい加減飽きるぞ？

結局オレは一日中メールをやっていた。

というよりメールにつきあわせられてた。

第1章第7話 長期休暇の宿題っていつもたまるよな、教師はオレに恨みがある

12月31日午後11時00分

気がついたら1年が終わるところだ。

冬休み入ってからは遊んでばかりだったからな。

・・・宿題やってねえ。

轟騎に頼ってもあいつ頭悪いし、錬磨も頭悪いし。

「宿題どうしよう・・・まあいいや、寝よ」

てか

まだ冬休み半月あるじゃん。

1月14日午前9時00分

「ヤバい。今度こそヤバい」

宿題をやらずにいたら明日は学校だ・・・。

「まあ、担任あのデブだから大丈夫か」

ピンポーン

誰か来た。

親は旅行中だしはやて姉も遊びに行っただし、オレだけか。
しかたねえ。

「はい」

オレは扉を開けるとそこには何故か千秋が。

「はい？」

理解できない。

英語で

I do not understand .

あつてるかな？

「宿題・・・できた？」

第一声がそれかよ！？

挨拶は！？

あ、オレもしてねえ。

ま、いつか。

それから二人で宿題をやることになった。

てか・・・千秋頭良すぎ!?

テストの点聞くと5教科で498点以下とったこと無いらしい。

オレはテストの点とか興味ないが。

別に点悪くてもオレの叔父が名門高校の理事長だから遊んでても入れるし。

しかも叔父のお気に入りだし。

ちなみにオレは遊んでても400点はとれるから勉強すればどれだけ良くなるんだか。

てか・・・オレの部屋暑いな・・・。

部屋の温度計・・・は!?

35 !?

夏じゃん!?

ストーブの設定温度高っ!?

30 !?

「暑いな・・・」

「そうですね・・・」

そう言っただけ千秋は上着を脱ぎ始めた。

「誰だ・・・」

オレは見たかったが周りに人の気配がしたので探る。

部屋を出ると・・・

轟騎がいた。

「轟騎！ー！つて、寒っ！ー！」

そこは寒冷地帯であった。

廊下の温度計は

- 5 を指していた。

同日午後1時

「千秋、助かった・・・ところでカラオケいかねえ？」

「カラオケ？何故ですか？」

カラオケ行ったこと無いかな・・・。

お嬢様だからな・・・。

「錬磨からメールが来た」

ちなみに冬休み中毎日カラオケに誘われた。

「あなたが行きたいならいいですわ」

別に行きたいわけじゃないけど。

30分後

「駿！それに椎名さん！？まあいいや。轟騎は？」

「不法侵入してきたから箆笥に監禁してきた」

轟騎はそんな末路をたどった。

「まあいいや。俺からいく。まずは、禁じられ」だから何でいつも
アニソンなんだよ！？」

オレってツツコミ役になりやすいよな・・・。

勘違いしてやがる・・・。

「オレはこれから趣味を遂行するんだ。だからお前の考「お前・・・
そんなのが趣味だったのか・・・とんだ変態だ」

お前に言われたくない。

その後錬磨を叩きのめした。
今日は再起不能なまでに。

その後、錬磨を運ぶという手間ができてしまったので後悔したのは
言うまでもない。

第1章第8話 ありえねえ・・・錬磨がアニソン以外の曲を歌うなんて・・・

1月15日午前8時

久々の学校だ。
非常に久々だ。

オレは来るとき自販で買ったコーラを飲みながら教室の扉を開けた。

「うわっ!？」

誰かにぶつかった。
コーラは無事だった。

下を見ると飛鳥がいた。

オレ、飛鳥とぶつかったのか・・・。

あれ・・・おかしい。
なんか、おかしい。

「大丈夫か？」

「あ、はい」

そのまま飛鳥を見送った。

おかしい。

絶対おかしい。

普通ぶつかっただら喜ぶべきだろ。

だけど・・・全然喜びを感じなかった。

「好きって感情が・・・消えた・・・」

放課後

「駿、学校終わったぞ」

轟騎に起こされた。

いつ寝たんだろう・・・。

ま、いつか。

「はあ・・・カラオケ行くか」

「キタ

!!!!!!!!!!!!!!」

さっきの叫びは勿論錬磨だ。

カラオケあるところに奴は現れる。

てか錬磨って毎日行ってるよな、カラオケ。

なのに声潰れないし、金も枯れないし。

「錬磨、小遣いいくらだ？」

「あ？100万」

はあ!?

「言ってなかったっけ？俺の親は椎名グループのライバルの一条グループの会長だっけ」

にしては平民だな。

「普通の暮らしがしたかったから月100万で生活してんだよ」

こいつ・・・こんな裏設定あったのか・・・。

ちなみにオレの小遣いは月30万。

オレの親はどっかの学校の理事長だったかな？
それからホテルも30個くらい持ってるし。
特別金持ってわけじゃないけど結構ある。

「まあいいや。お前が来るならやめるか」

「ちよ、ちよっと待て。何で!？」

どうせここにアニソンしか歌わないし。

同日午後8時

「あ、ありえねえ・・・」
「マジかよ・・・」

轟騎とオレは二人でカラオケにきた。

しかし、部屋を開けた瞬間錬磨が視界に飛び込んできて・・・。

今回の錬磨は違った。

普通の歌しか歌ってない!?

しかも、さっきからの点数は

99点と100点しか出していない。

「異常だ・・・」

「俺だって普通の曲歌えばこのくらいとれる!!--」

またこの勝ち誇った顔が憎らしい。

アニソンの時は80点程度なのに・・・。

さらに無駄に整った顔立ちも憎らしさを増幅させていた。

同日午後11時

「帰るか」

オレは立ちあがった。

轟騎は既に帰って、錬磨と二人きりだ。

男同士は嫌だが……。

錬磨はまだいるようなのでオレは金を置いて立ち去った。

夜道でオレは誰かに抑えられた。
男捕まえる奴って・・・悪趣味だな。

振り返るとそこには千秋が。
前言撤回。

「あっ！」

掴まれた腕になぜか強い興奮を覚えた。
どうやらこれが原因で飛鳥を何とも思わなくなっただらしい。

「いたぞー!!」
なんか黒服の怪しい奴らがやってきた。
「・・・こいつらから逃げたいわけね」

オレは棒状のものを探した。

くっ、ないか。

黒服の奴らはオレの方に寄ってきた。
オレ、対人戦弱いよ？

マジかよ……。

グシヤ！

グロテスクな効果音と共に黒服の奴らは頭から血を流し始めた。

「可愛い駿くんは何をするのかな？」

「・・・はやて姉・・・」

助かった・・・。

てか・・・頭から血を噴き出させるトリックって何！？

第1章第9話 親が死んだ？転校？いきなり問題が多すぎてわからねえよ

「片瀬 はやて・・・世界的に有名な暗殺者・・・」

「マジかよ!？」

はやて姉って暗殺者だったの!？

「てつきり男性だと思っていましたわ」

まあ・・・男の名前だし。

「あら、完全犯罪にしたのに・・・よく知ってるね」

ええええええええええええ!？

なに凄いこと言ってるの!？

完全犯罪でもアウトじゃん!？

「私たち、雇う側には有名ですから」

あ、そうか。

千秋はお嬢様だからな。

「で、何故千秋は追われてたんだ？」

「あれはうちのボディーガードを難なく仕留める暗殺者でした。私

「てか、オレばあちゃんの家に行ったことねえよ」
「それはね、日本の離島にあるからよ。飛行機も通じてない、そんなところ。以前両親が学校経営していると言っていたでしょう。あなたが通う学校はそこよ」

何この状況。

千秋なんて呆然と突っ立てるし。

「そこは選ばれた人しか入れない。特別な人間を養成する学校。あなたはその特別な人間ね。昔そこに行かせる予定だったんだけど、いろんな事情で普通の公立学校に通わせることにしたのよ」

厳しいものあるっすよ。

オレは普通の人間ですから。

「あー、千秋さん。それでオレは消えるそうなんで、今までありがとうございました」

一応、別れの言葉をぶつけた。

「嫌です」

はい？

「あなたと別れるなんて」

お、これはもしかして？

「私は・・・昔、あなたと約束しました。大人になったら結婚するって・・・だから・・・だからわざわざこっちまで来たのに・・・」
あ、あの時の女の子って千秋だったんだ。

「なら、あなたも来ればいいじゃない」

はやて姉がそんなことを言い始めた。
でも特別な人しか入れないんじゃない？

「大丈夫、彼女も特別な人よ。ただ、彼女の親が断固として認めなかったのらしいよ・・・何ていうか・・・普通の学校じゃないといけないとか」

やっぱり普通の学校じゃねえのかよ!?

「まあ、進級してからだから今年度は楽しみなさい」

楽しめねえ・・・。

1月22日午後4時

あれから一週間たった。

あの時のことからオレと千秋は付き合ってる。

まあ、これも残り2か月もない関係だが。

困ったので、学校の屋上で膝枕をしてもらいながら相談に乗ってもらってる。

「はあ、千秋・・・オレ、どうしよう」

「駿、落ち付きなさい。まだ、あなたには1月以上残されているの

ですよ」

「……でもどうすりゃいいんだか……もう少し寝てよう」

膝枕って気持ちいいな。

なんか甘い香りもするし。

「……オレ、ここを離れたくない……千秋や、轟騎、鍊磨、飛鳥……そのほかのいろんな奴らとも別れたくない」

オレはそう呟いて眠りについた。

大分経ってから千秋に起こされた。

目が覚めるとオレの周りにいかにもオタクっぽい奴らが大量にいた。

全員、気持ち悪い顔をしながらオレを睨んでいる。

鍊磨がいたら絶望してた。

「まさか……こいつらって」

「目障りですわ」

千秋はどこからか鞭を取り出して奴らを打つ。

うわっ、これは痛いな。

でもオレは親衛隊を助ける気にはなれないぜ。
むしろオレが散らしたい。

というわけで、オレは掃除用具入れからモップを取り出し、先を取ってモップの機能をなくしてただの棒にした。

この太さならなら剣道のように使った方がいいか。

正直オレの我流剣技は突き重視なんだけどさ。

奥義は別だけど。

二分後

オレの剣で奴らを全滅させ、更に千秋の鞭で拷問・・・怖っ！
こいつの女王伝説は本当だったらしい。

気品は以前から女王だったけど。

「私にかかわらないことですわ」

「錬磨がいなくてよかったよ」

我ながらこの戦いは素晴らしいものだったと思う。

第1章第10話 いゆっくりとそのままインフルエンザ

1月30日午後8時

あれからさらに一週間。

残り時間が少ないのにも関わらず、刻々と時間は過ぎていく。

オレは呑気に本を読んでいる。

もうやる気は微塵もない。

「黒魔術・・・はあ、ファンタジー小説ばっか読んでも無駄ってのに」

黒魔術って使えるのかな？

打開策は全く見つからない。

はやて姉を説得する内容もないし、両親が死んだせいであの特殊学校に通うことを拒む障害も消えた。

はやて姉とばあちゃんは賛成らしいし。

まあ、高校はどこでもいいからみんなと同じ学校に入ろう。
それがいい。絶対に。

1月31日午前10時

遅刻した。

普通に遅刻した。

今更どうでもいいや。

この中学にとどまることは不可能だ。

「今更だけどオレって結構不良だよな」
ピアスとかしてないだけマシか。

学校に到着。

扉を勢いよく開けると女子が着替えてた。

「あれ？」

あ、次の時間体育か。

・・・すげえ・・・見事にみんな黙ってる・・・。
気まずくて動けねえ・・・。

いや、ここは謝って逃げるべきだな。

「あ、わりいっす」

逃亡。

気まずいので早退することにした。

でも、少し暖まりたい気分だったので保健室に行くことにした。

「こんにちはー」

挨拶はする。これは人間の常識。
まあ、そんなことは置いといて。
オレは適当に理由をつけて保健室で寝ることにした。

「ごめんね、今全部使われてるの。すぐに迎えが来て一人早退するけど、女の子が一人予約入ってるからね。」

保健室のお姉さん・・・まあ、教師だけどまだ20代前半だからお姉さん。

ちなみに名前は渡辺^{わたなべ} 玲奈^{れいな}。

みんなからは玲奈ちゃんと呼ばれて慕われている。

仕方ないか・・・。

諦めよう。ソファで寝るか。

にしても5つもあるベットが全て占領されるとは・・・保健室連続サボり事件の犯人か？

気にしてもないものはない。

オレはソファに座った。

「ひゃう！」

「あ？」

なんか変な声が聞こえた。

下を見ると千秋が真っ赤な顔でぐったりとしていた。

「お、おい！大丈夫か！？」

一応保健室なので小声で。

「駿ですか、私は体調を崩して・・・」

こりゃあまずい。

「早退しないのか？」

「今日は委員会ですから・・・休めません」

真面目だな。

「千秋さ〜ん、空きましたよ〜」
気ままな玲奈ちゃんはオレが千秋を抱きかかえて個室に入っても、
「ごゆっくり〜」と言つて微笑んでいるだけであつた・・・。
こいつマジ教師か？

「大丈夫か？」

オレは千秋の看病をしながらケータイをいじつていた。

「ケータイいじりながら言うべきことか・・・それ」

いつもの勢いが無いから本当に大変なんだろう。

「どこか痛かつ「あれ？二人ともやってないの？お姉さんが教えてあげようか？」

オレが話を始めようとすると玲奈ちゃんがいきなり入ってきて危ないことを口に出した。

「いや、いいから。マジでいいです。止めてください」

オレは全面否定。

千秋が具合悪いのに無理させてたまるか。

オレは玲奈ちゃんが何かに興味を持つととまらないといつことをこの一年で思い知らされたので、逃げることにした。

オレは帰宅後に薬を飲んで寝ることにした。

第1章第11話　こちら駿、侵入者発見、直ちに抹殺せよ・・・無理あるよ・・・

2月8日午前8時

オレとしたことがインフルエンザ如きに1週間も奪われてしまった。
インフルエンザウイルスめ、舐めた真似を。

という事で1週間ぶりに学校に登校。

「お、駿！インフルエンザは治ったか？」

「治ってなければこねえよ」

轟騎が笑いながら肩を叩いてきた。

「それはいいとして、お前。出席停止じゃないのか？」

・・・あ。

オレは家に強制送還された。

2月11日午前8時

「インフルエンザ如きに合計10日も奪われてしまった」
三日ぶりに登校。

教室に入ると、

「お、駿！ようやく来たか！」

「錬磨か・・・はあ」

オレは俄然、やる気を無くしていた。

「それはいいとして、駿。お前、転校するってマジ話か？」
はい？

「どこでその情報を？」

何でこいつ知ってたんだ？

「君の愛しき彼女から聞いたよ、轟騎も一緒にな」

「ああ、そうか。でも、高校はみんなと同じとこ行くつもりだから」

「当たり前だろ、俺達はずっと一緒だからな。たった1年程度大したことねえよ」

錬磨・・・。

お前、こない奴だったっけ？
まあいいか。

そんな事でオレは転校を恐れなくなった。
いずれ戻ってくる。

そうさ、こいつらにはまた会える。
なんか湿っぽくなったな、オレにはあわねえな。

これで約2か月を気楽に使えるな。

そう思っていたら、事件が起こった。

それはこの日から丁度二週間後。

2月25日午前12時

「腹減ったな」

「ああ」

飯の前、しかも体育の後。
腹が減るのは当たり前だ。
オレは轟騎と廊下を歩いていた。

その時、校内放送が始まった。

「なんだ？」

> えー、校長先生、校長先生、至急事務室まで来てくださいく
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・不審者侵入
した!?

「避難訓練でやったな・・・何だっけ、校長が事務室に召喚された
時は不審者が来た」と

「いちいち確認しなくていいから。」

「そうだけど」

「じゃあ、行ってみようぜ！」

マジかよ!?

おい、止めるよ!?

「仕方無い、その前に第一本持たせろ」

一応武装して事務室に向かった。

事務室前で伝説のスパイ・・・・っぽい人がいた。

「・・・・か、勝てねえ」

「ロケランもってやがる・・・・」

しかし、校長も校長で某金髪戦闘民族化していた。

「・・・・レベルたけえ」

「てか校長って超サ ヤ人だったんだ」

てか校長って何者？

やってること謎だし。

校歌も「堅苦しいの止めてロック調にしようぜ、歌詞も」とか言い出して滅茶苦茶ロック調になったし。

何やら見た感じ20代だし。

「スーク（らしき人）と校長、どっち勝つと思う？」
「・・・難しい選択だ・・・奴がリアルにあのスークまたはその細胞を使われたクローンなら奴にも勝機はある」

それから腹の音が鳴るのも忘れて二人の戦闘を眺めていた。

二時間後

結果から言おうか。

スーク（らしき人）の勝ちだ。

「校長おつ」

おつじゃねえよ!?

校長リアルに死んだよ!?

「もう勝つには世界最強のコーディネーターを破った『管理局の白い悪魔』しかできないんじゃない?」

「つまり、誰も奴には勝てないと言いたいのか」
現実世界には『管理局の白い悪魔』はいない。

そう言っていたらスーク(らしき人)に見つかった。
いや、最初から気づいていたのかもしれない。
こりゃあ死んだな。

結果から言おう。

リアルに死んだのはスーク(らしき人)の方だ。
何が起こったかって?

それは『管理局の白い悪魔』を超えた『管理局の白い魔王』に準ずる強さを持つオレの姉が

抹殺

した。

「オレの危険が迫ればすぐに来るか・・・」

「駿くん、こんな危ないことしちゃいけないでしょ？」

文句なら轟騎に言えよ・・・っていねえし!？」

まあ、こんな事で今学期が終わる前までの重大な問題は終わった。

ちなみに校長は葬式中に蘇生したらしい。

誰だー、フェニックスの尾使った奴ー？

第1章最終話 転入先は・・・魔法学校!?しかも女学院かよ!?(前書き)

平凡な暮らしが一気に崩れ去る日が来ました。

第1章最終話 転入先は・・・魔法学校！？しかも女学院かよ！？

3月17日午後9時

オレは今、千秋の家（てかもはや屋敷）にいる。

今日はは修了式だ。

明日になったらすぐにここを離れる。

そして今は二人でベッドに寝ている。

別にやらしいことをしているわけではない。

「駿・・・あ、あの私・・・」

「千秋、当分別れるけど・・・ずっとオレのこと、好きでいてくれるか？」

そのままオレは強引に千秋の唇を奪う。

最後までいいいだろ、何やったって。

てか千秋の言いかけてたことシカトしちゃったよ。

「ごめんな」

オレはそれだけ言っただけで千秋を抱きしめた。

また強引に。

「いいですよ・・・私は待っていますから
いい子すぎる。」

最後の夜くらい楽しもうじゃないか。

3月18日午前6時

目が覚めるとはやて姉がいた。

「駿くん、荷物持った？」

「つて、早すぎるだろ!？」

だつてまだ千秋の家で、しかもベットのなかだぞ!？」

「駿くん、私とはしてくれないのに他の子とはするの?」

ちよ、おい!

まてい!

あんなことはしてない上にはやて姉とは兄弟だろ。

そこんとこよく考えろ!

近親相姦は世間的に認められてないよ?

「仕方無いな、置手紙していくか」

千秋へ

先に出て行ってごめん。なんて書けばいいかわからないけど・・・
とにかく、1年後にまた会おう。轟騎や錬磨にも言つといてくれ。
声が聞きたいときは電話してくれ。またな。

「お前が魔術師じゃねえのにオレが魔術師なのか!？」
と聞いたら殴られた。
うぜえ……。

オレの転入までそこまで大げさなことはなかった。
この間みたいなスーク(らしき人)も来なかったしな。

4月2日午後11時

「はやて姉、オレ魔法使えないよ」

「すぐ使えるさ、私も使えるまで3分だったし」

おい、はやて姉魔術師なのかよ!？」

うちの人って一般人でしょ!？」

まあいいか。

明日は始業式だ、早く寝よう。

あーっと、その前に。

今まで爆殺してた技って魔法?

てか、絶対こいつ『管理局の白い魔王』より強いな。
もしかしたらマジで『S・L・B』とか使えたり?

「で、あの学校で何すんの？」

「三年生は使い魔の召喚かな？」

「ぜ　の使い魔かよ!？」

あれ、あんま隠してる気がしないが、いいか。

第1章最終話 転入先は・・・魔法学校！？しかも女学院かよ！？（後書き）

1章が終了したので1週間ほど休憩させてもらいます。

第2章第1話 これは素直に喜ぶべきか・・・泣くべきか・・・。(前書き)

毎日はずついで、これから毎週水・土更新にします。

それから、新章スタート。

魔術アクション的な要素満載ですねw

第2章第1話 これは素直に喜ぶべきか・・・泣くべきか・・・

4月3日午前9時

いきなりだが。

一日早くね？

まあ、気にすることはない。
この学校は始ってるからな。

「えー、このクラスに新しいお友達が来ました。男の子ですけどみんな仲良くしてくださいね」
あの女（一応担任だけどw）、余計なことを・・・。

ちなみに1学年1クラスのみ。
少なっ。

「あー、初めまして。片瀬駿といいます」
うわっ、みんな黙った。
「カッコいい〜」とかの声援なしかよ・・・。
まあ、誇れる顔じゃ無いけどな。

いやあ、転入時の挨拶って緊張するんだな。

まあ、誰とも打ち解けず、その日は終了。

つと、その前に

同日午後5時

「はい、ここが駿くんの部屋ね」
オレは寮に案内された。

二人部屋だそうだ。

・・・二人部屋!?

「お、おい。待てっ!」

・・・既に担任はいなかった。

5時間後

オレは一人佇んでいると、ドアが開いた。

ちゃらららら

女子Aが現れた。

「あ、あああああああの、かかかかか片瀬様ですか？」

「確認すんなよ、男はオレしかいないだろ。それと駿と呼べ、片瀬は呼ばれ慣れない」

凄まじく動揺している女の子は少し落ち着いてからゆっくり話し始めた。

「私は貴方様と相部屋になりました、小林こはやしはるかと申します」
正座して、お辞儀する姿はかなり清楚だ。

「タメ口でいいぞ」
かなりオレに敬意を示すはるかとかいう子はいいえと拒み、続けた。
オレっていつからそんな偉くなった？

「貴方様はこの島の次期当主。ですのにタメ口なんてきけません」
「・・・次期当主って、どういうこと？」

「知らないんですか？」

知らないも何もオレここにきて1月もしてないぜ？

知るはずもない。

にしてもあのババア、オレを返さない気だな!?

「私は代々当主様に仕える家系なのです。ひとりが働くことでその他の家族は裕福に暮らせませす」

一人犠牲になるのかよ・・・。

「で、お前はいいのか?」

「私は自らお仕えしたいと思っています。貴方様の身の回りのことはなんなりとお申し付けください」

「まあ、いいか。寝ようか」

「一緒にねねねねねねねねねね寝るなんて・・・私には・・・」
何勘違いしてんだよ!?

一緒に寝るって言ってるよ。

あくまでも全年齢・・・なはず・・・たぶん。

「お休み」

挨拶はする。これはオレの数少ない長所。

「はい、おやすみなさいませ、駿様」
様は止める。

4月4日午前5時

「駿様、おはようございます」

オレはメイドに起こされた。

・・・メイド？

オレは目を開眼させまじまじと見る。

「駿様、そんなに見られると恥ずかしいです」

顔を赤らめて目を少しだけ反らすはるかは非常に可愛い。

あー、いけね。オレには千秋という彼女がいるじゃないか。

浮気なんてしたら某誠君の二の舞になっちまう！

それだけはお断りだっ！！

オレがこれから作る友達にヤンデレはいませんように……。

オレは顔を洗おうとベットから出るとはるかは「きゃっ」とかかわいい声を出して顔を隠した。

「ああ、これは男の生理現象だ。気にするな」

いや、気まずい雰囲気になっちまったな……。

第2章第2話 召喚の儀式って、まさかあんな世界じゃないし、人間が出てこた

4月4日午前9時

「おはようって、はるかまだメイド服かよ!？」

「はい、これが正装ですから」

こ、こいつ……どこか天然入ってる……。

まあ、いいか。

なんだかんだでメイドゲットしたし。

いらなかったけどいたらいたでいいかも。

「駿様、どうぞ」

はるかはおれの椅子を引いた。

訂正・意外と迷惑なところあるかも知れん……。

同日午後2時

「これから使い魔を召喚します」

リアルにゼ の使い魔じゃん。

だいたいオレ魔術なんてやったことねえし。

なんだかんだで始まった。

ちなみにトップは赤坂刹那あかさか せつなさんだそうです。

よし、覚えた。

友好を広げるため、ひとりでも多く覚えておこうか。

ちなみに召喚した使い魔は・・・ペガサス・・・っておい。

リアルにこれはファンタジックになってるぞ!?

誰かケルベロスとか召喚しそう・・・。

みんなが終わってオレの番・・・って、オレもやるのかよ。

「駿様、召喚はこうやるのですよ・・・」

一通り教えてもらったが、なんか初めて召喚したのがアンフェスバエナの人に教えてもらってミスったら厳しいな。

ミスったらその時はそのときだ。

とりあえず召喚はできた。
だけどさ。こりやないだろ・・・。

「あー、あんた誰？」

「わらわはヴァルクキュリアのリア」

こいつの親絶対名前付けを適当にしたな。

「駿様、凄いです」

「このいかにも偉そうな黒い天使が？」

・・・あれ、黒い。

ヴァルクキュリアって確か天使だよな・・・。

「わらわはヴァルクキュリアの上位の種族、ダーク・ヴァルクキュリア」

「うわっ、ダークとか。絶対反抗するよ、この貧乳娘」

見た感じ16、7ってところか。

「うるさい！気にしてることを言うでない！」

こいつ従えるの？

えー、嫌だー。

オレははるかみたいな従順な子がよかつたなー。

よし、後で拷問道具買っておこつ。

しつけないとな。

放課後、オレの部屋。

「はるか、ダーク・ヴァルキュリアって普通のヴァルキュリアとどう違うんだ？」

「はい、ヴァルキュリア種は天使系使い魔の中でも上位に位置しています。ですが稀にダーク化した種が生まれる時があるのです。所謂、突然変異です。ダーク化した個体は通常種10人が束になっても勝てないほど凶悪なのです。ちなみにランク的にも天使は上位なので、ダーク・ヴァルキュリアは非常に強力な種だと言えます」
へえ。

ちなみに大雑把に

獣、魚、天使、悪魔、爬虫類、ドラゴン（爬虫類とは別らしい）、鳥、アンデッド、昆虫、植物、元素（まあ、水とか？）ってのがあ
るんだと。

基本的にドラゴンとかは非常に強力、らしい。

根本的な能力からして爬虫類とは段違いらしい。

現実世界もゲームとさほどかわりなかったという事実を知っただけでも大分凄いことだ。

「リアは従わせるのが大変そうだな」

非常に面倒なことを押し付けられたものだ。

「リア、お前ってオレの使い魔だよな」

「一応、そう言うことになっておるのだろっ」

「なら一通り自己紹介でもするか」

リアは全種族の中で3番目に強い天使系使い魔の中で2番目に強いヴァルキュリア種の上位版。

1番のアーケエンジェルとまともにぶつかっても勝算はあるらしい。それに現在、ダーク化したアーケエンジェルは未だに発見されていない。

だから実質一番強いのはリアの種ともいえる。

ちなみにこのまま続けて変なこと聞いたら口を滑らせた。

身長152cm、体重45kg、16歳。スリーサイズを聞いたらそれは極秘と言われた。

「分かった、お前は見かけによらず寂しがり屋ってことが
リアは顔を赤くして布団の中に潜り込んでいった。
でも、なぜはるかか布団に入っていかなかったんだ？」

第2章第3話 剣道少女を倒す！よって魔法を学習しなければならぬ

4月5日午後4時

今日の授業が終わった。

「相変わらず意味わからんこと教えるな」

「駿様、わからないところがあれば私が教えて差し上げますよ」
「教えてもらっても将来何に使うか分からねえからな。」

「遠慮しておく・・・」

暫く歩いて行くと剣道場らしきものがあった。

「あそこで剣道やってんのか？」

「はい、見ていきますか？」

「そうしようか、暇だしな。」

「剣道か・・・」

剣道場では一人だけ素振りをしていた。

あれは・・・赤坂刹那・・・。

「誰かと思ったら、少年じゃないか」

「少年って・・・」

こいつも同じ年代でしかも背もオレより20cm近く小さいじゃないか。
えか。

ちなみにオレの身長は171cm。結構小さいような・・・。

「お前も剣道をやっていたのか？」

「まあ、な」

今は我流だけどなw

「剣を交えてみるか？」

てな訳で戦うことになりました。

「ん・・・こいつ・・・」

「突き！」

えっ!?!?

タマちゃんかよ!?

まあ、フェンシングもかじってたオレは他の奴らよりは突きに対応できる。

竹刀を片手で持って払う。

しかし、癖でそのまま突きを入れてしまう。

瞬時に両手で持ち、面を入れる。

が、しかし。

「魔道剣道を舐めてもらっては困る」
しらねえよ。

刹那はオレよりも更に速く胴を入れる。

「胴!」

ぐは。

一本!

オレは負けた。

てかなんだ?

あいつ……一瞬消えた。

訳も分からず礼をする。

そこではるかが口を出した。

「赤坂さん、ずるをしましたね？」

「剣道にずるもあるかよ」

オレははるかかの言葉を否定し、立ち去った。

「あいつさっきの試合で魔法使ったろ」

「はい、無詠唱であの瞬間移動魔法が使えることは非常に凄いことです」

やっぱり。

単純な剣道では負けるはずはない。

道場破りして我流に走ったんだからな。

あの道場では大人もあわせて最強だったから。

同日午後9時

刹那に負けたオレはかなり悔しかったのではるかに魔法を教えるもらうことにした。

「はるか、オレってどんな魔法が使えるんだ？」

「使って見ないとわかりません」

というわけで使ってみることにした。

その1・炎属性魔法^{フレイム}

「少しでも炎の魔力がある方は誰でも使うことができる『火の粉』から」

低級炎魔法ってファイアー・ボールじゃないの？

キノコ食って大きくなるおじさんも花を手にすればファイアー・ボール投げれるんだぞ？

火の粉とか某有名カードゲームの中で最弱のバーンカードだし。

まあいい。

オレは教えてもらった詠唱と共に魔力を高めていった。

が、しかし。

「おかしいですね・・・」

「オレは火の粉すら呼び出せないのかよ・・・」

「あ、そうです。ヴァルキュリアを召喚できたんですから光魔法なら使えるかもしれません」

そうかもしれないな。

その2・光属性魔法^{ライト}

「光属性は大抵のひとは使えません」

「で、詠唱は？」

「申し訳ございません、私は四属性魔法しか使えないので光と闇の詠唱はわかりません」

マジかよ……。

その3・風属性魔法^{ウインド}

「仕方ねえ、片っ端からやってくか」

「はい、風属性魔法では『つむじ風』を起せれば素質はあります」
詠唱して見る。

「……いきませんね」

「やっぱり光だったんじゃない？」

その4・水属性魔法^{ウォーター}

「最初は『氷塊』ですね。水属性はもともと強力な属性ですから
言われたとおりの詠唱。

かれこれ2時間もやってる。

「・・・なぜだ」

「やはり、駿様は四属性魔法は使えないのでは？」

その5・回復魔法^{ヒーリング}

「これなら天使が得意とする魔法ですのでヴァルキュリアを召喚できた辻褄が合います」

「ついにつかえる魔法が来たか」

結果は言うまでもない。

その6・次元魔法^{ディメンション}

「これは非常に珍しい魔法属性で、使える魔術師はこの世の魔術師の約5%程しかいないそうです・・・しかも、私のお爺様が次元魔法の継承者です。一応詠唱は分かるのでやってみてください」

失敗したな。

そんな魔法使える訳ない。

予想的中。

「オレは魔法に嫌われているようだ・・・」

「そんなことはありません・・・そうです、リアさんに聞いてみてはどうでしょうか？」

という事でリアに聞いてみた。

「お前の魔法属性？ダーク・ヴァルキュリアが呼べる時点で混沌カオスか召喚サモンしかないだろう」
ちなみに混沌カオスは光ライトと闇ダークの混合だそうです。
非常に稀な魔術師の属性らしい。

その7・混沌カオス魔法

ちなみに
フレイム
炎
アクア
水
ウィンド
風
ガイア
地
ライト
光
ダーク
闇

・・・。

・・・。

・・・何も起こらない。

「リア、何も起こらない・・・ぞ」

後ろにはリアではなく骸骨が・・・。

「召喚成功だな」

「・・・キモい」

「りゃあ厳しいものあるっすよ。」

第2章第4話 進級テスト・地獄の大闘技場・・・オレハンターじゃないっすよ

4月6日午後5時

「打倒刹那をスローガンにオレは魔法をやります」

ついにファンタジーの世界にいつてしまった・・・。

魔法の修行は非常に大変なものだが精神を集中させることには長けていたのでいきなり魔法を使うことができた。

そしてオレは図書室で文献を探している。

「低級召喚術ってワイトばっかだな」

「召喚して見る」

リアに言われたので意識を集中し、術を唱える。

一応召喚できたが・・・これはキモい。

骨が動いてる。

「お前は連続召喚を覚えた方がいいな」

「なんだそれ」

「一度の詠唱で複数の召喚を行う。連続で召喚されることから連続召喚と呼ばれる」

リア曰くオレは他の奴らより2年遅れてるからもっと努力しないといけないらしい。

部屋に帰るとオレはベットに倒れこんだ。

「そういえば電話来ないな・・・」

ケータイを覗いてみるとなんと・・・。

圏外でした。

「な、なにっ！」

やられた・・・あのクソババア、ここは圏内って言うてたくせに・・・

・いつか殺すっ！！

オレが邪念をこめてババアに手紙を書いていると大慌てではるかが入ってきた。

「駿様大変です！明日進級テストがあります！」
「は？」

4月7日午前6時

「で、昨日聞きそびれたテスト内容とは？」

「闘技場でいろんな魔物と戦うだけです」

へえ・・・マジか・・・死ぬじゃん。

「死にたくねえよ」

「強ければ死にはしませんよ」

オレは強いとか弱いとかそのレベルじゃねえよ？

同日午前8時

テスト・・・らしきものが始まった。

どうやらペアでやるらしい。

相手はくじ引きで決まる。

オレが引いたのは12番。

一致する奴は・・・マジかよ・・・。

ペアは刹那であった。

「お前か・・・」

「悪かったな、初心者で」

俺達の番が来た。

オレはワイトやスケルトン召喚しかできねえぞ？
どっちも骨じゃねえか。

まあ、悔しいが頼るか……。

オレは闘技場に入る。

討伐対象は……レッドワイバーン。

低級火竜らしいが、ワイバーンとかドラゴンは強いという事で有名らしい。

「オレが死に易くなる。」

「勝てない……」

「お前が頼みの綱なのに!？」

いきなり刹那が勝てないとか言い出した。

とりあえず昨日無理やりリアに叩き込まれた連続召喚でワイトを並べる。

オレってもう人間じゃなくなってきたる気がするw

10秒後。

ワイトは全て灰になりました。

やべえよ、こいつリアルにレウスじゃん。

刹那はこんな時に限って風で盾作ってるし。

オレ一人で倒せと。

まあ、無理だな……ってあ。

刹那は自分の使い魔、ペガサスを呼んでいたが、しかし攻撃しない。

攻撃しろよ!？

って使い魔呼んでいいの!？

まあいい。

これで勝機は出てきた。

「リア！」

オレはリアを呼んだ。

リアはすぐに現れた。

こんなときだから彼女が装着している漆黒の鎧が勇ましく見える。

「来てやったぞ、それでわらわになんのようだ？」

「あいつ消して」

うん、たった六文字であいつが消える。

リアは次元の狭間から槍を取り出しそして高く飛ぶ。

「くらえ、我が槍！」

「あれ、ヴァルキュリアって槍使ったっけ？」

神話の槍でヴァルキュリアが使う槍ってなかったような……。

リアは凄い力で槍を投げ……。

「ゲイ・ボルグ！」

「あんた北欧神話の半神でしょ！？ゲイ・ボルグはケルト神話だぞ！？しかも持ち主クー・フリーンだし！」

槍はワイバーンの頭を貫通し、彼の息の根を止めた。

「突っ込みどころ満載じゃん！」

「クー・フリーンから借りてきた。今返す。それと私の種族は初代ヴァルキュリアの子孫を総じて言っているだけで本人ではないぞ」
はーそうですか。

こうしてテストは合格に終わった。

リアの手によって。
が、しかし刹那の反感を買ってしまったらしい。

第2章第5話 vs 双子の片割れ 狂気のグロイ骸骨

オレがテストを終えて部屋に戻ると部屋の前に二人の少女がいた。両方似てはいるが雰囲気が全く違う。

右にいる方は腰まである長髪で、物凄い気迫が感じられる。

一方左にいる少女は髪が肩までしかなく、どことなく穏やかな感じだ。

そして両方背は低い。

「・・・誰だ？」

「あ、はい。私は桐野柚季きりのゆずきといいます」

「・・・桐野円きりのまどか」

どうやら双子のようだ。

「先輩凄いですね、ヴァルキュリアを従えてるなんて。どうやるんですか？」

柚季は目を輝かせながら訪ねてきた。

「あれか。あいつを従えるのは混沌カオスか召喚サモン属性の魔術師じゃないと無理だ」

「水属性アプア魔術師の私じゃ使えないってわけ？」

ちよつと怒り気味で円が大声を出した。

「しらねえよ。だいたいオレはこの学校にこの間転校してきたばかりだしよ」

「じゃあなんであんな高度な魔法使えるのよ！」

「・・・高度な魔法？」

「はあ？そんなのも分からないわけ？いいわ、教えてあげる。あなたが使った連続召喚のことよ」

ああ、あれか。
てか召喚した奴瞬時に消されたぞ？
あんなのも高度なのかよ。

「まあ、落ち付いて、円ちゃん。それで先輩。円ちゃんは先輩に連続召喚を教えてもらいたいそうです」

「だ、誰がこんな奴に・・・」

「っていつてもオレも練習中だしな・・・」

「それ以前に連続召喚は召喚属性魔術師しか使えない」
リアが口を出してきた。

「・・・いいよ・・・どうせ・・・どうせ私は、あんたみたいに特別じゃないんだから！」

そう言つて円は逃げ去った。

それを追いかけるよう、袖季も立ち去った。

・・・・・・あいつらなんだったんだ？

4月14日午後4時

オレはたった一週間で大量の召喚魔法を体得した。

ただ、オレはどうもアンデッドの魔物を召喚する傾向があるので、

他の精霊や魔物を召喚する場合にははるかの手を借りている。

そんなある日のこと。

体育館の角を曲がって寮に戻るとき。

超巨大なベヒーモスがいた。

これは獣系召喚獣のなかでもなかなか強い魔獣である。

「片瀬駿・・・私に召喚の素質があるってこと見せつけてあげるわ
！」

あ・・・あいつは一週間前の・・・誰だっけ？

まあいいか。

オレはスケルトンソルジャーを召喚した。

スケルトンソルジャーは、軽武装の骨兵。

ちなみにスケルトンはただの骨で、ワイトは骨にとりついた霊である。

スケルトンソルジャー×50vsベヒーモス

いや、勝てないっすね。

まず性能が段違い。

とりあえず軍団は激突。

レッドワイバーン程ではなかったが楽々と蹴散らされた。

「その程度なの？私にだってこのくらい「何勘違いしてるんだ？」

ここでオレは王様のセリフを奪った。

「まだオレの召喚は終了してないぜ！」

ちなみに狂戦士の魂はやりません。

オレは召喚を開放、そして……。

「出でよ、霊を束ねし不死王よ！」

人間にしては大きい骸骨が地面から這い出てきた。

「リッチー！」

骸布や宝石を纏った黒っぽい骸骨が立ち上がった。

そして、リッチーはベヒーモスに謎の黒い霧を纏わす。

数分後

霧が晴れて、そこにはベヒーモスの亡骸が横たわっていた。

流石、オレの新召喚獣！

「……どうして……どうして……私だって……私だって、特別な魔術師になりたかったのに！」
少女は涙目になって跪いた。

オレはこの間の少女の頭を撫でて言った。

「なら、今からなればいいんじゃないね？」

うん、我ながらいいな。

「円ちゃん、どこ行ってたの？」

あ、思い出した。こいつの名前、円だった……っけ？

第2章第6話 超サイヤ人・バカ二名 再臨！

4月30日午後5時

オレは校長室に呼び出された。

ひとつ言っておくが、悪いことはしてないぞ。

「片瀬です」

ノックしながら声をだす。

「どうぞ」

ん？

やたらと甲高い声だったが、気にすることはないな。

校長室に入ると小さな少女が座っていた。

え、これってまさか？

この展開ってこの少女が校長って奴？

「あの・・・校長先生ですか？」

「違うよー」

この少女は予想を裏切ってきました。

「あー、そいつ、俺の孫だ」

孫か・・・って、校長！？

なんで校長が！？

てか死んだんじゃなかったっけ？

「安心しろ、俺は魔法カード・死者蘇生を使った」
遊 王！？」

フェニックスの尾じゃなかったんかい！？」

てか、こいつ何歳だよ！？」

「ここには約二名、男が転入する」

「・・・でも何故オレに？」

「その男が、轟騎と錬磨だからだ」

.....
.....マジかよ.....

「後、この本をリアに渡すんだ」

オレは本を受け取った。

「・・・ゲータァか」

ソロモン72柱の悪魔

その中でもベリアルは有名だろう。

そして、最強。

ベリアルを召喚した暁には、大量の糧を伴うがそれ相応の力を手に
することができる。

糧が生贄ということからオレは一生召喚しないだろう。

召喚するとしてもサブノック……か。

5月1日午前0時

オレはゲーティアを開いた。

「ほう、ソロモンか。その召喚ならやろうと思えば普通の人間にもできる。無論、王などを召喚するのなら死を覚悟しなくてはな。

その点、召喚魔術師はその危険が通常の人間の9割がカットされる」
結構知ってたな……北欧神話の出なのに……。

ゲーティアを読み進めていくうちに、夜は明けていた。
もうこんな時間か……。

オレはベットに入ろうとすると大きな音がした。

外に出ると超巨大なライオンっぽいものが。

「・・・何だあれは・・・」

「マンティコアですね」

いや、ここにいる理由を聞きたい。

てかあいつから誰か逃げてんぞ？

オレは目を凝らしてよく見た。

「・・・・・・・・・・・・・・・
錬磨だあ・・・ははは
「

「仕方ねえ、助けるか」

オレはマンティコアに近づき、召喚魔法を唱える。

「ワイト・連続召喚！」

およそ50体のワイトがズラリと並んだ。
がしかし。

「こいつらほんつと使えねえ」

一瞬で消滅した。

戦う気あるのか？

だが次の手もある。

「屍を束ねし悪鬼の呪術師よ、今、我に力を与えん」

行くぜ、オレの新召喚獣！

「ゾンビ・マスター！」

ひとつ言っておくがゾンビ・マスター自体はゾンビじゃない。
一応悪魔の類だ。

「ゾンビ・マスター、ワイトを！」

ゾンビ・マスターはワイトの残骸に呪術をかけ、ひとつにまとめていく。

ゾンビ・マスターは呪術が終了すると、たちまち消え去っていったがまあいい。

役者は揃った。

オレの今出せる最強のしもべ、ワイト・キングを召喚できたのだから。

第2章第7話 疲れたので寝よう・・・そしてその先夢地獄

マンティコアとワイトキングは向き合い、攻撃のタイミングを見計らっている。

その間オレは仮眠をとっていたが。

「駿様、駿様。起きてください」

目が覚めるとワイトキングはどこかに消え、マンティコアも消滅していた。

「あ、はるか、おはよう」

オレは体を起こしてどうなったかはるかに聞いた。

「駿様の召喚獣がマンティコアを討伐したあと、たちまちきえてきました」

勝ったか。

「いやあ、オレのマンティコアが負けるとは」
・・・どっかで聞いたことのある声。

「轟騎か」

「待たせたな」

「待ってないから」

.....

それから約20分沈黙していた。

それから漸くして口を開いた轟騎が話し始めた。

「ある日オレは家の倉庫を漁ってた。錬磨とバドミントンをやるうとしてな。んで、変な書物を見つけた。何やら錬金術っぽいことができるようになる本で、試しにマンティコアを作ってみた。ああ、素材は錬磨の財力で何とかした。ちなみに錬磨も錬金術を使えてさ、なんか生物系の錬金術は俺が使って、金属系は錬磨が使える。まあ、そんなとこだ」

錬金術か・・・。

オレの召喚した召喚獣を合成できるかもな。

似たような魔法属性に融合があったけどたぶんそれはまた違っただろう。

5月2日午前9時

「錬磨、轟騎・・・貴様らと同じクラスとはな・・・まあ、クラス

一つしかないから仕方ないんだけどよ・・・」

「何だよ、離れたくないとか言っただけに」

「黙れ！」

「やっぱりこいつらしいわ。」

オレは授業中寝た。

それはいつものことだ。

だが、見た夢が・・・少し不思議な夢だった。

「駿・・・」

オレは誰かに呼ばれた。

どうやら寝ていたようだ・・・。

だが、そこはオレの知る世界ではなく、果てしなく荒廃した世界が広がっていた。

どこだ、ここ。

呼ばれたのに誰もいない。

ただどあの声は聞き覚えがある。

なんか、声の主にもう一度会いたい。

また、会いたい。

そんな声だった。

「駿様？」

オレの眼には光はなく、はるかが心配そうに顔を覗く。
それはそうだ。

このときオレは、ここにはいなかったから。
荒廃した世界にただひとり、魂だけが取り残されていた。

その世界では、二人しか存在しなかった。

愛しきあの人、千秋とオレ。

何故？

あいつは今、この島にはいない。
それにこんな世界を作り出す力もない。

夢から覚めればいい。

体内にパスが通っているリアに通信する。

「オレを起こしてくれ!!」

約2分後、オレは目覚めた。
リアの魔法で。

てか結構リアって便利だな。

第2章第8話 強敵！サイバー流魔砲少女！あと、運動会もあったな

5月3日午前4時

「駿様、よくぞご無事で」

オレがそう簡単に死ぬはずないぜ？

オレがベットから体を起こすとすぐそこにはるかが。

「うっ」

「ひゃう」

何が起きたかつて？

ありきたりな展開さ。

ズバリ、オレが目を閉じていた時にはるかが息がかかるほど近くまで顔を寄せていてそのまま……って展開。

「し、駿様……ああ……」

酷く動揺するはるか。

まだ眠いオレ。

「私のファーストキスが駿様なんて……」

ちなみにオレのファーストキスは5歳の頃、はやて姉に奪われたという悲しい過去がある。

全くもっていい迷惑だ。

「まあいい。それよりはるか、今日は授業はなかったよな？」

「はい。今日は休みです。」

それじゃ、遊ぶとするか。

「こんなところずっと魔術の練習だったからな。
たまには島をぐるっと回ってみるか。」

オレは最初に港に赴いた。

「駿くん」

「・・・この声は」

予想はできている。

オレの知り合いで駿くんと呼ぶ人はただひとり。
マイシスターのみ。

「駿くん、魔法の授業はどう？」

「・・・まあまあ・・・」

はやて姉はカバンから杖を取り出して、近くの岩に向ける。
にしてもこの杖、めちゃくちゃメカニカルな感じが・・・ま、まさか・・・。

「エターナルヴォリパーサイン
E・E・B!!!」

サイバー・エンド！？
てつきりS・L・Bが来ると思ったよ！？

「これ、できる？」
「できる？じゃねえよ！

次元が違うって。

近くの岩が消滅どころか、奥の船まで消滅させてるし……。

オレも対抗して召喚魔法を使う。

「ドラゴンゾンビー！」

召喚する度思う。

この世界の召喚獣って遊 王じゃね？
形は違うけどな。

「エヴォリッドサバグースト
E・R・B！！！」

キメラテック！？

はやて姉ってサイバー流継承者！？

ちなみに先の攻撃でドラゴンゾンビは消滅しました……跡形もな
く。

グオレンダア！がこなかっただけでも良しとしよう。

「・・・勝てない・・・。」

「私は世界最強の魔砲少女なんだよ」

確かに魔王よりは1歳若いけどさ・・・。

その歳で少女はないだろ。

ぎりぎり許せるかな・・・。

てか、今まで抹殺してた銃火器って魔砲だったんだ。

「まあ、何でもいいけどそろそろ運動会の時期じゃない？」

「だっけ？」

オレ授業寝てるからな。

ちなみにリア曰く、オレが他の魔術特性や使い方を習っても無駄らしい。

召喚師のスキルを持つものは他の魔法を使えないんだと。

それから幾日か過ぎ……。

5月14日午前8時

運動会当日

「運動会って何すんだ？」

やっぱり王道な50m走とかか？

「運動会といったら騎馬戦だろう」

まあ、それもあるが……って答えてるのが何故赤坂！？
てか話し方に特徴ある奴少ないよな、この小説。

で、始まった騎馬戦。

「轟騎失格か……」

そりゃそうだ。

ルールは簡単。本当に騎馬戦をするのだ。

馬に乗って・・・ドラゴンの討伐。

あの・・・次元違いますよ？

いつの時代ですか？

今は平成何年？

てかここ日本！？

そもそも馬に乗れねえし！

ちなみに、魔法は

使用禁止。

これでどうやって勝てと？

使用武器もなし。

まさに勝ち目無し。

てかりアルに轟騎が血を流して死んでる！？

錬磨は無事みたいだが。

「悪霊退散！悪霊退散！」

錬磨、念じても無駄だ。

「ドーマンセーマン！ドーマンセーマン！
レッツゴー陰陽師だった……。」

この状況でよく歌えるな。

ちなみに錬磨は歌い終わった瞬間、焼かれました。

<校内放送>

死にかけた人、もしくは死んだ人は保健室まで！

秘薬、エリクサーまたはフェニックスの尾、世界樹の葉を投与します。

ちなみにFから始まるRPGに出てくるエリクサーと、Tから始まるRPGに出てくるエリクシールは、語源が同じである。ということをおく。

第2章第9話 轟騎の部屋は禁忌の巣窟！？

午後1時

ここの理事長は何考えてんだか……
・理事長って、あのクソババアじゃねえか!!
魔法も使えない癖によ!

まあ、何とか暴走したドラゴンをどっかの超サイヤ人が消したけど、被害は絶大。

よって、運動会は中止。

てか、何したかったんだ、運動会って。

オレは昼飯を食いながら未だに炎の海のグラウンドを眺めた。
教育委員会に訴えたらたぶん裁判に勝てるな。

ボヤつとしていると刹那にいきなり話しかけられた。

「片瀬、お前の召喚は死霊ばかり呼び出すが、死霊使い（ネクロマンサー）なのか？」

あれはたまたま。

本当ならドラゴンとか召喚してえよ……。

骸骨なんかより。

「好きで奴らを召喚してるわけじゃねえよ」
「やはりな、お前にはこれがあるようだな」
そう言っただけ何かを取り出し、オレに渡した。
綺麗なペンダントだ。

「精霊の首飾りだ。それをつけたものは精霊の加護を受けることができる、召喚が使えるものは精霊を呼び出すことも可能」
マジか!?
レアアイテムじゃねえか!
タダでくれちゃっていいのかよ?

「ホントにいいのか、こんなレアアイテムを」
「それなら普通に売ってるぞ、魔道雑貨店で」
売ってんのかよ!?
「ちなみに日本円で約3800円だ」
安っ!?
不良品じゃねえよな!?

「大抵の人は使えないし、作るのも簡単らしいし」
まあ、折角くれたんだから後で使ってみるか。

午後5時

オレは刹那にもらった首飾りを見た。
よく見ると、紙が一枚挟まっていた。
広げてみると・・・。

精霊の首飾り

防御力44

レベル1

火耐性0

水耐性0

雷耐性0

龍耐性0

氷耐性0

スキルポイント

加護+10

.....モンハンかよ!?

三眼の首飾り!?

新種じゃんw

つてか、召喚に使えないだろ!

まあ、着けるだけ着けるか。

精霊の加護がついてて悪いことはないし。

「なんか瞬時に暇になった」
本日の楽しみが瞬時に消えたオレは轟騎と錬磨の部屋に遊びに行くことにした。

「ここどこだよ」

そこは、まるで別世界だった。

「おお、駿！」

轟騎が歓喜の声を上げるが、オレには届かない。

もはやそこは・・・魔物の巣窟だったからな。

なんか得体のしれない生き物が大量に生息。

首が7つあるカラスとか、羽根の生えた猫とか、二足歩行のサソリとか、どう考えても合成された生命体が轟騎の部屋にたくさん置かれたケージに入っていた。

その中でも一番気持ち悪かったのが、

「何合成した、これ」

「頭に犬、足はゾウ、翼はクシャル・ダラ、尻尾は蛇、胴体は人

間だ」

な、なんかこの世に存在しない生き物が入ってるぞ!?

てか胴体に人間使ってるのかよ!?

止めるよ、どこかの死体掻き集めて合成したけど最終的に自分も合成してゾンビに消されたマッドサイエンティストじゃねえかよ!?
気持ち悪いし。

この瞬間、オレは決意した。

もう二度と轟騎の部屋には何が起こっても入らないことを。

第2章第10話 轟騎プレゼンツ・季節外れの肝試し大会！

5月22日午後10時

今日は授業を寝ていて、寝過ぎて遅くなったので、まだ寮内を歩いている。

もう窓の外は真っ暗だ。

でも、都会と違って星が見える。

オレは星をしばらく眺めていた。

すると・・・

「片瀬先輩！」

振り向くと懐かしの・・・柚季と、・・・なんだっけ？

名前忘れた・・・。

が、いた。

「先輩、談話室に行きませんか？」

「寮内に談話室があるんだ・・・はい、ホグワーツじゃねえか！」

そう言えば修学旅行はロンドンだったな・・・まさか、ホグワーツに行くとかないよな・・・。

てか前の学校で修学旅行行ったし。

で、場所は変わり談話室。

「よし、揃ったな」

何故か轟騎がいた。

それどころかこの学校の知り合い全員まで。

メンツは

オレ

轟騎

錬磨

はるか

刹那

柚季

円

「じゃあ、小野崎轟騎プレゼンツ・肝試し大会をやるぞ!!」

時期が違っぞ!?

夏にやれよ!?

「ルールは簡単。この魔法封印のタリスマンを着けて、学校の裏の墓場を通り、学校が封印した悪魔や幽霊がいるく封印の屋敷の中

にある紙を1枚ずつとってくる。ちなみにこれは校長公認だから、
普段立ち入り禁止の<封印の屋敷>にも進入可能だ」

どうでもいい許可取ってんじゃねえよ。

てか校長は肝試しだけでOKしたのかよ!?

あの校長終わってるし。

「まずはくじ引きだな、誰か一人は一人になるぞ」

そうしてみんな一斉にくじを引き抜いた。

オレ	1
轟騎	4
錬磨	3
はるか	2
袖季	1
円	3
刹那	2

自ら提案した轟騎が一人だ!

ざまあみやがれ!

そして、順番はこうなった。

- 1 オレ・柚季
- 2 錬磨・円
- 3 はるか・刹那
- 4 轟騎

最初かよ……。

「夜って目が利かないよな」
夜は好きだけどな、静かで。

「先輩、怖いですか？」
柚季が和やかな顔で微笑んでくる。
やべっ、かわいい。
ちやつかり手を繋いじゃってるし。

オレ達はこのまま先に進んだ。

< 駿視点 >

読者様、不快なものを見せてすいませんでした。

で、あれから大分経って墓場の真ん中くらいか。
墓場って長いな。

入ってから20分は経つぞ。

まあ、ゆっくり歩いてるせいもあるだろうけど。

「先輩・・・ちよつといいですか？」

「なに？」

突然袖季に話しかけられたので、少し動揺したがすぐに返答。

「先輩って・・・はるかさんと・・・できてないですよね・・・」

.....
.....

第2章第11話 潜入！恐怖の封印の館！やってる本人はマジ怖い

<轟騎視点>

非常に怖いです。

轟騎です。

現在、俺一人で墓場の入口に突っ立ってます。

仲間はいません。

みんな俺を置いていきました。

マジ怖いです。

二人なら怖くはなかった。

だけど一人って……。

くじ作ったのは俺だし、企画したのは俺だけど……。

なんのために企画したんだろう。

いつまでも愚痴言っても始まらないや。

もう行こう……。

<はるか視点>

あの……刹那さんと一緒だと間が持たないんですが。

別に、魔法を封じられても私は昔からあらゆる体術や、呪術を身に
着けてきたので怖くはないんですが。

今は、刹那さんが怖いです。
無表情で黙々と……まあ、武士とか騎士に必要な念を捨てること
なんでしょうが……。

ここに入ってから軽く30分は経ちましたが、今だ幽霊どころか障
害すら見当たりません。

本当に、轟騎さんは何がしたいんでしょうね……。

< 駿視点 >

ようやく回ってきた。

オレはと袖季は轟騎の言ってた……封印のなんとか？だっけ？に
ようやく到着……。袖季に脅えながらな。

「先輩、何か失礼なこと考えませんでした？」

「……い、いや、何も……」

「ならいいですけど」

この状況でおびえないのが不可能だ。

つてか着くまで1時間近くかかるってどういうことだよ？

あー腹減った。

後で轟騎を殴ってやる。

それとも・・・骨地獄がいいかな？

そんなことを考えながらオレたちは館に足を踏み入れた。
玄関から最初に入った部屋はホール。

見事に真っ暗、そして壁に立てかけられた銀の甲冑。

これはなんかしたら襲い掛かってくるってパターンだな・・・。
ホールには合計10体。銀の甲冑だけが不気味に輝いている。
なんていうか・・・銀の甲冑が光を放っているようだ。

オレは一通り散策した後、袖季に安全を告げた。

「袖季、一応今は安全だ」

・・・袖季がいない。

マジかよ・・・。

ホール以外にいく訳ないだろう。

マジでどこ行ったんだ・・・。

ホールにある沢山の扉の内、オレは右はじの小さな部屋に手をかけた。

「・・・あーなんか怖いな・・・」

オレは覚悟を決め、扉を開ける！

「鍵閉まってるじゃん！」

見事に開けることはできなかった。

オレはひとつ隣のドアに手をかける。

「今度こそ・・・」

オレは扉を開けた・・・。

「ちょw」

そこには無数の骨が積まれていた。

・・・生贄かなんか？

なんかここには悪魔だとかが封印されてるらしいし。

オレは何も言わずに閉じた。

下の階の扉、ようやく半分。
右から三つ目の扉に手をかける。

「ここは・・・人形がたくさんある」

もしかして呪いの人形とか？

背筋がゾツとしてきた・・・。

やべえよ・・・。

なんか尋常じゃないほど髪が長い日本人形とか、目がありえない方向に逝ってる西洋人形とか・・・。

絶対呪いの人形封印ルームだな。

そして怖いのでオレは扉を閉じた。

次は左から三つ目。右から四つ目の部屋。
分かってるだろうが、下の階には小部屋が6つある。

「マジでもう止めてよな」

扉を開けると、そこには何もなかった。

いや、何も無いんですかい。

なんか結構普通だな。

「この状況は一種の罠で、部屋から出たとたん甲冑が襲ってきたりして・・・」

ってか、轟騎の言ってた紙ってどこだろ？

部屋を出ても甲冑は動いていなかった。
動く気配すら感じられなかった。

左から二つ目の部屋に入る。

「柚季!!」

柚季がぐたつと倒れていた。

別に外傷も見られないし、息もしている。

「寝てるだけじゃん」

はあ、とりあえずよかった・・・。

オレは柚季を抱き寄せるとその温かさを感じた。

30分程人の温もりを感じてなかったからな。

オレはそのまま目を閉じる。

もう今日が終わりそうな時刻だからな。

オレも・・・眠い。

丁度いいことにそこにはベッドが置いてあったので、オレは柚季を

抱えたままベツトに潜り込み、寝た。

第2章第12話 袖季の暴走！！迎え撃つのは・・・錬磨かよ・・・。

5月23日午前5時

オレは目を覚ました。

少しずつ目を開けていくと、袖季が目に入った。

「先輩つて、結構大胆なんですネ・・・」

「・・・は？」

オレは目をパツチリ開けて、現在の状況を確認する。

・・・オレは何をやってるんだ？

袖季を両手でガツチリとホールドして。

・・・。

・・・。

・・・。

なにやってんだよオレ！！

そしてオレはとっさに両手を離す。

「先輩・・・何なら私を求めてもいいんですよ」

袖季・・・いつからそんなキャラになった・・・。

しかもなんか脱ぎ始めたし！？

待て、そこまでにしるつて、ヤバいつて、これ以上進めたらこの小説18禁行きだつて！

「何やってんの！？」

ドアの方を見ると、円が顔を真っ赤にしながら立っていた。

ナイスタイミング！

あ、今回はあいつの名前を覚えてたぞ。

「先輩と私の邪魔をするのは・・・いくら円ちゃんでも許さないよ」

怖いって。

邪魔って、そっちが勝手に！

「片瀬とはくつついちゃダメなの！」

いやあ、見事なヤンデレとツンデレの共演。

「駿、探したぞ。お前何時間もたつても帰ってこな……うほっ、

これは目の保養に……」

錬磨、柚季の半裸みて何興奮してんだよ！

「駿、お前そんなヤ」黙れ！」

勘違いとは恐ろしいものですな。

さてと、錬磨はどうやって散らしましょうか。

そのとき、後ろから爆発音が聞こえた。

「何!？」

オレが振り向くと、柚季が髪を逆立てながら円を爆撃していた。
なんかレベル高いよ!？」

「片瀬！逃げて！今柚季は手に負えない状況だからっ！」

「ありがとう！助かった！」

何で錬磨が返事してんだよ。

「オレが止める。円は下がってる」

暴走した柚季にオレは語りかける。

「もう止める、建物が壊れるし円やオレが怪我をしたら大変じゃないか！」

「俺の心配もしてよ」

「黙れ」

錬磨はシヨッキングな映像を見たような顔をして2、3歩後ろに下がった。

「お前がそこまで言う奴だったとはな・・・」
「なんか言い始めたよ？」

「仕方無い・・・俺の研究の成果を見せてやるっ！」

「そうですか、錬磨のお手並み拝見と行くか。」

「ところで、駿」

「なんだ？」

「召喚獣を召喚してくれないか？」

「・・・こいつゴミだ。」

オレは渋々、召喚を行った。

今回の召喚獣は錬磨の指示に従った。

「なんだよこの、^{フレイム}F・レオンって？」

「とりあえず召喚手順さえわかれば召喚は行える。」

オレは、はるかが炎の力を蓄えた指輪を装着。

これで火の召喚獣も召喚できる。

で、出てきたのが・・・燃え盛る獅子なんですよ。

なんか体のそとにコアっぽいのが飛び出てるし。

「それが鍵なんだよ」

人の心覗くな。

何が鍵だ。

「行くぞ、コア・フュージョン C・F!!」

錬磨のペンダントと、F・レオンのコアが輝きはじめた。
で、二人は光に包まれていく。

「これが俺の研究成果、C・Fだ」

まあ、言いたいことは・・・あなたはネオスになったんですね？

錬磨は炎の鎧を纏っている。

てか、燃えてる。

錬磨は袖季の半裸を見て萌えてる。

ああ、これからまた他に5種類ほど召喚させられ、いずれはトリプル的なのもやるんだろうな・・・。

「俺を甘く見るなよ」

錬磨は袖季に近づき、胸倉を掴んで上に釣り上げた。
普通につええわ。

というわけで、オレは

第2章第13話 特殊クエスト・小野崎轟騎を閉じ込める！！

円から受ける視線が痛い……。

今、オレは袖季をおぶって帰路についているのだが……。

「片瀬、疲れた、私もおぶって」

なんか言いだしたよこの人。

「もう背負えない」

「俺ならいつでも」お断りします」

いつも思うけど敬語で、更に真顔で断られると傷つくよな。
錬磨泣いちゃったよ。

そうこうしているうちに轟騎のところについた。

轟騎は遅かったな的なことを言っておいて迎えてくれた。

「轟騎は怖くて墓場にすら入らなかつたらしいぞ」

刹那は言う。

轟騎ねえ……。

「刹那、轟騎以外に今から言うことを回せ。え〜と……。」

「それは流石にかわいそうだと思うが」

「気にするな」

では、作戦決行！

同日午後11時

オレは轟騎を睡眠薬で眠らせ、刹那の瞬間移動魔法で封印の館のベツトの部屋に轟騎を飛ばした。
更にはるかが封印呪文をかけて、外からも中からも出入不可にした。

「轟騎、これくらいの報いはつけるんだな!!」

そして、リアはワープができるので、轟騎を起こしてもらった。
完璧。

これから10時間閉じ込める。

<轟騎視点>

「起きろ、我が主が貴様を起こせと言っている。わらわが貴様を起

こしてやるんだから光栄に思え」

俺は目を覚ました。

「あ、駿の・・・」

その瞬間、駿の使い魔は姿を消した。

てかここどこ？

なんか、エツチな香りがするし。

まあ、いいか。

俺は外に出た。

なんか暗いな・・・。

銀色の甲冑が並んでる。

「・・・もしかして、ここって・・・封印の館？」

でも何でさっきの部屋からあんな香りがしたんだ？

あ、もしかして。

「駿の奴！袖季ちゃんか円ちゃん、もしくは二人とエツチなことし

たな！うらやましすぎる！」

ちなみに、錬磨はイケメンだけどオタクだからありえない。

てか駿もイケメンだし。

それにあの二人は駿を特別視していた気がする。

そんなこといってないで早く出よう！

玄関までたどり着くと、オレは扉に手をかけた。

「む、封印魔法か」

扉は開かなかった。

しかたねえな、窓を探すか。

俺はその後も窓を探したが、開かない。
全部封印されてるか。

まあ、どうせ駿たちの仕業だろ。

朝まで待てば開くだろう。

さ、さっきの部屋に戻るか。

そこで気付いた。

俺ってどこの部屋から来たっけ？

まあ、いいや。適当な部屋で休もう。

「なっ！この部屋は！」

そこには無数の人形が広がっていた。

こんだけあれば、錬磨がほしかったローゼンメ
デンがひとつく
らいあるかもな。

お土産に持っていこうか。

俺はそつと扉を閉じて、人形を漁りはじめた。

十分後

「見つからない上に、なんか無数の視線が俺に突き刺さるんだがw」
絶対呪いの人形だろ。

俺は外に出ようとした。

「・・・あ、あかない」

俺は鋭い視線に精神的に追い詰められていく・・・。

仕方無い。

俺は人形を三つくらい錬金術で合成させた。

ドール・キメラの完成！

ちなみにGXにもそんなモンスターが出てきたけど気持ち悪かった
ので俺はその回を見るのを途中でやめた。

意志は持たないが、指示には従うので、扉を破壊させた。

勿論、気持ちが悪いので破壊させた後は自らの手でドール・キメラ
を破壊した。

5時間後

なんとかベットの部屋に戻ってきたんだけど……。

「怖さとエツチな香りで眠れない……」

もう本当に駿が恨めしい……。

ああ、恨めしい……。

俺の息子が極限まで巨大化してるよ……。

「そんなこと言い続けたらこの小説18禁になっちゃう……まだやってる模写がないからギリギリセーフか……他の小説であんな単語やこんな単語は結構飛び交ってるし」
本当に駿が恨めしい。

「あー、駿め！」

「オレがどうした？」

なんか扉の外に駿がいた。

「文句でもあるか？オレは昨日この部屋で爆撃されて死にそうになつたんだよ！」

ヤバイ、駿がマジで怒ってる……。

喧嘩なら勝てるけど魔術では圧倒的に不利。

「……よせ」

「死ね轟騎！！！！」

俺はその夜、天に昇っていきました。

< 駿視点 >

「轟騎め……」

オレは轟騎を粉碎した後、仕方ないので

「永続罨・リビングゲデッドの呼び声」

「片瀬、それ禁止カード（2008年3月改訂）だよ」

ああ、そうだったな。

てか、円って遊 王知ってたんだ。

第2章第14話 体育授業・バスケの罠

6月1日午前5時

「・・・なんでオレこんな時間に起きたんだ？」

今日から6月。

前回の季節はずれの肝試しから大分時間が経った。

いつも遅刻しないようにはるかが7時くらいに起こしてくれる。

本当にいいメイドを持ったものだ。

いつも、はるかは6時半に起きているらしいので今は寝ている。

「たまにはオレが起こしてやるか・・・迷惑がてらな」

いつもより1時間半早く起きたら優等生なはるかも授業で寝るかな？

検証してみた。

「はるか！何寝てるんだ！もう8時過ぎてるぞ！」

・・・ぴくりとも動かねえ・・・。

こいつの体は正確に6時半が分かるのか？

オレはじつとはるかをみる。

結構可愛い顔してるじゃねえか。

パツと見でも可愛いけどよ。

よく見るとさらに可愛い。

「起きろ〜」

オレは頬をつねりながら言ってみた。

やはり動かない。

「仕方無いな、奥の手を使うか」

オレはやると決めたことは意地でもやる。

絶対にはるかを起こしてやる！

オレははるかかの鼻をつまみ、口を手で塞いだ。

これで30秒以内に苦しがるだろう。

が、はるかはおれの予想を裏切った。

なんと、この状態で30分も微動だしなかったのだ。

「・・・殺しちゃったかな」

胸に手を当てると・・・。

「心臓が動いてない・・・」

おれはまずいと思って、心臓マッサージと人工呼吸を始めた。

が、しかし。

何故、胸を押す度エロい喘ぎ声が聞こえるのでしょうか。

なのに心臓は動いてない。

更に、人口呼吸する度舌を絡めてくるんだが。

ぜってえ生きてる。

もういいや、死んでも保健室にフェニックスの尾あるし。

おれは心臓マッサージと人工呼吸を止めた。

すると、心なしかはるか顔が少し残念そうな表情になった。

ちなみにはるか6時半になった瞬間目を覚ました。

同日午前9時

「授業が始まるぞ」

と、轟騎。

「だからどうした」

と、オレ。

「今日の1時間目は、体育だぜ！」

ああ、体育ね。

轟騎は運動好きだからな。

錬磨は嫌そうな顔してるけど。

あいつ運動苦手だしな。

ちなみに今日の体育はバスケットだ。

「バスケットだぜ！」

まあ、轟騎は大会で最優良選手に選ばれるくらい上手いな。しかも中1の時、先輩どもを差し置いて。

そのときオレは剣道の大会で相手を徹底的に叩き潰しまくってたけど。

ちゃんとマナーは守ったぞ？

そう言えばその時に当時バスケット部2、3年が轟騎に喧嘩吹っ掛けてきたな。

オレたちは理不尽なことは大嫌いだから普通にボコボコにしたっけな。

更に、撃退後に仲間連れてきたから錬磨と三人で集団を抹殺。

全員、電車脱線事故で死んだことにしておいた。

はやて姉の権力で……。

それからオレたちに反抗してきた奴らは一人残らず抹殺されている。はやて姉の手によって……。

「さあ、やるぞー！」

「はいはい」

轟騎を中心にチームが決まっていく。

で、チームは。

オレ・轟騎・錬磨vs女子全員(約30名)

体力に差はあれど、これはきつくないっすか？

しかもあつちには刹那とかはるかみたいなのいるんだぞ？

しかも錬磨は運動苦手だし、オレは小さい頃から轟騎とやってたからいくらかできるものの上手いとは言い切れない。

「勝率は？」

「100%だな」

「どんだけ自信あんだよ！」

「お前一人でやれよ。」

第2章第14話 体育授業・バスケの畏（後書き）

前回もですけど1日遅れました。

楽しみにしていた人、本当に申し訳ありませんでした！

第2章第15話 オレはこの学校が非常にやる気のない学校だと改めて知った。

試合が始まった。

男VS女

単純な身体的能力差はあれど、やはり3人は不利。

そりゃあもう、圧倒的にな。

単純に陣形などで穴があいてくる。

2人足りないんだからな。

が、しかし。

轟騎は常識を覆した。

以前、轟騎のバスケットを見たことがあったが、その比じゃない。

あいつはたった1人で5人の少女を圧倒している。

何が言いたいかって？

ありえないってことだよ。

NBA選手もびつくりの動きだ。

中1のときはNBA選手1人分くらいの強さだったのに……人って変わるんだな。

で、オレ達は何してるかって？

錬磨とカードゲームをやっている。

暇だからな……。

ちなみに現在、お互い手札、フィールドにカードはない。

「天魔神の力を見たか！」

そしてオレは効果でデッキから1枚ドロー。

デッキの1番上は操作しておいたからこれでオレの勝ちだ。

「オレが引いたカードは、次元融合！」

ーズ、スカリバー、ガー、パー、アスを特殊召喚！

特殊召喚したモンスターの攻撃力の合計は8700。

「……負けた……って、次元融合禁止カードだろ！？」

「大丈夫、作者がこの話書いた時はまだ制限カードだったから。まあどのみち終わりだ。墓地に馬頭鬼3枚と絶望3枚あるから」

ちなみに錬磨はデッキを組むのが非常に下手である。

ここにきて思ったんだが、この小説遊 王のファンフィクションになりかけてないっすか？

「さて、今あいつはどうなってるかな？
轟騎を見る。」

視線の先にはとんでもないものが。

「轟騎の奴、何であんなに・・・」

「いいなあ、俺も・・・」

錬磨キモいな。

このマゾ野郎。

轟騎がタコ殴りされている状況をうらやましそうに見てる・・・。
でも何で殴られてるんだ？

状況が飲み込めないので体育館の端で座っていたはるかに聞いてみた。

「はるか、何で轟騎はボコられてるんだ？」

「刹那さんの胸を触ったんですよ・・・流石の私でもそれは怒りません。でも駿様には絶対服従ですので、触りたいのならいつでも」

や、いいよ・・・オレはそんなに興味ないから」

なんか最近はるかのキャラが崩壊してきてるような・・・。
それに轟騎のはたぶん事故だと思っぞ？

やがて午前中の授業が終わり、現在は昼食。

ちなみに午前中ずっと体育だったという罷付きだ。

理由は、轟騎がバスケをやったかつたらしいので、オレが以前潰した夢魔を再召喚して全員寝かせたから。

まあ、悪鬼の類は一回潰せば言うことを何でも聞くからな。

で、今オレは体育倉庫で昼食を食べている。

なんで体育倉庫で食べてるかって？

女子ばかりの教室じゃ気まずいし、錬磨と食ってもオタクな話をされるし、轟騎と食ってもあいつは食事中しゃべらないからつまらない。

だからオレは転入した日からずっと体育倉庫で食っている。

真つ暗だし、誰もいないし、まあ、静かでもいいところだ。

食べることはあまり好きではないからオレははるかに作ってもらった弁当を3分で食べ終え、体育倉庫から立ち去った。

同日午後3時

まあ、今やってることはHRだ。
で、担任の話。

「ここでは、日本の日付・時間を使っていますが、実はここは赤道の近くにあるんですよ」

・・・おい!?

「ってことで、暑いから明日から夏休みですので、帰省する人は気をつけて」

いきなり!?

「秋にまた会いましょう!」

夏中夏休みかよ!?

第2章第16話 どうして周りのオタクどもは再会を邪魔するのだろうか。

6月6日午前9時

準備まで時間があつたが、現在飛行機の中である。

実家はあの島にあるため帰省ではないが、千秋に会いに行くためだ。オレはこの日をどれだけ待ち望んだことか……。だが、ひとつ誤算があつた。

「何故お前らがいる」

「俺は普通に自宅に帰る」

まあ、轟騎はいいとして。

「俺も実家にk「お前の実家はこっちじゃないだろう」

そう、錬磨はここではなく、有名財閥の子息だからこっちが実家ではない。

「俺もお前たちと遊びたかつたんだ」黙れ、オレはお前に構う暇なんてない」

厳しい一言を浴びせたことで錬磨は数歩下がり、「俺を敵に回したことを公開するんだな!!」

とか言っていた。

しかも後悔の字が違うし。

「空港についた時点でオレはお前らとは別行動だ!」

オレは錬磨たちに怒鳴った。

「お客様、機内ではお静かに」

「……すいません」

……錬磨め……なに大笑いしてやがるんだ。

後で消す……。

やっと着いた……。

長かった……。

非常に長かった……。

あいつらのお守（主に錬磨）は非常に大変だった……。
空港で千秋が待つてる筈だ。

少し歩いたところで、千秋を見つけた。

「おい、千秋！」

あれ、反応がない。

オレはそばまで行って肩を叩いた。

「おい、千秋。呼んだらろって……あ、人違いでした」
……何やってんだオレ……。

確かに体系も服装も髪型も似てて美人だったけど彼女間違える彼氏
ってどうよ？

死にてええええええええええ……。

オレは少し離れたところで、千秋を見つけた。
爽やかな笑顔で手を振ってる。
やべえ、かわいい。

オレも手を振ると、千秋が小走りでやってきた。

「ただいま、千秋」

「おかえりなさい、駿」

「これからどこに行こうか」

「どうします?」

こんなときに限って行き先が決まらないのはまあまあ決まりである。

「とりあえず、散歩でもしようか?」

で、現在。オレたちは並んで歩いている。

勿論手を繋いでな！

それが原因なのか今、鋭い視線を感じるんだが・・・。

確かに千秋は容姿端麗（てかもはや女神）だし、成績優秀（大学を卒業できる知能）だし、超絶金持ち（日本を二分する財閥のひとりの娘）だし・・・。

一方オレは、容姿は標準以上？（柚季曰くイケメンだが、自分では普通だと思っている）、成績微妙、金はそれなり。

だが、オレは恋愛で最も大事なことは身分でなく愛だと思っている。さあ、文句がある奴はかかってこい！

って思ったそばからなんか来たよ・・・。

あ、あいつは確か潰したはずの千秋ファンクラブ部員！？

・・・殺すか

召喚魔法・骸刀

説明しよう。この魔法は、武器になれるモンスター・骸刀を召喚して、現代日本の剣聖・片瀬駿様が使いこなしてやるのだ。

骨だらけのグロテスクな刀が召喚された。

手にシツクリくるな。

「さあ、消そうか！」

「ままままま、まってくれいよ・・・」

なんか変なしやべり方。

「くれないよ」はねえだろ？

「おらはちあき」お前ごときが千秋の名を発するんじゃないやねええええええ！！！！穢れるわ！！！！」

オレは斬り終えた後、

抹殺の使徒を発動。

はやて姉が辻褄合わせをして、遺体も処分した。

オレが斬った時はまだ生きてたんだけどな。

みねうちだから死ぬはずない。

だけど、はやて姉がオレと千秋を穢すものは誰一人逃がさないのなことを言いながら、抹殺した。

ちなみに千秋の椎名財閥ではこんなことは日常茶飯事らしいので、

千秋は別に平気だったらしい。

第2章第16話 どうして周りのオタクどもは再会を邪魔するのだろうか。(後

先日のお詫びとして本日は2話投稿しました。

第2章第17話 本日は一条錬磨が駿と千秋の1日をお送りします

6月9日午後4時

現在、駿たちは映画館にいる。

あ、本日は錬磨がお送りします。

ちなみに6月9日は俺の誕生日だ。

ここ三日、奴らの動きを見ていたがいちゃいちゃしすぎだっとな。

もう、膝枕とか羨ましすぎる・・・。

つてことで、本日はゲストを呼んでおります！

「あれが、先輩の彼女・・・殺す」

まあ、お察しの通り柚季ちゃんと、

「か、片瀬に彼女がいたつてべ、別に私には関係ないもん」

ひとりで念仏のように言い聞かせるのはやはり円ちゃん。

それと、

「駿様の妻になる方は私の主人同然ですよ」

はるかさんは別に文句も何もないようです。

あ、移動した。

「みんな、移動したぞ！」

俺達は駿を追って行った。

勿論、ばれないように・・・。

同日午後6時

「ここは・・・」

「椎名財閥総本山ではないですか・・・なぜ駿様がここに？」

「ああ、千秋は椎名財閥のひとり娘なんだ」

「ありがとうございます、駿様「ってなんで駿!？」

突如、駿が現れた。

ケータイの人は下のステータスが見にくいです。HPとMPは名前と同じ位置です。

錬磨	はるか	柚季	円
HP 80	HP 670	HP 520	HP 880
MP 25	MP 450	MP 600	MP 280

俺弱っ!?

みんな三桁なのに何故にオレだけ二桁!?
しかも体得している魔法なしかよ!?

< 駿視点 >

なんで錬磨が・・・まあ近々来ることは予想していたが・・・。
恐らく殆どの動向を見られていただろうな。

まあ、総本山に入ってしまったえばこっちのものだ。

まあ、夏休みは後1月半以上あるんだ。ゆっくりしよう。

ここに来たのは、成り行きで夕食を千秋の家で食べていくことにな
ったからだ。

「駿、ご飯ができましたわ」

「これ、千秋が？」

「そうですね・・・お口に合えばよろしいんですけど」

そう言えば、千秋の料理って食ったことなかったな・・・。

お嬢様だけど、千秋ならオールパーフェクトな人間だから料理も上

手いだろう。

「じゃあ、いただくよ」

思ったより家庭的な料理にオレは心を躍らせる。
そつと箸を料理に伸ばす……。

こ、これは……。

「ど、どうですか……？」

「あー、ひとつ言っただいいか？」

千秋は心配そうな顔をする。

「これはなんだ！」

「ひゃい！不味かったですか？ごめんなひゃい……」

千秋は相当驚いたのか、呂律が回っていない。

千秋は残念そうに料理に手を伸ばした。

「いや、この上手さはなんだ……ってことだよ。とってもおいしい。神だよ、この料理」

これを聞いた瞬間、千秋はホツとしながら涙を流した。

「……駿は意地悪ですね」
かわいいな。

「ごめんな、心配させちゃって」
オレはそつと抱きしめた。

同日午後9時

ここまで来たら泊まるっきゃないっしょ！
それにオレは今日、男になる！

まあ、分かる奴は分かるだろうが・・・。

で、現在。

千秋とオレはベッドの中。

もう、何するか分かったっしょ？

さあ、こっからは大人の時間だ。

ロリコンのお兄さんごめん！

オレはこの中学生の女の子をおs（自重

ここからは、対象年齢18歳以上。

ノクターンにこの部分掲載する時が来るかもよ？

子供は黙って見過ごしなさい。

6月10日午前10時

「あ、あれ？」

起きたら千秋がいなかった。

執事的な人に聞いたら、

「お嬢様なら学校に行かれましたよ」

と言っていた。

学校は転校したらしく、お嬢様学校で学校生活を謳歌しているらしい。

ちなみに千秋はオレが小学校6年生の時既にアメリカの大学を卒業していたが、オレに会いたいばかりに無理言って入学したらしい。

なんで未だに通い続けているかというところ、現在は不当な教師を発見次第処罰する検査委員的な職務に就いているかららしい。

執事的な人曰く、オレの学校に入学した時の手口もこの検査委員を利用してそうだ。

第2章第17話 本日は一条錬磨が駿と千秋の1日をお送りします(後書き)

最近落ちてきていますw

第2章第18話 ヤクザなお方とカードゲーム

「あゝ、どうやって暇潰すか」

千秋のいない一日は非常に退屈である。

オレは徒歩で街を歩いて行く。

そんな中、ひとつの店を見つけた。

「・・・デザートイーグル」

って店だ。

この店の店長は銃が好きなんだろうね。

モデルガンとかには興味はなかったが、ちゃんとした銃には興味がある。

海外でもいったときに撃ってみるか。

オレはこの店に入って行った。

中にはガラの悪い大人が沢山いた。
ってか、ヤクザがいた。

「おお、あんちゃん。ここに入ってくるとは、いい度胸してんじやねえか」

見渡す限り、本当に銃を売っているようだ。

そりゃ、ヤクザが集まるわな。

「で、お前……」

「はい？」

一応オレは敬語で答える。

目上の人には敬語を使うことを心がけている。

「カードゲームやってるか？」

「はい!？」

話を聞くと、今日はヤクザがここでカードの大会を開いているそうだ。

ちなみに優勝賞品は、先日ここに入荷されたアメリカ製の最新型の銃らしい。

オレは銃には詳しくはないので名前はしらん。

で、トーナメント方式で、何故かオレも参加することになった。

第一回戦

カードゲームは、いつもオレと錬磨がやっていたカードゲームだ。
「先攻はオレがもらいますよ」
オレは1ターンキルが大好きなので、
デッキは、【ファンカスノーレ】
あっさり決着がついた。

第二回戦

デッキは変えていらしいので、今度は【ダムドビート】
ヤクザの人はやはり瞬殺された。
ダムドつええわ。

このペースでオレは優勝した。
優勝賞品の銃を受け取ることができたが、持ってたら銃刀法違反だ
る。
というわけで、オレは賞品を返上した。
代わりに、50万もらったので、いい小遣い稼ぎになった。

だが、やはりオレが優勝したのに気に食わない奴もいるので……。
ヤクザAがキレ始めた。

キレたヤクザはドスを取り出し、凄い速さでオレに刺してきた。
だが、こいつはオレに刃向かった。
……。後悔しても……。もう遅いぜ。
刺そうとした瞬間、ドスは消滅した。
粒子レベルまで砕かれて。

「久しぶりだな、リア」

「主よ、何故わらわを放置プレイした！」

「そんなプレイしてないから！」

た、確かにずっとほっといて出てきたと思ったたらお前のセリフはな
かったけどよ」

まあ、リアは元気で何より。

さあ、リアにはオレの究極のマードーシスターがやってくるまで時
間稼ぎをもらいますか。

まあ、もうゲイ・ボルグで殺してるけど……。

てか、ゲイ・ボルグまたクーフリーンから借りてんのかよ!?

クーフリーンもお疲れさんですね。

まあ、脅しにはなったので、オレたちは立ち去った。

ちなみに、夜千秋とテレビ見てる最終に流れたニュースにヤクザの

組がひとつ壊滅したとの情報が入った。
間違いなくはやて姉の仕業だということをここに記しておく。

夜中、千秋が眠った頃のこと……。

「主、ひとついいか？」

「何？」

突然リアが話しかけてきた。

「ちょっとこいつを召喚してくれ」

「ったくしかたねえな」

以前校長にもらった本の悪魔を召喚する。

「召喚完了」

「後は加護を受けるだけだ」

そのまま、良く分からん加護を受けてオレは寝た。

第2章最終話 よっし！旅行だ！行き先は・・・ハワイから地獄に変更ですか？

6月15日午前5時

「駿、行きますわよ」

「ああ、待ってくれ」

何でこんなに早く出かけるんだって？

オレたちは今からハワイに旅行に。

椎名財閥の財力は凄まじく、家用ジェットなんて腐るほどある。

二人で家用ジェットに乗り込んだ。

乗っている人はわずか4人。

オレ、千秋、何故か轟騎とパイロット。

まあ、つくまで何時間もあるから雑談してるか。

「この飛行機って、普通の飛行機で行くよりどのくらい速いんだ？」
とりあえず、乗ってみた時に思ったことを口にした。

「通常の2倍ですね・・・それでも数時間かかりますけど」
かなり早いな・・・。

乗り心地もいいし・・・流石は椎名財閥だな。

そのあと轟騎がいろんなカードを取り出したので、みんなでトランプをやったり、花札やったりした。
いずれも賭け事である。

ちなみに、吹っ掛けた轟騎のビリである。

ある程度時間が過ぎたころ、飛行機は方向を変えた。
「どうした・・・」

オレは最も早く異変に気がついた。

「俺は何もしてないぞ・・・ビリにはなったけど」

「おかしいですね・・・操縦室を見てください」

千秋が操縦室を見に行った。

「なんか・・・いやな予感がする・・・」

やがて、千秋が帰ってきた。
非常に焦っているようである。

「駿、轟騎、大変なことになりました。操縦士が・・・逃げましたわ」

「はあ!？」

「それも飛行機の操縦ができないよう、一部を破壊してから。このままだと、墜落します」

・・・スパイだったのか？

恐らく、千秋を殺せと命令でも来たのだろう。

千秋は椎名財閥唯一の継承者であり、更に人材的価値も計り知れない。

千秋を殺すことによって生まれる相手側の利益は、最終的に椎名財閥の崩壊につながる。

轟騎の錬金術は今に役に立たない。

千秋の頭脳を持ってしても、今は使うことはできない。

この状況を打破できる、唯一の存在は・・・オレか・・・。
リアを召喚すれば、一人は助かる。

だが、一人じゃダメだ。

最低でも・・・二人は・・・。

「千秋、墜落までの予想時間は？」

「計算したところ、残り10分足らずです」
「まずいな……。」

約10分で脱出できるか……。

いや、無理がある。

パラシュートなどの脱出装置はまるで最初からなかったかのように撤去されていたからな。

オレたちは完全に奴らの術中にはまっちゃった……。

リアに助けを求めるしかねえ。

この際、千秋だけでも助けないと……！

オレや轟騎にはいくらでも代わりはいる。

……そう、いくらでもな。

仮に轟騎の代わりはいないとしても千秋の方が有能だ。

千秋を優先すべきだと思う。

オレにはこの状況を打破する力はない。

頼ってばかりだけど……リア、今回だけは本当に助けが必要なんだ……。

「出でよ、大いなる戦乙女、ダーク・ヴァルキュリアー！」

オレはリアを召喚した。

リアの瞬間移動魔法は、一人が限界。それから距離的に、総本山に帰すのもハワイに送るのも不可能だ。

だが、リアの知恵を借りれば何とかなるかもしれない。

「リア、どうすればいい？」

「主よ、この二人ならわらわが頑張れば助けることができる」「本当か！」

よかった・・・助かる。

オレを犠牲にすればな・・・。

それでいい。

轟騎はバスケの才能を開花させてNBA選手になればいい。

千秋は天才的頭脳をフル活用して、現在の問題を解決すればいい。

そう、オレ一人の犠牲で二人の有能者に未来がやってくるんだ。

「だが、お前の力を少し借りる」

「そのくらいお安い御用だ！」

オレはリアに力を分け与え始めた。

・・・残り5分か・・・。

「リア、頼む！」

「いくぞ！」

リアは瞬間移動魔法を唱えた。

そう、これでよかったんだ・・・。

<轟騎視点>

「うう・・・」

俺は激しい痛みと共に目を覚ました。

「轟騎、大丈夫ですか？」

「ああ・・・」

千秋が手を差し伸べてくれた。

俺が顔をあげたとき、一粒の雫が頬を掠めた。

「千秋・・・どうした？」

千秋は泣いていた。

俺は・・・悪いことしてないよな？

そんなことを考えてる時に、駿がいらないことに気がついた。

「千秋、駿ならリアが助けたはずだ・・・大丈夫」

と、言った瞬間俺はとんでもないものを目撃した。

「リ、リア・・・何でここに・・・」

「わらわには貴様ら二人を飛ばすので限界だったのだ・・・主を助ける暇はなかった・・・」

・・・駿・・・。

嘘だろ・・・おい・・・。

「おい、駿！千秋も心配してんだぞ！早く帰ってこいよ！」

・・・あのバカが・・・。

「轟騎、帰って駿の搜索命令を出しますわ」

「くそっ！」

俺はただ、ただ千秋の悲しむ顔を見ていることしかできなかった。

第3章第1話 まさかの「ここはどこ？私は誰？」

6月16日午後2時

オレは浜辺に打ち上げられていた。

「……どこだ……ここ」

浜辺だが、海の家はない。

それどころか、浜辺沿いの道も整っていない。

どうやら、海水浴場ではないようだ。

雰囲氣的に日本ではある。

「だ、誰？」

オレの背後から声が聞こえた。

地元の中学生の女の子かな？

「ああ、オレは……」

あれ……オレの……オレの名前が出てこない……

「……名前が……出てこない」

覚えていることは、オレが日本人だつてこと程度。

「そう、記憶喪失かな？ボクは湊みなとだよ」

「ああ……悪いな、名前が出てこなくて」

湊は穏やかな顔で微笑んでオレの手を掴んだ。

「気にしなくていいよ」

「ありがとう。それで、ここはどこだ？」

「誰も来ない浜辺。漁師もいないし、人も住んでいない」

「……なんで湊はここに……」

「あの……ちょっと手伝って」

手伝いとは、海藻や貝、魚をとることらしい。
何やら湊の家は酷く貧乏らしく、毎日を暮らすのが大変だそうだ。
今の時代、こんな家庭があつたとは……。

オレはその辺に打ち上げられていた木の棒を拾って、それで魚を叩いて気を失わせ、捕獲。

これを延々と繰り返した。

オレの食料としての糧になるんだな。

そんなとき、パスポートが打ち上げられているのを見つけた。
そこに書かれていた名前を見て……。

「……これは……オレの名前だ……」
間違いない。

この顔は間違はなくオレだ。

水面に映ったオレの顔と写真に写った顔が一致する。

パスポートでオレの誕生日などの基本情報は分かったが、両親や兄

弟などの情報は一切分からなかった。
オレがどんな人間だったのかとか、そんなのは全く分からない。
趣味は何で、特技は何で、好きな食べ物は何で・・・そんな情報は
手に入らない。
パスポートに必要な情報しか手にすることはできなかった。

「おーい、湊！」

「あ、魚取れた？」

オレは収獲を見せる。

「きみ凄いね、ボクじゃそんなにとれないよ」

「そりゃ、男と女の性差があるじゃないか。それに、オレの体は結構鍛えられていたし」

「そうだけど、君は凄いよ！」

まあ、確かに棒で気絶させて捕獲する方法はそうそうできないと思う。
う。

ここで、気になった。

オレが名前で呼ばれないことが。

「湊、ちょっといいか？」

「なに？」

「オレさ、名前を思い出した」

そうして拾ったパスポートについた名前を見せた。

「・・・ごめん」

は？

何故、こいつが謝る？

「ボク、実は英語が読めないんだ。ボクは年齢的には既に中学3年生なんだけど、小学校にも少ししかいってないんだ。親がこんな辺境に住んでた上に、親はボクが小学校低学年の時に死んじゃったし。親戚はいるか分からないし・・・」

湊・・・お前・・・。

彼女がここまで生きてきたことは奇跡だと言ってもいい。

人生の半分近くを女の子が一人で、更に自給自足で生きていたことは不可能に近い。

オレは、湊がアルファベットに苦戦しているのを見て、パスポートを覗いた。

確かにパスポートには英語で書かれていたな。

海外で作ったのかな？

「じゃあ、オレが読むよ」

「オレの名は、片瀬駿だ」

第3章第2話 サバイバル生活に別れを告げよう！

「片瀬・・・駿」

思い出した。オレは確か飛行機の墜落事故に巻き込まれて・・・でもなんで飛行機なんかに乗ってたんだ？

・・・まあ、時が経つにつれて思い出すだろう。

「駿」

「ああ、オレの名は駿だ」

「名前もわかったことだし、家に帰ろうよ」

家・・・オレの家はどこだったかな・・・。

「おう、料理の作り方は覚えてるから手伝ってやるよ」

家についた。

徒歩で1時間かかるとは・・・。

本人が貧乏と言っていた通り・・・いや、想像以上に貧相な家だった。

幸いここは暖かい地域なため、冬に凍え死ぬことはないだろうが、やはり寒そうである。

そして現在。
ヒノキの風呂か・・・ずいぶん立派だな。
この家にしては。

オレは誘惑に負けて、今は湊と入浴中。
何とも子供らしい湊がかわいく思える。

風呂は狭いので、からだか密着している。

「はふう」

「み、湊・・・エロい声は極力出さないでくれ・・・」
さつきからこの状態。

このままでといつ襲っちゃうか分からねえ・・・。

「なんか・・・駿にくっついてると気持ちいいんだもん」

「先上がるわ」

ここは逃げるが勝ちと見た。

オレは服を着ようとした。

が、重大な事実気がついた。

「ふ、服がねえ・・・」

「服ならあるよ、ボクの奴」

湊のがオレに着れるはずないだろ？

なんか自分で作ったような布地だ。

「まあ、夏は服着ないんだけどね」

えっ!？

「そろそろ暑くなってきたからなしでいいかな」

マジか。

「その考え止める!オレの理性が持たなくなる!」

オレは必死に抵抗したのであった。

オレたちは今日も海に来ていた。
そこで洞窟を見つけたんだが。

「湊、この洞窟ってなんかあるのか？」

「んとね、ここにはなんか宝石みたいのがあったよ
宝石ねえ……。」

見てみる価値はありそうかな。

「ちよつと見に行ってくる」

「ボクも行くよ」

洞窟内には水が流れていた。

海の水が入ってきてるんだろう。

この先に流れ着いたものがあるかもな。

と、オレの予想は的中した。

「駿、これって君の？」

オレの名前が書いてあるな……これって……。

「カードか」

こんなものも持ってきてたんだな。

飯とり終わったら街にでもでて金でもおろしてみるか。
いくら入ってるのかな……。

でも、暗証番号分かんない。
誕生日で試してみようか。

同日午後2時

オレは街に来ていた。
湊はまともな服がないので、おろせたら買ってやることにした。
で、現在は銀行。

暗証番号は……誕生日はありえないか……
マジかよ……。

誕生日だったし!?

ちなみに誕生日は4月7日。
不用心だな……。

「いくら入ってるのかな……」
マ、マジか!?
何この大金!?

1,000,000,000!?

10億!?

オレってそんなに金持ちだったのか!?

まあ、いいや。

オレの金っぱいし……。

とりあえずオレは10万おろしてその金で服と飯を買った。

ついでに帰りが面倒だったので自転車……っていつても山と海だからマウンテンバイクを買った。

「さあ、帰るか!」

オレは大量の荷物を抱えて山に帰って行ったのであった。

ちなみに、その途中のコンビニでアイスを買っていったら湊はとて喜んでいた。

にしても、ドライアイスなしにもかかわらず、帰るまでに溶けなかったのには驚きだった。

第3章第2話 サバイバル生活に別れを告げよう！（後書き）

なんとなく更新しました

第3章第3話 片瀬駿失踪事件の全貌はいかに！・・・事件じゃなくて事故なん

6月23日午後7時

「オレが来たときはこんな部屋じゃなかったのにな・・・」

オレの貯金で結構家具が揃ってきていた。

オレの貯金で。

オレの貯金で。（大事な事なので2回言いました）

ちなみに、現在は二人で夕食を食べながらテレビを見ている。

電気はオレが頑張って引いた。

「駿！ゴールデンタイムのテレビが始まっちゃうよ！」

何時からゴールデンタイムって覚えただよ。

買ってからまだ3日目だぞ？

今回のテレビはスペシャル番組で、失踪した人の捜査をする視聴者参加型の番組だった。

で、そこで・・・。

< 今回の失踪者は片瀬駿さん。友達と旅行に行く途中に失踪したそうです。彼の後ろ盾に椎名財閥が立っているのです、今日は世界的超能力者を呼びました >

「ふくん、片瀬駿さん見つかるといいね」

「そうだな、家族が心配するからな・・・って、オレじゃん!？」

< ちなみに発見に最も有力な情報を提供した方には椎名財閥から1億円が贈呈されます >

「どんだけ!？」

「そんなにオレって価値ある人間だったの!？」

「ねえ、駿」

「な、なに?」

「なんか湊がエロかわいい顔をしながらオレに迫ってくる。」

「ボクの初めてあげるから、君のこと、椎名財閥に突き出して……
いい?」

「いや、エロいから頷くところだった……。」

「つてかそんな言葉どこで覚えた!？」

「確かにパソコン買ったけどよ。」

「たった2日でそこまで情報入るわけ!？」

「えーと、今通訳の方が超能力者の透視を通訳しています。暫くお待ちください」

「……駿、ボクもう我慢できない……。」

「お、おい!止める!」

「ちなみにオレが襲われそうだと勘違いしてる人もいそうだけど、我慢できないのは貧乏生活っばい。」

「一度娯楽を味わったらもう無理か。」

「人間には耐えることはできない。」

「えーと、「どこかの山奥で、女の子とエッチなことをしようとしている」らしいです」

「はっ!?!どんだけ透視能力あんだよ!?!」

「ねえ、駿……ボク、またアイスが食べたいなあ」

「わかった……買ってやるからどいてくれ!」

「それと遊園地も行ってみたい!」

「わかったから、早くどいてくれー!」

<えーと、今エツチなことを止めたようです>

もう止めてくれ……。
てかテレビ止めようぜ？

そんなとき、依頼主っぽい人が出てきた。

オレと同じくらいの年齢かな……。ひとつ違いの姉か妹かってところか……。

随分豪華な衣装纏ってるな。

すげえよ、オレってこんなとこの出だったのか？

「駿！見ていましたら早く出てきなさい！私は今怒っているのですよ！」

あの口調から姉かお節介な妹と見た。

<えー、新たな情報ですが、透視の結果駿さんは記憶を失っていて人の名前は自分の名前しか覚えていないそうです>

この超能力者どんだけ透視力すげえんだよ。

確かに、現在覚えている人の名前はオレと湊だけだ。

他にどんなやつがオレの周りにいたとかは知る由もない。

親も忘れていくくらいだからな……。

オレって……。どんな奴だったんだろう。

「湊」

「なあに？」

近くで買ってやった雑誌を寝ながら読んでいる湊は体を起こしてオレを見た。

「オレ、自分を探しにあいつに会いに行ってみようと思うんだ」

オレは決意した。

今までの足跡がどのようなものだったのか確かめに。
だから、オレはあの少女に会いに行くとした。

「オレの居場所を電話で伝えてくれ」

「なんで？」

オレは別れるんだから、最後まで湊には残してやりたいと思った。
十分残してるけどな。

「お前がすれば1億もらえる。それで少しは良い暮らしができるだ
ろう」

すると湊は悲しそうな顔をした。

「そんなの嫌だよ！ボクは駿が大好きなんだから！折角できた友達
と別れたくなかない！」

途中から涙声になっていた。

「ねえ……どこにも行かないでよお……お願いだよお……」

湊は泣きながらオレにしがみつく。

「でも……オレは……」

「……駿の嘘つき！」

……え？

「駿はまたアイス買ってくれてるっていったもん。それから遊園地にも連れて行ってくれるっていったもん。それに……それにボクはこんなにも駿を愛してるのになんで駿は気づいてくれないの？」

オレはこの言葉に心をうたれた。

子供っぽい言葉だが、オレには心を射抜く矢のように思えた。

気がついたらオレは涙を流していた。

それも大粒の。

・・・別れたくない。

こんなにも純真な心をもつ女の子をひとり残してここを去ることなんてオレにはできない。

「ねえ、駿」

オレは声を出せなかった。

「もし、ここを出ていくなら・・・その前に・・・」

オレは涙で湊の顔を見ることはできなかった。ただ、最後の言葉は聞き取ることができた。

「ボク・・・いや、わたしを・・・抱いて」

確かに、湊はそう言った。

何この状況？

第3章第4話 再会？再会！再会！？早くも再会！！

「・・・湊・・・おまえ・・・意味分かってその言葉使ってるのか？」

「うん、分かってるよ。ボクは駿だからこんなこと言ってるんだよ」
衝撃的だった。

約数日でこんな知識を手に入れているとは・・・。

「・・・湊、オレやつぱ出ていかねえわ」

オレは逃げ道を作った。

湊のペースに持ち込まれたらヤバい。

「それでも、今抱いてほしいの」

湊は逃げ道を粉碎していきました。

まずい・・・非常にまずい。

このままだと歯止めが利かなくなる。

理性も持たなくなる・・・。

このままだと千秋に・・・。

・・・千秋・・・？

・・・千秋つて・・・誰だ・・・。

・・・彼女か・・・誰かかな・・・。

まさか、オレに彼女なんているわけないし・・・。

母親・・・だったとしても普通は言わない・・・。

姉・・・つてどんだけブラコンだよ！？

妹・・・もあり得ないな、たぶん。

もしかして男か？

千秋つて名の男もいるし・・・。

でも男とは考えにくい。
やはり、彼女かな・・・。

「分かった、湊。一度だけ、一度だけだからな。これが終わったら
オレの居場所を伝えてくれ」

「・・・分かったよ、約束する。その代り、今夜だけは・・・目一
杯、ボクを愛して」

「約束するよ」

そうして、オレは18禁な夜を越えたのであった。

6月24日午前11時

・・・朝か・・・。

もうすぐ昼だけだな。

さてと、飯食ったらここを出ていく準備しないと。

オレには湊を置いてはいけないけど、今はそれより大事なものがあ
るはず。

湊にはまたいつか会えるさ、きつと。

さ、昨日買っておいたパンでも食って、支度しようか。

部屋を出ると湊がいた。

この時間はいつも山なのにな。

「おはよー!」

別れるつてのに元気だな・・・。

「準備終わったよ!」

準備しておいてくれたのか・・・最後までありがたい・・・。

「ご飯も作っておいたよ!」

ホント、ここ出ていきたくなくなってきたよ・・・。

オレは涙を堪えながら湊の料理を食べた。

「うぐ・・・」

なんだこの味は!

・・・ぜ、絶望的だ・・・。

こ、これは人の食べるものじゃねえ・・・。

材料に得体の知れないものが入ってる・・・。

だが、ここで全てを平らげるのが男だっ!!

と、思いましたが、「人間には必ず不可能というものがある」と実感しました。

オレは昏倒し、そのまま次の日まで倒れこんだそう。

6月26日午前9時

・・・朝か・・・。

昨日は1時間と起きていなかった・・・。

まあ、湊を抱いている時は別だけど。

つてところでなんか居間の方が騒がしいことに気付いた。

「・・・湊？」

オレが居間に行くと湊がひとりの少女と争っていた。

「あ、駿おはよー！」

「・・・駿？」

少女がオレの方を振り向く。

次第に彼女の目には涙が溜まっていった。

「ああ、おはよう。で、この子誰・・・」

この瞬間、オレはあるビジョンが脳裏に浮かんだ。

「なあ、千秋ちゃん」

「なんですの？」

「明日、外国の大学に行くんだろ？」

「そうですね、駿くんと別れるのは寂しいですけど、すぐに卒業して戻ってきますわ」

「じゃあ、その時オレも凄い剣士になってるぜ！剣道全国で優勝してやるよ、絶対にな！」

「駿くんならきつとできますわ、私も同じくらい頑張ってすぐに帰ってきますわ！その時、駿くんのお嫁さんになります」

「それじゃ、楽しみに待ってる！絶対にすげえ奴になって戻ってこいよな！」

・・・ガキの頃の・・・オレ・・・。
そして、この少女が・・・千秋・・・。

その瞬間、オレの頭の中に数々の千秋との思い出が溢れてきた。

「・・・ち・・・あ・・・き・・・？」

「駿！」

千秋はオレに抱きついてきた。

「思い出してくれたのですか？」

ああ、そうだ。

思い出した。

千秋はオレの・・・オレの彼女だ。

「思い出した！千秋だ！夢じゃない！」

オレは千秋を抱きしめ返した。

肩に無数の雫が落ちてきたが、オレはそれが無性に嬉しかった。
オレのことを待っていてくれた人がいたことが、とても嬉しかった。

でもなんで思い出したのがガキの頃の思い出？

第3章第4話 再会？再会！再会！？早くも再会！！（後書き）

タイトルウザいっすねw

第3章第5話 オレの武器を見るがいい！100均の包丁vsヤクザなお方(再

「待たせたな、千秋。だけど・・・千秋のこと以外思い出していないんだがw」

「これからゆっくり思い出していけばいいですよ」
「そうだな、今すぐじゃなくても。」

「でもどうしてここが分かったんだ？」

「超能力者に透視してもらいました」

「まあ、なんにせよ・・・」

その時、どこからか爆発音が聞こえた。

「駿！大変だよ！ガラの悪い人たちが集まってる！」
千秋との再会時はいつも邪魔が入るな・・・。
しかたない。速攻で片付ける！

外に出ると、黒尽くめの男どもが数十名、ヤクザが数十名。

「半分は・・・私を殺すために送られてきた刺客ですね」

「片瀬駿！」

ヤクザっぽい奴に呼ばれた。

「お前のせいで俺達の組は潰れたんだ！」

知るか！

オレには記憶がないんだからな！

「そんなことする奴ははやて姉しかいないだろ！？」

・・・はやて姉？

誰だっけ？

「んなこたあどうでもいい。どのみちうちの組に刃向かった時点で・

・・・貴様に明日はない！」

「死ねやあ！」

「ったく、脳なしだな。包丁やるから帰れよ」

オレはこの間買った100均の包丁を投げつけた。

見事にヤクザの肩に刺さり、大量の血を噴出させた。

あゝあ、包丁血で汚れちゃったよ・・・。

切れ味落ちちゃったな・・・まあ、100均のだけど。

「てめえ、よくもやりやがったな！」

ええ、そっちから突っかかってきたっしょ！？

「文句あるのか？そっちから突っかかってきたのによ」

「んだと！」

キレぎみですね。

ヤクザでも変なプライド持ってるな。

本当にいいヤクザはいい人なのに・・・。

わからねえ奴は龍が如くやれよ。

まあ、クズはクズで潰すか。

オレは近くの木の棒を拾って、剣のように構える。

「この感覚・・・オレ、剣術やってたんだな」

こういうのは頭じゃなく、体で覚えるからな。

この感覚、悪くない。

「お前、男なら正々堂々・・・刀で来いよ」

オレは木の棒を相手に向けて軽く挑発した。

で、挑発に乗るバカもいるんだねえ・・・。

まあ、全て頂点に立つ奴は先天性の能力者か、天才のどちらかしかねえからな。

体の動かし方も頭脳で何とかなるはず。

頭脳が極端によくなれば動きも飛躍的にあがる。

ドスを構えてきたが、オレはそれをもろともしない。

斬りつけてきたところをまるでそこには何もなかったかのように避け、後頭部に打撃を入れて昏倒させる。

所詮ザコはザコか・・・。

一人目を片付けた時点でドスを奪う。

刃物の方が、オレは好きだな。

「武器は刃物になったぞ・・・まだやるか？」

「こ、こつちには銃があるんだぜ。こつちは負けな「負けだ」

オレは人間業ではないような素早さで銃を薙ぎ払い、首筋にドスを突き付ける。

「Dead or Alive・・・どっちを選ぶか？」

「・・・だが、まだ仲間は・・・なにつ!？」

「仲間とやらは私が殲滅しておきましたわ」

千秋のボディガード的な奴2名が二人で片付けていた。

無論、千秋を狙う刺客も。

「さあ、どつちにするか?10秒待ってやるよ」

オレ悪人だな。

10、9、8・・・

残ったヤクザに冷や汗が。

7、6、5・・・

「早くしないと・・・本気で殺るよ」

4、3・・・

次第にヤクザの顔が真っ青になっていく。

2、1・・・

「わ、分かった!もうこんなことしないから許してくれ!」

折れたか。

じゃ、ここから少し遊ぼうか。

「迷惑料、1000万よこせ」

さあ、どう出るか?

「1000万なんて大金・・・」

「10、9・・・分かった!払うから!」

楽しかった。

ついでに金も手に入ったし。

悪役になったかいがあった。

第3章第5話 オレの武器を見るがいい！100均の包丁vsヤクザなお方(再)

100均の包丁ほとんど出てないっすねw

第3章第6話 不良現る！言つとくけどこいつはなんか仲間らしいからな？

落ち着いた後、ヤクザから情報を聞き出した。

「まあ、金は後でいいがオレたちを襲わせた黒幕は？」

「確か・・・アメリカが本部の・・・ブレードバレー社だったかな・・・」

「なにそのネーミング!？」

日本語で刃谷つて・・・。

「そこは確か私が実質壊滅に陥れた車メーカーでしたわ」
潰したのかよ!？」

椎名財閥、まさに凶悪。

「それでねえ・・・」

「更にそこに送りこんだスパイのリーダーがはやてさんだったので駿も狙われたのでしょう」

はやて・・・はやて・・・何か引つかかる。

「はやてさんは駿のお姉さまですわ」

・・・そうか・・・それではやて姉と出たのか・・・。

そんなに凶悪なことしたのはかよ・・・。

「このままだとまた狙われるんだろう、オレたちは」

「そうですね・・・生憎、スパイで送り込んだ人は他の会社を送り込んでいますし・・・私たち自身で何とかしましょう」

まあ、何とかなるだろう。

千秋が相手だし、オレもいるし。

弾丸も軽く両断できるしな。

「じゃあ、そのなんとか社を潰しに行くか!」

「もう、話についていけないよ・・・」

話し合っているうちに湊がそんなことを言い出した。

「そうだな・・・湊には分からないか・・・簡単に言うと、ブレイドバレー社を完膚なきまでに壊滅させに行く計画立ててるんだよ」

「本当？ボクもいく！」

ええ！？

まあ、来てもいいかな。

他の人間より野生的な湊はある程度戦力にはなるしな。

山でイノシシとか狩ってたし、終いには熊まで・・・しかも素手で。

「分かった・・・でも三人じゃ足りないな・・・」

「なら、組からも一人派遣しよう」

ヤクザが急に協力的になった。

「その代り迷惑料を帳消しにし、組の再建も手伝ってほしい」

「その程度のこと、容易いですわ」

「交渉成立だな」

こうして、メンバーが一人増えた。

誰だか知らんが・・・。

今日は先日貸してくれることになった仲間に会いにきた。
「で、ここにその貸してくれる奴がいると」
「今呼んでこよう」
ヤクザが一軒の家に入って行った。

暫くして物凄い音が聞こえた。

「死ねや、クソ親父！銃殺されてえのか!？」
「まままままで、とりあえず会うだけでも・・・」
激闘が繰り広げられていた。
ヤクザが圧倒的に負けていたが。
「し、仕方ねえな・・・会っただけだぞ」

そしてそいつが出てきた。

長髪の銀髪がいかにも不良って感じた・・・しかもボス的な。

「お前・・・名前は？」

オレは不良っぽい人に尋ねる。

「・・・神宮亮平カミミツアキラ」

「感じ悪いな」

オレはそのままの事を言うと、なんかキレて胸倉を掴んできた。

「調子に乗るんじゃないぞ・・・」

「そんなことしてると・・・死ぬぞ」

オレは心臓に突き刺さるようにナイフを構えていた。

「・・・仕方ねえ、今回は見逃してやる」

亮平は手を離して後ろに下がる。

「なんていうと思ったか！」

すぐにこちらに向き直り、銃を速射。

弾丸はオレに向けて放たれた。

「死んだな」

「・・・誰が？」

オレは不死身さ。

弾丸を切り裂くことなど容易い。

何故このように、身体能力が高くなったかはわからない。
もともとこうであったのだろうか？

「・・・お前、バラムの加護を受けているのか・・・」

「バラム・・・？」

「ソロモン72柱の悪魔の一柱、バラム。その加護を受けることで姿が見えなくなるほど動きが俊敏になる。ただ、その原理は頭の働きが異常なまでに良くなるだけだけだな」

そうか・・・バラムか・・・。

オレってオカルト好きだったのか？

まあ、いいか。

「・・・悪魔の加護を受けている奴に勝てる気はしない。少しの間だけ、ついて行ってやるよ」

「やったね！」

突然湊が喜んだ。

「・・・かわいい」

「な、なんつった!？」

亮平が言いそうもない発言をしたので酷く驚いた。

「よろしくね、亮平くん」

湊がニッコリ笑って挨拶する。

「ああ、もちろんさ！」

・・・何この変わりよう・・・。

第3章第7話 アメリカに到着！そこで待ち合わせていた女性の名は……！

6月28日午前9時

「アメリカか、初めて来たな……つて、記憶がないんだからいったことがあるのかも分からないか」

オレたちはついにアメリカに到着した。

「駿、ここでひとり待ち合わせている人がいるんですけど、ついでにただけないでしょうか？」

「ああ、問題ないよ」

まあ、千秋の行くところにはどこでもついていくぞ。

暫く歩いたところに、一件のレストランがあった。

千秋はそこに入って行ったのでオレも中に入る。

「ご予約はされているでしょうか？」

店員は日本語が非常に上手だ。

ここまでペラペラ喋るのには数年必要じゃないかな？

「はい、片瀬はやてと待ち合わせている者です」

「畏まりました」

店員にひかれるままオレたちは奥へと案内されて行った。

「・・・駿くん？」

テールで待つていたとても美しい女性がオレを見てそう呟いた。

「はやてさん、残念ながら駿は・・・記憶を失っています。現在は私のことしか覚え「はやて・・・姉・・・」

はやて姉・・・思い出した・・・。

そうだ、昔からオレの面倒を見てくれた最愛の姉だ・・・。

無論、家族愛だが。

「・・・記憶は戻ったようね、私の使い魔の能力のひとつよ」

はやて姉は魔術的なものを使ったらしい。

「確かに、頭から引き出される気はしていたな」

「どう？記憶が戻った感覚は？」

思い出したって言うてもはやて姉のことだけなんだよな・・・。

「じゃあ、お礼に後で駿くんを・・・食べちゃうからね」

・・・止めい。

「よかったですね、駿。はやてさんに会わせることで何かを思い出すとは確信していましたが」

「まあ・・・な」

あんまり嬉しくないような・・・。

「ところで、今回の依頼ですが」

「ブレードバレー社を、跡形もなく歴史から消滅させるんでしょ
う？」

「や、やりすぎだろ……」

「そうですね」

千秋

歴史からって……

!!!!!!!!!!!!!!

「それに、カモが既にここに来てるみたいよ
はっ！」

「はやて姉がそう呟いた瞬間、銃撃が聞こえた。」

「てか、オレに撃ってきたw」

「ふざけんな！」

「オレは腰に下げていたサバイバルナイフで弾丸を真つ二つにする。」

「この弾丸は……スナイパーライフルか。」

「じゃあ、近くにはいないか……」

「逃げられたか」

「いや、逃がさないわ、エターナルウオリバーヌンE・E・B!!」

「でた、サイバー・エンド！」

「ビルを大量に破壊したのち、はやて姉は、」

「終わりね」

「と呟いていた。」

「そりゃあ、あんなの受けたら誰でも死ぬわ。」

「でも、どうやら一人じゃないようですよ」

「後ろから大量の戦闘員が押し寄せてきた。」

「はやて姉、ここはオレが一人で何とかする。少し魔力を回復させ
てろよ！」

オレはナイフを両手で逆手に持ち（ナイフはいつも逆手だけど）、
人外のみこなしで秒間30人ペースで倒していった。

数秒後

「抹殺完了」

オレはひとり死体の山に佇んでいた。

まあ、正確には仮死状態かな。

そうなる薬をナイフに染み込ませていたからな。

一応、急所は全部外した。

「駿くん……いつの間にこんなに強くなつて」

オレだつて……千秋を守る力が必要なんだ。

強くならなくては……。

何時まで経つても弱いままではいられない。

たとえ、記憶を無くす前のオレが悪魔と契約していたとしてもな。

第3章第8話 現世のケルベロスとの死闘。ついてないことに最終兵器が封印さ

6月29日午前11時

「はやて姉も仲間に入ったし、もう本社に乗り込むのか？」

「それでも私はいいよ」

はやて姉が微笑みながら言う。

「私も、異論はありませんわ」

千秋がいいならいいだろう。

「ん〜、ボクにはよく分からないや」

そりゃあ、湊には分からないか。

「俺は反対だ、相手の拠点に何の情報も戦略もなしで侵入するのは危険すぎる」

まあ、亮平の言うことにも納得は行くな。

「それなら私が既に手にしているわ」

はやて姉が全体地図を取り出した。

「これで文句はないでしょ？」

流石ですね、マイシスター！。

同日午後3時

「で、作戦は？」

「安心して、私がビルごと潰すから」

はやて姉が魔法銃を構えると、魔力をチャージし始めた。そして、その瞬間とんでもないことが起こった。

オレも油断していたせいかもしれない気がつかなかった。

はやて姉になんかの弾丸が命中したのだ。

「・・・魔力吸収弾ね・・・」

魔法銃の魔力は一気になくなり、はやて姉は崩れ落ちた。

「ふふふ、これは読んでいましたよ、片瀬はやて」

「あなたは・・・ブレードバレー社の者ですね」

「いかにも。お初にお目にかかります、ミス千秋」
オレ英語分かんね。

まあ、千秋に訳してもらってるけど。

「ワタシはブレードバレー社に雇われた殺し屋・ガルツ。現世のケルベロスと呼ばれる程凶悪なのですよ」

「もうなんだかしらねえけど、こいつ敵なんだろう？千秋、潰すから待ってる」

オレは腰につけていた日本刀を抜く。

覚悟しろよ、このゴミ野郎！

「片瀬、気をつける。こいつはただものじゃねえ」

亮平が忠告したが、オレは聞かなかった。

その時はアドバイスなど不要だと思っていたからだ。

「死ねっ！」

オレらしからぬ声を出して首を狙う。

この神速のオレについて来れる奴はいない。

が、奴は右手に着けた籠手で刀を受け止めた。

「なっ!？」

そのまま吹き飛ばされる。

くそっ!

オレは地面すれすれで手について体制を立て直す。

「あなたが片瀬はやての弟さんですか・・・予想と裏腹に弱いですね」

あの野郎・・・。

ガルツはオレに劣らぬ速さで鉄拳を下してきた。

オレは刀でそれを防ぐ。

そのとき、微かに音がした。

「ひ、罅が入ってやがる」

どんだけ力が強いんだ!

まだ防ぐことはできるが、それでもあと数発だろう。

ガルツは余裕の表情を見せている。

「・・・どうすれば・・・どうすれば勝てるんだ・・・」

オレは千秋を守るために強くなるんじゃないのかよ・・・。

こんなところで負けたら・・・こんなところで死んだら・・・千秋は・・・。

「負けて・・・たまるか・・・」

オレは再度刀を構えなおす。

初心に戻れ。

剣を振るうとき、敵の攻撃を避けるとき……。

「……急に動きがよくなりましたね」

「初心を忘れていたんだ」

オレは身を翻して攻撃を避け、そして腹を横から両断しようとする狙いが、あいつはそう簡単には切らせてはくれない。

避けた後すぐに体制立て直し、アッパーを入れてくる。

そしてそれをオレは右に避ける。

が、それが逆に不味かった。

「……いくら動きが良くなっても、ワタシには勝てませんよ」
それを利用してすぐさまキックを入れてきた。

オレはそれを避けることができずにもろに食らう。

「ぐ……あ……」

そしてそのまま再びアッパー！

……口の中に血の味が広がる。

顎を少しそむけたおかげで骨には損傷はなかったが、痛い。
マジ痛い。

てかもう死んでw

その後も攻撃を続けたが、一向に攻撃が当てられない。

勝てない。

・・・そうだ・・・。

攻撃が当てられないなら、

当てればいい。

すっかり忘れていたよ。

オレに剣を覚えてくれた人は言ったはずだ。

誰だかは忘れてしまったが、これだけは忘れていない。

<この流派は剣道では勿論、殺しにも使える。いや、むしろ人を斬るためにこの流派ができた。そう、お前が一人前になったらこの技を教えよう>

<・・・剣の構えはこうだ>

オレは剣道で言う上段で構える。

<・・・そしてそのまま剣を・・・そうだ>

オレは目を閉じる・・・。

これで、準備は整った。

「さあ、攻撃してこい・・・現世のケルベロスさんよ」

第3章第9話 奥義発動！封印されしこの技、とくと見よ！

<この剣技は、普段は使ってはいけない。自分の命の危険、またはそれに準ずる物の危険が迫った時のみ解放しなさい>
そう言っていた。

今はまさにその状況。

自分の命の危険もある。

さらにそれに準ずる者の危険もある。

ここでオレが朽ちたら次の標的は恐らく亮平。

次に戦えそうな奴だから先に潰すだろう。

そして千秋、湊の順だ。

正直、亮平なんてどうでもいいが千秋と湊は守らないと。

オレが倒せない敵を亮平が倒せるわけがない。

・・・仕方無い。

この際、みんなを守れば・・・こいつを倒せばどうだって・・・

オレは一心にガルツを見る。

「はあああああああああああ！！！！」

掛け声とともにオレは剣を軽く横に振るった。

「ふふふ、その位置じゃ当たらないですよ」

ガルツが馬鹿にしたように言う。

「奥義・虎視眈眈」

オレは刀を鞘に戻す。

「千秋、勝ったぜ！」

「何を！？ワタシはまだこの様に生きています！」
ガルツが怒ったようにオレに殴りかかってきた。
「オレはいつでも貴様を殺せるんだよ」

その時、
ガルツの首が落ちた。

「決まったって・・・言つたろ？」
ガルツの返答は、勿論なかった。

「この刀は何も斬らない。奴を斬つたのはこの刀の刃ではなく、オレの命の欠片だ」
そう、これを使うなど言つたのは師匠が持っていた弟子のひとりにこの技の使いすぎで自らの命を落とした奴がいたそうだからだ。
これは手加減ができない。
だから、使いたくはなかったんだ・・・。
この技はオレの師匠が編み出した奥義だ。
以前オレは我流と言つたが、それはこの流派にはない突きを組み入れただけで差ほど大差はない。

「ところで亮平」

「あ？」

オレは殴つた。

「てめ、ざけんな！」

「何故、助けなかった？」

「そりゃ、俺が狙われたら困るし・・・」
死ねよ。

黙って死ねよ。

「次敵出てきたら亮平囷にして先進もつぜ！」

「うん！」

湊がニコニコしながらうなずいた。

「ちょ、おい！湊ちゃん！？そんなに俺を殺したいの！？」

「ううん、どのくらい強いのか見たい」

この言葉を聞いた瞬間、亮平の目つきが変わった。

「やってやるうじゃねえか！だが、湊ちゃんにはひとつ約束してほしいな」

湊は「なあに？」と言ってみる。

「俺が次の敵を潰したら、俺と付き合ってくれ！」
わお、まさかの告白ですか。

「良いですわね、このような恋も」

「まあ、オレたちは愛だけだな」

それもそれでよし。

そしてそこでちよつと赤くなる千秋かわいいー！
今ここで抱きしめたい。

まあ、湊も湊でかわいげはあるけどな。

そして湊の返答は・・・

「なんで？」

ええ！？

そこで「なんで？」はないでしょう！？

「そ、それは・・・」

言葉が詰まる亮平。

不思議そうに見る湊。
笑いにならない笑いをしているオレ。
穏やかな顔で見守る千秋。

「そ、それは俺が湊ちゃんに惚れたからに決まってるんだろ！」
こいつ、漢だ……。
堂々と、大声でこのセリフを言うのはオレには無理だ。

6月30日午前9時

「それはそうと、これからどうする?」

「全員抹殺に決まってるんだろ」
いや、それはダメだろ。

「はやてさんは現在魔力回復中ですからね……」
魔力吸収弾つてのは相当威力が高いらしいな。

「まあ、普通に乗り込むか……」
「見つかったも殺しやいい話だ」
だから、それはダメだって!

「仕方がありませんね、普通に乗り込みましょう。やむを得ない場合は……亮平、殺しても構いませんよ。ただ、それに責任を感じ

ないのであれば」

千秋は少し厳しい言い方をしたが、亮平はもろともせず

「俺は既に何百という人を殺しているからな、今更責任なんて感じねえよ」

こいつ既に殺人鬼じゃん!?

「亮平、お前がもしガルツみたいな奴と戦うことになったらどうする?」

「勿論、そいつの心臓を射抜く・・・ゼロ零距离でな」

良い意気込みだな。

オレは疲れたよ・・・。

よし、次はこいつに任せよう!

第3章第10話 え、懐かしのあのお方は魔眼使い!?

同日午後11時

「中に入ってみたが、誰もいないんだな」

「それはそうです。ここはもう数名の社員しか残されていませんから」

ホントに潰れかけてるな。

「で、社長はどこだ？」

「社長室は・・・こつちか」

オレははやて姉にもらった地図を見てみんなを案内する。

「ここを曲がれば社長室だ」

そこでやはり敵が現れた。

「お、お前は・・・」

「・・・どうしてここにいますか？」

そこには元クラスメートがいた。

「あ、飛鳥・・・何故・・・」

そこには飛鳥がいた。

「私の叔父さんがこの社長でね、それで・・・ここに来た刺客を消すように言われているの」

バカな、飛鳥にこんなことは・・・。

「私ね、魔眼を持っているの」

「魔眼・・・死神の眼、直死の魔眼、妖精眼、邪視眼、写輪眼など数々の魔眼がある。この少女が持つのは・・・一体・・・。なお、黒龍の魔眼は売れば高い。以上」
か、解説ありがとう・・・亮平よ・・・。
にしてもこいつの雑学はすげえな。
オカルトなことに関しては。
つてかほとんどマンガやアニメの魔眼じゃねえか！
しかも写輪眼つて瞳術じゃねえか！
黒龍の魔眼なんてもはや素材だし！

まあ、いいか。

「私の魔眼は・・・イービルアイだよ」
イービルアイ・・・邪視か・・・。
まあ、そんなこと知ったところでオレは・・・戦えない。
「片瀬、何やってんだよ？てめえの身体能力なら魔眼を圧倒できるだろうが」

亮平が少し怒り気味にそう言った。

「まったく、焦れつてえ。俺が殺してやるよ」

亮平は銃を構える。

「止めて・・・くれ」

「ああ？」

オレは亮平を制した。

飛鳥が死ぬところなんて、見たくはなかったからだ。
仮にも昔好きだった人だ。

殺す相手だとしてもそう簡単に殺せなどいえない。

「ふざけるな」

亮平はいつものような口調ではなく、真面目な口調で言った。

「お前は覚悟したんだろ、お前の大切なものを奪おうとする奴を叩き潰すと」

ああ、オレは確かに千秋を守るために……。

「甘ったれんじゃねえよ。俺だって好きでここにいる訳じゃねえ。

俺はお前についていくと決めたからここにいるんだ。覚悟したことを、そう易々と捻じ曲げるような奴は……男じゃねえ!!」

……オレはこのときの亮平がカッコよく見えた。

こいつは本当の漢だと思った。

「こいつを殺したくないなら殺さなきゃいい話だ」

亮平はそう言って飛鳥を撃った。

「あ、飛鳥!？」

オレは倒れた飛鳥を見て涙を流していた。

確かに敵だけど……確かに出番は少なかったけど。

それでも殺すことはないじゃないか!

殺さなきゃいいだろって言っただろぅが!

オレは亮平を睨んだ。

すると亮平は一発の弾丸を投げてきた。

「……安心しろ、麻酔弾だ。わかったか?」

亮平は少し笑って見下ろしていた。

「お前も少しは死に慣れる、片瀬」

死に慣れることなんてオレにはできない。

だが、亮平の言ってることも一理あると思う。

いずれ家族や友達が死んだとき、このまま立ち直れないってこともあるだろう。

亮平の「死に慣れる」って言葉は・・・たぶん「死を受け入れる」ってことを言いたかったんだと思う。

今回は死んではないが、その時にオレがどう思うか想像して言うてくれたのだろう。

そんなことを考えさせられる一時だった。

第3章最終話 社長との決着！そして現る新たな・・・あんた味方ですか！？

「さあ、社長室へいきましよう」

「ああ」

オレたちは扉を開けた。

「うち、逃げられたか・・・」

亮平はそう呟いた。

だが、気配はする・・・。

絶対にいる。

「片瀬、ここにはいない。早く他のところを探そうぜ」

こいつ・・・まさか気づいていない？

亮平ともあるう者が・・・。

「いいから、早く出んぞ」

オレは亮平に連れられて外に出た。

「カモが出てきたな」

「なるほどね」

亮平は後ろに向かって銃を放つ。

そしてオレは銃に負けない速度で何者かの上に飛び立つ。

そしてそいつの首を切り落とす。

「やったな」

「ようやく終わった・・・」

亮平が銃を仕舞って殺した奴を見る。

「ダ、ダミーだと……」

「やられましたね」

偽物か……。

しかも人形と間違えるとは……。

しかし、本物はどこに行っただろう。

「本物はもうここにはいない、今はロビーに逃げたよ」

湊が急に呟いた。

「どうして分かるんだ？」

「野生のカンって奴かな？」

そうか、湊は人一倍気配には敏感だ。

だから相当離れている生き物でも楽に気配を察知することができる。

「ようやく役に立てたかな？」

「すごい、こんな特技があったなんて！俺にはまねできないね！」

また性格と口調が変わってるよ……この人？

「それよりロビーに急ごう」

しかも話変えやがった！

湊の言う通りに移動していたら、中庭でとうとう社長を見つけた。

「貴様を倒せば、これで全て終わって平凡な日常が取り戻せる。記憶は取り戻さないといけないけどな」

「あなたのせいで何回命を狙われたことか……。あなたを捕まえたら……。どう躰りましようか？ 一気にアイアンメイデンでグサリと……。ふふふ」

千秋怖え……。

アイアンメイデンは止めようね？

「貴様を倒した暁には、湊ちゃんに告るんだ！」
いや、既に告ってるから。

「もうなんだか分からないや」
それでいいんだよ、湊。

「さあ、最終決戦と行こうか」

「さて、ルールを決めないか？」
ルール？

「お互いこれをつける」

社長が右手に手錠を装着してきた。
そして社長も手錠を付ける。

手錠は地面につながってるようだ。

もしかこれは、収容所のSMデュエルの時に使われた奴か！？

「この際、決着はカードゲームで」
ふざけるな！

だが、オレはあえてこの勝負に乗る。

「・・・ふふふ、オレは錬磨を何度もブツ倒してきたんだ。そう簡単にはやられないぜ」

・・・錬磨？

友達だろうか・・・。

それとも兄か、弟か・・・。

まあ、いい。

「ライフポイントはアニメ同様、4000方式で」

もうこれ遊 王のファンフィクションになりかけてるよ・・・。

「先攻、オレのターン！ドロー！」

社長はニヤニヤしている。

そんなに自信あるのか？

「大会で優勝したことがあるからな」

心読むな。

オレはドローしたカードと手札を見る。

・ 右腕

・ 右足

・ 左腕

・ 左足

・ エゾディア

・ 生の宝札

勝った。

「エゾディアの効果で勝利！」

終わった！

ついに終わった！

「にしても社員が皆無だったな」

「事前に殺しておいたからね」

「・・・は、はやて姉・・・いつの間に・・・」

しかも殺したのかよ・・・」

「それはそうと、駿くんの手紙よ」

はやて姉から手紙を受け取る。

「誰から？」

「いいから読んでみて」

オレは仕方なく手紙を開く。

<親愛なる片瀬駿へ>

フルネームで書いてる時点で親愛でもねえ・・・。

<拝啓

早春の候、貴社ますますご盛栄のこととお慶び申し上げます。平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。>

貴社ってなんだよ！？

絶対Microsoft Office Wordの挨拶文使ったよ、こいつ。

てかこれ手書きだし!?

しかも今夏だよ!?

突っ込みどころ満載すぎる。

<てか、オレの組織に入れよ。お前の姉だつて入ってるし、可愛い女の子ばっかだし、お前にもこの天国を味あわせてやるから働けよ>

口調変わった!?

しかも働けよつてふざけんな!

<月収3億は堅いぜ。お前の姉なんか年収1兆超えるからな>

どつからそんな金出るんだよ!?

<この組織には男はオレとお前だけだからさ、仲良くしていこうぜ>

もう入ってることになってる・・・。

<気に入った女の子いたら貰つて行つていいぞ。毎日エッチなことし放「いい加減にしろやああああああああ!!!」>

オレは手紙を破いて捨てた。

「つて事で今からロンドンに飛ぶから。千秋ちゃんとかにお別れ言おうね」

「い、いやだ・・・行きたくねえ・・・や、やめる・・・う、うわ

あああああああああああああああああああああああああああ!

「!!!!!!」

そうしてオレは空港に連行されて行ったのであった。

それを千秋と亮平、湊が微笑ましく見ていた。

「片瀬、お土産よろしく！」

おい。

「今度会ったとき遊園地行こうね！」

あー、そんな約束してたな……。

「駿、別れはあるものです。次に会う時まで待っていますから、できるだけ早く帰ってきてくださいね」

……てか千秋助けるよ……。

第4章第1話 ロンドンで関西少女に出会うという稀な現象発生(前書き)

新キャラに関西弁を使うキャラが出てきますが、自分は関西に住んでいないので正しい関西弁じゃないです。

第4章第1話 ロンドンで関西少女に出会うという稀な現象発生

7月1日午前9時

「ここはどこですか？」

「ここはダイアゴン横丁よ」

え、まさかのハリポタですか？

つてか、オレホグワーツに連行されんの！？

「それは置いといて、こつちよ」

オレははやて姉に連行されて行つた。

日本発つてからずっとこの状態だよ・・・。

しかもここに来てすぐ引き返したし！？

何のためにここに来たんだよ！？

そして現在

なんかとてつもなくでかい扉の前に立っている。

「なにこれえ？」

突然の出来事でもうキャラ崩壊してきてるよ……。
「いいからはいりましょ」

そして入った。

「ようこそ、片瀬駿。まっていたよ」

「お前か！オレにわけわかんねえ手紙よこしたのは！」

「落ち付きたまえ、てか落ち付け。今から普通にタメ語で話すから調子こいてるな、こいつ。」

まあ、オレもだけど。

早速あいつは一枚の写真を寄こしてきた。

「早速だが仕事だ。こいつの店から瓶を貰ってこい。ちなみにこいでは我がルールだから」

死ね！

早速そう思った。

「てか、あなたの名前は？」

「我の名はシンだ。23歳独身。んなことはどつでもいいから早く行け。我は今から飯を食う」

マジ殺してえ……。

「アシストにひとりつけていくから
はい！？」

なんかシンは女の子をひとり寄こしてきた。

「あ、ちよつと待って」

はやて姉が突然オレの額に手をあてた。

……いてえ。

何かが引き出される感じだ……。

「……もしかして……」

「記憶の一部を復活させたからこの子も分かるかもね」
オレはシンに連れてこられた女の子を見る。

「……わからん」

「ウチの名前は片瀬かたせあかつき暁や」

え、関西弁ですか？

てかオレと同じ名字だな。

「ちなみに暁ちゃんと駿くんは双子よ」

へえ……。

双子なんだ、オレたち。

へえ……ってマジかよ!?

復活した記憶には一切その情報はないぞ!?

「ウチも駿と会うのは初めてなんやけどな」

「じゃあ、知るはずもないか……」

「双子だけ一応自己紹介とかしておきなさいよ」

はやて姉に言われたので、目的地に着くまで自己紹介をすることに
した。

「ウチは小さい頃は関西の親戚のうちで暮らしてたんや」

「へえ、オレは関東だったからな」

「なんで分けられたんだろうな。」

「片瀬家は長男・長女だけは本家で暮らすことになってるんや」
「知らなかった……。」

「うちってそんなしきたりあったんだ。」

「なんでわざわざ……家って大した家でもないだろ？」

「片瀬家は江戸時代から長く続く商人の名門や。ただ、最近は衰えてきてるんやけどな」

「知らなかった……。」

本日2回目。

なんか聞くこともなくなってきたので、適当に質問してみた。

「じゃあ、好きな食べ物とかある？」

「ウチはハンバーグが好きや」

「子供らしい……。」

「今子供らしいとか思ったやろ？」

「おっと、顔に出てたかな？」

そんなとき、暁がこんなこと言いだした。

「にしても、駿って男前やな」

「主人公補正がかかってるからな！」

「錬磨の方が顔はいいけど性格とかひっくりくるめればオレの方がマシだ。」

「予想してた以上や」

「いや、予想レベル低いな。」

「オレってそこまで顔良くないぞ？」

「だが、悪くはないと思ってる。いや、そう信じてたい。」

「まあ、ありがとよ」

「暁も結構可愛いよな。」

「駿になら純潔を捧げてもいいかな」

は！？

何言ってるの！？

オレの周りの奴らこんなのはっかだな。

「や、止めるよ・・・オレたち一応兄妹だろ・・・」

「ウチ、駿に恋してもた」

何言ってるの！？

本日2回目。

「今日一緒にお風呂入ろうな！」

「おい、オレの年齢と性別を考えてからそんなこと言え！」

「ええやんか、スキンシップや！」

もう・・・止めてくれ！

オレに理性を保てというのは結構きついものがある。

「つつてもオレの理性が・・・」

「別にええよ、襲っても」

もうだめだ、こいつからは逃げれない。

はやて姉並に逃がしてはくれない・・・。

そんなこと考えながらオレたち目的地についた。

第4章第2話 無数の酒屋の店主がオレたちを追いかけてくるんですが。

「お邪魔します」

「なんだ、客か」

感じ悪っ!?

なにこいつ。

「ここにはあんたらに売る酒はねえぜ」

ここ酒屋ですか？

「オレたちはシンに言われて瓶を買って来いと・・・」

そしたら店主はさらに顔を歪ませて睨んできた。

もうこいつ客へのサービス心がねえ。

お前は日本の店の生き残り競争の過酷さを思い知ってから商売しろ。

そうこうしているうちに店主は瓶を持ってきた。

「これだ」

オレは瓶を受け取った。

「ありがとよ、じゃあな」

オレと暁は扉に手をかけた。

<ドロボー!ドロボー!>

なんか店中に警報が響き渡る。

「ええ!?!」

「毎回こんなんや、ここの店主。ウチは簡単に逃げれたんやけど、仲間がひとり死んだ」
死んだのかよ!!

「駿、くるよ!」

ちっ、仕方ねえ、逃げる!

つてええ!?

なんか店主が50人くらいになって追いかけてくる!!
ガ!ゴイルかよ!?

「全員蹴散らす、暁は逃げる!」

「いやや、駿が死ぬのは絶対にいやや!」

死が前提ですか・・・。

「オレを誰だと思ってる、現代の剣聖だぜ」

オレは腰に下げていた刀を抜く。

「死ねやクソドロボー!」

「おまえが死ね!」

オレは大気を十字に斬る。

そしてそのまま斬られた大気が店主に飛んでいく。

「奥義・天地開闢!」

これは気体(天)と固体(地)を切り拓く奥義である。

ちなみにこれを習得できるのはオレの流派でもかなりの位を持つ者でなければ不可能である。

これをこの歳で使えるオレは前代未聞らしい。

オレはこの流派の継承者22代目なんだが、この奥義はオレの5代前、つまり17代目が編み出した奥義。

これを使いこなせたものは歴代で3人だそうだ。

大気に斬られた店主の群れは力無くして崩れ落ちた。

まあ、数人は生きているだろう。

オレは刀を納めて暁を見る。

「あいつは一回殺した方がよかつたよな
オレは呟いた。

「そやな、少しは懲りた方がええ」
当たり前前の反応。

まあ、今回の依頼はよかつただろう。

暁にオレの剣術を見せたことでオレの強さも十分わかつただろうし
な。

次は暁がオレに強さを見せる番だな。

「ところでこれ何入ってんだ？」

「ん、たぶん酒やで。社長酒好きやしな。相当な銘酒かなんかとち
やうっ？」

ははは、オレはあのクソ野郎にパシリにされたってわけか……。
ぶっ殺す！

もう笑いにならない笑い方してるよ、オレ。

「暁、これ飲むわ」
もう自棄である。

あの野郎には一滴も飲ませてやるか！

「ウチお酒好きや！ウチにも飲ませて！」

「これは酒だぞ。未成年が飲んでいいものじゃない」

「駿だけずるい！なんでウチはダメで駿はいいんや！」

ん、オレか。

オレは一時期不良だったからOK

「オレ不良だし」

「絶対ウソや！」

・・・この際仕方無い。

少し黙らせるか。

「なあ、暁」

「飲ませる気になつたんか？」

「飲むの我慢したら・・・キスしてやるうか？」

オレは少しポーズを決めながら言った。

正直やっててキモいと思った。

「・・・ほんま？」

顔を赤らめた。

効果あり。

滅茶苦茶キモいと思った行動も無駄ではなかった。

と、その時

「ドロボー！ドロボー！」

店主！？

まだ生きてたのかよ！？

しかも人数増えてるし！？

「仕方ねえな、行くぞ暁！」

オレは刀を抜く。

「今度はウチも！」

「奥義・一騎当千！」

オレは刀で地面を縦に一閃する。

刀が放った気が地面を伝わり、店主の軍団を襲う。

オレはこの流派の22代目なんだが……ってさっきも言ったか。
この奥義はオレの8代前、つまり14代目が編み出したといわれる。
たった一太刀で約1000人もの人を斬ることが可能といわれている。

この奥義を使いこなせたものは歴代で4人。

まあ、できてから少ししか経ってないしな。

ちなみに本当に千人斬ったのは14代目だけといわれている。

まあ、戦国時代の人だしな。

まあ、何が言いたいかというと、この奥義は強いということだ。
これを食らって生きている方がおかしい。

が、しかし。

「やはり、あなた方は生きていますね
もはや人じゃないな、こいつら。」

まだ2割くらい生き残ってるし！！

「ウチに任しとき！」

暁は何やら構え始めた。

「一ノ型、リミット・バスター！」

ええ、和風な技なのに技名カタカナですか！？

でも・・・威力は人外だ。

なんかもう手からビーム出してるし！？

まあ、家の人間みんな人外的な特徴あるしな・・・。

「どうや！」

もう出す言葉もありません。

とりあえず残りの奴らを片付けたので逃げることにした。

第4章第3話 えーと、オレの部屋は・・・あ、少将って人と相部屋だ・・・。

同日午後11時

・・・やつと着いた・・・。

オレたちの本拠地・・・名前なんて言うんだろう・・・。

「ただいま」

「マジかよ！？帰ってきたし！？」

こいつ、オレを殺す気だったのか！？

お前を帰れなくしてやるうか？

「とりあえず酒よこせ」

やつぱ酒だったのかよ！？

ここに来て重大な事実気づいた。

飲み干すのを忘れていたことに。

「やつぱいいな、この酒！」

く、悔しい・・・。

次パシリに使われそうになったらマジでぶっ殺す！

「ま、お疲れさん。これ、お前の部屋の鍵。荷物ははやてが運んど

いた。それと将軍と同じ部屋だから」

将軍って誰だよ。

「ちなみに階級は少将だ」

マジで将軍なんだ？

「暁とかはやて姉とは一緒じゃないのか？」

「あいつらが一緒だから。ここ二人一組の部屋でさ。狭くはないか

ら安心しろ」

まあ、いいや。

少将か・・・怖い人かな・・・。

「少将はいい人だぞ、ふふふ」
ぶ、不気味だ……。

絶対オレのことを変に教育しようとしてるよ、この人。

まあ、眠くなつてはいたので部屋に行ってみることにした。

で、ここは何ですか？
もう半端ないよ、この部屋の大きさ。

「……少将とやらはどこにいるんだろう」
オレは広すぎる部屋を散策しながら少将を探した。

寝室にもいない、ベランダにもいない。
まあ、待ってれば来るだろう。

オレはそう思つてはやて姉が日本から取り寄せたゲームを始めた。

数分後

「ふう、気持ちよかったな」

「なんだ、風呂にいたのか。」

「オレはゲームをスリープモードにして少将を見る。」

「・・・マジかよ!?!」

「ふえ、ふああああああああああああ!!!」

「少将とは思わしき声。」

「てかさ将って女だったんだ。」

「てつきり男かと・・・。」

「あ、最初にオレとあのバカ以外男はいないって言ってたか。」

「み、見られた・・・もうお嫁にいけない・・・」

「あの、すいません、この人本当に少将ですか？」

「風呂あがりに全裸でビールを持って寝室に来るとか。」

「あ、あの・・・少将さんですか？」

「オレは一応聞いてみる。」

「は、はい。わたしがサラ・ゴルドスミス少将であります!」

「あ、そうですか・・・日本語上手ですね」

「母親が日本人でしたから」

「でも大戦終わった後のハーフって辛かったそうですね・・・」

「その言葉を言った瞬間、サラ少将は涙を流し始めた。」

「わたしってそんなに年取って見えますか？」

怒った顔がかわいい。
てかスタイルいいな。

ウエストがありえないけど・・・。

「それであなはここに来る予定の・・・」

「ああ、片瀬駿だ」

「あなたが暁先輩の双子の兄って人ですか？」

「なんではやて姉が先に出ないかな？」

「まあ、歳近いしな。」

「ま、まあな」

「ならわたしの先輩ですね。早速ですけど駿先輩ってどんな戦闘スタイルなんですか？」

「戦闘スタイル聞くの!？」

「オレは剣術を中心に闘うかな」

「じゃあ、わたしも。わたしは銃を主体としていますね。で、手榴弾とかもよく使いますし・・・」

このままサラの戦闘スタイルの話が5時間続いたので寝るのが非常に遅くなったということを書いておく。

第4章第4話 あーあ、なんで泣いたんだろ。にしても主人公補正するのは非常

7月2日午前9時

「おい、片瀬駿。起きろ、社長命令だ」

お前が社長つてのが非常に気に食わない。

しかも昨日寝た……ってか今日寝たのが6時。今9時。

3時間しか寝てねえのにか？

少将は爆睡してるじゃねえか。

いいや、シカトしよう。

「起きろ」

「……」

「起きやがれ」

「……」

「起きてるだろ」

「……」

「死ね」

「それはこつちのセリフだ!!」

あ、起きちまった。

「社長命令だ、また酒取ってこい」

「死ね!!」

オレはシンの顎を殴りつけた。

バキイイイイイイイイイイイイイイって音がしながらシンはベットに倒れこんだ。

「……」

ちよ、動かなくなっただし。

「一応かわいそうだから聞いてやるけど、生きてるか？」
「うっうっ」

何この唸り声。
てか・・・

オレはシンの顎を触る。

「あゝ、砕けたか？」

オレしらね。

無責任と思った奴いるか？
いても何もしないけど。

まあいいか、寝よう。

こいつは事故死つてことで。

同日正午

「駿先輩、起きてください、お客様ですよ」

ああ、あれからどのくらいたったか？

まあ、それなりに寝たし、起きるか。

オレはまだ覚醒しきっていない目を擦りながら体を起こした。

「はうあ！」

この子の胸の大きさを実感しました。

「何するんですか！ああ、もうお嫁にいけない・・・」

「お前があゝの位置にいるのが悪いんだろっが！」

まあ、中身は本当に小学生かもしれないが、この体を実感したオレには小学生には思えない。

「先輩のロリコン・・・」

「いや、年齢的にはそうでも体系的にはその辺の女の人よりは大人だろう」

本当に理解しているのだろうか？

しかもロリコンという言葉は結構傷つくぞ。

「まあ、いい。少将、客とは？」

「暁先輩ですよ」

ああ、暁か。

なんだろうな、また依頼か？

てかシンの息の根は止めたはず。

あ、顎砕いただけか・・・。

筆談ならまあ、依頼は出せるか。

「よお、暁」

オレはドアの前で待っていた暁に声をかける。

でも暁は何やら怪しげな行動をしながら虚ろな目でオレを見つめてきた。

「駿は胸が大きい方が好きやるか？」

いや、なんでそんな解釈になる？

「ウチの胸小さいけどそれでもええ？」

だからなんでそんな話になる？

「オレはそんな話はしたくない。てかなんでそんな話になる？」

「だってさつきサラの胸に顔埋めてたやん」

それは事故だw

「で、要件は？」

オレはもうシカトすることにしたw

「今からウチとデートせん？」

「ああ・・・昨日寝るの遅かったんだ、寝るよ。また明日な」

「ああ、そうやるか。駿はサラとあないなことやこないなかとするのか。た、確かにサラのはウチのよりおおきいからな・・・ひっく、駿のアホ〜！」

いや〜、暁怒らせちゃったよ。

泣きながら出て行ったし。

でも、オレには千秋がいるんだ。

湊の時は記憶を失っていたからしかたないとしてももうこれ以上他の女とは付き合う気はない。

ましてや血縁者の暁となんて・・・。

・・・つてかオレ主人公補正効きすぎじゃね？

せめて血縁者は止めようよ。

がしかし、そこで止めないのが作者である。

正直憎いわ。

<はやて視点>

私がコーヒーを飲みながら読書していると、暁ちゃんがいきなりやっできて寝室に駆け込んでいった。
どうしたのかな？

この本ももうすぐ読み終わるし、読み終わったら覗いてみようか。

5分後

ふう、読み終わった。

「確か駿くんは速読術を体得していたわね」
あのスキルは本当にうらやましい。

あのセクハラ社長の書類を読むときなんか一苦労だからね。
それより暁ちゃんどうしたのかな？

私は寢室を覗いてみた。

すると暁ちゃんは涙で枕をびしょびしょにしていた。

よくこんなに泣けるもんだな・・・と思った。

「暁ちゃん、どうしたの？」

「ぐすつ、駿があ、駿があ」

目を真っ赤にした暁ちゃんは私に抱きついてきた。

「仕方無いわ、駿には彼女がいるもの」

それを聞いた暁ちゃんはより一層声をあげて泣き始めた。

よほど辛かったんだろう。

昔から話でしか聞かされていなかった兄にようやく会うことができ
て嬉しかったのに、いきなり冷たくされて。

ちなみに私は暁ちゃんには定期的に会いに行っていました

そもそも駿は暁ちゃん存在を知らなかったくらいだし・・・。

私だって駿さんに冷たくされた時だってある。

でも・・・私の方が格が上よ

「暁ちゃん、泣かないで。駿はあなたのことを嫌ってはいないわ」

「はやてはええよ。駿は胸が大きいほうが好きなんや。はやてと違
ってウチには胸がないから」

そんなことを・・・。

「駿くんはそんなことで人を判断しないわ。駿くんの彼女だってそ
りゃ、胸はあるけど特別大きいわけではないわ。・・・でもあなた
よりはあるけど・・・」

「・・・ウチは駿に嫌われたんや。もう生きていけへん・・・」
なんか本当に人生の終わりって顔をしている。

これは大変だな・・・駿くんをあと呼んでみようか・・・。

ちなみにその日の夜はずっと暁ちゃんを慰めていたので寝不足になった。

第4章第5話 砂漠に佇む謎の遺跡と5本の妖刀

7月5日午前8時

「片瀬駿、起きろ、社長命令だ」

シンはあの後わずか一日で顎の骨を完全修復した。

こいつ人間じゃねえ……。

「はいはい、今起きますよ」

「まあいい。今回は本格的な任務だ」

今回は……って……。

「内容は、先日サハラ砂漠で発見された謎の遺跡を探索してこいと。これがメンバーだ」

オレはシンからメンバーが書かれた紙を手渡される。

・オレ

・はやて姉

・少将

・暁

以上

「今回はまともな仕事だから受けてやる。で、探索してくるだけか？」

「もちろん、宝を持ってこい」

全てこいつの取り分だったらぶつ殺すが、まあその程度なら許してやるつ。

「出発は今日の午後1時だ、解散！」

解散ってひとりしかいねえだろ・
まあいいや。
オレは身だしなみを整えると食堂へ向かった。

同日午後1時

庭には二羽鶏がいる・・・。
じゃなくて、庭には二機飛行機がある。

「ひとつは修理中だ。だからこいつでみんなに乗って行け・・・3
人のりだから狭いけど」

こいつ使えねえな。

「操縦は私に任せて」

まあ、はやて姉になら任せられるか・・・。
それにひとり程度多くたって問題はない。

と、思ったがやはりひとりの定員オーバーはきつかった。
なんてったってオレの腕に少将の豊満な胸が押しつけられているからだ。

もはや理性との戦いになっている。

「あー、先輩また胸触った。もうお嫁にいけない……」
「触ってねえよ!？」

お前そのセリフ好きだな……。

もうこのやりとりは30回目だぞ？

「暁、狭くないか？」

オレは狭いので暁に狭くないか声をかけるとそっぽを向いてしまった。

……オレなんかしたか？

「どうせウチには駿を喜ばせることなんてできへんから」

少し目が潤んでいた。

泣いてんのか？

てか、妬いてんのか？

オレには千秋がいるってのに……って暁は知らないか。

「ウチの体じゃどうせ駿は満足せんし……」

少し甘い言葉でもかけてやるか。

「暁……そんなことはないよ」

「……そんなこと言っても無駄や」

怒ってるな。

あ、この間の誘い断ったので怒ってるのか。

へえ……。

「ま、そう思うならそう思えばいいさ。あと最近危ない単語が連発してるから自重しろよ」

まあ、最後のセリフは作者宛だ。
作者は気まぐれでその時の雰囲気を変えるから困るがな。
シリアスにしたり・・・コメディにしたり・・・なんかエロくした
り。

まあ、裏話はこの程度にしておこうか。

で、現在

「やっぱり戦闘機は速いわね」

戦闘機なんかに乗ってたのかよ!?

「で、ここがその遺跡なんだろう?」

かなり凄い技術で作られてるような・・・。

「入ってみましょう」

オレたちは遺跡の中に足を踏み入れた。

「ここって・・・」

「情報通りだわ。ここは昔からあったものではないわ。この遺跡は、数千年後からこの遺跡だけ飛ばされたようね」
「は？」

「ここ、できたのが西暦4000年を超えているわ」

「ありえねえだろ、そんなの」

「できるわ。次元魔法を使えばね。次元を歪ませ、時を狂わせ、そしてこの時代に飛ばされた」

魔法なんて・・・。

「はやて姉魔法なんて信じてんのかよ」

「え、駿は魔法使えるんじゃないの？」

暁が横やりを入れてきた。

オレが魔法？

使える訳ないじゃん。

「いや、駿は魔法を使えるわ。私は使っているところを見たことがあるわ」

無理だろ。

どこのゲームかって。

「・・・駿くん、今年の4月から数カ月、記憶が削げ落ちているところがない？」

・・・確かに4月からはよく覚えていない。

記憶にあるのは千秋と轟騎と飛行機に乗って・・・墜落したところあたりからだな。

「その削げ落ちている部分で魔法を覚えたのよ」

「ま、まさか・・・」

そんな・・・ありえない・・・。

「・・・試しにこれを読んでみなさい」

「えーと、なにになに？」

オレはそこに書かれた呪文のようなものを唱えた。
するとひとりの女性が現れた。

「主、久しぶりだな」

「だ、誰？」

「彼女はダークヴァルキュリアのリア。あなたの召喚霊よ」

マ、マジかよ!?

「あの事故で記憶を失っていたのだな」

リアがオレの額に手をのせる。

「まったく、中途半端に記憶を覚醒させおって」

う・・・頭が・・・。

「・・・魔法・・・召喚魔法・・・」

「そうだ。お前はそのレアスキルによってわらわを召喚した」

「記憶が・・・完全に戻った。・・・まあいい。今は任務を全うしよう。リア、詳しくはそれからだ」

てか、今思い出したけどアメリカで記憶を引き出した時にはやて姉が普通に魔法使ってたな。

遺跡に入ってから大分経った。
いろんなものがある。

シン曰く、状況を報告してくればいいので、ここにあるものは好きなだけ持ち帰っていいそうだ。
そこでオレはこんなものを見つけた。

「・・・妖刀シロガネ、妖刀オロチ、妖刀ハヤブサ、妖刀イザナギ、妖刀コクヨウ・・・」

五本の妖刀と書かれた刀を見つけた。
明らかに日本製だ。

白い刀身のシロガネ、紅い刀身のオロチ、蒼い刀身のハヤブサ、翠の刀身のイザナギ、黒い刀身のコクヨウ。
オレはその刀たちが無性に欲しくなった。

こいつらは、オレが使いたい。
振りたい。
手にしたい。

「シンは取ってもいいっていったよな・・・」
オレはそつと刀を手取る。

「・・・美しい」
オレは純粹にそう思った。

刀の横には鞘が置いてあったのでそれに入れて、三本を腰に差し、二本を背に差した。

前から使ってた刀とは・・・おさらばかな・・・。
つっても差ほど愛着もなかったし。

ただ、これでガルツを斬ったんだよな・・・罅もはいつちまってるけど、一応記念に取っておくか。

「えーっと、他にはないか。はやて姉たちと合流しようか」
オレははやて姉の元に向かった。

「あ、駿来たで」

「おう、遅れた」

既にみんな集まっていた。

「みんな何かしら持ってきているようね。暁は籠手、駿は刀、サラは銃ね」

ちなみにはやて姉は超大きな鎌であった。

しかもどこからか手に入れたのか黒くて少し破れたような服も身に纏っている。

なんかリアルに死神っぽい。

だが、魔砲が主体のはやて姉に鎌は必要なのであろうか。

「それで、早速だけど今見つけた業物でを振るいましょうか」
え？

はやて姉が言った瞬間、大量の兵士が入ってきた。

「ここは立ち入り禁止令が出ていたはずだ！」

第4章第6話 謎の騎士団現る！・・・味方だけどな・・・たぶんw

7月7日午後7時

オレは外を眺めていた。

「日本では今頃七夕祭りとかやってんだろつな
そう、五本の刀に語りかける。

彼らも日本製の刀なんだから知っているだろう。
感情はないとしてもな。

「にしても綺麗な刀だな」
オレは純粹にそう思った。

「おほめいただき光栄です」

・・・！？

喋った！？

「私はハヤブサと申します。今姿を変えます」
ハヤブサが姿を変えた。

そしてひとりの少女になった。

「私たち、ヒメル・リッターです。空の騎士ハヤブサ、五体の騎士
の王です。空の騎士を騎士王とする騎士団ですので、このような名
がつけられました」

あれ、ソ ルイーターですか？

鎌じゃないけどw

いや、ヴォ ケンリッターの方が近いかw

「あのさ、ハヤブサ」

「なんででしょうか？」

「お前何者？」

「単刀直入にいえば、あなたを守る騎士です」

ああ、オレの守護者ってわけねw

・・・ええ！？

オレこの刀、刀として使いたかつただけどw

「刀にはなつてくれないの？」

「あなたが望むのであればいつでもなります」

・・・喋り方がホントに騎士だよこの人w

「近々他の騎士も目覚めるでしょう。目覚める前に彼らの事を話しておきましょう」

いや〜面倒なことになってきたよ・・・。

「まずは氷の騎士・シロガネ。彼は何にも動じない信念を持った騎士です。私は彼を好んではいません」

ええw

好きじゃねえのかよw

「次はオロチ。彼女は火の騎士。隙あらば敵対する人間を殺すという情けのない騎士です。彼女も好んではいません」

絶対こいつ他の騎士も好きじゃねえよw

「三人目はイザナギ。彼は風の騎士。少し陽気ではありますが、なかなかの剣の使い手です。彼も好んではいません」

こいつ絶対一匹狼だわw

「最後にコクヨウ。彼女は影の騎士。情報解析や作戦を立てるのが得意な騎士です」

こいつは好きなのか？

まあいいか。

「お分かりいただけただけでしょうか？」

ああ、お前が仲間を好んでいないってことがなw

「とりあえず・・・あなたの実力を拝見させていただきましようか
そっぴいなながらハヤブサはどこから騎士剣を取り出した。

マジすかw

こいつと戦えとw

てかあの武器絶対エクスカリバーでしょ!？

セイバーさん負けちゃったの！？
それともリア並に借りてきたのか？

てかw

「うわっ、目がマジだw」

仕方無いのでオレはオロチを手に取る。

「何故オロチを選んだのですか？」

「こいつには殺意があるんだろう。なら少しは強くなるかと思って
さ」

オレは少し笑いながらそう呟いた。

「そうですか。では、始めましょう」

その瞬間、ハヤブサの姿が消えた。

「!？」

・・・落ち付け、オレ。

こんな時は精神集中しろ。

そっだ、落ち付いてきた。

・・・いた。

オレはハヤブサに負けない速度で彼女に向かって行った。

「通常の人間には出せない速度ですね。ですがヒメルリッターには
無力です」

くっ！

速すぎる！

オレの比じゃねえ！

「くそ、人間には勝てねつてのわ！」

「なら、勝てばいいじゃん。おれが力を貸してやるよ」

・・・誰だ？

「おれか？おれはオロチ。お前の今握ってる刀さ」

こいつがオロチか。

「貸してくれんなら貸してくれ！」

「おやすいごようさ！」

オロチが熱くなる……。

「うわっ、燃えたし!？」

オロチが燃え始めた。

「ま、おれをふってりゃいつか当たるさ」

はあ!？

ま、いいかw

オレはハヤブサに向かってオロチを振る。

その瞬間、オロチから一筋の紅い閃光がハヤブサに向かって飛んで行った。

それを軽々と避けるハヤブサ。

「なに!？」

閃光が当たった壁から炎がw

「危ない所でした。まさかオロチが手を貸すとは……」

「そんなこと言ってる暇はねえぜ。一応忠告するけどあんちゃんが
お前のこと狙ってるぜ」

「!？」

そのとき既にオレはオロチをハヤブサの腹に突き付けていた。

「オロチが手を貸したとはいえ、なかなかの剣の腕です」

「まあな」

オレは刀を引く。

「オロチも姿を見せたらどうです？」

「ちっ、仕方ねえな」

オロチは姿を変えていく……。

・・・あの、あなた不良少女ですか？

めちやくちや煙草吸ってるしw

「おれがオロチだ。よろしく！ちなみに出身地は中国だぜ」

ははは、そうですかw

なんかオロチのイメージが崩れ去った瞬間だったw

第4章第7話 ついに来た！変態社長の最期！

7月14日午前7時

「先輩、最近ひとりごと多くないですか？」

「え、最近って・・・何時頃から？」

「えと、一週間くらい前からですね」

一週間前・・・ああ、ハヤブサたちが話しかけてきたことか。

「ああ、こいつらだよ」

オレは五本の刀を少将に見せた。

「先輩、ついに変態になりましたか？」

「ついにつてなんだよ!？」

こいつはオレをどう思ってるんだか？

「えと、小学生の女の子の入浴を覗く変態ですね。ロリコンですね」

オレは覗いてもいないしロリコンでもない。

しかもお前はもはやロリじゃないw

どこかのトゲトゲバツもった凶悪殺人天使の妹並にだw

「でも、わたしも好きな人に見せるときやまぐわうときには覚悟しますが、先輩は別に好きでも何でもないんで覗かないでください」

「だから覗いてねえよw」

「毎日毎日視線が痛いんです。恥ずかしいんです。先輩もこんなかよわい少女が苦しんでるのにそんな事をわたしの精神が崩壊して先輩の肉奴隷になるまで続ける気ですか？」

なんかすげえ被害妄想だなw

てか肉奴隷ってw

「だから、オレは覗いてない!」

断じてない。

絶対ない。

オレには千秋がいる！

「でも、毎日やらしい目で・・・」

やらしい目ねえ・・・あいつかw

「わかった、犯人はシンだ」

オレはあいつと仮定したw

てか、確信したw

何故なら、あいつはエロいしキモいし調子こきだし非の打ちどころ
しかない野郎だからなw

「今日暴いてやるよ、証拠をな！」

濡れ衣着せられたままじゃこつちも腹立たしい。

てかなんでこんな話になったんだっけ？

同日午後10時

少将はいつもこの時間に風呂に入る。

で、オレはいつもこの時間ゲームをしている。

なんのゲームかって？

最近はFFw

まあ、そんなことは置いといて。

オレは今日、風呂に入る入口を見張っている。

少将が風呂に入る前に監視カメラがないか確認した。

もちろんあつたが全て破壊したw

「これでどうなるか？」

ちなみに暁にも被害がないか聞いてみたところ、シンは一回やってはやて姉に息の根を止められかけたので、それ以来暁たちには一回もやってないらしい。

待つこと5分

「なんで監視カメラが壊れたんだよ
シンが来た。」

やはりお前かw

「確か風呂は・・・こつちだな」

オレはこつそりついていく。

「・・・將軍の裸を生で見るのは久しぶりだな。片瀬駿に濡れ衣も着せたし・・・さあ、成長した姿を我に・・・」

「死ねこの変態工口社長！」

オレはハヤブサとオロチを变形させ、さらにリアも召喚し、コクヨウとシロガネを両手に構え、口にイザナギを加えてシンに襲いかかった。

こいつは「いつぺん、死んでみる？」とかいう少女に地獄に連れて行ってもらった方がいい。

てか、オレが引導を渡してくれるw

「三刀奥義・生殺与奪！」

この奥義を受けたものは、使用者が殺したいと思った瞬間殺すことができる魔の奥義。

これは3代目が編み出したと言われている。

使えた者は歴代でたった3人。

虎視眈眈と似ているが、こちらは命の欠片を使わないのが特徴。その分難易度は数十倍に跳ね上がっている。

「お前はこの傷がある限り、オレがお前に殺意を持った瞬間死ぬ。

これに懲りたらもう少将に手を出さないことだな」

「ふふふ、やはりな。だが、はやての魔砲を体験したオレにその程度の脅しは・・・くはw」

オレはこいつを殺したいと思ったので、シンの全身から血が噴き出した。

「うぎゃあああああああああああああああああああああああ
あ・・・・・・」

そしてシンは倒れた。

てか死んだ。

だから言ったのに。

でもどうせこいつのことだから生きてるだろw

よし、こいつの死体を少将に見せに行くか！

<サラ視点>

「今日は視線を感じないですね、先輩もまずいと思ったのですかね」

そう思つてわたしはお風呂からでて、最初に体を少し拭く。そして、脱衣所にある冷蔵庫からビールを出して飲む。

「やっぱり風呂あがりのビールはおいしいであります！なんて」

「少将、喜べ！犯人が見つかった・・・ぞ・・・」

先輩は社長らしき人だったモノを手に抱えてやってきた。

「はうはう、もうお嫁にいけない・・・」

やっぱり犯人は先輩じゃないですか！

わたしのは、裸を・・・。

・・・落ち付きなさい、サラ。戦場では焦った時が命取りだぞ・・・。

落ち着いて、落ち着いて・・・
先輩を蜂の巣にしましようかw

わたしは脱衣所にあるM16を手に取り、先輩を撃つ。

「ははははははははは、当然の報いよ！わたしの可憐な肉体を見た報いを受けなさい！」

「ちょw止めれw死ぬ、死ぬってw」

先輩は銃弾を華麗に避ける。

華麗なのがまた腹立たしいw

「わかつた、悪かつた、許してくれ！」

先輩も懲りたようですね。

わたしも覚悟を決めましょうか。

先輩は好きじゃないけど主人公補正かかってるからいずれわたしのことも襲うでしょうし。

なにやっても許されますからね、主人公は。

あー、酷いですね、主人公。

エロゲでいうハーレムエンド迎える気ですよ、この先輩。

どうせわたしは先輩の肉奴隷に・・・。

伊 誠の二の舞になればいいのに・・・。

「そんなこと思つてねえよ！てか伊 誠の二の舞とか、オレをリアルに殺す気か！？オレはあいつほど軽い男じゃねえ！」

「はう、心読まれた・・・」

「いや、口に出してたからw」

はう、ああ、わたしにそんな性癖が・・・。

お嫁にいけない・・・。

とりあえず、先輩は一応許したつもりなので、本日の話はこれで閉幕としますか。

第4章第8話 華麗なるデート逃亡劇W

7月21日午前8時

「駿、ウチとデートせん？」

「眠い、起きたくない、ひとりでいけ
なんか暁がなんかいつてる。」

でも眠くてなんていつてるかイマイチわからねえW
まあいいやW

適当に返事しておこう。

「ひとりで行ったらデートやないやん」

「そうだな・・・お休み」

眠い。

マジ眠い・・・。

「そないな眠いならウチも一緒に寝てやる」

「そう、眠いなら寝た方がいいぞ」

ああ、意識が遠のいてきた・・・。

てか暁なんて言ってたんだ？

まあいいやW

オレは寝るW

今日は眠いんだW

同日午後2時

あー、なんか目が覚めてきた。

てか今何時だ？

オレは時計を見る。

2時か……。

流石に寝すぎたかな……。

でももう少し寝るかw

オレは近くに程良い大きさの抱き枕があったのでそれを抱えて寝た。

「駿もやつとウチを求めてくれたんやね」

「……暁か……」

暁か……。

そうか、この抱き枕は暁か……。

「って、なんで暁がここに!?!」

「そないな言わなくても分かかってる」

って、なにが分かかってんだよw

「この光景、オレが襲われるシーンだw」

オレは見た。

千年タ クでw

私には近い未来が分かるのです……って知るかw

何言ってるんだオレw

寝起きだから思考が……。

……もういいや。

今日は暁の好きなようにさせてやる。
オレと言う尊い犠牲を出しながらw

「なにしてるんですか、二人とも
少将か。」

「てか、思わぬ救世主w」

「少将、助けてくれ！」

オレは少将に助けを求めた。

すると、少将は少し微笑みながら

「あれ、先輩近親相姦が好きだったんですか？」

死ね！

てめえ裏切ったな！

「先輩もとんだ変態ですね、前から知ってましたけど」

知らなくていいわw

てか変態じゃねえ！

「あ、それとさっき中將に昇格したので少將はもう止めてください
ね」

今そんなことどうでもいいわ！

「それじゃ、ごゆっくり」

「中將助けるや」

「!!!!!!」

あの確信犯め！

他に助けてくれそうな奴は・・・あ、ハヤブサ！

「ハヤブサ、助ける！」

オレが叫ぶとハヤブサはすぐに人になってオレの前に来た。

「お呼びでしょうか？」

同日午後11時

「ここどこだ・・・てか寒いなw」

オレは寒いとこにいた。

「主の力を借りたから大分遠くまで来れたぞ。ちなみにここは北極だ」

そうか、北極か。

歩いて帰るには・・・って、陸続いてねえじゃんw

オレは途方にくれながら使い果たした力が回復するまで寒さに耐えていた。

第4章第9話 再会を語るのは剣で十分……って口調変わってない!?

7月21日午前9時

オレは何故かはやて姉の部屋に呼ばれた。

「駿くん、今から日本にいくわよ」

はい!?

何で今更w

つて、オレまだ半年残ってるだろw

「あなたの学校から卒業資格を得に行くの。優秀者は半年早く卒業できるのよ」

「でも今更何で……」

「轟騎くんも錬磨くんも卒業資格を与えるわ、私の権限で」

ちよwおいw

権限つてw

「それと、セントマテリアルから後日優秀な魔法剣士がこちらに入社するの。その子を見に行くのよ。あなたは剣に特化しているけど、彼女は魔法の方が特化している。我が社には魔法剣士が駿くんしかないから助かるわ」

はー、そうですか。

確かにオレは剣に特化している。

オレは召喚魔法が使えるけど基本的に通常魔法の方が詠唱は速い。

だから召喚魔法しか使えないオレは必然的に剣に頼ってしまう。

どのくらいかかるかと言うと、リアを召喚するには本来10分ほどかかる。

それでも早い方で、特訓したのと契約をしたおかげで現在は1分ほどで召喚が可能だ。

「まあ、事情は分かったけど……」

「なら行きましょう」

はいはい。嫌だと言ってもどうせ連行していくのでしょっつ。
一応断つてはみたが必然的に連行されて行ったw

7月23日午前8時

長かった……。
学院まで長かった……。
ここまで遠いのか……。
「さ、まずは校長室よ」
オレははやて姉に腕を引つ張られる。
もはやオレの意志など関係なしにw

「うわああああああああああああああああああああ
もうオレ宙に浮いてるしw

はやて姉はやはり可憐で強靱な肉体の持ち主で、僅か1分で校長室
に到達した。

ちなみに玄関から走っても3分の位置にありますw

「失礼します、校長」

「お、久しぶり！」

あのスーパーサイヤ人はボディビルディングをしていた。
気持ち悪w

「で、この間の用件か？じゃ駿、こつち来い」

命令口調は腹立たしいw

「はい、来た」

「ほらよ、卒業証書」

おいw

こいつ投げてきやがったしw

しかも筒に入れた状態でw

しかも「ほらよ」ってw

せめて「おめでとう」「は言えよw

お前マジ校長か！？

「それから夏に卒業した人の名簿、たった10人しかないけどお前と中良い人はほとんど入ってるぞ」

「ああ、そう。それと仲良いつて字間違ってるぞ」

オレは間違いを指摘してから名簿を見る。

今夏卒業生

50音順

1・赤坂刹那

まあ、あいつは天才だしな。剣も魔法も。

2・井口彩加

だれだこいつw

3・片瀬駿

オレか。

4・小林はるか

はるかは優等生だしな、当然の結果か。

5・以下略w

「うおおおおおおおおおおおおおおおおいw」
略された人の気分になって見るよw

しかも50音順なのに錬磨と轟騎が抜けてる!?

「ちなみに轟騎と錬磨ははやての命令で後で追加したから下に書いてある。略したけど」

は、そうですか。

「てか授業サボってたのになんで卒業できるんだよ」

「えー、希少魔法属性だから？」
レアマジック

何故疑問形!?

「このやりとり前にもしたな・・・えっと、確かあれは医者やってたときだから去年の冬か」

あんときの藪医者貴様だったか!!
ぶっ殺すw

「話し終わったなら次の話に移るわよ。うちの会社に入社する子に
会わせてもらえないかしら」

「おう、ちょっと待ってる」

校長は部屋から出て行った。

数分後

「彼女だ」

「へえ、あなたがね……。確かに剣の腕がいらいしいけど……ちよっとうちの弟と手合わせできる?」

ええ、オレ!?

「そんな、吾はそこまで腕の立つものでは」

「結構古風な話し方ね」

「我が家の風習だ」

へえ……。てか、話し方変わってない?

刹那さんw

「それで、吾の相手とやらはどこに?」

「そこにいるじゃない」

……。やっぱりオレっすかw

「片瀬か」

「あ、あのはやて姉。オレこいつに負けたことあるんだけど」

そう、オレは以前こいつに負けたことがあった。

今は人外な身体能力や五本の妖刀、連続召喚や奥義があるけど……。

てか奥義なんて一般人相手に使えるわけないだろw

「片瀬、遠慮するな。全力でかかってくるがいいぞ」

「し、仕方ねえな」

オレはコクヨウとシロガネを抜く。

「ではでは」

なんか校長が言ってるけど邪魔だw

「いくぞ！」

オレはスピードを落として剣を振るう。

これなら刹那と互角に戦えるだろう。

だが、その考えは甘かった。

オレが剣を突き出した時にはすでに刹那は後ろにいた。

「汝の剣の腕はその程度か？」

「・・・こいつ、常人じゃない・・・」

「そうか、そうか・・・なら手を抜く必要もなかったか」

「さあ、かかってくるがよい」

お互い剣を構える。

そして互いに同時に動く。

速さは互角。

だが、あちらは魔力を消費している。

いずれガタがくる。

「く、速いな。吾についてくるとは」

「オレだって女に負けるようなひ弱な男じゃねえよ」

そのとき、刹那は怒り狂ったようにオレの剣を吹き飛ばした。

「吾を女だからとか、たかが性別で・・・性別で判断するな！」

そう言ったあと、さっきよりも速い動きでオレを追い詰めていった。

「速すぎる・・・」

オレは残った剣で刹那の剣劇を防ぐので精一杯。

「コクヨウ・・・オレ、どうやってたら・・・奥義を使わずに勝てる

？」

オレは手にした刀の名を呟っていた。

まだ覚醒していない黒曜の刀に力を込める。

「右斜後上空45。」

は？

なんだか分からなかったが、オレは言われた位置を斬る。

「・・・くつ、何故分かった・・・」

オレが地面をみると、右腕に大きな切り傷を負った刹那が倒れていった。

「あの一撃は絶対に分からなかったはず・・・」

「私の分析結果に間違いはありません」

「だ、だれだ!？」

オレの持っている刀が輝きだした。

そしてコクヨウが人に変形した。

「私はコクヨウ。名前の由来は黒曜石。私を作ってくれた人が私の中に埋めてくれた石です」

「刀が喋った・・・」

「こいつら、妖刀なんだ」

オレは申し訳なさそうに言う

「・・・反則だ!もう一回やれ!」

「その腕じゃ無理があるだろう。早く手当てしないと・・・」

「いい!吾は汝を倒さねば気が済まん!」

・・・滅茶苦茶痛そうにしてるじゃんw

確かに反則だったかもしれないけどさ・・・。

「まあ、いいじゃない。二人とも仲良くね」

「だ、だれがこのような・・・」

「はいはい、どうせこいつと任務をこなさなきゃいけないんだろ」

オレはコクヨウと、地面に投げ出されたシロガネを腰に差した。

「はやて姉、帰る前に会いたい人がいるんだ。いいかな」

「駿くんのためならいつまでも待ってるわ」

はやて姉の了承もとったし、ここにきたついでだ。

あいつに会っていいこうか。

第4章第10話 我が社によっこそ！そして我が社は何故かオレの手に……

オレは寮に赴いた。

「オレの部屋か。久し振りだな」

オレは部屋の扉に手をかける。

「誰です!?!」

中から威嚇の声が聞こえてきた。

そして、扉を開けた瞬間雷撃が飛んできた。

それをオレはシロガネで受け止める。

「オレだよ、はるか」

「駿様!?! 駿様は記憶喪失になられて現在行方不明と……」

何時の話だよw

「情報が古いな。オレはあの後千秋に再会し、そしてアメリカに渡って会社ひとつ潰して今ははやて姉が働いてる会社で働いてる」

「そうでしたか。それなら私も連れて行ってくれませんか? 私は駿様のメイドですから」

いや、メイドはこっちが恥ずかしいw

「はやて姉なら許してくれるよ。後社長も女好きだからきつと入社できるさ」

するとはるかは笑顔になった。

最初っからだけどw

で、現在。

「はやて姉、はるかも入社いい？」

「駿くんが決めたならいいわよ」

へ？

なんで？

「え・・・なんで？」

「あら何言ってるのよ、社長はあなたでしょ？」

ええええええ！？

「何時の間に！？」

「あなた、シンを殺したじゃない」

マジで死んだのかよ！？

葬式は！？

「葬式ならないわよ。下水道に捨てといたから」

かなりひでえ扱いw

今回ばかりはあの野郎がかわいそうだw

もう死んでるけどw

「まあ、全員殺す気満々で虎視眈眈とした状況だったから誰が殺してもおかしくはなかったわ」

・・・へえw

「オレの奥義に虎視眈眈って奥義があるんだけど」

「それがどうしたの？」

いや、関連性があるのか聞きたかったただけだw

「で、なんでオレが社長に？」

「それは勿論、みんなやりたくなかったからよ」

そんな理由かよ!?

どこの学級委員長選抜ですか!?

「駿くんならみんなついていくわ」

ああ、そうですか。

じゃあオレの好きな風にしていいんだね、ははは。

あれ、なんでだろう。なんか涙ができたよ・・・。

きつと中将のオレの扱いが一層酷くなるんだろうな・・・。

絶対「社長権限で」とか使ってきそう・・・。

オレはそんな男じゃないのに・・・。

「用は済んだの?なら轟騎と錬磨も連れて帰りましょう」

ああ、そうだな。

考えても仕方無い!

オレにはほかに仲間がいるんだ!

え、何で轟騎と錬磨が拘束されてんの?

しかも錬磨は微妙に喜んでる!?

「錬磨・・・キモw」

ま、これで少し運ぶのが楽になった。

じゃあ、荷物と一緒に錬磨を入れていくかw

それで、飛行機に乗ったんだが、さつきからこんな状態だ。

「駿様、喉が渴いてはございませんか？」

「いや、気遣いは無用だ」

思い出した、はるかとはとつもなく世話を焼くのが好きだということに……。

しかもオレに快適な暮らしをさせるためには己をも滅ぼさんとした意志の持ち主だ。

その点はあるがたいんだがそこまでしなくても……。

「本当に気遣いはいらぬ」

「ですが私が奉仕しなければ現当主に父が怒られてしまいます」

あのババア！

はるか父さんに手え出したらぶつ殺す！

「でもお前の意志も尊重しなければならぬ」

「お気遣いは無用です。私は駿様と共にありますから」

いや、そこまでオレに執着しなくても……。

「オレが呼んだり、頼んだりしない限り自由に生きていいから」

「私は好きで駿様に使っているのです。駿様が自由に生きていいと仰るのであれば、私は駿様にご奉仕するだけです」

………もういいやw

結構頑固だな……はるか。

第4章第11話 女の喧嘩は超怖いWこりゃ、口出せないなW

7月23日午前7時

「まず一つ聞く」

「なに、駿くん？」

「何故ハワイにいる？」

「私が来たかったからよ」

「独断ですか！？」

と、皆様の察しの通り何故かハワイに来ています。

何故か飛行機にいなかった会社のメンバーも来ています。

特に来てほしくない中将もいますW

「先輩両手に華じゃないですか」

好きでこうしてんじゃないやねえよ！

右にははるか。

左には暁。

どうして千秋じゃないんだろう・・・。

あ、そっか。

オレはケータイを取り出した。

「もしもし、千秋？オレ、駿だけどハワイ来てくんない？」

「丁度いいです。私も今ハワイにいるんです」

ラッキーW

「今ホノルル空港にいるから」

「奇遇ですね、私も今空港に・・・あ、駿いましたよ」

「わわわわわ、今くるな！」

うわっ、ピンチ！

千秋が手を振ってるよ!?

暁、はるか離れるよ!?

「暁、はるか、離れる!」

「私は駿様に身も心も捧げた身です」

「ウチも駿に身も心も捧げたい!」

「助けて、中将!」

「あれえ、先輩女癖が悪いですよ?」

こいつに頼ったオレがバカだった・・・。

で、結局千秋に見られました・・・。

「あなた方は誰ですか?」

「私は駿様のメイドです」

「ウチは駿の妻や」

「お前は妹だろう!?!」

何嘘言ってるんだよ!?!

困るわw

「千秋、オレから説明するよ。こいつははるか。オレの学院で同じ寮の生徒だ。そしてこいつは暁。オレの双子の妹。それからこいつはサラ中将。オレの同僚」

「そうでしたか。では私も自己紹介をさせていただきます。私は椎名千秋と申します。椎名財閥の第一後継者であり、駿の正妻です」

「ま、今は結婚できないけど」

ふう、落ち付いたみたいだな。

まあ、暁が・・・泣き始めた!?

「駿のバカ、何でウチと結婚してくれへんの?」

「オレの妻は千秋だからだ」

「先輩、そこは『キングだからだ!』って言わないと」

ジャックですか!?

しかも何の関係が!?

「だからだを付けるときは『キングだからだ!』ってのは暗黙の了解じゃないですか」

知るか!

「なんならみんなで戦って残ったひとりが先輩の正妻でよくないですか?」

え、中将何言ってるんですか?

「良いでしょう。私も情けをかけるくらいの事はして差し上げます」

おいおいおい、どうするよw

千秋さん負けたらどうするんですか?

「ウチは負けへんで!」

「威勢はいいですね。私と戦って生きていた人はいませんよ?」

千秋って何気怖いからなw

何時どんな手駒を使って人を消すのか・・・。

「じゃ、エントリーする人はこの紙に書いてください」

面白くなってきたぞ・・・ってオレが賞品じゃん!?

気づくの遅れたw

数分後

「なんか社内の女性全員参加してますよ？」
は！？」

「なんで！？中将も！？」

「わたしは勝ったら先輩をこき使ってあげますからね」
困るわw

絶対に中将が勝ち残ってはいけないw

千秋、勝ってくれ！

「じゃ、エントリーナンバーを発表します！

NO1・椎名千秋さん

NO2・片瀬暁さん

NO3・わたしことサラ・ゴールドスミス

NO4・片瀬はやてさん

NO5・小林はるかさん

NO6・赤坂刹那さん

以下略w

略したよ！？

まあ、無駄に多くしたくないからなw

「言い忘れていましたけど、錬磨さんも出場しますよ、轟騎さんは
しないみたいですけど」

あいつゲイだったんだw

「錬磨殺してくるわw轟騎、手伝え！」

「おうよ、てか俺の出番久々だな。駿が生きてることは千秋から聞いてたけどここまで元気だとは思わなかったしな」

轟騎は特注のグローブをつけた。

「俺の武器だ」

滅茶苦茶イ スグロープに似てるんですけどw

「カツコいいだろ。お前の武器は？」

「ハヤブサ、オロチ、コクヨウ、シロガネ、イザナギ。五本の刀だよ」

オレは一本ずつ見せる。

「お前、同時に全部使えるのか？」

使える訳ねえだろw

「シロガネとイザナギ以外は人型になれるんだ。シロガネとイザナギもなれるらしいけど」

「へえ、魔法道具マジックアイテムか」

あまり関心がないようだな。

まあいい。

今は錬磨をぶつ殺す！

オレと轟騎は錬磨の元へ向かった。

第4章最終話 太陽とオレ+轟騎。どっちが強いでしょうか？明らかに勝てない

「錬磨てめえ、オレの正妻争奪戦に出るってどういことだ！」

オレは錬磨を見つけるなり刀で斬りつけるw

「オレは駿に振り向いて欲しかったんだ！」

「気持ち悪い、死ね！」

絶えず刀を振る。

可愛そうなので奥義は使わない。

「俺も流石に錬磨がバイだとは思わなかったからな、正直引いてる」

轟騎も言ってたぞ、いい加減に……。

「うるせえ、俺だって……C・F！」

うわ、炎の錬磨になるのか……。

「残念だが俺はお前が消えた後ひとりの召喚師に接触しているんだ。

今回は一味違っぜ」

錬磨はF・レオンと……なんだこれw

「S・ドラゴンさ」

そして二体の召喚獣と錬磨は融合を始める。

「ふふふ、後悔するんだな二人とも」

なんだ……あれは……。

「ソレイユフォーム……ちなみに前回はフレイムフォームな」

どうでもいいわw

ソレイユ……太陽か……。

「太陽は核の塊さ。現在俺は太陽に近い物質でできている。命の危

険性から通常より短い3分しかこの状態でいられないがお前たちを納得させるにはそれで十分だろう」

・・・錬磨らしくないなw

まあいい、降りかかる火の粉は払わねばならんしな。

「行くぞ、ハヤブサ」

オレはハヤブサを構える。

「俺も手伝うぜ」

轟騎がグローブに焔を宿す。

もう完璧死ぬ気の炎だろ、それw

「オレは錬磨を、倒す！」

「ついでに俺も手伝うぜ！」

二人で錬磨に襲いかかる。

「俺に勝てると思うなああああああああ！！！！」

錬磨は手からおぞましい程の焔を吐き出した。

正直錬磨がここまでやるとは思わなかった。

オレでも苦戦しそつだな。

オレもハヤブサを構えなおして錬磨を睨む。

「おまえじゃオレに勝てねえよ」

「俺もバイのダチを持つのはゴメンだね」

轟騎もその気になったか。

じゃ、いくぜ！

「奥義・・・」

オレは刀を脇に構えて右から横に一閃する。

「風！」

続いて縦に兜割り。

「林！」

そのまま左の腰から右肩にかけて切り上げ。

「火！」

最後に肩から突っ込んで切り上げる。

「山！」

そして刀を鞘にしまう。

「奥義・風林火山！」

これはオレの二代前の継承者が編み出した奥義だ。

編み出してから全ての継承者が使えている。

ただ難度は高く、風を巻き起こしたり炎を纏ったりと人外な技である。

気进行操作してこれを利用する。

だが、錬磨はその攻撃をもろともしなかった。

「駿どけ！錬成拳！」

轟騎はグローブに鉄などを錬成し、鋼鉄の拳で錬磨に殴りかかる。

そして、

「錬成掌！」

錬磨の肉体の一部、つまり核を手に住らせる。

「核掌波！」

核を掌で爆散させる。

その威力は話に聞く原爆並の威力に違いない。

だが、やはり核は本体の方が強いようで、錬磨はビクともしない。

「あ、ありえない……」

「風林火山でもビクともしないし……」

正直、絶望的w

「俺を認める！」

が、しかし

「嫌だ」

「無理」

「……」

錬磨はしまいに泣き始めたw

「じゃあ、お前たちも認める技を見せてやるよ！」

錬磨は手に核を集中させ始めた。

「まずい、轟騎、お前だけでも逃げる！」

「バカか！俺なんかよりお前の方が！」

錬磨の腕に力が宿って行く・・・。

「消される・・・」

「あんなの受けたら・・・いくら防御陣を張っても死んでしまう」

「あの世で公開するんだな！」

字が違うってw

なに公開すんだよw

「デス・ソレイユ！」

錬磨は核が宿った腕を前に突き出した。

死んだなw

が、その時・・・。

錬磨が通常の姿に戻った。

「あ、時間切れだw」

「散々やりやがって・・・ぶっ殺す！」

「正直俺もビックリした。じゃ、行くぞ、駿！」

錬磨が弱くなったことをいいことにオレたちは錬磨を黄泉の世界に送ったw

8月1日午前9時

「ではでは、司会を務めさせていただきますサラが開幕を宣言します！」

なんだかんだで始まったなw

錬磨はリタイアさせたからいいけど。

「では、第一次正妻戦争スタート！」

聖杯戦争の間違いじゃ？

しかも第一次って何回やるんだよw

第4章最終話 太陽とオレ+轟騎。どっちが強いでしょうか？明らかに勝てない

次回から数話にわたって間章です。

主人公であるはずの駿が全然活躍しませんw

見事なまでに活躍しませんw

間章第1話 ついに開幕！女たちの乱戦、正妻戦争！！

正妻戦争

突如始まった謎の戦争。

明らかに聖杯戦争とかけている。

ハワイで開かれたオレを賞品とした女性たちの激闘。

無論、男のオレが出る幕ではない。

というわけでこの章はオレ視点は少ないだろう。

それだけ言っておく。

<千秋視点>

早速開催されましたね。

私はある理由からできるだけ戦闘は避けたいんですの。

バトルロイヤルを制す方法はただひとつ。

残ったひとりを潰せばいいんです。

まあ、これくらいなら常人にも思いつく手立てですけど。

それに気づいたものは戦おうとしないでしょう。

それを見越して私も手を打ってあります。

その辺のサルとは格が違う事を存分に味あわせて差し上げますわ。

「レクターを使って人を発見。そして洗脳し、戦わせる。これは私の魔術特性・精神操作、失われた精神魔法の力ですわ」

そう、実は私は大学ですつとこの魔術を研究していました。

そんな所そこらの洗脳とは違う、完全に意識ごと乗っ取る究極の魔術。全ての魔術を超える超魔法という魔法も太古には存在していたようですが、私が修得した精神魔法も太古に失われた魔術のひとつ。失われた禁術は全て凶悪なものです、使えるものは一握りしかありません。

それは今はあまり関係ありませんわね。

この方法で既に私は72人中6人を脱落させています。

<サラ視点>

戦うのは軍人の勤めです。
と言いながら既に8人抹殺しています。
しかもリアルに。

ま、あまり使えない人たちを狙って殺してるから給料を支払わずに済みますね。

あー、先輩の役に立つことしちゃった。
給料10倍にしてもらわないとw

「おや、あそこにも人が」

わたしは銃を構えます。

ですが、

「動きの勝手が違う・・・」

わたしの放つ弾丸はことごとく避けられ、

「あなたは・・・確か駿を下僕にするとかどうとか言っていた人で
すわね」

この口調、確か先輩の彼女の超お嬢様の・・・。
でも容姿が違う・・・。

「私、人を洗脳できるんです。憑依と違って私が直接接触しないと洗脳はできませんが、自分は無防備にならずに完全に意識を乗っ取ることが出来ます。これは憑依を上回っている点ですね」

この女、なんて凶悪な・・・。

わたしはナイフを構える。

勿論、銃も。

「ふふふ、わたしに刃向うなんてとんだお嬢様ですね。わたしは軍人ですよ？」

単純な身体能力はその辺の小娘よりは上回っている。

年齢が12歳というハンデあれど十分余裕はある。

「その子を殺しても無駄ですよ。私には被害はありません」
人質を取るわけですね。

わたしは知り合い以外殺す気でいましたから・・・

「そんなのわたしには関係ないですよっ！」

わたしは銃弾を放つ。

的確に弾丸を体内に埋め込んでいき、息の根を止める。

動きが他の奴らと変わったって所詮ランクが低い戦闘員は身体能力

も低い。

通常出せる力が3割といわれていますが、全て解放したところで元々の力が違うのでわたしはその何倍もの力をだすことが可能です。逆に、わたしの力を10割解放したら無敵でしょう。

「お嬢様、わたしを敵に回さない方がいいですよ」

「なかなかやりますわね。ですが手駒ならいくらでも存在します。

現在の脱落者で38名。私とあなたを除いてまだ32名残っていますわ」

「そんなことしてもわたしには勝てません。先輩には内緒にしていきましたが、実はわたしの階級は」

そこで一度息をのむ。

「中将ではなく、大将ですから。さらに次期元帥候補でもあります

よ」

「そうでしたか、この身体ももう持ちません。またお会いしましょう

う」

そこでお嬢様との交信が切れた。

間章第1話 ついに開幕！女たちの乱戦、正妻戦争！！（後書き）

だいぶ前から考えてはいたんですけどオリンピックと同時期に開幕
するとはw

間章はたぶんオリンピックより早く終わると思いますw

間章第2話 武士の誇りをかけて、尋常に勝負！！

<はるか視点>

ふう、これでどのくらいになったんだろう。

参加者は・・・あ、脱落者リストがある。

「駿様、待っててくださいね。私は永遠にあなたにお供しますから、今暫くお待ちください」

えーと、残っているのは・・・やはり千秋さんは強敵ですね、残り20人まで減ったのに余裕で生き残っています。

うちの学院の生徒もまだ誰も脱落していません。

そう言えばうちの学生と言えば彼女らも参加していましたね。

「刹那さん、円さん、柚季さん、まだ生き残ってらっしゃるようですね」

三人とも強敵です。

ありえないくらいに。

ですが彼女らを超えてこそ駿様のメイド。

主を守れぬ侍女などこの世にはいません。

小林はるか、いざ参ります！

って言っても相手を探さなくてはいけませんね。

<刹那視点>

誰だ？

「お、確かあんた駿の友達の・・・刹那やったやろか？」

「吾を知っているということは、片瀬の何かか。ここで会ったのも何かの縁。武士の誇りを懸け、いざ、尋常に勝負！」

「わわわ、ウチ駿の友達には手ださへんよ？」

この関西少女・・・生意気だ！

「てか、なんでそんな古風な喋り方なん？」

「い、家のしきたりだ！吾も好きでこの喋り方をしているわけではない！」

中学の時までは普通の女の子とさほど変わらん喋り方しておった！

「ま、仲良くしよう」

「手を組むのは好きではない」

「ウチの兄貴知ってる？あんたの大好きな駿の双子の妹や！ま、これが終わったらウチは妻になるんやけどな」

「わ、吾は・・・吾は片瀬が・・・す、す、す、好きでは・・・」

・・・片瀬・・・あやつは吾が倒すべき相手！

決して好きなどと言う感情ではない！

「なんや、顔が真っ赤やないか」

「・・・汝、斬る！」

吾を怒らせた罰だ！

報いるがいい！

「煉獄！」

刀に魔法で焔を纏わせ、斬りかかる。

吾は風属性魔法以外にも使えるのだ！

この小娘に片瀬をとられてなるものか！

吾は片瀬の妻になる女だ！

・・・吾は何を言っておるのだ！？

「わわわ、止め、止め・・・第三ノ型 エクスブレイカー！」
む、こやつやりおる。

一瞬で気持ちを切り替えて自分の奥義につなげおった。

「そっちがその気なら、ウチも手加減せんよ？」

拳法を使うようだな。

「臨むところ！」

片瀬とは流派が違うが、歴史は共に長い。

今一度あやつと決着を付けるまで、吾は決して倒れん！

「煉獄！」

「第一ノ型 リミットバスター！」

二人の中間で爆発が起こる。

吾はそのまま爆風の中を突っ切る。

そして、

「朧月！」

「！？間に合わない！？」

普通の剣士ならば返り討ちにあっていたであろう。

なかなかやりおるな、あの関西少女・・・。

「吾に刃向わぬ方がよいぞ、次刃向えば汝の命はなかるう」

これも武士の情け。

だが、奴とは再び巡り合うであろう。

< 暁視点 >

なんや、あれ。

さっきの絶対やつあたりやないか。

にしても強かった・・・。

今のウチじゃ倒せないかもしれへん。

こうなりよつたら・・・リミットバスターの真の力を解禁するしかないかもしれへんな。

間章第3話 本日はヤンデレVS巫女さんです。後、観客席がカオスなことにな

非常に久しいな。

オレだ、片瀬駿だ。

前回オレ出てないしなw

ここで轟騎と実況させてもらう。

前回の2話のうちに既に3日経った状態だ。

ちなみに今日は4日目。

一日目に千秋たちが戦って、三日目に暁たちが戦ったってところか。

椎名財閥の最新鋭の衛星と監視カメラのおかげでどつからでも見る
ことができるぜ。

「なあ、駿。今だれだれ残ってんの？」

凶暴な奴らばつかだよ・・・w

「じゃ、言うか。現在13人まで減った。でも残ってる奴らオレたち
ちが知ってるとおりの危ない奴らが大半だから」

読み上げます。

千秋、はやて姉、はるか、刹那、暁、円・・・誰だっけ？、柚季・・・
ってマジかよw、湊・・・こいつもいたんだw、飛鳥・・・何故
に？、サラ中将、錬磨・・・死ぬ！、満・・・誰？、それと千秋の
人形にされている奴。

「満に関しては俺から説明してやる。羽柴満はしひらは俺の幼馴染で、今だ
登場していない。典型的なお節焼きで怒ると、一言で般若だ。そ
れとイケメンと金持ちに目がない。以上」

ああ、説明ありがとうw

雑学王・神宮亮平さんw

「最近出番がなかったからな、俺も出てえんだよ」

「よ、14話ぶり！」

「てめえ、喧嘩売ってんのか？」

「勝てねえ癖に」

とまあ喧嘩になるw

「てか何でもいいけど駿と亮平とか言う奴、モニター見てくれ」

「み、満……」

「ゆ、袖季……」

< 袖季視点 >

私と先輩は結ばれるべきなのですよ、ですからこんな女は抹殺します。

「先輩は私といるのが幸せなんですよ、あなたの方が先輩とひとつになつたら……私は殺しに来ますよ……地獄の果てまで」

「うるさいな、ヤンデレは黙ってなさいよ。作者はツンデレの方が好きなんだよ？」

作者は禁句でしょう。

それにしてもこの女と先輩はどんな関係が？

「以前、亮平の家に来たあの人がカッコいいな……って思ってたらくん

な大会が開催されちゃうんだから。結婚できるならしたいよ！あたし、イケメンとお金持ちが大好きなんだ！」
この女、先輩を容姿だけで決めつけて……。
先輩とこんな女は一緒になっではいけない。
早く助けないと手遅れになっちゃう……。
「先輩の毒を抜いてあげないと。あなたたちのせいで先輩はおかしくなってる」

「うわ、病みすぎwてかあたし一番無関係だしw」
私はヤンデレの象徴ともいえる包丁を取り出す……。
それなりに雰囲気が出てきたでしょう。
ふふふ、あなたの死んでる姿……見たいですね……。

<満視点>

初登場がこんな登場ってのはキツイなw

あ、あたし羽柴満、高校3年生の17歳。
亮平の家の近くの神社の巫女やってます。
それと亮平の幼馴染もやってます。
亮平とは1つ上のお姉ちゃんだよ。
って言っても年齢自体は同じなんだけど。
あたし早生まれだからね。

「さ、あたしも頑張りますか」

まずはあのヤンデレ少女をなんとかしないと・・・。
ぶっちゃけあたしにはそこまで戦闘能力ないんだよね・・・。
喧嘩も中学校入った頃から亮平に勝てなくなっちゃったし・・・。
背も中学の時から亮平に越されちゃったし・・・ってこれは関係ないかw
あたしが今まで勝ってきた方法は、近くの植物に力を借りて戦ってたんだけど・・・ここ海岸なんだよね・・・。
水の精霊と交信して力を貸してもらえれば問題はないんだけど。
魔術と違って精霊の力を借りなければあたしは力が使えない。
あたしの使う術は召喚術の劣化術みたいなものなの。
そりゃ、魔術師じゃなくて巫女だからね。
と、説明はここまでにして

「水の精霊よ、我に力を貸したまえ・・・」

< 駿視点 >

オレ視点つっても二人の戦闘をモニターで解説するだけだぞ？

「片瀬、満と戦ってる奴ってどんな奴なんだ？さっきから話してるみたいけどモニターじゃ音が聞き取れない」

「ああ、間違いなくあいつはこう言ってる。先輩と私は結ばれる運

命なんですよ、先輩にとってそれが一番幸せなんですよ系の事を」

「ヤンデレか・・・オレは天然が好きなんだけどな」

亮平はボソツと呟く。

「じゃ、湊の戦況でも見るか？」

「な、何を!？」

ま、いいか。

「あ、戦闘が始まったぞ」

「音量を上げるか」

人工衛星なのに音をキャッチできるといふありえない技術を編み出した椎名財閥に感謝だなW

「先輩に近づく者は抹殺します!」

「あたしだってイケメンと玉の輿を手に入れるチャンスを逃さないんだからね!」

・・・なにこれえw

「駿はいいね、俺なんて顔はあんまり良くないからさ」

「顔の問題かよ・・・てかこれあんま嬉しくないぞ」

「ヤンデレに愛されるのっていいよね・・・病むまで自分を愛してくれるんだから」

轟騎・・・ヤンデレ好きだったんだ・・・。

てか、こいつに愛が足りてない・・・。

「満・・・お前・・・」

何故か亮平がガツクリ来ているw

「前々から知ってはいたがお前がそこまでイケメンと金が好きだったとは思わなかった・・・」

あ、見損なってるw

「確かに月収億の駿は凄いよな、でもヤンデレが好きになる条件はそんなんじゃないし」

・・・もう観客席がカオスなことになってる・・・。

間章第4話 決着！悪意の黒焰VS聖者の息吹。駿は結末にビックリW

<飛鳥視点>

「あ、誰かが戦ってる。ここは漁夫の利だね」

あそこには水を操ってる人と炎をまき散らしながら包丁を振り回してる人がいる。

片方がやられたら魔眼で動けなくして、それで終了。

このやり方は成功率が高いんだ。

「・・・長いなあ」

やっぱり残りが少なくなってきたから強豪しか残ってないのかな？

「一般人の出る幕じゃないわよ」

はっ！

誰、何処！？

「あなたに名乗る必要はないわ。殺さないでおいてはあげる。」

エヴォリューション
E・

バースト
B!」

どこからか光線が飛んできてそれを間一髪で避ける。

この技は・・・片瀬はやて・・・。

「詰めが甘いわよ」

はっ！

気づくと既に後ろに光線が近づいていた・・・。

<はやて視点>

あの二人もいずれ気づくだろうから、先においとましますか。

「この子、まだまだ魔眼を使いきれしていないようね」

一応気絶で済ませておいたから病院に搬送しておこう。

これでひとり脱落。

残り12人。

私は魔砲を仕舞って戦場から立ち去った。

<柚季視点>

「先輩を穢すものにくせにやりますね」

「そりゃ、玉の輿がかかっているからね」

玉の輿って……先輩を財力で判断するゴミはすぐに排除しますよ、

先輩。

さつきから水の力ばかり使ってきてるけど、全て海から引き寄せている。

本来水属性魔法は何もないところから水を呼び寄せる術。

これは海から移動すれば、水の力は使えなくなるタイプの術。

そうすれば私の属性・火属性魔法が最大限に活用できる。

「あ、どこ行くの！？待ちなさい！」

ふふふ、あの女は私を追いかけてきているようね。

このままいけば森。

あのタイプは魔術でも何でもない術。

巫女の力でしようね。

精霊の力を借りないと術を発動できない。

つまり、森に移動すれば木の精霊か土の精霊に頼る他なくなる。

火は木にも土にも強い。

ふふ、私の方が有利ですね。

そして森の中に入った。

「ここで引導を渡します。先輩と私の未来の為に死になさい！」

「ここはあたしのフィールド、森。木の精霊の力は最大限に使える！」

あの女が地面から木の根をのばして攻撃してくる。

が、全ては無駄。

「イクスプロード！！」

私が術を唱えるとあたり一面の木々が瞬時に灰になった。

「な、火の魔術師!?」

「私に殺されるか、消されるか選びなさい」

「どの道この世から消えるんじゃないわお断りだね!」

調子に乗りすぎですね、この女。

「あんたみたいなヤンデレ小娘に玉の輿を奪われてたまるものか!」

「・・・このクソアマア!」

殺してやる、殺してやる、殺してやる・・・先輩を財力で判断する女は全員抹殺してやる!

「空の神々よ、我に力をかしたまえ・・・聖者の息吹!」

「死にさらせええええ、マリシヤス・ダーク・フレイム!」

聖者の閃光と悪意の黒焰がぶつかり合う。

「一般人だつてやる時はやるんだ!」

「お前は、絶対に殺す!」

こいつを殺さないと、先輩が・・・先輩が・・・。

そしてこの攻撃でこの戦いは終結した。

< 駿視点 >

あ、決着ついたみたいだね。

「ま、ありえない結果だね」

柚季が負けるとかw

「属性的に不利だったんだけど、強いな」

「満は化け物だったからな、昔から」

そ、そうなんだ・・・。

柚季は生きてはいるが気絶した。

脱落だな。

つてか、何見てんだオレ。

止めさせなきゃなんねえのに！

・・・ってさつき思ったんだけどはやく姉に置手紙で

駿くん、これは女同士の戦いだから手は出さないでね。出したらいいから駿くんでも・・・。

と、まあ。

こわw

間章第5話 狩人の心得その1、最後まで気を抜くな！以上。

残りは11人。

てか、錬磨女じゃなくね？

「片瀬、男が正妻戦争に参加していたから連行してきた」

錬磨w

残り10人w

「サンキュー、亮平w」

ここは喜ぶところだろうw

にしてもキモいなw

束縛されてニヤニヤしてるw

<円視点>

か、片瀬……。

「ここどこなのおおおおおおお？」

迷子になりました。

片瀬に会えるどころかお嫁さんになれるって言うから来たのに……。

「叫び声があったから来て見たけど、誰？」

あんだこそ誰よ？

「あ、人に名前聞くときは自分から名乗るんだったね。駿が言った」

か、片瀬が！？

こいつ何者！？

「ボクの名前は湊だよ。よろしくね」

「ま、円よ。よろしく……って私たち敵同士じゃない！」

こんなことしてる場合じゃない！

一刻も早く残り9人を倒さないと！

「いくよ、アブソリユート！」

近くの空気が一瞬にして凍る。

「わ、危ないじゃん。なんでこんなことするの？」

「あんだ、バカじゃないの？戦うためにここに来たんでしょ？」

「え、そうなの！？」

て、天然すぎる……。

でも、倒さないと……。

未練がない内に……。

「戦うのは狩りのときの感覚でいいんだよね？」

「そんなこと私に聞くな！アブソリユート・ゼロ！」

水属性魔術師では氷結界の円と言われる程学院では強かったのよ、私は。

それを素手で戦うなんて無理無理、勝てっこない。

「あたったら痛いよね、あれ」

な、避けたの！？

「狩人の心得その1、最後まで気を抜くな！」

はっ！

ひざ蹴り！？

避けれない！？

「ぐ、魔術師でもないのに……やるわね」

「そりゃ人生の半分を自給自足に費やして素手で熊とか狩ってりや
そうなるよ」

なんて奴!?

熊を素手で!?

魔法生物ほど凶悪ではないけど、生身の人間が勝てる動物じゃない
はず。

「もういい?行くよ!」

「や、来ないでっ!」

あの子の強烈な蹴りが決まる。

それを受けた私の目の前が真っ暗になった。

・・・死んじゃったかな・・・。

< 駿視点 >

思ったよりオレの出番多いなw

「やったぜ!湊ちゃんが勝ったぜ!」

「後は千秋とその人形、はやて姉、暁、はるか、刹那、湊に満に中

将だな」

見てないところでも見るか。

じゃ、はるかのとこだな。

「もうヤンデレ残ってないじゃん」

轟騎、キヤラ変わってるってw

そんなにヤンデレ好きか？

「もしかしたら暁がヤンデレ気味かもよ」

ヤンデレは好きじゃないけど。

<はるか視点>

だれもいません。

さつきからずっと歩いていますがけどだれもいません。

気配は感じているんですけど。

その方向に行っても人らしき姿は見当たりません。

どこにいますでしょうか……。

「あ、あれは確か……」

「あ、見つけました！」

見つけた！

やっと見つけた。

「いきますよ！ヴォルケーノグランド！！」

私の得意魔法、ヴォルケーノグランド。

これは大地に亀裂を入れてそこからマグマを放出させる地と火の魔法の合体魔法。

そもそもうちの学校の生徒で合体魔法が使える人は少数でしたから誇りに思っています。

合体魔法はテクニクのひとつで魔法属性とは違いますよ？

「生身の私では勝ち目はありませんわね、紫麗しれい、やりなさい」

あ、あの人・・・憑依が使えるのですか！？

紫麗とか言う人を操っています。

「私の魔法は憑依なんてレベルの低いものではありません」
た、確かに憑依したままは動けないはず。

「紫麗は私が洗脳した少女。私が命令すればなんだってしますよ、例えば」

紫麗さんは自らの手首をナイフで切った。

「ああ、そんなことしたら危ないじゃないですか！」

私はカバンから包帯を取り出して手当を始めた。

「甘いですね、あなた」

「はい？何のことですか？」

紫麗さんは私の首に手刀を入れて昏倒させた。

「手当は感謝します。それだけの情けですから、お命は無駄にならないようにしなさい」

< 駿視点 >

千秋の操ってた人の名前って紫麗って言うんだw
名簿についてたけどw

「残り8人か。最後に勝つのは誰だろう。てかみんな気使ってるの
かな？オレの知り合いはみんな気絶で済ましているし」

間章第6話 吾が剣を愛する者に捧げる

奥義発動!!

かれこれ一週間経ってるねw
ども、駿ですw

最近オレの出る幕が報告程度しかないって悲しいわw
それは置いといて、現在とても面白いことになっていますw

<刹那視点>

「煉獄!」

「飛燕旋空剣劇!」

く、この大会にこれほどまでの剣士がいたとは・・・。

「吾が神獄炎月流と並ぶ流派の使い手・・・汝、名は?」

「紫麗、九条紫麗」

吾もまだまだだな。

こんな奴に手こずるとは・・・。

これでは片瀬に勝てん!

「君には感謝している。洗脳を解除してくれたことに関しては」
洗脳されていると気付いた時、洗脳解除すれば力も弱まると思っ
ておった。

洗脳が解けたとたん、彼女は急に剣を取り出した。
その上、洗脳状態とは比べ物にならないほどの剣劇を繰り出してき
た。

「君はテイ　ズシリーズのゲームはやったことある？」

「ゲームなど生まれてこの方やったことなどない」

「そのゲームの歴代剣士の奥義を見極めて作ったんだ、この流派」
自身で作ったというのか！？」

しかもそんな適当なやり方で！？」

「そんな流派に負ける訳には・・・」

刀を構え直し、自分の知っている奥義の中で使えそうな技を考える。

「君には勝てないよ。まだ、その流派の神髓に達してないもの」
神髓？

奴は神髓に達しているというのか？

奴と吾はどこが違う？

相手には吾についてこれる速さはない。

だが、技で吾についてきている。

防御しているにもかかわらず、疲れを見せる気配もない。

ダメージを与えている気配もない。

考えられることは一つか。

「吾の攻撃が弱すぎたのだ・・・」

それに、吾は技に踊らされていた。

それを知ってて・・・片瀬は手加減してくれたのか・・・。

攻撃にも隙が多かった。

父上にはこのような隙はない。

・・・今の吾にはこれを直すことはできないであろう・・・。
だが、補うことならできる・・・。

威力の高い技で！

彼女は全てを回避ではなく防御している！

威力の高い技・・・あれしかなかるう。

これは片瀬以外には使うまいと思っていたのだが……。

「いざ、参る！」

「何をしても無駄、結局あなたは自分の技に操られているだけ」

「汝、この奥義を見ることができるとを光栄に思うのだな！」

こやつに生半可な攻撃は通じない。

吾も技は完璧には使いこなせていないことは自覚してある。

ただ、ただ吾は……

「片瀬以外には負けたくないんだ！他の者に負けては、片瀬に勝つことなどできはしない！」

「目つきが変わった……私、そんなに強敵だった？」

「そんなことではない。片瀬は見ているはず……吾はあいつ以外に負けてはならぬのだ！」

それと……。

剣士であること以前に、ひとりの女として。

惚れた男にいいところを見せたいのは当然であろう！

「神獄炎月流第一奥義・新月ノ耀！」

< 駿視点 >

なにあの技、グロウ

紫麗が全身血だらけw

ギリギリのところまで防御していたから死にはしなかったけど、これは勝負あつたな。

「な、駿これを！」

ん？

「片瀬、こんなことって・・・」

は？

「な、なに

！！！！！！！」

正直、ありえない光景が映っていた・・・。

< 刹那視点 >

こんなことなど……。

「ごめん、言い忘れてたよ。この体、機械なんだ」

血は……。

「血は本物さ。ベースは人間の体だからね。色々人体を改造してたらこうなった」

「汝、人ではないのだな」

「人造人間、サイボーグ、それとも生物兵器かな」

奴の腕からさまざまなコードが飛び出している。

右腕の機能は停止したようだが、それでも左腕がある。

「ははは、この体は痛みを感じないんだ。コードをつなぎなおせば腕なんてすぐ直るし。流石に感覚をコントロールされた時はコードがついてても指示が書き換えられていたから動かせなかったけどね」
通りでここまで強いわけだ。

だが、所詮人間が元だ。

並の人間が多少強化された程度では……吾に勝てる条件には程遠すぎるわ！

「神獄炎月流第二奥義・満月ノ耀！」

このまま左腕の機能も奪ってやろう！

「ははは、痛くないよ、痛くないよ!!」

「なっ!?!」

紫麗は強烈な蹴りを入れてきた。

「うぐっ……」

10メートル近く先の木に叩きつけられた。

全身のあちこちから激痛が走る。

今吾は目を大きく見開いているであろう。

そんな感覚だ。

全身に感覚はほとんどない。

流石は人造人間といったところか。

この状況で勝つことは並の人間には無理だ。

並の人間には。

だが、吾は並の人間ではない。

それに吾は誓った。

片瀬以外には絶対に負けないと・・・。

この体では戦うどころか、もう立つことすらできまい。

でも、でも、いくら傷ついても

ここで立てなければ強くなだれない。

私は好きな人を守る強さが欲しいんだ。

・・・あれ、言葉が戻ってる。

まあいい。

これが本当の私だからな！

刀を握る力を強める。

右腕が動かせない。

折れたかな……。

本来両手で戦うこの流派に片手を失うことは死に等しい。

だけど、私はここで負けることはできない。

ただ、歴代でそれを裏切った人がひとりだけいる。

「そう、裏切ったのはこの私だからな」

左腕で刀を構えなおす。

「別の流派を使う時が来たな。吾が姉が伝授したこの力を見るがい」

「さつきからぶつぶつ何言ってるの？この体には何をやっても無駄なのに。それに片手が使えないんじゃ技の型ができないでしょ？」

「奥義・鬼哭啾啾！」

この奥義は吾の姉の流派の8代目が編み出した奥義らしい。

この一撃を受けたものはその時の光景が忘れられず、一生怯えて苦しむという……。

悲しくも恐ろしい奥義だ。

「ははは、痛くないよ……でも……体が動かない……。それに……この感覚は……。懐かしい、恐怖って奴？あ、あれ、おかしいな……。涙が……。う、うわあああああああああああ
！！！！！！」

首のコードを切断したからな。

体が動かないのは当然だろう。

それに恐怖を植え付けたからな、この奥義で。

その状態で再び吾に刃向うことは無理であろう。

< 駿視点 >

な、何故あいつがオレの流派の奥義を……。
あれはオレの14代前の8代目が編み出した「奥義・鬼哭啾啾」……。

オレが使えない数少ない奥義のはずなのに……。

あの技は編み出されてからたった3人、刹那もあわせて4人しか使うことができなかつた奥義……。

何故あいつがああ技を知っているんだ……。

継承者はオレ以外存在しないはずなのに……。

間章第7話 大砲VS魔砲。魔砲少女に刃向う兵士

残り7人か。

大量の人が死傷したのは悲しいことだ。

はやて姉のせいでオレは手出しできない……。

実はモニターの部屋は、鍵がかかって出られないからだ。

しかも封印魔法やら結界やらなんやらでオレじゃ破壊も不可能。

まあ、生活環境には不便ではないけど……。

しかも亮平と轟騎は普通に出ていけるし。

はやて姉、オレだけに反応する結界はつていきやがった……。

本当にこんな戦い止めさせたいよ……。

ただ、知り合いに死者は出ていないのが不幸中の幸いだ。

可哀そうだけど、事故や天災で亡くなった知らない人をあまり悲しまないのと同じ感覚だ。

でも、胸が痛い……。

残りは

千秋、はやて姉、暁、湊、刹那、サラ中将、満。

勝率が一番低いのは刹那か。

あの怪我じゃもう持たないだろう。

そして一番高いのははやて姉か……。

普通に考えりゃな。

<はやて視点>

もう嫌になつてきたな……。

みんな吹き飛ばそうかな……。

残るは7名。

暁ちゃんとかもいるけど、威力を抑えれば気絶で済ませれる。

「おや、あれは人じゃないですか。久々の狩りですね……人を殺しつくしてしまったものでね」

後ろを向くと迷彩服を着た少女が立っていた。

「サラ、私を狙うとはいい度胸ね」

「はやて先輩でしたか。サラ・ゴールドスミス、既に20人を倒しました！」

この子……私より殺してる！？

つて、私は知り合いが多いから殺してはいないけど倒した数も多い……。

「というわけで、死んでください」

！？

撃ってきた……。

「あなた、本気ね……」

「戦場では殺さなければ死にますから」

この子……いいところを突いてきている……。

先読みもできているし……だけど私勝つには……

「この私に勝とうなど100万年早いわ!」

私は機械銃杖を变形させる。

エヴォリロササロアアテイラー

「行くわよ、E・R・A!!!」

「なら、わたしも!テオ!!アアテイラー!!!」

あなたも大砲を使うというの?

私の魔砲に勝てる大砲など存在しない!

「更に進化、テオ!!フランマルス!!!」

「行くわよ!」

既にチャージ率78%。

あと22%で発射できる。

「最終進化、テオ!!フランロガ!!!」

「よし、100%!!!」

行くわ、射出!

エヴォリロササロアアテイラー

「E・R・A、第一打!!!」

「フランロガ、LV1拡散弾!!!」

互いの弾がぶつかり合う。

しかし、E・R・Aの方が威力は高い。

だが、流星は中将と言っただけあって楽々と回避した。

エヴォリロササロアアテイラー

「E・R・A、第二打!!!」

「フランロガ、LV2拡散弾!!!」

威力は高くなったようだけどやはりE・R・Aの方が強い。

だが、サラはそれも回避した。

エヴォリロササロアアテイラー

「E・R・A、第三打!!!」

「フランロガ、LV3拡散弾!!!」

流星拡散弾最終形態。

E・R・Aを止めたことは褒めよう。

でも、私のE・R・Aには敵わない。

止め切れていないわよ。

「ひ、ぐあつ！」

ダメージはほとんどないようね……。

「まだあるわ、エヴォリロササロアーティラリーE・R・A、第四打!!」

「いやあつ!!」

直撃ね。

ただどこかで止めてはいけないわ。

この技は……5発は撃たないといけないのよね。

「終わりよ、エヴォリロササロアーティラリーE・R・A、第五打!!」

物凄い爆風と共に、激しい光が飛び交った。

爆風が引いた後、私は倒れたサラを見つけた。

「気絶しているだけのようね。外傷は多々見られるが、命に別条はなし。それにしても流石ね、サラ。常人では一発受けたら死んでい
るのに二発も耐えるなんて」

これで私を除いて残り5人。

もう少しで駿くんと結婚できる日が来るのね……。

血縁者は結婚できない？

そんな法律変えてやるわよ？

間章第7話 大砲VS魔砲。魔砲少女に刃向う兵士（後書き）

昨日更新するの忘れてしまいました。
ごめんなさい。

間章第8話 天然少女玉碎！目指すは玉の輿！！

思ったより長いな、この大会。

つてか、戦争。

「錬磨、暇だからカードゲームやろうぜ」

ちなみに錬磨は捕獲されてからここでオレと同じく軟禁されている。

「駿・・・やつと俺と遊んでくれるんだね・・・。じゃ、俺の萌えオリカデッキで倒してやる！」

「チートは反則な。ま、それをも超えてやるぜw」

ふふふ、こちらにも禁止カードを三枚積みしてるからなw

サ ダーボルトとかサ ダーボルトとかサ ダーボルトとかw
それから開闢とか終焉とかw

ま、それは置いといて。

モニターには湊と満の戦いが映ってるぜ。

「あれ、君誰？駿のお友達？」

「あのイケメンとは友達じゃないよ。ま、あたしの幼馴染とは友達らしいけど」

えーと、この可愛い子なんて言うんだらう？

「えと、ボクは湊だよ。よろしくね」

「名乗られたら名乗らないとね。あたしは羽柴満、よろしくね」
満っていうのか。

かわいい名前だね。

駿もこんなかわいい子の方が好きなのかな？

「じゃあ、今からお友達だね。さっきからいろんな人が襲いかかってくるんだけど何でかな？」

「・・・え、この子天然？」

天然？

なんだろ？

天然って言ったら・・・ああ、駿が前に言ってた。

ボクの家で海で獲れたマグロを食べたときに「やっぱマグロは養殖より天然の方がうまいな」って。

でも・・・どういう意味なんだろ？

「ま、何でもいいけどごめんね」

ほえ？

「きゃあああああああああああああ！！」
手足を木の根に縛られた。

何これ、魔法？

「ホント、状況理解してないとこ悪いんだけど、あたし玉の輿狙ってんだわ。悪いね、そこで大人しくしてて」

あゝあ、折角お友達になったのにどっか行っちゃったよ・・・。

問題は刹那。こいつは腕を一本折ってやがる。

「俺の読みでは、真つ先に刹那がやられ、次に満と暁がやられる。そしてはやくと隠れていた千秋が戦う。そして単純な強さで千秋は負け、はやくが勝者となる」

これが俺の読みだ。

普通に考えたらそうなる。

だがこいつらはこの通りに行くようなキャラじゃないけどな。それからもう一つのパターン。

「人形を失った千秋は新たな人を洗脳しに行く。楽に洗脳できそう
で強力な力になる刹那を洗脳。刹那の力を完全に解放し、はやくと
一騎討ち。これに勝ったら残りの二人も倒し、刹那を自らドロップ
アウトさせて千秋が勝者となる」
という考え方もある。

どの道暁と満、今の刹那には勝ち目はないだろうな。

間章第9話 巫女VS姫。駆使される木と剣と魔術

<千秋視点>

あの女、紫麗の洗脳を解くとは……。

洗脳解除されたことによりって人体の力が10割解放できることを知
つていて……。

ただ、紫麗がサイボーグだったことには驚きでしたわ。

人と感覚がまるで同じでしたもの。

あれは椎名財閥の技術ではない。

一条財閥の力のような……。

「あら、あれは……」

誰かと思うと紫麗を倒した子ですわ。

無防備に寝ていますね……。

「我、汝を従わせん。汝は我の僕なり」

洗脳完了ですわ。

彼女の剣の腕は一流。

良い戦力を手にしましたわ。

<満視点>

あ、人が寝てる。

チャンス!!

あたしついでる!

これで残り3人!

「ひゃっ、危ない!」

マジ?

ありえないでしょー!?

なんでいきなり動くの・・・。

しかもさっきの一瞬で肩を斬られた・・・。

「鬼斬」

くっ、傷口を的確に狙ってくる・・・。

この人、あたしを苦しめて殺す気だわ・・・。

なんか武者の亡霊みたい・・・。

「私の人形に勝てるだけでも?」

こ、この声はあの人から発せられていない!?

「私はこの方を洗脳しているのです」

そんな・・・。

洗脳ってそんなに完璧にできるものなの!?

「安心なさい。ここでリタイアするなら傷つけません。しないなら

瀕死にします。殺しはしません。時間を1分差し上げましょう」

・・・これって完璧命の危険だよね・・・。

どうしよう。

ここまで頑張って玉の輿を手にはできないなんて・・・。

悔しいにも程がある……。

「残り45秒」

死にはしないって言ってるから一か八か戦ってみるか……。
なら本体を潰せば……。
本体はどこだ……。

「残り30秒」

木の陰とか……水辺とか……。
いない……。
どこだ……。

「残り10秒、9、8、7」

ヤバイ……。

どうしよう……。

「3、2……」

ああああああ……いたっ！！

「世界樹の根！！」

大地の底から巨大な根を呼び出し、本体の少女を狙う。

「な、なんでこちらに!？」

もう遅いよ。

これに狙われたらね。

「体を守らないと……!」

「よつし、そのまま行け……うぐ……」
根が本体に到達し、頭を強く打ちつけた瞬間、あたしは人形と化した少女に背を斬られた。
はは、相討ちか……。
死にはしない傷だろうけど……痛いよお……。
刃物で切られたんだから当然か……。
止血しないと……。でも、体が動かない……。

< 駿視点 >

「ち、千秋

「み、満

亮平とオレは同時に絶叫した。

千秋が……。そんな……。

「一気に二人も脱落とは……」

「これで残りははやて、暁、刹那か……。刹那は洗脳が解けたはずだし」

満つて子、凄いな。

千秋と相討ちながら倒すとは……。

「……………」

「これじゃ、勝ちはやてだな。片瀬、覚悟しておけ」
・・・嫌だ・・・それだけは・・・はやて姉は絶対毎晩寝かせてく
れない！！
それだけは嫌だ
！！！！！！

間章最終話 姉妹の闘争、超展開な結末、そして集結する正妻戦争

この戦いも終盤か……。

残りにはやて姉、暁、刹那。

はやて姉が勝つに決まってる。

もう勝敗見えてるから戦わなくていいよ……。

はやて姉がなんか待ってるみたいだけど……。

「遅かったわね、妹たち」

「はやて、やっと見つけた!!」

「……姉上」

「……はい？」

姉上……。

「はやて、何でこの子のはやての事を姉上と？」

「いいわ、全て話すわ。私たちと刹那ちゃんは同じ父から生まれたの。そして私と暁ちゃん、そして駿くんは同じ母から。つまり、刹那ちゃんと暁ちゃんは義理の姉妹なのよ」

「……てことはオレとあいつも!？」

「てか親何やってんだよ!？」

不倫してんじゃねえw

「まさかうちの新社員が刹那ちゃんだったとは思ってもよらなかった

けどね」

なんかオレに隠してることたくさんあるだろ、はやて姉。
モニター越しだけど殴りたくなってきた……。

はやて姉に逆に殴られるだろうけどw

「はやて、ウチら姉妹やつたら傷つけあうのは良くないと思うよ」

「そうね、でもこれだけは譲れないわ」

はやて姉……そんなにオレの身を滅ぼしたいか……。

「あなた方にはここで消えてもらうわ、エウオリウイションバーストE・T・B!!」

はやて姉、魔砲はダメだつてw

「ウチだつて負けてるだけやない……真・第一ノ型 リミット・

ブレイク・バスター!!」

なんだありゃーww

リミットバスターの比じゃねえw

てか何で英名なんだよw

てか刹那シカトされてんじやんw

でも、なんか刹那笑ってるよ……。

「ふ、吾は運がいい。二人争っているうちに……奥義・一騎当千
!!」

ま、またオレの流派の奥義を……。

あ、そつか。

はやて姉に教えてもらったのか。

はやて姉が使える奥義だしな、あれ。

ま、はやて姉は早めに止めたから5種類しか使えなかったけど。

でもそのうち4種はオレが使えない奥義で……てかその4種だけ
使えない。

ま、それは置いといて。

これって漁夫の利じやんw

「はっ、油断してた!？」

「今からじゃ防御できへん！」
「……ありえない……。」
「はやく姉がやられるとかありえない……。」
「奇跡だ……。」

「勝者……赤坂刹那……」

「ありえねーw
マジかよ……。」
「てか千秋大丈夫かな……。」
「一応病院には運んだけど……。」
「あ、決着ついたから一応出れるんだ。」
「はやく姉が勝たなかったのはうれしいけど今は千秋の方が心配だ」
「病院に行かなきゃ！」

「千秋！大丈夫か！？」

「ええ、ちよつと脳震盪を起こしたただけでしたから」
よかつた・・・。

やっぱり千秋は笑ってる方が可愛い。

あの戦いのときのこわい顔よりも。

今、千秋は医者に安静にしてると言われたそうなのでベットで本を
読んでいる。

呼んでるものは最近人気のケータイ小説。

なんか涙流してるけどオレファンタジーものしか読まないしw

それにしても久しぶりだな、こんな平穏な日は。

このまま平凡に暮らしたい。

「そう言えば、千秋お前負けたけど・・・どうするんだ？本当にオ
レをあきらめるのか？オレは嫌だぞ」

「その件に関しては問題ありません。それと勝者は誰でした？」

ああ、千秋は知らないんだったな。

「以外にも刹那だったよ」

「彼女でしたか・・・あなたとは血縁はありませんね。はやてさん
と暁さんなら血縁者という理由で逃れられましたけど」

ああ、どうしよう。

でも千秋は微笑んでる・・・。

「ですが大丈夫ですよ、駿は安心してこれからも私たちを守ってく

「ださいね」

「なんで大丈夫なんだ？」

オレは千秋の言葉がなんか引っかかった。

なんかおかしい。

何がおかしいんだろう・・・。

「あなたは刹那さんと結ばれる必要はありませんわ」

ま、あいつとは義理の兄妹だし。

「だって私、お腹の中にあなたの子供を宿しているのですから」

・・・え？

第5章第1話 未来に託すこの思い、それをどう具現化するか・・・。

8月1日午前11時

正妻戦争が幕を閉じてから暫く経った。

だが、オレはこの上なく悩んでいる。

「やべえ、この歳で父親かよ・・・」

そう、先日千秋からシヨツキングな出来事を聞かされてからずっと悩んでいますw

十四歳の母じゃんw

千秋は確かまだ14だし・・・。

つつてもオレには養うだけの財力はある。 汚い金w

はあ、どうしよ・・・。

あの時千秋と話したことを思い出してみた。

「駿、別にシヨツキングな顔しなくても。私は産みますよ。他の家と違ってうちの財力は桁がはるかに違いますし、駿の子供は遠からず作る予定でしたから。あと3人は作るので頑張ってくださいね」

あの言葉にはもう返答できなかつたw

確かにオレは金はある。

でも社会的経験が足りなすぎる。
あっても裏社会のしかないw
せめて高校には行きたい……。
と、思っていると

「大丈夫ですよ、高校には行ってください。子供は私が面倒みますわ」

本気で産む気だ……。

別にそのことに関して反論はない。

でも親になんて言われるか……。

そう思っていると千秋はさらにその上を言ってきた。

「駿の親はいないじゃないですか。それに私の親はこのことに賛成していますよ。何やら片瀬家の当主と結婚できるのは幸せじゃないか……と」

「オレの家系ってそんなにいいのか!？」
それだけが異常に疑問に残ったw

8月2日午前10時

オレの部屋に誰かが訪ねてきた。

「どうぞ、あいてますよ」

非常にやる気のない声で返答したw

「これはこれは当主様、お初にお目にかかります」

誰だよ、この爺さんw

「お、お爺様!？」

はるかかの爺さんかいw

あ、はるかかはオレの部屋でメイドやってる。

「当主様、最近お悩みの様で・・・」

「何で知ってんの!？」

「はるかに聞きました、それで解決の手立てを考えてみました」

・・・解決できるもんなのかねえ。

「この先が不安なら未来に行けばいいじゃないですか」

「はあ、無理に決まってるだろw」

未来ねえw

「お爺様の魔法は次元魔法です。次元を歪ませて時空を超えることも可能です」

ああ、あの時の遺跡みたいな感じが。

そこでオレは五本の刀を・・・。

そんなことはどうでもいい。

「じゃあ、頼めますか？ざっと18年後程未来に」

「勿論です。準備に時間がかかるので、明日決行しましょう」
18年後。

何故この時代を選んだかというのと、オレの子供が大人に近づいてる頃。

オレもそこで何か学べるかもしれない。

18年後・・・つまり33歳のオレからどのようなことを学べるだろう。

違う時間の自分と出会ってはいけないと言われてるが、こんな人生を歩んできたんだ。

別に驚きもしないだろう。

8月3日午前8時

「じゃあな、はるか。オレが戻ってくるまでは千秋の面倒を見てくれ」

オレははるかの耳元でそう呟いた。

「はい！お任せください！
良い子だ。」

帰ってきたら未来のものでお土産に持ってこようか。
千秋を驚かせてやろう。

そして18年後の地球はどんな世界になってるのか。
地球温暖化で苦しい世界になってるか。

それともあんま変わってないか。
更に快適になっているか。
結構楽しみだな、未来に行くのも。

第5章第2話 あ、クレジットカード持ってないんだけど。自動販売機は不便

18年後の8月3日午前10時

「・・・ついたのか？」

「ここは・・・山中市か。」

まるで街並みが変わっていないw

ネオゴミノシティ並に変わってると思ったんだけどなw

店はだいぶ変わっているが。

「現在の状況を知るのが一番先かな」

ここに来たってことはオレの家もあるはずだ。

行ってみるか。

「オレの家がねえ!？」

オレの家はでっかいマンションになっていたw

やっぱ椎名財閥総本山にいるのかな、オレ。

なら売っぱらっちゃっても無理はない。

「なんか一瞬で行き先失ったわw」
オレはやる気がうせたのでベンチに座った。
のど乾いた……。
18年前の金使えるかな……。
とりあえずオレは自販機に行ってみた。

「な、なにっ!？」

自販機は……クレジットカード対応になっていた。
時代は進歩していたw
が、しかし。

「現金使えねーじゃんw」
逆に困るわw

自販機に小切手使うわけじゃないんだからw
てかガキ買うときどーすんだよw

と、脇のガキが普通にカードだして買っていた。
「18年後はガキすらカードを持つ時代なんですわw」
はあ……。

「あの、どうかしましたか？」
オレは誰かに話しかけられた。

「あ、いや……別に」

「おや、若き日の私じゃないですか」

「ああ、そうだね、未来の……オレエ!？」

まさかの遭遇w

そして何故か驚かない未来のオレw

「私も昔未来に来たことがあってね。そろそろ来るころだと思って
たよ」

こいつはオレが来る事を既に知っていたw

なんか未来のオレはあのでっかいマンションに住んでいた。
しかも屋上w

「はははは、それで自販機でジュースが買えなかったんですか」
マジ困るわw

あの自販機、オレは反対だw

「それはそうとして、なんでそんな他人行儀な口調なんだ？」
オレなんだからタメ語でもいいだろw

「嫌だな、私が君と同じ口調になったら読者が困るだろう」

あ、そっかw

「ま、聞きたいことは山ほどある。ひとつ目、何故ここに住んで
いる？」

「ああ、それは私の娘、梨瀬^{りせ}には私のようなありえない人生を送っ
てほしくなかったんだよ。確か18年前だったらもう殺し屋にはな
っていただろう」

ま、確かに。

「だから今は日本だけで活動し、そのことも娘には隠している。湧
いて出てくるような大金も隠している。それと、母親のことも」

「千秋を？」

「知つての通り天才の千秋は今も椎名財閥のトップだ。そして椎名
財閥は一条財閥を吸収するほどまでに成長した。そりゃ、天才とキ
モオタとじゃ基本能力が天地の差だからね」

我が娘の料理は天下一品だった。

なんか結構本格的な子で、ラーメンを麺から作ってた。

あと、スープもダシから作ってた。

将来の夢は料理人らしい。

一見幸せそうな家庭だが、本格的におかしいと気付くのはその日の夜であった。

第5章第3話 未来の片瀬家の現状。そして始まる脱出劇

8月3日午後8時

未来にいる間は未来のオレに世話になることになった。

で、オレはどうせだから梨瀬・・・まあ、我が娘にいろいろ聞いてみた。

「梨瀬ちゃんって高校どこ通ってるの？」

「私立椎名学院・高等部だよ」

・・・千秋んとこの学校じゃねえかw

千秋と面会はさせてるのか？

と、未来のオレに小声で聞いてみた。

（ああ、理事長が千秋だからね。時々徘徊して見てるって）

そりゃ、千秋もかわいそうだな。

愛しの娘を眺めることしかできないなんて。

「一つ下の学年に梨瀬ととても似てる子がいるんだけど、苗字違うのに勝手に姉妹にされてるんだ」

ぜってえ姉妹だわw

千秋側の次女だろw

「名前が椎名翠香しいなすいかだったかな・・・あ、今気づいたけど理事長の娘ってこの子か」

やべ、滅茶苦茶冷や汗かいてる、オレw

横見ると未来のオレも冷や汗かいてるw

（翠香って名前は私がつけた）

（んなことどうでもいいわw）

いやあ、気づかれると思うと滅茶苦茶ドキドキするw

（今更梨瀬は千秋の娘でしたって言えないしな）

（・・・ばれないことを祈るしかねえw）

「って言ってもあの子とは全然違うよね。なんか、お嬢様みたいなしゃべり方だもん」

(千秋の影響か?)

(そう、千秋がデフォルトであの喋り方だからな)

心なしが未来のオレも話し方がデフォルトに戻ってきた気がするw

「あ、そろそろお風呂入ってくるから。パパ、一緒に入ろう」

「そうだな、それじゃあ、煌くん。待っていてくれよ」

「おう・・・って、お前高校生の娘と風呂入るのかよ!? 犯罪じゃねえのかよ!？」

・・・梨瀬ってファザコンだったんだ・・・。

「私もこんな子にはしないつもりだったがね、こんな子の方が逆に可愛かったりもするのだよ」

・・・ぜってえ未来変えてやるw

犯罪者になりたくないからなw 既に人殺してるので犯罪者w

1時間後

風呂の前にあるトイレに向かう途中、オレはとんでもない声を聞いた。

あえて言わないが、その時のオレの反応は

「あの野郎娘に手え出してんのかあああああああああああああああああああ!!!????」

オレは、犯罪者には、なりませんw 人殺し（以下略

こいつらおかしい。

未来のオレおかしい。

どうかしてるよ・・・。

これは早いとこ未来の千秋に助けを求めろしかないか・・・。
こんなとこにいたら身が持たないw

で、翌日

8月4日午前7時

現在地・私立椎名学院

「・・・千秋は・・・どこだ・・・」
ミッシヨン

片瀬梨瀬が現れる前に千秋を発見しろ。
あいつらに見つかったら面倒になる。

千秋は・・・どこだろう。

まあいい。

そこにいる人に聞いてみるか。

「あの、すみません。千秋・・・じゃなかった、理事長ってどこっすか？」

「私にそのようなことを聞きに来る方は久々ですね
なんか特徴ある喋り方・・・梨瀬!？」

「じゃない・・・けど滅茶苦茶似てるじゃんw」

「こいつがオレの第二の娘か・・・」

「あの、もしかしてあなたは椎名翠香さんですか？」

「あら、知らなかったの？」

「いいから、お前の母はどこだ!今逃げてんだ!」

翠香は首をかしげ、

「私に命令口調とは・・・まあいいでしょう。母・千秋は理事長室
です。何なら送りますが」

「頼む!」

オレは翠香に手を引っ張られて理事長室に向かった。

その途中

「母とはどんな関係ですか？」

「え、夫」

「母はこのような子供にも手を出していたのですか。失望しました」
こいつ、母を嫌ってるな。

しかもさつきから千秋の愚痴ばっか言ってるしw
もういいや、黙ってよw

「着きましたわ、私も母に色々言いたいことがあるので一緒に一緒にさせていただきます」

「は、はあ・・・どうぞ」

オレは扉に手をかけ、開く。

扉の先には千秋が紅茶を飲んでゆっくりしていた。

「あら、翠香。どうしたのですか？」

「こちらの方がお母様に会いたいそうでした」

「千秋、オレだ」

余裕でタメ語w

「あら、若き日の駿じゃないですか。どうしたのですか？」

「え、お母様、どういう意味ですか!？」

「そのままの意味だ。オレはある方法で過去から未来に来た。ざつと18年前からな。千秋が妊娠した頃だ」

オレは現在最も困っている状況を言い渡した。

「計算が合いませんわ。私が生まれたのは今から15年と6カ月前。

ですが今妊娠していたと言っていました。それからだいたい8か月とみても妊娠していた期間が合いませんわ」
千秋の顔が青くなった。

こっちも説明してないのかww

「いいですわ、私から話しましょう。翠香、これから言う事をよく聞きなさい。あなたと3年生の片瀬梨瀬は姉妹です。分け合ってあなたとそれにあなたの妹・椎名月読しいなつきよみ（14）、椎名琉那しいなるな（12）とは別居しています。あなたの父、片瀬駿と共に」

「・・・そう、そうでしたの・・・何故お父様が別居しておられるのかようやく分かりましたわ。あの女、私の大切なお父様をひとり占めしていたのですね・・・」

あ、こいつもファザコンだわw

てかホントに4人産んだんだ、千秋・・・。

第5章第4話 お目覚めは翠香のキスで。そして今日の予定は月読とお出かけ

18年後の8月5日午前6時

「お父様！朝ですわ！早くおはようのキスを・・・」

眠w

「ああ、おはよう・・・うぐっ」
早速翠香に口を塞がれた。

・・・唇で。

しかも舌を絡めてきた。

未来のオレどんな教育させてんだよ！

「本当は夜のお相手もしたいのですが、それはお母様の特権ですわ。
はあ、憂鬱です・・・」

いや、それでいいよ・・・娘とするほど落ちぶれちゃいない・・・。
それにしたらこの小説めでたくノクターン行きだから。

まあ、模写があつたらか。

「てか、お前の妹は？」

オレはまだ見ぬ二人の娘を思い出して尋ねた。

「ふふふ、その口調のお父様も素敵ですわ」

要は父親が好きなんだろ。

しかもオレの質問スルーしたし。

「で、オレの質問は？」

「ああ、そうでした。今はお母様とお父様を待っていますよ」
そうか・・・。

つて、オレが待たせてんのか？

急がないとな。

10分後

「わり、待たせた」

「遅いよ、まあいつものことだけどね」

一番ちつちやい子がのほほんとした口調で話しかけてくれた。

てかいつも待たせてんのかよ。

「この子が三女の月読ですわ」

千秋が紹介してくれた。

彼女の事を三女と言っていることから、既に今の状況も説明済みらしい。

「そしてこちらが四女の琉那」

オレが振り向くと千秋の後ろに隠れた子がいた。

人見知りなのかな？

「この子は人見知りなんですよ。まだ状況を理解していないのでしよう」

はあ、まあいずれ打ち解けるだろう。

解けなくても過去に戻ったとき、一から育てていけばオレの事も分かるだろう。

ふとその拍子にオレはある事を思い出した。

「あ、そうだ。はるか爺さんしらね？オレあの人いないと帰れないんだ」

「はるかさんのお爺様ならひと月ほど前に亡くなりましたわ
そっか、亡くなったのか。」

せめて葬式には出たかったな・・・。

・・・・・・ははは、帰れねえじゃん。

どうすんのよオレ。

「暫くはここで暮らすといいですよ。あなたの母校に行けば次元魔
術師はひとりはいるかもしれませんよ」

そうだな、あそこなら結構希少魔法属性の持ち主もいるだろうし。

そう思うとオレは少しだけ希望を持てた。

・・・・少しだけな・・・。

「お父さん、今日お休みだから外に遊びにいこ〜」

お、月読か。

のほほんとした喋り方はやっぱり特徴的だな。

正直、千秋と翠香は声も顔も喋り方も似てるから困る。

二人の見分け方は胸の大きさ（千秋はまあまあ巨乳。翠香は貧乳）
と若さか。

つっても千秋の美貌は未だに衰えていないので（まだ悪く見ても二
十代前半）、正確には子供っぽさか。

翠香の顔はまだ、若干幼さの残る顔だ。

キスはだけは大人だったけど・・・。

で、一方月読はオレに似てるのかな・・・ってか暁に似てるが胸は
暁よりある。

勿論翠香よりもある。

まあ、貧乳じゃない。

翠香よりは揉みごたえはありそうだ……って、オレ何言ってるんだ。しっかりしろオレ、平常に戻るんだ。

このままだとノクターン送りだぞ……。

「お父さんなに顔赤くしてるの？あゝ、エッチなこと考えてるの？？」

凶星なオレは返答ができなかった。

「本当だったんだ。でも、そんなこと考えなくてもお父さんにならキ、キスしてあげる」

ちよつと恥ずかしくなってるな、月読。

てかキス以上のことは知らなさそうだ。

滅茶苦茶恥ずかしそうにしてるし。

「いいよ、好きな人にしてあげな」

「月はお父さん好きだよ」

……いいよ、もう。無理しなくても。

「月読も無理しなくても……そうだ、さっきでかけようって言ってたよな。どこに行こうか？」

急な話題変換だったが、放置していたことだったので良しとしよう。

「お父さんが行きたい所なら、月はどこでもいいよ」

そうか、ならいろいろ買わせてもらうか。

バイクとかバイクとかバイクとか。

バイクばっかじゃねえか。

というわけであんまバイクに詳しくないオレは、とりあえず高級そうなバイクを買いに行った。

で、今月読とバイクを見ているんだが。

「こ、これは……」

「え、お父さんそんなのに興味あるの？」

こ、これは……伝説の……。

欲しい……。

「これ、いくらですか？」

「10億です」

あ、ありえない……。

まあ、椎名財閥の金使えばほとんどタダだけど。

「なんでこんな高いんですか？」

「これの前の所有者が、キングだからだ!!」

まあ、お察しの通り、某キングのD・ホールですよ。

今じゃ元キングだけどね!

……諦めよう。

どうでもいいけどとにかくカッコよくて速くて使えそうなバイクが欲しい。

オレはバイクは全然知らんが乗ったことはある。

その後店員になんだかんだ言われたけど結局バイクは買わなかった。

第5章第5話 オレの剣が始まった場所

「お父さんこれからどこ行くの？」

「つつてもどこにも行く場所ないしな。会いたい奴にも遅くて後1月もしないと会えないし」

正直やることないw

はあ、どこ行こうか・・・。

そんなとき、ひとつの道場を見つけた。

「ここは確か・・・」

確かここはオレが剣の腕を磨いた場所だ・・・。

・・・師匠まだいるかな。

気になったので入ってみた。

「もつと腰を落とせ！」

どこからか指導の声が聞こえる。

「はい、師匠！！」

オレと同じくらいの男か女がよく分からん顔した奴が剣を構えていた。

懐かしいな。

オレは歴代でも早くこの流派を極めたからな。

まだ、使えない技があるが・・・。

「・・・お主は、駿か？」

「お久しぶりです、師匠」

師匠と弟子がこちらを向く。

「にしてもお前、成長していないのか？」

「過去からタイムスリップしてきました」

「嘘だろ」

「マジっす」

「ありえない」

「なんなら剣の腕で試してみるか？」

「無理、勝てない」

師匠はオレに勝てないのであつたw

「師匠、この方は？」

「我が弟子、22代目継承者の片瀬駿だ」

「よろしく。お前は23代目継承者か」

「はい、ぼくは円城洸えんじょうひろといいます」

いやまた名前も男か女がよく分からんw

髪の長さは男にしては長め、女にしては短めってどこか。

ますます分からんw

身長は165前後。

・・・分からんw

腕の太さは・・・オレと同じくらい・・・つってもオレ滅茶苦茶細

いんだよなw

うーん、ますます分からなくなってきた。

でもここで聞いたら失礼だよなw

「自己紹介は済んだか？駿、この奥義書で新たな奥義を修得するんだ」

オレはなんか奥義書にしては目新しい書物を手にした。

「これは？」

「そうか、過去から来た事を信じてやろう。それはお前が10年ほど前に書いてよこしたものだ。クロ コメール便でな」

・・・そうか、未来のオレが。
クロ コメール便を使ってw
よく覚えてるなw

「それを読んで見る」

オレはその奥義書を開くと

「なにこれえw」

まさにやっつてること人外w

うちの流派22代目の奥義は人外w

「五刀奥義・天変地異・・・いや、これ不可能でしょw」

「五刀は前代未聞だ。多くて三刀だったのに」

なんか地震起こしたり、雷落したり、周りを吹雪にしたり、
つくつたり、溶岩を噴出させたり、
鎌鼬かまいたち

「未来のオレこんなのできんの!？」

「みたことないw」

・・・ここに書いたことはだいたいが可能。

ただ、普通の刀じゃ不可能。

地震はコクヨウの力を借りれば不可能ではない。

雷も空をつかさどるハヤブサの力ならできる。

溶岩もオロチの力を借りればできる。

恐らくシロガネの力で吹雪を起こし、イザナギの力で鎌鼬を作るの
だろう。

だが、シロガネとイザナギはまだ覚醒していない。

それに普通の刀じゃ不可能だ。

「駿よ、その奥義書は元々お主のものだ。自由に使うがよい。だが、
その代り」

「その代り？」

「この子の稽古をつけてもらえんかな？」

その程度か。

「了解した」

「片瀬さん、凄いですー!」

「そりゃあ、お前よりも5歳ほど若い時にほとんどの奥義を修得していたからな。今使えないのは4つだけだ」

「その4つの奥義書も貸してやるっ
いや、今はいいからw」

と言いつつ借りたw

「お父さんおそ〜い」

「ああ、わりこ」

オレは詫びを入れる。

「それより早く帰ろうよ、さっきお母さんからメール来て今日は御馳走だった〜」

お前らはいつも御馳走だろw

「だってお母さんの手料理だよ!」

ああ、なるほどw

確かに千秋の料理はそんな所そこらの一流シェフじゃ勝てないからなw

「千秋は料理上手いけど翠香とか月読とかは料理得意?」

果たして料理の腕は継承されているのかw

「翠香ちゃんの料理はこの世のものとは思えないよ」

オレは瞬時にある光景がフラッシュバックしたw

・・・湊・・・。

あいつの料理もこの世のものとは思えないw

「だって闇鍋しか作れないもん」

ええええええええええええw w w

闇鍋w

湊でもそこまで・・・。

頭の中で想像を絶する料理のことが渦巻いているが、一応月読の腕も聞いてみた。

「で、月読の腕は?」

「月のは人並みかな?」

ああ、そう。

一応聞いたけど、今頭の中に想像を絶する料理のことしかないよw
まあ、待っているのは闇鍋ではなく千秋の神料理だ。

安心して食べようw

第5章第6話 奥義特集！オレの剣術に平伏す地獄の番犬w

オレと月読は手を繋いで仲良く帰っていた。傍から見れば付き合っているようだ。

で、オレが生きる道に障害はどこにでもある。

やはりゆっくり帰らせてはくれないようだ。

「情報は正しかったようですね」

「・・・この声どつかで聞いたことあるなあ・・・忘れてんだから大したこともないんだろうw

「お父さんあんな人を変質者って言うの？」

月読が指さす方向にはどつかで見覚えのある顔が。

誰だっけ？

敬語使う男ってこの小説に出てきたっけか？

「まあ、あんなにやけた顔の奴はだいたい変質者だから近づいたらダメだぞw」

「わたしの話を聞きなさい！」

「誰だよおまえ」

オレより背の高い長身の男だ。

「地獄から舞い戻ってきましたよ、片瀬駿」

「お前あったことあったっけ？」

「わたしですよ！ガルツ！！」

ああ、そんな奴いたな。

「よ、久しぶり」

「よ、久しぶりじゃない！わたしを殺しておいて・・・」

ああ、オレが殺した数少ない人間か。

「で、なんか用？」

「この世界では既に失われた五本の妖「そのまえになんで生きてるの？」」

徹底的にシカトw

もういじめの域に到達してると思うw

「すぎた埋葬を使わせてもらいました」

「サイ ロン使ってOK?」

「止めなさい！それでわたしは五本の妖刀を頂きに来ました」

「そう、オレ倒したらあげるよ」

「そうだ、未登場の奥義もあつたな・・・」

「試しにいろんな奥義使ってみるか。」

あと、ついでにこいつも倒すかw

というわけで検証してみた。

ある程度鍛えられた人間はオレの奥義を何発耐えられるか。

「一代目一刀奥義・阿鼻地獄！」

これは一代目の奥義。斬られて死んだ者は地獄に行くって伝承があるだけで殺傷能力は特別高くない。寧ろ斬られて生きていた者は、あまりの痛さに生き地獄を味わうってところか。

まあ、当然のごとく生きている。

次行くかw

「二代目一刀奥義・速戦即決！」

これは二代目の奥義。肉眼では捉えることのできない剣舞を披露する。正直これやると非常に疲れる。だが敵を速攻で仕留めたいときには非常に有能。

これでも死なないかw

しぶといなw

「三代目三刀奥義・生殺与奪!!」
詳しくは4章7話参照w

あ、もう死んだw

だが、まだオレのバトルフェイズは終了してないぜw

「四代目二刀奥義・百花繚乱!!」
詳しくは4章5話参照w

・・・なにこれえ、もうボロきれになってるw

「五代目一刀奥義・鉛刀一割!!」
五代目の奥義。この奥義はとある事情で剣を失った五代目が編み出したといわれている。襲いかかった相手を木の棒で両断したという。それを刃物でやったら大変な切れ味だったらしい。

もう地割れ起こってるしw

なんか生贄ガルツも両断されてるしw
だがそこで止めないオレは悪魔w

・・・と言いたいところだが、月読が涙目になってるところを見るとやめなくてはならない気がした。

ま、この記憶は消させてもらうぜw

オレはどこか見覚えのある装置を取り出し、フラッシュw
知ってる人は知ってるだろうけどw

月読は寝てしまったのでおぶって帰ることにした。
やっぱ女の子なんだな。

めっちゃくちゃ軽いわw

40kgねえぞ、こいつw

腕もほっせえw

そんなことより帰らないと千秋に怒られるw

オレは月読をおぶって全力で家に向かった。

第5章第7話 今日の夕食は鍋です。とてもとても力オスな鍋です

「ただいま！」

「あら、おかえりなさい。早かったのね」
もつと遅いと思つてたのかよw

「あれ、お家についたの？」

オレの背にもたれかかつてた月読が目を覚ました。

「そうですね、お父様を送ってくれたのですよ」

月読はオレの背から降りると走つて行つてしまった。

恐らく大広間だろう。

てかあの行動は中学生のものか？

「料理は今できたばかりですわ。冷めないうちに食べましょう」

「ああ、そうだな」

「私が腕によりをかけて作った料理ですわ」

どんな料理だろう。

冷めないうちに食べましようつてことは温かいものなんだよな。

オレはシチューが好きだからシチュー作ってくれたのかな？

オレが大広間に行くと・・・

「な、なんだこれは

！！！！！！」

なんか大広間の中央に大きな鍋が・・・。

中身はグロテスクなことになっているw

「ま、まさか・・・」

オレは記憶をたどつてみる。

・・・あのとき・・・。

「さ、お父様も召し上がってください」
く、食いたくねえ……。

翠香がニコニコしている。

オレの顔から血の気が引いていくのがよく分かるw

「あのさ、何入ってんの、これ」

「トマト、ステーキ、パスタ、墨汁「おい、今墨汁つつつたよな！？」」

墨入ってんのかよ!?

あの……翠香さん……食べたくないんですけど……。

「あとドリアン、ハバネロ、コーヒー、納豆、湿布「湿布!?!ええw納豆ならまだしもw」

てか納豆入ってんのかよw

オレは納豆が苦手中の苦手ですて……。

「全て厳選されたものですわ」

「金と食材の無駄だ。お前は今後一切料理禁止だ」

この判断は間違っていないw

絶対この後の世界のメリットになるw

「お父様がそこまで言うなら……」
よかった。

オレは椎名家を守ったぜw

「その代り、今日私と寝てくださいませんか？」

「……それって……もしかして……」

「べ、別にそう言う意味ではありませんわ!ただ、小さい頃から一緒に寝てくれないですから……」

ああ、そう……ってダメだ!!

何考えてんだオレw

「一瞬でも「それならいっか」と思ってしまったオレを殺したいw何言ってるんだオレw」

あゝ、気が動転しすぎてるよw
今何してんだっけ。

「駿、大丈夫ですか？」

「はっ！」

オレは千秋に現実世界に連れ戻された。

オレ何やってたんだろw

錬磨ですらこんな行動とらねえよw

はあ、あのクソオタク何してるかな・・・。

「・・・闇鍋は？」

「私が処分しました。料理も私が作りなおしました」

よかった・・・。

「それにしても駿も闇鍋食べたのですか？ぐったりと気絶してしま
したけど」

いやあ、理由が精神異常とはいえないわw

「ああ、材料聞いたらとんでもないもの入ってたよw」

特に非食材がwww

湿布はキツイw

「翠香にはしっかりと言いつけておきましたので大丈夫ですよ」
よかった・・・。

同日午後11時

「奥義・鬼哭啾啾！！」

カカシ相手に奥義の練習をしている。

「鬼哭啾啾は完成したな」

カカシが凄まじく怯えているような雰囲気を感じ始めたし。

オレはハヤブサを鞘にしまう。

すると突然拍手が聞こえた。

「お見事ですわ。何時見てもあなたの剣技は素晴らしいですわ」

「千秋、まだ起きていたのか」

千秋が微笑みながらこちらを見ていた。

一応千秋が確認した。

胸でw

「子供たちは？」

「翠香以外はもう寝ましたわ」

オレより年上の翠香がオレの子供ってのはなんか違和感あるけどなw

てか翠香が何をしているのか非常に気になるw

ま、どちらにせよ今日の鍛錬はこれで終わり。

鬼哭啾啾を修得しただけでも大きな進歩だろう。

以前見たおかげでいくらかはやり易かったな。

帰ったら刹那に礼を言おうかw

第5章第8話 剣道をやるのは久しぶりだ。・・・めんどくさいけどw

18年後の8月7日

「お父様も学校に来られたらどうですか？」

「え？今夏休みだろ？」

オレは翠香の方を振り向く。

何やらカバンを持っている。

「何それ」

「部活の道具ですわ」

・・・なんだ、こいつの部活。

「私、剣道部ですの」

剣道か・・・我流に走つちまったがあの道場で鍛えた剣術の初歩的な特訓が剣道だったな・・・。

まあ、オレあの流派にフェンシング取り入れちゃったしw

「そうですね、駿が教えて差し上げればよろしいのでは？」

見送りにきた千秋が急にそんな事を言い出した。

つてか、何がよろしいんだよw

なんでそれ以前に行かなきゃいけないんだ。

「私を見てくれないんですか？」

や、止めるw

上目遣いは禁止カードだw

「わーたよ、行ってやる」

「お父様の実力を拝見させていただきます」

いや、家族だから別に謙譲語使わなくていいよ？

てか使うなw

で、現在学校にいるんだが。

ゴミすぎるw

翠香と数人の女生徒はまだしも、みんなやる気なさすぎだろw

顧問もやる気ないしw

オレがなんとなく顧問を眺めてるとキツと睨んできた。

「てめえ、オレに喧嘩売ってんのか？剣で叩きのめしてやるうか！？」

いや、喧嘩売ったのそっちしょw

だが、オレはこの際ゴミに制裁を加えることにしたw

「ちよつと君、先生にはうちの部活のペースでも勝てないんだよ。止めた方がいいって」

部員がが忠告してきた。

「・・・構わない」

「お父様・・・大丈夫なのですか・・・」

翠香が心配そうに声をかけてきたが、オレは微笑みながら

「剣でオレに勝てる奴はいないから安心しろ」
とだけ言っと言った。

そしてオレは置いてあつた竹刀を手にして顧問を睨む。

「てめえ、俺様に喧嘩売ったことを後悔するんだな」

オレは無言で竹刀を構える。

「ああ、君防具付けないと。あたしの貸してあげるから」

き渡ったw

部員は驚愕の顔をしていた。

「凄い・・・」

「竹刀で体って斬れるものなの!？」

あ、記憶あるとまずいかな・・・。

「ああ、ごめん、みんなこれ見て」

オレはまたしてもあの装置を取り出し、フラッシュw

これでみんなの記憶は飛んだな。

「あれ、何してたんだっけ」

「あの顧問をオレが倒したってとこ」

ちゃんと記憶は消えているようだな。

よかったよかった。

「ホント!？ありがとう！正直あのクソジジイウザかったんだよね

、何かとセクハラしてくるし」

今頃は病院で呻いているだろうw

オレが防具を脱ぎ終わった頃に防具を貸してくれた少女がやってきた。

「あ、終わったの？私の防具返して」

「そこに置いてある、ありがとう」

勝手にあちらがやったことだが一応礼は言う。

「どう、あたしの汗のにおい。興奮した？」

「しないからw」

・・・この口調と声、どつかで聞いたことあるな・・・。

「君、名前聞かせてくれないか？」

「あたし？神宮涼（うみやまひやう）だよ」

・・・間違いないな。

「君の両親の名前、神宮亮平と神宮満って言わないか？」

「え・・・そうだけど・・・何で知ってるの？」

やっぱな、こいつの父親は亮平で母親が満なんだな。

あいつら結ばれたのか、おめでとうw

「君の父親とは仲が良かったんだよ」

「へえ」。でもあたしの実の父親はお父さんじゃないよ。なんでもお母さんが逆（禁則事項ですw）して作った子供なんだって。何でも相手は片瀬駿とか言う人で・・・」

オレかよw

オレたぶんこの時代で子供を数え切れないほど作ってると思う。

恐らくはやて姉と暁と刹那と湊とはるか・・・。

一夫多妻も夢じゃないw

って何言ってるんだオレw

「ははは、悪いな・・・そんなこと聞いちゃって・・・」

「いいよ、別に。あたしの実の父親イケメンだったし」

・・・そうですかいw

よかったですね、涼さん。

帰ってから日記を書いた。

8月7日

元の時代に帰ってからやること。

- ・ 千秋以外の子供を絶対に作らないこと
- ・ 天変地異の奥義書を作成すること
- ・ 天変地異以外の奥義書を作成すること

第5章第9話 娘は超能力者で魔法使いでした。

18年後の8月10日午前8時

こちらの時代に来てから1週間が経った。

この時代のシステムも理解しはじめ、慣れれば快適な生活だと思えた。

だが、未だにオレの四女・琉那とは一言も会話をしていない。つてことでオレは琉那を眺めることにした。

琉那は基本的にリビングにいる。

椎名家と言っても、千秋はあまり広い家を好まないのが標準的な家のサイズより少し大きめの家に住んでいる。

総本山や大本山には年末年始しか顔を出さないらしい。

まあ、他の家と変わらないと言っても中の装飾はやはり豪華だが。

億単位の絵が転がってるしw

まあ、そんなことは置いといて。

琉那は何してるんだろ。

オレはリビングに赴いた。

「お、映画か」

どうやら映画鑑賞のようである。でも

「同時に違う映画を3つ見てどうするんだw」

「ーは同じ映画を同時に5つまで見ることが出来る」

いや、いかにも冷静な回答ですね、はい。
てか自分のこと「るー」って言うんだ。
喋り方と裏腹に可愛いところもあるんだな。
「聖徳太子もビックリだな」
「あんな人と一緒にしないで。確かに声優は素晴らしいけど」
そっちの聖徳太子かw
てかこの時代でも知ってる子供いるんだ、あの漫画。

数十分経ったが、あれ以来会話がない。
この子扱いづらいわw
オレにとっても、作者にとってもw
気まずい空気が流れ続けていたのでオレは思い切って話しかけてみた。

「なあ、琉那」

「呼び捨てにしないで」

や、やられた・・・。

あのキツイ言い方は親じゃなくても傷つくわw
言い方がマジ傷つくw

「じゃあ・・・琉那ちゃん」

「ちゃん付けは止めて」

じゃあ、どつすればいいんだよw

「あゝ、どつすりゃいいんだよ」

「うるさい」

そう言いながら琉那はオレを指差した。

すると、指先が青白く光り・・・

オレの体が宙に浮いた。

「超能力者!？」

「そう。るーは透視、念動力、浮遊、瞬間移動などができる」

ああ、そうだったんだ。

てかできる超能力多いなw

「あのさ・・・そろそろ降ろしてくんない？」

「頭が冷えるまでそこにおいて」

・・・。

映画が終わるまで解放されそうにないな・・・。

そして、暫く経って映画が終わった。

「映画終わったから降ろして・・・」

「ダメ、新しい映画見るからそれまでは無理」

もういい加減にしてくれよ・・・。

てかよくスタミナ持つなw

超能力って体力使うっしょ？

「何時見終わる？」

「3時間後」

ああ、今日の午前中は浮遊したまま過ぎ去るんだなw

「ところで、数時間後に敵が襲ってくる」

なんで分かるんだよw

「透視」

ああ、こいつ透視もできたんだっけ。

てかのんびりしてていいのかよw

「・・・るーは信じてる。るーを守ってくれと」

「何を根拠にそんなことを・・・」

「あなたはるーのパパだから」

そうか。

オレを父と認めてくれたか・・・。

この歳で父親にはなりたくないが、どうせこれは18年後だ。
守ってやるっじゃねえか。

我が娘をな。

同日午後4時

ホントに来た。

敵の内容は・・・へえ・・・他国の軍人ですか。
まあ、無駄だ。

「なんだ、子供か」

「女子供関係なしに殺せと命令が出ているだろう」

じゃあ、オレも貴様らの命乞いとか関係なしに殺すよ。

軍人さん。

てか、なんでこいつらの言語が理解できるんだ？

（パパ、超能力でーの知識を全て与えた。これでなんとかして）
・・・なるほどね。

心に語りかけてくるとは・・・。

ああ言いつつも軍人たちは少しためらっている。
やはり子供を殺すのには気が引けるのだろう。
じゃあ、こちらから行くぜ。

「6代目一刀奥義・真一文字！」
これは6代目の奥義。直線に下から切り上げるような形で肉を裂く。
これを決められた者は、たとえいくら頑丈な体を持ってしても、頭
から左右の偏りなく真つ二つに切断される。

「1人目・・・」
「ひ、ば、化け物!？」
怖気づいたか。
だが、今更遅い。

「7代目二刀奥義・如法暗夜！」
これは7代目の奥義。気を使う奥義で、辺りに光を遮る気を解き放
つ。そして、後ろから斬る暗殺技。唯一見えるのは、飛び散った鮮
血のみ。

「まとめて10人抹殺・・・」
「逃げる、撤収だ!!」

逃げる奴は追わないでおいてやるか。
武士の情けだ。

「それは許さない。サイコキネシス」
「「「うぎゃああああああああああああああああああああ
!!!」」」
琉那は目を閉じたまま逃亡兵を引き寄せる。

第5章第10話 暗殺作戦準備。そこで出会った謎の騎士

8月11日午前11時

「あなたと二人で海外に出かけるのは久しぶりですね」

「オレはこの間一緒に行っただけ」

オレたちは飛行機に乗っている。

千秋と二人だけで。

何故二人かというと、これは3時間前の話になる。

回想

「昨日、私たちの家に他国の軍人がやってきました。幸い、駿が全て蹴散らしてくれたので問題はなかったのですが、今後もこのようなことが起きると思えば放つてはおけません」

「それで昨晚二人で考えたんだが、オレと千秋はその国の破壊のために数日間家を離れる」

アメリカとも軍事同盟を結んでいるしな。

その上、オレの会社は世界……ってか国連で唯一認められている暗殺組織だ。

本来、暗殺自体は悪いことなのだが、人間が生きていくうちに、確実に独裁者などが現れる。

そのような者を始末するために作られた組織と、亡き元社長・シンの遺言にあった。

ま、興味ないけど。

「お父様、健闘をお祈りします」

「お父さん行っちゃうの？」

「いつてらっしゃい」

三人の娘に見送られながら、オレは家を発った。

・・・てかいきなりだけど生活できるかな？

翠香なんて料理がこの世のものじゃないし・・・。

ま、大丈夫と思っておこう。

回想終了

「で、あと何時間で着くんだ？」

「約15時間後です」

ひ、暇すぎる・・・。

15時間も何やってりゃいいんだ・・・。

「・・・寝るか」

「駿がそんなこと言うなんて久しぶりですわね」

そうなんだ・・・寝るとか言うの久々なんだな。

オレって結構真面目に仕事やってんのかな・・・。

その数分後、寝るかの意味を理解した。

15時間後

「やっと着いた・・・」

椎名財閥が権力を増したおかげで、前回のブレードバレー社壊滅作戦時よりも快適な環境が整っていた。

職員約200人を自由に使える。

しかも彼らはエリートで、ほとんどの作戦に対応している。

まさにエリート。

まさにエリート。

大事なことなので二回言いました。

「……すみません、まだ理解できません。」

「で、お前はどこの国出身なんだ？」

「エクトニア王国」

「どこだよ……。」

「しらねえ……。」

「どこだよ」

「そりゃ知らないのも無理はない。この世界にないから」

「……え？」

「僕は異世界から来たんだ。で、来たら君に速攻で騎士の位を与えると陛下も言ってるしやる」

「……まあ、悪くはないけどそもそもオレってこの時代の人間じゃないんだ」

「ま、何でもいいけど考えといてよ」

「……いや、また世界設定が面倒になった。と、作者は豪語している。」

「てかオレは、異世界に行ったらどうなるんだろう。」

「こちらの世界に来てくれれば君を最高の待遇で迎えるよ」

「……いずれ近い未来この世界は地球温暖化でボロボロになっていくことは見えている。」

「だが、ここでついて行ってしまったら未来が変わってしまう。」

「そもそもこの胡散臭い騎士についていく必要があるのか？」

「それにオレがこの世界を離れたら梨瀬、翠香、月読、琉那が存在しなくなってしまう……。」

「……ここで出したオレの結論は……。」

「オレはついてはいかない。騎士とかいろいろ面倒だし、オレはこの生活に満足してるていんだ」

「そうか。だけどひとつ忠告しておく。作者はアナザーストーリーを作る場合は君を異世界に送り込む気である」

止めれ作者！

「それじゃ、僕は退散するよ。また、アナザーストーリーで会いましょう」

「ぜってえ、アナザーストーリーでいかねえからな！ひらし並に運命を変えてやる！！」

去っていくアレクを見送りながらオレは叫んだ。

第5章第11話 エネコンのエネコンによるエネコンのための殲滅大作戦

「さっきの誰だよ・・・」

あの騎士とか名乗ってた奴・・・もう出番ない上に名乗りやがって・・・。

まあ、いいや。

ところで千秋に置いて行かれちゃったな・・・。

「あ、片瀬駿さんですか？」

・・・誰？

ここは一応椎名財閥の土地だからまあオレを知ってる奴はいるだろうけどな。

「ああ、そうだけど」

「うちの兄・・・エリート社員の一人なんですが・・・ニコ中なのね・・・あなたに喧嘩売ってますよ？」

・・・錬磨じゃないことを祈ろう・・・。

オレはそいつを叩き潰しに行った。

そいつはトレーニング場にいた。

「お前が片瀬か・・・オレ様とデュエルしろ!!」
え？

腕になんかはめ始めたし。

あ、あれはデュエルディスク!?

「先攻、ドロー!」

なんか始めてる!?

しかも喧嘩売ってるってオレ刀抜いてるんだけどw

「オレ様はカードとモンスターをセットしてターンエンド」

・・・仕方無いな。

オレは日頃錬磨をいじめていたデッキを取り出す。

なんであつたんだろ？

「オレのターン、死霊騎士デスカバーナイト召喚。そしてそのまま攻「速攻魔法発動!エネミーコントローラー!」

でたエネコンw

ニコ中だから使うのは当たり前か。

「ライフを1000払い、 AB」

実際のカードの効果は自分のモンスターをリリースして相手のモンスターを奪うんだけど・・・。

まあ、この際どうでもいいや。

・・・あ、こいつあれいえるかな？

オレはニコ中野郎をシカトして一曲の音楽を流し始めた。

これはあの気持ち悪いニコ中イケメンキモオター一条錬磨をに強制的に押し付けられた曲だ。

流し始めるとニコ中野郎はエネコンのコマンドを発し始めた。

しかも正確に。

あの早口コマンドは社長と凡骨しか言えないと思っていたのに……。

ま、いいか。

今のうちに逃げよ……。

そのまま歩き続けると、ようやく千秋を見つけた。

「遅いですわよ、駿」

「変態ニコ中野郎と激闘してきた」
激闘でもないけど。

「もう作戦会議は終わりましたよ」

……オレの出番なしか。

「作戦は駿がひとりで特攻して全員倒してくる。以上ですわ」
なにそれ一種の嫌がらせ？

オレ殺す気か？

「……オレを殺したいの？」

「いえ、駿以外だったらこんなことは頼みませんよ」
まあ、信頼してくれてるんだな……。

やってやるよ……仕方無いからな。

そして当日

「・・・行つてきます」

千秋しか見送りに来てくれないのかよ・・・。
まあいいか。

「召喚・ダークヴァルキュリア」
オレはリアを召喚した。

「主よ、久しぶりだな」
長いこと呼んでなかったな。

「わらわを放置しおつて・・・寂しかったんだぞ？」
「・・・悪いな・・・放置して」
まあいい。

今は彼女の力が必須。
行くしかないか。

そして軍の本部に突入。
「行くぜリア！」

「何時でもいいぞ」

そこには約1万もの軍人が待ち構えていた。まるでこちらの情報を知っていたかのように。

だが、オレ達の前では全てが無力。

「混沌魔法障壁！」

およそ1万の軍勢が放つ弾丸をリアが魔法壁で防御、そしてオレは一人ずつ斬っていく。

1万人は流石に多いな。

ここで気付いた。

奥義を使おう！

「九代目一刀奥義・百鬼夜行！」

これはオレの流派でも奇怪な九代目が編み出した奥義。切り捨てた屍を動かす……つまりゾンビにして操る……。だが、オレはまだこれを完璧に修得はしていない。成功するか……。

型どおりにやってはいるがさつきからゾンビ化する気配はない。……練習不足か。

そろそろ技を変えるか……!?

そう思った瞬間、先ほど切り捨てた死体が動きだした。目に光はなく、まるで何かに取りつかれているようだ。

「……成功した……」

「!?!主、危ない!!」
はっ!

後ろにはナイフを構えて突っ込んできた兵士がいた。

この状況では間に合わない。

が、奥義が早速役に立った。

生ける屍と化した兵士がオレを襲う兵士に弾丸を放っていた。

「ありがたいな」

「主よ、戦わぬのならばわらわが出るぞ。出でよ、ゲイボルグ、ブリューナク！」

リアは二本の槍を構えた。

「またかよ!?!」

「またレンタルした」

ま、それのおかげで殲滅予定時間2時間を大幅に上回り、48分で終わった。

第5章第12話 ナルシストに断罪を、奇妙な研究所に侵入許可を。

オレはあの後普通に帰ってきた。

「ただいま」

「はっ！片瀬駿、何故ここに・・・まさか貴様逃げてきたんじゃ・・・！？」

は？

「貴様は千秋様と結ばれるべきではない」

え、いきなり何、こいつ？

「ま、まさかてめえがオレの・・・」

「ふふふ、そう。俺が貴様をひとりで送り込ませた。なぜなら、我が作戦に貴様が一番邪魔な存在だったからだ」

へえ。

つてことは。

こいつオレに喧嘩売ってるな？

「てめえ、オレに喧嘩売ってんのか？」

「ああそうだ。千秋様は俺が狙っていたんだ！それを貴様が・・・調子に乗るなよ、ゴミ。」

黙って聞いてれば自分中心に世界が回っているような言い方しやがつて。

「逃げてきたなら仕方ない。俺が直々に貴様の首を斬ってやる！死ぬえ！」

また始まった。

負け犬の遠吠えが。

ゴミクズのくせにオレに近づくんじゃねえよ。

「てめえは・・・この片瀬駿が冥土に送ってやるわ！！」

こいつみたいなのがゴミは、一回殺した方がいい。

仮にもオレは国連で公認されている暗殺者。

殺しても余裕だ。

監視カメラもあるしな。

それを証拠にすれば、世界的に有利なオレは無実になる。

権力を濫用していると言われたら終わりだが、こいつは頭が逝ってる。

しかもしょっぱなからこんな壊れた話にしゃがって……。

「十一代目二刀奥義・竜騰虎闘！」

これは十一代目が編み出した奥義。後継者争いで互角に戦い、最終的に敗れ去り散っていった友の刀を最大限に生かすため、作られた二刀奥義。当初これに名前はなかったが、十代目がそれを振るう十一代目の二つの刀がまるで竜虎のようであったことから名付けられた。

「覚悟しろよ、この奥義の闘気に勝てた者はいないからな」

そしてオレは二つの刀を打ちつけ合う。

それはもう強く。

まるで竜虎が争っているように。

その力が巻き起こす闘気がゴミ野郎を襲う。

そして奴は昏倒。

「……これで許してやるか。これを実際に振るうたらこいつ死ぬところか消滅するしな……」

そのくらい凶悪な奥義のひとつである。

「勝てない喧嘩は売るもんじゃないぞ。それと逆恨みはするな。以上」

オレはそれだけ言って立ち去った。

「千秋どこいったかな」

あいつを気絶させてから千秋をずっと探しているが、一向に発見する気配がない。

職員に聞いても知らないと言うし。

困ったものだ。

そうして彷徨っているうちに、研究施設を発見した。

「・・・18年後って・・・何研究してんだろ」

オレは施設に入ってみようとしたが、暗証番号が必要らしい。

めんどくせえな・・・。

こんな時は・・・。

「奥義・真一文字！」

扉を縦に引き裂く。

綺麗に縦に割れ、そして扉だったものが倒れてくる。

あちゃー、どうしよ。

ま、いつか。

壊しても千秋なら許してくれるだろう。

中に入ってみると、得体のしれない生命体が多数存在していた。
「何これえ？」

ほとんどがホルマリン漬けになつた。

・・・これは・・・魚人？

てかほとんど魚人！？

正直気持ち悪い。

入らなきゃよかった・・・。

と思いつつも、オレは足を進めていく。

ある程度進んだところで、再び暗証番号が必要なところに出た。

やはりここも真一文字で両断し、先に進む。

先ほどと変わらない風景が続く・・・。

だが、

「・・・なっ!？」

オレが更にその奥で見たものはとんでもない光景であった。

第5章第13話 どうやらタイムマシンには核爆弾がたくさん要るようだ。

そこで見たものは、巨大な装置だった。

「こ、れ・・・は」

「あら、駿。どうしてここに来たのですか？」

中央の巨大な装置にはかり気を取られていたが、隣には千秋が白衣でイスに座っていた。

「扉を両断した。それより千秋、これは？」

「時空転送装置です。これで駿を元の時代に戻すことができますわ・・・マジ？」

「こんなことって・・・」。

「これは駿が過去から来る以前から研究していました。ですので、既に完成はしています。ですが、これを動かす程のエネルギーが補給できないのです。現在省エネに力を入れているのですが・・・」

「・・・どのくらい・・・どのくらい必要なんだ？」

「大分改良しましたので、核爆弾1万個程度ですわ」
核爆弾か・・・。

核爆弾なんてもの……どこで……。
……核爆弾って……。

「……錬磨だ」

「え……」

あいつなら……あいつなら一時的に太陽になることができる……。

太陽Ⅱ核

いける!!

「千秋、今すぐ錬磨を呼んでくれ!!」

「……よく分かりませんが、分かりました」

……次元魔法の使い手を発見しなくても大丈夫だったな。
よかったよかった。

……でも、梨瀬や翠香、月読や琉那にもう一度会えないままオレ
はここを去るんだな……。

仕方無いか。

今のオレは世界の理から外れた存在なんだからな。

早く帰った方がいい。

・・・気にしなくても彼女らには18年後に同じ姿で会うことができる。

運命が変わらなければね。

約2日後、錬磨がやってきた。

錬磨は気を利かせてくれたのか翠香と月読、琉那を連れてきてくれた。

随分いい奴になったな、錬磨。

「で、駿が俺にものを頼ると。ついに俺を頼ってくれるようになったんだね・・・嬉しいよ」

「・・・黙れ」

大人だろうが子供だろうが錬磨は錬磨だ。

厳しい口調でいい返す。

「はは、嬉しいな。最近の駿は話しかけても反応してくれないし」
未来のオレひでえ・・・。

オレよりひでえ・・・。

「じゃ、行くぞ。来い、F・レオン、S・ドラゴン!!!C・F!!!」

ソレイユフォーム。

錬磨が太陽と同じ力を発揮するC・F。

「力を送り込むぞ」

エネルギータンクにとんでもない量のエネルギーがたまっていく。
オレこんな奴相手にしたのかよ……。

約30秒でタンク内のエネルギーはMAXになった。

「じゃあ、そろそろ行くよ。またな、みんな」

オレは軽く手を振って装置の方を向く。

「さようなら、若き日の駿」

後ろからの言葉にオレは少しだけ振り返る。

千秋……さようならじゃなくてまた会おうだろ。

てか未来のオレには何度も会えるだろ。

「お父様の若きお姿を拝見できてとても嬉しかったですわ。過去に

戻ったら、私を立派な女に育ててくださいね」

翠香……料理は上手にできるように教えるよ、絶対。

もうあんな壮絶な料理は食べたくないし。

「え〜と、んーなんかわかるって気がしないなあ。お父さんは週
に何回か来るし……。ま、別れの挨拶はしておくね〜」

月読……ま、お前の反応が普通だろうな。

普通じゃないのはオレの方だし。

「言うことはありません。必ずまた会えますから」

琉那・・・お前らしいな。

1週間以内に会えるからな・・・。

「じゃあ、またなsh「お前に見送られなくても別にいい。用が済んだならとつとと帰れ」酷すぎるよ駿!？」

別れが惜しいが、仕方無い。

オレは帰らなければならぬからな。

もちろん、錬磨は惜しくはない。

「じゃあな、また」

オレは手を振りながら装置の中に入って行った。

第5章第14話 綺麗な空、透き通るような海。こんなところあったっけ？

「ついたのか？」

オレが目を開けて最初に見た光景は青空だった。

雲ひとつなく、透き通るような青で。

こんなところあったっけ？

ま、いいか。

体を起こし、あたりを見回す。

ここは浜辺か。

海も空と同じく、透き通るように綺麗な。

そんなことはどうでもいい。

現在地を確認しないと。

「リア！」

とりあえずリア召喚。

リアなら現在の時間と位置を教えてくれるだろう。

「なんの用だ？」

「今は何時？それからここどこ？」

「ふう、現在は主が生きていた時代から約500年前の山中市だ。

正確には山中市ができる場所だな」

・・・500年前！？

はあ！？

・・・あの装置、故障したのか！？

今更こんなこと言ってもな。

500年前って言ったら・・・オレの流派の十代目の時代か。

・・・十代目といったら歴代最強の剣豪。

・・・これも運命なのかもしれない。

山中市ができる場所で受け継がれてきた剣技だから確実にいるはずだ。

歴代最強の剣豪。

彼は唯一全ての奥義を修得した剣士。

今ではオレも1から9までは使えるが。

しかし、十代目の奥義は歴代で十代目しか使うことができなかったといわれている。

十代目一刀奥義・絶対零度

斬りつけた傷口が凍てつき、そこからわずか1秒で血を凍らせていく。

これについて記した文献もこの程度の事しか載っていない。

そう、この奥義は唯一奥義書が残されていない奥義である。

他の書物に、絶対零度の文献を十代目自信が焼いたと書かれている。十代目は十一代目に口伝で教えたと言えられているが二人とも使うことは儘ならず、それ以来型だけは伝えられてきたが誰も使うことはできなかつたという。

そして、彼が26歳の時に行方を晦ました。

「・・・リア、十代目に会いに行こうぜ」

オレは絶対零度を修得したい。

別に帰るのはこの後でもいい。

今は、十代目に会いたい。

オレはとりあえず村人に聞いて回った。
多少言葉の変化で話が上手くつながらなかったところもあったが、
なんとか居場所は割れた。

「……ここが十代目の……」

それなりに大きな家だった。

ここに十代目が……。

「……ごめんください」

オレが戸を開けると、そこにはひとりの剣士が。

が、オレの想像していた剣士ではなかった。

紅い瞳、銀の髪、明らかに日本人ではなかった。

それに十代目は女性だった。

「何しに来たの？」

しかし、彼女の強さは本物だ。

先ほどの声を聞いただけで鳥肌がたった。

「オレに、あなたの編み出した奥義・絶対零度を教えてください！」
単刀直入に言った。

てか、これ以外に用事ねえしw

「先に名を名乗ったらどうなの？」

「オレは片瀬駿と申します」

「姓があるということは……武士の子ね」
会話を重ねる度、オレに畏怖の念を与える。

十代目は・・・今まで戦ってきた人間を全て足して1000をかけた強さより強い・・・。

気の出し方から違う・・・。

「生半可な覚悟じゃできないわよ」

「覚悟しています。オレは・・・剣の腕には自信がありますから！オレは得意げに言った。

圧倒的な威圧感に負けないようオレも声に覇気をこめて。

「分かったわ」

十代目は壁に立てかけてあつた細い剣を手に取ると、オレに向けた。

「そのくらい言うなら、完膚なきまでに叩きのめしてあげるわ」

ええw

なんでそうなるの!?

力量をはかるんだろう。

たとえ負けてもオレは悔いはない。

こんな強い人と戦えるんだからな！

「行くぜ！」

オレは人間が出せない速度で十代目を襲う。

「あなたの体、壊してあげるわ」

なっ!?

あ、ありえない!?

十代目はオレをも超える速度でオレの後ろに回った。

追いつけない・・・。

オレはなんとか攻撃を防ぐことができたが、足が震えていた。

今までこんなことなんてなかったのに!!

「足が震えてるわよ？怖くなっちゃった？」

・・・怖いつてレベルじゃない・・・。

オレは地獄を見ている・・・。

・・・ありえない・・・。

「奥義、鬼哭啾啾。この奥義は斬った者を永遠の恐怖に陥れる魔の

剣技」

・・・当たってないはずなのに・・・。

「このわたしに防御なんて無駄よ。精神から先に壊していつてあげる」

・・・あ、足が・・・動かねえ・・・。

怖い。

純粹にそう思った。

オレが・・・。

恐れるものなど・・・存在しなかったはずなのに・・・。

・・・この人は本気でオレを殺す気だ・・・。

でも・・・ここで死んだら・・・梨瀬や翠香、月読と琉那がこの歴史から抹消されてしまう・・・。

そんなことは・・・。

「そんなことはオレがさせねえ！」

剣を構えなおす。

今は恐怖より、守りたいものを思う気持ちの方が数段上だった。

「二十二代目二刀奥義・森羅万象!!」

この奥義は、オレが編み出した奥義。

一言で言う。これを打ち破れるものは、おそらくこの世には存在しない。

この奥義は、二本の腕に己の全てを込め、刀に全てを委ねる。

自身は動くことはないが、近距離に迫ってきた者は全て断ち切る。

・・・誰であろうともな。

これを使った後は体力が無に等しくなるから使いどころが肝心か・・・。

「・・・合格にしてあげるわ」

え・・・。

「あなた、わたしの弟子よりも有能よ」

十一代目を超えた・・・。

これだけでもうれしい・・・。

でも、そんなことよりオレは絶対零度を修得する権利を得た。
それだけでも大きな進歩だ。

とにかく、今はうれしい。

第5章第15話 あのこと…十代目？あの時代に行くって考えは…。

前回試験に合格したオレだが、今はあの人の弟子にならなかった方がよかったと後悔しているところがある。

なんか出がフランスの貴族とかなんかで旅行の最中、漂流して日本にたどり着いたとか何とかで無駄にプライドが高い。

そんなことは教えてくれるのに名前は未だ教えてもらってない。

本当に彼女はオレ以外を相手にする千秋よりも女王様だ。

ホント、なんかオレに靴を舐めなさいとか言ってくるし。

家事も全部オレがやってるし。

だが、絶対零度への道は着々と近づいている。

教えるときは真面目で厳しいのが驚くくらいだ。

大分上手く出来るようになってきたし。

で、今回は訓練を終えた後の話。

「駿、早くお酒を持ってきなさい。早くしないと殺しちゃっわよ」
殺しちゃうがリアルになるからいそがねえと。

マジで首が飛ぶ。

単純な剣の腕じゃ勝てないし。

大人しく従うほかない。

「持ってきた。はい」

「あら、今日は素直ね」

死ぬからな。

にしてもこの時代に酒は一般市民には手が届かない代物じゃないのか？

結構倉庫に眠ってるし。

ま、いつか。

数時間後

十代目が酔った勢いで普段聞かないことを言い出した。

「そう言えばなんで阿鼻地獄とか生殺与奪とかが使えたの？」

オレは先日鍛錬で奥義を数種、披露した。

「オレはあなたの後継者から教えてもらいました」

「生殺与奪は十一代目のあいつには使えないはず」

「オレ、未来から来たんですよ。未来にはあなたの後継者がたくさんいます。オレはそのうちの一人でした。オレはここに来る数日の間に絶対零度以外の奥義は全て修得しました」

さりげなく言っていたいなかったことを言った。

「・・・未来って、どんなところなのよ？」

「現在の暮らしより快適かな」

「・・・タメ語になったけど・・・ま、いつか。」

「年中暑くも寒くもないし、移動も速いし」

十代目がより一層耳を傾ける。

「美味しい酒はあるの？」

「・・・腐るほどな」

すると、十代目は驚いたような顔をした後、ニヤリと笑いながら「こちらを見た。」

「帰るときには私も連れていきなさい」

え？

「私が酒が好きなのは知っていますでしょう？連れて行かないなら帰る前に殺すわ」

「・・・め、目がマジだ・・・。」

「だけどワインとか口に・・・ってフランス出身だったか？」

「・・・はい、わかりました」

仕方なく承諾したオレが悲しくなってきた……。

翌日

「早く剣を構えなさい」

なんかいつもと目つきが違うな。

「早く未来に行くわよ」

それが目的か。

つつても帰り方分からねえ……。

「絶対零度はあなたなら使えるわ、絶対に」

そう言ってもらえるとありがたいです。

オレは絶対零度の構えをする。

「オレだってそう易々と引き下がるわけにはいかないから修得して
見せるさ」

そして本日の鍛錬は始った。

第5章第16話 最強の奥義・絶対零度。その威力は全てを凌駕する……。

あ、どうも。

駿です。

現在約500の人々をひとりで押さえつけています。

絶対零度（未完成）だけを使って。

一人の強さはオレには無に等しいが、数がヤバい。

倒せないこともないが絶対零度じゃ時間がかかる。

そもそも絶対零度ってこんな状況で使う奥義じゃないし。

「絶対零度は脳裏に氷河を思い浮かべるのよ。それを再現するよう
に……気を放つ」

気づけば後ろに十代目がいた。

再現……か。

そうか。

今までの継承者使えなかった理由が分かった。

彼女は日本に流される前に氷河を見たと言っていた。

他の継承者は氷河を見たことがなかったんだ。

そして、その情報は薄れていき、型だけが残されていた。

オレはこの間隙から逃げる時にミスって北極に行ったことがあった。

その時の情景を思い浮かべる……。

どこまでも白く。

どこまでも冷たく。

どこまでも輝いていて。

それを気に込めて……。

「絶対零度！」

一瞬にして大地が氷に包まれた。
たくさんの人々が氷漬けにされてゆく。

・・・あ、ありえない。

絶対零度がここまで凶悪な・・・奥義だったなんて・・・。
情報ではただ単に体内を凍らせるだけだったのに・・・。

まさか大半の人間を丸ごと凍結させるほどの力を持っていたとは・・・。

オレの目の前、あたり一面氷河に変わっていた。
てかあつまり使えたな。

「・・・溶かさねえと」

とりあえずオレは炎の召喚獣をたくさん召喚して氷を溶かしたが、
一揆をおこした人々は誰一人生き残っていなかった。
そりゃそうだな。

皮膚だけじゃなく、血液や内臓まで凍結してんだから。

「あなた、良くやったわ」

・・・オレは、もう使いたくない・・・。

こんな技だつて知っていたら・・・。

こんな奥義・・・修得しなきゃよかった・・・。

「後悔することはないわよ。ここでは刃向かったものが死ぬ世界だから」

・・・それでも・・・。

「こんな結果だが、当初の目的は達成した。帰る。今までありがとう」

「待ちなさい、私も連れて行きなさい。行かないと殺すわよ」

「・・・殺せるもんなら殺して見る。殺したら未来になんて永遠にいけなйдらうよ」

最後だし、刃向ってみた。

「調子に乗りすぎね。どうやって殺そうかしら」
勝手に言ってるがいいさ。

全ての奥義を修得したオレには、もはや敵はいないしな。
あんだけ殺したんだ。

今更もうひとり殺したってたいして変わらねえよ。

それにオレの本業は殺し屋だしな。

「殺しにかからないなら、こっちから行くぜ」

「!?!?・・・いつからそんな強さを!?!?」

戸惑いを捨てた今のオレには誰もかなわないさ。

「心が闇に染まってる。それでは絶対零度の神髄には到底たどり着けないわ」

・・・神髄?

「分かったならさっさと未来に行くわよ」

「・・・」

オレは絶対零度を修得してはいなかったのか?

あの威力でか?

「・・・元に戻りなさい。それではあなたを愛す者も悲しむわ」

・・・オレを愛す者・・・か。

そうだな。

こんな心を持ったオレを見たらあいつは悲しむだろうな・・・。

「・・・そうだ、十代目。オレが間違っていた」

そうだな、本当に。

家への帰宅途中、落雷が落ちた。
滅茶苦茶晴れてたのよ……。

「あ、二十二代目!!」

「……確かこいつは……二十三代目の洗だっけ？」

落雷の正体お前か!!

「やっと見つけました。椎名財閥の千秋さんから依頼で、500年ほど前の時代から二十二代目を元の時代に送れと……」

「……え？」

「あ、ぼく、聖マテリアル学院の生徒ですよ。次元魔法が使えるので」

「……案外近くにいた

!?

「まあ、ありがたい。ああ、それとオレのほかにもこの人もいいか？」

「早く未来に連れていきなさい!」

我儘だな。

「ええ、いいですよ。それじゃあ、ぼくに捕まっていてくださいなね」

洗を中心に輝きだし、その光にオレたちは包まれて行った。

ここで気がついたんだが、十代目が失踪した理由って、これじゃね？

第5章第17話 昭和58年に起こった悲劇・その名は・・・特にないけどな

そろそろいい加減にしてほしいところだ。

「洸・・・今は何時で何処だ？」

「ええと、昭和58年5月17日の午前6時19分の山中市です・・・」

なんでこんな時代に飛ばされてんだよ。

しかも昭和58年ってひぐらしじゃねえか。

そんなことはどうでもいいが・・・。

「今すぐ元の時代に戻せ」

「力が回復するまであと二日はかかりますよう・・・」

ちっ、使えねえ・・・。

まあいいか。

昭和58年の山中市はそこまで発展していないんだな。

山中市はわずか10年で日本五大都市のひとつに入ったんだ。

この時代はとんだト田舎か。

それでもオレが記憶にある中ではこんな風景はないな。

あたり一面田園風景だ。

山中市も吸収合併して大きくなったからこの時代は小さな村か。

本当にひぐらしっばいな、ここ。

オヤシ口様とかでてくるのかな？

行くあてもないので、オレたちは片瀬家を訪れてみた。

「ごめんくださいーい」

「どちら様ですかあ？」

「よ、幼女!？」

確かこの家ってそれなりに大手の商人の家って暁に聞いてたぞ？
こんな奴だしていいのかよ!？

「幼女じゃないもん。涼香はもう12歳になるんだよ!」
十分幼女だわ。

それに涼香って・・・オレの母さんじゃん!？

・・・そうだったな・・・確かオレの父さんが魔術の方面の・・・。

あれ、どっちだっけ？

ややこしくなってきた・・・。

「蓮くん蓮くん。この人幼女って言ったく」

蓮ってオレの父さんじゃねえか!？

「つたく・・・誰だよ涼香泣かせた奴・・・」

このクソ親父・・・。

オレは自然と鬼のような形相になっていた。

「・・・喧嘩売ってんのか？」

それ以前になんでてめえがここにいんだよ。

「お前、喧嘩売ってんなら買ってやるよ!」

・・・なんか言いだしたよ、この人。

流石はクソ親父。

というわけで決闘形式で戦うことになりました。
使用可能武器は己の拳のみ。

ま、オレにはついて来れないだろうが。

「雷電！」

オレに向かつて一筋の雷光がほとばしる。

それを人間とは思えないみこなしで避ける。

・・・やはり魔術師か・・・。

「お前、魔術師か？」

「ああ、実家が魔術師の家系でな。以前旅行でここを訪れた時のこの風景が忘れられなくてここに住んでるけどさ」

親父がそんなこと言ってたな。

ま、いつか。

「てめえが魔法使うなら、こっちも行かせてもらうよ。起動せよ、ラーの翼神竜！！」

オレは某カードゲーム漫画の最強の神（某動画サイトの神ランクではCランクと最低の格付け）を召喚してみた。

案外うまくいくもんだねえ。

「・・・生贄3体忘れた・・・」

ま、いつか。

攻撃力0だけど。

「こいつには特殊効果が二つある。第一の効果、ゴッド・フェニックス」そこまでにしなさい。ガキ相手にそこまでやる必要はないでしょう？」

十代目・・・。

なんか十代目って言っていると沢田氏を想像してしまう・・・。

「てか十代目、いい加減本名教えてくださいよー！」

「言っただけだったかしら？それなら私の名前はリズとでも呼ぶこと

を許してあげるわ」

リズ・・・本名はエリザベスかな。

てか滅茶苦茶イギリスな名前じゃん!?

フランスに住んでんじゃない?

「生まれはイギリスよ」

知らなかった。

教えもしないんだから当たり前か。

「て、ことで今回は見逃してやるよ」

すっかりおびえきったバカ親父は逃げて行った。

ゴミだな。

第5章第18話 これは現代に戻るための……その儀式だからよ……。

「あと一日どーすんだよ
暇だ。」

暇すぎる。

この時代にはゲームもない。

近くでガキどもが野球やってるけどオレ野球興味ねえし。

「ウチらのシマで何やっとなじゃボケエ！」

……お馴染みやクザなお方ですね。

久々の登場です。

にしても若いな。

確か亮平の父親だったはず。

「いや、別に。オレは寝てただけだけど」

「その刀はなんだ？」

ああ、妖刀ね。

「オレの刀」

「凡人が刀持って」「黙れ、オレの物といったらオレの物だ。分か
つたらさっさと消えるんだな」

調子に乗りすぎだな、こいつ。

いきなり殴りかかってきたし。

ま、一般人に武器使わないだけマシか。

「おふざけが過ぎる！」
軽く延髄切り。

おお、初めてやったけど案外決まるもんだな！
見事に昏倒してるよ……。

……何しよう。

もう少しこいつで遊べばよかった……。

……暇すぎる。

「早く帰りてえなあ」

投げやりに呟き、草むらに倒れこむ。

こんな自然、オレの時代の山中市にはなかったな……。

「帰りたいたいなら彼女に魔力を与えることです」

は、ハヤブサ!?

「彼女に魔力があれば時空転移が可能です」

洗にねえ……。

てか、

「洗って女だったの?」

「はい。中性的な顔や声な上、胸がまるで皆無ですので人が見ただけでは判断はできないでしょう」

む、胸が皆無って……ハヤブサきついこと言うな。

「てかそんなことできんなら早めに言えよ!」

……返事がない。

オレはハヤブサの方を向いた。

……刀に戻ってる

!?

に、逃げやがったな……。

まあ、これで現代に戻る術を見つけた。

さ、帰ろうか。

「で、魔力を与えるにはどうすればいいんだ?」

・・・ハヤブサいないんだった・・・。
仕方無いのでリアに同じ質問をする。

「それは・・・せ、接吻に決まっておるであろう!」

おい、よりによってそれかよ・・・。

早く帰りたいけどそれはちよつとな・・・。

「主よ、覚悟するがいい。それにあいつは人助けに魔力を行使しつづけているから当分帰ることはできないぞ」

仕方無い。

この際、どうでもいい。

「おい、洗」

「あ、なんですか?」

オレは洗を近づける。

「帰るためだ!悪く思っなっ!」

そして意を決して無理やり唇を奪う。

柔らかえ・・・やっぱ女だ・・・。

にしても胸がない。

ハヤブサが言ったとおり、皆無だ。

腕の肉の柔らかさから女つてのは分かるけどよ・・・やっぱ女は・・・。

魔力が与えられているようで、オレから少しずつ魔力が減っていくのが分かる。

「魔力を分け与えた。早く帰るぞ」

洗は突然の出来事で顔を真っ赤に染めてちよつと下を向いている。

「・・・大人になったらもつと恥ずかしいこともするのよ？」

な、なんかリズが洗の耳元でささやいているし!?

だが、洗には想像つかないことのようなのでちよつと首を傾げている。

「・・・どんなことするんですか？」

「エッチなことに決まってるじゃない」

何言ってるんですか!?

止めるよ、純情な子に何吹き込んでるんだよ!?

しかもなんかこの小説じゃ表現したら確実に削除対象にされることをやり始めたし!?

うわあ、目も当てられない・・・。

「とにかく帰るぞ! それにここではこんなことするな! 見てるこっちが恥ずかしいし、この小説自体削除対象になるわ!」

「あ、はい。今すぐにでも」

なんか顔真っ赤にしてる上に腰が抜けてるけど・・・大丈夫かな?

また変な時代に飛んだら確実にリズの責任だな。

それから削除対象になったらリズと作者の責任だな。

主に作者の責任だな!

そう思いつつ、再びオレたちは時空を超えた。

第5章第最終話 遙かなる時空からの帰還、待っていたものは千秋からのプレゼント

4月1日午前8時

「駿、起きてください駿！」

千秋の音がする……。

オレが目を開けるとそこは千秋の部屋だった。

……今度こそ帰ってこれたんだ……。

「……帰ってきたのか……オレ」

「一体どこに行っていたのですか？半年も失踪して。私がどれ程心配したか……」

あれから半年か……。

つて、半年後に来てるじゃん！？

半年間の空白は……。

ま、その間オレはいなかったらしいから今から再びこの時代で生きれば問題ないか。

「まあ、無事で何よりです。それと、おかえりなさい
帰ってきたな……と感じた一瞬だった。

「ああ、心配掛けてごめん。それと、ただいま」

やっぱり、オレが生きるべき時代が一番いいな。

一番落ち着くよ。

「ところで駿」

「何？」

「来週誕生日でしたよね」

確かにオレの誕生日は来週の、4月7日だ。

「……そうだけど？」

「4月7日にとっておきの誕生日プレゼントをあげますので、楽し

みにしていただくさね」

とっておきの誕生日プレゼント？

なんたる？

ま、いつか。

その日まで待てば何とかなるさ。

で、実際に待ってみました。

4月7日午後3時

オレはここ数日姿を見せていない千秋を探していた。

「誕生日プレゼントってなんだよ。くれるどころか姿さえ見せないじゃないか」

オレは廊下を走り回って千秋を探した。
すると、ひとりのメイドと激突した。

「いてて・・・大丈夫ですか？」

「あ、駿様！丁度探していました！こちらについてきてください！」
え？

オレはメイドに引つ張られて車に乗せられ、どこかに連行されて行った。

「ここは？」

「椎名財閥が管理する総合病院です」

「だけー！」

（大事なことなので二回言いました。）
で、ここに何があるんだ？

「ここに何のy「いいから来てください！」

オレは特別室に連れていかれた。

「あ、駿。やっと来てくれたのですね」

・・・え？

何その子？

「あなたと私の子供ですわよ」

・・・え？

そうだ。

思い出した。

オレ子供作っちゃったんだー！！

どうしよう・・・金銭的には問題ないけど・・・。

汚い金なんだよねえ・・・。

でも、未来ではちゃんと育てられてたし・・・。

それに千秋との子だ。

オレなら何とか育てれる！

「名前は何にしましょうか」

「千秋、オレに決めさせてくれ。その子の名は、梨瀬だ」

そうだ。

将来オレと二人で住む子だ。

次の子が翠香で、さらに次の子が月読、そして最後が琉那だ。

だけど、ひとつだけ未来を変えてやる。

梨瀬はオレと千秋と一緒に暮らすんだ。

その方がいい。

で、誕生日プレゼントってもしや・・・。

「誕生日プレゼントってもしかして・・・」

「梨瀬ですよ？」

やっぱり・・・。

「この子の誕生日が、あなたへのプレゼントです」

こうなってしまうた以上オレも責任を取るか。

いや、取らざるを得ない。

オレは無責任な男ではない！

ここで気がついた。

「あ、学校どうしょ」

「学校なら入学手続きは終えていますよ。山市立山中高校でいいですよ？」

ああ、ここはみんな通う場所だったな。

・・・ちげえ・・・。

みんなが通うのは山市立山中中央高校・・・だよな・・・。

・・・オレの学校の方がレベル高いじゃん!?

うちの学校から平均5人しか入れないって言う・・・。

ヤヴァい・・・。

勉強ついてけねえ・・・。

「今はしっかり学んでくださいな」

ひゃああああああああああああああああああああああああああ!!

勉強したくねえええええええ!!

・・・入学式何時だろ・・・。

「入学式は明日ですわよ」

明日かよっ!?!?

第6章第1話 入学式に再会。女好きの・・・元親友・・・なのか？

4月8日午前10時

「ここがオレの高校か」

「あ、駿じゃん」

ん？

この顔どつかで見たな・・・。

「覚えてねーのかよ。小学校の時親友だった榎原骸だよ」
えのはむくろ

何時もオレと轟騎とその他1名と一緒にいた奴か。

てかこいつ親友だったか？

「で、何の用だ？」

「いや、同じ学校入れたんだなって」

そう言えばこいつは転校してほかの学校行ったんだっけ。

「クラスは同じか？」

「まだ見てない。あ、轟騎や錬磨は？」

あ、あいつらどうなんだろう。

「ちよつと待つてろ」

オレは千秋に電話する。

三回ほどコールした後千秋が出た。

「轟騎と錬磨は？」

<頭が悪いので落ちましたわ>

え？

「で、轟騎と錬磨は？」

「頭悪いから落ちたって」

まあ、あいつらの学力じゃな。

結局みんなが通う中央にいったそうな。

「あいつらとまた一緒になれると思ったんだけどな……」
骸は少しがっかりしていたが、どうせ家近いし。
特に問題ないだろう。

「クラスでも見に行くか」

「ああ、そうだな」

クラス発表で、見事にオレと骸は同じクラスになった。

「ラッキーじゃん」

「別に一緒じゃなくても問題はなかったけど」

オレは素気なく言うが、骸は「そんなこと言うなよ」とか言うてる。

てか、首に手を回すな。

「あ、あの子可愛くね？」

話変えるな、それとオレには興味ない。

「別に興味はない」

「そんなこと言うなよ。お前も女の子好きだろ？」

こっちは女にウンザリしてんだ。

暁とかはやて姉とか………特に中将！

あー、もう嫌だ。

「女はあまり好きではない。行くぞ」

「お、おい待てよ！」

それからも骸が話しかけてきたが軽くスルーしながら自身のクラスに入った。

入学式自体は普通に終わった。

で、HRの時間の感想をひとつ。

とにかく担任がウザい。

本当の担任は産休らしいが、とにかくこのジジイはウザい。

「担任ウザくね？」

骸も同意見のようだ。

「当たり前だ。あの髪形と言い喋り方と言い全てが気に入らねえ」

オレは帰る支度をしながら骸と担任の愚痴を言い合っていた。

で、帰るとき。

「きゃっ！」

あ、オレの肘に当たったのか・・・。

「あ、悪い。大丈夫か？」

「べ、別に怪我はしてない。心配するな」

いや、普通しないだろ。

あの程度じゃ。

「ああ、そうか。ならよかった。じゃ」

身を翻して扉を向くとさっきの子がオレの手を引いた。

「も、もうちよっと心配しないのか？」

面倒だな。

「大丈夫か？」

オレはもう一度尋ねてみる。

「ああ、大丈夫だ」

じゃ、聞く必要ねえじゃん。

「オレは片瀬駿だ。用があるなら明日以降にしてくれ」

面倒なのに引つかかっちゃまったな。

「そうか、私は氷室椿姫だ。今後よろしく頼む」

あー、そうですか。

別に興味はないけどさ。

心の片隅にでも止めておこうか。

「じゃあな」

もう逃げたかったのでとりあえず有無を言わずに逃げた。

「話は終わったか？駿が話し終わるまで女の子からメイド聞いたよ」

「ああ、一応な。メイド悪用するなよ」

骸は続けてなんか言い始めた。

「あいつ、たぶんお前のこと好きだぜ」

は？

意味わからん。

「あの様子じゃ前から知っているようだったし」

「絶対違うだろ」

骸も何言い出すんだか・・・。

「駿は鈍いな。ま、この手の漫画や小説の主人公にはお約束だけだな」

なんか言ったか？

まあいいや。

全然関係ないけど、ここでひとつ言いたいことがある。

それにしても……こいつここまで女好きだったか？

第6章第2話 下っ端が喧嘩売ってくるが、ボスは非常に協力的な件について。

4月15日午後5時

あれから一週間がたった。

特に変わったことは何一つなかった。

結構意外だな。

そして現在、骸と体育館裏にいる。

なんで体育館裏にいるかって？

「・・・何でオレがここにいるんだよ」

「何でってお前ラブレターもらったじゃん！断るつもりでも一応顔は見せとけよ」

めんどくせえな・・・。

三日ほど前からオレと骸にラブレターのラッシュがかかっている。

骸は純粹に顔がいいからな。

オレは・・・主人公補正かかってるからか？

で、来ましたが・・・。

「え・・・と。あの・・・」

「用があるなら早くしてくれ。オレはこれから骸とラーメンを食うに行くからさ」

いや、マジテキトーな理由だわ・・・。

とっさに出てしまったが我ながら情けない。

「す、杉山すきやまつばさです！もしよければ付き合ってくださいませんか？」

ふう、噂って案外広まらないものだな。

「君、確か同じクラスだよな。友達にはなってもいいが、付き合うのは無理だ。オレには彼女がいるからな」

だいたいこんな感じに断っているのだが・・・。

「わかりました。でも、今度みんな遊びに行きませんか？」

その程度ならいいか。

「ああ、いいよ」

ま、遊びに行くって言ったらカラオケ行ってボウリング行って飯食ってそれで終わりってとこか。

「それじゃ、また明日な。つばさ」

「あ、うん。またね、駿くん」

今まできた奴らの中では一番好みかな・・・って何言ってるんだ・・・オレ。

オレには愛しの千秋がいるじゃないか。

つばさと一緒に体育館裏から出ると、なんかゴツイ奴らが大量にいた。

「どう考えても喧嘩売ってるよな、こいつら」

後ろに隠れていた骸も姿を現して言う。

「絶対もてないから腹いせに殴ってるってとこか」

一応何者が聞いとくか。

「あんたら誰？」

「我らは風紀委員。この学校での恋愛は禁止とする」

「お前らが恋愛と無縁だからその腹いせに・・・か？」

骸、ナイス！

「破った者は、制裁を加える」

「腹いせに殴りたいだけだろ？」

骸、ナイス！

本日二回目。

風紀委員とやらは総勢15人程度か。

このまま骸を囷にして逃げようか。

「てか風紀委員名乗るんだったら髪形とか身嗜みとか整えてから言えよ。そんなんじゃ誰もお前らの話を聞かねえぜ」

その言葉がトリガーになったのか、やはり殴ってきた。

ゴミだな。

「つばさ、逃げる！骸、こいつら全員よろしく！」

骸はこう見えて轟騎と互角に戦っていたからな。

錬磨よりは断然使える。

「ひとりじゃ一度に3人が限界。手伝えよ」

仕方無いな。

「ちよつとお前、腕貸せ」

オレは骸の腕を掴むと、剣の構えをする。

「行くぞ、鉛刀一割！！」

剣は何かつて？

勿論、骸さ！！

「ちよつと待て！？止めい！？」

おお、結構威力高いな。

つっても骸じゃ切れないか。

ボロボロにしたあいつらを見下ろしてオレはいった。

「で、ボスは？」

風紀委員だからって調子に乗るなよ、お前らが一番風紀を乱してん
じゃねえか。

でも風紀委員長が某トンファー風紀委員長みたいな人だったら、死
ぬわ。。。

あの人人外だし・・・オレもだけど。

まあ、そんな奴いる訳ないしな。

・・・と、連れてきたか。

「俺が風紀委員長の神宮だ・・・って、駿か。それなら凶悪な奴が

第6章第3話 え、風邪の日にはお粥だって？何のことかなあ……。

4月20日午前8時

数日間あまり気にはしていなかったが、会社の方はどうなんだろう。はやて姉がすべて引き受けてはくれたけど……。みんな寂しい思いしてるかな……。ってしないか。特に中将！！

あいつは滅茶苦茶喜んでるだろう！

頭に来るんだよ、あいつの言動のひとつひとつが！
つと、学校についたな。

玄関に骸もいるし、一緒に行くか。

「お、駿。おはよう」

「ああ、おはよう」

こんな感じに朝あったらとりあえず適当に挨拶。

それから必ず後ろからつばさが微笑みながら声をかけてくれる。

そんな日常を満喫している。

「あれ、つばさが来ないな」

たった数日でここまで習慣付くとは、慣れとは恐ろしいものである。

「お、駿！ようやくお前にも女の子の良さが分かったか！」

「知るか！」

何言ってるんだよこいつ。

「確かにつばさちゃんはずのクラスでもとびつきり可愛い子だからな……。うんうん」

もう勝手にしてくれ……。

……。で、本当にどうしちゃったんだろう……。

同日午後4時

「結局つばさちゃん来なかったな」

「風邪でもひいたんじゃないか？」

まあ、そんなところだろ。

高校は小学校や中学校と違って欠席の原因なんて言わないからな。

そんなに気にすることもないさ。

「行ってみないか？」

は？

どこにだよ？

「行くって・・・どこに？」

「つばさちゃんの家が決まっているだろう！」

な、何言ってるんだよ。

家とか知らないだろ。

「家なら知ってるさ。俺の情報網を舐めないでほしいな」

情報網じゃなくてストーキングじゃないのか？

日本語聞えないでほしいな。

仮にも日本語検定持っているオレ・・・と言うわけではないが日本人としてね。

で、実際に行ってみた。

オレは乗り気じゃなかったが、半ば強制だったし。

「こんにちは」

「ウツス！」

標準的なアパートの一室か。

この大きさなら一人暮らしでもなんとかなるな。前に学校通うためにひとりで暮らしてると言ってたし。

「鍵が開いてる・・・ま、いつか。つばさ、入るぞ」

オレはこのこと入って行く。

そして骸は後ろで手を振ってる。

・・・何でお前が入らねえんだよ！？

「まあ、いいか」

奥に進んでいくとつばさが顔を真っ赤にして寝込んでいた。

「だ、大丈夫か？」

やっぱ風邪か。

オレの思ったとおりだ。

「駿くん・・・うん、大丈夫だよ。ちょっと体が熱いだけ」

「悪いな、勝手に入って。今なんか作るからさ」

友のピンチだ。

料理くらい作ってやるべきだろう。

骸も呼んでやるか。

「骸、料理作るからお前も手伝え・・・逃げやがったな、あいつ」

まあ、いいか。

ん、なんか置いてある。

スーパーの袋に・・・あ、食材と調味料か。

見たこと無いメーカーの食材や調味料があるけど、オレが普段料理しないからだろうな。

ありがたく使わせてもらおうか。

今日のメニューはラーメンの一品だけだが、なかなか上手くできたと思う。

スープもダシから作ったし、麺も自分で打った。

初心者にしては上出来だろう。

そして作り終えてから気づいた。

「何でオレラーメン作ってんだ？しかもーから。お粥作れよ、オレ」
まあ、作ってる間に熱も引いてきたようだし、ラーメンは食えるだ
ろ。

「できたぞ、ラーメンだけど」

ラーメンにはうるさいオレが美味しいといったラーメンだ。
不味いわげがない。

「駿くん、折角だから・・・駿くんが食べさせて・・・」
ヤバい、今はハートを貫く一撃だった。

純粹にこの子可愛いわ。

「分かった、食べさせてあげるよ。口開けて」
ラーメンでこんなことするのは馬鹿らしいが、まあいいか。

つばさが全部食べ終わると、オレは食器を洗う。
洗っている最中に思い出したんだが。

「・・・オレのラーメン食うの忘れた・・・」
今頃は伸びきっているだろう。

がしかしオレのラーメン。

そこまで不味くはならないだろう。

一応食ったが、スープが冷めていたので不味かった。

失敗した！

冷やしてもおいしいラーメンにすればよかった！

そう言えば小学生時代にラーメンをわざと伸ばして食う量を増やしていた貧乏人がいた。

頭も悪いし、顔もキモいし、逆ギレするし何の取り柄もない奴だったが、結局何の取り柄もないまま小6の頃に事故死した。

事故内容は、自転車に乗りながら転んで頭打って死亡。
バカすぎる。

俺達の中では最期まで馬鹿を貫き通した男として笑い話にされている。

洗い物が終わり、つばさの部屋に戻るとつばさが顔を真っ赤にして倒れていた。

え！？

熱は引いたはずじゃ……。

もしかしてオレのラーメンで！？

まずったな……どうしよう……。

とりあえず寝かせないと！

「大丈夫か？」

「……駿くん……これ風邪じゃないみたい」

え？

「なんかさつきからムネがドキドキするの。この気持ちなんだろう。．．．」

．．．こりゃあ、間違いないっすな。

「駿くんが熱冷まして．．．」

つばさがトロンとした瞳でこちらを見ている。

悔しいが相当可愛い。

なんとか理性を抑えていると、トドメの一撃とも言える上目遣いを行使してきた。

しかも抱きついてきた。

「駿くん、だあい好き」

ぐあ、ヤバいな、リアルに理性が．．．。

こんな状況になったのは間違はなく奴だ。

榎原骸おおおおおおおおおおお！！！！！！

骸の野郎．．．骸の野郎．．．。

「骸の野郎調味料に媚薬盛りやがったなあああああ！！！！！！！！！！」

近所迷惑ともいえるほど大声で叫んだ。

魂の咆哮って、こんな感じなんだな、って変な状況で感じてしまった。

く、オレも体が熱い．．．。

理性がもうそろそろ限界だ．．．理性保てるかな．．．オレ。

この夜オレは理性が飛ぶ前に家に逃げたが、そこには何故かはやて姉がいて、この状況を利用され襲われました。

後で聞いた話だが、はやて姉は骸の差し金らしい。

あいつ、錬磨と同じ目に会わなきゃ分からんようだな・・・。

第6章第4話 榎原骸を生贄に捧げ、片瀬駿を召喚する！（仮題）

4月22日午前11時

気がつけば2週間が経過していた。

今は授業中だが、オレはいつものごとく寝ている。

理由は数学だからだ。

数学が嫌いなわけではない。

数学の教師が担任（仮）だからだ！

無論、骸も寝ている。

てか、クラス全体の3割は寝ている。

「駿くん、起きてよ。そろそろ授業終わっちゃうよ？」

後ろの席のつばさが肩を叩いてくれている。

が、オレは熟睡。

授業なんて受けるか。

そもそも担任より千秋に教えてもらった方が分かりやすいし。

天才と凡人じゃ格が違うんだよ！

「ねえ、駿くん。じゅ、授業終わったよ・・・」

「マジ！？やったぜ、今日も数学の時間が終わった！！」

周りを見るとみんな目を覚ましつつある。

無論、骸は爆睡中だ。

それじゃ、放置しておこうか。

次の時間は骸が大好きな先生の授業だったんだけどね。

勿論、女だ。

同日午後1時

「駿てめえ、なんで起こさなかつた!!」
さっきの授業か。

お前が寝ていたのが悪いんだろ？

「にしても、この新発売のパン。この値段でこんなにうまいとはね」
定価150円（税込）だからうまいか。

高いけどこれはそれ以上の価値があると見た。

「話反らすな!」

「つばさも食うか? うまいぞ?」

「ありがとね。あ、ホントにおいしい。え、と・・・いくらだっけ?」

「いいよ、そのくらい」

徹底的に骸をシカトするオレとつばさ。

うん、気分爽快。

何でつばさがここにいるか疑問を持った人もいるだろう。
というわけで解説。

つばさは山中県の地方の村から途轍もない学力を持ってここに入学
したため、友達がいらない。

つまり、数少ない知り合い・・・今は友達か。

友達のオレたちと昼食を共にしているというわけだ。

なお、学力はテストでは学年トップ。

てか、満点。

千秋ほどではないけどかなり頭がいい。

ちなみに、骸はそこまで頭はよくないがサッカーが上手いという理由で入学した。

勿論、入学の口実にしたがサッカー部には入っていない。

本人曰く、「高校生なんだからもっと遊びたいじゃん」らしい。

毎日サッカー部がしつこく迫ってくるが、昨日ついに骸は激怒し、風紀委員長・神宮亮平氏を呼び、部活への過度な勧誘をしすぎると廃部にすると言わせた。

銃を突き付けて・・・。

オレは銃を突き付ける方が悪いと思うが、ここは見なかったことにしようと思う。

事実、過度な勧誘は何故か校則で禁じられているため、生徒会の方でも廃部にするか検討中だ。

たぶん、廃部にならないけどな。

ちなみに、この学校の権力の強い組織順に

風紀委員>不良グループ>生徒会>教師>生徒一個人

不良グループが二番目に権力がある時点でこの学校は軽くおかしいが、それだけ不良は凶悪なんだろう。

で、話は放課後に移る。

同日午後5時

オレと骸はケータイをいじりながら歩いていると骸が誰かにぶつかった。

「あ、わりっす」

「わりっす、じゃねえ」

あゝあ、変なのに捕まっちゃったな。

ま、ザコそうだけど。

「てめえ、調子に乗ってんじゃねえよ」

不良に絡まれている骸を端でパンを食いながら眺めていると、つばさが来た。

「駿くん、骸くん、一緒に帰ろう」

その言葉で不良がつばさの方を向く。

「迷惑料としててめえの彼女で許してやるぜ」

不良がつばさの細い腕を掴む。

オレも結構細いが、やはり男と女じゃ差が歴然だな。

てか、ヤバくね？

勿論、オレはあの不良が気に食わないのでつばさを助ける。

オレは結構丈夫そうな木の枝を拾い、それで不良の頭を打つ。

不良はよろけながら倒れた。

こんな時、刀を持っていないと不便だと思うオレは完全に裏社会に墮ちてしまったと思う。

「ふざけるのもいい加減にしろ。骸なら好きにしてかまわねえがそれ以外の奴らに絡むなら、オレが貴様を消す」

鼻血を出して倒れている不良の頭を踏みつける。

こんな奴はどちらが強いか証明するかが一番手っ取り早い。

「土下座するなら許してやることを考えてやる」

無論、オレは考えるけど許さない。

その前にこの頭を踏み潰すのが先かな・・・。

「止めろ、駿。やりすぎにも程がある」

この声は・・・骸じゃない・・・。

こいつは確か入学式で少し話をした・・・誰だっけ。

「もうこいつは気絶している。ここまでやる必要もないだろうっ?」

まあ、少しやりすぎたかな?

でも、オレは後悔していない。

つばさを守ったことに関してはな。

第6章第5話 はやて姉の命令。とりあえずロンドンへ来い。

4月25日午前9時

今日は開校記念日らしいので休みである。
特にすることもないので、今は寝ている。
そんな時だった。

オレのケータイのメールが届いた。

まあ、こんな時によこす奴なんか骸くらいしか……ん？

「……はやて姉？」

何で今更……。

まあ、いいか。

オレはメールの内容を確認すると、

駿くん、今すぐロンドンの本社に来なさい。

だそうです。

え？

今からじゃだいたい時間かかるぞ？

てか明日学校休まなきゃいけないじゃん？

「……行くか」

逆らったら先が分かっているので、仕方なく行く。

あ、そうだ。

ひとりじゃ暇だから誰か誘うか。

「候補は轟騎か骸……どっちにしよう……」

まあ、轟騎は学校あるしな……。

骸は骸でウザいし。
無論、錬磨という選択肢はない。

「勝手に入るぜー！」

え？

この声は・・・骸！？

よし、骸にしようか。

「む、骸くん。勝手に入っていいの？」

「良いんだよ、どうせ駿の家だし」

骸どころかつばさもいるっ！？

てかどうせってなんだよ！？どうせって！？

「この間の約束、今日遊びに行こうよ」

つばさの約束って、ああ。あれか。

てか、今はそんなことより。

「骸、つばさ。ロンドンに行くぞ！お前らの旅費は全てオレの自腹
でいい」

つばさは目を丸くして驚いている。

「いいよ、その辺のシヨツピングモールで・・・」

「こつちにも事情があるんだ！パスポートなら偽造パスポートがあ
る！」

問題ない。

はやて姉が作った奴だからばれないだろうし。

「本来なら轟騎を連れていきたいところだが、今はしょうがない。
タクシーはもう用意してるから行くぞ！」

オレは半ば強引に二人を連れて空港に向かった。

「まさか海外旅行できるとはね。流石駿だな。家柄も結構いいところだし」

家で人を判断するのはおかしいと思うけどな。

まあ、千秋や錬磨ほど金はないけど・・・それにこれ汚い金だけど・・・。

「あ、あの・・・駿くん・・・。飛行機墜落しないかな。飛行機なんて初めてだから怖いよ・・・。」

心配性だな、つばさは。

墜落なんてしないって。

・・・一回被害にあったけど。

「お、そう言えば駿って墜落事故にあったんだってな」

「ひゃう、そんなこと言わないで・・・不安になっちゃうから」

「まあいいじゃないか。実際墜落事故に巻き込まれたし」

そして記憶を失い、湊と出会った。

ってとこか。

あそこで暮らした数日間は結構すごかったよな。
自給自足で。

「み、耳が痛い・・・。」

あ、耳抜きしてなかったの？

「ほら、こっちきてくらん」

オレはつばさを引きよせ、耳抜きをしてあげる。

「駿はつばさちゃんとは結ばれたな！」

何言ってるんだよ!？」

どちらかという彼女と言うより妹って感じだぞ。

「着くまで時間もあるし、トイレですることしてきたら?」

「いや、することなんて何も無い。てかふざけんな！」

こんな感じで到着までの長い時間、骸に遊ばれた。

屈辱だ・・・錬磨じゃないだけマシだが。

4月26日午前7時

「到着だ」

「なあに、ここ?」

オレとつばさは目的地の前で立ち止まった。

骸は空港でいろいろ買っていたので、置いてきた。

かなり距離があるから、おそらくついては来れないだろう。

「あ、先輩ついに来やがったのですか?」

なんだよその言い方!？」

「中将、なんだその口は?」

「あ、先輩また女の子を毒牙にかけたのですか？先輩の女癖の悪さにさらに磨きがかかりましたね」
うげえ……。

このイヤミったらしい口調を何とかしてもらいたい。

「それはそうとはやて姉とかは？」

「そうだ、オレははやて姉と呼ばれてきたんだ。」

「そうでした。即急にこの地図のところに行ってください！ここにみんないます！」
へ？

なんだか分からないけど……行くか。

「中将、バイク借りていくぜ！」

恐らく中将のバイクを借りて、オレは走り出した。

「待ってる、はやて姉……今いくからな」

「駿くん危ないよぉ。もう少し安全運転して」

なんでつばさがいるの!?!?

まあ、今は置いて行くわけにもいかないし。
仕方無いか。

目的地に到着すると、はやて姉はニコニコしながら待っていた。
それどころか、何故か千秋や轟騎がいた。

「駿くん、お誕生日おめでとう！」

「オレの誕生日は三週間前だわ！！」

意味わかんねえ・・・それだけかよ・・・。

「冗談はこのくらいにして、駿くん、仕事よ」
お、久々の仕事か。

「今回の仕事は、暁ちゃんの救出よ」

え？

第6章第6話 スラム街の教会には何故か神父がいなくて孤児がいる

「暁どこだよ………困まれた……」

はやて姉の指示を受けて暁の救出のためにスラム街に向かったオレだが、そこで面倒なことが起こった。

見慣れない奴は撃ち殺すってか。上等だ。

やってやるうじゃねえか。

「地の底から生まれし獣よ。彼の地に大牙をむけん

ジャ

バウオック!!」

とりあえずこいつで様子見だ。

にしてもオレって召喚上達したよな。

最近目立つようなことはしてないけど夜の鍛錬でここまでね……。

召喚されたジャバウオックは炎のような眼で軍勢を睨みつける。

勇敢な奴は銃で応戦したようだが、弾丸数発じゃビクともしない強靱な肉体をもつジャバウオックに潰された。

ほかは逃げたようだが……肝心の暁はどこでしょうね。

ひとり捕まえて尋問すればよかったな。

ジャバウオックにはこのまま見張りをさせといて、探すか。

オレは建物を一軒一軒見て回っているのだが、暁は一向に見つからない。

「あいつにも困ったものだな」

更に足を進めるが、やはり暁は見つからない。

若干面倒になってきて帰ろうかと思いついた頃、教会を見つけた。

「スラム街に教会って結構お約束だよなw」

ここに孤児が沢山いて、シスターが忙しく動いてて、何故か神父がいない。

もはやお決まりのパターンだ。

つと、じゃあシスターに暁の事でも聞いてきますかな。

「こんにちは・・・はあああああああ!？」

オレが入った瞬間、多数の力チャリという音が聞こえた。

・・・え？

何!?

なんで男どもが銃構えてるの!?

まさかの奇襲ですか!?

孤児は!?

シスターは!?

神父は・・・っていないのがお決まりのパターンだったわ。面倒だな・・・。

この状況でどうしようと・・・。

「問題はない。今すぐ助けてやる」

・・・誰っ!?

・・・ってひゃああああああああ寒い!?

何で!?

みんな氷漬けじゃん!?

「片付いたようだな。では、自己紹介をしようか」
だから誰!?

「私の名はシロガネ。現在君が手にしている刀だ。何なら擬人化するが・・・」

シロガネが目覚めたのか・・・。

「いや、いい。わざわざしなくても」

「そうか。ならばこのまま話そうか。その前にひとつ言うが、氷柱に閉じ込めたあいつら、心臓が止まっているからすぐに死ぬぞ。それから無理に氷を割ると中の人間ごと砕けるぞ」

・・・どうすんだよ。

つつてもこんな場所じゃ、当たり前かな。

来たこと無いけどそんなイメージあるし。

どっかの漫画じゃ平気で銃ぶっ放して人殺して特に何もとわれてないしな。

大丈夫かな。

「ご愁傷様」

一応言っておいた。

たぶん言葉通じないけど。

「では、話を続ける。私が覚醒したのは君がロンドンで誰かを救出しろと言われたところからだ。そこで、私は君にひとつの力を与えたいと思う」

「力?」

「他の騎士たちも持っているはずだ。私は氷の力を保持している。そしてそれとは別に千里眼を持っている。この千里眼は君にも与えることができる」

・・・なるほど、それで暁を探せと。
ありがたいな。

「では、今から君に授けよう。目を閉じてごらん」

頭に何かを書き足されて・・・行くような行かないような・・・。
でも、見える。
見えるぞ。

この街の一角の家で・・・え、なんだよこいつ!?

ニコニコしながら飯食ってんじゃねえよ!?

しかも結構家の人と打ち解けてない!?

・・・妹だろうがなんだろうが、オレをこんな面倒に巻き込みやが
つて・・・。

「暁の奴・・・発見次第、オレが監禁してやる!!」

オレはお前のお迎えにわざわざ日本からはるばる来たのかよ。

マジ腹立つな。

さあ、暁を回収しに行きますか。

第6章第7話 まさかの同業者。お前とはもう・・・共に歩めない。

「うおるあああああああ、暁何やってんだよ!」

現在、暁を回収しに民家にたどり着いたところです。

「駿!?!なんでここにいるんや!?!そないなことはやてか!」とりあえず黙つてろ!帰るぞ!」

こっちはこんな奴のためにはるばる日本からやってきたことが非常に腹立たしいんだ!

つたく、学校欠席二日だからな。

こんなことは学校行くよりも面倒だ。

「とりあえずロンドンまで戻る。後ろに乗れ」

オレはバイクに乗り、その後ろに暁が乗る。

・・・背中に感じるはずものが・・・ない・・・。

暁胸がない!!

全然ない!!

いやあ、ぺったんこ!

見事なまでに貧乳。

「何考えてんだオレ・・・」

バカすぎる・・・。

千秋を後ろに乗せてえ・・・。

まあいい。

もう帰ろう・・・。

ロンドンまで2時間、しんどいな・・・。

< 骸視点 >

「骸よ、こんなところで会えるとはな」

「・・・お前か。駿に連れてこられてな。それで何してるんだ、お前は」

「こいつの整備さ」

俺につきだされる大型の銃。

そうだな、こいつの銃は特注だったな。

わざわざこんなところまで来ないと整備できないんだな。

「お前も学校生活に浸ってないでまた銃を握れよ」

「悪いが、オレはもう少しこのままでいたいたいんだ。駿ともう少し。せつかくの旧友だ。あいつとは何事もなく平穩に暮らしたい」

「ふ、ここで一つ言わせてもらうが。それは恐らく叶わない。片瀬駿、こいつは国際的に凶悪な殺し屋の一人だ。さらに、片瀬家の直系の者は全員殺し屋だ。それも国際的な、その上例の社のモンだな、バカな!？」

あの社は女しかないはず!？」

「つい先日入った男の剣士。それが奴だ。奴は並の人間じゃない」

「……駿……お前……」

「分かったなら銃を取れ。お前の相棒をな」

駿……連れてきたのは仕事のためだったのか……

「……骸？」

「……この声……駿？」

「どうしたんだ、空港にいなかったのか？」

「……俺のモノは？」

「ほら、こんなか入ってるさ」

俺の方にカバンが投げ出された。

準備がいいじゃねえか。

「骸、何やってんだ！？なんで銃なんか！？」

「デス・ワン・セカンドMk2。この銃の名前さ。これに撃たれた者は1秒で死を迎える。全てこいつから聞いたよ。駿、お前は……殺し屋なんだってな。奇遇だな、俺も高校に入るまで殺し屋やってたんだよ……」

ははは、まさか駿が殺し屋とはね。

しかも対抗勢力のあの社とはね……

駿にも困ったものだ……

こんなことしてなきゃ、殺さずに済んだのによ……

「まあ、一応殺し屋やってるけどさ。たぶんお前じゃ勝てないよ、オレに」

随分調子に乗ってんじゃねえか……いくら駿でも……俺に喧嘩売る真似は許さねえぜ……

「確かに骸じゃ勝てねえよ。お前の弾丸はこいつには一切通用しない」

「何故だ」

「こいつは、放たれる弾丸を全て斬り裂く。その現場を目撃したからな。一発も逃さなかった」

こいつ……。

何時の間にこんな……。

< 駿視点 >

まさか骸が殺し屋とはな……。

今までそんな素振りは一切見せなかったのによ。

「骸、帰るぞ。つばさが待ってる」

骸は答えない。

俯いたまま。

「俺は殺し屋だ。普通の人間とは一緒にいられない。お前みたいな世界公認の殺し屋じゃないからな」

「……オレだって好きで人殺してねえよ」

「別にどうだっていい。お前がこっちの世界の人間だったとはな。

こっちの世界に生きる者は誰だろうがみんな標的だ。次会う時には味方ではないってことを覚えておけ」

そう言って骸は立ち去った。
一度オレを鋭い眼で睨みつけてから。

第6章第8話 別れの悲しみを与える骸、それを乗り越える勇気をくれるつばさ

「駿くん、骸くんおいてっちゃっていいの？」

「ああ……。いいんだ。あいつを置いて行っても」

オレは骸が立ち去る姿を見て、とても大事なものを失くした気がした。

時間ギリギリまで空港で待ってみたが、やはりあいつは来なかった。心配すら感じさせなかった。

「駿くん元気がないよ？ほら、そんな悲しい目をしないで」

つばさが励ましてくれるが、全然耳に入っていない。

オレの正体を知ったことで骸はオレから離れた。

同じ世界の人間だということ、オレが敵だということにして。

「つばさ……。オレ……。どうすればいいんだよ」

もう、何を考えてるか分からない。

何を言ってるのかも分からない。

「涙が出てるよ。やっぱり骸くんと喧嘩したの？」

「……。そうか、さっきから冷たく頬を伝うものは……。涙だったんだ……。」

「とある事情で……。離れて行っただ……。もう学校にも来ないらしい」

最後の方は涙声でつばさも聞き取れなかっただろうな。たぶん。

「泣きたいときはいっぱい泣くといいんだよ」

そう言っつてつばさはオレを優しく包み込んでくれた。

……。この光景、結構恥ずかしい。

でも、今は救われる。

日本に帰ったら、お礼でもしないとな。

「ありがとう、少し気持ちが落ち着いた」

「えっ？全然興奮しなかった？私はとつてもドキドキしてたんだけどな」

「なっ、何言ってるんだよ!？」

「まあ、ちよつとは・・・つて、何言ってるんだよ。」

「駿くんとあんなに近づいて・・・。こんなこといつもしてる彼女が羨ましいよ」

「千秋のことか・・・。」

「最近会ってないな・・・。」

「日本に行ったら会いに行こうか。」

「いつもしてるわけじゃない。なんていうか・・・オレとあいつは・・・好きな時に会えないんだよ」

「千秋の仕事の邪魔になるしな。」

「じゃあ、駿くんとつちやっても平気かな？」

「それは無いだろ。それにオレは簡単に寝返りはしないさ」
「寝返りそうになることは多々あるが・・・。」

「今度、一緒に会いに行ってみようか？」

「何で？私と一緒にいたら駿くん勘違いされちゃうよ？」
「そんな心配そうな顔しなくても。」

「千秋はそんなことで勘違いしないって。」

「大丈夫さ。きっと」

「千秋も高校の友達を見たいはずだろうしな。」

「同い年の友達も欲しいだろうし。」

5月1日午前6時

いろいろ手続きがあったからな。
気づいたら4月が終わっていた。
つばさを無駄に欠席させてしまったな。
で、飛行機から降りたところだ。

「家まで送ろうか？」

「空港から歩いて帰ったら1時間はかかっちゃうよ
そりゃそうか。」

タクシーでも拾うか。

「で、今日学校行く？」

「勿論行くよ。テストも近いし」

そう言えばテストあったな。

ゴールデンウィーク明けからだっけ？

「・・・じゃ、行くか」

本当は行きたくない・・・。

同日午前8時20分

間にあつたな。

20分も余ってるし。

「お、片瀬！久しぶりだな」
誰だっけ？

「・・・誰？」

「忘れたのかよ！？同じクラスの空野そらの元気げんきだつて」
名前に空と気が入ってる。

こいつは空気キャラとみた。

某動画サイトの最強空気キャラに勝てるか？
楽しみだ。

・・・あれ、空野どこ行つた？

流石空気、すぐ行方をくらます。

「あ、駿くんだ。おはよ」

おお、つばさか。

「てか、二時間ぶりだな」

よく間に合つたよ、二人とも。

「おーい、片瀬と杉山できてるぞー！！」
何いってんだ空気！！

使い捨てキャラのくせに生意気な！？

ぶっ殺す！！

その後、クラスの人にからかわれて大変だった。
頭に来たので空気野郎は生徒会に突き出した。
サンドバックに使ってくださいという手紙と共に。

第6章第9話 現場でみた衝撃の腕！あれは腕！リアルに腕！

「連続殺人事件？」

「そうらしいよ。私たちがロンドンに行ってる間から」

ここ数日の間に殺人事件が連続で発生してるらしい。

日にちを調べても骸と別れたあの日より前から発生している。

ということは骸の犯行ではない・・・か。

「死因は全部腹部、もしくは首の切断。首ならともかく腹部はチェンソーとか使わないと切断できないな」

骸の武器は銃。

基本的に殺し屋はそこまで大げさなその殺し方をしないし、オレたちのところは自分の得物以外は使わない。

骸のところも同じ方針とみたら、弾丸の痕があるはずだが、そのよ
うなものは見当たらないらしい。

「オレとは無関係の奴の犯行か・・・」

だが、殺し方があまりにも残酷すぎる。

これはいずれオレの出番が訪れるかもしれないな。
あまり手は下したくないのだが。

オレは帰るために玄関に向かうと、風紀委員がいた。
また面倒なことになるのか？

「片瀬殿、委員長がお呼びです」
亮平が？

まあいいか、ついていこうか。

「失礼します。亮平、要件は何だ？」

「ああ、ロンドンから帰ってきて早々だが、はやてからこれが届いた」

はやて姉かよ……。
手紙か、えつとなになに？

親愛なる弟、駿へ。

元気にしてる？

お姉ちゃんがいなくて寂しい思いしてない？

してたら今度一緒に寝てあげるから、今はお願いを聞いて。

最近山中市で起こっている連続殺人事件の犯人を暗殺してほしいの。

「予想はしていたが……こんなに早くとはね。しかもゴールドンウィークに」

嫌がらせかよ。

まあいいか。

どのみちオレの知り合いが死ぬのは見たくないしな。

明日の夜でも狩りに行くか。

そしてその夜、担任が惨殺された。

次の日

「もしもし・・・つばさか。え、担任死んだの？やったー！
<やったー！、じゃないよ！私も殺されちゃうのかな・・・>
ああ、そうか。殺される危険性もあるのか。」

困った。

実に困った。

「仕方無いな、オレの出番か」

<え、駿くんなんとかするの？>

「任せておけ、オレはそう簡単には死なないさ」

なんだかんだいって瞬間移動した。

瞬間移動先には胴体を真つ二つにされた女性が転がっていた。

さらにその先には殺人犯らしき人物が。

暗くて顔は認識できないが、髪は長い。

女の可能性が高いか。

得物は持つてはいないようだ。

だが、こいつからは魔力が感じられる。

魔力だけを見ると・・・！？

「・・・手？」

殺人犯の背から8本の腕が伸びていた。

魔力で構成された腕。

魔力で構成されているために普通の人間の眼には映らないはずだ。

当然の如くオレは魔力を感じることができる。

「・・・これは・・・」

あの腕に掴まれた被害者の腕が飛んだ。

「やはりそうか。お前はデイクロニウスだな！！」

あの光景はまさにエルフェンだ！

これなら説明もつく！

「いや、違う。私のこの腕。禁術・千手だ。今はまだ千の手を出すだけの魔力はないが」

・・・この声は・・・。

普段うちのクラスでは委員長などのリーダー的役割をしている・・・

。

「氷室・・・なぜお前が」

「試していただけだ。お前の力を試すために」

・・・え？

・・・何故？

第6章第10話 椿姫の禁術・千手真相。それと同時に明らかになる前世（前書

前回投稿したのはなぜか続編で作ろうとしていたものになってました。

第6章第10話 椿姫の禁術・千手真相。それと同時に明らかになる前世

「オレを・・・試す？」

「そう、私に見合う人物になれたかどうかを」
・・・はい？

「昔、お前は私にこう言った。いつかオレがお前より強くなれたら結婚を申し込むと」
・・・え？

記憶が完全回復したオレの記憶にもないんですけど、そんなこと。

「・・・え、あの、オレにそんな記憶ないんですけど？」

「そりゃそうか。これは前世の話だからな」
電波ですか！？

あんな電波だつたんですか！？

そりゃしらねえよ、普通の人間には！！
前世って・・・おい。

「それなら、これを首にかけてごらん」

オレは綺麗なネックレスを手渡された。

綺麗だけど、妖しげな光を放つ不思議なネックレス。

この宝石は・・・ムーンストーンかな？

そんなことは置いといて。

オレはネックレスを首にかける。

その瞬間、オレの脳裏にひとつのビジョンが焼きついた。

「・・・あのことは気にするな。魔術師に剣であそこまでやれたんだ。お前は立派な剣士だよ」

・・・椿姫によく似ている。

・・・雰囲気だ。

顔は全然似ていない。

だってあいつら西洋人だし。

まあ、恐らくこの人が椿姫の前世だろう。

「そんなことはない。オレは剣、お前が魔術。オレは魔術を使えない。故に剣に頼るしかない。普通の人間じゃ魔術師には勝てない。

だが、いずれ魔術をも超えた剣術を修得し、魔術師を倒す剣士となるうじゃないか」

なんか崖に佇んでいるのは・・・オレの前世か。

「・・・それならどうだ？私に勝てたら・・・ひとつ願いをかなえてあげよう」

「そんなこと言っているのか？なら、オレは勝てたらお前をオレのものにする。つまり、結婚を申し込むよ」

何言ってるんだよ！？

てか、本当だったんだ。

「・・・この身はお前に捧げるためにあるのに・・・。そんな約束しなくても・・・」

「これはオレ自身への戒めだ。女に勝てないんじゃない、男として悲しいからな」

オレの前世め、キモい言葉吐きやがって・・・え、オレも吐いてるって？

オレは・・・とりあえずいいんだよ！

ここでビジョンが途切れた。

「中途半端なところで終わんなよ……」

内容はなんとなくわかったけどさ……あくまでもなんとなく。

それに強くなつたか試せば絶対零度で一発合格だろうし。

でもなあ……。

別に結婚する必要もないし……。

オレには千秋いるし……。

「ふう、結婚のことは後でいいが。それよりも私が人を殺していたことに疑問は抱かないか？」

「……まあ、確かに。それを調べに来たんだからさ」

「私の禁術・千手は人を殺した数だけ腕の数が増えていく。正確にはその腕はその人の魂なんだ。最高一万本の腕になり、リーチは最大10kmになる」

千本じゃないのかよ!?

千手でしょ!?

ってか、マジでベクターじゃん。

「とある事情で前世の頃、力を取り戻さなければならなくなった。だから力を蓄えていたのだよ」

とある事情?

また面倒な展開か?

「事情とは?」

「悪魔。前世の頃、私とお前はとある悪魔を封じ込めた。フランスにあるある時計塔の地下に。その時に、お前の前世は命を落とした」
「死んだのかよ!?

「勿論、今の私は以前のような強さを持ち合わせてはいない。そこで今、お前にこの件を頼むことにした。私もついていくが」

・・・。

悪魔・・・か。

「悪魔の名は?」

「フローデインだ」

「リア、聞いたことは?」

オレはリアを召喚して尋ねる。

悪魔のことは天使に聞いた方が手っ取り早いしな。

「・・・わらわには分からん。何せ、わらわは生まれてから十数年しか生きていないのだからな。他の天使を召喚して聞いてみたらどうだ?」

そうか。

確かオレより少し上ってとこだったな。

その封印した話は数百年前の話のはずだからな。
分かるはずもないか。

「仕方無い。召喚するか」

オレは召喚の支度を整え、

「我、今誓う。誇り高き大天使の力を求めんと!!」

この詠唱は以前リアが見つ付けてくれたアークエンジェルの召喚詠唱。こんなところで役立つとはな。

暫く待つととても大きく、白銀の翼をもつ天使が現れた。

553

「お前がわたしを呼んだのか？わたしはフロレンス」
そう言えばあの悪魔と名前似てるな。

「フロレンスよ、ひとつ尋ねたいことがある。フロードインという悪魔を知らないか？」
単刀直入に聞いた。

余計な話は一刻を争うような気がしたからな。
「フロードインはわたしの弟。あいつは悪魔というより墮天使なのだよ。天使も悪魔も根本は変わらないのだが・・・」
・・・やっぱり兄弟か。

確か天使も悪魔と同じような存在と聞いた。
悪魔だろうが天使だろうがいい奴はいい奴で、悪い奴は悪い奴だということも。

非常に面倒な世界だな、天使の世界って。

まあ、人間にいい奴と悪い奴がいるように、天使にもいい奴と悪い奴がいるんだろうね。

第6章第11話 悪魔との決戦準備中。つか、何でオレが戦わなきゃいけない

「悪魔を打つならいろいろ準備がいるな」
悪魔とか魔法生物を相手にする際、非常に強力な味方がオレには多い。

オレの母校が聖マテリアル学院だからな。
行くまで非常に面倒だが、この際仕方がない。

・・・あ、よくよく考えたら楽な方法があるじゃん！

オレはケータイを取り出し、電話をかける。

「あ、もしもし？はやて姉？」

「あら、駿くんからかけてくれるなんて嬉しいわ」

「んなことはどうでもいい。至急、はるかとかと刹那をこっちに寄こしてくれ。そしてはやて姉は聖マテリアル学院に行つてあの双子と一緒に山中市に来てくれ。質問は受け付けない。以上」

徐々にパーティが整つていつてるな。

対悪魔には中將も役には立たないし、今回は何も言われない。つと、オレは轟騎を呼びに行きますか。

翌日

「轟騎、ちよつといいか？」

「お、駿か。珍しいな。で、用は？」

「悪魔の討伐を手伝ってほしい。聖マテリアル学院のOBならでき

るだろ」

<まあ・・・できないこともないけど・・・分かった。手伝つよ>
轟騎勧誘成功。

さてと、後はメンバーがそろそろまで待ちますか。

数日後

メンバーが全員そろった。

「それで椿姫、奴はどこにいるんだ？」

「現在、度重なる移動を重ねている。東に向かっているようだが・・・

・このままだと日本に直撃するな」

・・・・なんで位置が分かるんだよ？

「私は転生前に奴に宝石を埋め込まれた。それにひきつけられるようにあいつの位置が分かるんだ」

・・・・また設定が面倒になった。

「お前も転生前に埋め込まれているはずだ。私よりも魔力が強力な宝石を。埋め込まれてお前は死んだのだからな」

「ほう、それで主が」

リアが少し気になることをこぼした。

「オレが・・・どうしたんだ？」

「主は本来、魔法を使うことのできない家系に生まれた。だが、主は魔法を使うことができる上、レアな魔法能力を持っている。その謎が解けた。全てはその宝石の魔力だったようだな」
なるほどね。

つて、オレはこの宝石がなかったらただの役立たずだったのか？

・・・リアにであうこともなかっただろうしな。

「これで主の謎がひとつ解けたということだな。主にはほかの人間よりもはるかに謎が多いからな」

オレに謎って多いのか？

自分じゃ気がつかないけどやっぱ天使には気づくのかな。

「主には主以外の魔力や力を感じる。主は使えないようだが」

「例えばどんな力だ？」

「なんていえばいいか・・・非常に強力な龍・・・お前はそれに守られている。魂のひとつがその龍の魂だ」

・・・また面倒な設定になってきたな・・・。

聞かなきゃよかった。

「なんていうか・・・主には沢山の魂があるんだ。それにどれも強力な魂だ」

魂が沢山あるつて・・・ええ・・・。

なんか本当に聞かなきゃよかった気がしてきた・・・。

なんかいかにもオレが人間じゃないような言い方されてんじゃん！
まあ、いいか。

「・・・奴が、日本に上陸した」

「決戦の時間が近づいてきたな」
見たこと無いけど。

オレは刀を構え、来るべく決戦に備える。

「準備はできた。何時でも来い」

オレは自信に満ちた眼でそう訴えた。

第6章第12話 今、解放される空の騎士。真の力は最強の騎士剣

空気が変わった。

正確には、流れが変わった。

奴が来たのだろう。

「悪魔・・・か」

奥から少しずつ黒い翼をもった人が見えてきた。理性は持っているようだな。

目が死んではいない。

「ほう、今度はこれほどの軍隊をそろえたか。久しいな」

やはりオレを知っているような口調だった。

「だが・・・以前と違っていくつもの魂を持っているようだな。それも伝説の龍や英雄などの」

・・・そんな魂だったんだ。

「以前よりは格段と強いだろうな・・・だが我が最強である。さあ、剣を抜け。以前のようにもう一度」

いろいろ言ってるけど、オレはこいつと一度も言葉を交わしていない。

しかも勝手に話進めてるし。

困るな・・・。

「オレは過去のことは知らない。だが、過去のことでおレが残した不始末があつたとしたら、全て拭い去ってやるさ」

前世が残した不始末がこの悪魔なら、オレは滅す。

そもそもオレしか眼中にないようだしな。

「みんな、呼んでおいて悪いがどうやらこれはオレ自身の不始末を片付けなければならぬらしい。万が一、オレがやられるようなこ

とがあつたなら、その時はオレの代わりに奴を葬ってくれ」

オレはみんなにそれだけ言い残して刀を握る力を強めた。

轟騎、はやて姉、はるか、刹那、柚季、円、椿姫。

オレが死んだら後は頼んだ。

・・・つてか、何でこんな話になつてんだ？

よく、考えたら。

オレが負ける訳ねえじゃん。

オレも悪魔の力持つてるし。

そんな心配要らなかつたな。

オレにはまだ無限の可能性がある。

「行くぞ、ハヤブサアアア!!!」

ハヤブサの力を借り、元から迅速だったオレの速さにさらに磨きがかかる。

「この感覚・・・間違いない、奴だ!!!」

悪魔はオレの覇気から前世のオレだと察したようだ。

「だが、以前と何も変わつてはいない」

なっ!?

オレは壁に叩きつけられた。

「我には攻撃は当たらない。そんな攻撃など見切れるわ」
「くっ……」

思ったより強い。

瞬間移動とは……。

これは本当に残りの人に任せるかな……。

そのとき、頭に声書き込まれた。

聞こえてはいない。

脳自体に聞こえたと錯覚させた。

<私の真の姿を開放します。あなたはその力で奴を倒してください。
あなたならできます。この剣は、あの悪魔の何百倍も強力な力を秘
めているのですから>

よくあるパターンだな。

だが、今は好意に甘えておく。

<エクスカリバー。我が姿と同化した最強の騎士剣>

これが……エクスカリバー？

マジかよ!?

すげえじゃん!

オレってアーサー王並にすげえじゃん!

それにこれはただのエクスカリバーではなく、更にハヤブサの魔力
も加わった究極の騎士剣。

こんな剣を振るえるなんて……。

夢にも思わなかった……。

ハヤブサが以前持っているのを見たけど、その時よりも圧倒的に魔
力が大きい。

「ありがとう、ハヤブサ。オレはあいつを討つぜ！」

そう、その後に何も残らないほどにな。

再び剣を構えなおし、向かい合う。

あいつの速さは段違いだ。

攻撃を当てて一撃で決めれるとしても、当てること自体が難題だ。本当にやる気が失せる。

だが、これはオレに課せられた試練だとすれば。その先に何か待っているはず。

「一刀奥義・食物連鎖」

これは十三代目が編み出した奥義。一度の斬撃が連鎖していくという、直線に並んだらほぼ確実に命中する。十三代目はよく獣を狩るときに使っていたそうだ。

食物連鎖は、悪魔の腕を掠め、そのまま遠くへ連鎖していった。

「ぐ、掠ったか……。私の体に傷を付けるとは……。お前、以前

より強くなつたな……。以前はあの魔術師を守っているだけだったのに」

「オレは過去のことは知らないが、何時でもとどまっているような奴にはなりたくないな」

「だが、所詮は人の子。我を討つことなど不可能。再び命を賭して我を封じ込めるか？」

そんな回りくどいことはしない。

あいつはここで討つ。

たとえ人間には不可能であっても。

オレはそれから否定の文字を取り除いてやるぞ。

「残念ながら駿、今のあなたでは無理ね」

・・・誰っ!?

つて、リズ!?

どこ行つてたんだよ!?

「その剣術では奴を倒すことは不可能ね。まず、型の神髄を呼び出せなければ勝つことはできないわ」

神髄?

オレは全ての型を修得したはずだ……。

さらにその上があるというのか?

「それを呼び出せたとき、あなたの剣は劔になるわ」

・・・字が違うだけじゃねえのか?

そんなこと気にしていたら神髄にも到達できないか……。

「そもそも、私たちの剣術は刀で行うもの。今、あなたが手にしているものは刀ではなく騎士劔。そのことを考えて、そして奥義の意味を理解した時にその劔を振るうことが出来る筈だわ」

難題ばっか押しつけやがって。

だけど、オレの師匠・十代目のリズが初めてオレに剣について教えてくれた。

それだけオレには可能性がある。

元から可能性がない者はこんな話すらしないだろう。

そう思うと嬉しくなった。

それにしても、戦いながら話を聞いたり意味を考えるのは結構難しいんだな。

第6章第13話 刀では表せない、騎士の誇り。具現するとき、奥義は神髄に

刀の奥義を騎士剣に対応させる。

これがこれほどまでに難度が高いものだとは思ってもみなかった。

重さは刀より重いし、この剣は両刃だし。

今まで扱ってきた代物とはまるで違う。

「神髄・・・か」

防戦一方になっている。

正直このままじゃ危ない。

剣をどう使うか。

奥義をどう対応させるか。

「私は日本人じゃないわ。そのことを考えて剣を振りなさい」

リズが助言をくれる。

リズが日本人じゃない。

んなことみりゃわかるよ。

でも剣とどういう関係なんだ・・・。

・・・わからない。

何を言いたいのか理解できない。

剣との関係。

今使っているのはリズの母国の剣。

いつも使っているのがオレの国の刀。

・・・なるほど、そう言うことか。

「日本の感覚じゃなく、外国の感覚で奥義を使えばいいんだ」

「そうよ、それが私が編み出した奥義の神髄。地球で最もポピュラ

「な感覚に作り変えた真の奥義」

ふふふ、これで分かった。
オレに負けはない。

「九代目真一 刀奥義・ネクロワールド！」

百鬼夜行の比じゃねえ……。

この邪気……桁外れだ！

風景からなんかバイハザ的な雰囲気か漂って。

オレが世界を作り出したのか……。

確かに、これは一味違う。

百鬼夜行は妖怪をイメージするが、ネクロワールドは死体……それも中世ヨーロッパの戦争で命を落とした兵士たちを思いうかべる。なお、奥義名は何故か頭に思い浮かんだ。

「気を使つて死の世界に誘う。これがネクロワールドよ」

この幻影で悪魔が少し戸惑っているな。

オレも少し優勢になつてきたかな。

やり方が分かつたなら、他の奥義でも出来る筈だ。

「七代目真二 刀奥義・ヴェールオブダークネス！」

辺りに漆黒の霧が噴き出し始める。

それはもう、フクロウでも見えないくらいに。

それにコウモリの超音波ですら響かない……というより、かき消される魔性の闇でもあった。

視界に映るものは漆黒。なんの気配もなく、手は空を切る。空気は味もせず、匂いもない。そして、何も聞こえない。

五感全てを奪われた奴に、もはや死しかなかった。

如法暗夜は視界を奪うだけなのに。
飛び散った鮮血すら見ることはできない。
なお、これは幻覚の一種である。
発動者はきちんと正常な感覚を持っているので、オレには特に影響はない。

ただ、周りにいる無害な人には影響はあるが……。
ちなみに、これを修得しているものには影響はない。

かなり気力の消費が激しい……。
通常の10倍近くは……軽く超えてるな。

……終わりにしようか。

「さんざん手こずらせやがって……。この幻術もかなり体力消耗するんだぞ……。止めにする……。十代目真一ノ奥義・アブソリュートゼロ！」

オレは悪魔を斬りつける。

そして切り口から冷気が噴き出し、凍り始めた。

絶対零度を極限まで高めた奥義。

ちなみに絶対零度、アブソリュートゼロの範囲は調整できる。

それを知ったのはこの時代に戻ってきてリズと別れる時だった。

凍りはじめる速度は絶対零度の十倍。

そしてその痛みも十倍。

氷の密度も十倍。

全て十倍。

悪魔が閉じ込められた氷柱は澄んでいる。

これではただ単に封印しただけだ。

人間ならこれで死んでいるが悪魔ならこのくらいなんてことないだろう。

だから、オレはこの状態で氷柱を砕く。
鉄よりも硬くなっている氷をオレは斬る。

「六代目真一 刀奥義・ダイヤモンドダッシュャー！」

真一文字では斬れないものを切断することができる。
つまり、何でも切断できる。以上。

氷から、悪魔は真つ二つに両断されて、滅された。

「終わったか……」

うわ、すげえ脱力感……。
もう立てねえ……。

「大丈夫ですか！ 駿様！」

倒れる寸前、はるかが支えてくれた。

そして、それに続くようにみんなが集まってきた。

「みんな、悪いな……呼んだのに何にもさせなくてさ」

「それは間違いよ、駿くん。みんなはあなたに魔力を与えていたわ。
私の魔術でね」

はやて姉……そんなことしてたんだ……。

「それがなければネクロワールドすら発動できなかったわよ。この
状態でも発動できなかったらわたしが殺してたかもね」

……何て冗談を。

てかりズの言うことは冗談じゃない。

「なんていうか・・・、まあよかったよ。錬金術しか使えない俺でも役に立てて」

轟騎が笑いながらやってきた。

「そう言えば轟騎は何やってたんだ？」

錬金術師は魔力は使えないはず。

「魔力収集装置を作った」

「それではやて姉は魔力をオレに送りこんでたわけね。なるほどなるほど。」

「そう言えば・・・暁は・・・」

「暁ならいないわよ。あの子魔法使えないし」

あ、そうか。

「そう言えばはやて姉は魔術師の家系じゃないのになんで魔法使えるんだろっ。」

オレにはしつかりとした（？）理由があるけど。

「私の魔術特性は魔砲。禁術のひとつよ。禁術は自分の魔力を根本から使うものもあれば、自分の魔力は使わないで周りから吸収して使う術もあるの。私のは周りから集めるタイプね。それ故にあまりの破壊力と無害な人への損傷から禁術といわれているわ」

「それから私の干手は、根本から魔力を酷使用するタイプだ。これは人の魂（いのち）をも魔力に変えて利用する術として禁術に指定されている」
「はやて姉と椿姫の説明があっただけどイマイチだな。」

まあ、いいか。

みんなでじゃれあっているとお奥から殺気を感じた。

「こ、この殺気は……」

ゆ、柚季だ……。

オレは恐る恐る奥に目を向ける。

うっわ……。

黒いオーラでてるよ……。

ひでえ……。

こええ……。

な、なんか眩してる……。

えっと、何々？

オレは読唇術を使った。

<先輩、なんでそんな女とくっつくんですか？>

え？

て、手に包丁持ってやがる……。

どうしよう……。

ここは素直にはなれるか……。

てか、逃げよう！

オレはあまりの恐怖に逃げだした。

第6章第14話 人を従わせるのに必要なものは、その人の魅力だ！

5月8日正午

「しゅ、駿くん大丈夫？」

オレはぐたつとしている。

全身筋肉痛でな。

痛いわ。

あのあとあんなに痛みが襲ってくるからな。

魔力も9割枯渇していたし、回復にはまだ一週間は必要らしい。

今はリアを召喚していることで限界だ。

今は天界に帰しているけど。

「大丈夫じゃない・・・結構キツイ」

「でも本当に大丈夫？このあと応援練習だよ？」

応援練習なんて季節はずれじゃん。

あんなの四月の終り頃にやるだろ？

「なんで今更」

「なんか私たちがロンドンに行っている間に第一回が行われて、今

回は二回目。県大会の応援練習らしいよ」

面倒だな、逃げようかな・・・。

まあ、どんなものか見てみる分にはいいと思ったので行ってみた。

「こ、これは・・・つばさ、逃げた方がいい」
中では拷問としか言いようがない応援練習が行われていた。
まるで戦争時の訓練みたいな。
つてところでつばさは連れていかれた。
心配だし、ついていかざるを得ないな。

「・・・あれって酷すぎだろ」

もう、声出さない奴は怒鳴りつけてる。

しかも顔との距離が1cmくらいしかない。

高校の応援練習ってこんなもんなのかな？

まあ、ここまででは許せただけど殴るってのはおかしくね？

オレこんな奴らに従いたくねえな。

オレは声を出すのを怠った。

するとすぐさま3年がやってきてオレに怒鳴りつけてきた。

「おい、やる気あんのか？」

「キモい顔近付けるな。あと口が臭い」

うっわ、胸倉掴んできたよ。

てかなんで風紀委員いないんだよ。

応援委員ってウザいな。

流石、権力を振りかざそうとするゴキムシ。

こんな奴らの中にはマシな奴はいない。

なんかオレをステージに連行していかうとしてる。

まあ、面白いからもう少し黙ってよ。

オレは微笑みながら連行されて行った。

ステージに連行されているものは約20人。

全体の約10%か。

結構いるな。

オレは動きたくもないので周りの奴らが何やってるか眺めてみた。
暫くボーッと見てた。

そこで、オレはとんでもないものを目にした。

「！？野郎てめえ、ぶつ殺す！！」

あいつら、つばさに手をあげやがった！！

オレが怒鳴ったあとに数人がかりでオレを取り押さえに来たが、オレはそれをもろともせずに・・・てかそれを華麗に避けながらつばさにつかみかかっているゴミを蹴り飛ばした。

「ふざけんなよ・・・てめえら。お前ら先輩だからと言って権力濫用してるみてえだけだよ。オレに刃向かうなんていい度胸してるじやねえか」

「てめえ、何したか分かってんのか！？」

ウゼエゴミだな。

後輩を従わせた奴らはおかしい。

「お前ら、人を従わせるのに何が必要だか分かってんのか？年齢の差なんかじゃ人を従わせることはできない。従わせるには、自分を

信頼してもらえ、そんな魅力が必要なんだ」

うむ、正論だ。

オレは、これが日本の悪い意識だとおもっ。年上を敬うと言うことは。

自分より低脳な年上なんてこの世にいくらでもいるし。

なんかあいつら滅茶苦茶怒ってるみたいだけど、怒りはオレの方が圧倒的に上だな。

オレを困んでも無駄だ。

オレは純粋な力も持ち合わせている。

このエクスカリバーで・・・か、刀がない・・・。

そうだ、家に置いてきたんだ。

単純な腕力ないから大丈夫かな・・・オレ。

そう思った時だった。

体育館内に二つの銃声が響いた。

「てめえら、学校の風紀を乱すんじゃねえよ。先輩とか後輩とか関係ねえ。生徒だろうが教師だろうが対等に扱うのがこの学校の規則だろうが」

・・・亮平・・・。

と、風紀委員の皆さん。

オレの味方してくれるんだ・・・。

「今回の言い分は片瀬の方が正しい。年齢差で従わせようとするのはおかしい。従わせたいなら力づくで従わせる」

おい、最後のはちよつと違うぞ!?

従う人は自然と従ってくれるんじゃないのか?

だが流石風紀委員長といったところか。

応援委員が畏怖の念を覚えている。
逃げ出す奴もいる。

「逃げさせはしない。オレがな」

もうひとつの銃声が響いた方向にはまさかの骸がいた。

「む、骸!？」

「悪いな。離れていて。あれからいろいろ情報を調べたらオレの勘違いに終わったようだった。すまないな」

それは別にいいけど銃刀法違反は？

それを言っちゃ亮平もだけど。

「銃刀法違反なら大丈夫だ。オレもはやてさんをお願いしてお前の社に入れてもらったからな」

ああ、なるほど。

あの社に入れば銃の所持は日本でも公認だからな。

「ついでにオレは法で裁けないような世界の住人だから関係なし」

・・・そうですか。

「それより・・・だ。こいつらの処分は被害者であるお前らが決めた方がいいだろう」

亮平がそんなことを言い出した。

いつの間にか風紀委員に縛られていた応援委員は青ざめているが、
丁度いい。

ひとつかふたつ年上の高校生十数名が200人以上の生徒を敵に回すとはね。

面白いことになってきた。

「みんな、怒りをぶつけろっ!！」

その後、応援委員の半数は学校をやめたという。

第6章第15話 何故が骸がいなくなって、気まずい空気になっているんですけど

「骸、お前にいろいろ聞きたいことがある」

「ああ、あのことが。悪いな、勘違いして。お前無理やりさせられたんだってなw」

ああ、どっかの変態社長にな。

今は故人だがw

「それをどこから聞いた？」

「俺はあれからお前に関係がある人間から徹底的にお前について調査した。そしてはやてさんからようやく聞き出せた情報がこれだった」

・・・まあ、誤解が解けてよかったよ。

「それで、あの時お前と一緒にいた奴は？」

「俺と組んでたパートナー。名は桜凜おつりんという、中国人と日本人のハイフだ。あいつも今日本に来てるぞ。そしてお前の会社の新社員でもある」

そう、あいつも入ったんだ。

てかはやて姉、オレに決定権あるつつつたのに滅茶苦茶ひとり決めてんじゃんw

まあ、いいけどさ・・・。

「それよりさ、帰ろうぜ。久々にさ」
切り替え速いな、無駄に。

「今日はゲーセンでも行くか？」

骸が久々に帰ってきたんだ。

徹底的に遊ぶか。

「いや、駿の家に行こうぜ」

「何故!？」

「つばさちゃんも行くよな？よし、決まり!」

勝手に決めんなよ。

つばさが戸惑ってるし。

断われよ。

「別に来てもいいけどさ・・・」

「じゃあ、オレの車に乗ってけよ」

免許あんのか、こいつ。

無いよな、間違いなく。

こいつまだ15歳だから。

「無くてもいいじゃんw」

いいじゃんじゃねえ!!

「オレは歩いて帰るからな」

骸は変な顔をしながら、「乗ってけよ」と言っていた。

「乗せてもらえばよかった・・・」

オレの家から学校は徒歩で20分。

また、その逆もやはり同じで20分。

そして家の前には骸がとうの昔についていたかのように暇を持て余していた。

車にはつばさもいる。

なんだかんだで連行されてきたんだ。

「お、お疲れさん」

「そっちは楽でいいですね・・・入りたきゃ入れ」
とりあえず中に通した。

なんでこんな家に来たがるのか。

何もないじゃねえか。

ただ、他の家よりは大きいから集まるのにはいいな。

「あ、俺ちよつとコンビニに行ってくる」

お前がいちばん来たがってただろ。

なんで今更。

先に買っておけよ。

「まあ、飲み物でも持つてくるよ」

何故か緊張しているつばさに対して、オレは言った。

つてか、つばさ炭酸大丈夫かな？

コーラとかファンタしかねえよ。

・・・あとはお茶か。

オレは麦茶が好きで、夏じゃなくても飲んでる。

基本的にジュースとかは飲まない。

小さい頃からジュースとかで虫歯にならないよう、親が心がけていたためにこうなってしまった。

それと、小さい頃はスナック菓子とかも食べさせなかったらしい。無駄に気使ってるな。

ま、それが愛情って奴なのかな。

「おまたせ、炭酸飲めるか？」

「え？そんな、子供じゃないんだから」

おお、良かった。

時々飲めない奴いるからな。

錬磨とか。

オレたちは部屋で骸を待っている間、ポテトチップス（コンソメ味）を食べながら、「この家でコンソメ味はオレしか食べないんだよ」と某新世界の神のセリフを吐いていた。

そもそもこの家にオレしかいねえし。

ちなみに、つばさは「え・・・と、太るから遠慮しておくよ」と言っていた。

遠慮しなくていいのに。

「なあ、大丈夫だったか？」

「え、何が？」

「応援練習」

あれは酷い。

正直酷い。

「大丈夫だよ。心配してくれてありがとう」

つばさが微笑む。

骸は一撃死するな、この笑顔で。

「つたく、あいつら。人間を年齢で格差を決めつけるのはおかしいんだよ。日本の悪い伝統だ」

「それは違うよ。確かにあの人たちはやりすぎたけど、敬うべき人は歳上に多いよ。だって私たちよりもいろんなことを経験してるんだから」

オレは間違いなくあのゴミらよりはいろんなことを経験しているな。「悪かった。オレの考え方が間違ってた」
正論だと思ってたんだけどな。

「人間の価値は年齢じゃないけどね。やっぱりその人自身の魅力が人間としての価値だと思うよ」
果たしてオレは人間としての価値はあるのか？

暫く経ったが、未だに骸が帰ってこない。
コンビニなんか徒歩5分程度で着くのに。
そんなに悩んでるのか？

「あいつおせえな」

「え・・・そうだね」

「コンビニって・・・近くにあるのにさ。あ、コンビニの中華まんは何が好き？オレは専ら肉まんだけだよ」

「私は食べないな・・・太るから」

さつきから体重のことばかり気にして。

そんなに体重いのか？

身長はだいたい150cm程度だけど・・・。
測ってみたいな。

「つばさ、こつち来てくんない？」

オレはつばさを呼んだ。

そして、そのまま・・・。

「ひゃっ!?!? な、何するの!?!?」

オレはつばさを抱きかかえた。
勿論、お姫様だつこでな。

抱えた感じは軽いけど・・・。

つばさが頬を赤らめてる。

可愛いな。

「可愛いな・・・」

「え、本当？」

あ、つい口に出してしまった。

一応、感じたことだから正直に答えておくか。

「ああ、可愛いよ」

つばさの頬が一層赤くなった。

と、ここで到着だ。

脱衣所だ。

「・・・い、一緒にお風呂入るの？」

「んなわけねえじゃん」

オレはヘルスメーターを取り出して、それにつばさを乗せた。
何が起こつたかよく分かってないような顔でオレを見ている。

「32kgか・・・軽っ!？」

ありえないでしょ。

「お前少し太つた方がいいよ、あと8kgは増やせ」

「や、やだよ・・・その前に体重見ないでよ・・・」

気にするな。

「気にするな、重くない、むしろ軽いから」

「・・・そうなんだ」

つばさはホツとしたような顔をしていた。

部屋に戻ったが、骸は未だに帰ってきていない。
その上、話題がない。

この沈黙をどう破ろうかと思っていたが、急につばさが話しかけてきた。

「ふ、二人きりだね」

「さっきからずっとな」

「・・・二人きり・・・」

マジか!?

ヤバいぞ。

女子と二人きりになっていい思い出はほとんどない。

記念すべき1話ではいきなりはやて姉に襲われたし。

さらに、肝試しの時も柚季に・・・あああああ、思い出したくない・・・。

つばさが奴らよりも内気な子だったのがせめてもの救いだ。

あいつらは何をしでかすかわからん。

「・・・私、今でも駿くんを諦めきれない」

え、いつもより積極的じゃね?

「諦めてくれ、オレには既に・・・!？」

既に彼女どころか娘がいる・・・と言おうとしたら口が柔らかいもので塞がれた。

そして、それからは甘い味がした。

「駿くん、これ私の初めてだよ」

「・・・つばさ・・・」

オレは、つばさのキスが無性に嬉しかった。

この一時だけは、千秋の事を忘れてつばさのことだけを考えていた。
つばさをオレのものにしたい。

そんな気持ちもこみあげてきた。

恐らく、オレには今まで周りに普通の女の子がいなかったからこんな気持ちになったのだろう。

はやて姉は魔砲使い、千秋はお嬢様、はるかはメイド、刹那は剣士、円と柚季は魔道師、暁は・・・なんだろう？
まあいいや。

オレと初めて仲が良くなった普通の女の子。
それが、つばさだった。

どこまでも女の子らしく、どこまでも純粋な心を持っている。
オレはつばさといえることで平凡を求めていたのかもしれない。
既に、両手を血で染め上げたにもかかわらずな。

「つばさー!」

オレはベットにつばさを押し倒した。
もう、理性など働かない。

普通の子と幸せになる道だってある。
そつだ、そつだ。

わざわざ危険な生き方をする必要もない。
普通に暮らして、普通に働いて、普通に家庭を築く。
そんな生活でもいいじゃないか。

「駿くん・・・どうしちゃったの?」

「・・・ごめんな、今までつばさの気持ちを軽く見て・・・」
オレはそう思いながら、つばさを抱きしめた。

それと、多分人生初の浮気だ。

「・・・朝か」

結局骸は帰ってこなかった。

オレの横にはつばさ。

「駿くん、今更だけど私とあんな・・・ことしちゃってよかったの？」

「大丈夫、前にもしたから。他の子と」

湊の時のことだ。

なんか・・・千秋最近連絡すらしてくれないしな。仕事が忙しくてたまには浮気もいいか。

ただ、某伊藤誠の二の舞にならないよう気を付けなければ。

「あ、大変！もうこんな時間！」

いや、まだ6時だぞ？

「早くご飯作らなきゃ！駿くんは待ってて」

ああ、なんか幸せだ・・・。

千秋とはこんなことしたこと無いからな・・・。

つばさが鼻歌を歌いながら料理を作ってる。

・・・確か冷蔵庫には魚肉ソーセージが二本程度しかなかったぞ・・・。

どうやって料理するんだ・・・。

いつも朝はパンで済ませるからな。

「できたよ」

な、なにっ!？

ぎょ、魚肉ソーセージでこんな立派な料理が作れるのか!？

そこにはハンバーグ(のようなもの)があった。

「家って貧乏だったからね、安い食材とかよく使ってたから」

そうなんだ。

そう思いつつ、オレはそのハンバーグ(らしきもの)を口に運ぶ。

・・・え、これ魚肉ソーセージですか？

「美味しい」

「そう？よかったあ」

だが、千秋の方が料理の腕は上だな。

つばさが微笑みながらオレが食べるところを見ている。

「お前は食べないのか？」

「あの魚肉ソーセージの量じゃ1人分しか作れないよ」

ああ、そうか。

「ほら、口開けて」

オレはハンバーグ（に見える魚肉ソーセージ）をつばさの口に運ぶ。

「うん、おいしい」

なんか、幸せだ・・・。

毎日会える幸せって・・・こんななんだ。

「よし、学校行こうか」

「うん」

オレは玄関の扉を開けた。

「よっ」

え、榎原骸おおおおおおお、何故貴様がここに!？

「昨日何で帰ってこなかったんだ!!」

「オレが帰ったらお二人さんお熱く体を重ねあつてたしさ。それもつばさちゃんが失神するほどにやるなんて。妻子持ちの駿は女なら誰でもいいようだな!」

あの情景を見てたのか!？

死ね!!

つばさが俯いただろうが!

それにオレは女なら誰でもいいとかありえないから。

マジ死ね骸!

「わ、忘れる、そのことは」

「あんな激しいまぐわいはそうそう見れるもんじゃないしねえ」

「こ、こいつっ……」

ぶっ殺す！

「そんな恥ずかしい話しないでよ……。それより、学校に行こうよ」

「ああ、悪いな。さあ、行こうか」

オレたちは家を出た。

その直後だった。

何故か空からミサイルが飛んできた。

「!?!」

物凄い爆風と共に近辺の家がほとんど消滅した。

「な、なんだ!?!」

瞬間召喚でリアを召喚して、バリアを張っていたためにうちと隣の

2、3件だけは助かったが、あたりは一面焼け野原だった。

オレはケータイをとりだし、今のことに関して情報を探す。

「なっ、新国がいきなり戦争を仕掛けてきた!?!」

オレは知らなかったが、数日前に新しい国ができたらしい。

元から日本やアメリカを恨んでいた人々の集団で、さらにそこには数年前からいろいろ軍事兵器が開発されていたらしい。

「面倒なことになったな。日本やアメリカを敵に回すってことは……」

・国連のトップをが動く。そうなりゃオレたちが出動しなきゃいけない」

「つつてもうちらは対人だから恐らく本部を叩くことになるだろうよ」

「は、話が見えないよお」

深刻に話すオレと骸。

何が何だか理解できていないいつばさ。

「飛行機に乗るのは危険だ。船も危ないし・・・本部に戻る方法はやはり瞬間移動か」

オレは家から五本の刀を持ち出した。

骸は銃を常に携帯しているようなので、特に差支えはなかった。

「とりあえず、日本にいるオレの仲間を全員呼ぼうか。千秋・・・来てくれるかな・・・」

少し不安になった。

千秋ほどの地位の者なら早めに狙われる。

だから極力早くオレと合流して、本部に行かないと命が危険だ。

「お前たちは亮平にとこに行け！そして、正妻戦争で生き残った奴で日本にいる奴全員を速攻で集めて今日の午後8時に学校の校門に集合、と伝えておいてくれ！」

「分かった！」

「それとつばさ、お前もその時間に校門に来いよ」

オレはつばさにそう言って走り出した。

後ろでつばさが少し驚いたような顔をしていたが、まあ、気にしないことにする。

ここからなら総本山に走って1時間で着く。

1時間程度なら瞬間移動で・・・多少のタイムラグを計算しても1分程度か。

ま、余裕だな。

「待ってる千秋！それと浮気してごめんなさい！！」

今更浮気がどんなに悪いことか実感して総本山へ向かった。

なお、何で実感したかは謎だ。
恐らくあいつを大切に思う気持ちを思い出したからだろう。

100話企画：今までなかった登場人物設定の公開！（前書き）

気がついたら100話になっていたので、急遽書きました。
書く意味も分かりませんが。

これは飛ばしても影響ありません。

本編とは関係ありません。
全くありません。

見ない方が読者のイメージを崩さないと思います。
あくまでも作者の脳内設定ですので。

内容は登場キャラの個人情報とか誕生秘話とかです。

100話企画：今までなかった登場人物設定の公開！

「はやて姉、この企画何？次の話と全く関係ないんだけど」

「ああ、これね。作者が自己満足で書き続けたこの小説が100話に到達したから書いたのよ」

どうも、作者です。

はやてが説明したとおり、この小説は自己満足で書き続けて100話になりましたので、今まで設定が全く謎だった奴ら（登場人物）の説明でもしようかと。

「100話と関係ねえじゃねえか」

まあ、そこんところは気にせず。

この小説はやたら駿を主人公に仕立て上げています。それに、思いついたことをひたすら書いています。ですから、話が進むごとに、

設定がややこしくなっています！

自分でも困っています。

後先考えずにやるからこうなるんだと、後悔しています。

人もどんどん増えて、今何人いるか分かりません。

それでもとりあえず、説明です。

「最初はオレかよ!？」

あたりまえじゃないか、主人公だし。

まずは駿から。

名前：片瀬駿

かたせしゅん

誕生日：4月7日

性別：男

身長：約175cm

体重：約50kg

髪の色：灰色（染めた）

瞳の色：黒

人種：日本人だと思われる

一人称：オレ

「オレのデータ張り出しやがって・・・しかも日本人だと思われる
つてなんだよ!？」

あくまで日本人だったけど、今じゃ人間とは思えないし。

文中に出してるところもあるかもしれないけど、これが公式設定と
言うことで・・・。

もう探すのも嫌という、作者の我儘。

「やるからにはちゃんと調べるよ」

うるせえな、こっちにも都合つてものがあるんだよ！
という言い訳。

はい次行きましょう。

「もう終わりかよ！？性格とか詳細設定とか書かなくていいのか！
？」

ここまで読んでりゃ誰だつて分かるだろ。
はい次。

ではなく、誕生秘話でも。

自由気ままに生きている少年を描きたかったんです。

最初は。

ですが何故か剣術に走ってしまい（剣道とフェンシングをやっていた設定ははじめからあった）、今じゃ彼を中心としたバトルものになっているような気がします。

てか、既になっています。

作者が思い描く理想の人間にしようと思ったら、もう人間じゃなくなっていますし。

名前の由来は、作者の名前ですな。

あくまでもこいつは自分を描くつもりだった（だが、気づいたらかけ離れていた）ので。

なお、苗字は全く関係ありません。

適当に日本の苗字を探していたら見つけた奴を適当に選んだだけです。

こんなところですね。

続いてはやてです。

名前：片瀬はやてかたせ

誕生日：7月7日

性別：女

身長：約162cm

体重：不明（聞いたら殺される）

髪の色：茶色（地毛）

瞳の色：茶色

人種：日本人

一人称：私わたし

胸：Dカップ（鍊磨の視覚情報）

「はやて姉の体重は不明……か。つか、胸は鍊磨の視覚情報がよ」

「あら、駿くんにならいつでも教えてあげるのに」

「いや、別にいいから……って、鍊磨があっちで黒コゲになつて
る!？」

鍊磨、ご愁傷様。

それでは誕生秘話。

なんとなく主人公を困らせる姉が欲しいと思ったから、彼女が生まれました。

顔は駿とは似ていないっていう設定です。

あと、美人です。かわいいんじゃないやなくて美人です。色白です。

そして、ブラコンです。

髪は比較的長いと言う設定です。ですが、髪の長さは定期的に切っているので結構バラバラです。

とにかく美人を追求して考えました。

名前の由来は、特になし。思いついたから。

苗字は駿の姉だから片瀬。

なんともまあ適当な名前設定ですが、気になさらず。

とにかく彼女は美人です。

それだけ分かってくれれば他の設定はどうでもいいです（なにつ？）。

続いて本作品のメインヒロイン！

と見せかけて何故か轟騎で。

名前：小野崎轟騎おのざき 轟騎

誕生日：4月18日

性別：男

身長：約185cm

体重：約70kg

髪の色：黒

瞳の色：黒

人種：日本人

一人称：俺おれ

「轟騎最近出番ないよな」

「全てはお前のせいだ」

「は？」

「冗談だよ。作者のせいだろ？」

勝手に人にせいにしないでもらえますか？轟騎さん。

それでは誕生h（略）

彼は作者の親友をイメージして書きました。

作中でも親友です。

バスケが非常に上手い、そして喧嘩が強い。

それを求めて彼を書きました。

当初は最初からずっと駿のそばにいますと設定にするつもりでしたが、気がつけば離れ離れになって出番も減っています。

名前の由来は、力強さをイメージさせる漢字を入れたかったのです。だから、轟轟の字を入れました。

苗字はやはり適当に見つけてきました。

以上。

次こそたぶんメインヒロインの千秋です。

名前：椎名千秋しいな ちあき

誕生日：3月3日

性別：女

身長：約165cm

体重：約45kg（駿情報）

髪の色：金髪に近い茶髪

瞳の色：金色

人種：日本人だが、母がクォーター（比率・日本3：フランス1）

一人称：私わたくし

胸：（駿曰く）Eカップらしい。

「千秋は胸大きいな」

「いえ、私なんて・・・そこまで・・・」

いや、大きいね。

作中ではやてが特別大きくはないと言っていたけど、大きいね。はやてよりもおおk「作者は死にたいよね」
もう言いません、ですから魔砲構えないでください……。

そしてやはり誕j(略)

やっぱり物語にはお嬢様が必要だろう！

と思います、書きました。

メインヒロインにするつもりはありませんでしたが。

顔立ちはやほりいいです。

程良く西洋の雰囲気も持っていて、それがどことなく高貴な生まれを感じさせるような顔です。

髪は毛の先にウェーブがかかったようなロングで、それもまた上品な雰囲気……。

まあ、お嬢様ってことが分かってくれればいいです。

名前は、苗字の後に決めました。

苗字が、財閥っぽい苗字を選びました。

多分一番熱心に考えました。

その後、語呂が合わなくならないような名前を選んで完成。

以上。

まあ、今回は一章に出てくる（比較的登場回数が多い）人物だけと
いうことにしておきましょうか。

え、ひとり足りないって？
気のせいじゃないですか？

「ふざけんな！登場回数多いでしょ、俺！」

ああ、あいつか。

名前：一条錬磨いちじょうれんま

誕生日：6月9日

性別：男

身長：約170cm

体重：約60kg

髪の色：金髪（やはり染めている）

瞳の色：青（カラコン。元は黒）

人種：日本人

一人称：俺おれ

「お前黒コゲになってたのにもう大丈夫なのか？」

「俺だって出番がなくて困ってたんだ！しかも扱いいつもひどいし
！」

「気にするな、初めからそんなキャラだったじゃねえか」

ではたn（略

彼は見た感じ完璧な人間を思わせてオタクというキャラをイメージして作成しました。

ですが、バイだとかドMだとかは全く考えていませんでした。

顔は確かにいい。だが、中身は……ってキャラ通りに……一番まともなキャラを貫き通してる奴だと思っています。

作中でネオス紛いなことをすることは予想外でしたが、そもそもバトルものにする予定は一切ありませんでしたしね。

いつの間にかこの小説のジャンルも「学園」から「ファンタジー」になっていきますし……。

こんな感じでいつも話が脱線していくんです……。

名前の由来は、やはり財閥っぽい苗字とカッコ良さげな名前を探して作りました。

錬磨って名前は全く似合わないようなキャラですが。

以上。

と、言うわけで作者の自己満足なキャラ紹介でした。

もつと定期的にやれよって話はなしで。

今回は、次の章が終わったあたりに書こうと思います。章を分ける意味がないとか言う話もなしで。

「本当に意味わかんねえよ」

どうせこれは作者の自己満足だ！

お前の文句は受け付けない！

「あらあら、駿くんそんなに怒って。落ち付きなさい」

「まあ、作者に腹を立てる理由ならいくらでもあるしな」

悪かったな！

「駿が怒るのも無理はないです」

ええ、千秋さんまで！？

勘弁してくださいよ……。

「んじゃ、これから本編を楽しんでくれ。作者が何かやらかした時は通報よろしく」

人聞き悪いこと言うな！

それでは、今後もよろしく願います。

以上、作者と登場キャラでした。

100話企画：今までなかった登場人物設定の公開！（後書き）

この情報を見なかったことにして、皆様方の脳内設定でお楽しみいただいで結構です。

「じゃあなんで書いたんだよ!？」って言うツツコミはなしで。

それと、感想お待ちしています。

勿論、苦情でも構いません。

第7章第1話 本部に向かひましよう、どんな手を使つても逃げましよう

オレは今、総本山の前に立っている。

ここまで来るのにさほど時間はかからなかったが、それでもかなり長く感じた。

「ここは被害には合っていないか・・・」

無事でよかつた・・・。

オレは玄関から進入した。

全く被害には合っていないな。

そして、千秋の部屋に着いた。

「千秋！！」

そこには千秋がかなり忙しそうにいろいろ資料を見回っていた。

「駿！ここには危険ですよ！すぐに狙われます！」

「何言つてんだ！オレはおまえを連れに来たんだ！」

「私は対抗する兵器はどれがいいか、見漁っていただけですよ」

・・・戦う気かよ・・・。

「とにかく、お前も逃げるんだ。この戦争は、オレが食い止めるっ
！」

千秋の手を握つてオレは走り出した。

次は梨瀬の元に！

「梨瀬っ！」

梨瀬の部屋には、梨瀬がすやすやと眠っていた。

こんな顔してられるのが羨ましいな。

そしてこの子は将来ファザコンになるのか・・・って、オレがそうさせるか!!

未来のオレはどんな育て方したか知らんが、オレは普通の娘に育てるんだ！（予定）

そんなことより早く逃げないと。

オレは梨瀬を抱きかかえた。

「千秋、これを食い止めるのは日本だけじゃないさ。こんな惨劇を止めるのは世界だ」

「駿は世界の中心に立っている人間だと思います。ここで一番惨劇を最小限にとどめることが可能な人は、駿たちなのですから」

確かに現状では日本は戦争を仕掛けることはできない。

仮にアメリカが戦ったらそれこそ惨劇が拡大してしまう。

となると、やはり内部破壊で食い止めるしかない。

「一度本部に戻るか。予定時刻まではまだあるが、行ってみるか」

オレは車を動かして学校に向かう。

「駿、あなた免許持っていないでしょう!？」

「大丈夫だ！よく轟騎と頭文字Dやってたからな!」

やってたというよりやらさせられていた。

オレはレースゲームは苦手なのに！

珍しく錬磨はやらなかったんだよな。

それより、後ろから戦闘機が迫ってきてる。

よくここを見つけたな。

総本山は空からは発見しにくい。

それに椎名一族に連なるものしか知らないはずだ。

まあいい。

ここも突っ切ってやるさ！！

オレの魔法で錯乱も始める。

魔力が足りないが、そこは千秋に供給してもらっている。

ここを抜ければ作戦本拠地、山中高校だ！

オレはいろいろな思いをアクセル込め、それを強く踏んだ。

予定時刻になった。

亮平、よく全員集められたな。

中には湊みたいな他の県から来た奴もいるっのに。

まあ、そんなことは後でいい。

作戦を決行する！

「行くぞ、みんな！オレが描いた魔方陣に入ってくれ！！」

グラウンド全体に描かれた魔法陣。

そこからロンドンに飛ぶ。

魔力不足で足りないとも思えるが、そこは何とかなる。

オレが沢山の天使を召喚した上に、彼らも天界から仲間を呼んできてくれた。

彼らの魔力があれば、この作戦は成功する。

そう、絶対に。

「主、もういいか？」

「ああ、何時でもいい」

リアが瞬間移動魔法を詠唱し始めた。

他の天使もそれに続いて詠唱を始める。

そしてオレも（オレ自身は瞬間移動魔法を使うことはできない）。

「いざ、本部へ！！」

魔法陣は太陽のようにまばゆく輝き、そしてその光が消えたときにはそこにいた人々はみな、光と共に消え去っていた。

第7章第2話 シンの遺産は現実にはありえないような戦闘兵器でした（前書き

もついろいろ設定が滅茶苦茶です。

第7章第2話 シンの遺産は現実にはありえないような戦闘兵器でした

到着早々だが、オレははやて姉に呼ばれた。

とりあえずみんなを部屋に案内し、ひと段落ついたところではやて姉のところに行くことにした。

はるかの情報によると社長室にいるらしい。

社長ってオレだったよな？

「駿くん、待っていたわよ」

はやて姉が、社長室で堂々と待っていた。

オレが社長じゃなかったのかよ。

「あなたにちよつと見せたいものがあるの」

「・・・それは？」

そこではやて姉はニヤリと笑った。

「今は亡きシンの最後の兵器よ」

オレははやて姉にある部屋に案内された。
扉は五重になっており、さらにその一つ一つ全てに違う鍵を5つは
つけていた。

そこまで嚴重なのか。
ここには何があるんだ。

はやて姉も来るのは初めてらしく、何度か道を間違えていた。

「この施設にこんな部屋があったとわね」

「ここは研究施設よ」

何を研究していたのかは謎だが。

暫く歩き続けているが、一向にこの部屋の果てが見えない。

天井の高さが尋常じゃなく高い。

そして部屋も尋常じゃなく広い。

「はやて姉、ここに何があるんだ？」

「それは私も分からないわ。シンの遺言で、もし戦争が起こるのな
らここを訪れよ・・・とね」

はやて姉も何が眠っているのかすら分からないのか・・・。

沈黙の中、靴の音だけが部屋に響き渡る。

もう、この音は聞き飽きた。

そのくらい、オレはここを歩き続けた。

そして見た。

今までオレが見てきた世界を覆すような代物を。

「この世は魔力が支配していたと思っていたよ・・・」

「私も、こんなものが本当にこの世界に存在していたとは思わなかったわ」

これは、戦争の道具だ。それも、架空の兵器だと思っていたものだ。シンはこんなものを完成させていたのか。何時か来る戦争という名の殺戮を予期して。

「この銃火器は単純に威力を計算しても魔砲を超える威力だわ。よく作れたわね、あいつ」

「恐らくはやて姉の魔砲をヒントに作ったんだろう。エネルギーの供給方法が魔砲と全く同じだ」
まさかあの変態がここまでのものを作るとはね。

「ここに書類があるわ」
はやて姉が書類をめぐっていく。

「これは・・・使用説明書のようなね。それと、駿くん。これを読みなさい」
オレははやて姉から手紙を受け取った。

これを手にするのがいたというのなら、我は既に死んでいるだろう。恐らくはやて、もしくは駿がここにきているだろう。他に誰がしようが構わないが、これについて知っておいてほしい。

砲撃ははやてを、剣技は駿を見てヒントを得た。本体自体は昔からできてはいたが、武器をどのようにして作るか分からなかった。ここに、近距離戦闘タイプ・八岐大蛇と遠距離戦闘タイプ・八汰鳥中距離戦闘タイプ・土蜘蛛がある。

誰が使おうが構わないが、当初の予定は八岐大蛇を駿、八汰鳥ははやて、そして土蜘蛛は我が使う予定であった。だが、それが叶わぬ今、この三機をどう使おうかは私の後継者、片瀬家の長男長女に預けようと思う。これは我からの最後のプレゼントだ。

かしこまった口調で悪かったな。こいつを上手く使ってくれ。そして世界に平和を。殺戮を、こいつらで最小限に止めてくれ。殺すことは悪いことだが、我はやらねばいけない時もあると思う。だが、その時を見誤るな。

「流石変態ね。このカッコつけた文章、見てらんないわ」
「何かしこまって……。オレのために……」

はやて姉とオレの反応は、全く違った。

この兵器はオレたちが見るべきではなかったのだろう。

「この職員の8割が日本人かアメリカ人だ。戦争に参加する理由はあるだろう。あちらはあのアメリカですら苦戦するような兵器を

所持しているようだしな。オレたちが止めるしかないだろう。惨劇を最小限にとどめるためにも!!」
オレはシンの遺産をもう一度眺めた。

「で、この人型戦闘兵器。MSか？ナイトメアか？エヴァはないだろうが」

まさかの大型ロボット！

なんであいつはこんなもん作るんだよ!?

「説明書を見る限りこれはどれにも属さないわ。というより、それらのメリット機能をたくさん兼ね備えている」
気がきくな。

魔術だけでもありえないと思っていたのにまさかこんなのに乗るとはね。

まあ、いいか。

「この力、ありがたく貰っておく、シン!!」

流石に生身で戦場には行きたくないからな。
行ったことあるけど。

「っか、どうやってあの短期間でオレの剣技を見て作ったんだよ」
「あら、私は昔からあいつにあなたの勇姿を録画して見せていたわよ」

「マジか!?!」

変な事実を知ってしまった。

第7章第3話 封印されし王女の魂、何故か変なタイミングで解き放たれる

オレは今、地下に造られた大型の戦闘シミュレーション室にいる。実際に戦場に立ったように錯覚させることも可能だ。

ここで、オレとはやて姉は人型兵器の試運転をしている。

使い方はMSやナイトメアとは違い、エヴァに近い。

自らの体とシンクロしているように動く。

シンは、オレとはやて姉が操縦より実戦の方がよっぽど強いと確信していたからだろう。

オレの機体は空を飛ぶことはできないが、地上戦では無類の強さを誇る。

本当にオレ自身をこの機体に宿したかのようだ。

この機体がオレの速度で動くんだからな。

相手にしちやたまったものではないだろう。

下手すりゃ一機でひとつの国を滅ぼすことも可能かもしれない。

某ゼロさんのように、オレたちも国を作ることを検討してみようか。

614

「やはり駿くんの機体は駿くんの機動力に耐えられるように設計されているわね」

生半可なフレームじゃオレの機動力については来れない。

神速。

これがオレの速さを象徴する言葉に相応しい。

「はやて姉、そっちはどうだ？」

「魔力の吸収量が私の5倍だわ。全長も5倍だからかしら？体重は200倍くらいあるけど」

身長と体重は比例しないって。

「訓練はこのくらいにして、敵国の情報は？」

「それなら他の人の方が詳しいわ。たまには顔を見せてあげなさい」
ああ、そうだな。

あれを発見してから三日、ずっとこいつの調整に当たっていたからな。

「そうするよ」

えっと、ここを回るのは久しぶりだな。

「お、駿か。夕食ができているが、食べるか？」

・・・刹那・・・か。

「ああ、できればそうしてもらいたい」

朝から何も食べていなかったからな。

「喜べ、私の手作りだ」

「ん？口調戻っていないか？」

「やはり自分に嘘はつけないからな。お前もこちらの方がよからう？」

「微妙に戻っていないところもあるが・・・まあいいか」

「・・・・・・・・・・こんな言葉遣い、お前の前でしかしらないんだからな・・・・・・・・」

「ん？なんか言った？」

「・・・・べ、別に何でもないぞ？」

オレは刹那に案内されて食堂に向かった。

刹那の料理は美味しかった。

和食ではあったが、昔から仕込まれていたようで、かなりの腕前であつた。

技術面と容姿では大和撫子といったところか。

性格が少し外れてはいるが。

どちらかというと洋風の千秋とはまた違った感覚だ。

でもオレ洋食派だから千秋の方がいいな。

「ごちそうさま。それといきなりだが一つ聞いていいか？」

「何？」

「敵国の戦力や治安状況を知っている人から聞いてきてほしい。オレは少し疲れてるからさ」

「わかった。聞いてくるから部屋で休んでいてくれ」

それじゃ、お言葉に甘えんとするか。

オレが仕組んだけどな。

部屋で眠っていると、誰かが入ってきた。

「刹那か？情報収集早かったな」

「ほう、刹那さんにはそんな依頼をしていたのですね。私ではなく、この声は……」

「まずい。逃げないと……」

「柚季、お前がいるとは……」

「私の本気を出せば、先輩が逃げる前にこの部屋は灰になりますよ。でも、先輩はそんなことしません」

「ああ、確かにしないよ。」

「そんな話聞いたらな。」

「ここはどう動くか。」

「助けが来るまで時間を稼ぐ。いずれ刹那が来るはずだし。」

「降伏はオレのプライドにかかわる。」

「自力で脱出すれば、他の人間にも被害が……」

「なあ、柚季。お前はオレに何をしてほしいんだ？」

「急にオレは気になって聞いてみた。」

「勿論、永遠に先輩と二人きりで過ごしたいんですよ」

「ダメだ、こいつ完全に逝ってやがる……」

「刀を取るにしてもな。」

「あそこまでかなり距離がある。」

「もし柚季が無詠唱魔法を使うことができるのなら、絶対にオレは死ぬ。」

「そしてオレの死体で弄ばれる……」

> 汝、私の力を欲すか？<

え？

心に女性の言葉が響いた。

> 我が名はリリィ。今は亡き王国の姫だった。とある事情で我が魂

が貴様の体に封印されていて我が動けなかったが、先日現れた黒き天使によって魂が解放された。だが、体がないので汝の体を借りるほかない。今はその少女から逃げたいのだろうか？< ン、まあな。

> 我に任せよ。暫しこの体を貸してもらおうか<

急にオレの意識が飛んだ。

<リリイ視点>

体が自由だ。

久々だな。

変化があるのは・・・体が男になった程度か。

よく鍛えられている。

使い方さえ間違えなければどんな戦でも無敗であろう。

「貴様、そこに跪け」

声に違和感があるな。

元々多少低めの声だったが、それでもこいつの声の方が低いな。

「せ、先輩？ど、どうしちゃったんですか？」

雰囲気の違いに驚いているのだろうか。

「め、目の色が・・・」

ほう、眼の色生前に戻るのか。

我が深紅の瞳には誰もが恐れ戦いた。

これに剣があればな。

「貴様、我が剣の錆になりたいか？」

あの小僧もこれほどの畏怖を与えなければダメだな。

我的手にかかればこのような小娘など、瞬時に恐怖の顔になるわ。

>ほう、逃げだしたか。そろそろ体をあいつに還してやらねばなく

ここで私の魂を体の奥に封じ込めた。

<駿視点>

「・・・戻った？」

意識が戻った。

あいつのせいなのか？

まあ、これから色々あるだろうな。

あいつのことはこの戦いが終わったら聞こうか。

第7章第4話 戦争の前に見つけた小さな一輪の花

窓から差す光でオレは目を覚ました。

カーテンは閉めたはずだが。

・・・誰かがカーテンを開けてる。
背が低い人だな。

あんな人いたっけ・・・。

「おはよう、お兄ちゃん」
え？

「それで、事情を一から説明してもらおうと。オレの兄妹ははやて姉と暁と刹那のほかはまだいたわけだ」

「隠していたわけじゃないんだけどね。・・・怒ってる？」

「ウチも知らなかったんや。気にしなくても・・・」

全く、何故オレにはこんなに隠された兄妹が多いのか。
しかも全員女という。

「まあ、いいじゃない？かわいいし」

かわいいとかそんな問題じゃない！

そもそもはやて姉は何人兄妹隠してるんだか。

「沖縄のおじさんの妹さんに預かってもらってたのよ。だから仲良くしてあげてね」

理由が意味わからん。

「まあ、仲良くはするけどよ……」

「絶対気に入るわよ」

確かにオレの兄弟の中では一番まともそうだけど。

「で、あの子の名前は？」

「あの子の名前は少し複雑で……私には読めないわ
読めないのかよ!？」

てか直接聞けよ。

「あの子はあなたを本当の兄だとは思っていないわ」

「そうですか、今更どうでもいいけど」

あの子は現在11歳だという。

どこかの兵士と近い年齢だが、全然レベルが違う。

段違いにこっちのほうがかわいい。

身長低いな……。

オレより40cmは小さいぞ。

「お兄ちゃんガム食べる？」

「あ、ああ。じゃあもらおうか」

純粹にオレを慕ってくれる子なんて今までいなかったからな。

幼さがそう感じさせているだけか。

「ここ数日ずっと訓練してだし、出撃前に少し遊んでやるか」

たまには息抜きも必要だ。

「つつても遊ぶ施設もないしな」

「お兄ちゃんはどこも行きたくないの？」

オレの頭の上から声が聞こえた。

何故かという今肩車している。

長距離移動になるだろうからな。

「ここロンドンだろ？オレ英語喋れないからさ」

「そっか。じゃあお兄ちゃんの部屋行こうよ」

まあ、ゲームあるしな。

「ああ、じゃあ行こうか。・・・そう言えば君の名前を聞いてなかったね。漢字が難しくてオレには読めないからさ。楓葉でなんて読むんだ？」

「楓葉いろうばだよー！」

当然のごとく読めねえ・・・。

明らか当て字だろ・・・（実際に存在します）。

現在オレの部屋でスマブラやってます。
勿論Xです。

DXとの違いがイマイチわかりません。
スマッシュボールが増えた程度だろ？

にしても、楓葉がオレの膝の上でやってんだが、それが気がかりで
しょうがない。

なんていうか・・・女の子を乗せるのは・・・。

つてか、オレはロリコンじゃないぞ・・・。

幼女趣味なんてないぞ。

何考えてるんだ・・・。

つてあああああ、なんか反応してしまっている！？
思考を反らすんだ。

どこかのギアス能力者並に一度に7つのことを考えて・・・。

「やったー、勝ったー！」

オレが変なこと考えていたら負けてしまった。

「お兄ちゃんどうしたの？」

「・・・ちよつと考え事」

楓葉に変に興奮したなんて言えないからな。

「お兄ちゃんの熱くなってるよ」

なんてこと言ってるんですかい！？

そんなことは断じてない。

「汗かいたの？じゃあ一緒にお風呂入ろう」

一緒にとか追い打ちかけるな！

「でも、オレ男だし・・・」

「入ってくれないの・・・？」

う、上目遣い・・・。

こいつ、幼女なのにすでにこれを体得してたとは・・・。

こうなったら断れないな・・・。

諦めるか。

「分かった、仕方無い」

「やったー！お兄ちゃんのお背中流してあげるね」
「ありがたいですがそこんとは……。」

日記

久々に日記を開きました。

幼女は無知で素直でかわいいです。

しかし、オレには共に過ごすだけの技量はありません。

第7章第5話 進軍開始！手伝ってくれたのはまさかのあの人！？

ここで訓練してから暫く経ったある日。

米軍と互角に渡り合っていた新国が新兵器を出した。

刹那の情報によると新国は世界中の最先端の技術を集結させた軍らしい。

日本やアメリカを恨む民族が作った国だ。

ここを狙うのも無理はない。

にしてもどうやってそんな技術を取り入れたのだから。

まあ、どちらにせよ日本やアメリカをよく思っていない国が協力してんだろうな。

「駿くん。そろそろ私たちの出番のようね」

ついにあの機体を開放する時が来たか。

これ以上被害を広げてはいけないしな。

ちなみにオレの機体は空を飛べない。

だから空母に乗せて敵陣に乗り込むことになる。

「ところで残りの一機はどうするんだ？」

「乗れる人がいないから置いていきましょう」

今回はオレとはやて姉の任務だ。

他の人は待機。

「・・・あの国を潰す」

オレ達は機体に乗込み、敵陣に向かった。

「思ったより戦況は辛そうね。米軍がかなり苦戦している。まさかここまで強い軍があったとは思わなかったわ」
確かに。

オレのイメージではアメリカが最強だと思ってたからな。
第二次世界大戦のイメージで。
やっぱり日本人だからか、敗戦が印象強く残るんだな。

つと、ここで到着だ。
さあ、行こうか。

敵の主要軍事基地と思われる場所の前にはたくさんの戦車、空には戦闘機が待ち構えていた。

「無駄だ、この無駄にスペックが高い機体だから群れても勝てない」

オレは敵の戦車を剣で切り刻んでいく。

大きさがあるだけリーチも長い。

さらにブースターの存在からスピードもオレが体を動かすより速い。結果から言うとオレが単独で戦うより圧倒的に仕事が速い。それにオレの動きとシンクロするから非常に動かしやすい。無駄なボタンとかレバーいらぬし。

はやて姉は空から戦闘機を迎撃している。

オレと違って空を飛ぶことができるからな。

「ふう、戦車は全滅だな。あとはオレが中に直接乗り込んでボスの息の根を止めれば任務完了だ」

戦闘機も全て落ちたところではやて姉が降りてきた。

「駿くん、中に乗り込みましょう」

「ああ！」

と、その時だった。

オレ達の人型戦闘兵器が大破した。

「オレのMS？KMF？まあ何でもいいけど壊れるなんて!？」

「駿くん、あれを見て」

な、なにっ!？

あっちも人型戦闘兵器が!？

「まさかそちらは二体も持っていたとはな」

セリフからあちらは一体しか持っていたないようだ。
失敗した……。
オレかはやて姉が見張っていれば……。

「その心配は無用だ」

こゝこの声は……!?

「我、この戦乱に身を投げるため、再び現世に舞い戻った!!」
シ、シン!?

しかもちゃっかり置いてきた人型戦闘兵器に乗ってる!?

「こいつは我に任せな!」

……。

……。

……。

……お、おう。

こいつがこんなこと言うなんて思ってもみなかった。
てか生きてるなんて思ってなかった。

「あいつ死んでなかったの?ちゃんと下水道に捨てたのに……」
は、はやて姉……本当に下水道に捨てたんだ……。
てか死亡を希望していましたか?
あなたは……。

「頼んだ、シンー!!」

オレとはやて姉は基地に乗り込んだ。

やはり軍人が多く徘徊してるな。

オレが侵入したことがばれてやがる。

ばれないかと心配していると、自然と刀を握る強さが増す。

そして汗がオレの頬を伝う。

はやて姉は他のルートから向かってるし……。

頼れるのは召喚獣と五本の刀、それと己のみ。

変に殺すと厄介なことになるし、ここはやはりばれないように急ぐか。

第7章第6話 幼女との出会い、そしてその父親との出会い

足を進めていくと、明らかに雰囲気ぶち壊しの部屋にでた。ぬいぐるみとかが置いてあって、なんかファンシーな感じ。

まるで小学生くらいの子の部屋だ。

基地にこんな場所があったとは……。

そもそもこれを作る理由が謎だ。

「こんなところに限って重要なものが隠されてるってことはないよな」

オレは飾られている絵の裏や、ベットの下の。

箆笥の中なども見てみたが、何も無い。

本当に何の部屋なんだろう。

子供が基地にいる訳じゃあるまいし……。

「お、お兄ちゃん誰？」

……え、まさかの子供ですか？

……って日本人？

何故？

ここは日本人とアメリカに敵対する国の基地だぞ？

捕虜なら兵士のはずだし、全員アメリカ人のはず。

人質にしても待遇が良すぎる……。

この幼女、何者だ？

「どうしてここにいるんだ？」

「お父さんがここの管理人なの！」

……え、まさかの日本人の反乱ですか？

何はともあれ子供には関係のない反乱だ。

反逆者の娘だったとしてもここは逃がす。

それより、この子を少し利用しようか。

「君のお父さんどこにいるの？オレは君のお父さんに用があったきたんだ。これを届けにね」

オレは適当にそれっぽいディスクを見せる。

勿論嘘だ。

「お父さんならこの施設の一番下にいるって言ってたよ」

ふ、余裕よ。

このくらいの情報を聞き出すのなんかね。

「じゃ、あとでまた来ると思うから。じゃあね」

「うん！」

悪いが場合によっちゃ君のお父さんの命を貰ってしまうかもしれないが、そこそこは勘弁してくれ。

数十分後

オレは最下層への階段を着々と降りて行った。

邪魔な兵士は気絶させ、隔離するという無駄な手間があったため、

こんなに時間がかかっている。
てかはやて姉どこだ？
状況を聞きださないと……。

「こちら駿、はやて姉、そっちの状況は？」

＜駿くん、特に問題はないわ。そして現在、武器などの処分を行っているわ＞

そうか……。

「こちらはここの管理者を叩く。居場所はもう突き止めた」

＜それじゃあ、頼んだわよ＞

ここで無線を切る。

さてと、行きますか。

最下層まで行くと、扉がひとつだけあった。

狭い廊下に、ひとつだけ。

にしても無駄に長い廊下だな。

奥まで行くのに1分はかかるぞ？

オレは1分かけて扉まで行くと、ドアノブがないことに気がついた。

「こ、これは暗証番号使わなきゃ入れないのか！？奥義・真一文字
！」

ドアノブがなくても問題ない。

両断してしまえばな。

「君が片瀬君か。話には聞いているよ」
中では男が待っていた。

オレが来る事を知っていたかのように。

「いえ、違います」

「あ、すみません」

いや冗談信じちゃったよ!?

「ごめんなさい、嘘です」

「知ってたよ?」

何こいつ?

妙にノリがいい。

「で、要件は?」

「ボスを抹殺しにきた」

「じゃあ、戦ってみる?」

なんだこの余裕。

しかも馬鹿にしたような口調。

早めにケリをつけるか。

「行くぜ、イザナギ!」

<了解!>

え、喋った!?

<あ、わりい。オレとつくに覚醒してたんだわ。あんたが過去に行っている間に>

・・・こ、こいつ・・・。

<悪かったって。オレの真の姿解放してやるから泣くな?>
別に泣いてねえよ。

<バルムンクだ。大事に使えよ?>

なんか一方的に話進めてるし。

オレはこいつには勝てないと悟った。

イザナギが徐々に姿を変え、ひとつの剣となった。

「バルムンクか。・・・悪くない」

流石だな、ジークフリートが使った剣のことだけはある。

元はある民族の財宝らしいしな。

それに魂を宿して作られた剣だ。

実質、当時のバルムンク以上の力を持っている。

武器に頼るのは好きじゃないが、いい剣を持つとそれだけ気分もよくなるな。

それに、これは魔剣だしな。

「伝説の剣か。それでは私は最新鋭のビームサーベルで」

原理はさっぱりわからんが、柄から光の刀身が伸びてきた。

「オレには単純な武器の強さじゃかてねえぜ？」

「問題ない、肉体改造しているから」

・・・・・・・・・・・・・・・・え？

第7章最終話 プラチナ以上の肉体を誇る管理人との激闘・・・そして終幕（前

終幕するのはこの章だけです。

そして歴代最短の章でした。

第7章最終話 プラチナ以上の肉体を誇る管理人との激闘・・・そして終幕

「私は肉体を改造していてね。弾丸はおろか、戦車に踏みつぶされた程度じゃ死なないし、痛みも感じない」

え、こいつなに？

人じゃねえじゃん。

以前紫麗とか言う奴も肉体を改造していたがいたが、そいつですらここまで改造はしてなかった。

「生憎、オレの剣は何でも斬り裂くからそんなことは関係ない」

奥義は剣を使っている時は真価を發揮できない。

更にも上に行く真・奥義は気力を異常なまでに消費するため、こんなところでは使いたくもない。

なら・・・

「久々に我流で行くか！」

オレの剣術は突き重視だ。

斬りは繰り出すまで時間がかかる。

その点突きは威力こそ少ないものの、リーチとスピードは斬りに勝る。

そして、最大のメリットとして、急所を狙いやすい。

心臓を狙うなら斬りより突きの方が圧倒的に貫きやすい。

両手剣を使っているわけでもないのだから。

勿論、両手剣を使用する場合は斬りに戦術が変わる。

「始めていいかい？」

「無論！」

二人一斉に互いの相手に襲いかかる。

オレは相手の攻撃を避け、回避態勢から攻撃態勢に変える。ビームソードを剣で受け止めても無駄そうだからな。そしてオレは強力な突きを繰り出す。恐らく並の戦車になら穴は開くだろうな。だが、奴の体は生半可なものではなかった。戦車にも耐えうる体を持つだけのことはある。

相手の肉体が強固なものならば、それに勝る剣劇を加えるまで。早い段階で腕を切り落としておくのがいいな。腕もあの硬度がなければいいが……。

その後、オレは態勢を回避態勢に戻し、次の攻撃に備える。オレ並の速さだったらオレはあの攻撃を避けきけることは不可能だったろうな。

間違いなく、オレは死んでいただろう。原理が分からないビームソードに焼ききられて。

その後も二人の決闘は続いたが、強固な肉体にオレの剣はことごとく弾かれていた。

「硬すぎる……」

<仕方無いな。他の太刀で奥義を使え！>
そうするしかないか。
オレはオロチを抜く。

「十五代目一刀奥義・世界終焉！！」
これは体内に刃を埋め込み、内部から体を破壊するという凶悪な奥義だ。肉は腐食が進み、骨は溶け、内臓は燃え尽きる。そして最終的に体が爆散して死ぬ。

だが……。

「か、刀が突き刺さらない……」

「どんだけ堅いんだよ!？」

<オレに持ち換える。そして、その奥義をオレで!!>
> 気力の消費が激しいが、この際仕方無い。

「行くぞ、バルムンク!十五代目真一ノ奥義・ワールド・エンド!」

世界終焉の強化版。刃に触れた瞬間から腐食が始まるという真奥義。鋼鉄をも凌駕する体を腐食させ、強度を弱らせ、内側から破壊する。まさに、そいつにとってはこの世の終り、ワールド・エンドだ。

「真奥義というものは私の体を貫けないのかい?」

「なっ!？」

「な、何故あの一撃を耐えた!？」

「どうして……」

「安心なさい。私はまだ君を殺す気はないさ。少しばかり、記憶を書き換えさせてもらうよ。君のような魂をいくつも持つ人間なんて自分自身を知るべきではないんだ。そうだろう?」

「ど、どうしてそれを知って……」

「それに記憶を書き換えるとか……これもギアスか!？」

「目を見てはいけない!」

「気力も尽きただろう？もう楽になりたまえ」
・・・まだだ。

オレは記憶を書き換えられては・・・。

記憶を失ってはいけないんだ！！

「!?!」

オレが強く念じた瞬間、何かが光った。

・・・な、なんだ!?!

「・・・その紋章・・・なぜ君が・・・」

・・・オレの手の甲に・・・。

なんかの紋章が・・・。

「片瀬駿!!何故龍の紋章を!?!」

え、ダイですか？

<龍の魂の具現化。それが貴様のその印>

オレの脳内に声が響く。

<貴様の体、暫し我に預けたまえ>

な、体が!?!

<人ならざる者に与えられし紋章。その力を、今、開放する>

<骸視点>

6月9日午前0時

「駿は見つかったか？」

「片瀬の奴、一体どこに・・・」

「あの時同じ施設にいたはやてさんですら所在が分かっていないんだからそう簡単に見つかるかよ」

あの野郎、あの時戦争に出かけたまま施設を破壊して行方をくらましやがって・・・。

あれは大破のレベルじゃなかったぞ・・・。

「もう大分経つな。あれから」

「これだけ探しても見つからないとは・・・」

「でも駿様のおかげで戦争は終結したんですけどね・・・」
確かにな。

「現在、ここの最高責任者ははやてさんだ。だが、彼女が療養中と
のことで、現在の準権力者は俺こと榎原骸だ。つーか、俺がはやて
さんに命じられた！駿の搜索命令はオレが出す。ここにいるメンバ
ーで駿を探しに行く。分かったか？刹那、轟騎、亮平さん、桜凜、
はるか？」

「了解！！！！」

つと、何があつたか説明してなかったな。

数週間前にあの戦争は幕を閉じた。

駿の過激な基地破壊によってな。

だが、それ以来駿が行方をくらましている。

そして、はやてさんから俺が搜索を任された。

現在の成果は、駿の五本の刀を見つけた程度。
もう少し頑張らないとな。

以上。

第7章最終話 プラチナ以上の肉体を誇る管理人との激闘・・・そして終幕（後

次の章は長くなる予定です。

番外編：山中市の発展の裏側で何が起こっていたか

ここ、山中市には歴史がある・・・どこにもあるだろうけど。

まあ、現実世界とは違い、現実世界で行けば存在しないはずの県である。

冬は寒いため、雪国に比較的近いとれる。

たった十数年前まではとんでもなくド田舎だったにも関わらず、現在の山中市は首都をも上回る勢いで発展しつづけ、現在ではこの国の五大都市のひとつにまでなっている。

学校の方は昔の名残で少々田舎らしさが目立つが、椎名財閥の本拠地まで存在している。

こうなった原因は、とある少女が仕向けたのであった。

これはそのとある少女の物語。

かれこれ12年前の話である。

とある少女が存在した。

その少女は高貴で美しく気高い、他の女の子とはまるで違う品格を持っていた。

そんな彼女はある日、海を見たいと言い出した。
とても綺麗な海を。

生憎、彼女の住んでいた土地には濁った色の海しか存在しなかった。
プライベートビーチに向かうという手もあったが、彼女はそうしな
かった。

「誰もいない海なんて、寂しいとは思いませんか？」

そう言つて、近辺で最も美しい海を持つ土地、山中市を彼女は選択
した。

彼女はそこで出会った。

青い海と空が見える場所で。

小さな少年に。

尤も、彼女も同じくらいの歳だったので小さなとは言えなかったが。

少女はただひとり佇んでいる少年に話しかけた。

悲しそうな目をしていたからであろうか。

「・・・何の用だよ？」

子供らしからぬ反応に、少女は少し驚いた。

「いえ・・・あなたはどうしてここにひとりでいるかと」

「冬だから決まってるだろ。冬に海に来たがる奴なんていねえよ」

「ではどうしてあなたはここにいますか？」

彼は少し黙りこんだ。

「・・・何もすることがないんだよ。お前こそなんでこんな
とこにいるんだよ」

「・・・私は海が見たかったのです」

「海なんて何にもいい事ねえよ。毎日見てるから分かる。ただただ
延々と水があるだけだ。家にいてもどうせ良いこと無いし。ここっ
て田舎だから周りは田圃だらけ。まあ、それよりはマシかと思つて

「ここにいるんだけどさ」

「私も、ビルばかりの街には飽きて。それで、綺麗な海が見たかったのですよ」

「ビルか……。オレはそっちの方が見てみたいな……。ここにはないからさ」

互いに違うものを求めあう。

片方が不要と思うものを、片方を必要とする。
そんな関係だ。

暫くして少女が浜辺に腰をおろした。

それをみて少年も腰をおろした。

「寒いすわね……」

「……そう……。これ、着るか？」

少年は来ていた上着を指して言う。

「良いのですか？」

「この程度の寒さなんて慣れてるから」

二人はこうして2時間程の時を過ごした。

「そろそろ帰らねばなりませんね……。また来てもよろしいですか？」

「……勝手にすれば。海はオレのもんじゃねえし」

無愛想に答えると、少女は微笑んだ。

「とても有意義な時間でした。ありがとうございます」
「・・・・・・・・・・またな」

その後も度々彼女たちは一緒に海を見た。

晴れの日も、雨の日も、雪の日も、嵐の日も。

何度も何度も。

数カ月たったある日だった。

「お父様、どうしてですか？」

「お前は100万人に1人の超天才少女だ。証拠にこれだ。341

2142×41543は？」

「14213605160です」

彼女は父に言われた問題を、1秒もかからずに答えを出した。

「私にはそれができない。だが、お前にはできる。だから、お前にはアメリカの大学で勉強してきてもらおう」

「・・・・・・・・はい」

少女は父には逆らえなかった。

「・・・そう、アメリカの大学か」

「私・・・行きたくない・・・だってあなたと別れないと・・・」
少年は少女をそつと抱き締めた。

「行ってこい。オレもそれまでにきつと強くなってるさ。君を守れるくらいに」

「・・・ありがとうございます・・・大好きですよ」

そして彼女はそつとキスをした。

「なっ、なにすんだよ!？」

「キスですわ。好きな人同士がすることですよ」

「そんなくらい知ってる・・・ねえちゃんにこの間やられたからな・・・」

「・・・」

「愛してますよ。帰ってきたら私、あなたのお嫁さんになります」

「・・・楽しみに待ってるよ」

二週間後、彼女は日本を発った。

そしてその彼女は父にひとつの願いをした。

「私が帰ってくるまでに、山中市を、大都市に変えておいてください。でも、海は決して汚してはいけませんよ」

その願いがなかった今、山中市は大都市と化している。

「・・・そんな裏話があったんだ」
つばさがなんか感動している。

「ああ。ま、駿から聞いた話なんだけだよ」
話していた人物は実は骸でした。

「それでその少年と少女はその後会えたの？」

「は？何言ってるの？この話、駿と千秋ちゃんの物語だぜ？」

「え！？ホントに!？」

「ああ、まあな」

話し終えた骸は扉を開けて去って行った。

第8章第1話 オレには戦乱の世を生きる気力がありません

ははは、あの龍め・・・。

何オレを別の時空に飛ばしてんだよ!?

なんかオレを拾った奴は劉備とか言うじゃねえか!!

しかも見つけられたときは殺されかけたし!

まあ、劉備殿の御好意で助けていただきましたが。

それより今何時の時代だよ!?

三国志読んだことねえよ!!

無双はやったことあるけどさ。

と、現在オレはだいぶ昔の、後に中華人民共和国と言う国ができる
ところで旅をしている。

もはや戻る方法は悪魔とかそんな類のものしか知らないだろうから
西遊記以上に長い旅をしている。

徒歩でとりあえずインドまで・・・やる気失せるわ。

とりあえず四大文明が栄えた地域に赴いてみようかと思う。

中国にもあったけど・・・あんまり期待してない。

そもそも魔術というものよりは幻術と言った方が正しいか。

幻術じゃ未来には戻れない。

つてことで、オレは数週間前にここに飛ばされ、現在は徒歩で向かっている……インドに……。

「あ、歩きにくい……」

山道を長時間歩くことなんて一生ないと思ってたよ……。その上、五本の刀は無くしてしまうし……。

どこかのRPGの初期装備状態だしな。防具は普通の服で武器はなしの状態だ。

さあ、どうしましょうか。

金もないしな……。

「……ん？」

「おや、お主も旅をしているのか？」

え、何この超展開？

無双って……そっちの世界ですか？

「た、旅する武将って……」

いきなり話しかけてきたのはいかにも三国時代っぽい槍(?)を担いだ美女だった。

まあ、いいか。

「武器も持たずに旅とは、こんな世の中だ。偃月刀の一本程度は……」

「……いや、刀を持ってたんだがいつの間にかなくなっていたんだよ……」

全く、困るな。

恐らく現代に忘れてきたのだろう。

ここにいる時でも武器を手にしなくてはな。

まあ、なくても何とかなるだろうけど……。

「それは何分不便であろう。私が旅路の間、護衛をしてしんぜよう」

「ああ、それはありがたい」

「……いろんな意味でな。」

話し相手がいなくて辛かったんだ……。

「お、そうだ。名前を聞いてなかった。オレは片瀬駿……まあ隣の島国からきたんだ」

「そうであったか。私は影漣えいれいと申す。あてもなく旅をしている賞金首狩りだ」

賞金首ねえ……。

そうだ、オレも武器さえあれば戦えるし、ここにいる間でもこの人の手伝いでもするか。

「なあ、少し寄り道していいか？買いたいものがあるからさ」

「た、高すぎるぞ、この槍は……私のお金じゃ……」

「問題ない。盗むからな!!」

迅速のこの身なら余裕よ!!

現代社会と違ってセンサーもついてないしな!!

まあ、ギアスがあればもつと楽だったんだろうけどな。

某ノートと違って殺人以外にも使えるし・・・。

それより千秋の洗脳の方がルルのギアスよりも強力だろうな。

なんて言っても指の一本一本まで操ることまでできるんだから。

と、まあ盗みました。

いとも簡単に。

「売り物にしてはなかなかのものだな」

「ってかオレ刀の方がいいんだよね・・・」

刀売ってなかったし・・・。

最近の中国は偃月刀が流行りらしい。

ま、問題ない。

槍術も習っていたからな。

ちゃんと奥義もあるぜ？

「っと、まずは狩りにでも行きますか!!」

「それなら村の役場にでも行ってみようか」

そうだな。

オレ達は役場に向かった。

「役場って・・・こんなに指名手配書が貼られてるのかよ・・・」

「いや、ここは特別多い」

へえ〜。

へえ〜と言うと今は亡きあの番組を思い出す・・・って、どうでもいいか。

結構好きだったんだけどな。

「一番高いのは・・・これか。ここら一带の盗賊を指揮している奴か」

余裕だろ、あんな人外な奴らと戦ってきたオレにとつちや。

「私もそれを討とうと思っていたところだ。どうだ？ 共に行かぬか？」

「もち、OK！」

OKなんて言葉が中国人に分かるか謎だったが、一応理解したらしい。

てか今更だが日本語分かるのか？

まさか22世紀の某ネコ型ロボットの道具とか使ってたらしいな？

第8章第2話 私は見た！神鳥を！盗賊王を！注・第三者の証言です

「さてと、金稼ぎに行きますか！！」

オレと影麗は砦を前に立っていた。

大量の盗賊たちがこちらを見ている。

「大量のザコと1人の首領。どっち選ぶ？」

「ザコ狩りは私の得意分野だ。お前が首領を討ってこい」

それでは、ボスに我が槍術を見せてやるうか。

馬はない。

そもそも乗れない。

だから。

走って突っ切る！！

「一代目一槍奥義・柳暗花明！！」

槍を振りつつ突撃する奥義。だが、ただ普通に振り回しているのでは威力は違う。真っ向に立つ者を切り刻みつつ大量の人間を吹き飛ばし、それによって新たな道を作る。多数と戦うために作られた奥義である。

一代目の刀の奥義は単数を対象にしているのに対し、これは複数を対象にしているため、恐らく使い分けていたのだろうと思われる。かといってオレのように奥義を乱用していたとも思えないけどな。

ま、道は楽に開けるものだ。

昔の人間の遺産とは非常に優秀だ。
大切にしないと。

「・・・」

オレは石でできた扉を開けた。
つか、敵が出てくるのに使ってたから開いてた。
もちろん、中に入る。

おっと、これはこれはいそうなお出迎えですね。

中には外にいたのとはほぼ同じ数の軍勢がそろっていた。
用意周到ですね。

それで、この数の盗賊をオレひとりで倒せと？
結論から行こうか。

無理がある。

槍では一度に数人相手が限界だし・・・。
道を切り開く程度では槍で十分だ。

・・・こうなったら。

「お前らに見せてやる。この駿様が得意とする第二の業を！」
うっわ、さっきのナルシストっぽいセリフだったな・・・。

オレは地面に円状の傷を付け、更に周りには文字を刻む。
人間離れた速度で書き続けたため、案外早くできた。

「出でよ、天から舞い降りし大いなる翼！シムルグ！！」

物凄い強風と共に神の鳥と謳われる巨大な鳥が舞い降りた。勿論、空から、

天井を破壊して。

その大きな翼が巻き起こす風は突風に匹敵する。大きさも尋常じゃなく、ゾウよりも大きい。

シムルグの強さは圧倒的であった。

単体でも非常に強力な上、オレも加わることで追撃もできる。オレの意志を受け取ったかのように上手く連携がつながる。槍の振りも風で速くなっている。

ただ、時々オレも吹き飛ばされそうになった時もあった。

暫くして、敵はほとんど殲滅した。

一部逃げた奴らもいたが、それが正しい判断だと思っ。オレも人はできるだけだけ殺したくはないし。

全て片付けたオレは更なる扉を開ける。

ここが最奥のようだ。

これ以上扉もないし、ここだけやたらと豪華だ。
なんかあっさりついたな。

だが、ボスらしき奴はいない。

・・・逃げたか。

まあ、一騎当千の戦士がいれば誰でも逃げるよな・・・シムルグありだけど。

これでも剣を使ってないだけ弱いけどな。

・・・ん？

誰がいる。

この気配。

・・・ただものじゃない。

ルグもいる！」
剣を使いたいところだが、今は仕方がない。

「いざー!!」

そう言い放った瞬間、槍を激しく打ちつけ合う音が響いた。

「瞬発力はいいな」

「オレはちよつといろいろ特別でさ」

・・・特別だからここにいるんだよ・・・。

「後ろを見なくていいのか？」

オレの声と共に、神鳥が盗賊王を襲う。

「問題ねえよ」

凄まじい力でオレを吹き飛ばし、振り向き際におおきな一振り。

一瞬シムルグは怯んだが、空中に舞い戻り体制を立て直す。

「その程度じゃシムルグはやられないぞ？」

「それはどういう意味だ？」

次の瞬間、

シムルグの首が落ちた。

「なっ!?!」

「よそ見はいけないぜ？」

連続で凄まじい突きがオレに襲いかかる。

全て受け切れず、多少は掠ったが、ほとんど傷はない。

二人は一旦距離を置き、次の攻撃に備える。

「二代目一槍奥義・荷電粒子!!」

まあ、一言で言おうか。これははやて姉の魔砲に近い奥義だ。槍先から荷電粒子を解き放つ奥義。まるでどこかの戦闘兵器の様に。二代目は剣より槍を使っていたという噂もあるしな。だからこんな凶悪な奥義が生み出されたのだろう。

「そんな攻撃、オレには効かない！」

盗賊王を名乗る男は大刀を物凄い速さで振り回し……え、どのくらいの速さかって？

ざっと秒速1000回転くらいかな？

それで荷電粒子がごとごとく弾き飛ばされて行った。

……マジかよ……。

やはり槍じゃ勝てないのか……

「せめて刀があれば……」

「ん、お前、真の得物は刀なのか？」

「まあな、圧倒的に刀の方が使い勝手がいい」

それを聞いた盗賊王は槍を下した。

「ほう、驚いた。お前がここまで槍を使いこなしているというのに真の得物が他のものだとは。よし、次会う時まで刀を用意しろ。決着はそのときだ」

「ま、待て！オレは槍でもまだやれる！！」

「槍でオレに勝てる奴なんていねえよ。本気で戦える奴がこの世界にいたんだ。そいつが真の力を発揮していないのに叩きのめしちゃ、面白くないだろ？」

く、確かに今のオレじゃ勝機は薄い。

刀を用意して本気でかかっていた方が勝つ見込みはあるだろう。

てか、オレの依頼、こいつの討伐だったよな？

「でもオレの依頼お前の討伐なんだが」

「じゃ、こいつの首でも持ってきてな」

盗賊王はその辺に転がってたたぶん弱そうな盗賊の首を切り落としてオレに渡した。

こんなものいらねえよ……。

人の首持って歩いてたら変態だろ。

「オレはここを去る。またどこかで会おう。お前、名は？」

「オレは片瀬駿。まあ、隣国からやってきた。お前は？」

日本って隣国だよな？

時代違うけど。

問題ない、無双の中には三国時代の奴らと戦国時代の奴らが共存してるしな。

「オレは名乗る名などないさ。なんていう名だか……忘れたよ、もう」

そうか……。

「それに、名なんて……偃月刀があれば必要はない」

確かに、存在を確かめあうにはそれで十分だ。

「お前の挑戦、受けた！必ず本気で再び剣を交えよう！！」

オレ達は再開を約束し、別れた。

勝利と言う偽りの結果と共に。

確かに結果としては勝利したが、ボスを討つことはできなかった。だから、真の勝利とは言えないだろう……。

第8章第3話 ヨーロッパへの長い長い道のり、そしてそこで聞いた闘技場の事

先日、報酬を手にしたオレたちは剣を探しに旅を始めた。
あいつとの決着のためだ。

強力な剣を手にしなればな。

恐らくヨーロッパの方に行けば良い剣が見つかるだろう。

「即急に元の時代に帰りたいし、急ごうか。剣を手に入れなきゃ始まらない」

「なら早くディソードを見つけることだ」

「何でディソード知ってんの!？」

お前いつの時代の人間だよ!？」

オレの時代か!？」

それにオレギガロマニアックスじゃねえし!？」

「まあ、気にするな」

「いや滅茶苦茶気にするよ?オレだってその単語知ったのこの間だし!？」

やはりこれは半ば錬磨の押し付けである。

錬磨はいきなりゲームを送りつけてきたりするので困ったものだ。

まあ、メタルギアとかモンハンとかグラセフとかを知ったのも錬磨のおかげだからその点では感謝しないとな。

.....一瞬でも錬磨に感謝したオレがバカだった.....

何もきつかけがないのにそう思った。

感謝の気持ちを思い浮かべた瞬間そう思った。

「で、これがこの世界の地図なのか？」

「簡略して書いたが、だいたいこんな感じだ」

オレは世界地図を描いて見せた。

この時代の人々は世界がどのような形をしているのか知るはずもないしな。

「この国には大刀程度しか強力な武器はないだろう？青龍刀は剣は剣でも薄くて苦手だし」

ポールウェポンでは剣術の奥義を使うことはできない。

長すぎて鉛刀一割や真一文字くらいしか無理だ。

「で、この辺りに行くと」

進路をインドではなく、ヨーロッパへ変えることにした。

西遊記より長い距離だぞ？

しかも、今どこにいるのかすら分からないしな！

シルクロードを使っていくか。

それとも別の道を選ぶか。

あー、こんなだったらシルクロードオンラインやっつくんだった
！！

いつつもいつつもモンハンばっかやってたからこんなときに裏目に
出た！！

・・・もうどうでもいいや。

とりあえず西に向かおう・・・。

数週間、西に向かっていると、やがて近くの雰囲気が変わってきた。

「大分西の方にいたんだな、オレたち」

「私たちとは違う顔立ちをした人が多いな」

「そりゃそうさ、ここはヨーロッパだからな」

来てるぜ!!

ここらで良い鍛冶屋でも探さないと。

と言うわけで近くの人に聞いてみた。

「ここらで物凄い鍛冶屋はいないか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

あ、言葉が通じてないか・・・。

「出でよ、リア!!」

困った時の天使様。

いやあ、便利だね。

本当に便利だ。

通訳してくれるからな!

「・・・・・・・・・・・・・・・・ここにいないと？」

「マジかよ!？」

い、いないのかよ・・・。

「えつと何々?そんな鍛冶屋がいたらとっくにこの村は平和になっている?」

「・・・・・・・・なるほどね」

なまくらな武器しかないから盗賊とかにもやられると。

「別にオレはなまくらでもその辺の盗賊とかは全て倒す自信はあるさ」

「確かに、ここまで来る間出会った山賊はみな武器を使わず易々と倒していたな」

ああ、そうだったな。

以前に比べてオレは数々の戦いを繰り返し広げてきたからな。

まだ16歳とは思えないほどの。

ゲームや漫画では16で世界を動かすようなことを成し遂げている奴もいるが、そんな奴らよりは小さなことだがかなり経験を積んだと思う。

おかげで以前は弱かった武器を使わない喧嘩も、素手でも大体の間は倒せるようにはなっていた。

「なら王国の闘技場に行ってみたらどうだと、行っているぞ？」

「通訳してたのかよ!？」

「何やら非常に強い剣闘士が一人いるらしくてな、そいつにかかればどんな猛者や猛獣も易々と殺られてしまっらしい」

・・・え？

何それ？

・・・オレは挑戦するべきか・・・。

「丁度、現在そいつを倒したものに一生遊んで暮らせるだけの金貨が与えられるらしい。何やらそれを見せものに王族は楽しんでいるらしいな。優秀な兵士もあっさりと・・・」

もう聞きたくねえ・・・。

止めてくれ・・・。

「主なら何とかなる。どうだ？一度出てみてはどうだ？」

「おい、一年ほど前に闘技場でオレがドラゴンに殺されかけたことあっただろ!？」

「昔の主とは違うだろう？わらわの力を借りるほどでもないわ」

・・・仕方ねえ・・・そのまま言っなら。
「剣を手に入れたらやってみるよ・・・」
オレは折れました。

第8章第4話 西洋の王国で出会った鍛冶場の旦那。どうやら腕はいいらしい

「……この王国は……」

「ほう、これは素晴らしい。かなりの大国だ」

再び数日間歩きに歩いて噂の王国に訪れていた。

「そう言えば影麗、君はついてこなくてもよかったんだぞ？」

「あてもない旅をしているといったであろう？それに私は西洋に一度訪れてみたいと思っていたいな。道が分からなくて困っていたところにお主が世界地図とやらを描いてくれたおかげでここに来ることができた。礼を言うのはこちらの方だ」

「……ははは、そうですね……」

「で、鍛冶場は……あそこか」

オレは遠くに煙が上がっているのがよく見えたので、影麗と共にそこへ向かった。

「確かこの辺だったな……あ、すいません！」

「なんだ？」

ちなみに、リアに同時通訳してもらってます。

「あなたはどれ程強力な剣を作れますか？」

「剣闘士のグラディウスから王の剣まで作ってるぞ。何たっておれはこの国一の鍛冶屋だからな!!」

多少は期待できそうだな。

「なら剣を一本、特注で切れ味抜群の片手半剣が一番いいかな。勿論、頑丈にな」

「そんな剣は王様から許可が下りないと・・・」

ちっ、面倒だな。

仕方無い。

オレの力を見せつけてやるか!

噂のバケモノ剣闘士とやらを叩き潰してやるよ!

「・・・王はあの剣闘士を倒せば認めてくれるか?」

「そりゃあ、今まで王様直属の騎士も5人中2人やられているからな。幸い、一命は取り留めたそうだが・・・」

「・・・そりゃあいい。オレが直属の騎士5人同時相手にしても倒してやるさ」

「ほう、ならば王国第三騎士のこの私を倒してもらおうか?」
なんか来たし。

「貴様はこの短剣で十分だ」

「後悔しても知らないぞ?」

「貴様こそ!」

オレのこの・・・いつかの100均包丁・・・よりは高級だと思っけど安物の盗賊から分捕った短剣で十分だ。

あ、そう言えば高級でふと思い出したけど、書道用の半紙の「高級」って書いてあって安物の奴って絶対高級じゃないよな?

正直、PB商品のリサイクル半紙とか言うのとそんな大差ねえし。他にも小学校の彫刻刀とかにも高級ってついてるし・・・終いには超高級とか出てくるし。

結局5000円しないし。

オレの彫刻刀は近所の大工やってるおっさんからもらったから高級だと思っよ？

職人の道具ってのは高級だからな！！

まあそんなことは置いといて。

オレ達は鍛冶屋の目の前で迷惑がてら決闘を始めた。

オレと騎士様が剣をぶつける度、ギャラリーが集まる。

「おお、騎士様と東の者が戦っているぞー！！」

「東の者は短剣じゃないか！あんなものでよくここまで・・・」
こんな声が聞こえてくる。

「どうした、王国騎士とはこの程度か？」

所詮普通の人間の中で剣が多少上手く扱える人間だろう。
オレなんていろいろ人外だからな。

悪魔と契約してたり、いくつもの魂の集合体だったり。

「くっ、何故このようなものがこの国に！？」

今だな！

「焦りは死をもたらずぞ？」

オレは一瞬できた剣の振りの隙を狙って頬に大きな傷を刻印した。騎士様は物凄い悲鳴を上げ、顔を押しさえてよろめいた。

「わ、私の・・・私の美しき顔に・・・傷がああああ！！」

このナルシストが！

「武器がナイフでよかったな。剣だったらリアルに死んでたぞ？」

相変わらず顔を押しこんでいる騎士様を上から見下ろしてそう言い放った。

良い気味ですね。

普段から自信過剰な人を貶すのは。

そしてギャラリィ。

「あ、あいつ何者だ！？」

「騎士様をあんな短剣で・・・」

「もしかしたらあの剣闘士も倒せるんじゃないか！？」

「ひとつ言う。斬れない刃物ほど危ない物はないからな！」

オレは昔（約10年前）大工をやっている近所おっさんからそんな事を聞いたことがあったので一応言っと言った。

明らかに危ないのは自分の方だが・・・。

ちなみにその大工のおっさん、現在は引退したがマイスターの称号を持っているという。

息子も息子でビジネスを成功させたらしく、かなりの金持らしい。

さてと、

「鍛冶屋の旦那！オレの実力は見たか？オレはこれから王族の騎士を全員ぶっ倒してくるから剣を作って待ってるよ！！あと、影麗！お前はついてこなくていいからな！」

オレは騎士様が忘れて行った高級そうな剣と鞘を拾って腰に差すと、上の方に見えるいかにも城らしき建物に向かった。

にしてもあの騎士。

あんなに弱いのにこんな装飾された剣使いやがって……。
柄にサファイアが埋め込まれているぞ？

あんな奴は安物の剣で十分だ。

ま、装飾されているからなんだって言うけどな。

オレの妖刀なんて装飾はそれほどないけど材質不明の新素材だし。

もしかしてオリハルコン？

んなわけないか……。

にしてもあの刀どこ行ったかな……。

第8章第5話 彼でこの強さなら、アーサー王はどれほど強いのかと思った。

オレは城への入口につながる大きな橋の前に立っていた。
天高くそびえる城の頂上を見つめながら。

「中に・・・入ろうか」

「き、貴様何者だ!？」

「あ、あの剣!第三騎士様の!！」

もう情報が伝わっているのか。

どの時代でも情報の伝達速度は速いものだ。

「思いつきり悪人やってるが、これも強力な剣を手に入れるためだ
!悪く思っな!」

オレは俊敏な動きで素早く二人の兵士の後ろに回り強烈な蹴りを見
舞う。

そして、よろけた兵士の首を掴み、橋の下の水路に投げ入れる。

「さ、邪魔者も消えたし、騎士様狩りに行きますか」

オレは巨大な扉を切り裂いて中に侵入した。

マジ悪役っばいな・・・。

「おっと、沢山の兵士でお出迎えですか・・・。オレにはちょっと

用事があるつてのにな」

そりゃあもうウジャウジャ兵士がいましたよ。

つか、兵士しかいませんよ。

ま、無駄に兵士を動員したのが間違いだつたな。

オレは某ナイトオブゼロさん並の脚力で何人もの兵士の肩を伝つて兵士の海を乗り越えた。

「無闇に剣を振るうと仲間には傷を付けるぞ？」

言つたときには既に遅し。

大量の鮮血が床を染めていた。

そしてその上には沢山の兵士が積み上げられていた。

どの時代でも兵士タイプの人間は弱者だな。

人の指示に従つて動くからこうなる。

もう少し真面目に考えればこうなることくらい普通に思いつくだろう？

これを指示する上の者もどうかしてるけどな。

知つての通り、人間には何種類かタイプがある。

司令官タイプ、参謀タイプ、兵士タイプ。

オレはこの三つしか知らないが、兵士タイプの人間は自分の決断より人の指示で動く方が上手く動ける。ただ、司令官がダメだと兵士も必然的にダメになるな。

ま、司令官タイプの人間につく参謀タイプの人間次第でいくらでも変われるからな。

他に一匹狼つてのものもあるけど、そんな人間はたぶんこの時代ひとりで勝手に旅して勝手に暮らして勝手に死んでいくんだろうな。

ま、それでオレは手を汚さずに大半を退け、ついでに残りの奴らは

門番の兵士のように水路に投げた。

たぶん謁見の間続く廊下を歩いていると、ひとりの男が立っていた。

「騎士……か」

かなり立派な服装をしてかなり豪華な装飾が施された剣を腰に下げていた。

「ここから先は、第二騎士の私を通さない。大人しく帰るなら命を奪わないでおいてやるう」

「生憎、お前に奪われるような命は持ち合わせていないんでね」
第二騎士様は剣をゆっくりと鞘から抜いた。

ま、最初からこいつはぶっ倒すつもりでいたから、ここでケリをつけてもいいか。

VS 騎士戦、第二ラウンド開始！

「オレのターン！ドロー！」

つーか、剣を構えただけだけど・・・。

行くぜ！

最初の一太刀目で騎士様の剣にぶつける。

少しくらい長引かせないと文字数が足りなくて作者が困るからな！

第三騎士よりはマシな剣の使い手のようだな。

オレの動きを読んでいやがる。

まあ、オレはさらにその上を読んでいるが。

これもそれもいろんな魂の力や、悪魔との契約あつてのことだから、恐らく普通の人間だったら勝てないだろうな。

でも、こいつで第二騎士って言うんだからさらに上がいるんだよな・・・。

騎士様が剣を離して距離を置く。

「貴様、なかなかの太刀筋だ。我々と共についてくれば王国騎士になれたものの・・・」

「生憎そんな趣味はないんでね。オレは人に従うのが大嫌いなんだ。自ら剣を捧げたもの以外はな！」

オレはきっぱりと言ってやった。

王に従うなんてオレの性に合わない。

オレは今までも従わせる側についていたからな・・・はやて姉以外には・・・。

今のような力が無い頃に轟騎は言ってくれた。

「自分弱いなら強くなりゃいいじゃん。お前剣術やってんだろ？」
って。

それ以来、オレは喧嘩は弱くとも、轟騎が助けてくれたし、轟騎が不良に絡まれたりしてもオレは鉄パイプとかで不良を半殺しにしていた。

・・・今思うととんでもない事してたんだな・・・。
え、何で同級生との喧嘩で武器使わなかったのかって？
一応相手ガキだし・・・。

それで、オレは学校一喧嘩が強かった轟騎と共にいたことから周りを従わせる人間として育っていったから。

オレは棒状のものを持ったら豹変してたからな、強さが。
だから轟騎とともに恐れられていた。

あ、ちなみに錬磨はオレのオマケだった。

「オレは人には従いたくはない。悪いがオレはお前たちとは違うんだ」

「ならば良い。ここで散れ」

騎士様は特異な構え方をし始めた。

腰に剣をくつつけたような謎の構え。

剣の先はオレを捕らえている。

今まで見てきた剣士には誰一人このような構え方はいなかった・・・。

「死ね」

なっ!?

・・・かわせない!?

「うぐっ」

なんとか致命傷は逃れられたが肩を斬られた。

オレに傷を付けることができる人間がいるなんて・・・。

・・・こいつには本気がかかって行かないと殺される。

あの第三騎士は多少剣が他の奴らより使える程度だったが、こいつはマジだ。

リアルに強い・・・。

普通の人間でここまで強化されたオレに剣撃を与えるなど・・・。

・・・最近オレ自信過剰過ぎないか？

・・・自分は強いと思いこみ過ぎていたから受けていたのか？
こんな攻撃、楽に回避できる。
そう思っていたから当たったのかも知れない。

・・・気持ちを変えよう。

どんな相手にも全力で。

非礼の無いように、正々堂々と。
気を抜いたら最後、命はない。

「お前にはオレの奥義を見せてやる。本気の奥義だ・・・」

こいつには、いろいろ礼もしたいしな。

この奥義を見せるにはこいつは持ってこいだ。
良い相手と剣を交えた。

オレは距離をあけ、深呼吸をする。

・・・いくぞ！

「十六代目一刀奥義・攻城略地！！」

十六代目がを敵の陣地に攻めいったときに編み出した奥義。あらゆる敵との戦闘を予想され、それ全てに対応した位置を斬る絶対無二の斬撃。どのような城でも崩すことができるように攻略された奥義である。

・・・決まった。

オレの剣は第二騎士の鎧を切り裂いていた。

ただ、これ一撃じゃ命までは奪えない。

相手と言う皆を攻略するきっかけを作るだけの奥義だからな。

このあとすかさず次の一撃を加えなければ。

だが、オレは・・・。

「・・・どうした、早く止めを刺せ。私はお前に負けた」

「無用な殺生はしない主義何でね。それに抵抗をしない相手を斬つたら、それこそ騎士の誇り（プライド）に傷が付くはずだ。それを
お前が知らないはずはない」

「ふふふ、確かにな。私は本来なら死んでいた。死には至らないが、
ここまで大きな傷をおっつてしまえばこの先戦つても私に勝機はない。
私は貴様に殺されたも同然だ。だから、行くがいい。お前の望むも
のがこの先にあるのならばな」

・・・ありがとう、第二騎士。

お前は本当の騎士だぞ・・・。

・・・第三騎士と違って。

第8章第6話 第一騎士がまさかの・・・その・・・予想外・・・

「ありがたく行かせてもらう。薬、置いていくから応急処置はしておけよ」

「お前は変わった奴だな。これを持って行け」

オレは第二騎士から剣を手渡された。

「騎士の位が高くなることに剣の性能も上昇する。今使っている剣よりはマシだろう。第一騎士は手ごわい。私よりもな」
忠告ありがとうな。

オレは玉座を目指して足を進めて行った。

「ここが謁見の間・・・か」

正面には玉座。

それと、ひとりの騎士。

「お前が第一騎士か？」

「・・・」

シカトかよ。

見た感じ王もいないようだし。

「・・・君主」

君主？

ま、まさかつ！？

後ろかつ！？

・・・つて、いねえ・・・。

「君主つていないじゃないか・・・」

「お会いできて光栄です。私、500年前からあなたに出会うことを待ち望んでいました」

え、君主つてオレ？

しかも500年前つて・・・。

まあ、オレも数千年前に来てるからそんなに違和感ないけど・・・。

「私はあなたの騎士です。そして、あなたは持っているはずです。

5人で構成される剣の騎士団を」

・・・ハヤブサたちのことか？

てか何で知ってんだよ。

「私の体はあなたの中にある魂のひとつが本来の持ち主です。500年前に私はこの体を預けられました。やがては朽ち果てて行く私の肉体の代わりにこの体を与えてくださった。あなたを守るといふ使命と共に」

なんか第一騎士のイメージが崩れまくってる・・・。

「この身が滅びようと、我が魂をあなたに捧げます」

・・・これって仲間を手にしたと解釈していいのか？

＜なあ、リリイ。まさかあの体、お前のか？＞

オレは数多くある魂のひとつ、リリイに尋ねた。

＜あれは私のものではない。確かに私も彼女も女ではあるが、私はもつと雅だ＞

ははは、そうですか。

「それでは、お前の名は？」

「私の名はルインです。破滅という意を持つ忌々しい名です・・・」
「・・・オレは好きだぞ？その名。意味は悪くとも、好き好む人だ
っているんだ。だから自分の名を恨むな」
オレは自分の名前は気にいっていないが。
まあ、変な名前じゃないだけマシか。
一般的な名前だし。

「それじゃ、ルイン。オレに力を貸してくれ。この王に会わせて
ほしいんだ」

「イエス、ユアマジエステイ」
いやオレを本格的に君主としてるよ・・・。
ギアスの世界でも使われてたしね。
「こちらです」

オレはルインに連れられて行った。

ここか・・・。

扉を開けると、そこには王らしき人物が怯えた様子でこちらを見て
いた。

「貴様、寝返つたな！！」
どうやらルインに言っているようだ。

「私は言ったはず。我が君主と出会うまではあなたを守ることを約

束する。ただし、君主が訪れた時点でその契約は破棄されると。そして……」

ルインはそう言って剣を抜いた。

そ、その剣は……。

剣の先が王の眼にはまっすぐに映った。

「彼が現れた時点で、あなたの命をこの牙に捧げると。第六の妖刀、タイガ。彼の牙に貫かれ、散りなさい」

よ、妖刀!?

妖刀って5本だけじゃなかったのか!?

つと、その前に。

「さて、その前にこの書類にサインしてもらおうか」

オレは一枚の書類を差し出した。

「騎士剣の作成の許可状か……これにサインしたら命は……」

「了解、オレは奪わない」

王は頷き、書類にサインした。

残念だったな。

オレは端から殺す気はなかったのによ。

別にこれにサインしてくれれば問題はなかったし。

ただ……。

「まだ、私の第二の契約を果たしてはいませんか？」

<覚醒するか?>

「不要」

タイガと呼ばれたその刀は獲物を狙う鋭い眼光を思わせるような輝きを放ちつつ、その先の王の喉を捕らえた。

そして、鮮血が飛び交った。

黄色に煌めくその刀身からポタリ、ポタリと血液が零れ落ちる。

聞こえる音は雫がその下の紅い水たまりに落ちる音だけだ。

「・・・次の王、どうするよ？」

「大丈夫です、王子がいますから」

あ、そう。

まあ、これで剣を作れそうだ。

第二騎士から預かった剣は確かに業物だ。

だが、あの鍛冶屋ならいいものを作れるはずだ。

第8章第7話 彼女の持つ、第六の妖刀の出所を突き止める

オレ達は無駄に豪華な装飾が施されている城の廊下を歩いていた。そろそろ第二騎士の場所だ。

少し歩くと、第二騎士が座っていた。

「目的のものは手に入れたのか？」

「ああ。それと、ありがとう。この剣はあんたのものだ」

オレは剣を返却した。

使っていないけど。

「貴様は凄い奴だ。真に剣を捧げるべき相手は貴様だったかも知れん」

いやいや、そこまで凄くはないさ。

「私を倒せる剣士など、この世に彼女しか存在しないと信じていたからな」

確かに、今まで戦ってきた相手でもなかなかの強敵だった。

人間以外も含めたランクで見れば中の上くらいだが、人間という意味では恐らく最強の部類だっただろう。

他の奴らもはや人間じゃねーし。

「第二騎士よ、あなたの君主はこの世にはもういません」

そりゃ、喉を一閃されたからな。

あれほど綺麗に血が空を舞うなんて思ってもみなかった。

「貴様が殺したのか？」

第二騎士がオレをキツと睨みつける。

「オレは手を下してはいない」

オレ、必死に抵抗。

「私が喉を貫きました。彼との契約は、第一に真の君主が現れるその時まで私が彼の騎士となること。第二にそれまでは私が手を下さ

ないということ」

結局、王はそれに同意していたんだ。

いずれはこうなると、彼自身も分かっていたはず。

ただ、その時が想像以上に早かったから動揺していただけだろう。

「あなたに問います。私と共に新たな君主に剣を捧げますか？ 答えによって殺すなどはしません。正直な気持ちが知りたいだけなので」

ルインは真剣な顔で、第二騎士は深く考えるような顔で、黙ったままだった。

実に見事な沈黙である。

「彼は守る必要はない。私がこう判断したんだ。守らなくとも彼は自分自身で逆境を乗り越えるはずだ。彼にはそれだけの力がある」

「そうですね。しかし彼はまだ、力の真の使い方を知らないようです。それを教えることが私の役目です」

・・・真の力？

確かに魂の大半が解放されていないらしいが。

城を出て、鍛冶場にやってきた。

そこでは影麗がお茶を飲みながら待っていた。

「流石だな。城に乗り込んで帰ってくるころは」

「当たり前だ。この程度じゃ死なないさ」

「今までもつと酷い窮地を脱してきたからな。」

「それで、親方！剣は出来上がっているか？」

「あと二日待つてくれ！お前の剣の腕は間近で見たからよく分かるよ！騎士様の中でもトップクラスだ！」

第二騎士に勝ったからな。

第二騎士は強敵だったが。

「親方、次にあの剣闘士が戦う日は？」

「三日後だ。それまでに挑戦者が現れなかった場合、猛獣を三頭、闘技場で戦わせるそうだ。猛獣二頭までは難なく倒したほどだしな。並の人間じゃ勝てやしないさ。第四、第五騎士も敗北するほどだからな」

「だいたい分かった。」

「所詮人間さ。」

「オレが本気を出せば。」

「ルイン、その日一日その刀をオレに貸してくれないか？」

「君主が言うのなら、私は従うまでです。それに、タイガはもともとあなたの持ち物ですから」

「またオレの魂のひとつが与えたのか・・・。」

「オレの謎は深まるばかりだ。つたく、二年前が恋しいぜ。」

その夜、オレはルインに刀を授けた人物について尋ねてみた。

「この刀は代々東の島国に伝えられていた伝説の刀のひとつです。ある人物が、それに伝説の剣を封じ込めにあらゆる時代を駆け巡っていました。タイガはその時作成された刀のひとつで、大地を司る力を保持しています。500年前にその人物が私にタイガを預け、去りました。「この刀はもともと片瀬駿という人物の持ち物だ。もし、彼と出会うようなことがあれば、命を賭して彼を守りなさい。恐らく我は彼の中にいるから」と、言っていました。言われたとおり、私は待ちました。そして、あなたが現れた。あのお方の気配がしたので、瞬時に分かりました・・・あなただと。それからその人物は、このほかに5本の刀を持っていました。私にないということ。は恐らく君主が持っているはずですよ」

・・・オレとあの刀が巡り合ったのは必然だったというわけか。てか、一方的に話されて話に割り込めない・・・。

「あー、だいたい分かった。もういい。寝る」
もう聞きあきた。

長い、校長の話並に。

・・・そう言えばあの校長どこ行ったかな・・・。

数日が経過した。

「あんちゃん！今日は剣闘士に挑戦する日だぞ」
親方が朝から起こしに来てくれた。

鍛冶場に泊まってるからな……。

勿論、金は払ってるぞ？

城から奪った奴だけどな……。

「剣は……まだだっけ？」

「すまんねえ。第一騎士様から借りてくれよ」

そうするか。

刀だしな。

そっちの方が使い勝手がいいかもしれぬ。

「御武運を」

そう言つてタイガをオレに貸してくれた。

<確かに元の主の魂が感じられる>

「そりゃな。オレは実質、色々な魂の集合体だからな」
悲しいがな。

<主の手に渡つた今、我は再び力を貸そう。全てを薙ぎ払う主の大
牙とならんことを>

心強い言葉だ。

お前の力、見せてもらうぜ。

オレはタイガを腰に差すと、剣闘士が待つ闘技場へと向かった。

空は快晴。

太陽が煌煌と輝いている。

とても気持ちがいい天気だ。

本当に気分がいい。

.....こんなところになければな。

血なまぐさい円状の空間にオレともうひとり、西洋人が閉じ込められている。

両手にグラディウスを持ち、鉄製の兜をかぶってオレの目の前に立っている西洋人。

彼こそ、この闘技場の王者だ。

ここで数々の死闘を繰り広げ、未だかつて無敗。

猛獣を複数相手にしても屈せず、全てに終わりを与えてきた男だ。

王族直属の騎士二名をも蹴散らした男。

そんな彼にオレは喧嘩を売っているのである。

「ここから出るにはオレを倒してからだ。もっとも、ここのルールはオレよりお前の方が詳しいだろうがな」

挨拶と呼べるものは分からないが、コミュニケーションをとった。剣闘士はそれを無視する。

想定内だ。

オレはタイガを構えると、始まりの合図を待った。

始まってから約10分。

攻撃しては避け、また攻撃しては避ける。

この動作を二人は延々と繰り返していた。

剣闘士の怒涛の攻撃が、オレに奥義の構えをさせてくれない。

こいつもまた、人として並はずれた能力を保持している。

恐らく第二騎士以上だ……。

確かに強い。

もう、最初の強敵はなんだったんだって思うほど強い。

タイガは折れる危険性はないが、それでもオレの腕が折れるんじゃないか、と思うほど強烈な攻撃を受け切っている。

確かに猛獣なんて楽に倒せるだろうな、これだけの力があれば。

更にこのスピードも異常だ。

パワーもスピードも常人をはるかに上回る強さ。

だが、オレはその先に行く！

強引に奥義の構えをする。

この奥義は、とっておきだぜ？

「奥義・絶対零度！！」

闘技場全体が凍結する。

闘技場に人が歩くスペースがないほど大きな氷がひとつ、生まれた。それをみた貴族たちは驚愕して言葉も出ない。

一部の人間はオレを悪魔だとか言っているが、あながち間違いじゃないからな。

悪魔をも殺す、そして悪魔と契約した人間だからな。

人をひとり殺すにはこの程度の氷で十分だろう。

・・・だが、奴はその先を読んでいた。

オレが闘技場全てを包み込む氷の上に立っていると、奴は現れた。

空から。

「ひょ？」

思わず狂戦士の魂の被害者みたいな声をあげてしまった・・・。

「お前は今までで一番強いな。だが、俺は死にたくない、死にたくないからお前を倒すしかないんだ！うおおおおおおおおおおおおおおお！」

魂を貫くような言葉を放ち（ついでに咆哮も）、オレに剣を向けてきた。

死にたくない・・・か。

こんなに手を血で染めてもそんなに生にしがみつく。人間とは、醜い生き物だな。

オレも含めて。

こんな状況でもオレは死にたくはない。

そして、生き残る方法はあいつを殺すこと。

合法的にここから抜け出すにはな。

既にオレは悪魔の扱いを受けている。

それにあいつは今更何をしたってここからは出してもらえないだろう。

合法的に抜けだすなんてことはしないさ。

もう、何度も世界の理から外れているからな。

「なら、やることはひとつ！タイガ、力を解放しろ！」

<任せておけ！>

タイガが黒い霧に包まれ、新たな姿を現す。

仮にもこれは魔剣だ。

当然の登場方法だろうな！

魔剣テイルヴィング！

「やることはひとつ、この闘技場を破壊する！」

「何！？」

「一代目真一刀奥義・エターナルヘル！！」

周囲一帯を全て焼き払う。

まるで、地獄のように。

そうだ、灰になれ、悲しみしか生まない闘技場よ。

「剣闘士！逃げるぞ！」

「！？お、お前・・・」

オレは剣闘士の手を引いて逃げた。
貴族全員を殺す覚悟はあるが・・・逃げた方が手っ取り早い。

「オレについてきな！」

最初からこうしてりゃよかつたんだな。

権力を振りかざす癖に力がないことを知らないバカに従うよりだつたら罪人を逃がした方がマシだ！

「お、お前は・・・何故？」

「オレは束縛されるのが嫌なんだ。だから、お前も一緒に自由になろうぜ！」

オレたちは地獄の業火の中を駆け抜けた。

いずれ、この闘技場があつた場所は朽ちる。
灰になるからな・・・地面ごと。

第8章第9話 剣闘士を開放したり、聖剣を手に入れたりしないと満足できねえ

「・・・なんとか逃げきれたな。」

「剣闘士、お前は自由だ。これからは何をしてもいいんだ。いくら罪人だろうと、この先の行いで世界は変わるさ。他の街で平穩に暮らすといい」

うん、我ながらいいこと言った。この時代だと国際手配なんてないだろうしな。

「・・・オレを・・・解放してくれるの・・・か？」

「ま、そう言うことだ」

オレはひとりの人生を変えました。

こんな奴ひとりじゃ歴史なんて変わりないだろうしな。

あつても伝記に一人追加されるくらいだろう。

「あんなところにいたら満足できねえぜ？」

「・・・確かに」

「この世界で満足するしかないから、ここで満足しとけ。まあ、オレは未来にさっさと戻って普通の暮らしを取り戻して満足するしかねえけどな！」

満足同盟のリーダーまがいのことを言いつつ。

「・・・俺は、実は無実の罪で捕らえられたんだ」

「分かっているさ、お前の剣が教えてくれた」

漫画とかだけだと思っていたが、本当に剣で全てが伝わる。

それに気づかせてくれたのは、オレの師匠だった。

「俺はお前の騎士になる。俺はただの一般兵で、騎士道とか・・・そんなことは一切分らない。だが、俺はお前を君主にしたい。救ってもらった命は、救ってもらった者に捧げる。それに、お前は俺を信用してくれた。だから、俺はお前が主に値する人間だと認めた」
十分騎士じゃねえか。

こいつなら十分現代でも使える。

剣の型がしっかりしていない今でも刹那並に強かったからな。

刹那もまだ足りないところがあるし。

でも最近刹那と手を合わせてないし・・・どっちが強いか分からないか。

二人とも、改良の余地はある。

「なら、お前を騎士として迎え入れよう！名は？」

「テクノエウスだ」

「じゃ、長いからテクノで」

六文字は長い。

漢字に直せるなら良いけどさ。

まあいい。

鍛冶場に戻ろうか。

そしてすぐにここを発つ。

ここにはもう剣を受け取るだけしか用はないからな。

「親方！剣は？」

「おう、できてるぜー！」

・・・これは!?

「俺の人生最大の剣になるだろうよ。聖剣に近い性能を持つ。て言うか聖剣だ!」

名は、テリオスと称す。

本人曰く、意味は分からないそうだ。

じゃ、何でつけたんだよってのは、占いの結果だそうだ。

「こんな剣、よく数日で作れたな」

「実はこの剣は数年間ずっと鍛え続けてきたんだよ。そして、これを持つべき者が、この剣の完成する時に現れた。それだけの話だ」
すげえ・・・こんな偶然って・・・。

「うーか、奇跡じゃねえか。」

「この剣に、運命を感じる。お前と言う剣士と、俺と言う鍛冶屋。

この二人が出会った時に、この剣は完全な姿を現した。数年間休まず鍛えてきたが、お前が訪れてからのこの剣はまるで今まで鍛えてきた時間が無駄になるような勢いで完成に近づいて行った」

「確かに・・・。剣は使い手を選ぶ。オレはそう思う」

妖刀たちはオレを選んだのかはわからない。

でも、今は力になってくれている。

力の無いオレに力をくれたのはあの刀たちかもしれないな。

「ありがとう、親方。代金はこれで」

オレは一枚の紙を渡した。

「これは・・・」

「この国の統治許可証。第二騎士から譲り受けた。本物だ。金なら城から勝手に徴収してくれ」

「そうか、ありがたく貰っておこうか」

「第二騎士はそれを持つ者を君主と崇めるそうだ。持っておいて損

はない」

親方、お前はこれからこの国治めるのを頑張ってくれよ。

てか、王子ってどうなったんだろう・・・。

「なあ、王子がいるって言ったよな？あいつはどつなるんだろうな
オレがルインに尋ねると、ルインはニコツと笑って、

「それなら問題ありません。王子なら第二騎士に斬られましたから
と言った。

・・・酷だ・・・。

まさかあの愛国騎士がこんなことをするとは・・・。
つか笑って言うなよ・・・。

「それより彼にこの国を任せてよろしいのですか？」

「いいよ、別に。変な奴がやるよりマシだろ」

「ところで・・・どこに向かっているのですか？」
ルインが訪ねる。

「東の国さ。影麗の故郷だ」

「私はもう少し西洋にいてもよかったのだが・・・」
それはこちらが困る。

一刻も早くこの時代から去りたいからな。

その前に、奴との決着がある。

それを片付けてからじゃないと・・・オレが逃げたことになるじゃないか。

「奴との決着を付けなければならぬからな！」

すぐにオレの真の力を見せてやるからな。

名も無き盗賊王よ。

偃月刀の手入れでもして待っている！

第8章第10話 後に中華人民共和国と呼ばれる国での休息。

長かった。

実に長かった。

中国に戻ってきたぞ！

徒歩で何週間かかったやら……。

とんでもないくらい時間がかかった……。

いくら魔法で移動速度あげているとはいえ……。

もう足が棒に……。

「腹減った……」

「それじゃあ、ご飯でも食べようか。幸い私は以前この街に来たことがあつてな、おいしい店を知っているんだ」

マジか！？

やったー！

やはり持つべきものは友だな！

「連れて行ってくれ！」

「でも、金はあるのか？」

……あ。

ここに来るまでにすべて使ってしまった……。

「主、錬金術を使えばいいだろう？ ソロモン72柱の悪魔に錬金術を非常に得意とする悪魔がいるしな」

……ふう。

やるか。

飯のためだ、仕方無い。

オレは召喚陣を描き、悪魔を召喚。

28番目の悪魔・ベレスだ。

彼はどんな金属も黄金に変化させる能力を持つ。

それは、オレの能力にも加わる。

そして、オレはさらに人とはかけ離れた存在になる。

まったく、嫌なことだ。

だが、飯のためだ！

仕方がないんだ！

と、まあ途中であつた盗賊から奪つた安物のナイフを黄金の刀身を持つナイフに変化させ、金持ちそうなこの領主にとりあえず売却人間って金に弱いよな。

全員分の食費と宿代にはなつた。

つーか、余つた。

2、3日は持つかな？

「にしても美味しいな、ここの料理」

「言つただろう、ここの料理は天下一品だつて」

千秋に料理の腕で勝てる者はないけどな。

これも愛情の表れなのかもしれない。

不特定多数の人間に料理をふるまうより、愛する者のために料理をふるまう方が圧倒的に愛情の量が違うからな。

「確かに、私が今まで食べてきた料理の中でもなかなかですね。中

華を食べるのは初めてですが、こんな味も嫌いではありません」
ちなみに、オレは中華はあまり好きではありません。

「長らくまともな物を口にしてなかったからな。君たちとは感動が違っただろう」

確かに、ずっと捕らえられたままじゃな。

美味しい飯にもありつけないか。

お気の毒に。

帰るとき、オレは店主に盗賊王について聞いてみた。

「え？ここらで有力な盗賊？この街はここ数年盗賊なんて現れてない街だからな。そんな話は聞かないよ」
ハズレか。

少し移動すれば見つかるだろうか。

「そうか、ありがとうな」

「おう、また来てくれよな！」

RPGのフレンドリーな店主がよく言うセリフでオレ達は見送られた。

そう言えばあるゲームで買い物をする時、「なんだ、客か」って言う全然敬意を称さない店主がいたな。

見るたび轟騎と文句言ってたっけ。

「これからどうするのか？」

「明日にはここを発つ。ここには情報はなさそうだしな」

「それでは君主、私は今晚泊まる宿を探してきます」

ルインは宿を探しに行き、残った三人は店を回ることにした。

「テクノ、お前の武器ってグラディウスだよな。それ以外にもハルバートとかは使えるか？」

「？何だそれは？」

この時代にはなかったか。

「ポールウエポンの一種だ。まあ、槍に近い……のか？まあ、槍と斧をくつつけて様なもんだ」

「それは知らんが槍の扱い方くらいは知っている。実戦で使ったこともある」

おお、そうか。

「そんな武器が欲しいか？この国には偃月刀というポールウエポンがあるから」

「あると心強いな。俺は接近戦でしか戦えないような武器しか持っていないから」

じゃ、買ってこようか。

こここの武器屋は結構しつかりしてるみたいだし。

数年盗賊が来ていないと言っても、以前強力な盗賊がいたらしいから、その名残で今も強力な武器の開発は進んでいるそうだ。

「金ならこれで間に合うだろう」

やはりあのナイフを売って作った金を渡す。

奴には見せてもらわないとな、最強の剣闘士の力を。

テクノは偃月刀を買いに出かけ、残ったのは影麗とオレだけになった。

.....

.....

.....

……女と二人でいることなんて久々だからなんか気
まずい……。

よく見ると影麗の服は露出が多いし、肌も白くて綺麗だし、胸も・
。

紅く煌めく茶色がかった髪も綺麗だ。

そして瞳はまるで太陽のように輝かしいオレンジ。

スタイルは今まで見てきた女の中でもかなりいい方だろうな。

髪の色や瞳の色からも推測できるように、ただ単に中国人ってわけ
じゃなさそうだな。

剣の腕も人としてはかなりの凄腕。

あの第二騎士とは張り合えるだろう……実感としては第二騎士の
方が若干強く感じるが。

ここまでよく見たことはなかったな……。

「どうした、こちらを眺めて」

「あ、いや……何でもない。忘れてくれ」

一瞬の気の迷いだ。

……一瞬どころじゃなかったけど。

番外編：クリスマス企画！何故日本人はクリスマスの前日に祝うのか。

（前書き

タイトル全く関係ありません。

しかも答え乗ってません。

特にストーリーに関係ないので飛ばして結構です。

番外編：クリスマス企画！何故日本人はクリスマスの前日に祝うのか。

「おい、この話全く関係ねえぞ？」

「まあまあ、作者さんが折角クリスマスパーティーを用意してくれたのだから、みんなで盛り上がりましょう？」

「まあ、最近出てない奴らはここぞとばかりに登場するだろうな」

「それって私のことを言ってるのかしら？」

「いえいえ！はやて姉様のことではありませんよ！？」

と、まあ作者が勝手に企画したクリスマス特別話ですが。

しかもほとんどクリスマス関係ない。

最近登場してなかったキャラもいますし。

あと、裏話も普通にあります。

「まずは、メリークリスマス！」

「メリークリスマス！！」

はい、メリークリスマス。

がしかし、作者はクリスマスに興味がありません。

ガキの頃はクリスマスが楽しみだったんですけどねえ。

何故か日本ではクリスマスの前日、クリスマスイブにクリスマスを祝います。

キリストの誕生日を前日に祝います。

明らかにキリスト関係ない奴らも祝います。
むしろ関係ない奴らの方が多いです、たぶん。

がしかし、ユリウス暦4月7日が誕生日と言う説もあります。(ウイキペディア参照)

ちなみに西暦4月7日は軽く駿の誕生日だったりします。

その翌日の4月8日は作者の誕生日であり、仏教の創設者・釈迦の誕生日だったりします。

釈迦と言えば生まれた時に「天上天下唯我独尊」と言ったことでそれなりに有名です。

「我は世界のうちで最もすぐれた者である」と言う意味だったりします。

とまあ、クリスマスから何故か仏教に飛びましたが、お楽しみください。

「それじゃ、百物語でもしますか」

「おい！？季節外れだろ！？」

「つばさちゃんもやるよな？」

「え、あ・・・うん」

「骸！？つばさを味方に付けるな！？」

「じゃあ、最初の話は私がするわ」

そうして、最近出番がなかったはやての話g「誰が出番がないのかしら？誰のせいで出番がないのかしら？私、駿くん以外はいつでも殺す準備はできているのよ？」・・・すいません・・・。

「昨日のことでした」

「昨日かよ！？」

「私が雪降る中歩いていて」と

「昨日は雪降らなかったよね？」

「後ろから」

「ああ、それ俺のことか。昨日たまたまはやてさんを見つけたんで後ろから胸を触ったら魔砲で殺されかけたって話だよ」

「・・・骸くんそんなことしたの？・・・駿くんも触りたいの？」

「なんでそうなる」

「えっと、だつてね、前に骸くんが駿くんはおっばいを触るのがとつても好きなんだって言うてたよ？」

「違うだろ、俺は駿はおっばいを満足するまで揉むのが好きって言つたんだよ」

「死ね骸！」

駿のハイキックが炸裂。

骸の顔面に直撃。

駿、激怒。

骸、気絶。

つばさ、困惑。

はやて、微笑。

「それで・・・駿くん・・・私のおっばい触ったりしたいの？」

「・・・本気にしないでくれ、つばさ・・・」

「さて、骸が消えたところで・・・<ピンポン>・・・と密か

駿は玄関へ。

「よっ！」

「おお、轟騎か」

「ケーキ買ってきたぜ」

「おう、ありがとうよ」

「……… 錬磨もすぐ来るからな」

轟騎は悲しげな顔をしながらつぶやいた。

「……… さ、中に入って」

駿も悲しげな顔をしながらつぶやいた。

<ピンポーン>

駿は一応玄関を開ける。

「こんbくガチャン>

有無を言わずに閉めたが……鍵も。

<ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーン>

「うぜえ……」

駿は普通にチャイムの電源を切った。

「駿くん、誰だった？」

「そう言えばつばさはあいつのこと知らなかったよな」

「……… だいたい予想は付くけどな」

「駿が見向きもしない奴と言えばあいつしかいない」

皆が意見を述べる。

錬磨についての。

「つばさは知らなくていいよ。てか知らない方がいいよ。知るな」

「・・・そんなに知られちゃまずい人？」

「いや、知られてもいいけど・・・知らない方が身のためだ」

確かにあいつはおかしいからね。

典型的美少女のつばさは真っ先に狙われることだろう。

それにしても湊の位置づけがつばさに奪われていると思うのは作者だけだろうか。

「安心しろ、オレも思ってる」

駿が同意してくれた。

「てか湊なんて随分懐かしい奴が出てくるじゃねえか」

「多分もう出てこないわよ」 ネタバレ

「ちょ、亮平涙目」

「てか湊って誰？」

上から轟騎、はやて、駿、骸である。

つばさは話についていけなくて涙目。

そして何故かここで駿は裏話に持ち込んだ！？

「ってか作者ってばさあ
ん？」

「いつもこの作品の続編作ってるけど何かあっては消してるよね
え、ばれた？」

ちなみにこれマジ話です。

「前回の奴は確かオレの孫の話で・・・確かミスって投稿して投稿しなおしたらその原稿消えたからやる気失せて消したんだよな、全部」

2話しか続いてなかったけどな！

「しかも今新しいの書き始めたし」
悪かったな。

いつもいつも適当に書いて。

「今度はオレの息子の話だし・・・しかも千秋の子じゃねえじゃん。どんだけオレに子供作りたいの？ふざけんなよ。てかオレそこまで性欲に飢えてねえよ」

もはや悪口になってます。

「しかもモンハンの小説とか最近投稿してねえし」

・・・モンハン飽きたんだよ！

もう狩りつくしました。

作者の周りでたぶん一番強いです。

先輩に「お前モンハンに関しては人間じゃない」とか言われました。

「ねえ、駿くん。作者さんかわいそうだよ？」

つばさは作者がこの小説に心の安らぎが欲しくて作ったキャラクタ―です。

だから結構気に入ってます。

ここでつばさのプロフィールでも書きますか。

「え、やだよ！？何で!？」

問答無用！

名前：杉山^{すぎやま}つばさ

誕生日：1月1日

性別：女

身長：約152cm

体重：32kg

髪の色：黒

瞳の色：茶色

人種：日本人

一人称：私わたし

胸：Cカップ（骸の視覚情報）

「み、見ちゃダメ!!」

「恥じらうつばさ・・・かわいいなあ」

「誕生日正月じゃん」

「うつわ、このメンバーで俺だけ紹介されてないじゃん
あれ、骸紹介されたかったのか？
てか骸復活してるし。」

名前：榎原骸えのはらむくろ

誕生日：8月18日

性別：男

身長：約172cm

体重：約60kg

髪の色：赤茶（染めた）

瞳の色：茶色

人種：日本人

一人称：俺おれ

「どつでもいいな」
「どつでもいいわね」
「どつでもよくな？」
「そんなこと言ったら骸くんかわいいそうだよ？」
「やっぱりさはいい子だよ……」
骸涙目。

ここで駿のケータイに電話が来た。

「はい、駿だけど」

『千秋です。仕事が終わりました。入れてもらえませんか？』

千秋さんは普通に仕事してました。

「いや、別にいいけどさ。もうそろそろお開きにしようかと……」

『え……私は仲間はずれなのですか？』

駿は千秋の悲しそうな声を聞いて目つきが変わった。

「わり、さっきのなしで。延長戦開始だ!!」

『それと、玄関で錬磨が待っているのですが』

「シカトでOK!」

駿は千秋を迎えに行った。

「皆様、こんばんは」
千秋様参上。

「今日、作者様に言いたいことがあつて来ました」
はい？

「新作・・・もしかしたら消すかもしれないんですが・・・」
悪かったですね、何度も消して。

「まず、主人公が私と駿との間にできた子じゃないってどういうことですか？」

いや、それはね、うん。
父親は確かに駿だよ？

名前は出してないけどこの作品見てれば余裕で駿ってわかる感じに仕上がってますよ？

それに千秋さんには女の子しかできないって言う設定がありまして・・・。

「なんですか、その設定」

だから、梨瀬、翠香、月読、琉那の四人しかできないって設定だし・・・。

だいたい錬磨の孫が主人公の短編あるの知ってる？

それにも君の子は四人しかいないって設定になってるし・・・。

「そんなことは知りません。私は駿と他の女の間に子供ができるのが嫌なのです！」

もう無駄だと思つよ？ 既にはやてのお腹の中にはもう駿の子が・・・。

「いねえから。普通にやってねえから、はやて姉とは」

「あら、やりたいならいつでもお姉ちゃんに言いなさい。あなたの欲望、私に好きなだけ吐き出させてあげるわ」

はい、18禁。

まだリアルでは出してないからセーフだよな？

と、まあそろそろヤバくなって来たので作者がお開きにします。
それでは。

「おい、勝手に終わるな！」

お前らは勝手にやってろ！

とまあ、この小説読んでくれる方には非常に感謝いたします。

半ば趣味で書いていたこの小説ですが、案外読者様もいるようで。

ありがたいことこの上なしです。

暇つぶし程度になったらうれしいです。

これからも間違いなく更新日を遅れると思いますが、よろしくお願
いします。

番外編：クリスマス企画！何故日本人はクリスマスの前日に祝うのか。

（後書き

作中にも出てきましたが、次の作品に挑戦しています。
頑張つて主要人物を少なめにするつもりです。

本作が非常に主要人物が多いので・・・。

駿、はやて、千秋、轟騎、錬磨、骸、亮平・・・と数えたらきりがありません。

しかもサブキャラもあわせたらたぶんやる気失せます。

次回作のタイトルは

「地を駆ける焔のように」（仮題）

にしようかな・・・と思つてます。

作者のやる気が起きたら今年中に投稿しますが、たぶんしません。

それと、過度な表現が含まれていたと思つたので、若干修正しました。

今でも充分過度なような気もしますが・・・。

第8章第11話 炎と焔の戦い、そして劫火の中での決戦

朝目覚めると大変なことになっていた。
これこそまさに大事件。

単刀直入に言う。

街の半分が焼け野原になっていました。

「な、何

!?!」

宿屋の店主は既に逃げたようです。

全く、客を見捨てるとは無責任な店主ですねえ。

!?!?!この気配・・・奴か？

この街に来ているのか？

奴が。

わざわざオレを迎えに来てくれたってか。

「ルイン、テクノ。お前たちは一般市民の避難を手伝ってくれ！オレはボスを討つ！」

二人の騎士は頷いて、別々の方向に走って行った。

「影麗、お前はどうする？お前はオレの騎士じゃないからオレからは指示できない。でも、もしよければオレについてきてくれないか

？」

こいつの腕は一流だ。

盗賊だとしたら、ザコは影麗に任せたい。

「分かった。私に西洋を見せてくれたのはお前だ。今はその恩返しをするときじゃないのか？」

助かった。

「それじゃあ、頼んだ」

オレは炎が飛び交う中、剣を手にしてその中を駆け抜けて行った。

やはり、こいつか。

「ようやく来たか」

「悪かったな、遅くなって」

「人生最大の楽しみが今から味わえるんだ。そのことで咎めたりはしないさ」

盗賊王は偃月刀を構える。

「その前に、お前の本名はなんだ？作者が盗賊王じゃなんかイマイチとか言ってるからいい加減教えてくれ」

「仕方無いな。我が名は炎飛^{えんひ}だ」

そうか、炎飛か。

その名を聞くことはもつなさそうだな。

オレはお前をここで討つからな！

「いざー！」

互いに剣をぶつけ合う。

「この殺気、これが真のお前の力か！剣を持ったただけでここまで凶悪な気を放つとは・・・楽しくなってきたぜ！」

ふざけるな。

お前と遊ぶために剣を手にしたんじゃない。

オレはお前との決着を早期につけて帰るんだ！

元の世界に！

「奥義・天地開闢！！」

これ使ったの久々だな。

大気を切るこの技を避けることは困難。

だが、それを楽々と避けるとはこいつは人ならざる者だな。

「避けやがった・・・ならしかたない。出でよ、我にその歌声聞かせよ！セイレーン！！」

セイレーンとは、鳥人である。

・・・悪い、あまりにも簡潔すぎた。

上半身は人間の女性、下半身が鳥つてとこか。

海の怪物とされ、美しいその歌声で多くの船乗りたちを惑わしたらしい。

そして、今オレが召喚したセイレーンだが。

「綺麗な歌声だ・・・確かに」

これなら多くの人間は耳を澄ませて動きを止めるだろう。

・・・だが。

「オレにはそんな小細工通じねえよ」

「え、マジかよ」

「マジだ」

・・・オレの作戦は失敗した。

力押しで勝てなかったから頭脳戦で行ったんだが・・・。

暫く剣を打ちつけているうちに、オレは炎飛にひとつ質問をした。

「お前、人間じゃないだろ」

「オレか？ああ、オレはこの地域に現れる妖怪と人間の間にできた子だからな。半分は人間じゃないんだよ！そう言うお前はどんなだよ？お前の動きも十分人間じゃないぜ？」

既に自覚してるわ！

「悪魔との契約、龍の魂とその他、数々の強大な魂をこの身に宿している。オレも人ならざる者だ。だが、オレに剣術を教えた者は人間。オレ以上の凄腕の女だ！」

勿論、リズの事。

師匠はオレより弱いし・・・。

「オレは師を超える。だからこの技を作り出した」

「!?!」

お前との決着のためにわざわざ作り出した奥義。

お前に拜ませてやるよ！

「二十二代目真一刀奥義・クリムゾンエタニティ!!」

これはオレが編み出した奥義。

自ら灼熱を身に纏い、近づく者を焼き尽す。

自らの気があまりに少ないと、灼熱の炎を身に纏うどころか呼び起こすこと自体できない、難度の高い奥義。

森羅万象と違い、一刀で繰り出す奥義だが、威力は数億倍に跳ね上

がっている・・・はず。

「どうした、怖気づいたか？」

「オレは怖気づくような軟な奴じゃないぜ」
炎飛が偃月刀を突きだしてくる。

「死ぬのはお前だ」

「！」

「焰の鎧、これは見せかけじゃない」

そう、この鎧は

どんな炎より

灼熱よりも

地獄の業火よりも熱いんだ・・・。
人間には耐えられない程の高温。

「劫火に身を委ねろ。今なら楽に逝ける」

光速とも言えるような速さでオレに突き刺さるべく飛んでくる偃月刀に剣を当てる。

それだけで、偃月刀はバターのように・・・いや、バターよりもあつさりと溶けてしまった。

「お前の命、オレがもらった！」

オレは焰を宿した剣を振りかざし、これとは対になるはずの奥義の構えをする。

さようなら、炎飛。

これはオレの試練のひとつだったのかもしれない。
そうだったのなら、ありがとう。
また先に進むことができる。

これで終わりだ。

「十代目真一 刀奥義・アブソリュートゼロ!!」

オレは熔解していく炎飛に冷気を与えた。

地獄の業火を極限の零度で凍らせて行く。

焔が凍る。

それは、普通ならばありえない現象であった。

辺り一帯、焼き打ちで元から炎に包まれていたが、それもろとも全て氷となっていた。

その光景が、オレにはどこか、悲しく見えた。
焔の氷が、オレに何かを訴えているように・・・そう感じた。

第8章最終話 この世界との別れは輝く光の中で……

「……用事はもう、済んだのか？」

オレが俯きながら歩いていると、影麗が沢山の死体の山の上で待ち構えていた。

「ああ、用は済んだ……」

そうだ、済んだんだ。

あいつは歴史上でも有力な剣豪だったろうに。

名を載せるよりもオレとの戦いを望んだ。

もしかしたら、この世界にはそんな猛者が数え切れないほど存在してきたのかも知れない。

現代の人々の記憶に存在していないだけで、その時を制した王者よりもはるかに強い猛者が、影の世界でひっそりと、強者に出会うことを望んで生きていたのかも知れない。

そんなことは誰一人知ることはできない。

オレはこんな機会があったため、そのようなことを思ってみた。

歴史を変える訳にはいかないからな。

辺境の勇者より、歴史に名を残す王者を優先させるさ。

「もう、行くのか？」

「ああ、オレには帰る場所があるからな」

別れとは、これほどまで悲しいものなんだと感じた。

今まで殺した人間や、情を入れなかった人間との永遠の別れは数え切れないほどあったが、友人との永遠の別れとなると、やはり寂しいものである。

「元気でな。駿。大好きだ」

「ああ、オレもだ」

これは友達としてだからな……一応。

「ルインを探さないとな」

「彼女ならもう迎えにきているであろう」

影麗が指さす方に、二人の騎士が待っていた。

「悪いな、遅れて」

「君主が待てというならば、百年だろうと千年だろうと待ちます」

「俺にはそんなことは無理だな。寿命で死んでしまふ」

まあ、テクノの言葉は当然だな。

「テクノにも一応聞いておこう。これからオレ達は未来に行く。一度行ったらもう二度戻って来れないと思っいていい。来る覚悟はあるか？ないならばここでお別れだ」

「・・・この世界に残すものなどないからな。親も妻も子も。どこまでもついていくさ。俺はお前の騎士だからな」
そうか、これで元の世界に戻るな。

思い残すことはもう、ない。

「ルイン、テクノ。行こう、オレたちの世界に！」

「君主よ、ひとつお尋ねしたいのですが」

ん？

「どっした？」

「どっやって時を超えるのですか？」

ははは、そんなことか。

それなら問題ない！

.....訳がねえじゃねえか.....

どうやって戻る気だったんだよ.....オレ。

「そう言えば.....時の妖刀がこの世界に存在します」

「・・・それが、オレなのか？」

「はい」

そうか・・・その主はオレには話しかけてきてはくれない。
未だ、心の中で会話できるのはリリイだけだからな。

「あなたが望むなら時を越えましょう。ただし・・・」
ただし・・・？

「ただし、私にはそのほかに使命があります。その使命を叶える
ことを、手伝っていただけませんか？」

「内容による」

「この世界全ての妖刀を、あなたが手にすることです」
妖刀を・・・か。

悪くない。

「私たちと同じ妖刀は全て、人間の魂とそれを宿す刀、そして伝説
上の剣で構成されています。中には、槍や弓に魂を宿している者も
おります」

もはや刀じゃねえ・・・。

「それをも手にすることを誓えますか？」

こうなったらやってやるうじゃねえか。

「オレが契約しよう、その願いを叶えると！」

どこか似たようなセリフを聞いた記憶があるが、まあ、問題ない。

「それでは、時を越えましょう」

ああ、そうだな。

「待ってくれ！」

この声は・・・。

影麗・・・。

「やはり私も連れて行ってはもらえないだろうか？またひとりにな

るのは・・・寂しい」

そんなことか。

「ああ、来い！」

オレは手を差し伸べ、時を越えようとする光の中で彼女の腕を掴んだ。

「行こう、オレたちの時代へ！」

そうして、この時代に別れを告げた。

第9章第1話 戦争の爪痕と空気の読めないアイツ

「戻ってきた・・・か」

ここは、オレの家の前だ。

どのくらい時が過ぎたのかはわからない。

ただ、戦争での爪痕がところどころ残っている。

オレの家は、門が壊れていた。

昔からくぐりぬけてきた門だったため、門以上に何か大きなものを失った気がした。

「街には誰もいないか」

見事なまでに誰もいない。

それも、オレ達がロンドンに飛ばしたせいだろう。

「・・・お、お前・・・駿か？」

「・・・お前は・・・」

まさかのこいつの登場か。

何話振りだろう。

数え切れないほどシカトしてたし、名前すら出さないようにしてたからな。

「・・・錬磨」

こいつだけはロンドンに連れて行かなかったからな！

「駿、久し振り！俺今何起きてんのかわかんないんだけど？この前まで何で空に戦闘機が飛んでたんだ？」

バカすぎる・・・。

空気読めよ。

「戦争だ」

「日本は平和主義だぜ？全く意味の分からないこと言つなよ」
この状況を見て戦争じゃないと言い切れるこいつがバカすぎる。

「リア、本部に飛ぶぞ！」

「了解だ」

こいつと話すのも馬鹿馬鹿しい。

さっさと逃げるのが最善だな。

「おい、待てよ！？俺も連れて行けよ！？」

なんか言ってたが気にしないことにする。

数秒と経たないうちに本部についた。

「お前、日に日に魔力が増大していかないか？」

「わらわもバカではない。何時までも成長せぬわけがなかるうに
確かにな。

錬磨と違つて。

「まずはオレの妖刀を腰に差さないとな。気が狂う
親方に作ってもらつた剣は飾っておくか。
確かにかなり優秀な剣であるが、オレは基本刀だし。
飾っておくのが妥当か。」

「片瀬社長が今戻つたぜ!!!」

社員が一斉にオレの方を向く。

「駿!？」

一番初めに声を出したのは、千秋だった。

「おう、ただいま!」

「どこ行つてたのですか!?!心配してのですよ?」

悪い悪い。

「ちよつとな、どこかの龍に飛ばされて・・・つと、それはいいか。
大丈夫だったか?」

「ええ。私は大丈夫です。現在、骸たちがあなたを搜索しに出てい
ますわ。今から連絡を入れるので、二日以内には戻ってくるでしよ
う」

オレを心配してくれたのか。

「悪いが、オレの刀を知らないか?」

「それならあなたの部屋に・・・」ありがとう!」

オレには今、ルインとの契約が気になつているのでな。

「千秋、次帰つてきたときは一緒に飯でも食おうな!!!」

「・・・ええ」

オレは刀を装着して、飛び出した。

その時、千秋が悲しそうな表情をしていたことに気付きすらしなかった。

「二人は本部でオレの姉の指示を待ってくれ。ルインはオレと来てもらう！」

影麗とテクノは首をかしげたまま、風の如く走り去って行くオレをただ見つめていた。

「待ってる、妖刀！全て手にしてやるからな！」

「ルイン、一番先に手に入りそうな妖刀は？」

「ヴリトラですね。気配を感じます。彼女は蛇をかたどった鎧を身に纏った騎士で、真の姿はリジル。毒をその身に宿している妖刀です」

ヴリトラ・・・名前から蛇と分かっていたけどここまで蛇とはねえ。

「ルインが示した位置まで行けば見つかるか？」

「私は全ての妖刀の力を感知できます。それが、主が私に与えた力」

「妖刀探しには持ってこいだな」

思ったより楽に手に入りそうだな。

第9章第2話 砂丘に潜みし毒蛇の剣

「ここか」

面倒なところだな。

砂漠とは……。

現在、サハラ砂漠で砂と格闘中です。

「ヴリトラに近づけば近づくほど私の体が反応します
ルイン次第か。」

オレはさらに歩みを進める。

「……暑い」

「シロガネの力を借りれば多少は涼しくなるでしょう」

あ、そっか。

てか絶対零度でもいいけど。

だけど気力消費するし。

「氷の騎士・シロガネ、我に力を貸したまえ！」

なんかカッコつけて呼んでみた。

「そんな呼び方をしなくても私は力を貸す。望みはこの暑さからの
解放だろう」

氷の力を引き出し、辺り一帯を適度な温度に変える。

うおおおおおお、涼しい！！

何これ滅茶苦茶快適！

「君主よ、ヴリトラに近づいているようです」

「……あそこがあやしそうだな」

何か少しでも盛り上がっている砂丘に足を運んだ。

「ここか？」

「はい、この下に埋まっていますね」

地面を掘り起こすなら、この力だ。

「来い、イザナギ！」

「つたく、人が眠っている時に・・・で、何の用？
なんか・・・ムカつく。」

「この砂丘を掘り起こせ」

命令形。

こいつには、命令形。

何でだつて？

ムカつくし・・・。

「え？それ、オレの専門外だけど？」

「黙れ、竜巻でも何でも起こして掘り起こせ！」

「お前がやれよ・・・」

マジうぜえ・・・。

仕方がない。

オレがやるか。

オレはイザナギとハヤブサを構え、聖剣、魔剣に変えるように指示する。

風と空。

その二つが共鳴し、天候を操る。

それが災いし、ひとつの奥義が凶悪になる。

「十一代目真二刀奥義・クロスビーストエッジ！」

ま、竜虎が争うようなイメージだ。

本当に天に竜、地に虎の霊体がここで、直々に争ってくれる。爪や咆哮が刃となつてあたりを荒す。近辺の街は消滅するほどの勢いだ。まさに、天災。

「うわっ！」

すげえ暴風……。

龍の吐息でこんな威力かよ。

虎が歩行する度、物凄い震動が伝わってくるしな。

こりゃひでえ……。

砂は散った。

が、やりすぎた……。

近辺に村がなかったことが不幸中の幸いだな。

「ヴリトラ……」

ルインが呟いた。

彼女の視線をたどると、そこには毒々しい色をした刀が地面に刺さっていた。

「これが……」

「まだ目覚めてはいないようです。私の力を使えば、力を開放する

ことは可能です」

折角手に入れた妖刀だ。

覚醒してなければ優秀な刀に過ぎない。

オレはその上を求めているんだ。

「頼む」

ルインはヴリトラを手に持ち、天に掲げた。

「汝が私の所有者かのか？」

どこかの貴族ですか、あなたは。

「いえ、私はあなたと同じく妖刀。始まりの妖刀・ルイン。私の所有者は彼、片瀬駿。あなたの君主も彼に当たります」

「覚醒させたものが我が姉君に当たるものとは。これも妖刀の力ぞ。我は彼を主と認めよう」

気迫で分かってくればありがたいがな。

「そう言えば。姉君、我ら妖刀を強化する武装の完成はいつぞや？
な、なにっ！？」

そんなものがあるのか！？」

「創造者はこの時代には置いてはいません。ただ、私には時を超える力があります。それを使えば入手も容易でしょう。創造者はこの時空から気配すら感じませんから」

「だが創造者の魂はオレに宿っているのだろうか？彼の記憶が覚醒すれば、オレがそれを作成することができるかもしれない」

「そうですね。確かに、彼の記憶も残っているはずですし強化する武装か。
楽しみだ。」

「で、その武装ってどんな奴なんだ？」

「騎士によつて異なります。ですからなんと申えませんが。私にはそれ以外分かりません」

まだ手に入らなくても、楽しみだな。

「主がこのまま生きていても手にするまでに年を取つて死ぬであろう。時とは、そう言うものじゃ」

・・・人間の命つて短いですね・・・。

「だが安心するがよいぞ。我は不老不死の薬をこの身から生成することができるといふ」

不老不死もなあ・・・。

それはそれで嫌だし・・・。

「それは後で決める。オレは死を求めるともしれないからな」

長く生きていれば死を求めるといふ。

オレはそうなりたくない。

第9章第3話　ちよつと大人な夜のお味はどうですか？

現在、本部の入口にいる。

一度、帰ってきたのだ。

少々調べたいことがあるからな。

この図書館には随分珍しい本がある。

魔道書だつて普通に置いてるし。

オレはそれで、オレが調べたい事柄は魂について。

こんなことはあるかは知らないが、一応調べる価値はある。

創造者の魂をコントロールすることができれば、強化武装の作成方法が分かるかもしれない。

オレは、本部の門をくぐつた。

玄関で千秋が待っていた。

「・・・遅いですわ」

・・・あ。

「たまには私にも構ってください。私・・・あなたがいない夜は切なくて・・・切なくて・・・。消息不明のときなんか・・・」

千秋の頬に一滴の涙が。

そうだった。

オレは最近妖刀の事ばかりで・・・。

その前も戦争やらで忙しくて。

「・・・ごめん」

「分かつてくれたならいいです。暫く私に構っていただけませんか？」

「ごめん、分かった。暫くは一緒にいるよ」
反省しないとな。

女の子を泣かせる男はクズだ。

千秋に切腹を命じられたらいつでもしてやるぞ。

その覚悟で千秋とはこんな関係になったんだ。

そして夜

オレは千秋の寝顔を眺めながらベットに横になっている。
平和だな、と感じた。

こんな平和な日常が久々すぎて逆に困っているくらいだ。
梨瀬も寝てるし。

オレも寝ようか。

「おやすみ、千秋」

そっと、目を閉じた。

無意識に彼女を抱きしめながら・・・。

そして朝。

時が過ぎるのは速い。

異常に、な。

寝たと思ったら既に朝だ。

そして、目を開けたとたんこれだ。

「なっ……ち、千秋!？」

椎名家の御令嬢とあるうお方が、こんなはしたない格好を。服をこんなにも肌蹴させて。

少し前のオレには刺激が強すぎる。

こんな姿を見ていると、千秋も完璧な人間じゃないんだな、と実感する。

どこかに人間じゃない奴もいるが……。

オレは脱げかかった服を着せようと手を伸ばした。

その時、千秋が寝がえりをうち……あ……。

「はあん……」

なんかエロい声を出した。

何が起きたかって？

もち、胸に触れてしまった。

しかもあまりの柔らかさに少し揉んでしまった……。

男はこんな事故を最大限に生かそうとするんだ!

それに千秋は胸の感度がよくてな……って何言ってるんだよ、オレ。三回くらい死ねよ。

「……たまってるのかな、オレ」

最近いろいろあって長いこと千秋と離れてたし。

そんでもって疲れてるし。

オレは千秋の胸からそっと手を離れた。

「誰かまだ触ってたのかよって突っ込み入れるよ……」
二人しかいないから言われないか……。
……自分で言ってる虚しくなってきた……。

「なんか凄まじく千秋がいやらしく見える……ぜってえ誘ってる……」

妄想も激しくなってきた……。
まずい、頭が……。

オレギガロマニアックスでもないから妄想を具現化できないのが惜しいところだ……って何言ってるんだ、オレ。
本当に死んだ方がいいな。

目の前にはところどころ肌を露出させた千秋。
無論、露出度も高い。

全裸よりエロく感じる……。
ヤバイ、この部屋から出ないと……。

オレはベットから抜け出し、扉に手をかけた。
そして、ゆっくりと扉を開ける。

廊下には誰もいないか……。
まだ5時だしな。

でも見張りがいるはずだ。
どうしたんだろう。

今日は確か轟騎と袖季のはず。

オレは腹が減ったのでキッチンに向かった。
一応料理はできるから適当に作るうかと。
そこで、とんでもない光景を見た。

「……………」

……「轟騎」

キッチンでは轟騎と柚季が何やら楽しそうに喋りながら料理を作っていた。

暫く見ていると、またまた楽しそうに食事を始めた。

うわぁ、轟騎の野郎……食べさせてもらってるじゃねえか……。千秋にしてもらったことあったっけかなぁ……。

……しまいには口移しですか……。

流石にそれは……って、オレもあるか。

千秋が食べていた飴を口移しでもらったことがあったなぁ。

うわぁ、何このベタな口移し。

……仲よさそうだな。

よかったですね、轟騎さん。

おめでとうございます。

ただ、ひとつ忠告しておく。

柚季は……後が怖いぞ。

第9章第4話 コーヒーは漢字で珈琲と書きます。何故こんな話かって？聞か

まさかの前回の続きですが、あれから3時間経ちました。

オレは今、何でこんなことになっているのか理解できない。
オレはただ大広間でコーヒー飲んで本を讀んでいただけなのに、何故！？

何故こんな修羅場が展開されているんだ！？

刹那が入れたコーヒーと暁が入れたコーヒー、どっちが美味いって
いわれてもオレ飲んでるの缶コーヒーだし・・・。
それに飲んだこと無いのに決められるか！
それとわざわざ持つてくるな！

「持つてこられてもコーヒーまだ余ってるから！」
無理に勧めるな。

「吾のコーヒーが飲めないというか！」
そして怒るな。

「ウチ折角駿のために作ったんやで？」
っ、作つたつて・・・。

これインスタントコーヒーじゃねえか！！
缶コーヒーで十分だ！

それでも論争を止めない二人を黙らせるために、オレは刹那のコー
ヒーに口をつけた。

結構マイルドに仕上がっている。
ちなみにオレはブラックが好きなので、あまりオレ好みの味ではな
かった。

「ウチよりも刹那のコーヒーの方がええの？」

「別にそんな訳じゃねえよ」

「そんな訳ってどんな訳だ？ここで話せ！」

「・・・ややこしくなってきたな。」

「もはや冷静に対処できなくなってきた・・・。」

「お前ら、何が望みだ？」

その一言で本日1日の行動が決定されてしまった。

その一言で本日1日の行動が決定されてしまった。
ので2回言いました。

大事なことな

翌日

昨日、何があったかは聞かないでくれ・・・。

つと、突然だがオレは一度日本に帰国することにした。

暁と刹那から逃げるといふ重大な目的を抱えて。

「千秋！いくぞ？」

「待つてください！梨瀬が泣き出してしまったもので」

梨瀬か・・・そう言えば梨瀬より翠香たちといた方が長かったな。

翠香が生まれるのはオレたちが法的に結婚した後だろうけど。

時の流れって恐ろしく速いにもかかわらず、恐ろしく遅くもあるからな。

気長に待つか。

「もういいですよ！」

あ、考え事してたらもう準備はいいのか。

「じゃあ、行くぞ？」

オレはリアの力を借りて（8割リアの力）日本へ向かった。

で、総本山に戻ってきたのだが。

「なっ！？」

「何故貴様がここに！？」

「現在ロンドンにいるとの情報は嘘だったのか！？」
「なんだこいつら？」

銃を持っているな。

なるほど、オレたちが留守の間に本部を叩こうとしていたわけだ。

「千秋、逃げていろ。ここはオレに任せておけ」

オレは刀を引き抜く。

「ルイン、タイガ、力を借りるぞ？」

ルインが妖刀になっている理由は、千秋はオレが千秋以外の女を連れて行くのを見たら悲しむだろうと思っただから。

以上。

さ、行きますか！

「十八代目二刀奥義・鴻漸之翼！」

ひとたび飛翔すれば一気に千里をすすむといわれる鴻おとつばさのつばさ。それをイメージしてつくられた奥義。これは気で翼を生みだし、空中戦に持ち込む卑怯極まりない、更に人のできることじゃない奥義。オレの流派の奥義は気の使い方が重要だからな。元々気がない人間には使うことすらできないし。いくら抜刀術の達人だろうが、気を使うことができなければ奥義を何一つ使うことはできない。ちなみに、この奥義は二本の刀を翼に見立てて気を動かすから刀は二本ないとこの奥義は使うこともままならない。

オレは刀を振ると、それと共に翼も大きく羽ばたく。

その勢いに、大抵の人間は吹き飛ばされる。

そしてオレは人間離れしているな、と実感する。

重力完全無視してるし。

そんな調子で空襲して門の前にいた奴らを全滅させた。

弾丸もはやオレには関係ないものだ。

銃じゃオレを殺せない。

「千秋、中が無事が確認しよう。自分の身は守れるか？」

「ええ、駿に頼ってばかりでは駿が疲れてしまうでしょうし」

「オレは別に大丈夫だけど・・・よし、手分けして見回ろう」

オレ達は勢いよく走り出した。

第9章第5話 表があれば裏もある。裏継承者の狙いはオレ

大丈夫みたいだな。

中には危険なものも不審者もいないし。

中にいるのはメイドが数人、執事が一人。

「千秋のところに行こうか」

落ち合う場所は千秋の部屋。

待っていればいずれ来るだろう。

そう思いつつ、千秋の部屋に入った。

数十分待ったが、一向に千秋が現れる気配がない。

しまった、梨瀬を預けたままだったか。

妖刀を1本持たせておけばよかった……。

いざというときは彼らが守ってくれるし。

一番いいのはシロガネだっただろう。

彼は一番忠実な男の騎士だからな。

それでもリアにも搜索は頼んであるからリアが何とかしているはず。

「行くべき……か」

オレは部屋を出ると、千秋が向かった方向へ走って行った。

ある程度走ると、何かがぶつかり合うような音が聞こえた。
その方向へ向かうと、扉がひとつ。

その先から音が聞こえる。

扉を開けると、リアと何者かが戦っていた。

リアはやはりゲイボルグで、もう片方の人物は……!?

「あれは、妖刀!？」

もう一人の人物は妖刀を二本所持していた。

何故持っているんだ？

「あれはカスミとゲツカですね。漢字では霞と月下、と書きます。

二本でひとつの妖刀と考えてよろしいでしょう。あれの真の姿は干將と莫耶です」

干將と莫耶か。

双剣使いには持ってこいの刀だ。

あいつが相当な腕だったらリアが……。

「奥義・鴻漸之翼!」

なっ!?

何故あいつがああ技を!?

「あれは先ほど君主が使っていた技ではないですか」

「ああ、この時代でオレ以外に使える人間はオレの師匠だけのはず。二十代目までは既に死んでいるし。見た感じあいつは女だが、はやく姉もリズもこの技は修得していないはずだ」
女で師匠より後の人間……。
まさか……。

「まさか、洗か!？」

「いや、違います。彼女とは違う気配を感じます」

「そうだ、ハヤブサは以前あいつとはあったことがあったからな。一体誰なんだ？」

「くっ!」

「リアが!？」

吹き飛ばされた……。どんだけつええんだよ、あいつはよ!!

「オレが出る!」

オレはハヤブサを手にとると、エクスカリバーへと変貌させた。両手剣つてのが多少使いづらいが、無理になら片手で使うこともできる。

「てめえ、何者だ!？オレの流派の技を使うなんて!？」

「なるほど、あなたが片瀬駿ですか。武器を納めてください」

謎の少女が刀を仕舞う。

オレもハヤブサを仕舞って、彼女と向き合った。

「まずは自己紹介からさせていただきますでしょうか。私、つるがね鶴谷真琴、

と申します。私とあなたは現在二十二代目の継承者です」

「どういうことだ？」

オレしか継承者はいないはず……。

「私は影の世で生きてきた裏の流派の者です。二十一代目を争う際、候補者二名は奇跡的に同じ奥義を編み出したのです。それ故、彼ら

は純粋な剣の腕で決着をつけ、片方は表、片方は裏の継承者となつたのです。そして、私は裏の継承者。私が編み出した奥義、それは天変地異。それをあなたに見せつけて、私は表の継承者になると、師匠に誓つたのです」

長い説明ありがとさん。

それにしても継承者であの師匠より弱い奴がいるとは驚きだ。

「悪いが、それは譲れない。天変地異を生み出したのはお前だということも分かつたし。別に恐れる者はないさ」

「ここで決着をつけますか？」

「それでもいい」

オレ達は互いに離れ、剣を抜く。

「今はオロチを使いなさい。彼女にはエクスカリバーは通用しない。見た限りスピード重視の様ですから」

ハヤブサのアドバイスを聞き入れる。

確かに、両手剣のエクスカリバーよりも片手剣の方が扱いやすいしな。

多少重さはあつても、オロチの刀身はイザナギたちよりも切れ味はいいし。

「オロチ、真の姿になつてくれ」

「つたく、仕方ねえな」

この声を聞くのも久しぶりだな。

オロチが赤く燃え盛り、剣へと変貌する。

「炎の魔剣・レーヴァティン！」

これが、オロチの力だ。

「世界を焼き払う程の火焰を生み出す魔剣の様ですね」

真琴は剣を三本取り出し、二本の妖刀に加える。

五刀流。

始めてみる……。

今まで相手してきた剣士は全て一刀流だったから、新鮮な感覚だ。

「あなたに私を倒すことはできません。私は、悪魔と契約しているのですから」

奇遇だな、オレもだ。

「そうか、なら気をつけないとな」

五本の刃がオレに襲いかかる。

五本だろうが、関係ない。

オレの魔剣で焼き払うまで！

「奥義・獅子奮迅！」

二本の妖刀で獅子のような覇気を巻き起こす。

普通の人間には止められぬほどの爆風。

刹那でも止めるのは至難の業だっただろう。

「迎え撃つ！真奥義・ダイヤモンドダツシャー！」

大地を走る一斬りが穿つ。

大地の咆哮は、剣の魔力を受けて龍の吐息の如く、炎の道も作りだした。

「獅子奮迅を！？」

流石は悪魔と契約した少女だな、ダイヤモンドダッシュャーを回避するとは……。

計算が若干狂った。

「奥義・百花繚乱！」

「無駄だ、ネクロワールド！！」

オレは攻撃を打ち消し、その攻撃を真琴が避ける。

「キリがないな」

「仕方無いですね。あなたの奥義と、私の奥義。どちらが強いか、ここではつきりさせましょう！」

お互い剣を構える。

「奥義・天変地異！」

「奥義・クリムゾンエタニティ！！」

大災害と、灼熱地獄が部屋を荒す。

「後で千秋には謝らないとな。レーヴァティン。オレに世界を焼き払うその力を貸せ！」

「負けて……たまるかつ！師匠と約束したんだ、確実に片瀬駿を倒すと！！」

無駄だ。

お前とオレでは何もかも違う。人間よりどれだけ上の存在か。

そして妖刀の力。

一番の違いは、奥義の出来だ。

そんな全体攻撃じゃピンポイントで狙うのには向いてはいない。それに天変地異は、既に修得している！

「劫火に身を委ねろ、すぐに楽になる」

三本の刀はすぐに融け、水よりもさらさらとした鉄に姿を変えた。

その時点で、オレは剣を納めた。

「女を殺すほど、オレも堕ちてはいないさ」

「よ、よく・・・そんな・・・な、恥ず、かしいセリフ・・・が、はけるな・・・」

この状況でよくそんなことが言えるな。

オレは魔法使いじゃないんだぞ？

お前を今から生かすことは無理だ。

今なら応急処置をすれば助かる。

しなければ死ぬ。

「た・・・すけ・・・て・・・」

「オレは魔法使いじゃない」

「そ、んな・・・情報が・・・違、う・・・」

「だが、召喚師ではある。今から天使を召喚してやるぞ」

彼女は一命を取り留めた。

ちなみに、ここに来た理由はオレを倒すためらしい。
もう他にはいないようだ。

「リア、千秋は？」

「こいつから逃がした。今は彼女の部屋にいるだろう」

そうか、よかった。

……てか、真奥義乱用したから疲れた。

第9章第5話 表があれば裏もある。裏継承者の狙いはオレ（後書き）

最近この小説は漫画的なストーリーじゃないかと真剣に考えています。

第9章第6話 生き物は一定の状況下で弱くなる。それは最低うつあるはずだ

オレは千秋の部屋に戻った。

「駿、無事だったのですね！」

「当然、オレがやられるわけがないだろう？」

自信過剰過ぎるのもちよつとあれだけだな。

今のオレは何にも負ける気がしない。

「もう、夜も遅いです。疲れたでしょう。休みましょう？」

「風呂に入ってからな」

「そうでしたね」

風呂に入らないと次の日が嫌になるんだよな。

なんか・・・変な感覚で。

「お風呂なら既に沸いていますわ
気が利くな。」

流石オレの嫁。

もはや彼女ではない、嫁だ！

「さ、一緒に入りますわよ？」

・・・え？

千秋がやたらとくつついてくる……。
いや、嬉しいよ？
嬉しいんだけど……。

どこまでも白く、天使の様な身体がオレの脳を刺激して、全身が大変なことになっております。

胸が当たってますよ、千秋さん！
しかも直に！

「ちょ、ちよつと大胆過ぎないか!？」

「駿は私の身体に飽きてしまわれたのですか？」

いや、レベルが高すぎる……。

レベルが高すぎてオレには勿体ねえ……と感じてきた。

「ほら、駿。口で仰つても体の方は正じk「それは言うてはならない設定だろう!？」

あくまでこれは18禁ではない……はず……。

「駿は……私の腕の中から離れて行っています。私、それが本当に悲しい。どうして私だけを見てくれないのですか!」

そうか……こんなにくつついているのは……。

「オレは千秋だけを見ている暇はない!オレには!まだ手にすべきものがあるんだ!」

「あなたの言っていることが理解できません!他に何を手にするといつのですか!?あなたは十分強い、十分財力もある、そしてあなたには愛すべき人々も!何一つ生きるのに不自由がないあなたが何故!??」

「後の世に伝えるための伝説。これが今のオレにはねえんだよ」

それに、この世に散り散りになった妖刀を集結させる。
その使命もある。

だが、オレは・・・こんなオレでも・・・！！

「こんなオレを・・・許してくれ。徐々にお前から離れていくのは分かってる。だが、こんなオレでも「愛」という言葉の意味くらいわかる！そしていくら離れて行っても、愛は決して揺るがない。決して！」

オレは千秋を抱きしめた。

そして、それと同時に彼女の瞳から零れゆく雫が絶えた。

「駿・・・大好きです・・・。ですから・・・今日はこのまま・・・」

「することは、風呂でいいのか？」

「いえ、私の部屋で・・・」

そして千秋とすることを始めてある程度経った時だった。

不意に声が聞こえた。

「もう帰ってきていたとはな、椎名千秋!!」

・・・誰？

褐色の肌の、明らかに日本人ではない少女が立ってた。
灼熱の如き赤髪の中から覗く金の瞳が千秋を捉える。

「あんたを殺すためにおれがどんだけ命賭けてっか・・・あんたは
おれの獲物だ!!」

何こいつ・・・。

「覗くなよ、変態」

「別に女の裸には興味ねえよ。っーかおれ自身女だし」

「オレ男だぞ？」

「・・・うつせえ!」

おや、逆ギレですか。

最近の若い人は・・・全く。

「駿、逃げてください!」

「バカ、オレは誰のための騎士だ？」

オレの配下には騎士がいる。

だが、その上に立つ者もまた騎士なんだ。

「あの人は四本の鎖チェーンを駆使して戦う殺人鬼。私が学生時代に訪れた
国で出会ったストリートチルドレンの少女です」

「ああ、殺人鬼さ。そしておれは親にも捨てられたさ。だからなんだ。おれの生きがいはてめえをぶっ殺すことにあんだ！」

彼女は腕と足に巻きつけた鎖を地面に流す。

「おれは日本人が大嫌いだ。おれの親がその日本人なんだからなあいつは殺してやったよ……おれがな！」

別に聞いてませんけど？

ひとりで勝手に騒ぐのは自由ですけど、こちらには迷惑をかけないでほしいですね。

「てめえも日本人か。だったらこいつごとぶっ殺す！」

喧嘩上等、すぐに蹴散らして……な、なに！？

殺気が……増している……。

千秋も気を失っちゃった。

オレが何とかするしか……。え？

体が……思い通りに動かない……。

「てめえは自ら墓穴を掘ったのさ。生き物が弱くなる三つの行動。食事中、睡眠中、そして交尾中だ」

まさかこいつ、そこまで計算に入れて……！？

「お前……そこまで計算して……」

「いや、ここに来たらたまたまお前と椎名がやってただけだ」
偶然かよ。

くっ、千秋の身体が気持ち良すぎて体が言うことをきかない……。身体能力が下がるのか……。

まるで悪魔と契約する前の様な体の感覚になっている……。悪魔の力も自らが完全にその力に集中できるような状況じゃないと発揮できないのか……。

や、やられる……。このオレが……。刀を手にすることすらできずに……。

オレは……。こんなに非力だったのか？
力を持っていたはずじゃなかったのか？
オレは……。千秋を守ると誓ったんじゃないのか？

無力なオレは力を取り戻そうと必死に集中した。
だが、間に合わない。

「死ね！」
既に鎖はオレの方に向かって飛んできている。

もうダメか。
そう思った瞬間だった。

「魔槍・ゲイボルグ！！」
オレと奴の間に一筋の閃光が通り抜ける。
「くっ、誰だてめえ！？」

リア……。助かった……。

「我が主をお守りする……。それが我が使命。ダークヴァルキュリアだ！」

「天使様か！おれは天使すら敵に回すほど堕ちたんだな！ハッ、気分がいいぜ！おれは悪魔に魅入られているんだ！」

悪魔を理解してすらいない癖に……。

なお、天使も悪魔もそんなに変わらないものである。

「この槍ごとめえを冥府に送ってやるよ！！」

床に刺さったゲイボルグをチェーンで巻き取り、それをリアに投げつける。

速い……あの速度は……人間じゃ出せない……。

「ゲイボルグ・チェーン！！」

リアなら防御で対処できるはず……。

「う……あ……」

……え……。

リア？

リア！？

何刺さってんだよ！？

<主、ゲイボルグは魔槍ゆえに、魔力で防ぐことなどできない。わらわはここまで。主よ、わらわはお主に会えてよかったと思う……。もし、これから別れが辛い時があれば……今からわらわが送る最後の贈り物に従え……>

リアはオレに心を通して話しかけてきた。

ゲイボルグ。

第9章第7話 世界には貧しい人だっている。故に募金は重要だ

オレの中には現在三つの魂が覚醒している。

第一に、オレの魂。

第二に、リリイの魂。

そして第三に……。

「我は妖剣の大賢者。貴様にはそれだけで十分だ」

そう、第三の魂はルインたちの創造主、妖剣の大賢者様だ。

「妖刀を振るうのは久し振りだ。貴様を地の果てに叩き落としてやるわ！」

現在、オレと彼の魂はリンクしている。

オレの意識を保ったまま彼に身を委ねることができる。

彼がどうして世に妖刀を散りばめたのかは謎だが、彼もまた剣士であつたことは間違いない。

「主人格、貴様の奥義を貸してもらおう！三代目一槍奥義・炉火純青！」

槍が燃え盛り、そしてそれを構える。炉火純青は技としての奥義ではない。強化型の奥義だ。その矛先に炎を宿す。

「急に雰囲気が変わったと思ったら……その槍はおれには通用しねえ！おれの鎖の餌食となれ！」

鎖の先端には何か凶器になる棘みたいなものが付いている。それが赤黒く染まっていることから、こいつは数多くの人間の命を奪い去ってきたと見ることができる。

突如飛び交ってきた鎖にゲイボルグが絡めとられる。

賢者はそれを表情を全く変えずに見ている。

「その程度か？」

賢者の眼（オレの目）が一瞬赤く光る。

次の瞬間、ゲイボルグは自由の身に、鎖は八つ裂きにされていた。あんな芸当はオレには・・・できねえ・・・。

槍をまるで剣のような速さで振ることなんて・・・不可能だ。

「この体、気にいった。元の体よりも使い勝手がいい」

そりゃいろいろ入ってるからな。

そん所そこらの人間とは違う。

「な、何故おれの鎖が!？」

「命乞いをするなら今のうちだ。さあ、どうするか。生憎だが我はあいつほど生易しくはない。この機会を逃すのであれば、女だろつが子供だろつが殺す」

ゲイボルグが獲物を捕らえた蛇の目のような煌めきを見せ、命を奪う体制を整える。

「な、なんて野郎だ・・・強さが・・・裁きの龍並に壊れてる!？」

よく裁きの龍なんて知ってるな。

あれは本当におかしいね。
あの召喚条件である効果。
本当に壊れてるわ。

「・・・分かった、降参するよ。おれもまだ死にたくねえし」

「そうか・・・つと、で、お前は何で千秋を襲ったんだ？」

「そうか・・・のあとに魂が入れ替わったことには気づいただろうけど、一応言っておく。」

「おれはいつも供を連れて歩いてたこいつを見るのが嫌だった。それで、おれに情けをかけた。それだけだ。おれの逆恨みって奴だよ」

逆恨みはよくあることだ。

オレも被害にあつたことはあるし。
本当に逆恨みって奴は頭に来る。」

「まあいいか。お前、なかなか強いな。どうだ、オレのところで働かないか？やつてることは、さっきみたいなことだ。世界中にはどの国にも上に立つ者は狙われる。その状況によつてそいつらを殺す・・・あまりよくはないことだけど・・・それでもオレはこの仕事をやってる」

「・・・おれに仕事をくれるのか？」

「それ以外に何を言ってる？」

少女は涙を零した。

「おれの国なんて・・・今までおれみたいな人間に見向きもしなかつたんだ・・・。その上、仕事すら与えてくれない・・・。おれは残飯を漁る毎日だったんだ・・・。おれに仕事をくれるなんて・・・ホントにありがとう・・・」

改めて、地球の現状を思い知つたオレであつた。

地球上からこんな悲しい思いをする子供が消えればいい。
全ての子供が必要最低限の生活が必須だ……。

と言うわけで、オレはユニセフに募金することを決めた。
人の命を奪って人の命を救うのもなんだけどな。

「じゃあ、改めて自己紹介をしようか。お前はオレの社員だからな。オレは片瀬駿。暗殺業者の社長を任されている。死んだはずの元社長が生きていたが、あいつはあてにならないというわけで今も続いている。武器は日本刀・片手剣・両手剣・槍・偃月刀・ハルバートなど、基本的に近中距離の武器なら使うことはできる。使えないのはナックルとか、遠距離武器だな」

生憎、銃は上手く使えないんで。

なお、亮平はハンドガン×2、骸はグレネードランチャーを愛用している。

はやて姉は魔砲と言う未知の銃火器を使用します。

本人曰く、禁術の一種らしい。

「おれは……名前を覚えてねえんだ。物心ついた時には既に親はいねえし。だから、あんたがつけてくれよ、おれの名前」

「つつてもな……。千秋、なんか無いか？」

「私はこの子の国の名前はさっぱりなので……」

「……仕方無い、オレのネトゲの武器の名前を付けるか」

「適当過ぎませんか？」

いや、問題ない。

ネトゲって案外いい名前があるんだよな。

「フレア。太陽で起こる爆発の意だ。今のお前には太陽が必要なはずだ。まあ、ちょっとひねってるが」

「フレアか・・・気にいった」
よかったな。

それにしてもフレア・・・随分強かったな。

あのゲイボルグをあの速さで投げるとは・・・リアでも無理だ・・・。

「な、リア」

「そうだな、主。わらわでもあれは流石に無理がある」

リアはゲイボルグに宿った。

だから、これからもずっと、オレと共に生きてくれる。

「お前は最高の友だよ」

「わらわを現世に呼び出した責任、取ってもらつまで帰らないからな」

勿論さ。

第9章第8話 大賢者様の役に立たない回答を拝聴することになりました

本日は今まで無駄に謎が多いと見せかけて案外少なかった妖刀について全てを知っている大賢者様に教えていただこうと思います。

「妖刀ってなんですか？」

<お前の思っている通りだ>

ええ！？

「妖刀は世界に何本あるんですか？」

<数え切れないくらい>

ええ！？

「以前ルインが言っていた、妖刀強化パーツとは何ですか？」

<いかにもサイバーな感じの鎧が強化パーツ。刀の時はなんかトリガーっぽいのがついて、魔力を蓄えることができ、それを発射することができる。以前からそれをできる奴もいたけど、そいつのは威力が上がっている>

やっとなまともな答えが出たわ。

<ちなみにサイバーはSからじゃなくてCから始まるぞ？Cyberって書くからな？>

いや知ってるから。

しかもなんでそこ？

別にどうでもいいんですけど。

「それでは、どうやって強化パーツを作るんですか？」
＜安心しろ、時が満ちたとき我がそれを作り出す＞

オレには教えてくれないんですね……。

＜そう言えば、お前が作った妖槍、なかなかの出来だった。お前なら我を継ぐことができるだろう。お前はそうしないと思うが。何せ、使う材料に神話の武器と、人もしくはそれを超える者の魂が必要。さらに、完璧に仕立て上げるなら、通常形態時の武器も必要になるだろう＞

人の魂を使ってまで妖刀は欲しくはない。

万が一、オレが失いたくない人を失うことになった時は、その人を封じ込めるかもしれないが。

＜お前は現在何本の妖刀、もしくはそれと同等のものを所持している？＞

えっと、ルイン、ハヤブサ、オロチ、シロガネ、イザナギ、コクヨウ、タイガ（ルインがくれた）、ヴリトラで全部か。

「ルイン、ハヤブサ、オロチ、シロガネ、イザナギ、コクヨウ、タイガ、ヴリトラで全部だ」

＜なかなか多いじゃないか＞

無駄に努力したからな……。

最初の五本はあっさり手に入っただけ。

＜だが、ここにはお前が言った8本のほかに、二本の気配がある＞
ああ、侵入者の……誰だっけ？

記憶力はいいはずなんだけど……ああ、そうだ、鶴谷真琴だっけ

か？

「ああ、そのことに関して。この刀、あなたに託します」
え？

いきなり出てきてそれかよ？

怪我は治ったみたいだけど。

「私はあなたに敗北しました。敗北したら、次はない。私は既にあなたに殺されています。ですから、私のものは全てあなたのものです」

そんな考え方か。

確かにあの灼熱の中、体を狙ってはいなかったとはいえ、周りは鉄をも融かす炎だったからな。
オレが情けをかけていなかったら死んでたわな。

「私はこれから常にあなたの身を守り、そしてあなたが望むことを最大限叶えることができるよう精進します」

剣士の少女は刹那もいたけど全くタイプが違うな。

「それが、負けた者の宿命……」

「いや、無理しなくていいよ？」

人権とかも考えなきゃね？

「でも人権とか考えないと……」

「私の人権は既にありません。死んでいますから」
生きてるって！

生きてるから喋れるんだろ？

「既に死んでいます」

いや、頑固ですね。

表情ひとつ変えずにこれだよ。

「……十分護衛いるんだけど」

妖刀の騎士団や、テクノたちもいるし。

「なら私を好きに使ってください。肉奴隷でも何でも」

ちよ、おい!?

えええええ!?

なんでそうなる!?

「なんでそんなことになる!?!」

「私の剣の腕が不要ならば、体を捧げるしかないでしょう?」

「だから何故オレに使えようとする!?!」

「私はあなたのものだから」

もう勝手にしてくれ……。

「どうしてもオレに使われたいなら……」

剣の腕は相当だ。

今はどうか知らないが、正妻戦争時点の刹那じゃ勝てないだろうな。だが、こいつはオレのそばにいたいことを望んでいる……と思う。さつきから離れないし。

料理は……千秋の方が美味いだろうし、掃除は……魔法で何とできるし、……役職なくね?

「私はあなたのそばを離れません。あなたのものですから」

……しつこい……。

「オレの指示だ。自由に生きる」

「ならばそうさせてもらいます」

……あれ、何でそこに立ってるのかな?

「何やってんの?」

「あなたの守護です」

・・・やられた・・・。
こいつ自身オレのものだと断言していたからこいつがやることはオレがこいつを自由にすること・・・。
嬉しいことなんだろうが、人権を侵害してるようで気が引ける。
ルインたちみたいな純粋な忠誠心じゃないし・・・。

「お前がオレに倒される以前の望みはなんだった？」

「あなたを倒して、我が流派を裏の世から表の世に引き出すこと」

「それ以外に・・・」

またオレに襲いかかられたらたまったもんじゃない。

「・・・」

「なんでも、本当にお前がやりたかったこと、欲しかったものとかないのか？」

「・・・・・・・・・愛・・・・・・目一杯愛されたい」

ん、これは何やら深刻な事情そうだな。

なんか深刻な問題抱えた奴多いな・・・。

「私は山中市の隣の市、山里市に生まれた私は、生まれたときから奥義を修得させられました。母は物心ついた時には既に他界しており、父と口をきいたことはほとんどありません」
だろうと思った。

で、お前は兄妹もいないし、友もないし・・・ってことになっ
てんのか。

「安心しろ、オレが愛してやる。人間、愛があればどこまででも分

かり合えるはずさ」
そう言つて、オレは真琴を抱きしめた。

その瞬間、ガラスが割れる音がした。

「・・・千秋!？」

そこにいたらしい千秋は無言のまま去つて行った。

・・・誤解ですよ？

なんてありきたりな展開。

「おい、待てよ千秋!」

「・・・駿、もういいです。。。私にかけてくれた言葉は・・・全部嘘だったのですね」

いや、違うが。

「全部知ってます。あなたが私と離れている間につばささんと・・・その・・・エ、エッチなこと・・・したことも知っているんですからね!」

・・・否定できんわ・・・。

てか知つてんなら初めから言えよ・・・。

ちよつとした気の迷いだつたのに・・・。

「もういいです。梨瀬は私が引き取ります。婚約も解消させていた

だきます」

「ちよっと、待てよ!？」

千秋は涙を流しながら部屋に閉じこもった。

その夜、千秋のすすり泣く声が聞こえてくるたび、痛く心に刺さった。

そして、寝付けなかった。

第9章第9話 新たな守護神・闇熾天使エスナ、降臨

「あ、駿くんだ！」

オレは本社に戻ってきた。

非常に気まずかったので、逃げてきた。

一応護衛にリアをつけておいたが……。

そして、つばさが迎えてくれた。

……今一番会いたくねえのに……。

「あれ、どうしたの？」

「ああ、その……何でもねえ」

「何でもなくないよ！何でそんな悲しそうな顔するの？」

「だから何でもないって」

オレはつばさを押しつけて廊下を進んだ。

「千秋さんと喧嘩したんでしょ」

その声を耳が拾ったとき、無意識に足が止まった。

「私のせいでしょ、私が……私が千秋さんから駿くんをとっちや

おうと思っただから……」

「お前のせいじゃない。オレのせいだから」

このままだと未来が変わっちまうかも知れないな……。
約束を果たせなくなっちまう。

翠香が料理をできるように育てるという約束を。そもそも翠香すら存在しなくなってしまう。

「あ、つばさ、ちよつと良いか？」

オレはつばさの耳元である事を囁いた。

「・・・えっ!? 無理だよ!? わ、私が駿くんの・・・赤ちゃんなんて・・・えつと、今から子作りするの?」

「誰もそんなこと言ってねえよ!? 千秋とだよ! オレは未来に行つたことがあるんだよ。んで、この状態が続けばそこであったオレの娘が生まれなくなってしまうことになるんだよ!」

この状況の打開策を訪ねようとしたら、何勘違いしてんだよ。

「でも・・・どうするの?」

「・・・犯す?」

「犯罪だよ?」

分かってるよ・・・。

だからそんな顔しないでよ。

何その憐れむような目は?

「さっきのなしで」

これ以上言ったらやややこしいことになるわ。

それにあの目はキツイ。

精神的に辛くなってきた。

「それで、何でこうなってんですか?」

「え? 子作りするんでしょ?」

何時そうなった？

「だってさつきから獲物を狙うような目してるじゃん」
「オレそんな目してたのか！？」

「あ、千秋さんに電話してみる？」

「ん、ああ。そうしようか」

オレは電話をかけた。

「千秋、あの、ごめん。悪かった・・・だから」
<あなたを許しません>

「ちよ、おい、待てよ！！・・・切れたし・・・」
「やられた・・・」

「多分まだ心が落ち着いてないんだと思うよ？」

「そうだといいんだが・・・」

あの怒りようは酷かった。

オレは許してもらえるのだろうか。

「オレ、千秋を連れてもう一度未来に行ってみようと思う」

「未来なんてこわいよう・・・私行きたくない・・・」

「誰もお前をつれて行くなんて言ってるぞ？」

「なんかさつきから勝手な妄想に走りすぎだ。」

オレがいない間に何があったのやら。

「日本に戻るが、お前も来るか？」

「あ、お父さんたちに元気な姿を見せないとね」
日本はあまり被害を受けてなかったから両親ともども元気だと思っ
けどな。
ま、そうと決まれば日本に戻るとするか。

「・・・リアを置いてきちまった……。来るときは送ってもらえ
たけど、戻る時まで考えていなかった・・・」

「飛行機で戻る？」

「いや、ここで新たな召喚の儀式を行う」

もしよければリア以上の天使を召喚したい。

「大いなる翼を纏いし天界の王、我にその力を与え、契約を結ばん
！！」

リアは既にダークヴァルキュリアではない。

それ以前に、天使ですらない。

もう、あいつは妖槍。

彼女は天使の名誉を捨てる代わりに死を免れた。

てか、オレがそうした。

オレの欲望のためだけに。

あいつとは別れたくなかった。

あいつがいなければいろいろ不便だっただろうし。

何よりもあいつが死ぬところなんて見たくはなかった。
リアには本当に感謝している。

「ただ、オレには新たな契約を結ぶ。」

「そなたが、余を呼んだのか？」
「な、すげえ魔力……。」

「ああ、片瀬駿だ。召喚魔術を保持している」
「召喚魔力を持つ者でなければ余を呼ぶことは非常に困難であるからな。余はダーク・セラフィムの 에스ナ。セラフィムは熾天使のことを指す」

「正直今でも困難なんすけど……。」

「 에스ナの話によると、熾天使・セラフィムはオレが知っていた天使のレベルをはるかに超越するレベルの天使であるらしい。」

「天使系の召喚獣は、このようになっていたことが明らかになった。」

下位天使系十数種 < 天使エンジェル < 戦女神ヴァルキユリア < 大天使アークエンジェル < 権天使プリンシパティ < 能天使パワー < 力天使ヴァーチャー < 主天使ドミニオン < 座天使スローンズ < 智天使ケルビム < 熾天使セラフィム

「なお、ダーク化した種族は、元の種族よりワンランク高い種族と同」

等もしくはそれ以上の力を持つ。

まさか今まで最強だと思われてた大天使がこんなに低いランクだったとは。

本当に驚きだ。

そして、オレが呼んだエスナは最上級のセラフィムのダーク。

まさに最強を誇る。

魔力もリアとはケタ違いだ。

みているだけで全然違うからな。

「余の力を持つてすれば、この世の理から外れたことも行うことができるでしょう。望みは？」

「お前とオレで契約を結ぶ。リアは槍に・・・ゲイボルグに宿してしまつたからな」

そう言えば、ゲイボルグにさらに薙刀を宿した。

常に力を放出し続けるゲイボルグより、力を抑えることのできる普通の薙刀の方がリアも楽だろうと思つたからな。

「リアの契約者はそなたであつたか。余は彼女を昔から注目していた。リアは元々ダークヴァルキュリアでありながら、プリンシパティをも討つ戦乙女であつた。彼女が契約してからは一層強さを増していき、ヴァーチャーをも討ち取るほどの戦乙女となつた。彼女が妖槍になつたとは・・・そなた、何故そのようなことを？」

「それは・・・リアが、殺されそうになつたから」

その瞬間、エスナの目つきが変わつた。

「彼女が・・・か。相手はドミニオンクラスの天使か？」

「いや、ただの人間だよ。使っていた鎖が・・・何か変わった紋様

がついていたが……」

「紋様？まさか……そんなはずはない」

若干、エスナの言葉が気になったが、エスナはすぐさま話を変えた。

「リアの契約者ならば、余もそなたと契約を交わそう」

「ああ、ありがとう。それでは行くぞ。」

我が契約の名のもとに、熾天使・セラフイム、光と同時に闇の象徴を保持しその天の王よ、今、我に忠誠を誓え、その名はエスナ、我が名は駿」

なお、この契約の呪文は適当だ。

それっぽい契約の言葉を述べれば契約されるといふ何とも都合のいい世界だ。

つか、相手がそれを認識すればいいだけだから……所詮かたちだけだ。

「契約を承諾した。余は今よりそなたの剣となり、盾となる。その剣は聖剣エクスカリバーより鋭く、その盾は聖楯イジスよりも堅いものとなるぞ」

実際に剣や盾になるわけではないだろうが、それだけの力を得たということを教えたのだろうか。

ちなみにエクスカリバーは持つてるけどね。

ハヤブサと言う形で。

第9章第9話 新たな守護神・闇熾天使エスナ、降臨（後書き）

天使のランクは天使九階級にヴァルキュリアを突っ込んだだけです。

第9章第10話 紅蓮の空襲、バーニング・エアレイド

エスナの力はやはり絶大だった。

リアとは比較にならないほど強大だ。

瞬間移動はリアよりも速い。

光の速さよりもさらに高速で日本に着くことができる。

流石、最上級天使だ。

「ついでに俺達も送ってもらって悪いな」

ついでに亮平達も連れてきた。

そして光速。

尋常じゃない。

リアなら10秒はかかっていたところだ。

「そう言えば片瀬、ちょっと手合わせいいか？」

「ん、ああ。別にいいよ」

亮平もこつち来てからは特訓してたからな。

なんか他の組の奴らをひとりです蹴散らすとか言いながら。

武器は相変わらず銃。

だが、

「なんだその赤い銃は？」

「バーニング・エアレイド。オレの新たな銃。性能は秒間200発で撃つことができる」

「は？それハンドガンだろ？」

「ああ、ブローバツクだ」

不可能じゃね？

「そんなのどこで手に入れたんだよ」
「え？普通に本部で作ってもらった。オレさ、お前の搜索部隊だったわけよ。そんな時にもらったんだ」
本部の技術おそろしや・・・。
ま、手合わせしてみつか。

「ちよ、おい！この速さ弾丸じゃねえだろ！？」
「そりゃ、お前がMSっぽいのに乗ってる間にリアの魔力を借りて作ったからな！」
マジかよ！？
気付かなかった！

亮平の銃の性能も凄かったが、それを完璧に扱うことのできる亮平も凄い。

空中でダンテまがいのことしながら的確に狙ってきている。
200発の、それも凄まじい速度の弾丸を回避することは非常に困難。

なんとか逃げ切っているというところだ。
だが、守っているばかりじゃ戦いにはならない。
戦いには、攻めが必要だ。

弾丸を全て斬り裂いて進むのは不可能。
両断できてもあの速さじゃ100発が限界だ。
速戦即決を使う・・・か。

いや、あれでも無理だ。
あれは身体能力を1.5倍にして攻撃する。
若干人間の限界に近づけるが、それでも無理だ。

科学的には。

オレは手に持つ妖刀を鞘に戻し、二本の刀を抜く。斬り進まなくても、避けて行けばいい。普通なら弾丸の嵐を避けて走ることは不可能。走ることは、な。

地を進むより、空を進んだ方が速い。だから、

「干将・莫邪！！」

真琴から受け取った二本の妖刀。それを覚醒させる。

これは中国の剣。だから、比較的刀に近い用法で使用することができる。だが、オレはあえてそうしない。

「十八代目真二刀奥義・インフェルノウイング」

流石だ、オレを本気にさせるなんて。

奴は、強くなった。

荒れていた時代より、今の方がずっといい顔をしている。

二本の剣を横に振ると背から炎の翼が開き、紅い粉塵と炎の羽根を撒き散らしながら飛び立つ。

そのまま弾丸を全て飛び越え、亮平の元に。

仮にもオレに届いた弾丸は全て両断できる程度のものだった。

そして、脚で銃を弾き飛ばす。

「参った、降参だ。お前には勝てないよ」

いや、一歩間違つてたらあの弾丸がオレを貫いていたから。

「負けるそこだった・・・」

「いや、それはないから」

お互い、笑いあつて武器を仕舞つた。

「お前に会つた時より、俺、生きてる気がするよ」

「そう、良かったな」

亮平も実感していたようだ。

今のあいつは、生きる気力に満ち溢れている。

日本に戻ってきたところで、オレは千秋に会うことを少しためらつた。

今会うべきじゃないかもしれない。

そう思ったから。

「駿くん、どうしたの？」

つばさがオレの顔を覗く。

「いや、何でもないよ」

気合いを入れなおしていくか！

オレは部屋の扉を開けた。

中には誰もいなかった。

そして、床には一枚の紙が。

「バカ・・・何考えてんだ」

「どうしたの？」

つばさの呼びかけにも応じず、オレは走り出した。

「リア、千秋はどこに！？」

「わらわに任せるがよい！」

ゲイボルグに宿されても力は衰えない。

衰えないが、成長もしない。

だが、リアが天使だったころよりも魔力は増大している。
ゲイボルグと結合したからな。

「飛べ！リア！」

リアの大翼に見とれながら、オレはリアと共に空を飛んだ。瞬間移動じゃ、見れないものがある。そう教えてくれた。

「わらわの翼も気持ちが良いだろう？」

「ああ、最高だ！」

リアは千秋がいる場所は結界が張られていると言った。張られていてはリアやエスナは立ち入ることができない。勿論、エスナの魔法で侵入することも不可能。結界の中にある神体を破壊しなければ壊れない。オレが行くしかない。

だから、わざわざこんな行為に走ったのだ。

十分すぎる速さだけだな。

第9章最終話 悲劇のヒロイン、最後の舞台は名もなき崖の上

ここは・・・崖？

あそこにいるのは・・・千秋。

「千秋！！」

「・・・駿」

千秋がこちらを振り向いた。

・・・！？

以前のような美しさが感じられない・・・。

美しいと言えば美しいが。

何か・・・気力を失っているような顔をしている。

全てを失ったかのような目。

そこにはまるで光はない。

「私はあなたに捨てられました。あなたに捨てられたら、これから私には生きる意味がありません」

涙が一粒、地面に吸い込まれた。

「千秋・・・まさか！？」

「私の人生はここで終わりです。あなたは幸せになってください・・・」

オレに捨てられたと勘違いしやがって・・・。

「仕方がない」

オレはルインを抜いた。

ハヤブサたち以上に信頼できる妖刀。

それは彼女しかないと思っただからだ。

「お前が死ぬのならば、オレもここで自らの命を絶つ」
「構いません」

え？

おい、そこは止めるよ？

止めるべきだろう？

なあ、そうだろう？

自分で言っつてウザくなってきた・・・。

「あなたは自ら命を絶つような人ではありませんから」

千秋は崖の先に足を進めた。

目に、戸惑いは感じられない。

本気で死ぬ気だ。

未来が変わってしまう・・・既に変えてるけど。

「私に、ついてこないでください」

「・・・バカが」

「駿・・・さようなら」

千秋は意を決して空を舞った。

その軌跡に涙と言う悲しみを残して。

それを目にした瞬間、オレは走っていた。

あいつは、本当は死にたくはない。

だけど、オレが他の女と一緒にいるところを見るよりは死んだ方が
マシだと考えたのだろう。

オレは良い嫁を貰ったよ。
そしてオレは悪い男だ。

そう思いつつ、オレも崖から飛び降りた。
もちろん、助かる見込みを考えてのことだ。

「バカ！悲劇のヒロイン気取ってんじゃねえ！！」

「離してください！私は・・・」
だが、千秋の涙は止まらない。

オレは落下していく千秋を抱きしめると、妖槍リアを手に構えた。

「四代目一槍奥義・阿修羅道！！」

強くそれを倒したい、そう願うことで強さを増す。

それが、修羅の道。三代目は剣を得意としていたが、剣を失いその時に使った槍では力不足と悟った時、彼はこの技を編み出した。気だけではどうにもできない奥義。

「海を、割る！！」

その願望が、オレの気を最大限に引き出す。
そして、オレはリアを海底に投げつける。

実際、割ろうとしていたのは海ではない。
オレが割ろうとしたのは、

千秋が張った結界。

結界は魔力だけで構成されたものを全て断絶する。

その魔力が強かろうが弱かろうがな。

だから、リアも槍の形態ではなければここには入れない。

ゲイボルグになっても、結局は魔力で構成された魔槍だから、入れない。

これが割れれば、

オレ達は助かる。

「エスナアアア！！」

エスナがオレたちを受け止めた。
リアは自力で帰ってこれるしな。

なお、オレはマジで海を割った。
二十分ほどで海は元に戻った。

そして再び崖の上。

「何やってんだよ」

「私はもうあなたに……。捨てられて……。結局求められていたのは体だけでしたのに……。私は……。それでもあなたを憎めなかつた……」

「オレはお前が嫌いになつたわけじゃない。悪いのはオレの方だ。殴るならいくらでも殴ってくれ。殺してくれても構わない。それだけしてもお前の心の傷に比べたらオレの命なんて……」

「そんなことはないです。私はあなたの心の支えになれなかつた。私はあなたに抱かれることで愛してもらっていると錯覚していた」

「オレは本当にお前を愛している。オレの心が弱かつたんだ」
「私はあなたに私だけを見てもらえなかつた……。だから……。もう死なせてくれればよかつたのに」

「……。死にたくなかつたくせに……。帰るぞ。お前には帰る場所がある。梨瀬を置いて旅立たれちゃオレは困るんだよ」

それにまだ翠香、月読、琉那が生まれてないしな。

オレはあいつらにまた会いたい。

そして、ずっと千秋と一緒にいたい。

翠香との約束を果たしていない。

千秋とずっと生きていたい。

仮に不死になっても千秋と一緒に数年もの月日を越えて行ける。

「千秋、さあいくぞ。お前には見せたい場所があるんだ」

オレは手を差し伸べた。

「どこですか？」

「未来、と言えはいいか？」

千秋は驚いたような顔をした。

だが、すぐに落ち着きを取り戻した。

「オレが行方不明になっていた半年、そしてこの間の数か月は、別の時空にいた。半年間は未来。数か月は過去。そこで出会ったオレたちの娘をお前に会わせたい」

「わかりました。ですが」

ん？

「どうやって行くのですか？」

なんだ、そんなことか。

オレに任せておけ。

「オレは時を越える妖刀を所持している。だから問題ない」と思う。

「そうですね。未来の娘、梨瀬がどのような娘になっているか、興味もあります」

「死ぬかどうかは、それを見てからにしてくれ」

今度こそ賭けだ。

これで千秋が心を動かされないなら・・・見捨てるしかない。

あれを見て心を動かされない千秋など、千秋ではない。
つまり、オレが愛した人間ではないと言っことだ。

第9章最終話 悲劇のヒロイン、最後の舞台は名もなき崖の上（後書き）

どうやら水曜日（水曜日）に更新するのを忘れていたようです。
申し訳ありません。

第10章第1話 あんまり変わってない未来と重要な情報

「千秋、ここだ」

あれからどのくらい経ったのだろうか。

そして、未来はどのように変わっているのだろうか。

風景は変わっていないことから、大きな変化はないようだ。

「椎名学院に向かおう、そこなら翠香がいるはずだ」

「翠香・・・私が新しい娘ができたらつけようと思っていた名です・

・・・」

この言葉から、何か運命というものを感じた。

そして椎名学院

「パパ！迎えに来てくれたんだね！」

こ、この声は・・・。

「ああ、梨瀬の頼みとなれば何でもするさ」

この悪魔のような力を悪用しないことを祈ろうか。

未来の片瀬駿！！

「おい、オレ」

「おや、若き日のオレか。久し振りだね」

おいおい、一人称が変わってるぞ？

未来を変えたからか？

「そこにいるのは・・・千秋かな？」

「そうだ。オレが未来を変えたはずだったが、何故梨瀬は以前のようなファザコンなんだ？」

「ここ、マジ疑問。」

千秋と住んでりゃ、「パパ」なんて呼ばせないだろ？

「ああ、それか。そう簡単に未来は変わらんよ。梨瀬は一時期一緒に住んでたけどメイドとかに世話されるのを嫌がって。だからオレが世話してるってわけよ」

「はいはい、そうですか。」

これが運命。

「運命・・・面倒なもんだな」

オレがボソリと呟くと、未来のオレはなんか言いだした。

「あ、ちなみに運命は英語で結構種類あるぞ？」

「どうでもいいから。つか、聞いてないから。FateとDestinyと・・・他なんだ？」

答えた自分がバカらしい。

「Doom、Fortune・・・ってどこかな？」

マジどうでもいいわ・・・。

ちよっとした雑学だけどね。

「ああ、そうだ。翠香に会いたいんだが」

「翠香なら今日は首相と会談が入っていたはず」

「梨瀬は？」

「梨瀬は今は片瀬梨瀬。片瀬家の長女って設定になってる」

「じゃあ翠香は椎名家の長女ってことか・・・」

未来ってホント変わんねえな。

根本的のところは。

「ん？ああ、戸籍上は甥っ子。実はオレの息子」
は？

「あいつ、はやて姉の子なんだよ。オレが夜に襲われた時に・・・
これ以上は言わなくても分かるな？」

はい、状況は理解できましたよ、このクズ野郎。

オレだけだな・・・。

てかクリスマス企画のことが実現してる・・・。

作者の野郎、これを知ってて・・・。

「はやて姉はオレがどんなに凶悪な力を得てからも魔砲を駆使して
オレを撃墜してきたよ。はやて姉には勝てないよ、一生」

・・・悪魔を超えた女、片瀬はやて・・・おそろしや。

「オレだつてお前のような力があれば・・・って、やられたのは昔
の強大な力を持っていた時だったけど・・・」

「・・・お前、力を失ったのか？」

「ああ。妖刀もろとも全て消えた。力は封じ込められているだけだ
けど、妖刀は・・・」

なんか深刻そうだ。

「詳しく説明してくれ」

それからいろいろ説明を聞いたが、どうやら未来のオレは力を封印
されているらしい。

約10年前・・・現代から行けば7、8年後にオレが千秋の命と引
き換えに出した選択だった。

その時に妖刀も全て奪われたそうさ。
妖刀を奪った連中の居所も分からず、未来のオレはもはや諦めモードである。

「ああ、そうさ。封印される瞬間、リリイと大賢者が言っていたことがある」

リリイと大賢者のありがたいお言葉か。
期待できそうさ。

「まずはリリイから。日本海海底に沈んだ青銅の島を探せ・・・と青銅の島？

人工なのか？

「それと大賢者。妖刀は、お前の気で全ての力を引き出すことができよう・・・と言っていた」

大賢者・・・もうちょい詳しく聞かせてほしかった。
・・・あ、オレの大賢者に聞けばいいのか。

「大賢者様、ちょっと質問」

<今は眠い、話しかけるな>
睡眠中かよ。

第10章第2話 幼女は世界遺産と豪語するあのお方は犯罪者だとオレは思う

「リリーの情報が気になるな・・・青銅の島とか行ってみるか」
「つってもどこにあるんだろう。」

文献とか探すのも面倒だし・・・。

リリーもなんか寝てるし・・・。

マジ使えねえ。

「駿、あの・・・無理はなさらないで」

「常に無理しているオレに言っても無駄なような気もするけどな」

「私もついていきます。駿が無理をしないように」
常に無理してるって。

「ダメだ、危険かもしれない」

「私は駿の役に立てるなら・・・危険を冒してでも！」

千秋の言葉は嬉しいが、それよりも大切なことがある。

「オレの役に立つてくれるなら、危険な真似はしないでほしい。そんな真似をするのはオレだけで充分だ」

「・・・なら、私も安心が欲しいです。あなたが絶対に死なせない・

・あなたを守ってくれる人をつけて行ってください」

ひとりで大丈夫だけどな・・・。

まあ、多いに越したことはないが、あまり多すぎてもな。

数人ってとこか。

「候補は亮平と骸ってとこか」

この二人は非常に有力だ。

特に亮平は最近、異常なまでに進歩を遂げている。

先日戦ったときに使われた銃、バーニング・エアレイド。

あれ一発一発を的確に狙ってきた。

一点のブレもなしに。

人間や機械には確実に誤差がでる。

だからブレまで完璧に計算した位置で撃っているのだろう。
オレには不可能だ。

「そうでした。刹那さんが非常に素晴らしい技を披露していました」
ん？

興味があるな。

刹那も視野に入れておくか。

はやて姉は最近、「魔砲の強化に取り組むから話しかけないで」と
か言って部屋にこもったきりだし……。

暁は……なんか苦手だ……。

他には……中将……あれとは何もなかったことにしよう……。

まあいい。

搜索は現代でやろうか。

水の中の搜索は召喚獣に任せよう。

それと、錬磨も確か水の核と融合すれば……。

久々に奴の力でもみるか。

と、まあ戻ってきたわけだ。

「・・・あ、錬磨か？」

オレは珍しく錬磨に電話した。

「今日日本に戻って来てただけどさ、ちょっと手伝ってほしいことがあるんだ」

「え？何？親友の助けならば俺はどこへでも飛んでゆく！」
「なんだこの変態。」

オレを親友と、勘違いしないでもらえるかな？

「まあいいか。お前の魔術で、海底に沈んだ島を見つけてほしい」

「水・・・か。ならその前にA・デーモン^{アクトア}を召喚してもらえる？」

「余裕よ」

天下の召喚師、または現代の剣聖片瀬駿様に召喚できぬ魔物なし！
数少ない召喚師の中でも召喚をできる者は平気で数少ない。

普段やっているのは召喚ではなく、喚起である。

学院で最初に召喚する魔物も、実は召喚ではなく喚起で呼び出している。

喚起よりも召喚の方が聞き慣れているからだろう。

だから、全てひっくるめて召喚とみんなは呼んでいる。

召喚師でも、儀式用に準備しないと召喚は難しい。

現にエスナを呼び出すために、オレはいろいろ準備した。

だが、それはエスナが最上級天使・熾天使だったからであるため。
完全にオレより上位の者だからな。

昔のリア程度の天使なら今のオレなら準備なしに召喚することができる。

ヴァルキュリアはオレからしてみれば喚起なんだろうが。

そして今更だが剣聖関係ねえ・・・。

ホント今更だ・・・。

三十分後、錬磨が来た。

「やつほぐ、会いたかったよ、駿！」

「死ね気持ち悪い、オレはお前を利用するだけだ！」

「愛する者のためなら頑張っちゃうぜ！」

「女に言われたら嬉しいけど男に言われてもキモいだけだ！」

悪いがオレにはそんな特殊な趣味はない！

オレは貴様とは違うんだ！

「じゃあ儀式を行うぞ」

調べる限りあの程度の召喚獣なら召喚陣は不要。

オレが調べた書物によると、錬磨が扱う召喚獣は召喚者と融合することができるといづつかの属性を秘めた獣。

フレイムトルネーザインガイア アクア
F、T、S、G、A、D

この6種が基礎となり、さらに2種を混合させることで更なる召喚獣を生み出すことも可能。

召喚者だけではなく召喚獣同士とも融合が可能だ。

以前あいつが見せたソレイユはFとSの混合型。

この際だ、全て召喚してその全てを見せてもらおうか。

「うおおおおおおおおおおお、すげえ!!」
さて、A・デーモンとはどんな召喚獣なのか・・・。

「ちょ!?!」

「どうだ、可愛いだろ!」

悪魔・・・と言えば悪魔だ。

確かに悪魔だ。

どちらかという点小悪魔って感じだが・・・。

「この服の透け具合、あまり豊かではない胸、幼い顔!どれも一級品だ!」

悪魔だ・・・。

肌は薄い青色をしていて、青い翼をもっている。

目だけは炎のような深紅であり、それは悪魔を連想させる。

確かに悪魔だ。

だが・・・。

「召喚獣に欲情するんじゃないねえ!!」

女だったのだ……。

「死ね!!」

「ぶはっ!」

オレは錬磨に膝蹴りを入れた。

こいつ、こつちが目的だったな!?

「ロリ顔は最高だ!そして貧乳つてのが一番の鍵だ!」

「知るか!」

「いや、ロリで貧乳は最高のステータスだ!」

悪い、オレはそんな特殊な趣味はない。

「道を踏み外すなよ」

「いやあ、幼女はまさに世界遺産」

うわあ……気持ち悪い……。

「捕まらないようにな?」

「安心しな、オレは駿も愛してるぜ」

「愛さなくていいわ!!」

「俺はゲイじゃない、バイだ!」

「聞いてねえよ!?!それに大声で言うことじゃねえよ!?!」

呆れた。

このキモさに呆れた。

「召喚してやったんだからこの際しっかりと働いてもらいますよ、

錬磨くん?」

オレは鞭を取り出して錬磨の肩を打った。

「いって!痛いって!止める!」

「そのエロい目を止めたらやめてやるさ!」

そうして錬磨の過酷な奴隷生活が始まった。

「俺奴隷じゃねえよ……」

「ああ、そうだ。そう言えば先日これを開発したんだよ
錬磨がそう言っ指輪的なものを見せてきた。」

「これをはめている限りCFが解除されることはない」

「へ」

「反応薄っ!?!」

まあ、あるだけ便利だな。

「早く海の中探せよ」

既に日本海に来ていたオレたちでした。

「じゃ、今から骸とか呼ぶか」

オレはケータイをいじる。

「手伝ってよ」

「手伝う方法がない」

「でもせめて温かい食べ物とかお茶とか用意しておいてくれよ。オ

レ海の中入るんだぜ？」

「頑張ってくれ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・酷いや」

もうなんとも言ってくれ。

暫く経った。

「錬磨く、まだく？」

オレが呼びかけると錬磨が凄く速さで海から飛び出してきた。

「見つかんねえよ！」

「ちっ、使えねえ」

「じゃあ手伝えよ!？」

「なんで飼主がペットの手伝いしなきゃいけないの？」

「俺ペットかよ・・・」

錬磨は勝手に悲しんでいるようである。

ま、オレはその程度の認識しかなかったけど。

「こんな時くらい励ましてやれよ」

「お、骸。やつと来たか」

「まあな、エスナ寄こしてくれば瞬時に来れたのによ」

エスナは熾天使ということでも無駄にプライドが高いようだ。

だからオレ以外の奴のためだけに絶対働かない。

直接的にオレが関わってないと働いてくれない。

「先を越されたようだな」

オレが二人目を選んだ助っ人は、

「神宮亮平、参上」

肩にバーニング・エアレイドを乗せてカッコつけながら来た。

見事にナルシストっぽいけど亮平はカッコいいから特に感じない。

後二人・・・か。

錬磨はだいたい搜索のためだけに使ってるし。

ま、戦力には入ってない。

「やっと仕事が入ったと思ったらこんな寒いところか」

まあ、日本海は太平洋に比べて寒いしな。

しかたないことだ。

「おれの国は赤道付近にあったからこんな寒さは初めてだ」

「まっつたぜ、フレア」

第三のメンバーはフレア。

炎を連想させるイメージを持つ彼女の实力はオレが身をもって知っている。

リアを倒す程の者だからな。

「ようやく最後の戦士が到着したようだな」

綺麗な刀を腰に下げ、深緑の長髪を風に靡なびかせて颯爽さつそうと現れた最後の戦士。

「待たせた」

「遅いぞ、刹那」

剣の腕は一流。千秋曰く、さらに磨きがかかっているらしい。

テクノと刹那で迷ったが、千秋の言っていた素晴らしい技とやらが気になった。

<!?あの刀・・・>

大賢者がふとこぼした言葉。

代替予想はついた。

「それ、妖刀だな？」

「そう。名はキリュウ。漢字で書くと騎龍。宇宙を司る刀である」

こいつもついに妖刀を手にしたか・・・。

なんか面倒なことになりそうだな・・・。

「駿！見つけたぜ！！」

「おせえよ」

搜索を開始してから軽く2週間後のことだった。

「あのさあ、お前ら俺が働いてる2週間何やってた？」

「ナンパ」と骸。

「ゲーム」とオレ。

「不良狩り」と亮平。

「剣の修行」と刹那。

「仮眠」とフレア。

「おい、まともなのは刹那さんの剣の修行だけだろ！？」

まあ、確かにオレはゲームだしな。

他のみんなもみんなアウトだし。

フレアなんて2週間ずっと寝てたし、もはや仮眠じゃない。

「最近面白いゲームなくてさ」

「この地域にかわいい子いっぱいいたぜ？」

「この地区の不良は全滅させた」

「新しい技編み出したぞ！」

「・・・よく寝た」

みんなの感想はそれぞれだった。

「ふざけんなああああああああああ、俺がどんな気持ちで深い海の中彷徨ってたか分からねえのか!？」

「え、分かるわけないじゃん。読心術とか使えないし」

その言葉により錬磨は暴走を開始した。

「FとAとの融合!」

うわ、なんか始まった。

「スチームフォーム」

え、実体ないじゃん。

「気体状態のオレを倒すことはできない。駿、お前の剣は通用しねえんだよ!痛みや悲しみを共有し合おうぜ?それが愛ってものじゃないのかな?」

「何お前、どこのユベルですか?」

「つかユベルって進化形態滅茶苦茶名前長いよな」

「第二形態がユベル - Das Abscheulich Ritt
er、最終形態がユベル - Das Extremier Traur
ig Drachen」

「よく覚えてられるな」

「無視するなあああああああああああああああああ!!!」
あ、錬磨がキレてる。

まあ、いいか。

「今のオレなら以前の太陽も倒せる!」

オレには究極の奥義がある!

「行くぞ、シロガネ!」

「貫くは白銀の刃、その輝きに目を眩ませ、銀は鮮血に塗れる

クラウ・ソラス!!!」

え、何その詠唱？

以前はそんなことしなかったよね？

まあいいか。

オレは手にクラウ・ソラスを握り、錬磨を見る。

「錬磨、お前の死は無駄にはしない！」

「ちよ、まで！？」

「十代目真一 刀奥義・アブソリュートゼロ！」

錬磨は氷漬けになりました。

気体であるうが凍ってしまえば無駄。

温度が下がるにつれて気体 液体 固体になるからな。

「これにて一件落着」

「おい、錬磨なしでどうやって目的地に行くんだ？」

あ……。

その時だった。

氷の中から煙が吹き出し、氷が溶けた。

錬磨が姿を現したが、いつも通りの姿だった。

「Fを犠牲にして何とか脱出できた……」

「よかった、生きてて」

オレがボソツと零した言葉に錬磨は食らいつく。

「俺を心配してたのか？」

そう言いながら錬磨はオレに抱きついてきた。

「キモい、離れる！つか、お前は利用するためだけだから！」

まあ、そうして青銅の島は見つかった。

第10章第3話 アブソリュートゼロ、反逆の錬磨……ってどこのアニメです

最近ネタが尽きています。

第10章第4話 やはり不遇な扱いの錬磨であった。誰も気にしないけど

「この下にあつたはず・・・あ、見えてきた」

錬磨の魔術で結構普通に海底にやってきた。

なお、原理は分からない。

興味もない。

錬磨に聞いたたら面倒なことになりそうだったので、興味がわかなかつた。

「っと、ここか・・・」

「なんかすげー技術があるな」

まあ、自動ドア。

しかもおよそ五千年は海底に沈んでいたであろうと思われるところで、まったく錆ついていない上に、まだ使える。

多分現代の自動ドアより性能がいい。

「古代の文明つてすげーな」

< 当り前だろう。人間が頂点に立つ時代は2度訪れているからな >
大賢者さん、あなたいつの人間ですか？

< 我は人間の誕生の時と絶滅の時を目にしてきた。ルインの魔力を
使つて >

「どつでもいいけどな」

さあ、入ろうか。

暑いな・・・海底なのに・・・。

「暑い・・・」

骸もか・・・。

上着脱いだしな、それが妥当だな。

オレもコートを脱ぐか。

。海底だしもう秋だし日本海だし・・・って理由できてきたけど・・・

「ふう」

他のみんなも上着を脱いだようだ・・・なあああああああああああああ！！！！！！

「その恰好はなんだ！！」

「ん？ワイシャツだが、問題あったか？」

「いや刹那さん、その・・・あの・・・なんといいですか・・・汗のおかげで透けてますよ？」

「・・・！？バ、バカ野郎！見るな！」

じゃあそんな恰好するなよ・・・。

「良いもの見せてもらった、眼福眼福」

骸お！！

てめえ、人様の妹（一応）になにそんな目を向けてんだ！？

「見るなっっているだろ！！」

骸は刹那に鞘で強打された。

非常に痛がっていたが自業自得だと思う。

「ワイシャツは大人びた少女をより引き立てる能力を持つ」
錬磨がなんか語ってるけど・・・シカトするのが賢明だ。

「つたく、暑い暑い」

「この施設は快適な温度にさせていただいています」

「あ？どうした、ルイン」

「この看板に書かれていることを読んだだけです」
えつと、どれどれ。

・・・何これ？

読めねえ・・・。

何語？

英語でもないし、アラビア語でもないし、中国語でもハングルでもない。

勿論、日本語でもない。

「これ何語？」

「超古生代インストリアルフェクトマシアルサティラフィスブルテ
リア語です」

「どこの言語だよ!？」

「んなことどうでもいいから先に進もうぜ」

「てめえは黙ってる!」

「・・・」

やはり不遇な扱いの錬磨であった。

こんな感じでインストレ・・・何とか語について無駄に10分話し
合った。

更に奥に進むと、何やら立派な部屋に出た。

その瞬間、警報が鳴った。

『警告！警告！謁見の間に侵入者、直ちに始末せよ！』

・・・え？

<私に任せる>

リリーの声が聞こえた。

「ちよつと、まで、何考えてんだ！？うわああああああああ
意識が飛んだ。

結構普通に飛んだ。

てか意識を奪われた・・・リリーに。

<亮平視点>

片瀬が倒れた。

結構普通に倒れた。

そしてすぐに起き上がった。

「片瀬、どうした？」

「気にするでない」

え、逝ったか！？

口調がおかしくなってるぞ！？

「おい、てめえ何もんだ？片瀬じゃねえだろ！？」

「おいおい、委員長さんよ。駿が駿じゃない訳ないだろう！？」

「いや、こいつは片瀬じゃない。さっきまでは片瀬だった。だが、奴の気配が感じられない。まるで別人だ」

絶対違う。

片瀬がこちらを振り向く。

「なっ！？」

「はぁ！？」

「・・・やはり」

「・・・ふう」

片瀬の眼は燃えるような深紅の色に染まっていた。

「刹那と骸は驚いているようだが・・・それよりいいのか？護衛口ボがこちらに来たが」

・・・こいつらの始末が先か。

「今のお前は誰だかしらねえが、片瀬ではないことは確かだ。こいつらを片付けたら話を聞かせてもらおうか！」

銃を構える。

問題ない、10秒で片が付く。

そう思った瞬間

「なっ!?!」

「我、汝らに次ぐ。最終王女リリーの帰還だ! 貴様ら退け!」

『イエス、マイロード』

うわ、ギアスマがいのセリフはいて去ったよ!?

何しに来たの!?

「すまなかった。駿にここに来るように仕向けたのは私だ。この王女、リリーだ。深紅の瞳は敵全てに畏怖の念を覚えさせるほどの將軍でもあった。王女自ら戦に出向くとはと何度父上に叱られた事やら……」

「で、何故貴様が片瀬に宿っている?」

「運命という名の必然か……彼は持っているからな……私が一生かけて作り上げたものを……既に」

「どういう意味だ……」

深紅に染まっていた瞳はやがて太陽のような輝きを失い、別の輝きに戻った。

「……なあ、亮平……どういう意味だ?」

「俺にも分からねえよ……」

面白い。

片瀬にはもっと興味が出てきた。

番外編：バレンタイン企画。チョコレートより甘い甘い私を・・・いかかですか

遅れた事情は後書きで。

番外編：バレンタイン企画。チョコレイトより甘い甘い私を……いかかですか

2月14日。

これは男たちが女性からのチョコレイトを必死に待つ日だ。

今年は逆チョコとか騒がれているが、気にしない。

一条財閥御曹司・一条錬磨もその一人である。

彼は毎年、その非常に整った顔立ちで無駄にチョコレイトを集めて轟騎たちに見せびらかす。

そして毎年轟騎たちに殴られる。

だが、錬磨はMだから問題ない。

駿ははやてから毎年貰っていたので特に関係ない。

今回はそんな奴らはほつといて、駿のバレンタインデーの話を楽しもう。

「2月14日……か」

これはオレにとって非常に辛い日である。

オレはチョコレイトが嫌いなのだ。

だいたい原材料の力カオって確かスパイスの一種だろう？
んなことどうでもいいか。

そして確実に千秋からもらうことは確定している。

「はやて姉から確実にもらつ上にさらに加算されるとは……しかもはやて姉は食わないと怒るし」
マジでチヨコレートはダメなんだ。

あの無駄にしつこい甘さ、そしてそこに隠れる苦さ。

纏わりつくように残り続けるあの味は、さっぱりした甘さが好きなオレには向かない。

オレは和菓子派だ。

洋食派だが、和菓子派だ。

羊羹とかのほうが好きだ。

千秋にこのことは話していない。

しかもはやて姉は知つててチヨコレートを寄こしてくる。

「今年も死んだな、こりゃ」

なお、ホワイトチヨコなら多少はマシだが、それでも無理。

生チヨコ？

何それ？

とにかくオレはチヨコが大嫌いなのである。

さあ、どうやって攻略しようか。

オレがチヨコ嫌いなのははやて姉を除いて轟騎しか知らないし。

「この日をどうやって乗り越えようか」

「駿、おはようございます」

考えているうちに廊下で千秋に出会った。

ちなみに現在地は片瀬家本家。

千秋はオレの家に泊まりに来ている。

家にはオレと千秋しかいない。

確実にやられる。

「今日時間がありますか？」

「……まあ、ある」

「よろしければ……その……デートしませんかっ!？」

少し恥ずかしそうに言う姿が初々しい。

「いいよ」

「はい！どこに行きましようか？」

千秋の笑顔が輝かしい。

その笑顔がもつと見たくてオレはある場所を選んだ。

「海に行こうか」

千秋は海が好きである。

オレと初めて出会った場所も海だった。

千秋が都会での暮らしに飽き、一度も見たことのない海を見に来た時にオレと出会った。

その海だ。

千秋の願いにより、海だけは昔のまま。全く変わっていない。

「少し寒いな」

オレはそっと千秋を抱き寄せる。

・・・オレコート着てないじゃん！

まったく、ここは雪が降る地域だったのに……。
今は降ってないけど。

「私は暖かいですわよ。駿がそばにいてくれるから
「思ってくれてるだけ嬉しいよ」

綺麗な海。

昔は何とも思わなかったのに。

今はこんなにも綺麗に見える。

バレンタインデーと言うことも忘れるようだ。

……バレンタイン？

「……すつかり忘れていた」

オレは青ざめた。

「どうしたのですか？ 顔色悪いですわよ？」

千秋がそつとオレの顔に手を当てる。

「な、なんでもない。大丈夫」

オレは精一杯笑った。

つもり。

どうせバレンタインにチョコを贈るなんて製菓会社の策略だ。
販売促進のための策略だ！

「海……綺麗なですね」

「……」

もう言葉も出ない。

「駿、具合が悪いなら帰りますけど……」

「いや、ただの気持ちの問題さ……そう、気持ちの……」

「やっぱりダメですわ！ちゃんと帰りましょう！」

千秋はオレを車に乗せた。

てか、運転してきたのオレなんだけど……。

「千秋運転できんの？」

「はい！大丈夫です！小さい頃から習って来ました！」

そして千秋はアクセルを踏む。

・・・ちよ、ちよ、ちよつと、待て!?

なんだこの運転は!?

お前・・・この車チューンすれば首都高で戦えるぞ!?
まさに天才少女。

スポーツも天才的、学問も天才的、そして運転も天才的。
まさに理想の少女。

千秋の素晴らしさを再び思い知ったオレであった。

その夜、オレはベッドで寝た。
普通に寝た。

何事もなく寝た。

千秋と一緒に。

翌日

「2月15日」

オレはベッドの中で呟いた。

「どうしたのですか？」

「いや、昨日はバレンタインなのにチヨコはくれないんだなあ、とそれを聞いて千秋は忘れてたかのように言う。

「す、すいません！すっかり忘れていました！」
よかった……。

「今から作りますね！」

千秋は即座に下着姿になると、筆筒を開いた。
そして凄く速さで服を纏っていく。

「ちよつと待て」

「は、はい？」

半裸状態の千秋を呼び止めるのは少し気が引けたが、一応かけた。

「あの……作らなくていいよ」

「ダメです！好きな人に贈るのに私は忘れたんですから！」

「実はオレチヨコレート嫌いなんだよ」

千秋は驚いたような顔をした。

「そんな人もいるのですね……」

「だからバレンタインのチヨコの代わりに……」

「ん……」

オレはチヨコの代わりに千秋の唇を頂いた。

強引に。

「オレはこっちの方が欲しかったよ」

千秋の顔は真っ赤だ。

千秋は俯き、

「・・・別にディープでもよかったのに」

と、残念そうに言った。

そう言えばディープはしたことあんまりないなあ。

「ディープにするか？」

「は、恥ずかしいので止めてください！そう言うことは朝からは・・・

・刺激が強すぎます」

千秋はそう言っただけでさっさと朝食を作りに行ってしまった。

それがオレと千秋のチョコレートよりも甘い一日が始まりだった。

番外編：バレンタイン企画。チョコレートより甘い甘い私を・・・いかかですか

本当は一昨日投稿する予定でしたが、見事に「RAGING BATTLE」との発売日がかぶってしまった、土日はでゆ エルして勝手にサテイスファクションしてました。
見事に勝手な言い訳ですね、すみません。

第10章第5話 開かずの間は人造人間の居住地。生贄は勿論、錬磨

「・・・この部屋はなんだろう」

鍵がかかっている。

今まで鍵がかかった部屋なんてなかったのに。

「これは鍵が必要だな!?このケースはどこかの宝箱から入手することが可能だな!」

RPGのやりすぎだ。

「さてと、このバカはスルーして、どうやって開けるべきか?」
オレが皆に尋ねると、

銃声が響いた。

「骸!?!」

「まってる、すぐに開けてやる」

うっわ、鍵の部分を乱射してる・・・。

「開いたぞ」

強引すぎないかな?

「それより・・・なんか不味い気配がするんだが」
刹那がそう呟いた刹那

「・・・刹那!危ない!」

見事に名前と一瞬と言う意味がかぶったが、言いたいことは分かるよな?

「え!?!」

オレはとっさに身近にあったものを投げた。

「ぐぎやああああああああ」

悲鳴が聞こえた。

まあ、気にしないことにしよう。

それよりなんだこの機械は!?

・・・人造人間か?

人造人間つつつても今まで見てきたサイボーグとかとはまるで違う。なんか・・・骨格だけを組み込んだ感じ。

恐らく話すことはできないだろう。

「駿・・・こいつ、大丈夫か?」

「え、こいつ?どれ?」

「俺を投げるな・・・そして、ぐふっ」

ああ、そうだったな。

刹那を助けるために錬磨を投げたんだった。

まあ、錬磨は不死身体質だから生きてるでしょうね。

くたばってもなお、水圧が押し加かかっていないことを考えるとよく分かります。

「戦闘態勢ですかね」

オレは刀を抜く。

「駿、お前にはできないことをしてやる。しかとその眼に焼きつけておけ」

刹那が走り出した。

「龍影!」

刹那の刀、キリュウから大きな龍が飛び出し、刹那と共に襲いかかる。

「龍影煉獄!」

刹那の得意技、抜刀術をフル活用した奥義・煉獄。

刀を鞘から抜く瞬間に気を込めることで炎を纏うという（刹那談）さらに、どうやって出したか分からないが、龍の幻影が炎と共に襲いかかる。

凄まじいコンビネーションだ。

・・・だが。

「まるでできていないだと!？」

「弾丸も命中はしているが・・・」

「弱点部位が見つからない」

刹那と共に、援護をしていた銃組のお二人もお手上げのようだ。

にしても、骸の銃の性能はイマイチ分らんが、亮平のバーニングエアレイドでも倒せないとなると、どれだけ強力な装甲を使っているのか。

「行動は人間に近い。なら、弱点は心臓か脳。動いているからにはその体を制御するものが必要だ。だいたいの生き物はその部分は非常にデリケートにできている。となると・・・頭を狙うか」
先から抜いていた刀を構える。

「おい、宿主。お前は気づいているか。あの娘は魔剣もしくは聖剣の使い方こそ知らないものの、妖刀に宿る魂の具現化ができている。お前にはできないことだ」

「技じゃなかったのか？」

「無論だ。奴を倒すには問題はないだろうが・・・ここを離れた時に教えてやろう」

「そうしてもらおうよ・・・いくぜ」

脳を破壊するには……。

「駿、後ろっ！」

何！？

次の瞬間だった。

オレがいた場所は大きくへこんでいた。

瞬間的に避けたからよかつたものの、当たっていたら死は免れなかつただろう。

……にしても……速い。

他のみんなも攻撃はしているが、全くきいている気配はない。

せめて動きさえ止めれば……。

「おれが動きを止める！そのうちに内部から破壊するんだ！」
フレアがそんなことを言い出した。

確かに、動きを止めるには一番やりやすいだろう。

チエーンが腕を絡めとれば動きは鈍くなる。

その隙にオレが奥義やらなんやら使って一撃で仕留めるのがいい……
はず。

「上手くいったぞ！」

暫く奮闘し、ようやく鎖で絡めとった。

上手く動きも取れないようだ。

「助かる！奥義・天地開闢！」

人造人間の体を大気ごと引き裂く。

斬り裂けているかどうかは謎だが、これを受けてダメージがないはずはない。

だが、この程度で倒せるような相手ではないことは承知している。

「まだまだ、二刀奥義・獅子奮迅！」

獅子を思わせるような勢いで襲いかかる。

激しい爆音とともに、奴の体の一部が吹き飛んだ。

あの形状からして恐らく頭だろう。

球状の体のパーツなんて頭以外に存在しないだろう。

「・・・やっただか？」

「うご・・・かないな」

フレアが鎖を緩める。

そして骸が確認するかのよう銃を撃ち込む。

「・・・死んだようだな。片瀬、やるじゃねえか」

「当然だよ」

ちよっと調子こいて刀を地面に突き刺したその瞬間。

悪夢再び。

金属がぶつかり合うような音がした。

「最後まで気を抜くな！バカ！」

え、頭のない状態で動いてますよ？

刹那さんに助けていただかなかつたら恐らくあの世行きでしたね。

「駿、先はお前の奥義を見せてもらった。だが、止めを刺すのは吾の奥義！」

女性とは思えないような力で人造人間を吹き飛ばす。

奴は方向感覚を失っているのだろうか。

フラフラとあるいており、動きも遅くなっている。

これなら・・・攻撃も楽に当てることが可能だ。

「奥義・・・」

倒れている人造人間に凄まじい速度で襲いかかる。

「邪龍旋風刃！」

結果から言おう。

刹那はオレにはできなかったことを成し遂げた。

奴は大破した、跡形もなく。

刹那の抜刀術を駆使した奥義の威力は純粹にただ気を使うオレの奥義より強い。

鞘の中に溜めていた気を抜刀時に解き放ち、一瞬の威力がその一撃に込められるからだ。

一方オレの剣技と奥義は、ものにもよるがほとんどは連続攻撃だ。それゆえ、一撃に込められる気量は劣る。

オレも刹那から習った方がいいかな・・・抜刀術。

第10章第6話 魔王の間にたどり着くのはどうやら無理なようです。

人造人間を撃破したオレ達は先に進む。

なんか錬磨が余裕で生きていたらしく、今じゃ呑気に歌を歌ってる。もちろん、アニソンだ。

オレはアニソンを全否定するわけではないが、錬磨が歌う奴は否定する。

明らかに女が歌わないとキモい歌を何故男が歌う!?

確かにカツコいい歌とかあるよ?

でも・・・おい・・・。

錬磨はまだ歌が上手いから聞こえはいいのかも知れないけどな・・・。

「どうした、駿。俺の華麗な歌声に感動しているのか?」

さ、シカトだな。

「っと、次の扉だな」

「なあ、駿。開かねえぞ?」

「おい、どーすんだ?おれじゃこの扉ぶち壊せねえぞ?」

「銃でもビクともしないし」

「やはり刀の錆に?」

さあ、困った。

どこかの変態にお力を見せていただきましょうか。

太陽クラスの核なら瞬時に吹き飛ばせるだろうな。

だが・・・オレのプライドが許さない。

「オレがやる。一刀奥義・真一文字!」

扉に縦に一本線が入った。

文字通り縦に線が入った。

え、何かって?

このまま線が入ったら一気に真つ二つを思い浮かぶだろうが、これは文字通り縦に線が入っただけだ。つまり、掠り傷を少しつけただけ、以上！

「……こりや無理だわ」

「居合ならなんとかできるかもしれない」

刹那がそんなことを呟いた。

確かに、前話で話した通りオレの奥義より刹那の奥義の方が一撃の重みはある。

だが、

「……なぜ斬れない!?」

「さて、どうするかね。見た感じ鍵も存在しないようだし」

<目の色……この王家の紅い瞳を認識させなければ開かない。こ
こは王族直系の者しか立ち入ることはできない。……だが、先に
私は力を使ってしまったために当分は表に姿を出すことはできない。
力の使いどころを誤ったな>
しっかりとしろよ。

どうやって開けようか。

この王家の者はリリイしか存在しないし。

おそらく未来のリリイはこの先に存在するものを欲して、オレに委ねたのだろう。

この先には何があるんだ？

<王家に伝わる究極の剣・カタストロフ。彼は意志を持ち、そして次元の扉を開き、その次元の狭間で万物を破滅に導くと伝わってい

る。王家の者は二十歳の誕生日にここに立ち入ることができ。だが、私が二十歳になる前にこの島は水没してしまった・・・見るのと無くして命を絶ったから>

「意志を持つ剣・・・か」

「ん？妖刀のことか？」

刹那が急に呟いたオレの言葉に反応する。

「・・・妖刀・・・そうか、妖刀か。この先には妖刀があるんだ」

<この先には行つてはならない。先の姫君の話を聞いただろう。あの剣は我が作った。唯一西洋剣に宿した妖刀。奴は今はカタストロフと名乗っているようだが、我が全身全霊を尽くして封じ込めた魔王・ベリアルなのだから。現在、ソロモン72柱の悪魔・ベリアルはその写し身。真の魔王は復活の時を待っているのだろう。妖刀を、封印のために作ったのは奴が最初で最後。その他の妖刀は全て、永遠の命を欲し、更に極限状態だった者だけだ。お前が天使を封じ込めたときと一緒に>

大賢者様の恐れ戦いた声がオレの心に響く。

「そう・・・なのか」

<無論、奴を封じ込めるには幾千の命が散つて行つた。そして、奴こそ最後の剣。我が異国の・・・さらに時代も違つところで命を落とした原因でもある>

大賢者様にそんな過去が・・・。

「私を共に連れて行つてくれなかったのは・・・そんな理由があったからなのですね」

ルインが姿を現し、悲しそうな目で呟く。

その視線は地に刺さっているが、オレに向けられた感覚があった。

「そんな剣があるなら、なおさら入らなきゃいけないだろう・・・その剣が後に災いをもたらすなら、今のうちに破壊すべきだ」

<それは違う。災いをもたらすのは・・・カタストロフではない。

カタストロフの力を開放する者が、全ての妖刀を揃えてここに訪れ

るはずだ。カラストロフの封印は我が作った全ての妖刀を生贄に捧げなければならぬ。・・・生贄と言う表現は少しおかしいかもしれないがな。その者が未来の貴様を破滅に導いたのだろう。だが、数年間何事もなかった。それは明らかにおかしい。そしてそこから導き出される答えはひとつ>

・・・何だ。

「その答えは？」

<既に世界は滅ぼされた。そして、再度構築された。人は記憶は完全に引き継いだまま、魔力が完全でない世界に。事実未来のお前から完全に我らが消滅し、お前は平凡な一般市民に戻っていただろう？ただ、魔力では無く生命力を要する貴様の姉の禁術は残っていたようだがな>

世界を再構築・・・そんなことができるのか？

・・・ありえない。

常識的にありえないだろう？

「マジそんなの常識的にありえないって」

「駿、既にお前は常識の通用しない世界に踏み込んでいるだろう？」
今まで黙っていた骸が口を開いた。

「常識が通用しないなら、それを常識にしてしまえばいい」
いや、無理だつて。

流石に世界の再構築は無理でしょう。

<恐らくカラストロフを発動させた者は・・・魔法を相当恨んでいたのだろうな。魔術師の家に生まれながら魔力の一片もなかった・・・そんな人間しかやらないだろうな>

「カラストロフを、先に確保すればいいんだな？」

<そうだ。そして、お前が力を発動しろ・・・発動したら必ず何かを破滅に導かなくてはならない。カラストロフを破滅に導き、そして再度再構築するのだ・・・無害な妖刀にな>

「・・・それには、扉を開けないとな」

数時間が経った。

皆が力を結束し、全ての力をぶつけてもこの扉は壊れない。
多分オリハルコン製だわ、これ。

「せめてあの龍の力が使えれば望みがあったかもしれないけどな・・・」

「龍ってお前を三国時代にぶっ飛ばした龍？」

「ああ、そうだよ」

「その力に頼ってちゃダメだろう。他を探そう」

「まあ、確かにな。他の部屋を回ろうか」

諦めて他の部屋を回ることにした。

第10章第6話 魔王の間にたどり着くのはどうやら無理なようです。

(後書き

最近凄まじくネタ切れです。

更新が二週間に1度ペースになるかもしれません。

第10章最終話 世界を滅ぼす妖刀を手にして轟騎のターン！

「こんなもんか」

一通り見て回ったが、あの部屋以外に特別なものは見当たらなかった。

「最後にあの部屋に戻るか？」

骸が声をかける。

「そうだな。それにここに滞在できるのもあと1日が限界だろうしな」

空気は沢山あるが、食料が持たない。

最後にもう一度だけ、あの妖刀の気配を覚えておきたかった。

「ついたな」

「手に入れることはやはり・・・無理か」

「片瀬、これを見てくれ」

亮平が持っていた1枚の紙。

「なんだこれ？」

「さあ、さっぱり」

「呪符だな・・・」

魔術に一番詳しい刹那が呟く。

「何に使うんだ？」

「吾が思うに恐らく何かを封印してあったんだろう。そのタイプの呪符だ」

何を封印してたんだよ。

「つまり・・・だ。呪符が消えたことにより、どこかの封印が消滅した、もしくは弱まった・・・そして、吾らが見てきた限り、封印が施されていた場所は、このみ」
なるほどな。

「いくら刀で斬っても傷一つ付けられなかったのは封印が施されていたからだっただけか」

線は一本入れたけど。

「気付くのが遅れた、もう少し早く気付いていれば」

「問題ない、ぶち壊すぞ」

銃組二人は弾丸全てを投入する覚悟で構えている。

そして剣組は奥義の構え。

「おれだけひとりじゃねえか」

まあ、しかたない。

鎖を使う奴はお前だけだし。

「三 四代三刀秘儀・七花八裂！！」

「奥義・九尾！！」

技名がある剣士お二人は扉を切り裂く。

オレの秘儀は初登場だな。

秘儀とは奥義を組み合わせた上級の技で、それぞれの個性を生かす、なかなか難度の高い技だ。

そして刹那の九尾。

これは居合の最初の一撃で九回斬りつけるといふ神業である。

なお、刹那は魔力を駆使しないとこれを使えないらしい。

「なあ、骸」

「なんだい、委員長」

「俺達技名なくて寂しくないか？」

亮平が呟く。

「まあ、銃使ってたて技つてのもな。普通の弾丸に電撃帯びせたり、龍とか虎の幻影とか見せれるんなら別なんだろうけどな」

「んなこと無理だろ、理論的に」

「そう、理論的にはな。だけどよ、それができるんだよ、俺には」
骸がニヤリと笑って銃を構える。

「見せてやるさ、デスレーザー！！」

「うっわ、何そのネーミングセンスのなさ」

「う、うるせえ！」

確かに骸はただの弾丸からレーザーに変換した。

だがしかし、後日これは骸の力ではなく、銃に元々標準装備されていたレーザーだったことが判明するが……。

「おれ、何すりゃあいいんだ？めっちゃ空気じゃねえか」

「つつてもな、もう壊しちゃったし」

そう、骸のなんとかレーザーで破壊された。

なかなかの威力でしたな。

後日談だが、エネルギーを充填しないと、3発が限度らしい。

さらに精密に言つと、実はレーザーではなく、光学電磁砲だということが発覚する。

ついでにそのエネルギー消費を抑えてレールガンを放つことも可能らしい。

「これが・・・カラストロフか」

「禍々しい気配はするな」

オレはその禍々しくも強大な力を持つと言われる剣を手にしてみた。

「持ち帰ろうか」

「おいおい、大丈夫かよ」

「おれはどうなってもしらねえぞ？」

「ま、いざとなったら駿が生贄になれよ？」

「・・・全責任はオレが持つ・・・以上、帰るぞ」

オレは全ての妖刀を手にする義務がある。

そして、オレ自身も全ての妖刀を手に入りたい。

だからここに来た。

それ以上でもそれ以下でもない。

そうしてオレたちはこの島を去った。

最後の最後まで錬磨をフルで利用して。

そして場所は変わり。
それ以前に視点も変わり。
更に時も戻り、駿たちが島を探している時まで。

「久々に俺のターンだぜ」

轟騎が立っていた。

<轟騎視点>

「えっと、で……千秋さん、なんでしたっけ？」

「轟騎、手伝ってください」

「……何を？」

端折りすぎだと思う。

「私は現在、私立高校を作ろうとしています。勿論、駿やあなたたちのためですわ……そして、私と駿の子供たちのために」

「そりゃありがたいことだ……で、何すんの？」

「教育委員会から徹底的に叩きのめさないと気が済まないのです。この国には教師とは言えない教師が沢山いますから。そのような人は……排除すべきかと思いついて……説得についてきてもらえるかしら……私の護衛として」
随分レベルの高いことするな。
確かにム力つく教師って言うか職権濫用してる奴らが多すぎるような気がするんだよな。

「ん〜、まあいつか。俺も長らく登場しなかったこの武器を試したいとこだったし」

「戦うとは限りませんよ」

「ま、でもいいよ。俺もその件には同感してるしな」

「決定ですね」

こうして俺の教育委員会との戦いは始まった。

駿たちが島を探している間に、俺は珍しく偉業を成し遂げようと・
・余計なこともあるだろうが・・・していた。

第11章第1話 海に向かう間にあった出来事

「・・・どうやら私の教育への進出は・・・認めないようですね」
無表情で、そして冷酷な顔で彼女は呟いた。

「無論だ、お前のような小娘に教育など任せてはならない、経験を
積み」

教育関連の人もきっぱりと言った。

「ま、どこかのお嬢ちゃんは10歳で教師やってるし」
そして俺は余計に口を突っ込む。

「私はあなたと違って高学歴です」

「俺は低学歴だけだねえ」

「そんなことは関係ない、生きてきた年数が違う!」
全く、関係ないことを。

「生きてきて、それで何があるのか?」

そして再び俺は余計な口を突っ込む。

「社会の過酷さを知れ」

「社会ねえ・・・」

「社会に出たら使えない人間なんてすぐに捨てられる」
確かに。

「でも俺たちって何度も何度も・・・死の直前を味わってきたけど・・・
な?」

「そう、私たちはあなたとは全く違う世界を生きています。だから、
あなた方と価値観も違う。さあ、考えなさい。毎日銃弾が飛んでく
る日々を。そのような日々を私は生き延びているのですよ」

まあ、確かに事実だわな。

駿がないときは基本的に他の人が守ってるし。

千秋さん本人もそれなりの力も持ってる。

滅多に人前で使おうとはしないが。

「それとは何の関係がある？」

・・・頭固えな、このジジイ。

「それではひとつ聞きます。あなたは・・・歳で全て決めつける人間ですか？私は違います。歳なんて関係ありません。この世は全て、実力で動いていることを・・・知らないのですか？」

確かに事業で成功している人間は年に関係はない。

某コンビニの社長だって40代で就任している。

それは彼に実力があつたからだ。

同じ年齢の人間でも実力がない者は切り捨てられるし、さらにそれより年下の者でも、実力さえあれば同じこともできるはず。

実力がない者はどれ程時間が経つても地位も何も変わらない。

「私、待つのは苦手ですの。早く答えていただけないでしょうか？」

「ちっ、小娘が・・・」

「・・・私を見下しましたわね。覚悟なさい、そして呪うなら自分を呪いなさい。轟騎！！」

「おうよー！」

俺の出番ですかね、ようやく。

俺は手に持っていたトンファーを構える。

「悪く思ふなよ。気絶で済ますよう努力はするから」

ま、マジでやったら死ぬけど。

「やっぱりそいつは護衛か！だが残念だったな、私もガードマンを雇っているのね」

そう言うと、奥から10人くらいのガードマンが現れた。

「俺と戦ってみるか？」

俺は問う。

何時になく真剣な眼差し（のつもり）で。

「こいつらは裏社会の人間なんでね、そうそうやられないさ」

「そうか・・・なら、試してみよう」

「その前にひとつ言わせてもらいますわ。彼は・・・手加減というものを知らないですよ」

千秋さんがそう言うと、俺はその言葉が引き金になったかのように駆け出し、ガードマンのひとりの懐に入る。

駿ほどの速さはないけど、かなり早いと思う。

「錬成衝撃！！」

俺が使用したこの技、実は非常にグロテスクだったりする。

トンファーで腹を殴打して、その肉体を鋼鉄に錬成、トンファーに装着する。

同時に、その被害者は鋼鉄になるために命を落とすのである。

ただ、これには非常に強力でデリケートな魔力が必要なため、魔力を使用する魔術師や魔法生物には使用できない。

できるけど、効果ない。

つまり、俺達のメンバーはみんな魔力を持つ武器を装備しているため、効かないということにもなる。

俺は錬成した肉体の一部をトンファーに組み込み、新たな武器を作り出した。

イリーガル・メタルブレイク

うん、まさに名の通り違法。

人体錬成をするという高度なテクニクが必要なため、普通の人間作成できないしな。

勿論、威力も破格だ。

ちなみに何の武器かと言うと、所謂パイルバンカーだ。

俺は次々とガードマンに鋼鉄の杭を打ち込んでいく。

彼らの断末魔が耳に響く。

ちなみに原理は本体に仕込まれた鉄を順次杭に錬成し、打ち込む瞬間に鉄を火薬に錬成し、その威力で肉体を貫く。

しかも俺はわざわざ心臓や脳を狙って打ち込むという鬼である。

さらに打ち込んで息の根を止めた後、更にその肉体を錬成し、鋼を補充するという何とも効率の良いリサイクルを行う。

それ以前に人を殺してもいいのかと思うけどな……。

残り一人になったガードマンに俺は耳元で囁く。

「今退けば、許してやる。俺も人は殺したくはないしな」

「こちらにも事情はある。ここで手を引くことはできない！」

……刀か。

こいつの武器は刀か。

ただ、リーチが長い武器は長いなりに欠点がある。

一番の大きな点は攻撃スピードがリーチが短い武器よりも遅いこと。俺の武器は腕に装着されているため、殴るスピードとさほど変わらない。

重量分は遅くはなるけど刀よりは早いはず。

……まあ、駿や刹那ちゃん相手では俺の方が遅いけど……何て

言ったって片方は悪魔との契約、片方は速度増幅魔法を使っているし。

俺は錬金術しか使えないし。
今じゃ錬磨が当初使ってた錬金術も俺は使えるし、錬磨は融合魔法に完全に移行してしまった。
まあ、いいか。

「俺の親友にも刀を使う奴がいる」

「だからどうした？」

「彼は数々の試練を乗り越え（本人談）、数々の敵を制してきた。俺はそいつに喧嘩では勝てるが、武器をもたれたら何もできない。そんな奴が刀を使っている。そして先日、ついに俺は刀を持ったそいつに一撃を与えた」

あ、駿は言っていないみたいだけど、あいつは剣や刀を持った時の身体能力は尋常じゃないほど上がる。

彼の師匠曰く、剣の道を歩む者は剣を手にしたときでなければ真の力を発揮することができない。

「・・・ま、まさか・・・その親友って・・・」

「俺の名は小野崎轟騎。そしてその親友の名は・・・・・・片瀬駿」
その瞬間、ガードマンが青ざめた。

「ま、まさか・・・あの国際殺人許可者が!？」

「その団体の一人、それが俺！そしてあいつに勝てない人間は・・・俺の敵じゃない！」

俺は不意打ちの如く、怯えているガードマンの右目を殴り、鉄杭を打ち込んだ。

眼球の中心を杭が貫き、彼は叫びにならない悲鳴をあげた。
もはや、その叫び声は人間の耳では聞き取れないほどの高い周波数と化している。

「生きていることを祈るよ、じゃあな」

床に倒れ、目から大量の血を流しているガードマンにそう言って千秋さんのところに戻った。

「で、どうするよ。死んでみる？」

「私はどちらでも構いません。ただ、認めないのであれば、この世から去ってもらうしか・・・」

「わ、私は・・・それでもプライド「轟騎！やりなさい！」

その瞬間、『ぐちゃあ』と言う不快な音とともに脳が飛び散った。

「う・・・」

千秋さんは見慣れていないようで、口を押さえて蹲った。

まあ、俺も慣れてないけど。

「大丈夫か？早くここから立ち去ろう」

「ええ、ありがとうございます」

千秋さんは俺の肩によりかかった。

・・・ああ、福与かな胸が俺の腕に・・・って、彼女は駿の嫁じゃねえか。

まあ、たまにはこんな報酬もいいかな？

第11章第2話 どうやら轟騎は英語・・・特に英会話が苦手なようです。

「ミッションコンプリート！」

「そうですね・・・ありがとうございます、報酬は「そのことなら気にしないでいい。本部から新しい武器が完成したらしい。それを報酬として受け取っておくよ。元々の資金は椎名グループから出してもらってるし」

つってもわざわざロンドンまで行かなきゃいけないしな・・・。

その時、俺のケータイにメールが来た。

骸から。

「ええと、何々？・・・ああ、骸とタッグを組んでいた奴か・・・そいつがこつちに持ってきてくれるのか。ラッキー」

と言っわけでした。

とまあ二日ほど俺は待った。

「・・・誰だ？」

俺はドアを開ける。

ドアの前には美しい女性が立っていた。

そして、明らかに中国語的な言語で話しかけてきた。

「ごめん、オレ中国語分からねえわ」

「・・・先日まで故郷にいたもので。新兵器をお持ちしました」
俺は武器を受け取る。

やっぱり武器はパイルバンカー。

俺が武器を見てみると、桜凜はまた中国語でいろいろ話し始めた。
普通に理解できない。

「中国語に戻ってるって」

「・・・長いこと日本を離れていたもので日本語が上手く話せない
ので・・・それに骸は中国語をが分かるので」
確かにカタコトの日本語だ。

桜凜の言い訳を聞くのも面倒なので日本語じゃなくて英語で話すこ
とにした。

しかも桜凜滅茶苦茶英語上手い。

まあ、日本人は英語が二番目に下手な人種と言われているくらいだ
しな。

ちなみに一番は北朝鮮らしい。

「To be suitable for your comba
t style, it is made」

なお、桜凜側は日本語は理解できるとのことなので俺は日本語で話
すことにした。

「そう、俺の戦闘スタイルに合うように設計されているのか」
英語はしゃべれないけど聞き取ることくらいはできる。

「This arms are stronger than
the past. Therefore, the produ
ction cost is enormous. I want
you to treat importantly. The
developer said」

・・・は、速すぎる・・・。

千秋さんがいればなあ。

ええと……。

「悪い、良く分らん。カタコトでいいから日本語で頼む」

「この武器は従来より強力だ。それ故に制作費が莫大。だから大切に扱ってほしい。開発者はそう言っていました。……日本語風に訳すところですよ」

「……そうか。分かった」

桜凜は尋常じゃなく英語は上手い。

だが、その上手さ故に俺には聞き取ることができない！
と言うことが発覚した。

「よかった、話の分かる人がいたようです」

新たな武器を手にした俺は再び千秋さんの交渉のお供をしていた。
どうやら今回は話の分かる連中らしい。

「いえいえ、教育の場があれていることは私も理解していますので。
教育を受けるべき存在がどのような教育を求めているのか、そして

それは適度であるかなど、あなたが作る学校から情報を入手させて
いただきたい。それさえ納得してくれるのであれば私はそれに賛成
します」

ホント話分かる奴だな、こいつ。

「私のプロジェクト。小中高一貫性の私立学校をつくるつもりです。
入学試験は小学生は入学時に九九を全て覚えてるのであれば可能
とし、中学校は小学校の時に習ったことを存分に生かして試験を受
けていただきます。どちらも、あまりに難度が高いのであれば緩和
するつもりです。高校は通常の試験を、山中市最高の高校の入学基
準値に+50点です。校則はあまりに教育に背かない限り、生徒自
身で決めるようにします」

「確かに、教師が決めたのであれば生徒から反論も出ますし。それ
に髪を染めてはいけないということを言っている教師もいるようで
すが、銀行員も髪を染めている時代ですしね」
全く、ずいぶん凄い時代になったものだ。

教師の言うことには矛盾点が山ほど見つかるし。

「頭の悪い教師は髪を染めてはいけない理由を校則で決められてい
るからと言つが、生徒たちは校則の理由を聞いているのですよね」
「そうなんですよ。私もそう思ってるのですがまだまだ若いもので、
全然あてにしないんですよ」

「分かります。前回の人も若輩者だという理由で断りましたからね」
まあ、その結果があれだ。

「しかもあの憎い先輩は行方不明になりましたね。全くどこに行っ
たんでしょうか。まあ、ここだけの話、それでいいんですけどね」
俺はその言葉を聞いた瞬間血の気がひいた。

ちよ、まずくね？

まあ、相手の方は千秋さんしか見ていないようだし。
問題はないか。

だが、千秋さんは笑みを絶やさずに、

「あ、そう言えば・・・あなたは知っていますか。国際的に殺人を認められている団体を」

「そんなものあるんですか？」

「知らなくて当然です。お偉いさんや裏社会の人間くらいしか知らないのですから」

「もしかしてその団体に殺されたのですか？」

「ばらすのか？」

「ええ、確かにそうです。そしてここだけの話、その団体のうち数人が私が新たな学校を作ろうとしている都市・山中市出身なんです」

「だ、大丈夫なんですか？」

「ええ、問題ありませんわ。そのひとりが私の護衛を務めているところにいる彼です」

「ばらしちゃったよこの人。」

「護衛もするんですね」

「そうですよ。何ならあなたにも紹介しましょうか？殺人を認められているとしても殺人が好きな人は一人もいませんし」

「・・・遠慮しておきます」

暫くして、話は終わった。

「ありがとうございました。学校ができたら来てくださいな」

「はい！ぜひ視察させてください！」

今回の相手は話の分かる奴だったな。

あそこから動かしてくれることを望もうか。

第11章第3話 校長再び！そして今明らかになる校長の謎

「さてと、今日は何の用？」

俺は千秋さんに呼び出されていた。

「駿が戻ってくる頃には学校の基盤はできているでしょうね」

「は？」

「そうでした、本日の依頼は駿の高校の校長に届けてほしいものがあります」

「校長……なんか嫌な予感が……」

俺の予感は的中した。

「お、轟騎じゃん。元気だったか？」

「こ、校長……やっぱりお前だったか……」

そう、我が出身中学校の校長！

本名不詳！

「だいたいのことは聞いている。さっさと例の物を出せ」

「ほらよ」

俺は千秋さんから受け取った箱を渡した。
そして校長は箱を開ける。

「な、何それ」

「あ？椎名が作るうとしてる学園都市のミニチュア
い、いつの間にか学園都市になってる……。
随分凄い出来だな。」

「ちなみにこの学校の校長やることになってるから」

「はいはい、そうですか」

「そつ言えばお前の名前つてなんだよ」

「校長だ！校が苗字（いんげん）で長が名前だ」

え、まさかの「校長」ですか。

「お前……。もはや校長になることを運命づけられた存在だな」

「そつだ！明治時代の頃から校長やってるさ！」

「てめえ、一体何歳なんだよ!？」

「もう数えるのも面倒だ……。軽く300歳は超えてるかな。魔術
で体を再編成してるから老化しないのさ」

すげえ高度な技術じゃねえのか、それ。

「禁術・不死鳥。その名の通り不死鳥の如く体の一部が死んでもす
ぐに再構築される。心臓が死んでも約1秒で元に戻るからもはや死
にはしない」

「……。禁術か……。知ってる限りでははやてさんの魔砲と、千秋
さんの洗脳だけだったけどな」

「氷室椿姫という奴も禁術・千手の使い手だ。戦場に赴いて人殺し

てるらしいからそろそろ完全体の1000本に到達するんじゃないかねえか？」

「いや、俺そいつしらねえから」
俺はそう呟いた。

「じゃ、校長として依頼を出そうかな、轟騎に」

「あ？」

「本格的な仕事だ。千秋が学園都市を創り、その理事長をすることに納得のいかない奴らが多いのは知っているよな？」

「ん、まあ・・・既に数人殺してるし」

「・・・最近はある一人の訴えによつて賛成派が増えてきているが、まだ反対派の奴らが多い。だが、今のままではこの国の教育は変わらない。人間は進化する、文明と共に。この300年、ずっとそれを見てきた」

あ・・・こいつ300歳だっけ。

「自分としてはどうしてもこのプロジェクトを成功させたい。だが、最近どうも変な噂が流れていてな」

変な噂？

なんだ？

「椎名千秋の暗殺」

「マジかよ!？」

「冗談だ。敵対組織の介入。テロリスト・・・ってところか。そういったらが反対派に手を貸したという噂が広まっている」

・・・教育者がテロリストと手を組んでいいのかよ・・・。

「そいつらを、殲滅しろと？」

「ああ、生憎今は駿もないからな。お前ひとりですらやってもらおうとになる」

「問題ないさ。何とかなる」

厄介な仕事が入っちまったな・・・。

と、まあ現在。

依頼を受けて一部の反対派の会議のガードマンとして乗り込んでいくわけだが。

「・・・今のところ、影響はないか」

部屋の中でどんな話が進められているかはわからない。だが、盗聴器を仕掛けてある。

そこから校長側に直接転送し、録音してもらっている。俺は盗聴器の回収まで待つ。

それまでにテロリストが来たら、抹殺。

それが今回の任務だ。

「・・・来たか」

明らかにテロリスト。

人の目を欺けているようではあるが、あれは明らかに銃を隠し持っている。

「警察でもない、スーツ姿の外人・・・か」

今は見逃しておこう。

あいつと反対派の会話も気になる。

それに、侵攻を始めるときは校長から指示が下る。

自らの判断で動いてもいいが、今はその時ではない。

暫くして、校長から連絡が来た。

『反対派が多数怪我をしたようだ。銃声が聞こえる』

中は完全防音だから外からじゃ聞こえないんだよな。

・・・行こう。

テロリストの殲滅に。

「大丈夫か、お前ら？」

中は、地獄としか表現方法がなかった。

死傷者は反対派の半数にも上り、テロリスト数名が銃を構えていた。

「貴様ら、人の命をなんだと思ってるんだ！」

このセリフはいてから思った。

お前が言うな。

・・・と。

第11章第4話 もう少し生きてみよっぜ、どんなに今が辛くてもな

「私たちを見て驚かないとは・・・あんた、ただものじゃないね」
テロリストの一人が俺に囁いた。

てか女かよ!?

しかも日本人!?

「・・・オレは貴様らを殺せと言われてる」
そう言つてパイルバンカーを構える。

「パイルバンカー・・・私たちの情報ではあの団体にはそんな武器を使う奴はいなかったはず・・・あんた、何者よ?」

「ま、勝手にすればいいさ。想像は任せる」

武器に魔力が宿っているせいか、いつも以上に俺から大きい力を感じる。

強力な武器は確かに強い。

ただ、それに見合う代償が必要な場合もある。

そんなこと、俺には関係ないけどな!

「パイルショット!」

実は衝撃が加わった時以外にもパイルを発射する方法が、このパイルバンカーにはある。

てか、普通に発射できる。

これにより遠距離での戦いも可能とした。

それでテロリストAの喉を貫いた。

おお、なかなか強力だな。

「・・・同士をよくも・・・」

「俺は、女子供容赦なく殺せと言われている。悪いな、お前の命、貫いっける!」

だが、テロリストの女もなかなかのみこなしでパイルを回避する。

下手な銃よりも速いはずだが……。

それにより、テロリストの女以外の奴らに命中していき、ことごとく女以外は死んでいった。

「……パイルが……あと一本しかねえ……」

「良いことを聞いた！死ね！」

機関銃だろうか、なかなか速い弾丸を連射してくる。

俺は地面を壁に錬成して難をしのいだ。

「普通に狙いはいい……結構いいところで訓練されてたみたいだな」

「ふふふふ……確かに。私は所詮……実験動物さ」

実験動物？

「強化人間プロジェクト。この間、この国に喧嘩売った本人がその実験台の一人。ま、誰かに殺されたけどな。戦車にひかれても死なないような男だったのにな、あんな奴倒せる奴がいたことに驚きだよ」

「駿が言っていたな……あそこのボスはプラチナよりも硬い肉体を持つ人間だったと」

「……お前はあいつを殺した人間を知っているのか？」

「……ああ」

駿はこんな化け物と戦っていたのか……。

「強化プロジェクトの研究者はみんな死んださ。私たちが、みいんな殺したからね！」

彼女は笑いながらそんな事を言う。

「私は実験動物にされたことを呪った。生まれた時から実験動物にされ、身体を薬漬けにされたさ、何度も痛い注射を我慢したさ！その結果、手に入れたものはこれだよ！人を殺すことしかできない力を手に入れたんだよ！」

……俺には理解できない。

何故、人間はこんなことをするのか。

人間は残酷で醜い存在だと思う。

俺は今まで平和に暮らしていた。

駿と一緒に過ごして、みんなでバスケットして、喧嘩して……。俺には理解できないことをするような人間が……。この世には多すぎる。

「私は自らの身体の強度を落とした代わりに、強力な腕力、脚力、知力、視力、聴力を手にした」

「……俺は……お前のしていることが理解できない」

「はあ？ふざけてんの、その言い草」

「俺は人間を殺すことを許可されている。そして、殺せと命じられる。だけど！俺は人なんて殺したくない！でも、俺にしかできないこともこの世にはある。今、この騒動を食い止められるのは俺だけだ。そのためにお前を殺さなきゃいけなくなっても俺は殺すと思う」

「……そう？私は人を……殺すのが大好きだよ。だってさあ……」

そこで女はクスクスと笑った。

「今まで私を利用してきた連中が死ぬのは、私が彼らを上回ったという証明につながる」

「……そんなことのために……」

「俺は、お前を殺さなきゃいけない。小野崎轟騎、参る！」

「ははははは……いいよな、お前は名前があつて。私なんて……与えられた名前がNo.14さ……。羨ましい、名前があるのが羨ましい……。私だつて親に名前を付けてほしかった！こんな身体いらないから……。名前が欲しいんだよ！！」

「……名前……。か。俺はこの名前を気に入ってはいないんだ」

「なら……。私に頂戴よ……。その名前……」

女は泣き始めた。

実験台がどのような仕打ちを受けていたかはわからない。

「でも、俺はこの名を親がくれた数少ない……。永遠に残るものとして大切にしている。だからお前にはやれない」

「なら・・・あんたを殺すまで!!」

・・・普通に俺が名前付けてやりやあいんじゃね？

・・・普通にそう思った。

が、

「死ぬ、もう死んじやえよ！みんな死ぬばいいんだ！」

うつわ、あぶねえ！

1年前の俺だったら絶対死んでたよ!？

・・・俺、人間離れして行ってるなあ。

錬金術で肉体強化なんてしなきゃよかったかなあ・・・。

ま、してたら今頃死んでるけどな。

「おい、女！話を聞け！俺がお前の名前を付けてやる!!」

「もうどうでもいい！殺したい、殺したい、殺したいんだよ!!」

・・・無駄だな。

「なら、うりやあああああああああ!!」

一瞬できた隙をついて女の右肩を殴る。

そして、パイルを打ち込む。

「う・・・」

「これを受けて悲鳴を出さないとね・・・」

「は、だてに肉体を改造されてないさ。だが、もうパイルはない・・・

・私の勝ちだな」

確かに、このあと遠距離戦に持ち込まれれば俺の負けだろう。

ただ・・・1年前の・・・俺ならな!

「ふ、足を殴つても私の脚力は落ちないさ!」

「・・・パイルを打ち込まれば別だろうけどな!」

そう言っつて、ないはずのパイルを打ち込む。

「・・・なぜ？なかったはずなのに・・・」

「錬金術。俺はあらゆるものを鉄に変え、更にそこからあらゆるもの

を作り出すことができる」

「・・・そんなことがあつてたまる・・・か」

無駄だ。

もう歩けるはずはない。

こいつの肉体は強度が普通の人間より落ちている。

俺とかでも歩くのがやっとな怪我で、歩けるはずがない。

実際にそうだった。

すぐに崩れ落ち、倒れた。

俺はテロリストを殲滅しろと言われた。

でも、俺はこの女を殺したくはなかった、

「なんか可哀そうじゃないか」

彼女の武装を全て放棄し、俺は彼女を担いだ。

「あと少し、あと少しだけでも・・・生きてみようぜ、俺たちの世界を」

そう呟いた。

この女の名前を考えながら。

第11章第5話 10分で千秋さんの昔話兼厭味は聞き飽きました

あの女は校長に預けた。

人生経験が恐らく全世界で一番多い校長なら打開策とかも知っているだろう。

ま、あいつに頼むのは気に食わないけど・・・まあ、何とかしてくれるだろう。

「・・・基盤はできてきたな」

「ええ、これも轟騎のおかげです。とりあえず一番先に高校を作ります。あなた方の為に・・・ね」

ニコツと千秋さんが微笑む。

この笑顔の裏で何考えてるか分からないからこの人は怖い。

「駿たちが帰ってきたらみんなで私の高校に通ってくださいね。世界トップクラスの高校教師を連れてきますから」

「オレ達の複学も・・・そう遠くはないか」

この人はこのプロジェクトに相当力を入れるようだ。

日本でもトップクラスの教師は1時間かけて教えることをたったの10分で教えるそうだ。

とんでもないスキルだと俺は思う。

尊敬するわ、純粹に。

「轟騎、校長から電話ですわよ」

「え、あ、はい」

『轟騎、この間の女だが・・・』

「あ、・・・ああ」

『この間の戦闘で完璧に記憶を無くしてる』

ああ、そう。

「つて、だからどうした？」

『お前が連れてきたんだから、お前が・・・責任取れよ!』
ひよ？

電話が切れた。

「エ、何ヲ言ツテイルノカナ、アノクソ校長」
滅茶苦茶棒読み。

「あら、轟騎。宅配便よ。あなた死てに
・・・ちよ、まさか・・・。

中には俺の予想通りあの女が寝ていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「う・・・ううん・・・ああ、パパだ!」

え？

ちよ、どゆこと？

パパって・・・おい。

「轟騎、校長から電話よ」

「死ねやクソ校長!何送りつけてんだよ!」

『彼女は助けられたときの記憶を辿ったのか、お前を父として認識
している。じゃ、頑張れよ、パパ』

う、うぜえ・・・。

普通に電話切るし・・・。

「・・・轟騎、袖季さんに連絡しましょうか？」

「いえ、結構です。つかしないてください」

絶対に消されるから。

絶対に。

てか袖季に双子の姉妹いたよな・・・まあ、たぶんあいつはもう出
てこないし。

袖季曰く、故郷に帰ったそうだ。

まあ、柚季はとんでもない炎魔法を使う割に、あつちはさほど大きな魔法を使うこともできないらしいし。
生まれる時に宿る魔力が柚季に偏ったんだろうな。

「それで、彼女の名前は何て言うんですか？」

「それが・・・こいつ、生まれた時から実験動物にされてたらしくてさ、名前らしい名前がないんだよ。しかも記憶を失ってるし」
下でゴロンとしている女を見て言う。

よく見ると大分色気がある。

ぺったんこの柚季とは大違いだ。

と、まあこれを聞かれたら火葬されてしまうのでここまでにしておこう。

「轟騎、無知なこの子に変な事を教えてはいけませんよ・・・ふふふ」

わ、笑ってねえ！

顔が笑ってねえ！

「なんかさ・・・千秋さんって駿といえる時は滅茶苦茶デレデレしてるけどさ、他の奴らといるときって・・・」

「駿を愛しているからですよ。話せば長くなりますが、駿と出会ったのは今から10年以上前の話でして・・・」

な、なんか話し始めたよ・・・。

四時間後

「私はそれでも駿と一緒にいたかった。その時、私は自分の頭脳を呪いました。何でこんなに頭がいいんだろう・・・と」

「それ今までの話聞いてない奴らが聞いたらただの厭味にしか聞こえないぞ？」

今までの話をざっとすると、たまたま出会った駿と一緒にいるうちに離れたくなかったらしい。

それを全て話すのに四時間かけているのだ。

しかも明らかにどうでもいい話も混ざっている。

「私は駿に初めてを受け取ってもらいました・・・初めて感じた唇は、とても柔らかかったです」

「それキスの意味で言ってるだろうけど最後の一文聞いてなかったらたぶんあっちの意味で解釈されると思うぞ？」

確か番外編でこんな話をしていたな・・・。

骸が・・・つばさに・・・。

「私は早く帰れるように一生懸命勉強しました。まあ、私の頭脳を持ってすれば何でもありませんでしたけれど」

い、厭味だ・・・。

余裕で厭味だ・・・。

「私は帰りました。ですが駿は一向に私のことに気付いてくれず・・・毎日苦しい日々を過ごしました。あのときは大学にいた時よりも苦しかったですね」

「・・・だからもういいって」

「私は幼女の時代よりも、ずっと綺麗な女なっていたので駿も気づかなかったのでしょ？」

もう・・・いい加減にしてくれ・・・。

厭味は聞きたくない・・・。

暫くして話は終わった。

「とうわけなのです」

明らかに俺が知っているようなことまで話し始めて、結果的に話し終わるまでに6時間を費やした。

俺は、人生で一番無駄な時間を過ごしたと感じた。

「では・・・何の話でしたか？」

「俺も忘れたよ」

そりゃ忘れるわな、6時間も話してればな。

「・・・轟騎、この荷物？」

「・・・ああ、そうだ。こいつの名前を付けるんだ」

「ポチでよろしいのでは？」

「犬じゃねえから、そもそもオスじゃねえから」

「荷物の中は・・・女の人じゃないですか！？轟騎、どうしたんですか！？」

「校長から送られてきた。記憶喪失らしいから「お前が飼え！」だとよ」

どうせ覚えてないだろうから反論もせず話した。

「俺も好きでこんなことしてるわけじゃねえよ」

「ですよ、轟騎が女の子を監禁して犯罪者まがいのことする訳ないですからね」

あの顔絶対に疑ってるだろ!?

ったく、駿以外にはそれほど優しくないんだからよ……。

第11章第6話 今明かされる駿が錬磨を嫌う理由

「完成間近だな。にしてもよくこの数週間でここまでできたなあ」

「財力ですよ。この世はほぼ全て金で何とかできますから。それでも何とかできない場合は黒魔術など……」

「……おい」

「あ、大丈夫ですよ。愛だけは自分自身の力で勝ち取らなければならぬと思っけていますから」

千秋さんは本当に恐ろしい。

椎名財閥の資産なら何でもやってのけるし、さらに戦略などは千秋さんのその天才的な頭脳で全て立てられる。

完璧な布陣だ。

この国の二大財閥の片割れはこんなにも素晴らしい当主であるにもかかわらず、もう片方の次期当主は腐つてやがる。

毎日毎日家でエロゲやってるような奴だからな。

「だいたいなんだよ、あのフィギュアの数……」

二大財閥の片割れ、一条財閥次期当主・一条錬磨はオタクである。

俺はオタクを否定はしない。

文化の発展によって生まれた一種の思想家だからだ。

だが、あいつは有り余る金を活用してとんでもない数のフィギュアを購入、更にコスプレの服……俺は詳しくは知らないけど……それも半端ない数を持っている。

本人曰く、彼女ができたら着せて楽しむ、だそうだ。

別に俺は止めないけど……二次元と三次元……間違えるなよ？

「どうしました、さつきからぶつぶつ呟いて」

「いや、二大財閥の次期当主を比べていたら明らかに一条財閥が失脚すると確信を持った」

「……あなたは、タイムスリップというものを信じますか？」

「ん？そんなの科学的に不可能だろ」

何言ってるんだ？

千秋さんらしくない。

「いえ、可能です。ですが、今は魔術に頼った方がはるかに楽に時空を越えることができます。私は先日、駿と未来に行って二大財閥の行く末を見てきました」

「で、どうなった？」

「一条財閥は、完璧に失脚していました」
「だろうな、だいたい予想はできていた。」

「出来る限りこの学院には最新技術を組み込みみたいと思っています」
「最新技術？たとえば？」

まあ、この人の財力を持つてすれば何でもやってのけそうだけどな。
「セキュリティ面から既に最新です。不審者や不審行動を行っている生徒がカメラに映った瞬間、未来から取り寄せたアンドロイドで襲撃します。一応、生徒は捕獲だけですけど」

「ほ、捕獲って・・・」

な、なんかレベルが・・・。

てか未来から取り寄せたのかよ・・・。

「でもカメラに映らないとそのシステム作動しないんだろ？」

「はい、でも一部屋に8台カメラを設置するので、まず死角はありません」

・・・レベルが違い過ぎる。

「駿はこの学校を喜ぶでしょうか」

「ああ、間違いなく喜ぶよ」

君が作った学校だからな。

仮にこれを錬磨が作ったとしよう。

駿は絶対にこの学校を潰すだろう。

理由？

錬磨だからに決まってるじゃん。

あいつ錬磨が大嫌いなんだよ。

「錬磨が作ったらぶっ壊すだろうけどな」

「どうしてですか？」

「駿が錬磨を酷く嫌っているからだ」

「駿ってなんで錬磨と仲が悪いのでしょうかね」

「話せば長くなるが・・・」

丁度いい、前回の仕返しでもしてやろうか。

駿は錬磨が嫌いだ。

何故かと言つと、

第一に、ガキの頃から俺と駿が格ゲーやらレースゲームやらなんやら二人でやってると、錬磨はいきなり電源切つてギャルゲーをやりはじめから。

第二に、小学校の頃に駿が好きだった女の子からバレンタインデーにチョコプレートを買ったのが錬磨だったから。

もつとも、その後錬磨の本性が知られるが。駿は相当根に持つタイプである。

第三に、昔駿がやってたゲームのチートなしで最強に仕立て上げたデータを錬磨が消したから。

あの時の駿の怒りようはヤバかった。

木刀だったが、本気で斬りかかってたからな。

第四に、駿がやってたカードゲームの駿の切り札を錬磨がジューズで濡らしたから。

駿は今そのカードを再び手にしたらしいが、オークションで数千円する代物だったらしく、相当根に持つてるらしい。

第五に、駿の木刀を折ったから。

その時は珍しく駿は怒っていなかったが、後ではやてさんが修学旅行のお土産で買ってきたものと知り、はやてさんに酷く怒られたということがあったため、恐らくこれも要因だろう。

第六に、錬磨がくれたパンがカビていたから。

いくらパン好きの駿であってもカビたパンは相当不味かったらしい。

第七に、駿がバレンタインデーにもらったチョコレートが錬磨が送ったものだと知ったから。

あの時、俺もその場にいたが、正直引いた。

いくら錬磨でもそんなことはしないと書いていたからだ。

あの時の駿の顔は本当に真っ青だった。

とまあ、錬磨を嫌う理由のほとんどが錬磨が悪いことばかりである。

その上、駿は相当根に持つタイプだから錬磨を許すわけがない。

「これが駿が錬磨を嫌う理由だ」

はっ、しまった、5分で終わってしまった!?

「そうですか。それにしても駿と私の気は合うものですね。私も錬磨は好きではありませんから」

錬磨、俺もお前は好きじゃねえよ。
てか、嫌いだ。

お前は俺にはない、金とルックスを持っているからな!!

そう考えれば駿もか・・・まあ、駿は親友だし。

錬磨の性格も影響してるんだと思う。

「そう言えば、あの子はどうしたのですか？」

「あの子？」

「前回校長から送られてきた子」

ああ、あいつか。

「校長に送り返した。今は校長の孫と仲良くやってるらしい」

「そうですか、良かったですね」

「・・・記憶が戻ったら大変なことになるかもしれないけどな」

ぜひともこのまま何事もなく一生を終えてください。

俺はそれを祈るばかりです。

第11章最終話 「生きていたのか!？」的な展開(前書き)

更新をすっかり忘れていました

第11章最終話 「生きていたのか!？」的な展開

「やっとできたな」

よくできたなあ、たった1月足らずで。

駿ももうすぐ帰ってくるって言うてたし、すぐに見せてやることもできるだろ。

「学生の募集の時間もありますし、次のシーズンには開校できるでしょう」

千秋さんが嬉しそうな顔をしてこちらを向いた。

「ただ、やはり今でも妨害してくる人はいるようですね」

「・・・誰だ?」

気配は感じていた。

ここ数日、俺を張っていた奴。

「・・・お前は」

隠れていた奴はゆっくりと出てきた。

奴は隻眼であった。

「地獄って・・・どんな場所だか知っているか?」

なに、こいつ。

「・・・誰だつけ?」

「とっても暗くて・・・怖くて・・・苦しい場所なんだぜシカトかよ。」

電波入ってない?

「おい、ツツコミ入れるよ」

「お前に奪われたこの眼の存在がどれだけ大切だったか・・・お前には分からないだろうなあ」

「だから誰だよ、お前」

「1月ほど前、お前にこの眼を奪われてから!!」

「・・・あ、あいつか。」

てつきり死んだかと思ってた。

「・・・死んでなかったの?」

「おい、そこは「生きていたのか!?!」って言えばよ」

おいおい、ツッコミは俺がやるから。

「確かに脳は狙ってなかったから・・・眼だけでよかったな」

徐々に俺は現在地から離れていく。

千秋さんを危険な目にあわせたら・・・俺が駿に消される!!

「死んで俺に詫びろ、小野寺!!」

「いや、小野崎だから」

よく間違われるんだよね、俺の苗字。

駿も昔間違ってたし、作者も今でも間違えるし。

「で、あんたは何しにきた?」

まあ、どうでもいいけど。

どうせ復讐とかそんなくだらない理由だろ。

「さっきの質問は取り消した。・・・どうやって殺されたいか?」

俺は腰にかけていたパイルバンカーを装着しながら言った。

「今の俺は誰にも倒せない・・・たとえお前でも!!」

「俺に勝てる人間は未だかつてひとりしか見たことがない。さあ、かかってこい」

挑発じみたセリフを吐いた。

俺はその時は何も考えていなかった。

一度倒した相手。
何も恐れることはないと思っていた。
だが、その考えは最初の一撃で吹き飛んだ。

俺に向かって飛んできた攻撃は、

「な、魔砲!？」

確かにあれは魔砲だ。

はやてさんに比べたらはるかに劣るが、あれは魔砲だ。

「この銃・・・黒いコートをまとった奴にもらったんだ。復讐する
のであれば力を託すと」

魔砲。

禁術として扱われている魔術。

あれはあの装置が処理しているのであるが、魔砲に近い働きをし
ている。

はやてさんが自ら行っている処理を全てあの機械が行っている。

つまり、その行動に意識を向けなくていい。

あいつは自由に動ける訳だ。

こっちは魔砲を避けるので精いっぱいだ。

元々遠距離戦闘は得意じゃない俺には圧倒的に不利。

30メートルまではパイルを飛ばして何とかできるが、今は100
メートル以上離れている。

あそこまで行くのにかなり時間がかかる。

走っても走ってもあいつも逃げているから追いつけない。

魔砲は俺を追跡してくるから走るのに集中できない。

困った。

実に困った。

周りから魔力を断絶できれば、あるいは……。

俺ひとりじゃ絶対に勝てない。

スタミナも減っていく。

一発で仕留めないとこっちの体力もまずい。

一撃必殺……そんなのができたら苦労はしないのにな……。

一撃必殺……か。

一撃必殺……一撃必殺。

そう言えば説明書に書いてあったな。

リミッターを解除することでパイルの射程距離を5倍、威力を5倍、重量0.5倍。

ただ、デメリットもあり、メンテナンスに出さない限りパイルを射出できるのはたったの1度。

まさに一撃必殺。

この攻撃さえ通れば話は変わってくる。

パイルが射出できなくても俺は奴を殴れるだけで勝てる。

至近距離では恐らく駿よりも強い。

駿は刀を使う故にある程度距離があった方が戦いやすいからな。

骸たちの銃組もある程度離れていた方が狙いやすい。

リーチが短い武器ほどリスクは高い。

だが、それに見合うだけの価値はある。

やってみるか……。

俺は右腕についている武器に隠されたボタンを押す。

ガランと言う音とともに周りについていた余計なパイルやシールドが剥がれ落ちる。

俺の腕も危険と言うことか。

それは承知の上。

はじめから予想できていたことだ。

照準を合わせるのは困難。

狙うのは奴が次に魔砲を放った時。

今までの感覚からすると魔力の補充に必要な時間は20秒。

前回の発砲から8秒。

あと10秒ほどで次が来る。

そして発砲後奴は5秒の硬直がある。

その時に俺が失敗すれば、

俺の負けだ。

魔砲は飛んできた。

俺はわずかに横に横に避け、パイルを射出する。

俺はとつさに照準を合わせる。

硬直2秒目。

俺は奴への狙いを定めた。

硬直3秒目。

俺はトリガーを引く。

硬直4秒目。

パイルが射出された。

硬直5秒目。

奴が硬直から解放されたと同時にパイルは奴の心臓を貫いた。

奴は動きを止めた。

そしてとつさに俺は走り始める。

奴は待っていてくれ死ねだろう。

だが、その前に被害を最小限にとどめておきたい。

既に周りのものが何箇所か破壊されている。

100メートル。

走りきるのには8秒程かかる。

俺は特別すぐれた人間じゃないんだ。

錬金術で肉体を強化しても、駿のようにこの距離を一瞬で縮めるこ

となどできない。

多少力を得るだけだ。

でも、それだけあれば

「ダイヤモンドブレイカー!!!」

リミッターを解除していない、左腕に装着されたパイルバンカーで
ダイヤをも砕く一撃を奴の脳に加えた。

脳震盪で済むはずがない。

頭蓋骨粉碎、もしくは脳破壊。

確実に死ぬ。

「駿みたいな奥義でもないのに技名を言うとは、なんたる厨二病」

言ってから後悔した。

ちなみに駿は技名を言う事でその技をイメージして発動する。

駿の師匠にもなればそんなことしなくても奥義は発動できる。

ようは、気の使い方だそうだ。

それに比べて俺は全く関係がない。

確かにダイヤを破壊する威力はあるけど・・・なあ。

後日、右腕を検査したところ、骨が折れていた。
通常なら全治一ヶ月以上だが、駿の帰還後、エスナの能力で回復した。

第11章最終話 「生きていたのか!？」的な展開(後書き)

遅れた理由はデイスガイアのやりすぎですね、はい。

ここ数日まともに寝てません。

気付けばこの小説が始まってから一年が経とうとしています。

それと同時にネタ切れ感が凄まじくなってきました。

というわけで強引に次の章で最終章になると思います。

最終章第1話 新たな戦いの幕開け。戦いから解放されないオレ

「千秋、ただいま」

オレは帰ってきた。

長い物語だった。

だが、物語は完結する。

オレは最凶の妖刀を手にした。

だから、オレはもう千秋から離れる必要がない。

これからはもうずっと一緒だ。

ずっと……ずっと。

「駿、おかえりなさい」

轟騎の腕を治したばかりで千秋の顔をまともに見れていなかったからすごく久しぶりに見た気がする。

「全部終わった。オレがこの刀を掌握している限り世界は壊れることはない」

「壊れることのないこの世界を、私が平和にします……可能な限り。それが私の存在理由ですから。私にしかできないことは、私がするしかありません」

オレはオレの、千秋は千秋の存在理由を持っている。

でも、オレは本当はそう思っていない。

人は生まれてくるのに意味なんて持っていないんだ。

意味は自分自身で見つけるんだ。

オレはそう思う。

人は誰もが使命を持っているわけじゃない。

全ての人間は成長過程で存在理由を見つける。

存在理由を見つけていない段階の人間は非常に多いが、それでも人

は誰しも生きたいと思う。

それが存在理由でもいいかもしれない。

だが・・・死んでもやりたいこと、これだけはどうしてもやりたいこと。

死のリスクを負うが、それが叶えられるとしたら。

そこで叶えようとする人間は、強くなれる。

死を恐れて逃げる人間は、強くはなれない。

「オレはこの先君の盾となる。そして、剣にもなる。それがオレの存在理由だ」

オレは千秋を守るためならば命をかける。

死んでも構わない。

だけど、千秋はオレの死を絶対に望まない。

だから生きる。

オレは生きる。

千秋の最期を見届けるまでは、絶対に死なない。

身体が衰えても、声が出せなくなっても、目が見えなくなっても。

絶対に千秋の声だけは最期まで聴き続ける。

そうでありたい。

だが、このあと世の中は上手くないかないと知る。

その夜、オレが眠っていると夢に龍が出てきた。

龍は言った。

「お前は戦い続ける」

・・・じ。

次に目を覚ました時は既に元いた世界とは離れていた。
ほぼ全てのものを失った状態で。

オレに残されたものはオレの横に置いてある妖刀と腕の中で眠る千秋。

オレ達は深い森の中に倒れていた。

「・・・目を覚ましたか？」

「え、ええ。ですが体が思うように動きません」

確かに、昔の状態に戻ったようだ。

千秋に限っては歩くこともつらそうだ。

「何でこんなに体が上手く動かないんだろうか」

「恐らく、ここは地球よりも重力が強いのでしょう」

少し歩くと、千秋は疲れ果てて歩くこともできなくなった。
重力強すぎっしょ。

オレは身体能力が上がっているため、動きに制限がかかってこそ
までにはならない。

「大丈夫か？」

「少し休んでもいいですか？」

「あ、ああ。別に急いでいるわけじゃないし」

絶対筋肉痛になるわ、コレ。

千秋もぐったりしてる。

森の中は抜けれなさそうだしなあ。

猛獣とか出てこないといいな、人並みの力しか出せない今のオレじや勝てる訳がない。

「・・・その若いの、大丈夫かの」

なんだこのおっさん。

つかジーサン。

「彼女が疲れてしまったようですけど」

「正直にいますが、疲れたというレベルではないです」

「そうかそうか。この世界の重力にはまだ慣れてないようじゃな。」

ワシも数十年前にこの世界に飛ばされてな。ここの原住民は大層優しく接してくれた。今じゃワシが原住民の長をやつとるくらいじゃ

・・・フレンドリーだな、このジーサン。

「若いの、ワシの村に来るかの？」

「ああ、できればそうしてもらえると助かります。千秋、歩けるか？」

「まだ辛いですが、なんとか」

「ん、やっぱいいや。オレがおぶってやるよ」

オレは千秋を背負った。

「あ・・・あの・・・ありがとうございます」

「砕けた言い方でいいよ。それにこれは当然の行為だと思う」

オレがそう言うと、ジーサンがニヤニヤして言った。

「随分、仲がいいんじゃないな。それでは、行くぞ」

ジーサンがゆっくりと足を進め、それに続いてオレも歩いた。

「この村の住人はみんな穏やかでな、旅人はみな歓迎するのじゃ」

確かに、オレが入ってきたとたん、村人は何も言わずに宴の準備に入った。

「この住人はワシらよりも小さな種族での、大人の平均身長が130cm程度しかないのじゃ」

「所謂ホビットって奴か」

そう言えばホビットが主人公の某指輪を火山に捨てて行くって言う物語があつたなあ。

・・・さっきの説明でタイトル入ってるし。

「この村は山に囲まれているが故に人は滅多に來ないから科学技術が遅れているんじゃない」

「それでもとてもどかですよ」

「確かに、昔の山中市を思い出させる」

「・・・それがこの村のいいところなんじゃないかな」

昔の山中市よりも発展は遅れているが、それでも水車とかがあつて昔ってイメージがある。

「ワシがここに来る前は戦後じゃったからな、物がなくて苦しんでいた時代じゃった」

「この間攻められたけどな」

「私たちの国は戦争は行わないので反撃はしませんでした」

その代りオレが潰しに行った。

そこでオレは三国時代に飛ばされた・・・。

だけどそのおかげでルインが手に入ったんだけだな。

「・・・そう言えばその刀の妖気はどこかワシが持つ槍の妖気に似ておる」

え？

オレが腰に差しているルインを指してジーサンは言った。

その他の刀は専用の箱に入れて背負っている。

「どのような槍のですか？」

オレよりも先に千秋が言った。

「ぜひ見せてもらいたい」

「一見普通の槍なのじゃが、ある日突然五本の刃を持つ槍になって
いたことがあった。そのあとすぐに戻ったんじゃがな」
五つの刃・・・槍・・・ブリューナクか。

最終章第1話 新たな戦いの幕開け。戦いから解放されないオレ（後書き）

多分最終章なので最終章にしておきました。

てか今まで章をを分けていた理由があったのかすらが疑問に思えます。

番外編・誕生日だと言っ事をすっかり忘れていたという(前書き)

駿の誕生日なので・・・。

番外編：誕生日だと言つ事をすっかり忘れていたという

4月7日午前1時

オレと千秋と一緒に寝ている時、急に千秋がこんなことを言い出し始めた。

「せつかくなので、誕生日パーティーでもしましょうか」

「え？」

千秋の誕生日はまだまだのはずだけどな・・・。

「お前の誕生日はまだだろ？」

「何言っているんですか、今日はあなたの誕生日じゃないですか」
ん・・・そうだったような。

誕生日なんてたかが生まれた日だ。

何故祝うのかさっぱりわからん。

歳を取ることを祝うとはな。

死に近づいただけじゃねえか。

「何でそんなことすんの？」

「年に一回ですから、このくらいお祝いしないと」

「いや、別にいいよ」

ガキの頃はよく誕生日で騒いでたなあ、みんなが

オレは誕生日に祝う理由もさっぱりなかったから別に喜びもしなかつたけど。

おめでとうと言われてもさっぱり理由が分からん。

「・・・何？」

「プレゼントは何が欲しいですか？だいたいのものは用意できますが」

プレゼントねえ……。

そう言えばもらったこと無いな。

しいて言えば梨瀬……か。

「梨瀬も1歳なんですよね」

「早いなあ」

「それで、プレゼントは何がいいですか？」

そう言われてもなあ……。

「……分かりました。こちらで用意しますから、楽しみにしてくださいませ」

まあ、千秋のくれるものなら何でもいいか。

そうして千秋はパーティの準備をし始めた。

勿論、千秋は電話で命令しただけで、後は寝た。かわいい寝息と共に。

オレは梨瀬と遊んでいた。

千秋が朝起きた時から全く見かけなかったので、適当に朝食をとって、梨瀬にも適当になんか食わせて、普通に遊んでいた。

梨瀬はオレにかなり懐いている。

・・・このままじゃファザコンになりかねねえ！

まずい、あの未来が現実になっちまう！

未来は変えて見せるさ！

そんなとき、オレのケータイにメールが来た。

そう言えば1年くらいケータイを変えてないな・・・と思いつつ、オレはメールを見る。

つばさからだ。

随分久々に出てきたなあ。

駿くん、今暇？

それなら今からみんなと遊ばない？

だそうです。

みんなが誰かはだいたい分かっているので聞かない。
そしてオレはメールを返す。

娘と遊んでいるからまた今度にしてくれ

・・・と。

普通なら娘と言われたらかなり驚くだろう。

この年齢で娘と言われてもな。

まあ、奴らなら理解してくれるだろう。

だが、奴らはこう返信してきた。

何故かつばさじゃなくて骸からメールが来た。

それじゃ、お前の家に行くわ。

「つばさじゃねえのかよ」

と、ひとりで突っ込みながら、本を読んでいる梨瀬をちらりと見た。どんな絵本を読んでいるのかな・・・と。梨瀬も梨瀬でオレの予想を裏切ってきた。

「ろ、六法全書だ?!?」

「うん、これとっても面白いよ」

り、梨瀬・・・君は本当に1歳か!?

「ど、どこがどう面白いの?」

オレは恐る恐る聞く。

「この国がどんな事をしちやいけないのか、どんなことはしてもいいのか分かるもん」

・・・。

我が娘は既にオレを超えていた・・・。

「覚えたの?」

「まだ全然覚えてないよ」

ははは・・・それでも法律なんてオレにはさっぱりだ。

戦争放棄とか銃刀法違反とか基本的人権の尊重くらいしか分からん。そのうちオレは2つも違反している。

戦争は普通に行っているし、刀も普通に持っている。

オレが焦りを見せている最中、奴らはやってきた。

「駿、勝手にはいるぞー」

「お、おじゃまします」

骸とつばさがやってきた。

「あれ、二人だけか？」

「うん、そうだよ」

轟騎が来ると思っていたが。

「その子、駿くんの子供？」

「ん？まあ・・・そうだけど」

「何読んで・・・なにい！？俺には一生かかっても理解できないよ
うな本じゃねえか！！」

オレもさつきそれを実感しました。

「こんなに小さいのにもうそんなの読んでるんだ！私なんてそれ読
み始めたの小学校5年生からだよ」

「充分はえーよ」

どうしてこうも頭のいいお方たちが集まるのでしょうか。

馬鹿組と普通組が途轍もなく情けなくなってくる。

そんな感じで時が過ぎ、夜。

オレにメールが来た。

千秋からの様です。

梨瀬とそこにいる二名を連れて椎名家に来てください。

だそうです。

流石椎名家の情報網。

彼らが来ていることはお見通しですね。

「で、お前ら行く?」

「俺は別にいいよ」

「私も帰ってもひとりだし、それよりだったらみんなで一緒に」

「分かった。目を閉じてろ」

面倒だから瞬間移動を使う。

便利ですね、天使様。

だが、いくら天使最強の熾天使であっても、神には勝てない。

「行くぞ!」

そしてエスナのセリフはない。

椎名家に着きました。

普通に着きました。

そこで見たものは。

「駿、今日ここで国際的トップが集まるパーティーでもやるのか？」

「え、じゃあ来ちゃいけないんじゃないの？」

「千秋は来いと言っていたんだ。それに、オレは裏の世界では名は知れているからな・・・と、そんなことはどうでもいい。行こう」
オレが扉を開けると、やはり国際的トップが沢山いました。

そして、彼らは急に拍手を始めた。

「え？」

「駿、お誕生日おめでとございます」

あ？

あ、あ、あ、あ・・・そうか、誕生日か。

何が嬉しいんだかさっぱり理解できなかったが、今はなんか嬉しく感じる。

「あ、そうか。今日は駿の誕生日だったっけ。忘れてた」

「オレもだ」

「ほ、本人が忘れてるよ・・・」

「今日の朝言っただじゃないですか」

「ん・・・覚えてないや」

多分寝ぼけてたんだ。

「ふふ、それでもいいですけどね。これは誕生日プレゼントです」
千秋がひとつの小さな箱を差し出した。

「ありがとう」

なんだろうか。

「開けてみてもいい？」

「どうぞ、あなたのですから」

箱を開けると、そこには指輪があった。

「指輪？」

「はい、婚約指輪です。まだ渡していませんでしたから」

「こ、婚約指輪って・・・普通オレがあげるものじゃないのか？」

「関係ないですよ。でも、私の誕生日にも指輪をくださいね」

千秋がニコニコと微笑んだ。

「分かった。楽しみにしててな」

千秋のためだ。

世界一の指輪職人でも探して作らせるかな。

「さあ、今宵はパーティを楽しんでくださいね。それでは！」

千秋のその声で、その場にいた全員は乾杯した。

「」「」「」「乾杯！」「」「」

番外編：誕生日だと言った事をすっかり忘れていたという（後書き）

ある程度歳を取ってくると誕生日は全く嬉しくないものになります。
ええ、そうです。

ガキの頃はあんなに喜んでいたんですが・・・。
今考えたら何を喜んでいたのかさっぱり理解できません。

最終章第2話 最近は随分と「ブリューナク」が有名になりました。

オレはジーサンに例の槍を見せてもらっていた。

「これがその槍か・・・確かに微笑だが魔力は感じるな」

オレはこの槍とコンタクトを取ることにした。

「おい、聞こえるか？」

・・・。

「君の名を覚えてもらいたい」

・・・。

覚醒してねえ・・・。

「・・・覚醒していないみたいだ」

「それじゃ、ワシが見たのは偶然じゃったのか」

「だが、オレはこれを覚醒させる力を持つ」

正確にはオレの刀が。

「ルイン、力を貸してくれ」

ルインを聖剣に変化させる。

「おお、なんじゃこの刀は!？」

「この槍も似たようなものだ」

「私の力を開放します。皆さん、伏せていてください」

ルインがそう言った10秒後、ルインから凄まじい光が発せられた。

「あなたが私を呼び覚ましたのかしら？」

槍から声が聞こえた。

「き、君は……」

綺麗な女性の姿をしていた。

「私の名はセレーネ」

「ああ、そうか……って、お前の主はこのジーサンだけだな」

「ワシの槍がこんな綺麗なねーちゃんに……」

ジーサン、目がエロい。

「む〜」

珍しく千秋が変な声を出している。

「どうした？」

「面白くないです」

「何が？」

「駿がさつきからセレーネさんの胸に目が行っていますから面白くないです」

え、目が？

気付かなかったなあ。

しかたない、男の性だ。

確かにセレーネの胸はとんでもなくでかい。

オレは貧乳も好きだが巨乳も好き……と言うか乳が好き……って何言ってるんだ、オレ。

勿論、脚や顔が綺麗なのも観点に入るが……。

「さつきからエッチなこと考えていますよね？」

「……否定できません」

「そんなこと考えている駿を見ると面白くないです」
「嫉妬してる？」

「し、嫉妬なんてしてません！私は……その……駿が他の女の子を見るのが嫌なだけです」

独占欲。

まさにそうだな。

「駿は私だけを見てくれればいいんです！」

「……目が自然に行ってしまうのはオレの意志じゃないんだよ、うん。」

「あ……そうだ、はじめからルインに聞けばよかつたんだ」

「はい、なんででしょう？」

「帰り方は？」

「一番重要なことを聞くのを忘れていた。」

「私の力では無理です。恐らく、他の仲間も不可能でしょう。ただ、ひとりを除けば」

あ、ひとりいるじゃん。

「そいつは？」

「私たちの中でもっとも凶悪な妖刀・カタストロフです」
……。

奴まだ覚醒させてない……。

それにルインの力じゃ無理だし、賢者からも止められている。

そんなに危険なのか。

「そう言えば、数十年前のことじゃが、たまたまここに来た旅人にこんなことを聞いた。異次元から来た人間が元の世界に帰ることができる洞窟があると聞いたことがあるのう。ワシはここに慣れてしまったからここに残留ことにしたんじゃないかな」

ちよ、最初から言えよ！？

「どこから分かるのか？」

「分らんが、恐らく街に行けば何か情報が聞けるじゃろう。ワシが街に行ったのは何十年前じゃったかの。地図はあるんじゃないが今はどんな街になつとるかはわからん」

そりゃ数十年もたてば相当変わるぞ。

オレと千秋は街を目指すことにした。
元の世界に帰るために。

「馬車はいるかの？」

「そこまで迷惑はかけれない。今までありがとう」

「若いのに、礼には及ばんよ」

いいジーサンだったな。

「それじゃ、さようなら」

オレがそう言った瞬間だった。

「駿、戦闘機のような音がします！」
ん？

戦闘機？

全然聞こえないけど……。

「私、耳は結構いいんです。私でもギリギリ聞き取れる程度ですから、もう少しすればあなたにも聞こえるはず。そして、その戦闘機はこの村に向かっています」

「おかしいのう、ここは大陸の丁度真ん中にあるから戦闘機なんて通らないはずなんじゃが」

「つか戦闘機あるのかよ、この世界に。」

「そろそろ聞こえると思います」

「うん、聞こえる」

「つか、もう見える。」

「おや、他にもなんか飛んでくるぞ?」

「ちょ、ミサイルもあるし!」

「た、大変です・・・村が壊滅してしまいます!」

仕方ねえ・・・。

ミサイルを破壊するしかねえな。

「オレが行く! 鴻漸之翼!」

オレは二本の刀を翼に見立てて空を飛んだ。
にしても久々の奥義だな。

・・・重力が強いのが関係しているのか。

気の消費が激しい。

早期決着するしかない。

よし、ミサイルまでついた!

「奥義・百花繚乱!」

ミサイルを切り刻んだ。

爆発しなかったのは驚きだ。

「ふう、爆発しなくてよかった」

「礼をいいなさい、人の子よ」

あれ、爆発しなかったのっでもしかしてエスナのおかげ？
随分久々に出てきたなあ・・・。

「何なんだ、明らかにあのミサイルこの村に飛んできてたぞ」

「もしや・・・あの若造、今頃になって狙ってきおつたな」

誰だよ。

「うむ、仕方がない。若いの、これを持って行け。ワシからの饑別じゃー!」

ジーサンはあの槍を差し出してきた。

「でもこれは・・・」

「ワシはもう老いばれていくだけじゃ。それよりだったら、お主が使った方が、その槍も喜ぶじやろう」

・・・ジーサン。

「その代り、ワシの願いも聞いてくれないかの?」

願い?

なんだろう。

「ミサイル撃ってきたのは恐らく帝国の軍人じやろう。街をさらに越えた先にある大きな国じゃ。そこを・・・叩き潰してくれんかの?」

・・・。

このジーサン滅茶苦茶根に持つタイプだわ、絶対。

「分かった。ありがとう」

「うむ、頼んだぞ」

よし、行くこうか!

「千秋!行くぞ!」

「はい!」

・・・そう言えば歩けば千秋、疲れちゃうか・・・。

何か楽できそうな乗り物は・・・って、オレには最終手段があるじゃないか。

「大空に導かれし偉大なる翼よ！我にそれを預けたまえ！出でよ、グリフォン！！」

オレが召喚術っぽいものを唱えると、青く澄んだ空から大きなグリフォンが飛んできた。

召喚術はどの世界でも使えるんだな。

そして背に鞍、口に鞭までついているという何とも都合のいい設定だ。

「千秋、乗れる？」

「た、高くて私じゃ足が届きません」

千秋も足が長いんだけどな。

でもこのでかさじゃ流石に普通には乗れないか。

「オレに掴まって」

オレがそう言うと、千秋は恐る恐るオレの腕を掴んだ。

「跳ぶよ！」

オレは人間業とは思えないほどのジャンプをして、グリフォンの背に乗った。

重力が強くても思いつきり力を出せばこのくらいは力を出せる。

悪魔の力というものは恐ろしいですねえ……。

「とっても大きいですね、この動物」

このグリフォンの大きさはインド象をも超える。

「前に乗って」

「え……駿が後ろに……乗るんですか？」

「ん、ああ。落ちそうになっても前からなら掴んでいられるし」

「へ、変なところ……触らないでくださいね。こんなところじゃ嫌です」

……。

なるほどね、それで少し嫌がる素振りを見せたわけだ。

「そんなことしないよ。さあ、飛ぶよ！」

オレが指示すると、グリフォンは大きな翼を大空に広げ、空の青に溶け込んだ。

「あの・・・駿」

「ん、どうした？」

「手・・・」

手？

「手がどうしたの？」

「お、お腹に触ってます！」

「・・・え？」

「は、離してください！・・・その・・・くすぐりたいです」

「ああ・・・ごめん」

・・・。

手の置き場がない・・・。

鞭は千秋が掴んでるし・・・。

千秋が持ちたいって言うから・・・。

オレは手を離れた。

次の瞬間だった。

案の定、一瞬でついた。
ここで思った。

一瞬で着く能力だったらエスナを使えばよかつたんじゃ……？

「……」

「……」

「……すみません、私のせいで」

あれは事故だ。

グリフォンがあんなとんでもない速度で飛んでいるとは、思いもしない。

案外感じないものなんだな。

つかわざわざグリフォンに乗る必要もないような気がするんだが。

「あのさ、千秋」

「はい？」

「エスナに直接飛ばしてもらった方が早いんじゃない？」

「駿は空の旅がしたいものだとばかり思っていました」

気付いてたのか。

先に言ってくれよ……。

「楽な方選ぼうよ、ね」

「もしかして駿は気付かなかったのですか!？」

……凄く劣等感を感じました。

ああ、オレの頭脳は千秋よりもはるかに劣っているのですね、はい。
「そうときまればさっさと飛ぶか」

「折角ですから、このまま空の旅を楽しむのもいいと思いますよ?」
千秋はニコツと笑いながら言った。

なんだかんだ言って空を飛ぶのは気持ちがいいらしい。

「飛行機と違ってよく見えますから」

「景色が?」

「はい!」

とても楽しそうだ。

「それじゃあ、このまま向かおうか」

オレ達の空の旅は、まだまだ続く。

と、思いきや、すぐに着いた。

どうやら本当にとんでもない速度で飛んでいたらしい。

「ここが王国か」

「えっと、確か軍を滅ぼすのが駿の役目でしたよね」

「んー、そうじゃない?」

どうでもいいや。

さっさと潰して帰り道でも探そうか。

最終章第4話 奥義と洗脳 最終的にミサイル犯を討つたのはどちらでしょう

「軍はここか」

案外現代的な場所なんだな。

あの村を見る限り未だに騎士とかそんなんだと思えるんだが。

まあ、ミサイルとか戦闘機とか使うくらいだし。

それにしてもあんな平凡な村にミサイル飛ばす奴はどんな奴だろうか。

相当ジーサンに恨みを持っているのだろうな。

それじゃ、喧嘩売りますか。

「うおおおおおおおおおおい、ミサイル撃ってきた奴だ
せやー!」

ちよつと怒鳴ってみました。

「ミサイル? ああ、大佐のことですね?」

大佐・・・それなりに地位のある奴か。

「んで、そいつは?」

「そこにいますよ」

・・・。

なんだあの小僧。

「おまえ、スゲー目つき悪いな」

「生まれつきだ! つか何の用だよ」

「ミサイル撃つたのお前か?」

「ああ、そつだよ! あのクソジジイのことを思い出していらだつた
からぶつ殺そうかと思っただんだよ!」

恨みを買っようなジーサンじゃないと思っただけだな。

まあいい。

オレはオレの仕事をするまで。

「ジーサンの依頼で貴様を抹殺する」

「んなことできるかよ！この軍勢、兵器を前にして俺を殺すってか？無理にも程がある！」

その言葉を聞いてオレは少し顔に笑みを浮かべ、刀を抜く。

「駿、その笑いは少し不気味ですよ」

千秋曰く、不気味だそうだ。

「私も私で少々お手伝いさせてもらいます」

「ん？何を？」

「私も一応洗脳することはできるのですよ。もうずっとその模写がなかったためにすっかり忘れ去られていると思いましたが」

んー、確かにそんなことで来ていたな。

あの時は錬磨を潰すのに頭がいつぱいだったから、そのことは頭の片隅に置き去りにされていた。

「はっ、俺の軍を舐めるな！そんな近接戦闘武器で俺の軍を蹴散らせると思っているのか！？」

「余裕だ、行くぞ、ハヤブサ！」

「了解」

オレは刀に気を集中させる。

そして刀の妖気が形を作り、隼の姿を形成した。

これが真の妖刀の力だ。

刹那に教えてもらった甲斐があった。

「オレの奥義を舐めるな！」

「なんだかしらねえけど最後に勝つのは技術の上の方だ！」

技は、オレの方があつた！

幾千ものKFやらMSやらASやらマキナっぽいものやらなんやらを相手にオレは余裕の表情で刀を振る。

みせてやるうじゃねえか、オレの奥義の最終形態を！
あのミサイルで死んだジーサンのためにも！！（村長は死んでいません）

「神・十五代一刀奥義・ラグナロク！！」

刀を兵器に次々と刺し、大破させていく。

この技の前ではフェイズシフトもラムダドライブも関係ない！

あらゆる力を無力化した上に攻撃が加わったものを全て大破させる。

正直この技はオレの全ての気を呑みこむほどの力を持っている。

一撃一撃にオレの全ての力を使うほどの気力が必要である。
それをオレの妖刀やエスナが肩代わりしてくれている。

妖刀の気はオレよりもはるかに多く、その上エスナの力も働いているから消費量も減る。

ここにいる兵器を全て大破させた後、でも100回ほどは使えるだろう。

「ば、化け物かお前は！？」

「ふふふ・・・もはやオレは悪魔と同類だ」

「更に天使の加護も付いている・・・最上級の熾天使の加護となればこの世のあらゆるものを凌ぐ力を持っていると言ってもいいだろう」

オレはもう人間とは呼べない力を持っている。
もう、戻れないんだ。

「止めにしようか」

オレは刀を構えなおす。

「神・十代目一刀奥義・コキユートス!!!」

オレが力を解き放った瞬間、基地全体が氷漬けになった。絶対零度やアブソリュートゼロの比ではないほどに。そして同時にオレは倒れた。

「……ここまで力を使うものだったとは……」
何事にも予測不能なことはあるものです。
良い教訓になりました。

なお、コキユートスは刀を地面に刺して発動するので、刀は必要である。

そして神・奥義と真・奥義の違いについて。

真・奥義は聖剣および魔剣の状態が発動するものである。

神・奥義は妖刀の状態のまま聖剣および魔剣の力を開放するといふ無駄に難易度の高い技術を使用した上で発動できるというこれまた無駄な奥義である。

なお、妖刀の状態で聖剣および魔剣の力を発動した例は海底で刹那がキリユウから龍を具現させていたときである。

その無駄に高い技術とは、魔力を妖刀と同調させることである。

気や魔力が同じ周波数にならなければ妖刀の状態で聖魔剣の力を引き出すことはできない。

「く・・・なんだあの剣士！？俺の兵器を全てぶっ潰しただ！？
こうなったら援軍を呼ぶしかない！おい、お前！早く援軍を呼べ！」
「それはできない相談です、大佐」

「え？」

「残念ね、私の包囲網からは逃げられませんわ」

逃げおおせてきた小僧は気付けば軍人たちに囲まれていた。

もちろん、銃を構えて。

そしてその中心には千秋が魔性の笑みを浮かべながら立っていた。

「な、何故だ・・・お前ら、俺を裏切る気か！？」

「決して彼らは裏切ったわけではありません」

「じゃあ何なんだよ！！！」

千秋はここで軽く微笑んだ。

「私の、洗脳魔術です」

「洗脳だと！？」

「私は目を合わせた者を意のままに操ることができます。もっとも、
魔力抵抗が強い人には私の力が及びませんが。まだまだ私も未熟で
す」

「ありえない・・・魔術など・・・この世に存在するのか！？」

「残念ですが、存在します。私は何人もの魔術師を知っています」

「そ、そんな・・・ありえん・・・そんな非科学的なことなど・・・！！」
「知っていますか？中世では化学は悪魔の技術として恐れられていたことを。世界は悪魔によって作り出されたものと言っても過言ではないのですよ」
「そうらしいです。」

なんかの文献に書いてあったような気がします。

「俺は・・・俺は・・・」

「どうしますか？場合によっては私は見逃しますよ」

「こんなところで死んでたまるか！！条件はなんだ！！」

「そうですね・・・それじゃあ、地べたを這いずり回って「私は犬です」とでも言ってもらいましょうか」

「ふ、ふざけんな！そんなことできる訳ねえだろ！！」

そう言うのと小僧は隠し持っていた銃を突き出した。

「死ね、お前ら！！」

「そうですか、残念です」

千秋がそう言った瞬間、銃声が響き、大佐が大地に身体を沈めた。

「うう・・・」

「私は駿以外の前ならいつでも残虐になれます。そこまでして生きていられる人は駿以外にはいませんよ」

それを聞いた大佐は、冷たい地面に横たわる身体を重そうに動かし、少し笑って息絶えたのであった。

最終章第5話 魔女狩りが行われた理由がよくわかりました

オレが目を覚ましたのはあれから数日後らしい。

千秋が宿を手配してそこでつきつきりで看病してくれたそうだ。

「・・・おはよう」

「お、おはよう！？よくそんなことが言えますね！駿はもう数日間目を覚まさなかったというのに！！」

「あ・・・ああ、たぶんただの疲労だから」

「疲労でこんな・・・どんな奥義を使ったのですか？」

「あの兵器を全て氷漬けにするくらい強烈な奥義」

なお、先日千秋が奴を殺した場所は違う基地でした。

「ふう、よくもまあそんなことができますね」

「当たり前だろ？オレの奥義を舐めないでほしいな！」

「そう言う意味ではありません！こんなになることくらい予想できなかつたのですか？」

そっちの意味ね・・・ははは・・・。

千秋の目が怖い・・・。

「良いですか、駿は悪魔と契約しているとはいえ、元は人間なのですから彼らよりも力が劣るのは当然です」

「コキュートスはオレの気の範囲を超えていたから妖刀からの気の補充が間に合わなかつたようだ。」

「・・・ごめんなさい」

「分かればよろしい」

千秋がいつも以上に強気なのはなぜだろうか。

「お二人さん、早くお逃げなさい！」

宿屋の主人がいきなり部屋に入ってきてそう言い放った。

今は別に何もしていなかったからいいけど、やってたら気まずい雰囲気だったろうな。

「何が起きた？」

「魔女が現れたんだよ！！！」

魔女？

「凶悪ではなければ魔女くらい簡単に退治できるが」

「それが凶悪なんだよ！店を杖から発せられる光線で焼き払い、商品盗んでいくという」

極々普通だな。

普通の盗賊と何ら変わらないだろ。

「んじゃ、見てくるわ」

「兄ちゃん、逃げた方が身のためだよ！！！」

「駿なら大丈夫ですよ、私が保証します」

駿に続いて千秋も部屋を飛び出して行った。

「んぐ、どこにあるんだろうね、時空を超える球は」

魔女と思わしき人物発見！

スゲー砲撃。

普通に店だけが跡形もなく……。

しかも都合よく商品だけ残ってるし……。

……これじゃあ魔法使いじゃなくて魔砲使いじゃねえか。

ん……魔砲使い？

……。

「あら、お久しぶり」

ここ数カ月姿を見ていないとすっかり忘れるもんだ。

周りの奴らはこんな人がいたなあって思うだけだろうが、オレはこいつだけは忘れない。

オレがどれだけ強くなっても決して勝てない究極の魔法使い、もとい魔砲使い。

「片瀬はやて……19歳！」

「年齢まで言わなくてもいいのよ、ね」

「ギリギリ20代になってませんね」

「つか19歳だっけ？（作者も忘れました）」

えっと、確かこの話が始まったのが中二の12月。

沖縄に修学旅行に言った話から始まったんだよな。

その時にオレが14歳。

はやて姉が18歳。

あれから二年経ってるから……。

「ごめん、20歳だった」

次の瞬間、オレは死を体験しました。

「んで、はやて姉は何時からここにいるの？」

「二月ほど前からかな」

「大分いるんだな。オレもここんとこ本部にも学院にも姿を見せていなかったからはやて姉がどうしているのかさっぱりだった」

「・・・駿、おかしいですよ」

え？

何が？

「つい最近、1週間前にはやてさんからメールが来ていますからえ？」

「どうやらあちらの世界とは時間軸が違うみたいね。内容は忘れたけど最後にメールしたのがここに来る前の二カ月前だもの」

そうか・・・よくわからんが、それで納得しておこう。

「そう言えばはやて姉はこの重力平気なのか？」

オレと千秋はエスナの力で重力の影響を軽くしている。

ざっと地球で暮らしていた頃の重力と同じくらいの重力で。

「私にはそんなものは通用しないわ！私を誰だと思っているの！！」
まさに悪魔を超えた悪魔。

恐らくエスナと戦っても互角に戦えるだろう。

下手すりゃ勝つよ、この人。

「あ、駿くんは知ってる？異次元に飛ぶことのできる伝説の秘宝があるということを」

「そんなものがあるのか？」

「私の仕入れた情報が正しければ」

「私たちは異次元に飛ぶことのできる洞窟という情報を仕入れましたが」

「異次元に飛ぶ方法は沢山あるのか、それともどれかが誤りなのか」「ひとつひとつ潰していく必要がありますね」

全く、面倒なことに巻き込まれたものだ。

「それじゃあ、先に洞窟を目指しましょう。私の情報は、どこにあるかすら分かっていないのだから」

「確かここより少し戻ったところにあるそうですね」

「ジーサンはそう言っていたな」

行くあては決まった。

今はそこしか手がかりがない。

少しでも早く元の世界に戻るには、小さな手がかりでも調べてみるしかない。

「決定だ。明日、洞窟に向かおう！」

そう言っただけでオレは体力を温存するために、寝た。

「寝るの早いですね」

「ふふ、昔から何かのイベントの前日にはこうだったからね」

最終章第6話 バルスは桃源郷に飛ばすという特殊効果を持っているようです

「ここに集まってもらったのは他でもない、片瀬夫妻失踪事件についてだ」

俺こと轟騎が駿関係の奴らを集めてこうして話をしている。

「片瀬夫妻って・・・結婚したのか？」

亮平が俺に聞く。

「駿はまだ16だ！結婚はできない！」

「ああ、そうか・・・。それで、俺達は何すればいいわけ？」

「丁度いいことに未来からわざわざ来てもらった洗くんもいるからな。彼は時空を越えることが可能だ！」

「ちょ、ちょっと待ってください！ボクは女です！」

「んなこと気にすんな」

「気にしますよ!!」

「それで、彼女に時空を越えて彼らが失踪する時まで戻ってもらう」

「数章越えての登場でこの扱いですか、はいはい」

「どうやらお疲れ気味の様です。」

「それで、どうする。メンバーは」

「ここに来たメンバーで今まで登場した奴らでよくない？滅茶苦茶空気の奴らも多いけど」

「比較的登場回数多い連中から優先で」

「海底に一緒に行ったメンバーは必須だな」

「つーことは俺と亮平と刹那さんと骸とフレアか」

「錬磨は？」

「誰それ」

「ああ、そう」

「おい！入れるよ！」

「んじゃ、後は誰？」

錬磨の声は当然の如く聞き入れられなかった。

「専属メイドのはるか」と

「そう言えばそんな奴いたなあ」

「すいません、空気で」

「双子の妹、暁と」

「なんで実の妹のウチより義理の妹の刹那ちゃんの方が多いんや、納得いかん」

「文句は受け付けません、それから戦力にはならないが、心の休みどころのつばさちゃん」

「え、はい・・・久し振りだね、登場。これから出番増えるかなあ」

「残念ながら今回で最終章です」

「はあ、だいたいそんな扱いだよね・・・非戦闘キャラって」

単に入れるスペースがなかったただけである。

「これで決定。違う時代お方と中国人と電波と魔術師双子と野性児と・・・他に誰かいたっけ。まあいいや。君たちお休みで」

「最後の最後まで出番がなくて残念ですねえ」

というわけで、俺達は駿の失踪した時代に飛ぶことにしました。

失踪当日夜

「お、寝室に入っただぞ」

「恐らくこれから失踪するんだろう。もう夜だから眠いし、交替で見はろっ」

「ならば最初は私がやろう」

率先して手を挙げたのが刹那さん。

彼女なら、駿が力を封じられたりしてもそうそうやられないだろう。普通の敵なら撃退できる。

「それじゃ、お願いしようかな」

「あのメンバーの一人だし、比較的信用もできるしな」

「どうやら亮平は信用しているようです。」

「いざとなったら俺を起こせよ。委員長と俺なら銃だから遠距離にも攻撃が届く」

正直銃は中距離で使うのが一番です。

狙撃銃でもないその銃の場合は。

2時間後

「な、な、な・・・何しているんだ、片瀬は!!」

ふっと目を覚ますと、小声ながら怒鳴っている刹那さんがいた。

他の連中は眠っている。

「なんだ、どうしたんだ？」

刹那さんがこちらを向く。

凄く動揺しているようだ。

どうしたんだ、一体・・・って、うおおおおおおお！！

「駿、お前も男だ。やはり女性と眠るとなるとやはり手は出せずに
いけないか」

俺はひとりで納得した。

「ご、轟騎！何故止めに行かない！？」

「何言ってるんだ、彼らのはあんなにも愛し合っているじゃないか」

「あ、愛し合ってる！？あああああんなことしていてか？」

「うむ、君も好きな人ができれば分かるさ、きっと。好きな人とは
あんなことをしたいものだ」

愛の伝道師・小野崎轟騎は語る。

「ん・・・何の話してるの？」

眠そうな目をしたつばさちゃんがふっと起き上がってこちらを見た。

「単刀直入に言う。駿と千秋さんがやってる」

「へえ・・・そうなんだ」

特に異論はないようだ。

「な、何であんなこと・・・」

「あれ、もしかして刹那ちゃんって処女？」

「つかつばさちゃんは処女じゃないんだ」

意外だ。

こんな感じの子が・・・。

「うん、だいぶ前に駿くんを抱いてもらったよ」

・・・え？

ん、あ！

理解した。

「うん、駿は浮気したってことだな」

「だね」

本当に眠そうで微笑みにも眠気が混じっている。
起きているのもつらそうなので、もう寝ていいよと言ってみる。
すると、すぐ寝た。

「終わったみたいだ」

「フィニッシュしたようだな・・・にしても駿の奴、なんてしごと
い・・・」

どうやら駿はかなり強力なようだ。

と、んなことはどうでもいい。

行きすぎないようにしないと。

「・・・寝るの早いな、奴ら」

二人はそのまますぐに寝てしまった。

最終章第7話 弱小悪魔など、瞬きする程度の力で抹殺可能だ

「洞窟ってここか」

「それより、ここから見える景色は綺麗ね。もう少し見物していきましょ」

「私は構いませんが、駿が怒っているようですよ」

「はやく姉はどこからのんびりしたセリフが出せるのか。そこがまさに謎。」

「一刻も早く帰りたいってのに!!」

「本当に綺麗・・・ん、あれ？あそこにいるのって轟騎じゃない？え？

んなバカなことが・・・。

「バカなことは起こるもんだ」

轟騎が平原で遠くを見渡していた。

その上、他の連中まで来ていやがる。

あれは・・・亮平、骸・・・つばさまで巻き込まれたのか・・・。

他の連中は多分これからも空気で過ごすだろう。

レギュラー以外の連中は出すのも面倒だ、と作者は語っているぞ。

そしてそもそもどんな性格か忘れてしまった上に、最初から読みなおすのもめんどくさいと言いつ張っている作者がいるぞ。

「バカな作者はシカトしておくか」

裏話はこれくらいにして、

「てめえら、何でここにいんだよ」

「おお、やっと見つけたぜ。あれから大変だったんだ。お前の部屋を覗きに行ったら千秋さんとやっててな。んで急に光が発せられて気づいたらここにいたんだ」

イケメン率が高いこのメンバーで唯一の普通と思われる轟騎は語る。つかこいつ見てやがったのか!?

「うん、千秋さんが意識が朦朧としている中で全然ビクともしない

お前には正直驚いた」
そんなこと言わんでいいわ！

「それで、オレはこれから帰る予定だが。お前らはどうするんだ？」

「ん？俺はお前の無事を確認しに來ただけだから帰るよ」

「そうか・・・でも、どうやって帰るんだ？」

「そうだな、どうやって帰るんだ？」

・・・。

「帰り方しらねえのかよ」

「当たり前だ」

「てかお前最近キャラ変わってきてないか？」

「・・・どうせ最終章だ！」

うわ、この人言いきった・・・。

「とりあえずオレたちは帰れる手がかりを虱潰しにしていく」

「んじゃ、俺達も便乗するか」

と、言うわけでRPGで言う、轟騎が仲間になりました的な展開が起きた。

「最初はどこ行くんだ？」

「その洞窟です」

轟騎の問いに、千秋は簡潔に答えた。

「案外近いんだな」

「近けりや近いほどいい」

「そうだな」

いつの間にか目を覚ましていた亮平と骸も一言ずつ発した。

多分、セリフの数が減るだろうから今のうちに稼いでいるんだな。

「・・・女性陣がないぞ」

「つばさちゃんはいるけどな」

「他にも連れてきたのか、お前らは」

「うん、えつと・・・メイドさんと、未来人と、エセ関西人と・・・」

「

メイド・・・はるかか。

未来人・・・未来の梨瀬や翠香か？

エセ関西人・・・これは暁だな。

「他には刹那さんとかなんか鎖持ってる人」

「刹那はいるとは思っていたけど、まあ・・・だな」

何が「だな」だ。

自分で言っておいて自分で理解できず。

「そいつらも探さなきゃいけないのか・・・。しかたない、探すとするか。洞窟は後回しだ」

今帰ってもな、また来るのも面倒だ。

「召喚を行う。千秋、広い場所に魔方陣と三角形を描くのを手伝ってくれ」

「はい、分かりました」

数分後、比較的小さめの召喚陣が完成した。

オレは基本的に用意は簡単なものでいいのだが、ここは異世界。何が起るかはわからないので、一応正しいやり方で召喚を行う。召喚に必要な短剣の代わりに刀を用いることにした。

ローブは残念ながらないため、使わずに行う。

聖水は魔術を使う時に必須なため、はやて姉が持っていた。

はやて姉の魔砲は直接は関係はないのだが、生命力に魔力も消費して魔砲を放つ奥義もあるそうで……。

なお、はやて姉には魔力はなく、他の人から供給しなければならぬ。

しかも消費する生命力も自分以外の生き物から奪うなど、自分は何も失わないという非常に都合がいい設定になっている。

オレが召喚するのは、今回は天使ではなく悪魔。

悪魔と言えば悪いイメージがある。

だが、実際にはそうではない。

天使だって悪魔よりも悪い天使もいる。

力を借りようとすれば、悪魔も力を貸してくれる。

それに、悪魔よりも天使の方が召喚が面倒なような気がする。

いつかは神の召喚も行ってみたいものだ。

そんなことをしたらいつか天罰が下るかもしれないが……。

まあ、そんな感じで召喚を試してみた。

「要求は？」

結構テキトーな悪魔だった。

「人探しを手伝え」

命令口調、これ重要。

悪魔には自分の方が絶対的に上だということを教えてやらねばならない。

だから重要。

悪魔に謝ったり、礼を言ったりも厳禁だ。

反逆するかもしれない。

そして悪魔の答え。

「どんな人間だ？」

案外普通。

すんなり聞き入れてくれるとはね。

「刀を装備した女、拳闘士の女、鎖使いの女、メイド服の魔術師の女、未来人の女・・・」

「ひとつ言わせてもらおう。刀を装備した女なんて山ほどいる」
なに！？

ここは軍事国家ではなかったのか！？

「拳闘士の女はこの近辺にひとりいる。顔の風貌は貴様に似ている」
恐らくそれが暁だろうな。

「メイド服の魔術師。これは案外簡単だ。この世界ではメイドは銃よりも剣・・・ましてや魔術など使うやつはメイドはおるか普通の人間にはいない。魔女狩りが行われているくらいだからな」

悪魔曰く、そうらしい。

オレはしらん。

「鎖使いの女。鎖使いなど聞いたこともないが、腰に沢山の鎖をぶら下げた女が先ほど気配を現した。貴様の後ろに」

ん？

後ろ？

「いててて・・・」

「いた」

時間軸はやはりずれているようだ。

「最後、未来人と言われても意味が分からない。刀を装備した女よりも情報が少なすぎる。ふざけんな」

文句言われたし。

「分かった。お前はそのままオレのそばに拘束しておく。当分はオレの指示に従え。刃向うようであれば、殺す」

「人間如きが・・・この三角形さえなければ！」

「ふふふ、オレを舐めてもらっては困る！」

オレは調子に乗っている悪魔を見ながらパチツと、指を鳴らした。すると、オレの後ろには強大な天使が凄まじい気を漂わせながら現れた。

「・・・天使だと!？」

「悪いがエスナは天使としての地位は低くはない。悪いがエスナ、名乗ってくれ」

「エスナ。階級は熾天使だ。貴様のような弱小の悪魔など、瞬きする程度で力で抹殺可能だ」

実際そうです。

「それじゃ、絶対に従えよ。オレは熾天使なしでも貴様程度の弱小悪魔は捻り潰せるから、その点だけ要注意な」

オレは警告して、無理やり悪魔に従えた。

最終章第8話 悪夢再び、恐怖の最終兵器

「ここにいるのか？」

「ああ、この平原のどこかにいる」

全く使えない回答だ。

どこかとか言うアバウトすぎる回答は欲していない。

オレは名もなき悪魔に暁の居場所を尋ねていた。

聞くとときも常に刀を構えて。

「さつきから思うが、その剣は何なんだ。普通の剣とは感じが違う」

「・・・妖刀。オレはつい先日まで妖刀と呼ばれる所以がこの刀たちが人の姿を取ることができるからだと思っていた。だが、これを見る」

オレは妖刀に命じた。

「真の姿を現せ」

・・・と。

「それは・・・」

「エクスカリバー。名前くらいは聞いたことがあるだろう。湖に捨てられた後、現在に至り妖刀と化した」

「それが本当の力なのか」

残念だな。

「残念ながらこれが真の力ではない。妖刀が魔力を開放したときに聖剣の姿を取ることができが、実はまだあるんだ。それが、オレの魔力とのシンクロ」

魔力の解放をシンクロさせることにより、強大な力を発揮する。

その力は以前見せたとおり、基地全体を凍らせたり、簡単に兵器を大破させたりすることができる。

「まあ、これにオレの流派の奥義を組み合わせることにより、簡単

に貴様など葬れる。いや、通常の刀の状態で充分だな」
オレが召喚した悪魔はそのくらい非力な悪魔である。
どうせ探し物専門だしな。

戦闘に使うのであればもつと大がかりな召喚陣も描いただろう。

「それじゃ、入るか」

無駄に話が長くなった。

「駿くん、前方に兵器の気配・・・というよりレーダーが察知して
る」

はやて姉・・・。

んなアイテムあるなら先に言っておけよ・・・。

「確かに、見えるな」

フレアも見えるのか。

「おれ視力はいいんだ」

そうですか、オレは最近視力が落ちてきた感があるんだが・・・。

「んで、どうするよ？」

「ん〜、まあ、私最強だから大丈夫よ」

うわぁ、この人自分で最強って言ったよ・・・。

「それじゃ、最強の力を見せてあげるわ！」

そう言っってはやて姉は杖・・・もとい魔砲を構え、あたりの植物が
ら生命力を吸収し始めた。

未だかつてない程の吸収力だ。

植物が見る見るうちに枯れて行く・・・。

「スーパーノヴァ・デストロイヤー!!」

次の瞬間、あたり一面焼け野原になった。

つかスーパーノヴァ・デストロイヤーって・・・。

超新星破壊者・・・であってるのかな・・・。

デストロイヤーって言う表現を攻撃名に入れていいのかも思うが、
良くブレイカーはつかわれるからありなんだろう。
そう言うことにしておきましょう。
なお、オレはこんなことできません。
範囲が違い過ぎる。

「それで、暁はどうするのよ」

「巻き込んだじゃったかもね」

「かもねじゃねーよ!？」

「・・・仕方無いな、手分けして探すか」

というわけで搜索が開始した。

「と、駿が思った瞬間、すぐそこに倒れていた」
骸がナレーションを務めた。

しかもオレが思った瞬間って・・・。
というわけで搜索が開始した。
って思ったっつーか解説しただけだし!？

一応、声をかけてみた。

「あ、暁？」

「なんでウチってこんなに不幸なんや」

「は？」

「ああ、それね。ごめんね、巻き込んだみたい。ま、でもとっさに防御したみたいだったから大丈夫ね」

ひ、ひでえ……。

そして、こええ……。

はやて姉には一生勝てる気がしない。

未来に行った時もはやて姉には勝ててなかったからな。

絶対に勝てない。

「それにしても凄まじい力です。ここまでできる魔術師や兵器はあなた以外に存在しないでしょうね」

「オレも流石にここまでできないからな」

「片瀬にできないんなら、俺達にもできない」

「所詮銃じゃ焼き払うことなど、不可能だ。……もしかしたら轟騎ならできるんじゃないか？」

「残念、俺は気を使うことに長けていないんだ。錬金術で戦闘をサポートしているという感覚に近い。それ以外は普通の兵士と何も変わらないさ」

皆がはやて姉の魔砲を褒め称える。

それだけ凄いことなのだ。

「そんなに褒められても困るわよ、だって全然本気出してないだから」

……。

彼女が本気を出したら星が破壊されそうで怖いです。

「骸、言い忘れていたわ。さっきの言葉は取り消しなさい。銃は一

撃必殺なんだから」

はやて姉が付け足すように言う。

「ん・・・ああ。だから俺は銃を使う。剣なんかじゃできない、最高の必殺を」

「銃を使う人間なんてみんなそうだ。剣よりも遠く、剣よりも近くから攻撃でき、かつ威力も高い」

「まあ、欠点もあるわ。銃は弾丸を失えば使い物にならないこと。それを補うのが、私の持つ魔砲。今から、これを亮平と骸に伝授しようと思うの」

え？

「は？」

「無理だろ」

「駿くんには奥義があるわ。轟騎にだって錬金術がある。そして私たちの中で唯一、術という術を使わないのが貴方達」

確かに、オレには奥義や召喚術がある。

轟騎にも錬金術がある。

刹那にも奥義と風魔法があるし、フレアも千秋から洗脳を学習中とかなんとか。

戦闘要員の中では使わないのは銃組の約二名。

「禁術だってことは分かってる。だけど、私たちはもっと強くならなきゃいけない」

何語ってんだよ。

充分つえーよ。

つかはやて姉いる時点で無敵だから。

「だから、私はあなたたちにこの術を授けようと思う！」

何シリアスっぽく振舞ってんだよ。

「私も、いつか死ぬかも知れない」

人は誰でも死ぬよ。

「その前に、私は二人にこの術を教えなければならぬ」

何その使命感。

「さつきからづるさいわよ、駿くん」

こ、心読むなよ……。

「ええ、私は心を読めるわ。轟騎、今は柚季のこと考えるんじゃない。骸、何エツチなこと考えてんの？亮平、お前今面倒だって思ったでしょ」

みんな凶星のようで戸惑っている。

はやて姉、恐るべし。

と、言うわけで骸と亮平ははやて姉のスパルタ教育を施されることになった。

そして次の日、骸と亮平が死人のような顔をしていたことは言うまでもない。

しかも結果的に使えるようになってないのが現状であった。はやて姉のスパルタ教育はまだまだ続く。

最終章第9話 そのお姉さん、街の行方を知りませんか？

今日も骸と亮平の悲鳴で目が覚めた。

これで4日目か。

あいつらも災難だな、よりによつてはやて姉に目をつけられるとは、轟騎は自分が選ばれなかった瞬間、すげー嬉しそうな顔してたからな。

そんなくらい酷いもんだ。

「あ、駿くん起きた？身支度ができたら買い物に行ってきたん？」

オレ以外にも行く奴はいるだろう？

「それがね、千秋ちゃんは熱で寝込んでるのよ」

千秋が？

「千秋のところに行ってくる」

「あら、言わなくても心読めるから大丈夫よ」

心読むな！！

千秋はぐったりとしていた。

「あ、駿。おはようございます・・・今朝ごはんの支度しますね・・・」

ホント具合悪そう。

声聞いただけで分かるくらいに。

「無理するな。オレも料理ならできる」

うん、普段やらないだけだ。

「千秋はゆつくり休め」

「分かりました」

んで、買い物だっけか。

「駿くん、暁と一緒に街まで買い物に行ってきた」

「ああ、分かった」

暁か。

随分長い間話していないな。

まあ、この際だからいろいろ話すか。

「暁、買い物行くぞ」

「ん・・・駿？」

暁は寝ていた。

「はやて姉が配慮してくれたんだろう。出番が少ないから」

「出番が少ないって言うなー！」

暁は怒っている。

だが、オレには関係ないさ！

オレはほとんどの話に出ているからな！

主人公だし！

そして主人公補正として無駄に強いしな！

つと、んなことはどうでもいい。

街に行くか。

街についた。

「着いたはずだよな」

「昨日まではここにあった」

・・・。

「何故街が消えている」

「まさかはやてが破壊したんやないか？」
「んなまさか。」

「だったら買い物に行かせないはずだ。」

・・・。

「駿、あそこに誰かいるよ」
「誰だ？」

「剣を持っているな。」

「おかしい。」

「この国の主力つーか標準装備が銃なのに。」

「・・・まだ残っていたの？」

「剣を持った誰かがちらつと振り向いた。」

「お前が街を消滅させたのか？」

「想像に任せるわ」

「ウチら買い物できへんと困るんやけど」

「そう、それは残念ね」

声から想像するに恐らく女だ。

ローブを着ていて顔はよく見えない。

「お前はどこのデイマクだ？」

「誰それ。私はナナリーという名があるわ」

いや、ローブについたフードのせいで顔が見えないからデイマクって言ったんだが。

まあ、女だからミステイの方がよかったか。

「まあ、姿を見られたなら仕方ないわ。あなたたちをここで始末する」

何この普通な展開。

「駿、危ない！」

うおおおおおおおおお！？

な、なんだあれ！？

暁が助けてくれなかったら刺さってたぞ！？

つと、何が起きたかというと、ナイフ投げられました。

しかも反応遅れた。

余計なこと考えてたし。

「大丈夫？」

「ん、ああ」

珍しく守られたオレであった。

「ウチが相手になつてやる」

暁が指をポキポキと鳴らしながらナナリーに近づいていく。

そして、目つきが戦闘モードになっている。

対して無言のナナリー。

「ウチからいくで！リミット・バスター！！」

まあ、原理は分らんが拳からビームを出した。

それをナナリーはあっさりと避ける。

「攻撃のつもりかしら？」

「まさか」

さっきの瞬間の回避で分かったが、ナナリー・・・彼女は強い。動きが違った。

「暁、下がれ。オレが行く」

「いやや、ウチがやる!」

「黙れ!死にてえのか!？」

オレの叫びにビックリした暁は、恐る恐る引いた。暁じゃ勝てない。

絶対に。

「オレが相手をする」

「・・・あなた、なかなか強いね」

当然だ。

主人公だからな。

オレは刀を抜く。

オレが使う刀はシロガネ。

正確には、クラウ・ソラス。

「シロガネ、力を解放しろ」

シロガネのセリフは省略。

もう面倒(作者が)

光の中、聖剣が姿を現した。

「オレに牙をむいたこと、後悔させてやる」

いかにも悪人っぽいセリフを吐きながらオレは剣を構える。それに対して、ナナリーは若干笑っただけであった。

そしてオレとの戦いは始まる。

暫く剣を打ちつけ、様子を見る。

剣を交えて分かったことは二つ。

ひとつは、彼女の剣術は全然見ない剣術だということ。

そしてもうひとつは、その剣術は非常に強力だということ。突然、斬るように突いたり突くように斬ったり、余計な行動のせいで行動が読みづらい。やはり強敵だ。奥義で決めるか。

「真・一刀奥義・ダイヤモンド・ダッシャー!!」
オレは大地を一閃。
「くっ!!」

ナナリーはその一撃を剣で受け流す。やはり強敵だ。普通ならば真つ二つに切断されていた。だが、剣はその力に耐えきれなかったようで、粉々に砕け散っていた。

「……私の剣を壊すとはね……。いいわ。本気で行ってあげる」
本気……。じゃなかったのか？

「上には上がいるのよ!!」
そう言い放ち、彼女は空をつかんだ。その瞬間、まるでメーネのような双剣が突如姿を現し、彼女の手に収まった。

その剣は形こそメーネではあるが、実体をもたないようで光の集まりのようだった。
なんていえばいいか……。まあ、ライトセーバー？
まあ、いいや。
とりあえずサイバーな感じの剣であった。

「かかってくるなさい、遊んであげるわ」

その剣を構えた時のナナリーの威圧は、まるで別物であった。

最終章第10話 今更ライバルかよ・・・遅くないか？

・・・おい、ふざけんなよ。

なんだあの威圧感・・・。

悪魔ですらあんな威圧感はねえよ・・・。

「あなた、悪魔に近い気配を感じるわ」

悪魔のようなものですから。

そして暁はすっかりおびえきっている。

オレはこいつが怖い。

悪魔なんかよりもずっと怖い。

「この剣を見ることができただけでもすごいわ。それじゃあ、死になさい」

ちよ、マジやばいって！！

ナナリーのメーネは電撃を纏ったようにバチバチと音を立てながらオレに襲いかかる。

そしてその剣を受け止めた。

ナナリーの剣はとても強力で、その衝撃にオレの剣は悲鳴をあげた。

「ウソだろ!？」

妖刀が音をあげた。

なんとか攻撃をしのいだが、剣が刀に戻ってしまった。

魔力を使い果たしかけている。

これ以上使い続けたらそれこそただの刀になっちまう。

時間をおけば回復はするが、今は無理だ。

「た、耐えきった!？」

あっちもあっちで驚いている。

「マジで決めないと・・・こっちがヤバイ」

オレはカスミとゲツカの二本を構える。

「魔力解放・・・そして、魔力のシンクロ!!」
二本同時のシンクロはなかなかキツイが、それでも今はやるしかない!!

「やはり、ただものじゃないわね」
そりゃそうさ、オレは悪魔に準ずる存在になっているんだから。

こいつは強敵だ。

一撃で仕留めなければ・・・こちらが危ない。
しかも暁もいる。

下手に動かれたら暁も危ない。

暁のことだから最低限の防御で助かるかもしれないが、その見込みは少ないだろう。

シロガネの魔力を一気に消費させたあの威力だ。

暁が受けたらどうなるか分からない。

下手すれば死ぬ・・・。

オレから動かねば・・・。

「あなたとの戦いは楽しいけど、そろそろ終わりにしないと」
ナナリーは剣を構える。

「同感だ。オレも待つてくれている人がいるんでね」

オレも刀を構える。

お互い意識を逸らさない。

そして、ピクリとも動かない。

瞬きすらしない。

その状態で一分が経過した。

瞳が濁ってきた・・・。

瞬きくらいいだろう。

オレが目を一瞬閉じた。

その瞬間だった。

ナナリーも同時に瞬きした。

何この襲いかかってくると思せかけて同時に瞬きするって。

その後も何度も似たような動作をしながら30分が経過した。

そろそろ魔力が枯渇しそうだ。

重い一撃を繰り出さなければ。

「神・十八代目二刀流奥義・フレズベルグ!!」

「シェヴァリエ・ファイアー!!」

お互いの奥義が炸裂する。

その威力は互角。

オレの奥義は、二本の刀を翼に見立て、その羽ばたきで劫火を巻き起こし、敵を焼き払う鴻漸之翼の第三形態。

フレズベルグの翼に見立てたのだが、フレズベルグが何だか知らない人はwikipediaで調べてくれ。

手っ取り早く説明すれば神話の鳥だ。

対するナナリーの奥義(?)は、光のメーネから高圧(か、どうかは知らんが)の電流を流し、その稲妻で敵を貫く(と、思われる)奥義。

凄まじく強力である。

マジで止めたいくらい強力である。

なお、シェヴァリエはフランス語で騎士の意味、ファイアーは英語で恐怖という意味である。

言語が違う物の組み合わせの上に意味が分からないというおまけつきである。

だが、強い。

「ぐああああああああああああああああああ！！！！
え、オレ負けたの？」

「きゃああああああああああああああああ！！！！
どうやらやられたのはオレだけじゃないようで。

……。

「……まだ、体は……動くか」

「なかなかやるわね、あなた」

「お前ほど強い人間は初めて見た」

マジで強かった。

オレと相討ちとはいえ、今までんな人間いなかったからな。

「今日は調子が悪かったようね」

オレとナナリーはゆっくり、痛みが迸る身体を起こしながらお互いを見つめた。

「あなたの名は？」

「片瀬駿。お前みたいなお奴に出会えてよかった」

「改めて名乗るわ。私の名はナナリー・セシル。私もあなたみたいな人がいるとは思わなかった」

どっちも名前みたいだなあ。

「最終章でようやくライバルみたいなライバルが登場かよ」

「この話、既に最終章なのね……」

残念でした。

「真の強敵は、目の前にはいないものだよ……覚えておきなさい」

「どういう意味だ？」

「自分で考えることね」

そう言つと、ボロボロの体を引きずりながらどこかへ立ち去って行った。

オレも立つのが精一杯なくらいにボロボロだ。

「駿、大丈夫!？」

「なんとか・・・うつ」

今頃になって傷が・・・。

内部まで損傷しているのか。

血が喉から・・・。

「エスナ・・・治療を頼む」

エスナはほとんど万能の天使。

神に近い存在である。

だが、神には勝てない。

神によくある、能力がひとつだけ特化することがない分、エスナの総合能力は神クラスかもしれない。

「無理だ、お前の損傷を抑えるのに全力でかかった。今は人間界に居座る事で精一杯だ」

ど、どんだけあいつ強いんだ・・・。

「リアなら何とかかできるかもしれない」

ああ、そうだ・・・。

リア・・・は・・・そうか、千秋の所に置いてきてしまったな。

ダメだ、もう動けねえ・・・。

オレの足は少しずつ崩れていく。

そんなオレの体を暁は優しく支えた。

幸い、オレの身体は軽いから持ち上げるのはそれほど苦ではないだろう。

「無理せんでええのに」

「無理したいんだよ、オレは」

「でも、ありがとな。駿が変わってくれへんかったら、命落とすった」

オレですら命を落としかけたんだからな。

普通の人間はおるか、戦闘のスペシャリストですら死んでいただろう。

悪魔の能力あつてのこの命だな。

「駿、どうしたら強くなれるのやるか」

「オレにも分からない。でも、オレは自分を本当に強いとは思っていない」

「え、なんで？」

オレは暁に支えられながら一步を踏み出した。

それと同時に返答した。

「なんでだと思っ？」

「ん〜、ウチには分からん」

「・・・オレは心が未熟なんだ」

そう、心が。

「なんで？」

「そりゃあ、人間は完璧な人なんていないさ。一見完璧に見える千秋ですら、母親としての心がまだよく分からないそうだ。オレも同じ。父親としての心はおろか、人を思いやる気持ちも、その戦いに込める思いも、オレにはまだまだ足りない」

なんか話が脱線した。

まあいいや。

ようはオレが未熟だということさえ、暁に伝わってくればいいんだ。

「そんなこと言ったら、ウチも未熟やないか。ウチだって最終奥義は使えへんし、駿には守られてばっかやし」

「ふふ、守りたいものは最後まで守り切るのがオレの主義だ」と、言いつつ、今思いついた言葉を吐いてみる。

「頼りにしてもいいんか？」

「勿論。まあ、今回は無様に負けただけだな・・・ははは」

正確には相討ちか。

だが、オレはこれを受けとしてとらえる。

勝てなかった戦いは、負けたと思っていいだろう。

「次勝てばええやないか」

「勿論、そのつもりだ。不可能なんてことはないんだからな」

だが、その言葉を裏返せば、相手がオレに勝つことも不可能ではない、ということになる。

それでもオレは自分を信じて戦うしかない。

守りたいものを守るために……。

最終章第11話 魔砲の可能性は（破壊することに関しては）無限大！

「駿くん！？どうしたの!？」

「ははは・・・街消えたわ」

「そんなことどうでもいいよ!！」

かなり動揺しているようだ。

オレ一人じゃ歩けないからな。

「槍を持ってきてくれ。ゲイボルグを、リアを」

他の連中はすぐさまリアを持ってきた。

「主、随分久々に姿を見るが？」

「・・・文句は受け付けない。早速だが、治療してくれ」

「・・・仕方無い」

多少強引ではあったが、一応リアは治療を施してくれた。
オレは歩くことができるほどに回復した。

「それで、何でこうなったの？」

「謎の女にやられた」

「ま、まさか・・・駿くんが!？」

「駿が一方的にやられるだ!？」

「いや、一方的にはない。一応相手にも深手は負わせた」

「それに駿はウチを守りながら戦っていたんや。本気は出せへんよ」

「街ははじめから破壊されてたけどな」

「そう、分かったわ。それじゃあ明日の朝、ここを発ちましょう。

街もなくなってしまったなら、他の場所に移動するのがいいだろう

し、それに他の仲間も探さないといけないしね」

はやて姉はそれ以上オレを咎めることはなかった。

「千秋、動けるか？」

オレは千秋に出発すると言つ事を話しに来た。

「ええ、駿こそ大丈夫なのですか？聞きましたよ」

「そうか。はやて姉が明日出発するっていいだした。お前は大丈夫か？」

「なんとか。歩くのは流石にきついですけど」

勿論、千秋には召喚獣に乗ってもらつつもりだ。

「もしよければ、またオレと一緒に空の旅をしないか？」

オレは千秋を誘ってみる。

「具合がよくなっていればいきます！」

「分かった。それじゃあ、準備しておくよ」

そう言つてオレは召喚獣の準備に取り掛かった。

翌日

はやて姉がどこからか馬車を手配していた。
徒歩じゃないんかい。

まあいいや。

他の連中は馬車に乗せて、オレは空の旅でも……。

「駿くん、今すぐ千秋ちゃんと空に飛んで！」

「え？」

「はやく！」

……何が起きたんだ？

とりあえず、オレと千秋ははやて姉に言われるがまま空に飛び立った。

「よし、駿くんは空に行った。骸、亮平！軍を倒すよ！」

「予想より早かったな。間違いない俺達を犯人扱いするだろうからな」

「弁論も面倒だ。……殺す」

二人の銃士は銃を構え、軍隊へ走って行った。

「指揮は私に任せなさい！」

はやては自信を持ってそう叫んだ。

はやての技能ならば素晴らしい戦果をあげるだろう。

尤も、二人が忠実に指示を遂行できればの話だが。

「ここ数日叩き込まれた奥義、見せてやる！」

骸は高らかにそう叫んだ。
相当自身があるのだろう。

真直ぐに標的を見ず、彼の目線は多少それた位置を突き刺していた。

「バーン・リフレクター！」

骸の魔砲ははやてのそれとは違っていた。

両手に持った銃で、若干ずれた位置へ特殊な弾丸を放ち、それを魔砲で狙って反射させる。

彼は彼なりに魔砲を改良し、前方からの砲撃だけでなく、左右からの砲撃を編み出したのであった。

やはり威力ははやてには劣るが、ひとつの小隊を壊滅させるには十分な威力であった。

それを見た亮平もまた、彼の銃　　バーニング・エアレイドを掲げた。

彼も数日間、はやての魔砲教育を受けたものである。

彼は骸と違い、無言で標的を定め、銃を放つ。

だが、その魔砲はやはり二人とは違った。

元々バーニング・エアレイドは連射型の銃である。

それ故に彼の能力も連射に長けている。

そこから編み出した新たな魔砲。

「インファイニティ・ソーン！」

彼の魔砲は他の二人のような派手さはないが、元々あった精密射撃性能を生かしている。

連射型である。

力の消費も他の二人に比べて少ない。

一発の一発のチャージタイムも1ns^{ナノセカンド}ほどであり、凄まじい速度での連射が可能である。

他の二人が「力」の魔砲とすれば、彼の魔砲は「技」だろう。

そう思わせる力であった。

二人の活躍により、軍隊はあっさりと片付いた。まるでやっていることは悪人としか思えないが。

「はやてさん、法律とか守らなくていいんですか？」

「私たちは違う世界の住人だからいいの」

「郷に入っては郷に従えとも言っただろう？」

「気にしない気にしない。もうやっちゃったんだから」

・・・なんて奴だ。

彼らはそう思った瞬間、死を体験した。

最終章第12話 名前だけすごいといふことはよくあることです。

「……凄い」

「ああ、ここ数日で修得できる技じゃねえ」

空からあの戦闘を見たオレ達はただ、ただ感心していた。

戦闘の終結を見届けてから、グリフオンの翼を翻し、次なる街へと頭を向ける。

「次の街は……」

「小僧、メイドの女とやらが見つかった。今から示す街にいる」

急にあの悪魔が口を出してきた瞬間、脳裏に街が浮かんだ。

しかも都合のいいことに方向や距離まで教えてくれるという。

「はやて姉に交信してくれ」

何故かはやて姉が持っていた無線を持ってきた千秋に言う。

「……目的地が変更になりました……場所は……」

以下省略。

翌日、一足先についていたオレたちを追って残りのメンバーもやってきた。

「ここにはるかがいるのね」

「……街の人に聞いてみるか」

オレ達ははるかの搜索を開始した。

「すみません、ここらへんにメイドの少女を見ませんでしたか？」

「メイド？最近見ないけど・・・」

「そうですか、ありがとうございます」

まるでRPGの迷惑な勇者御一行のようにひとりひとり聞いていく。だが、三十人ほど話しかけたが見つかる気配はない。

そして次に話しかけた人だった。

「メイド？・・・ああ、確か次の闘技場での景品だったかな。この街は奴隷制度がまだ残っていてね、景品　　奴隷をかけて闘うことができる。それで、勝者がその奴隷を手にすることができる。死ぬ危険性もあるからなあ・・・確かそんなに出場者はいないはずだよ。それに銃も禁止だしね」

「そうなのか・・・ありがとうございます、有益な情報だ」
「はるかは捕まったか。」

だが、はるかは魔法を使うことができるはずだ。

何故、彼女が捕まるようなことに・・・。

一度集合し、情報収集の成果を話しあう。

「そう、捕まっていたのね」

「ん、おかしいと思わないか？はるかは首席で卒業した強力な魔法使いだろ？」

轟騎が率直な疑問を述べる。

「ああ。魔封じのアイテムを使ったか、それともそれ以上に強力な兵器で捕獲したのか・・・」

・・・確かめようがないな。

「武器は原則的に禁止なんだよな、その闘技場って」

「ああ、銃は勿論、刃物も使用禁止だ」

「魔砲は？」

「あれは杖、もしくは銃を使うから無理だろう」

それを聞いたはやて姉は舌打ちをした。

「私が出ましようか？」

ここで出てきたのは千秋。

確かに、千秋なら洗脳を行う事で相手を簡単に倒すことができる。

・・・だが、オレはひとつの危険性を考えていた。

「それは止めた方がいい。この世界はオカルト的なものは非常に嫌われている。恐らく、はるかも魔法使いだから捕まったのだろう。魔封じでもされたに違いない」

「・・・何が言いたいのですか？」

「・・・お前も魔女扱いされるかもしれない・・・と、言う事だ」

「そんなの洗脳を使えば・・・！」

「一度にたくさんの人間を洗脳できるのか？」

「・・・できません」

よろしい。

そして武器・魔法を使わない・・・という条件でこのメンバーで最強なのは・・・。

「轟騎、はるかの救出を頼めるか？」

久々に俺のターンだな。

現在、俺は闘技会の一回戦を控えている。

「武器はなくてもなんとかなるか」

「次の選手、どうぞ」

俺は足を進める。

たった三回勝っただけで優勝できる。

「対戦相手は小僧かよ！」

「おーっと、新入りに百戦錬磨の戦士が立ちはだかった！」

そんな声が聞こえた。

観客の方からは、「あらら、可哀そうに」だとか、「死んだな、こりゃ」とか聞こえる。

そんなに強いのか、こいつ。

「彼は現在30戦無敗の王者、ここで手に入れた奴隷の数はなんと10人！」

ほう、手ごたえがありそうだな。

それもそうか。

俺の握力は金剛石ダイヤモンドをも砕く。

岩なんぞとは、次元が違うんだよ！

「所詮この程度か。期待した俺が間違いだった」

俺は地面に蹲る王者さんを見下ろして言った。

泣き声しか聞こえない。

「審判、俺の勝ちだろう！！」

「待て・・・まだだ、右腕が粉々にされても・・・まだ左腕が残ってる！」

粘るな。

この戦い。

俺の勝ちだ。

「審判、ひとつ聞く。殺してしまっても構わないのだろうか？」

「ええ、可能であれば」

ふふふ、ならば手加減は無用だ！

殴りかかってくる王者さんの拳を避け、頭を掴む。

そして、握りつぶす。

頭蓋骨は粉碎されただろう。

大量の血と、グロテスクな物体が大量に飛び散った。

「服に血がついちまったな。汚ねえ」

この光景を見ていた観客は声を出すことができなかった。

最終章第13話 どうして魔法の呪文は厨二病じみているのだろうか

一回戦の戦いを見て、他の選手はみな棄権した。
よほど命が惜しかったらしいな。

流石轟騎と言ったところか。

「お疲れ様、轟騎」

オレは歩いて戻ってくる轟騎に声をかけた。

「物足りねえ」

「ははは、オレが相手してやろうか？」

「武器なしなら勝つ自信あるぞ？」

そうだな。

オレの奥義も全て刀がなければ使うことはできないしな。

不便なものだ。

「はるかもこれで救出完了だな」

と、轟騎が連れてきた女を見る。

「・・・」

「・・・」

「・・・はるかじゃねえな」

「・・・そうだな」

・・・。

何故。

「え・・・御主人様・・・私は・・・」

「もういいや、好きにしていよ。おうちに帰んな」

「でも、私は奴隷ですから・・・」

「んじゃ、命令。家に帰って普通に暮らせ。以上」

無駄足だったな。

「お暇をくださるんですか？」

「ああ、永久に」

「でも・・・」

「さつさと行け。俺の目的はお前じゃない。自由に暮らせ」

「……ありがとうございます！」

絶望を映していた少女の瞳に、光が宿った。

そして少女は何度も礼をしながら立ち去って行った。

「通りで捕まるはずだ。はるかじゃないんだからな」

「それじゃ、奴はどこに？」

「じゃーん、ここで私からのとっておきの情報！」

はやて姉が無駄なテンションでやってきた。

何やら情報をくれるらしい。

「ここらで魔女が現れたらしいのよ。そして近々魔女狩りが行われるそうよ」

「はるかの可能性があるな」

はるかには優秀な魔法使いだ。

はるかであっても不思議ではない。

というわけで、オレは魔女狩りの時まで待つてみることにした。

魔女狩り当日。

魔女が現れた森へ向かって行った兵士をこっそりとつけて歩くオレ

と千秋。

他の方向からははやて姉と轟騎、骸と亮平が向かっている。

ある程度奥に進むと、一軒の屋敷が見えてきた。

「ここに魔女がいるんだな」

兵士はそう言った。

銃を構えながら恐る恐る扉を開く。

・・・。

この兵士の用はここまでだ。

オレはすかさず飛びかかると、兵士たちにみねうちを放った。

4、5人いた兵士を一気に気絶させると、オレは千秋の方を向いた。

「洗脳を頼む」

「勿論ですわ」

千秋が洗脳を施した後、オレ達は屋敷内に入る。

「何者です!？」

そんな声が聞こえた瞬間、氷の剣が何本も飛んできた。

両手に構えた刀を振り回し、全ての氷を撃ち落とす。

「ぐ・・・」

ちっ、肩を掠ったか・・・。

「大丈夫ですか!？」

「この程度、怪我の内にも入らない。気にするな」

前回のあの怪我に比べたら無に等しい。

「この力・・・魔剣使い!？」

「ある程度この力に精通しているようだな」

「それは・・・魔女だから・・・そんなことはどうでもいい!」

「魔術師同士の戦いは、任せてください！」
一応オレも魔術師なんだがな。
剣士属性の方が強いが。

「はるか、その杖は・・・」
一見ボロい杖にしか見えない。

だが、オレには本質が見えていた。

「魔杖・・・ですね」

千秋も分かっているようだ。

「そうです！これは姿を変えるんです！行きます、真の力を現せ！

ケリュケイオン！」

凄い魔力だ・・・。

ケリュケイオンクラスの杖になると、かなりの魔力の増大を図れる
だろう。

「行きます！」

「ケリュケイオンだと!？」

「大地の煌めきよ、その輝きを持ちて突き進め！ダイヤモンド・ラ
ンサー！」

超巨大なダイヤモンドの柱が大地から飛び出し、魔女を狙う。

その柱は魔女に突き刺さり、爆発した。

なお、ダイヤモンドは炭素である。

燃えてもおかしくはない。

「やったか!？」

「・・・まだです」

「やってくれるじゃない・・・。ウィンド・ギター！」

それはまるでギターのように、激しい音を出しながら襲いかかる風
の刃だった。

だが、見た目とは裏腹に、無駄に強力な斬撃で、はるかの右腕に大
きな傷をつけた。

「……そちらこそやるじゃないですか。……闇の癒しを我に与えよ……ダーク・ヒーリング」
どうやらはるかさんは回復魔法及び闇魔法を使えるようになったようです。

右腕が闇に包まれ、出てきた瞬間にはあれだけ大きかった傷が消滅していた。

「我に刃向いし患者を奈落へと導け、フォーリン・ドライブ！」

はるかが魔術を唱える。

この魔力は……光と闇……混沌の魔術か！

「プロテクション！」

空から降り注ぐ黒い光を一身に受け止めているが、時間の問題だろう。

「行くよ、ケリュケイオン！追撃の奈落の閃光よ！フォーリン・メガ・ドライブ！」

黒い光が一層力を増し、防御壁に一本ずつ罅を入れていく。

「く……」

「まだ粘るみたいですね……大いなる奈落よ、その力を光の刃と成せ！フォーリン・ギガ・ドライブ！」

はるかが詠唱を重ねるたびに勢いを増す光に防御壁は砕けようとしていた。

そして防御壁が破れる瞬間だった。

「汝、私の力を欲するか？」

そんな声が脳に送り込まれてきた。

「……力……力を……力をくれ！！」

魔女の瞳には力に飢えた輝きが宿っていた。

「それじゃあ・・・貸すよ」

砕け散った防御壁が再構築された。
それも、以前よりも強固になって。

な、何が起きたんだ？

「また会ったわね、片瀬駿！」

「・・・お前はナナリー！！」

空にはナナリーが光のメーネを構えていた。

「何故お前がここにいる！？」

ベタなセリフを吐いてみる。

「彼女は力を欲した。だから私は・・・その欲望に導かれた」

「・・・何？」

「私は・・・神。あの戦いの中で思い出したのよ。私が何者だったか。天界を追放され、記憶を消され、各地を暴れまわっていた時に君と出会った。・・・これはあなたと私の戦いでもある。さあ、かかってきなさい！」

ナナリーは魔女に憑依した。

「強固になって・・・墮天した天使の力を今ここに解き放て！フォーリン・テラ・ドライブ！」

防御壁を破るために強大な魔法を解き放つ。

ちなみに、威力は1000倍ずつ上がっている。

フォーリン・ドライブはフォーリン・シャインの10000倍の威力で、通常のフォーリン・シャインよりも、メガで100万倍、ギガで10億倍、テラで1兆倍になっている。

フォーリン・シャインはそれほどの威力もなく、家を一軒破壊する程度のカシかない。

「はははははははは、凄、凄いわ、この力！私はまだまだ耐えられる！！」

「む・・・仕方無い。墮天使よ、奈落より邪なる光を解き放て！フォーリン・ペタ・ドライブ！！」

まだまだ進化するフォーリン・ドライブ。
威力は計り知れなくなっている。

一応フォーリン・ライトの1000兆倍らしい。

「はははははははは、その程度の力なの！？」
流星神が憑依しているだけはある。

「仕方無いです・・・地の底で眠り、偉大なる力を隠す天使よ、奈落よりその力を与えたまえ！フォーリン・エクサ・ドライブ！」

結構知られていませんが、ペタの上はエクサです。
ウィキペディアに書いていました。

まあ、威力は素の100京らしい。

ここでついに防御壁に罅が入った。
ついに割れるか！？

「トドメ・・・地獄の門敲きしとき、冥府の扉が開かれる。その奥に巢食う奈落の神よ、今闇と光を解き放て！フォーリン・ゼタ・ドライブ！！」

10垓倍らしいですが、もう垓とか見当もつきません。
垓ってどこの単位ですか？

大量の罅が一気に防御壁に張り巡らされた。

「あと一息だ！」

オレはそう叫んだ。

「……この力を持ってしても勝てないのか!!」

「終わりです、フォーリン・ライト最終形態を受けなさい！フォーリン・ヨタ・ドライブ!!」

ウィキペディアに載っている最大の単位、ヨタ。

その威力は1し倍とか言う意味の分からん単位になってきている。聞いたことすらないわ。

漢字はウィキペディアを見てください。

環境依存字なので文字化けしてしまった。

「じよ」という読みで同じ単位のものがあるらしいが、作者のパソコンでは出てこなかった。

ケータイで入力する手もあるだろうが、パソコンででないんだから絶対がない、たぶん。

そして話は戻る。

フォーリン・ヨタ・ドライブの威力は凄まじく、防御壁を割っただけではなく、魔女の身体を消滅させてしまっていた。

フォーリン・ドライブ自体は集束光線のような物のため、範囲は狭かったのでオレ達は無被害であった。

「……魔力を使いすぎましたか」

はるかはそので腰をおろした。

「お疲れ様」

ナナリーも一緒に消えたか。

もしくは、寸前で逃げたか。

オレには分からんが、生きていればまた戦うことになるだろう。

オレも剣の腕をあげなければ。

奴に勝てないどころかはるかかのヨタとか言う意味わからん単位の魔法にも負けてしまう。

オレはゼタクラスの奥義でコキュートスがあるが、それではヨタには勝てない。

まあ、絶対零度自体威力は強大であるため、ゼタ<コキュートス<ヨタくらいの威力はある。

そろそろあれを解禁する時かもしれないな。

最終章第14話 神に反逆した天使は墮天使になります。お気をつけください

「やってくれるじゃない」

やはり生きていたか。

空からすつと、ナナリーが現れた。

神の力を取り戻したせいかな、一層強くなったと見える。

「オレの進む道に貴様が立ちはだかるなら、オレは何度でもお前と戦う」

「神の力が解放された今、私はまさに地上では最強。人間が神の抗うなど、愚かな行為」

オレは神への反逆を行っているのかも知れない。

だが、オレは神の気まぐれで命を落とす気もないし、大切な人の命も失わせたくはない。

「オレは何度でも立ち上がる。生きるため、守るために！千秋！はるかを連れて逃げる！」

「は、はい！」

千秋が逃げ切ったのを見届けると、腰に下げていた妖刀　ハヤブサを抜く。

そして魔力をシンクロさせる。

「妖刀ハヤブサ。空の刀にして五大妖刀の長を務める騎士王！」

そして妖刀とのシンクロは昇華する。

「彼女の力よ、我に宿れ！」

シンクロ
同調を超えた魔力の解放、融合。
フュージョン

オレは今、それを成し遂げた。
これによって能力の一部が飛躍的に特化する。

ハヤブサの力を得たオレは、青い鎧と灰の翼を纏っていた。
鎧と言っても軽装だが。

剣はエクスカリバーの形態をとる。
同調時にオレの守護獣だったハヤブサはオレの翼となる。

「賢者が言っていた、妖刀の強化パーツ。これは妖刀を強化するのではなく、妖刀がオレを強化する、という意味だったんだ」
同調は魔力を消費し続けるが、融合は魔力を消費しない。
ただ、一定時間経過すると融合が解除されてしまう。

結果的に魔力が尽きなければ解除されない同調よりも劣ってしまう。
だが、妖刀の魔力を自由自在に使うことができる。

「お前は・・・」

「オレは、もはや人間じゃない」

そう、こんな力を持っていて人間と呼べるわけがない。

「いくぞ！ナナリー！」

オレは身軽になった身体を宙に浮かせ、空中からの斬撃をナナリーに浴びせた。

スピードが格段に違う。
融合可能時間はたったの15分しかないが、それでも・・・それでも充分だ。

解除後、12時間は融合はできない。
チャンスは15分間のみ。

「その剣は何なんだ!?」

「エクスカリバー。アーサー王が使ったとされる聖剣だ!」

エクスカリバーは青い輝きを放ちながら光の双剣を何度も何度も切りつける。

防戦一方となつているナナリーの顔には苦渋の表情が浮かんでいる。

「対神兵器・・・それがその剣か」

対神兵器?

「昔、賢い人の子が強大な力を持つ剣を作ったそうだ。その刃は何人も神を滅ぼしたといわれている」

それが・・・妖刀なのか?

「その片鱗の力を持つお前は危険すぎる!私が排除する!」

そう言つた瞬間、ナナリーの双剣から無数の光の粉が飛び散つた。

・・・目くらましか。

だが、無駄だ。

真の剣士は心眼を体得しているものだからな!

だが、オレの読みは外れていた。

ナナリーが指を鳴らすと、オレの周りが爆発した。

ちっ、粉塵爆発・・・ってやつか。

どうしてそこまで頭が回らなかつたんだ?

「何故、あいつの行動が読めない」

オレはボソツと口にした。

「それは私が神だから。そしてあの光の粉を浴びた者は一定時間は能力が低下する」

なに!?

「対神兵器を持った相手にはこれくらいしない」と

「くそ・・・、身体能力の低下が尋常じゃない」
普通の人間程度の力しか発揮できない。
どれだけ力を吸収されたんだ。

「オレが剣でやつに勝てないなら・・・魔術を使っしかない」

オレは腰に差していた七本の刀を、オレを中心に地面に突き立てる。

「七つの大罪を司る者たちよ」

オレは言葉をつなげる。

オレはオレ自身の力を信じ、召喚の言葉を発する。

「我にその力を、今貸し与えたまえ」

七つの大罪。

それは、

傲慢 (Pride)

嫉妬 (Envy)

憤怒 (Wrath)

怠惰 (Sloth)

強欲 (Greed)

暴食 (Gluttony)

色欲 (Lust)

罪を犯す者として、その罪を背負う覚悟を見せる。

オレは傲慢だ。

力をどこまでも過信している。

オレは嫉妬している。
自分よりも強い力を持つ者に。

オレは憤怒を覚える。
オレの大切なものを傷つける者に対して。

オレは怠惰な時間を過ごした。
今のこの力を手に入れるまでは。

オレは強欲だ。
力を手に入れてもどこまでも力を欲し続けている。

オレは暴食だ。
力という力をどこまでも飲み込んでしまう。

オレは色欲も強い。
そのせいで・・・千秋は・・・。

「オレは今、この罪を認め、これらの罪を司る王をここに呼ぶ！」

墮天した天使 墮天使は自身の力を過信し、敗れていったものが多い。

悪魔のなかにはそのような悲しい天使だったものもいる。
オレは彼らの力を借りたい。
そんな強力な悪魔、もともと悪魔だったものも含め、神への反逆を夢見るものは多いはずだ。

しかし、神への反逆は最大の大罪であり、そして制したとき、最大の栄光を得る。

神が世界を見下ろす時代は終わり、悪魔が世界を見下ろす時代が来るかもしれない。
低レベルな神であっても、それでも神に勝利することは自信を得ることになる。

オレはすべての悪魔を従えるため、そしてその力で愛する者を守るために・・・命を賭して神への反逆を行う！

「オレは大切なものを守るためならどんな罪も背負う、たとえ神にでも反逆する！」

オレはそう宣言した。

「^{スベルビア}superbia、^{インウイディア}invidia、^{イラ}ira、^{アケディア}acedia、^{アフリディア}avaritia、^{グラ}gula、^{ルクスリア}luxuria・・・」

オレが呪文を呟いた瞬間、七本の刀に雷撃が落ちた。

そしてそこには七体の悪魔がいた。

傲慢を司る悪魔・ルシファー

嫉妬を司る悪魔・レヴィアタン

憤怒を司る悪魔・サタン

怠惰を司る悪魔・ベルフェゴール

強欲を司る悪魔・マモン

暴食を司る悪魔・ベルゼバブ

色欲を司る悪魔・アスモディウス

「神よ、人と悪魔の力・・・思い知らせてやる」

オレと悪魔たちは大声でそう、宣言した。

最終章第15話 変えたと思った運命が、実はそれが本当の運命だった

「神への反逆・・・それが最大の罪だということを理解しているの！？」

「オレの刀は神への反逆を望んでいる。そう、オレの刀の中で最も禁忌とされている力を持つ刀・・・カタストロフが！」

オレには聞こえた。

オレが神への反逆を誓った瞬間、心に響いた。

「カタストロフ。彼は古より封じられた悪魔。彼の心の一部が現代に強力な悪魔として残ってはいるが、その真の力はこの剣に宿されている」

賢者の受け売りだけだな。

「悪魔・・・神への反逆を望み、強力な力を持つ・・・悪魔」
ルシファーたちもそのひとりであるはずだ。

時の流れから強大な力を手にした、最強の悪魔。

オレはこれを解き放つ。

「オレは今、カタストロフの封印を解く！」

危険は承知の上だ。

だが、神を敵に回してしまった以上、それ以上の危険はないはずだ。

オレはそつと鞘から刀を抜く。

今まで抜いたことのなかったその刀身は、炎のように紅く、氷のように冷たく、光のように輝いていた。

まるで悪魔が封じられているとは思えないように美しかった・・・

いや、悪魔が封じ込まれているからこそ、綺麗なのかもれない。

「なるほど、それでこの刀を抜くな、覚醒させるなと言っていたわけだ」

刀の状態ですらオレの魔力は吸収され続けている。

この状態が続いたら危険だろう。

オレは地面にカタストロフを突き刺した。

「剣に封じ込まれし悪魔よ、今ここに姿を現せ！！」

オレを中心に魔方阵が描かれ、オレの後ろから巨大な悪魔が現れた。

「こ、これは！？」

「反逆を行うには、こいつらだけで充分だ」

立场上エスナの力は借りれない。

だから、これしかないんだ。

「さあ、悪魔8人と人間ひとり。神はひとりで制することができるのか」

オレは挑戦的にいった。

ナナリーは唇をかみしめた。

おそらく悪魔たちはこう思っているだろう。

神々を葬ることは困難だが、神を葬ることはたやすいことだろうと。

神ひとりくらい、どうってことないさ。

「オレを制してみる、神よ！」

オレは高らかに宣言した。

焼け落ちた屋敷を見下ろす空をバツクに。
うん、快晴だ。

オレの翼はサラサラと砂になり、魔力は刀に戻って行った。
だが、こいつを倒すのにはもう、この翼は必要ない。
オレはルインを手にした。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

オレは大声を上げながら突き進む。

傍から見れば馬鹿にしか思えないが、これも作戦だ。

ナナリーは無表情でオレの攻撃をひらりと回避、そしてそこから攻撃を仕掛けてくる。

この瞬間だ。

攻撃するとき、誰でも隙ができる。

隙が大きいか大きくないかで、実際に隙は誰にでもできる。

オレに攻撃が直撃する直前、ナナリーの身体が吹き飛んだ。

戦闘対象がオレだけじゃないことに気付くべきだったな。

悪魔が8人。

これだけでも強敵な上に、オレもいる。

力も徐々に戻ってきている。

オレは確信した。

「この戦い、オレの勝ちだ」

悪魔たちとの連携攻撃を行う。

そして、少しとはいえこの連携攻撃を受け止めることができる神は、
やはりすごいと思う。

だが、確信は揺るがない。

攻撃を受け止められても、あちらには反撃する隙すら与えない。

徹底的にたたきのめしたのち、地面に倒れこんだナナリーの胸倉を胸倉。

そして、ルインを彼女の首筋にあてた。

「やめて・・・殺さないで・・・」

この光景だけ見ていれば、ただの少女にしか見えない。

「オレは神をも殺す覚悟でお前が殺そうとした人たちを守ろうとした」

「・・・私を殺しても、神を殺したことにはならない」

「・・・どうということだ？」

「意味が分からない。説明しろ」

「私は・・・神界を追放されて、もはや邪神となったも同然」

邪神・・・。

「神の力は残っていても、神ではない」

よくわからんな。

「見逃して。そうすれば、私はあなたのピンチに駆けつける」

よくあるパターンだ。

不意打ちとかもしてきたりするんだろう。

「そんなこと、聞けるわけないだろう？」

「・・・やっぱり殺すの？」

「・・・オレも悪魔に準ずるものといえど、一応人間だからな。人情つてもんがある。生かしてやるよ。悪魔はみんな悪い者じゃないということも、証明したいから」

オレはルインを首から離し、鞘におさめた。

「・・・人の心・・・それは神よりもずっと優しいんだね」

神は時に残酷だ。

運命は残酷だという人がいるが、それは違う。

その運命を設定した神が残酷なことじゃないかな。

そもそも運命を変えるってことは不可能だ。

自分が歩く道、それが運命だったと、その時にわかるんだから。

わからないものを変えらるゝというは無理だ。

運命は変えられない。

運命だと思ひ込んでいたことが変わつても、それが本当の運命だったということだから。

「まともな人間は神よりずっとやさしいさ」

オレはまともな人間じゃないけどな。

跪いて涙を流すナナリーは、神ではなく普通の女の子に見えた。

「ナナリー。人として生きてみないか？」

「私は邪神といえど神。人として生きるなんて」

「安心しろ。オレの友達、仲間ほとんどが人間離れた力を持っている。錬金術師、魔法使い、魔砲使い、銃士、武士、軍人、三國時代の武將、中世の騎士・・・そして姫もいるさ」

「私なんかが・・・一緒にいていいの？」

「まあ、オレの守るものが増えるだけだからな」

オレは少し笑つて見せた。

涙を浮かべながら微笑むナナリーの顔はとても可愛かった。

オレが頭を撫でてやると泣いて喜んだ。

本当は、甘えたかつたんだな・・・彼女は。

「オレはたとえ神を相手にしても大切なものは守り抜いてみせる」

それが、オレの誓い。

それに後ろの悪魔たちは神を殺す気がある。

「安心しろ、一応彼女は堕ちた。彼女は邪神だ」

オレが悪魔たちに言うと、そのうちの一人・・・カラストロフに封じ込まれていたベリアルが答えた。

「邪神は我らの仲間だろう。墮天した者同士、仲良くしようじゃないか。そして、ともに神を滅ぼそう」

なんか目的変わつてるなあ・・・。

オレは守るためなら神をも敵にするってだけだったのにほかの連中は攻めに入っている。

「確かに、我ら悪魔の上位者が8人も揃っているんだ。神に勝つことくらい、苦もない」

「それに我々を同時召喚した彼、彼はただものじゃない。彼とともになら勝てるだろう！」

「すさまじい覇気を見せつけてくる彼らに、オレはついていけなかった。」

「あの、オレの目的は神を滅ぼすことじゃなくて元の世界に戻ることなんだが」

「そうだった瞬間、全員に睨まれた。」

最終章第16話 その刹那、光り輝く神の劔が瞳に映った

帰路についているとき、その出来事は起こった。

凄まじい速度で森を駆け抜ける二つの影がオレの目には映った。ひとつは三本の刀を構えた人影。

もうひとつは銃を構えた・・・兵士だろうか、そんな人影。

もともと、この森は暗かったため、顔までは認識できなかった。

「まずいな、千秋たちがこの戦闘に巻き込まれていたら・・・」
安全を確保しに行くか。

オレは腰に差していた妖刀を抜くと、その影に近づいて行った。

剣士は弾丸を尽く切り裂いている。
相当な腕だろう。

人間がこれを行うなど、神業に等しい。

なお、オレは悪魔（元人間）だから普通にできる。

悪魔と称すには少々誤りがあるから、半悪魔とでも言おうか。

ハーフデビルってとこだ。

ハーフエルフってのはよく聞くが・・・。

それで、その戦闘であるが。

オレは刀を振った剣士から流れ出たかすかな妖気に気を取られた。

「・・・妖刀か」

「キリユウ、力を解放せよ」

「・・・この声は・・・」。

それにキリユウ・・・間違いない。

「エツケザックス！」

キリユウの魔剣形体はエツケザックス・・・か。

ん・・・エツケザックスは聖剣だったか？

まあいいや。

剣士はエツケザックスを振り回し、兵士の銃を切り裂いた。

「勝負あったな」

「・・・こ、殺すな」

「ふ、吾も人間だ。情けくらは掛ける。これで分かったであろう。

吾は魔女ではなく、剣士だということが」

剣を突き付けられた兵士は、怯えながら何度も頷いた。

「わかったなら吾にはもう手を出すでないぞ」

エツケザックスを妖刀に戻し、そして鞘に戻す。

「だが、その剣は何なんだ!？」

「これか。これは妖刀。神から授けられた剣だと思ってくれていい」

「神など、非科学的なものを」

「この世のものなど、ほとんどが非科学的だ」

剣士はそう言い、身を翻した。

翻した先には、オレがいた。

「か、片瀬!？」

「おう」

剣士は驚いたような顔をしていた。

「刀、また増えたんだな」

「ああ。また増えた」

剣士は刀を抜く。

その瞬間だった。

「・・・ま、魔女!?!」

兵士が大声で叫んだ。

その声はどこか、怯えが入っていた。

「この魔女は倒したはずだぞ!?!」

オレが。

「この魔女は双子って噂だったんだ!オレの相方がもう片方を担当したはず!」

あ、あいつこいつの相方だったんだ。

「私たちの森から出て行け・・・」

魔女はそう言って呪文を唱え始めた。

「片瀬!おまえはその兵士を連れて逃げる!吾は奴をしとめる!」

「気をつけるよ、刹那!」

手に持っていた刀の一つを鞘ごと前に突き出した。

「力を解き放て!」

力が解き放たれた刀は、西洋剣のような形をしておらず、普通の刀のままであった。

だが、形状は若干違う。

「十握剣!」トッカノツルギ

刹那はそう言い放った。

居合刀のようであるが・・・。

「散れ!五月雨!」

一度鞘にしまった刀を抜き放ち、その勢いで五回連続切りつける。

勢いは大気を震わせ、大地をスタスタに切り刻んだ。

魔女も魔女で呪文を唱え続ける。

炎、風、水、土・・・ありとあらゆる呪文を刹那にぶつけるが、それを十握剣で弾き飛ばす。

さすがは刹那といったところか。

刀を使ったところで、負ける気配を見せない。

岩が飛んでこようが、水が降ってこようが、火が周りを囲もつが、風が服を切り裂くまいとしようが、それを尽く両断してゆく。

魔女のところまでたどり着くと十握剣で杖を切り飛ばし、魔女を蹴り倒した。

そして刹那はマントを広げ、倒れた魔女に向かって言った。

「トッカツルギ、フツミタマツルギ、アマノオハハリ、ライキリ、アマノムラクモノツルギ、十握剣、布都御魂剣、天之尾羽張、雷切、天叢雲剣・・・日本神

話の刀なら沢山持っているが」

彼女のマントの中にはそれらの刀が収納されていた。

「汝は、どの刀で屠られたいか？」

魔女の瞳には恐怖が映し出されていた。

彼女の目には狂気が宿っているように見えたのだろう。

「なんなら、西洋剣も一本だけなら持っているが？」

魔女は恐怖のあまり言葉を発することができない。

自分自身が魔女だということを忘れるくらいに。

「た・・・助けて」

魔女が力を振り絞っていった。

それを聞いた刹那は、十握剣を普通の刀に戻し、鞘に納めた。

「はじめから襲うでないぞ」

刹那がそういうと、魔女は死に物狂いで逃げ去った。

「ふう、なんとかなったな。片瀬とも合流できたし、もうここでやることはなかるう」

こうして、刹那と駿たちは合流することができた。

最終章第17話 人柱にされた人はみなを憎んだのだろうか……

「あとは洗だけか」

「ですね」

夕暮れ、オレは先日見つけた崖から千秋と二人で沈む太陽を眺めていた。

「それが終わったら帰るんだな」

「早く帰りたいです」

「梨瀬が心配だからか？」

「いえ、梨瀬は大丈夫です。私がいろいろ教え込んできましたから。ひとりで料理位はできますよ」

「……まだ約1歳だぞ、おい。」

「どれだけ教え込んだんだか。」

「……も、もしかしてこのスパルタ教育（か、どうかはしらんが）が原因で梨瀬は千秋に懐かなかったとか……。」

「そしてファザコンに……。」

「……うーん。」

「難しいもんだ。」

「それと駿、私……また妊娠したみたいです」

え？

「なぜ？」

「駿とエツチしたからに決まってるでしょう」

まあ、そうだけど……。

「いや、そんなんじゃない。なぜそんなことがわかるのか」

「分かるんですよ。そんな症状とかが出てきましたから」

翠香が誕生するのか、ようやく。

梨瀬のときはめちやくちやとまどったけど、今はそんなでもない。

一度経験しているからか。

普通の……オレと同じ年の男だったらマジで死にたくなるだろう

が、オレには希望がある。
なんとかかして見せるさ、また。

「この先、生きていく中で・・・オレとお前の間に歪みが生じたらどうする?」

「それもまた運命・・・とでもいいたしょうか。でも、そんなことはないと思いますよ」

「はは、まさかね。」

オレは刹那たちと話をしている時、千秋が嫉妬しているのを知っている。

とても悲しそうな目でオレを眺めているのをよく目にする。

そんな千秋が・・・歪みが生じることを心配しないわけがない。

「安心しろ、オレはいつもお前がいるから頑張れるんだ。だから、お前が考えているようなことは起きないさ。オレから話を吹っ掛けたのにオレが言うのもなんだが、歪みは生じさせない」

「・・・当然です、私だって」

そう言い放った瞬間、急に振り向いた千秋がお互いに顔を向け合っていることに気づき、笑いだした。

「つられてオレも笑う。」

「はは、そうだよな。余計な心配だった。今は帰ることに集中しよう」

「はい!あの・・・帰ったら・・・」

「帰ったら、結婚しましょう!」

「オレの年齢が足りないけどな。あと、死亡フラグは立てないでおいてくれ」

「す、すいません、気づきませんでした」

まあ、オレが死ぬってこともないだろうがな。

「・・・日も暮れてきたな。みんなのところに戻るう」

「はい！っと、その前に」

千秋がオレにそっとキスをした。

頬にだけど。

「いいですよ」

ニコツと笑った千秋を見ながらオレは立ち上がる。

「さあ、今度こそ戻るう」

オレと千秋は、並んで歩きだした。

「洸の居場所がわかった！？」

「・・・というより、吾と共に来た。すぐに呼んでくる」

刹那は走って行った。

なんか案外早く見つかったな。

「それじゃあ駿くん、こちらはこちらで帰り方を見つけてましょう」

「・・・それなら気にしなくていい」

はやて姉が首をかしげる。

「なぜ？」

「もう、戻る術はある」

オレは腰に差した刀を一本取り出す。

取り出した刀は、カタストロフ。

「これの力で元の世界に戻ることができる」

「さすが駿くん、もう手を打っていたのね」

ただ……。

「そうだが……ただ、ひとつだけ……」

「何？」

「戻るために、必要なことがあるんだ」

オレの話をして聞いたはやて姉は言葉を失っていた。

「まあ、人柱立てるだけで戻れるんだ」

「そ、そんな……」

「ふざけるな！」

陰から轟騎が出てきた。

「話を耳にはさんだことは謝る。だけど……戻るために生贄がい

るって・・・どういうことだよ」

「・・・仕方がないことなんだ」

「・・・お前・・・お前まさか・・・自分が生贄になるとか考えてんじゃ・・・」

よくわかったな。

誰も犠牲にならないだろう。

犠牲になりたくもないだろう。

なら、オレがなるしかない。

「ふざけるな、お前が生贄になったら千秋ちゃんたちはどうなるんだよ!!」

「あいつなら、オレがいなくてもやっていける」

永遠に離れない・・・とか言っておいたのにさ、オレ・・・何やってんだろう。

「人の心つてのはお前が考えているほど丈夫じゃないんだ。心の支えを失っただけで簡単に崩壊する。千秋ちゃんがお前を失ったら・・・それこそ廃人になっちまうんじゃないか？」

「だったら・・・誰が人柱になるってんだよ！」

「そんなことだったら俺がなる。俺がなれば・・・」

「轟騎、それも間違いよ。誰が生贄になるとかじゃない。生贄を必要とせず、どうやって元の世界に戻るかが重要なのよ」

その方法が・・・それが無いから困ってるんだよ・・・。

「みな、洗を連れてきた」

刹那が戻ってきたようだが、この状況で構ってられるはずがない。

「どうした、そんな険しい顔をして」

「気にするな」

その日の空気はずっと暗いままだった。

最終章第18話 ロストテクノロジーというものは、本当に素晴らしいものだ

オレたちにはもう、この世界でやることはなくなった。

「見つかったか？」

「いいえ、ないわ」

ここ数日間、ずっとほかの方法を探したが今までであった小さな情報たちは全て偽りだったことが発覚。

残る手段はやはりあの方法だけしかなかった。

「オレは考えた」

「何を？」

「生贄は別に戻るために使われるコストではないんだ。ただ、この刀が欲望のために要求しているだけで、戻るためにはなにも必要ない」

「そうだ。」

だから、戻る方法は簡単だ。

「オレがここに宿る悪魔を、従える」

そうすればノ コストで次元を行き来できる。

何も失うものはない。

「ただ、やつは強敵だ。力を寸分された状態ですら神に匹敵する力を持っている」

「そこで力を蓄えるか・・・つつつても、この世界に俺達ほど強いやつらはいろのか？」

「正直いないな。もしいたとしても、探すストーリーを考えるだけ、作者にネタが残っていない」

裏話を持ち込むオレ。

「そこでだ。」

オレが考えた秘策。

強力な仲間を手にするなら。

「オレの魂を召喚する！」

「は？」

意味わからんだろう。

そのままの意味で捉えたらな。

「正確にはオレの中にある二つの魂。コンタクトがとれる賢者とリイの魂だ」

「・・・リイ？」

ああ、はやて姉はあの時島にいなかったからな。
わからんか。

「まあ、みてな」

オレは呪文を唱える。

すでに居場所が分かっているものを召喚するのであれば、オレの魔力特性から何もなくても召喚できる。

どんなに強大な奴であつてもだ。

強大な悪魔のときは準備がいるが。

あの悪魔たちは刀が触媒となつた。

まあ、なくなつてはいないが、魔力を少しだけ提供してもらつた。

「いでよ、我のうちに宿りし二つの魂！」

オレが叫ぶと、オレの胸から二つの光が解放たれ、その光は人の形を取り始めた。

と、同時にオレは少し脱力感を覚えた。

「久しぶりだな」

先に肉体を形成できたのはリイの方だ。

赤い瞳、銀の長髪、白い肌。

美しい。

こんな体でも、アルビノではないようだ。

「赤い瞳は遺伝だ。銀髪も遺伝。白い肌は女だから」

白いドレスに身を包んだリリイはその名の通り、白百合のようであった。

「言っておくが、私は剣など使えないぞ？」

・・・え？

「使えないといっても、お前ほどに・・・だけど。人を退ける程度の力はあるけど一騎当千の猛者とまではいかない」
そりゃそうそういてたまるか。

「でも」

「でも？」

「斧なら使えるぞ」

え？

「斧なら百人だろうが千人だろうが、一度に相手しても勝利を手にすることができ」

まさかの斧ですか。

斧・・・ねえ。

この細い体に大きな斧・・・凄まじいギャップだ。

「その顔は疑っているな。なんなら、相手をしてやる」

リリイはケータイのようなものを取り出した。

ボタンを一つ押すと、それが縦に伸び、先のほうから両サイドにピーム上の刃が飛び出した。

「ビームアックス・・・そんな技術があるとはな」

いいだろう。

オレも試したいことがあったんだ。

「秘儀・炉心熔融！」

オレとリリイをマグマが包み込む。

というより、ところどころ足場を残してそれ以外の一定範囲の地面

が全て熔解、狭いエリアでの決戦となる。

なお、空を飛ぶことのできる悪魔との戦いではさほど役には立たないが、戦車等の軍事兵器にはかなりの効果がある。

熱気も凄まじく、ジリジリと互いの肌を焼いていく。

熱で死ぬ可能性だってある。

「私にそんな小細工が効くと思っっているのか？」

リリイは嘲笑う。

・・・なに？

オレの肌はどんどん焦げて行っているにもかかわらずあっちの肌は傷一つない珠の肌だ。

「私はあらゆる環境変化に対応できるリングを装備している。変化に対応できる限界はあれど、地球の中心・・・核の部分に行っても数時間は耐えられる。」

な、なんて技術だ！？

現代科学の数段・・・いや、それ以上上回っている！？

「なら、オレも魔術を使わせてもらおう」

オレはポケットにしまってあったタリスマンを取り出す。

これは魔力を込めるだけでそれこそあらゆる環境のh（略
刹那に魔法雑貨店を教えてもらっついていて正解だったぜ。

「これで互いにフェアだな」

「マグマに落ちても平気だが・・・それじゃあ面白くない。マグマに落ちたら負け、としよう」

ルールが決定した。

「行くぞ！」

オレは小さな足場を蹴り、宙に跳んだ。

そして先ほどオレがいた足場はボロボロと崩れ去った。

「ほう、自分が移動した場所は破壊していくつもりか」

「お前の場所を奪い去る！」

「時にすれば墓穴を掘ることとなる」

リリイは目を閉じたまま、斧を振り上げ、そのまま自分の足場に振り下ろした。

その振動はマグマを伝動し、足場をすべて破壊した。

「な、そんなことしたらお前まで」

「心配はいらないさ！」

リリイは斧を振り回して飛んだ。

「なにっ!？」

遠心力つてやつか……。

斧が得意な理由はここにもあつたようだな。

斧を上に乗せず勢いで自分も空に飛んでいくという……なかなかだ。

さらに事前に振り回す動作は飛距離を伸ばすために使われていたのか。

「と、なると……オレが不利か」

「そんなはずはないだろう?」

いや、確かに不利だ。

飛ぶことはできるが、鴻漸之翼を使えば両手がふさがる。

鴻漸之翼なんかで倒せるような相手とも思えない。

なら方法はひとつしかない。

「ハヤブサ！」

オレはハヤブサを引き抜き、魔力の融合を始める。

次の瞬間、オレの背からは隼の如き大翼が生えていた。

「これで五分か？」

「いや、まだ私のほうが不利だな！」

地に落ちようとするリリイは斧を横に振り回し続けた。

次第に回転速度は増していき、竜巻……もしくはそれに匹敵する暴風へと変貌していった。

「空斧の魔将。それが私に与えられた称号だった」

そういうと、その竜巻に巻き込まれたオレをリリイは斧で殴りかか

ってきた。

「エンシエント・クレイモア!!」

斧の刃がクレイモアのような巨大なものへと変わり、オレを切り裂いた。

「ぐあ……」

とっさに避けたが、左肩を裂かれた。

骨に到達している。

もう、左腕は動かない。

「右腕だけでも!!」

オレは右腕に持っていたエクスカリバーを縦に振り下ろした。

「真奥義・ゴーレムストライク!!」

まるでゴーレムのように粗暴に振り下ろされたオレの腕の先にある剣。

それで相手を切り裂く……ではなく、断ち切るような切り方。切り方がまずかったか、リリイにあたりはしたが、全く切れなかった。

だが、この奥義の真の使い方は相手を切ることではない。

鉛刀一割から派生したこの奥義。

もともとの奥義とは全く逆のことをする。

その勢いで相手をたたき飛ばす。

鉛刀一割は切れなかったものを切るのに対し、ゴーレムストライクは切れたものを切れなくする。

それぞれの長所と短所を使い分けることによって克服する。

ゴーレムストライクを受けたリリイは勢いあまり、マグマへと落ちて行った。

この技はオレの剣術の中でもトップクラスの衝撃を与える奥義だ。

マグマに浸かったリリイを見下ろした。

オレの勝ちだな。

すべてが終わった後、オレはエスナに腕を治療してもらった。

「なかなかだ。私についてくれるとはな」

「当然だ。それより、戦いの最中に呟いた空斧の魔将って？」

「ここで少し、小話をさせてもらおう」

そういうと、リリイは語りだした。

私たちの家系……つまり王族。

あの王家は戦闘の戦闘のプロを作っていたのだ。

人前にはこの力を見せず、戦争になったとき……最終手段として
駆り出されるだけだった。

戦争らしい戦争も起こらなかつたがな。

その時に特に優れた者には称号を与えた。

私は普段は自分は戦えないと言い張っているが、そんなことがあつ
たからそう言っていたのだ。

実際に戦えないわけではないさ。

「・・・なるほどね」

「わかったか。賢者の具現に成功したようだぞ。賢者のところに行つてやれ」

リリイに言われ、オレは賢者のところへ向かった。

「お前を直に見るのは初めてだな」

「ああ、オレもだ」

賢者との対面。

凄い威圧だ。

ハヤブサやルインを作っただけある。

「お前の考えていることは分かっている。現代に蘇らせてくれた礼は言わせてもらおう」

「その代り、戻るのを手伝えよ」

「お前の考えは読んでいるといっただろう。それ相応の代価は払う。せつかく趣味の妖刀作りがまたできるようになったんだからな」

え、趣味だったの？

趣味で作られたオレの愛刀……。

「手合わせするほどでもないだろう。我の力はお前に以前見せたからな」

オレの力を多少使ったけどな。

「安心しろ、魔術の才能は圧倒的に貴様よりも上だ」
うぜえ……。

何こいつ。

前からウザいと思ってたけど、まさかここまでとは……。

「期待していいんだろうな」

「まあ、いいだろう」

信用ならねえ……。

「剣も一応使える。剣を作る者、剣を使えず……なんて言われたら困るからな」

確かに、そうかもしれない。

「一度、手合わせ願えるか？」
「何をいまさら。貴様の腕は我も認めておる」
「いや、オレとじゃない。オレの・・・オレの大切な義妹と」
「義妹を危険な目にあわせるのか？」
「いや、そうじゃない。」
「義妹を・・・試してみたいんだ」

「どうした、片瀬。こんなところに呼び出して」
「お前、剣に自信はあるか？」
「あるに決まっている」
「・・・なら、ひとつ頼みを聞いてもらいたい」
「少し間をおいて、刹那が声を発した。」
「なに？」
「剣を抜け」
「え？」
「いいから早く！」
次の瞬間、賢者が刹那に切りかかっていた。
刹那はそれを紙一重で避けた。

「な、何を！？・・・って片瀬！？」

既にオレはいなかった。

ここからは、彼らの戦いだ。

なぜオレがこんなことをしたか。

理由はひとつ。

刹那には生きていてほしいから。

生きていてほしいから、力を試してもらっている。

オレじゃ・・・手を抜いてしまうから・・・。

「最終決戦に刹那の力は必須だ。だが、賢者にすら勝てなければ・

・使うのは止めるしかない。可能な限り、オレの大切な人を失いた

くはないから」

・・・この剣士、何者だ？

見たことはない。

だが、この剣捌き、片瀬のそれと似ている・・・。

尤も、この剣士の方が手ごたえはないが、非常に強い。

私の居合を剣で華麗に受け流している・・・。

ただものじゃない。

剣を打ちつけ合っているから、いずれはあちらの剣が折れるだろう。

私のは妖刀だから、折れることはない。

だが・・・。

「吾が剣・・・受けてみよ」

私は剣を鞘にしまう。

「隼返し！」

燕返し・・・の強化といったところか。

それすらも華麗にかわす剣士。

いったい何者なんだ？

「貴様は、貴様は何のために剣を握る？」

「己の強さを証明するためだ！」

剣士は苦笑いする。

「では、強さとは何だ？」

「強さ・・・強さ？」

強さ？

そういえば強さって何なんだ。

剣術の達人だから強い？

違う。

魔法使いだから強い？

それも違う。

「我は不意打ちなどしない。貴様の答えが出るまで待っていよう」

・・・剣士としての心得はあるようだな。

それが強さか？

・・・強さって・・・何なんだ。

私は幼少のころから剣術を習ってきた。

剣術は力の証明にはなるが、強さの証明にはならない。

力≠強さではないから。

力も、何種類も存在している。

剣術で証明できる力は、武力という点での力だ。

「強さなど・・・存在しないのか」

「否、だが、それに非常に近い答えにはなるだろうな」

非常に近い答え？

「強さなど、人間が一時一時に感じる小さな感情でしかない。貴様が我を強いと思おうが、我よりも強いものは我を弱く感じるだろう。このように、個人個人、感じ方が違う。それ故に強さは存在しているが、存在していないものともとれる」

・・・難しいな、哲学か。

私にはイマイチ理解できない。

「だが、我はそう考えてはいない。強さとは、己に打ち勝つための武器と考えている。己に打ち勝たねば、何にも勝つことはできない。競技などで勝利を手にしたところで、それは無駄。ただの自惚れにしかない。己に勝つことのできるものこそが、真の意味で勝利を味わうことができる」

・・・この剣士、一体何者なんだ。本当に。

「お主、名はなんと申す？」

「我が名など、教えるに値しない。価値のない名だ」

「それはどういう・・・」

「己に勝て、赤坂刹那」

「承知！」

私は刀を鞘に納める。

「刃で斬るのではない」

次に呼吸を整える。

「貴様の刃は刀にはない」

ゆっくりと瞼を閉じる。

「貴様が手にすることのできる最強の刃、それは・・・」

そして腰を落とした。

「そう、貴様の刃は」

「吾が刃は心にある!!」

次の瞬間、剣士が持っていた剣がバターのようにあっさりと切れていた。

「心・居合奥義・・・神葬心理！」

「これは神ですら切ることができる。覚えておけ、真の強さは貴様の心にあると！」

決して忘れない。

「吾が剣、今ならば何でも切れる！」

「これならば心配ない。片瀬駿から貴様の实力を見るように言われていた。以上だ。もう何も無い」

私が礼をいう間もなく、剣士は立ち去っていた。

最終章第20話 エンディングはひとつじゃないさ！物語は、数種類で集結す

あとはこれを試すだけだ。

本当に、これが成功するのか。

みなには成功すると言ったが、完璧に服従させることができるのか。未来のオレは、世界を破滅に導く組織はカタストロフを狙っていると言っていた。

だが、今ここでカタストロフを破壊してしまえば……。

みんなに見守られるなか、オレはカタストロフを地面に突き刺した。

「いでよ、災厄の剣に宿りし魔王よ！」

すでにこの剣は覚醒済みだ。

問題ない。

言われるがままに魔王は姿を現した。

「お前にひとつ問う。生贄にするのなら、誰を選ぶか？」

「……その女だな」

「え、私!？」

はやて姉……無駄に反応するなよ……つかお前じゃねーよ。

「いや、その奥の少女だ」

「わ、私ですか？」

「予想はしていたがな」

対象は千秋であった。

「彼女が生贄でいいのか？」

「いい訳がないだろう。お前には生贄なしでオレたちを元の次元に戻してもらおう。それに……」

オレはここで一度言葉を切り、右後ろにいるエスナと顔を合わせる。

「ああ、これは確かなことだ」

「オレたちを連れてきたのは、お前だろう！カタストロフ！」

「未覚醒の状態で、どうやってた？」

賢者も言う。

「おまえは完全に封印したわけじゃない。それゆえに、ある程度の力くらいは使うことができたはずだ、今までも」

「・・・封じ込めた者には分かるか。そうだ、ここに送りつけた」
やはり。

「なぜだ？」

「決まっておろう、貴様らを殺すためだ」

「それは自由への渴望か？」

「そうだ」

自由か。

「だが、読みが甘かった。貴様らの力の方がこの世界のあらゆる兵器、魔法よりも上であった」

「考えてくれ。取引だ、生贄なしで元の次元に戻してくれるなら、お前を剣から解き放つ」

「バ、バカなことはよせ！」

賢者が制止に入るが、オレはやめない。

「そんなこと、許されると思っているのか？」

「・・・だろうな。なら、オレはお前を殺しにかかる。死ぬ寸前で生かし、永久にオレの使い魔とする！」

魔王は笑う。

「貴様らが束になったところで、魔王には勝てはしない」

「オレはそうは思わない！やってみないと分からないってのはただのバカだ。歴然の力の差を見せられてもそんなことを言っている奴ならなおさら。主人公補正でもかかってねえとかてねえよ。脇役が言ったら死亡フラグだ。オレはそんな根拠もない希望なんて期待はしてない。ここまで言うくらいだ、オレには秘策があるってこと・・・
・気づけ」

オレの秘策。

これは最終手段だ。

できればそれ以外の手でこいつを倒したい。

オレの体がまた人間から離れる前に……。

「楽しませてもらおうか。貴様らが敗北した暁には、貴様ら全員の魂を喰らってやる！」

一度彼を制した賢者もいる。

一見するとこちらの方が有利……。

だが、有利というのは全く当てにはならない。

形勢逆転という言葉も存在するから。

気を抜いたら、一瞬だ。

三途の川を渡るのに、時間はいらさない。

オレが前に進もうとすると、代わりに轟騎が前に一步出た。

「駿、俺はお前には勝てない。今まで何一つ勝てなかった。力でも、

頭でも、顔でも。でも、そんな俺でもお前の力にはなれる。お前ひ

とりで戦わせることなんてできないさ」

いや、仲間いるんだが。

「あいつを傷つけることはできないだろう、その武器じゃ」

轟騎の武器は最先端の武器だ。

だが、それでも奴には届かないだろう。

魔除けの力がないから。

魔を打ち砕く力がないから。

「悪魔を傷つけられるのが魔力だけだというなら、俺は役には立た

ない。でも、お前の背は俺に任せてくれないか」

こんな感動的(？)なシーンですら攻撃をよけながらやっている

という現実。

「……死ぬなよ」

オレはそういうと、腰のルインを抜いた。

「主、奴を討つのは私でお願いします。奴を討てるのは、おそらく私だけですから」

確かに、ルインはカラストロフに匹敵する力を持つ。

「お前だけで戦うわけじゃない」

そう、オレの刀はルインだけじゃない。

ハヤブサやオロチたちだっている。

「俺たちも忘れるなよ！」

骸と亮平も参戦していた。

魔砲を乱射している。

さすがといえはさすがだが、魔砲の威力は少々やりすぎだと思っ。

だが、奴はそんなにもビクともしない。

「骸、亮平！見てなさい！これがホントの魔砲よ！」

はやて姉がチャージを始めた。

「インフィニティ・ニュークリア！」

ちよー！？

ニュークリア！？

そんなんだしちやっていいの！？

「ぎゃあああああああああああああああああああああー！」

オレの悲鳴

戦場にいた男どもは全員巻き込まれた。

ピンポイントで女だけ避けやがって……。

なんつーテクだ。

つーかそのテクオレたちにも使え！！

カラストロフの猛攻……ではなく、はやて姉にボロボロにされた

オレたちに、為す術はなかった……。

「つか……カラストロフ、てめえもくたばってんじゃねえ……」

あっさり片付いたカラストロフであった。

はやて姉は魔王を凌駕する力を持っているようです。

たぶん、管理局の白い悪魔とも同等に戦えると思います、はい。

まさに魔王。

「約束通りあんた（と、他の連中）をぶっ倒したんだから、元の世界に戻しなさい」
力の次元が違った。

うわぁ、なんか最終回っぽい出だしだったのにこれかよ……。
実は最終回じゃなかったのな。

まあ、タイトルの時点でそんなことはわかってんだけど。

「……この世界を恨んでも恨み切れぬ、貴様ら、元の世界に戻ったらマルチエンディングになっていることに驚くんだな！」
え、これってギャルゲーだったの？

「違う、エロゲだ」

天下の悪魔がそんなこと言っているのか！？

あと、心読むな。

「残念だったわね、生憎駿くんをエロゲなんてするように育てた覚えはないわ」

いや、はやて姉も言い返さなくていいから。

「え、でも駿くんの部屋にこんなものがあつたよ」

つばさあああああああああああああああああああああああ！

てめえ、なんつーもん持ってやがる！？

お前だけは信じてたのに！？

それは錬磨に押し付けられたエロゲ！！

「駿、あなたは私なんかより二次元の女の方がよかったですか！？」

誤解するなああああああああああああああああ！！

錬磨、てめえ帰ったらぶっ殺しておおおおおおおおおおおおお
おおおおおす！

「暇だったな」

「そーだな、骸」

「あの状況で発言してないのたぶん俺たちだけだぜ」

「でもそのおかげで最後二人だけの会話をする機会を与えられたんだ。喜ぼう」

「そもそもフレアとか洸とか一回しか発言してないしな。今の時点でオレは3回目だぜ」

「一応準レギュラーだからな、俺達」

「地味に委員長の方が登場回数が多いんだよなあ」

「いや、分からんよ。骸の方が多かったりするかもよ、作者面倒だから数えてないし」

「登場したのは俺の方が後じゃん」

「まあ、確かにそうかもしれないけど・・・」

あつちで騒いでいた連中の中で、外野はこんな話をしていた。

最終章第20話 エンディングはひとつじゃないさ！物語は、数種類で集結す

タイトルや文中にもあったように、この話最終回が数パターンあります。

最高の結末や、最悪の結末まで用意しますので、ええ、無駄に。

最終章第21話 未来のオレは魔王と子作りをしてしまったようです

カタストロフを服従させた。
はやて姉が。

「なあ、はやて姉。どっからあんな魔力・・・てか生命力を吸収したんだ？あの状況にオレ以外にあんな魔力や生命力を保持している奴なんていなかったはずだが」

生命力は魔力である程度補うことができる。

そしてあの時オレは魔力も生命力も吸収されている感じがしなかった。

「そんなの簡単じゃない。なんだっけ、服従させた刀、カタストロフだっけ、あいつから奪ったのよ」

・・・。

・・・魔王だな。

「さあ、カタストロフの力が戻ったら帰るとすっか
「待ちなさい」

「あ？」

はやて姉の声にオレは振り向いた。

「駿くん、今こそ決断の時だと思うの」

「は？」

「あなたは本当にこのままでいいの？
何言ってるんだ？

「あなた、千秋ちゃんと本当にやっていけるの？」

何言ってるんだ、今までやっていけていただろ？

「言っている意味が分からない」

「曖昧な考え、どうにかしなさい。あなたにはもう一人、思いの人がいるでしょう？」

「何を言っただんだ！？はやて姉、ふざけるな！」

「千秋ちゃん、飽きちゃったの？最近の駿くんからは千秋ちゃんを守らなきゃいけない、一緒にいなきゃいけないという使命感しか感じられないわ」

「バカか！オレは千秋を守らなきゃいけないんだ！梨瀬だって、他の子たちだって一緒に！」

「・・・守る守るって言うけど、その言葉の意味、分かるの？」

「は？」

「守る・・・外敵から守る・・・ってことだろ！？

そして彼女たちを悲しませるすべてのものから守る・・・。

「千秋の笑顔を、オレは守る。笑うことを許さない奴を潰す」

「それなら、あなた・・・切腹することになるわ」

「・・・どういうことだ？」

「千秋ちゃん、あなたが戦うとき、他の女の子と話をしているとき、とても悲しげな顔で見つめているわ。一番笑顔を奪っているのはそう、あなたよ」

「な、なに馬鹿なことを・・・。

はやて姉・・・。

オレは・・・オレは・・・。

「な、なんだこれ」

はやて姉はオレに一本の刀を渡してきた。

「神刀・ウリユウ。この世界を統べる神の力を借りて作られた刀。

伝説の刀匠、片瀬風上・・・まあ、150年後の人だけど、彼が打った刀。漢字では雨龍と書く。私の子孫よ、私とあなたの」

は？

「私はあなたの子を産む。その刀が証拠。駿くん、あなたがこの結末を回避したいのなら、この刀で私を殺すか、自決しなさい」

言っている意味がわからねえ・・・。

「あなたが本当に千秋ちゃんのことを愛しているなら、私を殺しなさい、その刀で！」

そ、そんなこと・・・できるわけ・・・。

「私を殺せば千秋ちゃん一筋、ということも理解できる。でも、このままいけばこの刀が生み出された結末にたどりつく。それは、私があなたの子供を産むということ」

はやて姉を殺すだと!?

そんなことできるわけねえじゃねえか!! (実力的な意味で)

はやて姉には今までお世話になってきた。

基本的に家にいない親の代わりをしてくれた。

「オレにははやて姉を殺すことなんてできない。ましてや自分の命を絶つことなんて・・・オレには、オレには死を悲しんでくれる人ができすぎてしまったから。未来を変えることができるかどうかも、運命。オレは千秋を裏切る気はないさ」

「・・・それでこそ、駿くんよ」

はやて姉は地面に落ちたウリユウを拾う。

「この刀はあなたのもの。最強の剣士には、最強の剣がふさわしい」
そのままオレに刀を手渡した。

「オレは最強なんかじゃない。剣聖なんかでもない。オレは未熟すぎた。剣聖なんて名乗っちゃいけない」

「それなら・・・最強を目指しなさい!何が何でも!」

「剣士たるもの、剣聖を目指すことは当然のこと」

「それで、あなた・・・駿くん、ケジメをつけてきなさい」
?

さつきからそんなことばかり・・・。

はやて姉の件は解決しただろう?

「彼女と剣を交えなさい。彼女もそれを望み、そしてあなたを成長させることになると思うから」

彼女?

千秋のことか?

千秋なんて剣術など使えないが・・・。

「さつきから意味がわからないんだが」

「まあ、お姉ちゃんからのアドバイスよ。その戦いであなたは気づくはず」

何が気付くんだかさっぱりわからないが、戻るまでは時間がある。

「ゆっくり考えて・・・ん？もしかして」

「今思いついた通りのことよ」

そうか、そういうことが。

そうだな、一戦交えるのも・・・悪くはない。

オレは身を翻した。

「戦場へ行ってくる」

コツコツと足音を立てて去っていくオレに、はやて姉は微笑みを見せていた。

最終章第22話 シリアスっぽいタイトルしか思いつかんのだが・・・

「おい、起きろ」

どこかの廃工場。

その外に止めてある車が一台。

高級車のようだ。

そのなかで寝かされている少女を見下ろすひとりの男。
手には銃。

「ここから行ける、夢のそのまた夢に」

「ありがとう、ここまででいいわ」

少女は目をこすりながら工場に入っていく。

「椎名千秋、私はあなたをどこまでも追いつける、そう、どこまでも」

オレは刹那のところに来た。

「どうした、片瀬」

はやて姉の言っていたことの意味、ここに来る前に気付いてしまった。

オレはひそかに刹那に思いを寄せてしまっていたのかもしれない。
はやて姉にはそう見えたようだ。
別にそれでも構わない。

でも、刹那ならひとりでもやっつけていける。

オレも手を出すことはできない。
だから、今ここで過去の自分と決別する。

「刹那、剣を交えてくれないか？」

「・・・構わんが？」

オレの読みが正しければ、オレは負ける。
全力を尽くしても、オレは負ける。

刹那の目には、オレを倒すだけの力が宿っている。

オレは臆病だ。

臆病ゆえに、平和な策しか思い浮かばない。

「殺す気で来てくれ」

オレは剣を抜いた。

そして、それ以外の剣を投げ捨てた。

オレが選択した剣はウリユウ。

「オレを超えてくれ」

「ど、どうしたんだ・・・急に」

戸惑う刹那のことなど気にせず、深呼吸、そして奥義。

「神技・マリシヤス悪意の鎮魂歌レクイエム」

「うわあああああああああああ！！」

刹那は遠くまで吹き飛ばされた。

神技は神・奥義とは全くの別物。

神刀を使うときのみ使用することができる。

というより、これを握ったときだけ使用方法が脳裏に浮かぶ・・・
これを放した後はすっかり忘れてしまう。

そして悪意の鎮魂歌、マリシヤスレクイエム。

神が神へと送る悪意の剣。

一振りで大気を震わせ、黒き旋風を巻き起こす。

「超えてくれ、オレを・・・神技、神の力を超えるんだ」

「な、何故!? 片瀬は吾に超えてもらいたいのか!？」

「オレは・・・オレは安心がほしいんだ。この間は賢者にやらせたが・・・もう、オレは逃げない!」

オレは次の神技を繰り出すために剣を振りかぶる。

千秋はオレが守る・・・だが・・・もうひとりの愛する者とは、常には一緒にいることはできない。

・・・だから。

「・・・いいだろう! 吾は汝を超えて見せよう! いま、ここぞ!」

・・・よく言った。

「神技・星屑スターダストシンフォニーの交響曲」

剣を一振りする・・・。

たったそれだけで、たったそれだけなのに、星屑が刹那の全身に細かい傷をつけていく。

刹那の体は血で深紅に染まっている。

散りばめられた星屑は想像以上に鋭かった。

だが、オレは攻撃をやめない。

「神技・銑鉄アイアンカルテットの四重奏!」

鉄の風が次々と刹那に突き刺さる。

いくらオレが刹那を傷つけても、オレが涙を流すだけで刹那は闘志を燃やし続けていた。

決して膝を折らずに。

「・・・はあ・・・はあ」

そろそろ限界か。

刹那は鞘を杖にして、必死に立っていた。

剎那は抜刀術の使い手だ。

オレみたいに抜き身の状態で戦う戦法ではない。
勝負あったな。

やはりまだ早かったか……。

「……まだだ、まだ私はやれる」

「声が変わったな」

声色が変わったわけではない。

声に封じ込められている……言霊、とでも言うか。
それが変わった。

「……神技・疾風の五重奏」

オレは剣を振る。

だが、剎那は笑っていた。

「私の奥義、見てくれ……焼殺旋風！」

杖にしている刀とは別の、腰に差されていた刀を一気に抜き放つ。

抜かれた勢いでオレの気を吹き飛ばす。

「……私だつてこれくらいできるんだ！さあ、次の一撃で決めてやる！」

ついにこの時がきたか。

オレは刀を縦に構える。

刃を目と目の間に、両腕を折り、手は胸の中心に。

神気が刀に集中する。

「是、最強之神技也！」

「吾が心に封じ込められた刃、味わうがいい！」

剎那は右肩を押し出し、刀に手をかける。

対するオレは両手に握った刀を天高く振り上げる。

「神技・塵気楼の大団円！」

「心刀・鮮血桜！」

オレが巻き起こした神風、それを斬った何か。

剎那は心で人を斬ることができる。

一度目にしてはいたが、これほどとは……。

オレには……できないことだ。

「うぐ……」

オレの風は全て切り刻まれ、その上オレの胸には斜めに大きな傷が刻まれていた。

そこからは大量の液体が、止まることなく流れ続けていた。

「片瀬……すまなかった」

「安心したよ。お前を守る必要がないから」

オレは痛みを耐えながらできるだけだけ笑みを浮かべた。

「そ、そんなことない！ いつだって片瀬が守ってくれているのは嬉しかったし！」

「もういらぬ。これでお前とは、もう何も無い……千秋を守ることに専念できる」

血が足りなくなってきたか……少しフラフラする。

真っ直ぐに歩けない……。

オレをここまでの傷を負わせたのは、たぶん刹那が初めてだ。

ホント、意識保てねえ。

「死ぬな、片瀬！」

はは、オレはこの程度……じゃ……死なないさ……。

ただ、少し眠くはなってきたかな……。

次に起きた時は、真っ先に千秋のところに……いかない……と。

「お兄ちゃん・・・」

誰かの声が聞こえる。

「お兄ちゃん・・・お願い、起きてよ」

目を開いた先には蒼穹が広がっていた。

・・・死んだか、オレ。

「お兄ちゃん・・・」

お兄ちゃんなんてオレのことを呼んでた奴いたっけ？

オレが目を声の主へ向けると、そこには大粒の涙をこぼした刹那がいた。

お兄ちゃん？

・・・ああ、そうだった。

オレとは義理の兄弟だったっけ。
でも何で急に。

「・・・おはよう」

「か、片瀬！？起きていたのか!？」

目を真っ赤にしながらオレを見つめている。

「可愛かったぞ、泣き顔」

「な、何を言う!？」

「お兄ちゃんか・・・暁も呼んでくれないしな。確かさらに下に妹がいたが、たぶんあいつもう出てこないし、しかも一回しか会っていないから名前も忘れた」

「べ、別にお兄ちゃんなんて・・・吾にはいらんからな!」

「兄と呼びたければ勝手に呼べ」

「だから」

そう言い放ったものの、刹那は嬉しそうな顔をしていた。

最終章第23話 オレに宿る最後の魂の正体が、今明らかになる！

オレの傷も癒えたころ、ようやく帰るための準備ができたようだ。

「準備はよろしいか？」

カタストロフがそう告げる。

「ああ、いつでもOKだ」

「待て、貴様らをここから返すわけにはいかん」
？

誰だ？

「誰だ貴様」

「我輩はこの世界を統べる神。その邪神、それとその悪魔を始末しにきた」

カタストロフが殺されたらオレたち帰れなくなる！！

「邪神ナナリー。貴様は我輩の民を殺し続けた。その罪、死罪に値する」

「構わないよ。私を殺すことができれば」

だめだ・・・ナナリーの力どころじゃない・・・。

あいつは・・・マジで強い・・・。

「邪魔しないでもらえるかしら？エターナル・クリムゾン・ビッグバン！！」

はやて姉は問答無用で魔砲を放った。

凄まじい爆破を巻き起こす魔砲は神を爆撃した。

「その程度か」
なに！？

傷一つ付いてないだと！？

「おっと、手加減しすぎた様ね」

ちよ、ビッグバンが手加減！？

はやて姉が二本の魔砲銃を取り出す。

そして生命力を奪っていった。

「彼に潜みし龍よ、解き放たれん！」

オレの胸から龍が飛び出した。

・・・間違いない、あの時の龍だ・・・。
邪神といえど、流石は神といったところか。

「片瀬駿、君は君の力で剣を生み出すんだ・・・それが私からの贈り物」

・・・自らの力で・・・。

オレは手を突き出す。

「・・・端折りすぎだな、今回の話。しかも剣出てこないしやっってしまった・・・。

「駿！」

「片瀬！」

いろんな連中の声がオレにかけられる。

だが、

「俺たち、逃げるから！終わったらメールして！」

おい！！

逃げるのか！？

しかもここ圏外だからメール使えねえよ！！

「まあ、構わんさ！オレは貴様を倒すまで！」

オレはルインを引き抜く。
ちよつとキレ気味である。

「ん・・・対神刀か」

「神刀もある」

オレはウリユウも取り出す。

「まだオレの流派にはまだまだ秘儀とか神奥義とか最終奥義とか眠

つてるが、貴様程度の神には使うまでもない！」

「我輩はその邪神とは違う」

「邪神など関係ない！オレは我が道を行く！邪魔する者は、全て斬る！」

天からオレの中に封じ込まれていた龍が舞い降りてくる。

あれからずっと空をさまよっていたようだ。

「その龍は・・・なるほど、貴様の強さの秘密がわかった・・・その気はレストか・・・それとも・・・」

神が凄まじい

「君主、その龍は・・・伝説の龍・ヴォルスタルストラナフォルネオ・・・」

なげーよ！

「いつまで続くんだ、こいつの名前！」

「ええと・・・じゅげむじゅげ・・・」

「言わんでいい！じゅげむで分かるわ！」

「えっと、それより長いです。全部言うのに28時間43分54秒かかります」

なんつー長さ。

「そんなの言っていたらその隙にあの神に殺されるわ！」

「な、なんだと！？あの最強、最凶、最恐、最狂の龍、ヴォルスタルストラナフォルネオファミネックスロゲリア・・・」

てめーもか！！

「てめーら、これからこの龍の名はヴォルで！めんどくさい、長い！」

「そうですね、分かりました。今後ヴォルと呼ばせていただきます。ちなみに途中で宇宙語とかも入ってきますよ」

宇宙語！？

なんだよ宇宙語って！？

「なぜ貴様がヴォルを！？ヴォルは確か前の神闘戦争で姿をくらましたはず！」

「オレも知らん」

どうやらあの龍はとんでもなく強いらしい。

「どのくらい強いんだ？」

「世界を一瞬で消滅させる・・・まあ、この宇宙が作られたといわれるビッグバンなんか蟻の体当たり程度にしか思えないほどの力を持つ」

・・・ひゃああああああああああああああああああ！！

はやて姉より強いだと！？

魔王よりも強いのか！？

「この世の神全て団結してようやく封印できる程度だ。無理もない。

あのビッグバンですら・・・」

「もう分かった。もう分かったから言わんでいい」

そうとう強いようだ。

だが、龍に戦意は感じられない。

「ヴォルからは戦意は感じられないが」

「ヴォルは戦いを拒む龍です」

そうなんだ。

・・・。

役にたたねえな。

しかもどっか行ったし。

「そうだったのか！？」

てめえ、それでも神か！？

名前だけ知ってるくせに！！

「ならば恐れるものなどない！！」

舐めてもらっては困る。

オレだってまだまだ奥義を披露しきっていないからな。

オレは手に持ったウリユウを構える。

「神技・運命の協奏曲、そして追撃！神技・棘の狂想曲」
フォーティコン コンチェルト
ソーン カブリッチオ

オレの風は、あたりの景色を変えた。

最終章第24話 千の四季の名を持つ姉妹の複雑な家庭事情

駿が神と戦っている間、逃げいていた人たちの前に一人の少女が現れた。

「やつと見つけた・・・椎名千秋！」

私こと千秋はその少女の瞳を見つめた。

「椎名千冬・・・」

「お姉様が椎名家の次期当主になられたと聞いて、駆けつけてきました」

「こんなところまで・・・なぜですか？」

「あなたをここで殺して・・・私が当主の座を奪うからです・・・あなたが二人の姉、椎名千春、椎名千夏を殺したように！！」

周りにいた人たちは驚愕の表情を浮かべた。

「殺してはいけません。あの雌豚たちを椎名家の牢獄へ閉じ込めているだけです」

みんなは「それでもひでーよ！！」って、顔をしている。

「お姉様！いつか私もそのような末路に迎えさせようとしているのですか？」

「あの二人の姉は私と違って無能でしたから・・・。ただ、私の姉妹の中で唯一まともな頭脳を保持していたあなただけは使えそうだったから見逃してあげていたのですが」

耳につけていたイヤリングを外す。

「私にあなたの洗脳は効かないですわよ！私も魔術師なのですから！」

イヤリングが太陽の光を受け、輝きを増した。

「イヤリングなど眺めていないで、私の話を聞きなさい！」

「聞いているわ、私はあなたとは人間的に出来が違うのですから、他の作業をしながら20人くらい同時に話されてもすべて理解することはできませんよ」

「なにその聖徳太子もびつくりな無駄スキル!？」

「私はあなたの基礎能力から全てを上回っています。今更私に勝てるだけでも?」

千冬は唇をかんだ。

「お姉様は何の感情もないのですか? どうしてそこまで冷酷なのですか?」

私は瞳を閉じた。

「それは違う。千秋ちゃんは愛する者のためならば身を捨てる覚悟ができている・・・この中で最も愛を理解している女さ」

轟騎が急にそんなことを言い出した。

「う、轟騎!? そんな恥ずかしいこと言わないでください!」

「やっとな顔が楽になっただな」

え?

「悲しげな顔をしていた・・・これで少しは楽になるだろう」

轟騎は笑いながらそう言った。

「千秋ちゃんは笑えないわけじゃない。感情がないわけじゃない。

君の考えてるほど冷徹な人間じゃない」

「お姉様はいつだって私に冷たく接してきた・・・なのに何故家族より・・・姉妹も友達にそんな顔を!」

「私の家族は今はまだ二人しかいません。姉妹だっていると感じた時は一度もありません。何故だかわかりますか?」

千冬は首を横に振る。

それを見た千秋は、ひとつの物語を話し始めた。

「酷なほどに天才だった私は大学を首席で卒業し、すぐにやることをなくしました。私には愛する男性がひとりいました。彼に会いに行こうと思ったのです。私は生れてから家族の温かさにも、友達の温かさも感じたことはありませんでした。ですが、その男性が私に友達の温かさというものを教えてくれました。彼と初めて話をした時、今まで色褪せていた感情が色を取り戻した・・・否、もともと

色がなかった感情に色を染め上げていきました。私のその感情は大学に在学していた間、友情というものが恋心に昇華していきました。あ、すいません、轟騎には以前話しましたね？」

「はい、数時間かけて」

「帰国後、私は必死に彼を探しました。住んでいた場所は分かっていたので、いつも彼がいた海ですつと待っていました。もう何年もその街には来ていなかったの、街並みは変わってしまったていましたが、その海だけは何一つ変わっていませんでした」

「あのー、面倒なんで結論から話してくれませんか？お姉様」

「結論？ああ、要は命を賭しても愛せる殿方を見つけなさい、ということですよ」

「・・・何の関係があるんですか？」

「自分で考えなさい」

「IQ250でしょう？」

「作者のIQが一般レベルですから。いくら私が設定で天才でも作者がバカじゃ意味がないということです。あなただってIQ180のくせに頭がよさそうに見えないじゃない」

「それは・・・それは作者のせいですわ！作者がIQ180もないのがいけないのです！」

「まあ、二人の姉・・・椎名千春と千夏はIQ100に満たないですから・・・ね。なんたって千春は掛け算ができないですし、千夏に至っては引き算すらできませんし」

「仕方ないですね。この境遇についてはお姉様も私も同じ様ですし・・・って、なんでこの話になったのですたっけ？」

「まあ、作者が全て悪いということ丸くおさまりましたし、問題ないのでは？」

結果的に作者がバカということでおさまりました。

「どうしても当主の座がほしいのですか？」

「もちろんですー！」

千冬は堂々と宣言した。

「そう、なら差し上げます」

「え!？」

私のあつさりとした返答に、千冬は驚きを隠せないようです。

「私、婚約者がいるのです」

「私が大学に行っている時に男を作ったのですか!？」

「先ほどの話で出てきた私が恋をした殿方です」

「はあく、それで、庶民になるとも?」

何か凄まじくうれしそうな千冬を見てむっとしました。

「いえ、私の婚約者は片瀬家正統後継者ですわよ」

「片瀬家・・・表の椎名、裏の片瀬・・・あの片瀬ですか!？」

「とはいえ、片瀬家もすでに正統後継者は三人・・・その上男性はひとりしかいないのです」

「と、言うことは?」

「結果的には私は庶民にはならないんですよ・・・ふふふ」

「・・・それで、その殿方は?」

「今は彼に近づかない方がいいですよ」

それを聞いた千冬は首をかしげた。

「何故?」

「いいから、言うことを聞きなさい」

それを聞いても千冬は言うことを聞かなかった。

そして私がとつた行動は。

「亮平、撃ちなさい」

私が声をあげると、弾丸が彼女の左足を的確に貫いた。

精密射撃はメンバーの中でも随一といわれるだけありますね。

「お、お姉様・・・何をされるのですか?・・・私を殺すのですか?」

「その逆、生かすためにあなたを撃った」

まるで理解できていないようですね。

それもそう、彼女は現在の状況を理解していないのですから。

「私はお姉様に釣り合う男かどうか見極めに・・・!!」

「死にたいのなら構いません。行きなさい、この先にいますから」
千冬は睨んできた。

「この足で・・・この足でどうやって歩けと？」

「さあ？その辺の木の棒でも、松葉杖代わりを使ったらどうですか？」

「どこに木の棒があるんですか？ふざけるのもいい加減にしなさい！」

「お姉ちゃんにそんな口は利いてはいけませんよ」

私が千冬に説教していると、駿がやってきた。

サッカー部や陸上部でもないのに無駄に10点探ろうとしてどんだけ苦労したかわかってんのか!? 結果的に採ったけどな!」

「あの・・・駿? 愚痴になっていきますよ?」
はっ、つい本音が・・・。

今でこそ(悪魔の力で)スポーツテストなど長座体前屈以外は10点採れるものの、当時は非常にウザかった。

翌日、筋肉痛だった。

つと、そんなことはどうでもいい。

余計な話をしてしまったな。

ちなみに、神はオレの話を聞いて爆笑していた。

この世界を統べる神ってのはどんだけ屑なのか。

まあ、力だけはあるが。

「てめえもいい加減くたばりやがれ!」

「黙れ! ならば邪神を置いてゆけ!」

「もう遅い! オレの中に取り込まれたから!」

オレと神が互いに攻撃をぶつけ合う間、その合間を縫って刹那が攻撃を加える。

「心斬奥義・心鬼滝!」

以前にも話したが、刹那は心で相手を斬ることができる。

太刀筋も見えず、刀を抜く必要もない・・・最強の奥義である

柄を握るだけで切断できるといふ危険極まりない奥義である。

ただ、自分よりも精神が強い者には切れ味が落ちたりする。

自分の精神が強靱になればなるほど、切れ味を増し、相手の精神が強くなればなるほど、切れ味は鈍くなる。

このときの精神はRPGでいう攻撃力と防御力を意味するだろう。
精神力が強ければ強いほど、心も強くなる。

ただ、邪念を持った心で斬れば自分の心は淀み、斬られた者は邪の気を体に植えつけられる。

肉を切らせて骨を断つ・・・って感じか?

それとはまた違うかもしれない。

刹那の奥義は神にも効果があるようで、左肩に傷跡をつけた。

「致命傷には至らず・・・か」

精神力で神に勝とうなんて、無謀だったのかもしれない。

だが、攻撃が当たらないよりはマシか。

「致命傷を与えるならまかせなさい！」

リリイがそう叫びながらオレの方に飛んできた。

「ちょ、待て!？」

オレの横には神。

ぐほっ!!!

「ぐああああ!!!」

オレは顎を蹴られ、額を足場にされた。

「あ、黒か」

黒は大人の女性を感じさせるね、うん。

「死ね！」

ナイフが飛んできた。

「ちょ、脚に刺さった！脚に刺さった！」

「構わん！デイサイシヴ・デストロイア！」

次の瞬間、凄まじい破壊音が響き、オレの目は音源をたどった。

神にかなりの深手を負わせたようだ。

腕を一本もぎ取っていた。

無理やり千切ったかのように。

「片瀬駿！行け！」

リリイの声を頼りに、オレは剣を振りかざす。

「神・奥義・ユグドラシル！」

世界の生命を司る最大の樹木。

オレの編み出した森羅万象の第三形態。

その世界樹にも負けないくらい巨大な魔力のツリーを突き立てる。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

「おお！！」

神は魔力の噴水にのまれた。

「オレたちの・・・オレたちの邪魔をするなああああああああ
あああああ！！」

二本の剣は彼の体を両断した。

「こいつは本当に死んだのか？」

刹那がふつとそんなことを口にする。

「おそらく死んではない。時間がたてば元に戻るだろう。神だし
な」

神は肉体が滅びても再構成するというチート能力を持っているから
な。

「そういえば、お前は邪神の力を得たのであったな」

「ん？じゃあ片瀬は神なのか？」

「・・・そう言われればそうかあ・・・」

「オレって神じゃん。スゲー！」

「ただだけ厨二設定になっているんだ、オレは・・・」

悪魔で今度は神か。

お疲れだな、オレも。

最終章第25話 みんな、よく聞け、本日の目標は・・・神殺しだ！（後書き）

次回、最終話です。

普通に最終話です。

本当にエンディング数種類用意しています。

エンディング1 愛と力とペンダント(前書き)

注意・エンディングはほかにもあります。

それぞれ違った結末を迎えますのでご注意ください。

エンディング1 愛と力とペンダント

「千秋、終わったぜ」

千秋に話しかけると、千秋は力が抜けたかのように地面にぺたんと座りこんだ。

「私、疲れました」

千秋は精一杯微笑んで体をオレに預けた。

「お疲れ様、千秋」

「それは私が言う言葉ですわ」

言ってもらえるとありがたいよ。

「あら、あのお姉様があんなことをするとは」

「千秋ちゃんも駿の前ではとても甘えん坊なんだよ」

千冬の問いに轟騎が返答する。

「まあ、ハッピーエンドなんじゃね？」

「あの殿方、人間なんですか？さっきまでの戦いで剣から波動を飛ばしていましたか」

「駿の剣術は基本的に突きを使う。斬りを使うときは決まって奥義を使うとき。その奥義は人間離れした奥義ばかり。全て己に宿る気を使用しているといってるけど」

轟騎は長年連れ添った相棒の話をする。

なんだかんだ言ってる駿が最も頼りにしている友は轟騎なのだ。

「駿は君のお姉ちゃんのお母さんだから、君の義理の兄つてことになるのかね」

「まあ、あんな素敵な殿方がお兄様なら・・・私も悪い気はしませ

ん

照れ隠しする千冬の頭を轟騎が撫でる。

「ま、そういうこった。仲良くな」

頭から手を離すと、ゆっくりと立ち去っていった。

「わ、私は！あなたが・・・お兄様でも」

千冬の思い切った発言に、轟騎はびっくりして振り向いた。

だが、すぐに真面目な顔になって、一言呟いた。

「俺には、先客がいるから・・・さ」

千冬には轟騎の大きな背中が眩しく見えた。

はやて姉が手懐けたカタストロフの力でオレたちは元の世界に戻った。

千秋の妹は戻る術をはじめから知っていたようだが、オレたちにはそんな方法はまるでなかったので普通にカタストロフの力で戻ってきた。

「戻ってきたな」

「はい、そうですね！」

帰宅後最初の夜。

オレたちは月を眺めながら話をしていた。

「結婚まであと1年先か。長いものだ」

「女性だけ16歳で結婚ができるというのは不公平なような気がします。何百年も前でしたら私たちはすでに結婚しているはずですよ昔の話だ。」

現代は高校はおろか大学を卒業してないといい就職先なんて見つからないからな。

こんな世の中になっちまったから、結局結婚するのも遅くなってし

まうものだ。

「ま、気長に待とう。別に今結婚する必要なんて無いんだから
オレは千秋の頭を撫でる。」

「な、なんですか、この行為は」

「おや、お姫様は機嫌を損ねてしまったか。」

「千秋がかわいいな・・・って思ってたさ」

「か、かわいいなんて・・・も、もつと撫でてください」

「ふふ、かわいいな。」

本当に。

「さて、夜も更けてきたな・・・っと、ちょっと用事が出来てしま
った」

「はい？なんですか？」

「まあ、気にするな。帰って来てからの楽しみってことだ」

オレはベランダから飛び立った。

神の力を使い、自力で空を飛ぶことすらできる。

便利な反面、人間離れたことに悲しさも覚える。

それでも、この力を出来るだけいいことに使いたい。

そう思った。

オレが向かった先はオレの家。

もうここにオレは住んではない。

オレの帰る場所はここじゃない。

この家は今、はやて姉が泊まっている。

てか、もともとオレとはやて姉がふたりで住んでいた家だ。

はやて姉が泊まっても違和感を感じない。

「はやて姉、預けておいたあれは？」

「そこにあるわ」

鏡の前に置いてあった箱。

元の世界に帰って来てすぐにこれを見つけ、迷わず買った。

そして千秋に見つからないように、はやて姉に預けておいた。

今、これを渡そう。

我が、愛する者へ。

「千秋、ただいま」

ベランダに降り立ったオレを千秋は待つてましたと言わんばかりに抱きしめた。

「どこに行つてたのですか？」

「ちよつと、これを取りにね」

オレは先ほどの箱を渡す。

「オレからのプレゼントだ」

「私にですか？」

オレは首を一度だけ、縦に振る。

「開けても・・・よろしいでしょうか？」

「どうぞ、お姫様」

千秋はそつと箱を開ける。

「これは・・・ネックレスですか？」

「ああ。帰って来たときに目に入ったんだ。君に似合うと思ってね。悪いけど指輪は結婚の時までお預けだ」

「あ、ありがとうございます。指輪も、楽しみにしています!」

千秋にとってはこんなものは安物にすぎないだろう。だが、それを大切にしようとする限り、その価値は衰えるどころか上がっていく。

愛とは、そういうものなんだ。

きつと・・・オレが想像しているよりも素晴らしく、美しいものなんだ・・・。

「本当にありがとうございます。一生大切にします!」

その声が耳に届いたころ、オレの口は小さな唇に閉じられていた。

「大好きよ、駿」

キスの後に響いた彼女らしからぬ言葉が、とても印象に残った。

エンディング1 愛と力とペンダント（後書き）

まあ、ハッピーエンドじゃないですか。

エンディング2 愛する者を失った者の末路（前書き）

注意・エンディングはほかにもあります。

エンディング2 愛する者を失った者の末路

「勝利とは気持ちがいいものだ」

オレは剣を地面に突き立て、神を見下していた。

主人公補正を舐めるなよ。

「神、どうせ生きているんだろ。なら一つ言わせてもらおう。正義は必ず勝つというが、それは誤りだ。正確には勝者が正義となるから正義は負けないんだ。分かったか」

神が秩序をいくら守ろうと、己の正義を貫き通して戦えば、それも正義になる。

戦争だつて勝つてしまえば正義だ。

第二次世界大戦で戦争犯罪の罪に問われたのが敗戦国だけだったように、勝つたものは罪に問われない。

原子爆弾を使うのが何しようが勝つてしまえば問題ない。

オレはそれは悪いことだとは思わない。

負けた者はそこから学習することができる。

「貴様・・・人間風情が」

「おお、神。生きてたか」

体が徐々に再生されてゆく。

「次元の移動が可能なのがカタストロフだけだと思っうな・・・」

「な、何!？」

神が手をかざした瞬間、オレのすぐ横の空間に切れ目が入り、オレが吸い込まれた。

ものすごい吸引力で、オレは逃げだすことができなかった。

「みんな・・・逃げろ!!」

オレは最後にそう言った。

神を道連れにして。

私たちが元の世界に戻って来てから約4年の月日が経ちました。私、椎名千秋は二人の子供、梨瀬と翠香と一緒に幸せに暮らしています。

まだ若いですが、すでに二児の母。

そしてもう、私の子供は増えないでしょう。

私はもう孕むことはできません。

あの人がないから……。

「お母様、どうして泣いているのですか？」

翠香が私に話しかけた。

「ちよつと……お父さんのことを思い出してしまいました」

慰めてくれているようですが、私の涙は止まりません。

ひとりで過ごす夜は死にたくなるほど辛いものです。

いつ帰ってくるかわからない。

帰ってくるかすらわからない彼を待つことは……私には辛すぎま

した。

「お父様はどのような方でしたのですか？」

「パパはとってもカッコいい人だったよ！」

梨瀬が翠香に駿のことを教えているようです。

「偽りの幸せは……いつまで続くのでしょうか」

私はそんなことを呟いたりしました。

「お母様、今日はお母様の誕生日ですよね」
誕生日？

今日は・・・3月3日。

そう・・・私の誕生日でしたね。

駿の誕生日には毎年指輪を買っていると云うのに・・・。

「ママ、ケーキもあるよ。何に・・・なんで泣いてるの？」

子供というものは時に心に傷をつけるものですね。

「一番祝ってほしい人に・・・一番祝ってほしい人が・・・なんで・・・なんで・・・」

子供の前というにもかかわらず、私は泣き崩れた。

もう・・・耐えきれない・・・。

そう思ったとき、玄関のインターホンが鳴った。

「・・・ママ、誰か来たよ」

「雨が降っていますわ。お外で待っている人が風邪をひいてしまいますよ」

私は必死にハンカチで涙を拭った。

目はまだ赤い。

「今出ます」

涙声で私は声をかけると、玄関に向かった。

今思えば誰が来たかカメラで確認すればよかったものの、私の心にはそんな余裕はありませんでした。

そして私は玄関のドアを開く。

「っ！」

私は驚きで言葉が出せなかった。

涙しか出てこなかった。

ドアの先には、雨に濡れた愛しい人がいた。

彼は私に声をかけなかった。

謝るような言葉も、帰ってきたことを伝える言葉も、何も。

「い、今まで何をしていたのですか!？」

彼はそれを聞いても目を閉じただけだった。

「何か・・・何か言ってください・・・お願いです・・・あなたの声が聞きたい」

それでも、彼は何一つ喋らなかつた。

ただ、私を抱き寄せるだけで。

雨に打たれ、冷えてゆく体を彼の体温が温めた。

「お願い・・・何か喋って・・・声が・・・あなたの声が・・・私は聞きたい・・・お願いです、駿!」

私は思い切り言い放つた。

もう、私はこれ以上大きな声は出せません。

私の魂の叫びと言つてもいいでしょう。

その言葉に反応したのか。

私にそつとキスをした。

・・・このキスの味・・・やっぱり・・・駿ですね・・・。

私の意識は、キスの味とともに途絶えた。

翌日。

私は何故かベッドで寝かされていました。

「お母様、どうしたのですか？」

「うん、昨日の夜、誰もいない玄関で一人で喋ったりして
え……？」

「……げん……かく……でしたの？」

駿は……駿は……。

「駿……駿はどこですか？冗談でしょう、あなたたち、私をから
かっているのでしょうか？」

「な、何言ってるの？」

「大丈夫ですか、お母様……お疲れなのでは？」
……。

嘘……。

嘘よ……嘘よ……嘘……。

ありえない。

あの時……確かに駿とキスをした……。
駿の温もりを感じた……。

「ママ!？」

「お母様!？」

それから私はどうなったかは覚えていない。

今、私はどうしているのか。

私はどうなってしまったのか。

自分でも分からなくなる。

もう、自分が誰だかわからない。

何も覚えていない。

ただ、ひとつだけ覚えていたことは。

「片瀬駿という男を愛していたということだけ」

何が起こっているか分からない自分の口から、その言葉だけが零れた。

エンディング2 愛する者を失った者の末路（後書き）

これは、たぶんバッドエンドですね。

エンディング3 破壊のセレナーデ(前書き)

注意・エンディングはほかにもあります。

魂や意思、あの神が存在していたこと自体抹消されてしまった。

「・・・はあ・・・はあ・・・」

「駿くん！」

「はやて姉・・・」

「何故生きている・・・神威裂罅は・・・ありとあらゆるものを消滅させる・・・究極の奥義。1から15代までの全ての奥義を修得した者だけが使用することができるといわれる、神の剣技なのに」

「私の魔砲で相殺したわ」

「ふ、そうか・・・それで世界は滅びなかったのか」

「それでもこれだけの被害が出たのよ」

「そんなことはどうでもいい・・・千秋は・・・千秋は無事か!?」
「はやて姉は俯いた。」

そして彼女から発せられた衝撃的な言葉が耳に突き刺さった。

「千秋ちゃん・・・死んじゃった」

オレの瞳孔が開いた。

かつてないほどに。

「千秋・・・千秋・・・千秋を返せ」

みんなも俯いている。

千秋は心臓から大量の血液をまき散らしながら倒れていた。

「エスナアアアアアアアアアア！千秋を・・・千秋を生き返らせろ!!」

オレは吼えた。

心には怒りや絶望しかない。

「それは・・・無理な話だ」

「ふざけるな！貴様はその程度しかできねえのか！」

「言葉を慎め！いくら主でも我に対する愚弄は許さぬ！」

「ああ、てめえもオレを裏切るのか・・・お前は以前不可能なことはないと言ったはずなのによぉ・・・いいさ、別に・・・suppe

r b i a、i n v i d i a、i r a、a c c e d i a、a v a r t i
a、g u l a、l u x u r i a . . .」

全てを．．．オレは全てを超越する．．．死さえも！！

「七つの大罪を司る悪魔よ．．．今我の身に宿りたまえ！」

「ば、馬鹿なことは止しなさい！」

もう．．．オレには．．．。

「．．．エスナ」

オレの矛先はエスナに向く。

「奥義・墮天輪廻」

オレはエスナの首を絞める。

そしてエスナの心臓を刀で貫く。

貫かれた刀の先からじわじわと闇が広がっていく。

「貴様は．．．これで墮天使だ」

もともと灰色だったエスナの翼は漆黒に染まり、墮天使の風格が出された。

「そして．．．オレの力の糧となれ」

エスナはオレに取り込まれた。

「千秋のいない世界など無意味、オレは全ての次元を滅ぼす」

「ちっ、もうダメみたいね．．．ブラックホール・エクスプロージ

ョンー！」

はやて姉が魔砲を撃ってくる。

だが、今更無駄。

今のオレには．．．神すら勝つことはできない。

「消え去れ」

オレが手を振りかざしただけで、はやて姉の魔砲は消滅した。

「ま、魔砲が！！」

「この世界にもう、用はない．．．」

それから数時間後、神威戦争という、神々の戦争が行われた。だが、神々ですら悪魔や神を取り込み続けたその邪神に叶うものはなく、世界は終焉を迎えた。

彼も、その後自らの命を絶った。

彼が集めた武器と、彼の愛した者の写真を一枚だけ残して。

愛する者を失ったあまり、とある邪神は世界は滅ぼした。

そんな伝承があったことは、永遠に語り継がれることはないだろう。

エンディング③ 破壊のセレナーデ（後書き）

まあ、いわずとも分かる、超バッドエンドってやつ？
一応自分ではデッドエンドと称しています。

エンディング4 我は修羅の道を歩む者なり(前書き)

注意・エンディングはほかにもあります。

エンディング4 我は修羅の道を歩む者なり

「片瀬、やったな！」

「ああ、オレたちの勝利だ」

勝利を喜び合った。

まさか神を倒すほどの力を出すことができたとは。

「リリイ、本当に助かった」

木に体を預け、目を閉じていたリリイの左目が開く。

「元々私はお前の力がなければ現代に蘇ることすらできなかった。

その礼とでも思えばいい」

「本当に助かった」

「私に構っている暇があったらお前の姫に話しかけてやることだ。

私は姫は姫でも、お前の姫じゃない」

分かっているさ。

ただ、礼を言いたかっただけだ。

それじゃあ、帰ろうか。

オレたちを光が包んだ。

元の世界に帰ってきたか。

帰ってくるなり、オレは真っ先に千秋の方へ向かう。

そしてオレはこちらを見つめ続けていた千秋の前で立ち止まった。

すると、千秋は急に怒った顔のようになった。

「無茶はいけないと言いましたよね？」

「あ、あれはしかたなかった。戦わないと帰れなかったし」

「あんなに女の子を連れて一緒に戦って楽しいのですか？私を放つ
といて！」

おや？

「妬いてるのか？」

「な、何を仰っているのですか！わ、私は・・・別に・・・言わなくても分かっているさ。」

「べ、別に片瀬と吾は何もないぞ。い、一応義理の姉妹だし」

「あ、刹那、ついてきたのか」

「別に一緒にいたいとか・・・そんなんじゃないからな！」

これまたわかりやすい。

「ま、仲良くしろよ」

「私とこの男女と？駿も無茶を言いますね」

いきなり喧嘩売るなよ。

「お、男女とは何だ！吾も一応乙女だからな！」

「残念ですね、私は既に女ですよ。乙女は一年以上前に卒業しました」

平然と言うな！

刹那の目が痛い！

「そもそも私から駿を奪えるとも思っているのですか？私と駿の間には既に娘が一人いるのですよ？それに今、私妊娠していますから」

「か、片瀬！？もうそんなに！」

目が痛い！目が痛い！

やめて！もうやめて！

「まあ、刹那のことも愛してる」

「駿！？」

「そ、そうか？」

刹那らしからぬ、モジモジとした様子でたずねてくる。

上目遣いはよせ！

破壊力が高すぎる！

それに対する千秋は驚きの言葉しかない。

「家族愛って奴だけだな・・・。暁よりは頻繁に会ってるし・・・」

それだったらはやて姉の方が愛が強いか」

ちよつと顔をそむけながら言う。

「まあ、そういうことだ。だけど、刹那が嫌いなわけじゃない、そう落ち込むな」

刹那は酷く落ち込んでいた。

可哀そうだが、どうにもできない。

「刹那ちゃん、まだチャンスはあるわ。駿くんだって血の繋がっている兄妹とセックスでもしたら背徳感に溺る」何言ってるんだはやて姉！！」

何をはやて姉！

いきなり来てそんなこと言うな！

てか刹那とオレって確か義理の兄妹で、血は繋がってなかったような気がする。

「そんなことだったら姉も同じではないか」

「そうよ」

え、何ですか？

その目何？

こつち見ないで！

「行くわよ」

ひゃあああああああああああああああ！

結局千秋がおろおろしている間に、オレの身包みは剥がされた。

オレの力を持ってすれば逃げることは可能だが、魔砲の前では勝ち

目がない。

一応逃亡は図ったが、

「安心して、駿くん。これはハーレムエンドよ」
何を安心すればいいんだ……。

「将来は子沢山……父親も大変だな」

刹那、お前はそんな奴じゃなかったはずだ！

「ちよつと、やめてください！駿は私の夫です！」

「え、何？まだ駿くんと結婚してるわけじゃないでしょ？」

千秋は唇を嚙んだ。

いくら愛し合っけていても、オレの年齢が18に満たない。

「刹那も、お前はいつでも正々堂々と真正面から戦ってきただろう！
なんでこんな卑怯な真似を？」

「もう胸がはち切れそうなんだ。自分に嘘はつけない」

顔を真っ赤にして俯く。

オレはその光景をずっと見ていた。

はやて姉のせいで動けなくなった体を、刹那に跨がれながら。

「本当はロマンティックな恋をしたかった。でも、私にそれは許さ
れない。駿、私を女にしてくれ！」

刹那が我を忘れたときは一人称が「私」になる。

そこまでしてでも……。

てか、この文章大丈夫か？

本番はまだしてないから大丈夫か。

脱がされてるのは、オレだけだしな！

「いい加減、私の駿に纏わりつくのはやめなさい！」

「駿くんはあなたのものじゃないのよ、千秋ちゃん。駿くんは……
生まれた時から私のものよ！！」

はやて姉、何をおっしゃるのですか？

人権は？

ねえ、人権は？

「ふ、不覚・・・私がクイーンを取られるなんて・・・」
「・・・チェスカよ。」

「刹那ちゃんはいくらでも環境に対応した行動をとれるからね。前にセレブのパーティに送り込んだ時は見事な猫のかぶりようだったわ。あれだけお嬢様を演出できれば、千秋ちゃんよりお嬢様だったかもしれないわ」

「む・・・そんなことよりチェスに集中しなさい！」

「それじゃあ、クイーンを動かして・・・はい、チェックメイト」
「わ、私が負けるなんて・・・」

「仕方がないわ。私にはこれがあるもの」

そ、それは・・・千年パズル！！

つて、人格変わってないじゃん・・・。

「次はOCGで決着でも付ける？」

「望むところです！」

「オレもやりたい！」

「ところで、OCGってなんですか？」

知らんのかい。

「まあ、このカードゲームのことよ」

「駿がよくやってるやつですね。了解です」

と、言つて二人は始めてしまった。

「オレは？」

「お兄ちゃん・・・もつと触つて・・・」

はっ、胸から手を離すのを忘れていた！

「シンクロ召喚！ゴヨウ・ガーディアン！」

はやて姉ガチだ・・・。

「リバースカードオープン、奈落の落とし穴」

千秋もか！！

「甘いわ、私はどうしてもそいつのコントロールを得たいの。神の宣告！」

「ライフを半分払ってまで・・・魔宮の賄賂！」

もう、何これ。

「あなたが猫なんて使っても私に死角はありません！
ガチすぎる……。」

「お二人さん、ガチすぎないか？」

「女の戦いは壮絶ということ覚えておきなさい」「
……。」

こっちはこっちでもう身が持たない。

理性吹き飛びかけてるけど、体動かないし。

逆に刹那が行動してしまうと簡単に子供が作れちゃうという……。

「そして誰も助けない……。」

オレはこのまま三人に襲われて、のちにとんでもない数の子供を作
ってしまうことになった。

「ハッピーエンド」

「じゃねーよ!?!?」

エンディング4 我は修羅の道を歩む者なり（後書き）

とんでもないですねえ。

こりゃあ、酷い。

自分でも何故こんなのを書いたかわかりません。

エンディング5 刹那に煌めく星空(前書き)

注意・エンディングはほかにもあります。

エンディング5 刹那に煌めく星空

全て終わった。

あとは普通に暮らすだけ。

戦いはまだ終わらないだろうけど、まあ・・・問題ない。

神を撃破し、元の世界に帰還。

その時、刹那と二人きりになったときがあった。

千秋は何かあるらしく、先に帰ってしまい、その他の人も随時解散。そんなときの出来事。

「なあ、片瀬」

「ん？」

「吾らは兄妹なのだろう？」

「はやて姉が言うにはな。はやて姉とは同じらしいが、オレとは血は繋がっていないんじゃないか？」

はやて姉とオレ、暁の父親は同じ。

刹那とはやて姉の母親が同じ。

「まあ、血は繋がってないみたいだ」

だが、義理の妹ということに変わりはない。

「そうか・・・うん。分かった、決めたよ」

「ん？何を？」

「わ、わ・・・私は！」

落ち着きがないな。

刹那らしくない。

「はー、片瀬駿！私は・・・もうどうすればいいか分からない！いや、こっちの方がどうすればいいか分からないよ。何がどうすればいいか分からないんだよ。」

「だから、今ここに宣言する。私はお前が好きで好きで仕方がない！」

刹那は顔を真っ赤にして、まっすぐにオレを見ることができていない。

「……ふられることは分かっている。でも、言っておきたかったんだ。私にだって、斬れないものはあるんだ。いくら心であらゆるものを斬ることができても、実態がない愛情なんかは切り裂くことができない」

これ以上恥ずかしいことはないだろう、そんな顔をしていた。

オレはその光景を黙って見ていた。

黙って見てはいたが、真剣に見ていた。

「もう、胸がはち切れそうなんだ。我慢できない」

ドサツという音がした。

何事かと思つて音の先を見ると、刹那はオレの胸に抱きついてきていた。

「……好き過ぎるんだよ」

「え？」

「千秋もお前も好き過ぎて選びきれねえんだよ」

この気持ちは本当だ。

決別したつもりだったが、またこの感情が……。

未来が千秋との未来になっていた。

だからオレはそれに従った。

だけど……最近、刹那も千秋に並ぶほどの存在になってしまっていた。

「……片瀬」

「駿って呼んでくれ」

「ああ……駿」

もう、歯止めが利かない。

「い、痛いよ……駿、強く締め付けすぎ……」

「弱々しい刹那も……かわいい」

「わ、私なんて……正直あんまり顔は良くないし、女の子らしくないし……」

それでもいい。

愛というものはそれだけじゃ表現できない。
てか、刹那は充分かわいい。

サラサラとした黒髪がとても綺麗だ。

赤く染まった顔がとてもかわいい。

「もしかして・・・私」

「刹那、今から・・・旅に出よう。誰もいない、二人だけになれる地へ」

「で、でも・・・私、以前医者に言われたんだ・・・子供は・・・産めないって。それでもいいの？私との間に子供は授けられない」

「愛し合うのに・・・子供は必要か？」

「・・・うん、そうだね」

「口調が変わったな」

「え、そんなことはないぞ？」

「無意識のうちに戻ってたみたいだな、昔に」

「そっちの方がいいなら、私はその口調で貫き通すが」

「そっちの方がかわいいよ、女の子らしくて」

「う、うん、わかった。それでどこに行くの？」

「誰にも見つからない。」

「もしくは見つかりにくい場所。」

「南米にでも行くか。そこなら北米やアジアよりも見つかりにくいだろう」

「昔から南米の建物には興味はあった。分かった、そこに行こう」
オレたちの新しい人生が始まるのか。

「エスナ、オレたちを未開の地へ、連れて行ってくれ」

オレが呼びかけると、すぐにエスナは姿を現した。

「・・・お前の嫁には、会わなくていいのか？」

「・・・ああ、もう・・・会わなくていい。」

オレは違う道を選ぶ。

「千秋、ごめん」

「・・・未練、あるのか？」

「いや、今決別した。問題ない！」

「・・・それでは、南米に飛ばすぞ」

頼んだ、エスナ。

オレと刹那は南米へ飛んだ。

あれから数年経った。

あの強敵からいまだに見つからずにいるのは凄いいことだと思つ。子供ができないはずの刹那に、新たな命が宿っている。

「これで、よかつたんだよな」

「やはり未練があるんじゃないか？」

刹那の口調は、やっぱり直らなかつた。

それでも、そっちの方が刹那らしい。

「そうかもしれないな」

小さな家で、二人、幸せに暮らしている。

「それじゃあ、オレは買い物にでも行つてくる」

オレは財布を手に取り、町へと赴く。

小さな町だが、町民はみんなやさしい。
異国からやってきたオレたちを快く迎えてくれた。

町で買い物済ませ、オレは帰路に就いた。

そんな時だった。

「駿、ようやく見つけました」

「・・・千秋」

「今まで何をしていたのですか？梨瀬も・・・翠香も・・・私も置いて」

オレは買い物袋を投げ捨て、腰に掛けてあった刀を抜く。

「な、何をする気ですか!？」

「・・・立ち去れ、千秋。オレはもう、お前と共にいられない」

「・・・あなたは私を殺せない」

「ああ、殺せないさ。だが、こうすれば問題ないだろう?」

オレは自分の首に刀を押し当てる。

「駿!？」

「・・・千秋はオレを殺せない」

それを知っていた。

知っていたからこんな真似をした。

「それなら・・・一緒にいられない理由を教えてください。戻ってきた、あの日に何があったのですか?」

「いいだろう。教えてやる。オレには最愛の女性が二人いた。あの日、オレは最愛の女性の片方から、告白を受けた。選べねえくらいどっちも好きだった。だから、オレは・・・オレはあの日南米に旅立った。過去とは完全に決別するために」

「・・・最愛の女性・・・それは」

「千秋と刹那」

オレは千秋の一途な思いが好きだった。

オレは刹那の凜々しい顔が好きだった。

オレは千秋の手料理が好きだった。

オレは刹那の澄んだ心が好きだった。

「どっちも同じくらい・・・好きだったんだよ」

「何故、彼女を選んだのですか？私にはあなたとの間に子供もいるのに」

「・・・そこが最大の違いだ。オレは刹那の心からの告白に感動した。お前は、もうオレを奪われない余裕を持っていた。それが最大の違いだ」

「私は・・・負けたのですか・・・刹那さんに」

「そう思いたければそう思えばいい。ただ、ひとつだけ言っておく・・・何ですか？」

「人間は勝ちだけの人生を歩むことはできず、負けだけの人生を歩むこともない。覚えておけ」

オレが言った言葉の真意を理解したかはわからない。

でも、それでも、千秋がそれを聞いて変わってくれるなら、それを理解して変わってくれるなら。

オレはそれをただ、望むばかりだ。

「じゃあな、千秋」

オレは刀を鞘に戻し、投げ捨てた買い物袋を拾った。

「ああ、卵割れちゃったよ・・・まあ、いいか」

今度こそ、家路に就いた。

「刹那、ただいま」

「ああ、おかえり」

オレは買い物袋をテーブルの上に置くと、刹那の横に座った。

「身に子供を宿すと、また違ったものだな。私も昔は刀に手をかけただけでものを切断できたんだがな」

「・・・怖いのか？」

「まさか・・・駿との子だから、そんなことはないさ」

刹那は微笑んだ。

ここに来るまでは一度も見せなかった顔だ。

「ありがとう、駿。私を選んでくれて」

「お前が行動した結果だ。運命つてのは、定められていると思っていたが・・・案外、簡単に変えられるものなのかもしれない。尤も、これが本当の運命だったのかもしれないが」

そんなことを思いつつ、オレと刹那は軽く口づけをした。

「ふふ、いつしても上手だな」

オレはあそこで刹那をふっていたらどうなっていたらだろうと、思うときがある。

たぶん、今頃千秋と豊かな家庭を築いていたんだろう。

でも、運命というものはどうなるかなんて、オレには分からない、これが運命だったのだ。

過去にどうすれば、なんてことは考えても無駄なことさ。

「運命とは、時に残酷なものだ」

「でも、運命とは時に幸せをも運んでくれる・・・そうだろうか？」

「ああ、そうだ」

そう言って、オレと刹那は再びキスをした。

エンディング5 刹那に煌めく星空（後書き）

個人的に好きなキャラ、刹那と結ばれる、という話でした。これ書いてて思ったんですが、駿って酷い奴だな・・・と。

本日はここまで。

これ以降、エンディングが追加されるかもしれないので、一応完結ではないということにしておきます。

ED1AS 姉妹の反逆

ある日、千秋が焦ったような表情で頭を抱えていた。

「どうした？」

「・・・いえ、何でもありません」

「何でもないわけがない。」

明らかに焦っている。

「嘘はよくないよ」

「・・・そうですね・・・あの、閉じ込めていた姉が逃げ出しました」

え？

「閉じ込めていた？」

「姉の千春と千夏です。とある事情で父に閉じ込められることになったのですが・・・妹の千冬には私がやっただけです」

「なんでそんなことを」

「彼女らは椎名家当主にしか明かさね秘密を知ってしまったからです」

秘密？

千秋は知っているのか？

「あの、当主の基準はどんな基準なんだ？」

「椎名家の当主の四人の子供のなかで最も有能な者です。知能、技能、意志等、最年少の者が12歳の時点で最も優れている子供が当主となります」

・・・確かに千秋より優れている人間なんて見たことがない。

「椎名家の女は子供を四人産んだ時点で子宮を摘出されます」

なんだその掟？

「私もいざれそうなることでしょう。そして椎名家当主、もしくははその配偶者の女は四人の子供を、産まなければならぬ」

片瀬家も裏ではなんかやらかしてみたいけどそんな掟は・・・

ああ、長女と長男しか本家に住むことができないって掟があったな。
・・まあ、いいか。

「そして当主になれなかった二人が、当主の秘密を知ってしまった。
そして閉じ込められた」

話が急に飛んだ。

まあ、いいか。

何なのか分かるし。

「彼女らの閉じ込められていた牢獄には巨大な穴が開いていました。
大きな力でも使ったのでしょうか、核シエルターが見事に破壊され
ていました」

か、核シエルターが!?

あ、ありえない・・・。

まあ、オレなら可能だが。

一般人がそんなことができるはずがない。

「閉じ込められている以外は結構自由だったんですけど・・・食べ
たい物とか、彼女らの趣味とか、運動場とかは完備していました」

「もはや牢獄でも何でもなし」

「どうしてそんなこと・・・ま、まさか・・・」

千秋の顔が青ざめた。

「どうした?」

「椎名家当主の秘術を使ったのでしょうか」

秘術?

「秘術?」

「はい、彼女らが閉じ込めるきっかけとなったことです。あなたに
は教えてもよいでしょう。椎名家の秘術、それは悪魔の子を孕むこ
とを条件に絶大な力を得るといふ・・・昔は椎名家の女が許されな
いことをした時に強制され、利用されたと聞きます。ちなみに男は
殺されていたそうです。男って役に立たないですね」

や、役に立たないのか、オレ。

それにしても悪魔の子ねえ。

オレはもはや悪魔・・・いや、邪神か。

まあ、んなことはどうでもいいや。

「悪魔の子を孕むとどうなるんだ？」

「出産のときに地獄を見ると伝えられています。出産後は発狂するか廃人になるそうです。そして産み落とされた悪魔は冥界へと旅立つそうです」

・・・廃人・・・か。

「インキュバスという夢魔が、悪魔の子を孕ませるが・・・」

「そんな低レベルなものではないそうです」

なかなか興味深い。

「もうひとつ質問、絶大な力とは？」

「制限はあれど夢を現実にする力ですか。彼女らはおそらく破壊の力を得たのでしょうか」

「・・・救う方法は？」

「分かりません」

そうか。

悪魔だけ殺すか、力を無力化するか・・・。

一縷の望みにでも賭けてみようかと思っただが。

一度も会ったことはないが、千秋の姉だ。

助ける理由は十分にある。

「オレがお前の姉を助けて見せるさ」

「む、無理ですよ・・・いくら駿でも」

「不可能なんてものはない。あきらめないから、人間はどこまでも進化する。空を飛びたかった人間が、飛行機を発明したように」

「それとこれとは違うような・・・」

「ま、まあ・・・とりあえず、オレはいろいろな力を持つてるから・・・なんとかなるだろ」

自分で言っという何だが、非常に無責任である。

場所の見当は付いている。

・・・てか、エスナに特定してもらった。

「どうやら・・・ここに向かっていているようだな」

「彼女らの目的は・・・私への復讐か」

しばらく待つてみると、爆発音が聞こえた。

「来たな」

「彼女らには洗脳は通じないはず。現在の彼女らは悪魔の力で膨大な魔力を保持しているはず」

「問題ない、ちょっと試したい奥義もあったしな」

「・・・あんな人たちでも、一応私の姉です。あまり傷つけずにお願います」

当然だ。

「悪魔の場所は、子宮か？」

「ええ、そうです」

なら話が早い。

オレは壁に立てかけてあつたルインを手にする。

「ルイン、お前、今魔力はどれくらいある？」

「コキュートスを自分だけで放てるか放てないか程度ですね」
それだけあれば十分すぎる。

オレの新たな奥義、とくと味わうがいい。

そのためには槍も必要か。

「リア、力を貸してくれ」

「私の力を？高くつくぞ？」

既に他界から問題ない。

オレが扉を切り裂くと、その先のホールに二人の女がいた。

一人は20過ぎくらいの女性。

彼女は妖艶な雰囲気醸し出しており、誘惑されたら有無を言わず、
ついて行ってしまうような美貌の持ち主だった。

もう一人は小学生くらいの体系の小さな女の子。

千秋の妹、千冬よりも小さいが、彼女もおそらく千秋の姉だろう。二人とも、顔が千秋とどこことなく似ている。

「あなたは誰ですか？」

「あんたらの妹の旦那ってどこか？」

「私たちをあんなどころに閉じ込めておいて、あの子、何様のつもりですか!? 男なんて作って」

嫉妬……か。

「おねーちゃん、ボク、秋ちゃんのこと許せない!」
体系だけでなく、言動も子供だ。

「千秋に手を出すなら、オレを始末してから行け。最も、そんなことができるかは……知らないけどな」

オレは剣と槍を構える。

「その刀、その槍、その魔力……あなた、ただものではないですわね?」

当然。

「おねーちゃん、悪魔の力を使えばこんなやつイチコロだよ!」

「残念ながら、オレにはお前たちを殺す気はない。だけどな……」

奥義・次元空間!」

オレはリアを地面に突き刺した。

「なんですの、この空間は!?!」

「この空間はオレの固有結界の一つ、次元空間。この空間に存在しているもの全てに、オレの攻撃を届かせることが可能だ」

つまり。

オレは剣を横に振る。

「奥義・天地開闢!」

オレが斬ったところは……。

「何も起こらないですよ?」

「そうだ、あんたにはなにもしていない。オレが斬ったのは……お前の子宮に潜む悪魔だ」

剣をジャンプさせた。

こんな芸当、並の剣士には到底できない。

「もう一人、奥義・真一文字！」

剣先がジャンプする。

その先で、悪魔を切り裂いた。

手ごたえはあった。

「斬った」

オレは刀を鞘にしまうと、槍を地面から抜いた。

「な、ふざけていますの！？あなたなんて私の魔力の前には・・・」

「悪魔はすでにいない。微力な魔力ならオレの神通力で閉じ込めることができる」

神は便利なものだ。

「おねーちゃん、こ、こいつなに！？」

「こつちが知りたいですわ！」

二人はとても焦っている。

その時を見計らったかのように、千秋がオレの横へ歩み寄ってきた。

「お姉様方、お久しぶりですね」

「ち、千秋！」

「秋ちゃん何が起こっているの！？」

「オレが貴様らの力を増幅させていた悪魔を断ち切った。刃の先を・

・お前らの胎内に送り込んでな」

「そう言うことです、観念して元の場所にもど・・・そうですね、

あなた方、私の言うことを聞けなら出してあげてもいいですよ」

「・・・嘘、掟に反することは！？」

「洗脳を使えば口封じくらいの暗示は掛けられます。問題ありません。もちろん、実行も、もう二度々させません」

これで一件落着・・・なのか？

まあ、千秋の姉二人は了承したような顔をしているからな。

それよりもオレは気になることがあった。

「悪魔を身に宿しているとき、どんな感じだった」

「心の奥から力が湧き出てくるようだった。その力は禍々しい限りで……」

千春はそれを思い出したとたん、急に身震いを始めた。

今思えば恐ろしいことだったのだろう。

「やはりな……千秋、今直ぐにその術が記されているものを処分し、お前も忘れろ」

「え、ええ……ですが掟……」

「知ってるか？掟は破るためにある。そして違法も法だ。掟なんて気にしてたら生きていけないぞ。法を破るのはどうかと思うが、少しくらい破っても、そっちの方が人間味がある。自転車の交通法なんて破ってるやつの方が多いだろ」

「……確かにそうかもかもしれませんね」

千秋は自らの服に隠していた書物を取り出した。

「駿、この本を切り裂いてください」

「仰せのままに！」

ルインを抜き放ち、その勢いで書物を切り裂いた。

真つ二つに切り裂いたあと、オレは凄まじい速度で残りの破片を粉々にしていった。

「完了」

「これで私以外にこのことを伝える術を持つ者はいません」

これで一件落着いてか。

「これでよかったです」

そうだな。

こうして、今回の事件は丸くおさまった。
オレの願望だが、もうこんな事件は起こらないでほしい。

ED1AS 姉妹の反逆（後書き）

物語の最後の方に出てきた千秋の妹・千冬。
彼女に言っていた残りの姉妹の話でした。

ED1AS ふたりきりの結婚式

・・・もう直ぐ、だな。

今日ほど誕生日が待ち遠しい誕生日はなかった。

オレにとって誕生日などどうでもいい。

今までそう思ってきた。

ただ、オレが生まれてから18年後の4月7日。

この日だけは特別だと、今なら思える。

「駿、明日ですね」

「正確にはあと1時間半と少し・・・ってところか」

今日は4月6日。

そして時刻は10時27分。

そう、あと2時間以内にオレは18回目の誕生日を迎える。

18、それはこの国の男が結婚できる年齢。

「と、いつても・・・籍を入れるのはまだ、時間はあるけどな」

「それでも、この日をどれだけ待ちわびたことでしょう」

一年間、学校に通いつつも千秋を寂しからせないよう、オレも努力した。

勉強よりも努力した。

勉強なんて二の次だ。

だが、学年でもトップクラスの学力はキープし続けた。

それは千秋のおかげだろう。

「初めて出会ってから、十年以上経つのですね」

「そうだな・・・オレはあの頃、お前に剣の腕を見せるために必死に腕を磨き続け、免許皆伝までして・・・あまりに必死になりすぎてお前のことを忘れてしまっていた。ごめん」

「べ、別に謝ってもらおうようなことではないですよ」

「再開した時よりもずっと素直になったよな、千秋」

「ひ、人とあまり接してなかったの……あまり素直ということ
が……まだよく分かってなかったみたいですよ」

確かにな。

千秋はずっとひとりで自らの学力を磨き続けた。

ひとりになりすぎて、いざ他人と接するとしたら素直になれず、偽りの自分を見せていたのだろう。

「お前が誰だか思い出してからすぐに離れてしまった。そこから、オレが普通の人ではいられなくなったのは」

「……そうですね。でも、あなたは変わらない。いくら人から外れた存在になっても、人としての思いは残っている」

「ありがとう……意識はしてなかったけど、そう思われていたんだな」

「記憶を失った時もありましたね」

「あの時はびっくりしたよ。オレのカードに億単位で金が入ってたからな。マジで焦った」

結局あのカード、湊に渡してきたけど……上手に使ってるかな。あの調子だともう1億は無くなってそうだ。

「あと、二分ですね」

「ああ、待たせた」

二分が長い。

たった一秒が凄く長く感じられる。

それを120回も繰り返し返す。

二分間、オレたちは黙っていた。

まだ少し寒気のある空気の中、ベランダで。

いくら都会になったこの町でも、少し離れた千秋の家なら星空も見える。

星の煌めきを瞳に映していると、日付を変える鐘が鳴った。

「0時に・・・なったな」

「はい・・・お誕生日、おめでとう、駿」

何故か涙目になっている千秋がオレの腕に納まる。

「駿、私のプレゼント、受け取って下さい」

「・・・ああ」

トロンとした目でオレを見つめ、そのままオレに口づけをした。

千秋の唇は、いつも以上に熱く感じた。

「一足先に、結婚式を挙げましょうか」

「それも・・・いいかもな」

客などいない、それでもよかった。

祝ってくれる人が一人もいなくても、それでも幸せだった。

「私、椎名千秋はあなた・・・片瀬駿を永遠に愛します」

千秋の言葉に、オレは歓喜の感情を覚えた。

だが、何故かそれを言葉に表すことはできなかった。

嬉しすぎたのか、何故言葉に表せなかったのかは、自分でも理解できない。

「・・・駿？どうして泣いているのですか？」

「・・・え、オレが？」

目に触れてみると、何故か濡れていた。

「さあ、どうしてだろうな」

「こんなときですよ、笑いましょう」

「・・・ああ、そうだよな。笑わないと」

オレは笑って見せた。

「らしくないですよ、作り笑いなんて」

え？

あれ・・・え・・・。

「作り・・・笑い？」

オレはそんなつもりはなかった。
どうした、何が起こっている？

作り笑いなんて・・・。

「だ、大丈夫ですか!？」

「か、感情が・・・表せない」

喜怒哀楽の内、喜と楽が表せなくなっていた。

「副作用か」

「・・・駿、私の目を見てください」

何かと思ったが、彼女が真剣な眼差しでこちらを見つめてくるので
オレも彼女を見つめた。

「あなたは恐れているのです」

・・・。

「この感情を表して、私を傷つけないかと」

・・・。

「悪魔や神の所為にしてはなりません、あなた自身の問題です」

・・・。

「・・・そう、だよな」

オレは少し笑った。

「ほら、作り笑い以外もできますよね」

「心の持ちようか」

「なんて、私がちよつと暗示をかけただけです」

暗示・・・千秋はそんなことが得意だったな。

「ありがとう。これでやっと言えるさ。さっきは心が不安定だった
のかもしれない」

「・・・聞かせてください。あなたの言葉を」

「私、片瀬駿は・・・千秋・・・あなたを永遠に愛します」

ED1AS ふたりきりの結婚式（後書き）

続編でもいずれ書こうかと思いつつ最終話にします。
たぶん、そのいずれは結構近いと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0417e/>

片瀬の日々

2010年10月8日21時54分発行